

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第100集

大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

おお ひ なた
大日向II遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

序

岩手県は縄文時代の文化を中心に多くの遺跡があり、また埋蔵文化財包蔵地を有しています。これらの先人たちがつくりあげた文化遺産を、いかに保護し保存していくかが私たち県民に課せられている重要な責務であります。

このような文化財保護の任務とともに、他方では県民の生活をより豊かにし、快適な生活をおくるために、交通網の整備や土地改良など地域開発もまた重要であり、県民の切実な願いでもあります。

したがって、文化財や自然環境の保護保存と地域開発という二つの目的をどのように調和・発展させるかが、県政の今日的課題なのであります。

当文化振興事業団は、埋蔵文化財センター創設以来、埋蔵文化財保護の立場にたつて、県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を報告書にまとめ刊行してまいりました。

本報告書は、東北縦貫自動車道八戸線建設・軽米インターチェンジ国道340号改良工事に伴う関連遺跡の発掘調査として、昭和59年度に行った軽米町大日向Ⅱ遺跡の調査結果をまとめたものであります。この遺跡からは調査がすすむにしたがって、多数の縄文時代竪穴住居跡やピット、そして多くの出土遺物が発見され、調査期間を延長しなければならない程でありました。出土遺物や遺跡の全体については本報告書によって具体的にくわしく理解できるものと思えます。

この報告書がひろく活用され考古学・歴史学など学術的研究のみならず、埋蔵文化財保護活動にいつそう役立つならば幸いです。

おわりに、これまでの発掘調査や報告書作成に御援助・御協力を賜りました日本道路公団八戸工事事務所、岩手県土木部等をはじめ関係各位に心から感謝申し上げますとともに、今後の御指導と御協力をお願いします。

昭和61年2月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 中村 直

例 言

1. 本報告書は、岩手県九戸郡軽米町大字軽米13地割^{おおひなた}屋敷に所在する大日向Ⅱ遺跡の発掘調査の結果を収録したものである。
2. 本遺跡の調査は、東北縦貫自動車道軽米インターチェンジ建設に関連し、国道340号線拡幅工事に伴う緊急発掘調査である。調査は岩手県土木部と岩手県教育委員会事務局文化課との協議を経て、財団法人岩手県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は、昭和59年4月13日から11月2日まで行なわれた。
4. 調査面積は、6101.285㎡である。
5. 発掘調査は、田鎖壽夫、岩渕 久が担当した。
6. 検出された遺構は、次のとおりである。

縄文時代竪穴住居跡	41棟	古代竪穴住居跡	5棟
住居跡状遺構	1棟	掘立柱建物跡	1棟
ピット	85基	陥し穴状遺構	1基
池 跡	1個所	配石遺構	1基
土器埋設遺構	4基	カマド跡	1基
7. 発掘調査に際して、二戸土木事務所、軽米町教育委員会からご協力をいただいた。
8. 本報告書の執筆にあたり、縄文時代竪穴住居跡の炉構成礫、古代竪穴住居跡のカマド構成礫及び配石遺構構成礫の石質鑑定は種市 進氏（岩手県立種市高等学校教諭）に依頼した。また、遺物石器の石質鑑定は佐藤二郎氏に依頼した。
9. 本報告書の執筆は、調査に至る経過を近藤宗光が、検出された遺構を田鎖壽夫と岩渕 久が、その他は田鎖壽夫が担当した。
10. 野外調査の作業員は、下記の方々から協力を得た。
荒川嘉四蔵、加藤郷八、大鳥石太郎、小林栄治、大崎正雄、大鳥トキ、世古トミエ、浅水トメ、中野ミヅノ、滝沢ヨシ、館下ヨシ、若山サクラ、日山ハルノ、内沢チエ、川原木ミツ、工藤清子、剣吉明子、一二三サキ、中野キエ、神久保キエ、横島スミ、本田ナミ、古館のり子、中野かつよ、松山マキ子
11. 本報告書の図版・写真図版の作成にあたっては、次の方々から協力を得た。
武蔵アサヨ、吉田律子、浅沼啓子、川崎清子、月館美智子、藤沢成子、菅原久美子、佐藤良子、仁田和孔、女鹿麗子

本文目次

序

例言

I 調査に至る経過	3
II 調査方法と室内整理	
1 調査方法	4
2 室内整理	5
III 遺跡の立地と地質	
1 立地	6
2 地質	7
3 周辺の遺跡	8
IV 検出遺構と遺構内出土遺物	
1 縄文時代竪穴住居跡	12
2 古代竪穴住居跡	132
3 住居跡状遺構	150
4 掘立柱建物跡	154
5 ピット	155
6 陥し穴状遺構	194
7 池跡	194
8 配石遺構	211
9 土器埋設遺構	211
10 カマド跡	212
V 遺構外出土遺物	
1 土器	
(1) 縄文土器	216
(2) 土師器	228
2 土製品	228
3 土偶	228
4 石器	239

VI まとめ

1 遺構について

- (1) 縄文時代の住居跡…………… 249
- (2) 古代の住居跡…………… 252
- (3) ピット…………… 252
- (4) 当遺跡と一連をなす吠屋敷 I a ・吠屋敷 I b 遺跡の時期別占地について…………… 257
- (5) 中期末葉から後期末葉までの炉の位置と柱穴構成の変遷傾向…………… 257

2 遺物について

- (1) 瘤付土器の共伴関係とその変遷傾向について…………… 259
- (2) 遺構外遺物が集中的に分布する場所の性格について…………… 263
- (3) 注口土器の中に残存していた粘土について…………… 268

図 版 目 次

- 第1図 岩手県全体図…………… 1
第2図 遺跡位置図…………… 2
第3図 大日向Ⅱ遺跡と周辺遺跡位置図…………… 9
第4図 遺構配置図……………10・11
第5図 F I - 1 住居跡…………… 13
(平面、土層・炉断面)
第6図 F I - 1 住居跡出土遺物…………… 14
(遺物番号1~11)
第7図 F I - 2・H I - 1 住居跡……………18
(平面、土層・炉断面)
第8図 F I - 2 住居跡出土遺物…………… 19
(遺物番号12~19)
第9図 F I - 2 住居跡出土遺物…………… 20
(遺物番号20~26)
第10図 F I - 2 住居跡出土遺物…………… 21
(遺物番号27~36)
第11図 H I - 1 住居跡出土遺物…………… 22
(遺物番号37~47)
第12図 H I - 1 住居跡出土遺物…………… 23
(遺物番号48~55)
第13図 H I - 2 住居跡…………… 27
(平面、土層・ピット断面)
第14図 H I - 2 住居跡出土遺物…………… 28
(遺物番号56~63)
第15図 H I - 2 住居跡出土遺物…………… 29
(遺物番号64~75)
第16図 H I - 2 住居跡出土遺物…………… 30
(遺物番号76~89)
第17図 H I - 2 住居跡出土遺物…………… 31
(遺物番号90~101)
第18図 H I - 4 住居跡…………… 34
(遺物出土状況、平面)
第19図 H I - 4・H I - 5 住居跡……………35
(土層・炉断面、平面)
第20図 H I - 4 住居跡出土遺物…………… 36
(遺物番号102~104)
第21図 H I - 4 住居跡出土遺物…………… 37
(遺物番号105~108)
第22図 H I - 4 住居跡出土遺物…………… 38
(遺物番号109~115)
第23図 H I - 4 住居跡出土遺物…………… 39
(遺物番号116~125)
第24図 H I - 4 住居跡出土遺物…………… 40
(遺物番号126~134)
第25図 H I - 4 住居跡出土遺物…………… 41
(遺物番号135~141)
第26図 H I - 5 住居跡出土遺物…………… 42
(遺物番号142~145)
第27図 H I - 6 住居跡…………… 45
(平面、土層・炉断面)
第28図 H I - 6 住居跡出土遺物…………… 46
(遺物番号146~154)
第29図 H I - 6 住居跡出土遺物…………… 47
(遺物番号155~161)
第30図 H I - 7・H I - 8 住居跡……………52
(平面、土層・炉断面)
第31図 H I - 8 住居跡…………… 53
(土層断面、炉平面)

第32図	H I - 8 c 住居跡 …………… 54 (平面、炉・ピット断面)	第48図	H II - 1 住居跡 …………… 73 (平面、土層・炉断面)
第33図	H I - 8 住居跡出土遺物 …………… 55 (遺物番号162~169)	第49図	H II - 1 住居跡出土遺物 …………… 74 (遺物番号267~279)
第34図	H I - 8 住居跡出土遺物 …………… 56 (遺物番号170~178)	第50図	H II - 1 住居跡出土遺物 …………… 75 (遺物番号280~290)
第35図	H I - 8 住居跡出土遺物 …………… 57 (遺物番号179~188)	第51図	I I - 1 住居跡 …………… 78 (平面、土層断面)
第36図	H I - 8 住居跡出土遺物 …………… 58 (遺物番号189~196)	第52図	I I - 1 住居跡出土遺物 …………… 79 (遺物番号291~299)
第37図	H I - 8 住居跡出土遺物 …………… 59 (遺物番号197~202)	第53図	I I - 1 住居跡出土遺物 …………… 80 (遺物番号300~313)
第38図	H I - 8 住居跡出土遺物 …………… 60 (遺物番号203~213)	第54図	I I - 1 住居跡出土遺物 …………… 81 (遺物番号314~325)
第39図	H I - 8 住居跡出土遺物 …………… 61 (遺物番号214~223)	第55図	I I - 1 住居跡出土遺物 …………… 82 (遺物番号326~328)
第40図	H I - 8 住居跡出土遺物 …………… 62 (遺物番号224~226)	第56図	I I - 2 住居跡 …………… 86 (平面、土層・炉断面)
第41図	H I - 9 住居跡 …………… 64 (平面、土層・炉断面)	第57図	I I - 2 住居跡出土遺物 …………… 87 (遺物番号329~332)
第42図	H I - 9 住居跡出土遺物 …………… 65 (遺物番号227~234)	第58図	I I - 2 住居跡出土遺物 …………… 88 (遺物番号333~336)
第43図	H I - 9 住居跡出土遺物 …………… 66 (遺物番号235~242)	第59図	I I - 2 住居跡出土遺物 …………… 89 (遺物番号337~342)
第44図	H I - 9 住居跡出土遺物 …………… 67 (遺物番号243~255)	第60図	I I - 2 住居跡出土遺物 …………… 90 (遺物番号343~349)
第45図	H I - 9 住居跡出土遺物 …………… 68 (遺物番号256~260)	第61図	I I - 2 住居跡出土遺物 …………… 91 (遺物番号350~362)
第46図	H I - 9 住居跡出土遺物 …………… 69 (遺物番号261~266)	第62図	I I - 2 住居跡出土遺物 …………… 92 (遺物番号363~366)
第47図	H I - 10 住居跡 …………… 71 (平面、柱穴土層断面)	第63図	I I - 3 住居跡 …………… 95 (平面、土層・炉断面)

第64図	I I - 3 住居跡出土遺物 …………… 96 (遺物番号367~375)	第80図	I II - 3 住居跡出土遺物……………118 (遺物番号484~497)
第65図	I I - 3 住居跡出土遺物 …………… 97 (遺物番号376~385)	第81図	I II - 3 住居跡出土遺物……………119 (遺物番号498~501)
第66図	I I - 3 住居跡出土遺物 …………… 98 (遺物番号386~399)	第82図	J I - 2 · J I - 4 住居跡 …………… 122 (平面、土層・炉断面)
第67図	I I - 3 住居跡出土遺物 …………… 99 (遺物番号400~413)	第83図	J I - 1 · J I - 2 住居跡 …………… 123 J I - 4 住居跡出土遺物 (遺物番号502~514)
第68図	I I - 4 · I I - 6 住居跡 …………… 101 (平面、土層・炉断面)	第84図	J I - 5 · J I - 6 住居跡 …………… 125 (平面・土層断面)
第69図	I I - 4 住居跡出土遺物……………102 (遺物番号414~428)	第85図	J I - 7 · J II - 2 住居跡 …………… 127 (平面・土層断面)
第70図	I I - 4 住居跡出土遺物……………103 (遺物番号429~443)	第86図	J I - 5 · J I - 6 住居跡 …………… 128 J I - 7 住居跡出土遺物 (遺物番号515~522)
第71図	I I - 6 住居跡出土遺物……………104 (遺物番号444~448)	第87図	J II - 2 住居跡出土遺物……………129 (遺物番号523~526)
第72図	I I - 7 · I I - 8 住居跡 …………… 106 (平面、土層・炉断面)	第88図	K I - 1 住居跡……………133 (平面、土層・炉断面)
第73図	I I - 7 住居跡出土遺物……………107 (遺物番号449~457)	第89図	K I - 1 · K I - 2 住居跡 …………… 134 (断面、平面)
第74図	I I - 8 住居跡出土遺物……………109 (遺物番号458~463)	第90図	K I - 2 · K II - 1 住居跡 …………… 135 (土層断面、炭化材分布状況)
第75図	I I - 9 · I I - 10住居跡 …………… 110 (平面、土層・炉断面)	第91図	K II - 1 住居跡……………136 (平面、断面・炉断面)
第76図	I I - 9 住居跡出土遺物……………111 (遺物番号464~469)	第92図	K I - 1 住居跡出土遺物……………137 (遺物番号527~533)
第77図	I I - 10住居跡出土遺物……………113 (遺物番号470~483)	第93図	K I - 1 住居跡出土遺物……………138 (遺物番号534~538)
第78図	I II - 1 · I II - 3 住居跡 …………… 116 (平面、土層断面)	第94図	K I - 1 住居跡出土遺物……………139 (遺物番号539~548)
第79図	I II - 3 · J I - 1 住居跡 …………… 117 (土層・炉断面、平面)		

第95図	K I-1・K I-2住居跡……………140 K II-1住居跡出土遺物 (遺物番号549~555)	第109図	G I-51・52・53・54・55ピット…164 (平面、土層断面)
第96図	G II-1住居跡……………142 (平面、土層・炉断面)	第110図	G I-56・57・58・59ピット…165 (平面、土層断面)
第97図	I I-5住居跡……………143 (平面、土層・カマド断面)	第111図	G I-60・G II-51・52ピット…166 (平面、土層断面)
第98図	I II-2住居跡……………145 (平面、土層・カマド断面)	第112図	F I-53・56・57ピット…167 出土遺物 (遺物番号586~590)
第99図	J I-3住居跡……………147 (平面、土層・カマド断面)	第113図	F I-57・G I-51・52ピット…168 G II-52ピット出土遺物 (遺物番号591~597)
第100図	G II-1住居跡……………148 I II-2住居跡出土遺物 (遺物番号556~566)	第114図	H I-51・52・53ピット…172 (平面、土層断面)
第101図	I II-2住居跡……………149 J I-3住居跡出土遺物 (遺物番号567~575)	第115図	H II-51・52・53・54ピット…173 (平面、土層断面)
第102図	J II-1住居跡……………151 (平面、土層・カマド断面)	第116図	H II-55・56・57・58ピット…174 (平面、土層断面)
第103図	J II-1住居跡……………152 (カマド断面) H I-3住居跡状遺構 (平面、土層断面)	第117図	I I-51・52・53・54ピット…175 (平面、土層断面)
第104図	J II-1住居跡出土遺物……………153 (遺物番号576~581)	第118図	I I-55・56・57・58ピット…176 (平面、土層断面)
第105図	H I-3住居跡状遺構出土遺物…154 (遺物番号582~585)	第119図	I I-59・60・61・62ピット…177 (平面、土層断面)
第106図	F I掘立柱建物跡(平面)……………156	第120図	H I-51ピット……………178 I I-51ピット出土遺物 (遺物番号598~607)
第107図	F I-51・52・53・54ピット…162 (平面、土層断面)	第121図	I I-52・53・55・57ピット…179 I I-60・61ピット出土遺物 (遺物番号608~614)
第108図	F I-55・56・57・58ピット…163 (平面、土層断面)	第122図	I I-63・64・65・66・67ピット…195 (平面、土層断面)

第123図	I I-68・69・I II-51ピット……196 (平面、土層断面)	(遺物番号632~640)
第124図	I II-52・53・54・55 …… 197 56ピット (平面、土層断面)	第137図 I II池跡 (平面、土層断面) ……210
第125図	I II-57・58・59ピット …… 198 (平面、土層断面)	第138図 G I配石遺構……………213 G I土器埋設遺構No.1 G I土器埋設遺構No.2 I II土器埋設遺構 (平面、断面)
第126図	I II-60・61・62・63ピット …… 199 (平面、土層断面)	第139図 J I土器埋設遺構……………214 J IIカマド跡 (平面、断面)
第127図	I II-64・65・66・67ピット …… 200 (平面、土層断面)	第140図 G I埋設土器No.1・No.2……………215 (遺物番号641~643)
第128図	I II-68・69・70ピット …… 201 (平面、土層断面)	第141図 I II埋設土器・J I埋設土器……216 (遺物番号644~645)
第129図	J I-51・52ピット …… 202 (平面、土層断面)	第142図~第159図 遺構外出土遺物…220~238 土器、土製品、土偶 (遺物番号646~858)
第130図	J I-53・54・55・56ピット …… 203 (平面、土層断面)	第160図~第166図 遺構外出土遺物…242~248 石器 (遺物番号859~943)
第131図	J I-57・58・59・60ピット …… 204 (平面、土層断面)	第167図 柱穴配置……………253
第132図	J I-61・J II-51ピット……………205 J II-52・53ピット (平面、土層断面)	第168図 出入口状施設をもつ住居跡の柱穴配置……254
第133図	J II-54ピット …… 206 F I-101陥し穴状遺構 (平面、土層断面)	第169図 拡張された住居跡の支柱穴列……255
第134図	I I-62・65・67・69ピット …… 207 I II-55・58ピット出土遺物 (遺物番号615~623)	第170図 H I-8住居跡建て替えの特殊性 ……256
第135図	I II-63・70ピット …… 208 J I-51ピット出土遺物 (遺物番号624~631)	第171図 当遺跡と一連をなす吠屋敷I a・I b 遺跡の時期別占地 …… 260~261
第136図	J I-51・52・60ピット …… 209 J II-54ピット出土遺物	第172図~第176図 第IV群土器集成図 …… 264~268
		第177図~第182図 第IV群土器文様の変遷傾向 …………… 269~274
		挿図1 土師器の器面調整・計測値 の表わし方 …… 6
		挿図2 土層柱状図 …… 7

写真図版目次

- 写真図版1 空中写真……………293
- 写真図版2 調査前状況、基本層序……………294
- 写真図版3 F I - 1 住居跡……………295
(平・断面)
- 写真図版4 F I - 1 住居跡……………296
(炉平・断面、遺物出土状況)
F I - 2 住居跡
(遺物出土状況)
- 写真図版5 F I - 2 住居跡……………297
(平・断面、炉平・断面)
- 写真図版6 H I - 1 住居跡……………298
(平・断面、遺物出土状況)
- 写真図版7 H I - 2a ~ 2c 住居跡……………299
(平・断面、遺物出土状況)
- 写真図版8 H I - 2d 住居跡……………300
(平・断面、ピット断面)
- 写真図版9 H I - 4 住居跡……………301
(平・断面)
- 写真図版10 H I - 4 住居跡……………302
(炉平・断面、遺物出土状況)
- 写真図版11 H I - 4 住居跡……………303
(遺物出土状況)
H I - 5 住居跡
(平・断面)
- 写真図版12 H I - 6 住居跡……………304
(平・断面、炉断面)
(遺物出土状況)
- 写真図版13 H I - 7 住居跡……………305
(平・断面、炉平・断面)
- 写真図版14 H I - 8a 住居跡……………306
(平・断面、炉平・断面)
- 写真図版15 H I - 8a 住居跡……………307
(遺物出土状況)
H I - 8c 住居跡
(平面、ピット断面)
- 写真図版16 H I - 8b・8c 住居跡……………308
(断面、炉平・断面)
H I - 9 住居跡
(平面)
- 写真図版17 H I - 9 住居跡……………309
(断面、炉平・断面)
(遺物出土状況)
- 写真図版18 H I - 10 住居跡……………310
(平面、柱穴断面)
- 写真図版19 H I - 10 住居跡……………311
(柱穴断面)
H II - 1 住居跡
(遺物出土状況)
- 写真図版20 H II - 1 住居跡……………312
(平・断面、炉平・断面)
- 写真図版21 I I - 1a・1b 住居跡……………313
(平・断面、遺物出土状況)
- 写真図版22 I I - 1a 住居跡……………314
(遺物出土状況)
I I - 2 住居跡
(遺物出土状況)
- 写真図版23 I I - 2 住居跡……………315
(遺物出土状況)

写真図版24	I I - 2 住居跡……………316	(平・断面、炉平・断面)	写真図版38	J I - 5 住居跡……………330	(平・断面、遺物出土状況)
写真図版25	I I - 3 住居跡……………317	(平・断面、炉平・断面)	写真図版39	J I - 6 住居跡……………331	(平・断面、炉平面)
写真図版26	I I - 3 住居跡……………318	(遺物出土状況)			(遺物出土状況)
写真図版27	I I - 4 住居跡……………319	(平・断面、炉断面)	写真図版40	J I - 7 住居跡……………332	(平・断面)
		(遺物出土状況)	写真図版41	J II - 2 住居跡……………333	(平・断面)
写真図版28	I I - 6 住居跡……………320	(平・断面、炉断面)	写真図版42	K I - 1 住居跡……………334	(平・断面、炉断面)
		(遺物出土状況)			(遺物出土状況)
写真図版29	I I - 7 住居跡……………321	(平・断面、炉平・断面)	写真図版43	K I - 2 住居跡……………335	(平・断面)
写真図版30	I I - 8 住居跡……………322	(平・断面、炉平・断面)	写真図版44	K II - 1 住居跡……………336	(平・断面、炉平・断面)
写真図版31	I I - 9 住居跡……………323	(平・断面、遺物出土状況)	写真図版45	K II - 1 住居跡……………337	(遺物、炭化材分布状況)
					(遺物出土状況)
写真図版32	I I - 10 住居跡……………324	(平・断面、炉断面)	写真図版46	G II - 1 住居跡……………338	(平・断面、焼土平・断面)
		(遺物出土状況)	写真図版47	I I - 5 住居跡……………339	(平面、焼土断面)
写真図版33	I II - 1 住居跡……………325	(平面、貼床断面)			I II - 2 住居跡
					(カマド断面)
写真図版34	I II - 3 住居跡……………326	(平・断面、炉平・断面)	写真図版48	I II - 2 住居跡……………340	(平・断面、カマド平・断面)
写真図版35	J I - 1 住居跡……………327	(平・断面、炉平・断面)	写真図版49	J I - 3 住居跡……………341	(平・断面、カマド平・断面)
写真図版36	J I - 2 住居跡……………328	(平・断面)	写真図版50	J I - 3 住居跡……………342	(カマド断面、遺物出土状況)
写真図版37	J I - 4 住居跡……………329				

	J II-1 住居跡 (カマド断面)	(遺物出土状況)	
写真図版51	J II-1 住居跡……………343 (平・断面、カマド平・断面)		写真図版64 I I-52・53・54ピット……………356 (平面、土層断面)
写真図版52	H I-3 住居跡状遺構……………344 (平・断面、遺物出土状況)		写真図版65 I I-55・56・57ピット……………357 (平面、土層断面)
写真図版53	F I-51・52・53ピット……………345 (平面、土層断面)		写真図版66 I I-58・59・60ピット……………358 (平面、土層断面)
写真図版54	F I-54・55・56ピット……………346 (平面、土層断面)		写真図版67 I I-61・62・63ピット……………359 (平面、土層断面)
写真図版55	F I-56・57・58ピット……………347 (平面、土層断面) (遺物出土状況)		写真図版68 I I-64・65・66ピット……………360 (平面、土層断面)
写真図版56	G I-51・52・53ピット……………348 (平面、土層断面) (遺物出土状況)		写真図版69 I I-67・68・69ピット……………361 (平面、土層断面)
写真図版57	G I-54・55・56・57ピット … 349 (平面、土層断面)		写真図版70 I II-51・52・53ピット……………362 (平面、土層断面)
写真図版58	G I-58・59・60ピット……………350 (平面、土層断面)		写真図版71 I II-54・55・56ピット……………363 (平面、土層断面)
写真図版59	G II-51・52ピット……………351 H I-51ピット (平面、土層断面)		写真図版72 I II-57・58・59ピット……………364 (平面、土層断面)
写真図版60	H I-52・53ピット……………352 H II-51ピット (平面、土層断面)		写真図版73 I II-60・61・63ピット……………365 (平面、土層断面)
写真図版61	H I-52・53・54ピット……………353 (平面、土層断面)		写真図版74 I II-62・64・65・66ピット … 366 (平面、土層断面)
写真図版62	H II-55・56・57ピット……………354 (平面、土層断面)		写真図版75 I II-67・68・69・70ピット … 367 (平面、土層断面)
写真図版63	H II-58・I I-51ピット … 355 (平面、土層断面)		写真図版76 I II-70・J I-51ピット … 368 (土層断面、平面) (遺物出土状況)
			写真図版77 J I-51・52・53ピット……………369 (柱穴土層断面) (平面、土層断面)
			写真図版78 J I-53・54・55・56ピット … 370

	(平面、土層断面)		(遺物番号38~55)
写真図版79	J I -57・58・59ピット……371	写真図版92	H I - 2 住居跡出土遺物……384
	(平面、土層断面)		(遺物番号56~66)
写真図版80	J I -60・61ピット……372	写真図版93	H I - 2 住居跡出土遺物……385
	J II -51ピット		(遺物番号67~81)
	(平面、土層断面)	写真図版94	H I - 2 住居跡出土遺物……386
写真図版81	J II -52・53・54ピット……373		(遺物番号82~95)
	(平面、土層断面)	写真図版95	H I - 2 住居跡出土遺物……387
写真図版82	F I -101陥し穴状遺構……374		(遺物番号96~101)
	G I 配石遺構		H I - 4 住居跡出土遺物
	G I 土器埋設遺構No.1		(遺物番号102~104)
	(平面、土層断面)	写真図版96	H I - 4 住居跡出土遺物……388
写真図版83	G I 土器埋設遺構No.2……375		(遺物番号105~109)
	I II 土器埋設遺構	写真図版97	H I - 4 住居跡出土遺物……389
	J I 土器埋設遺構		(遺物番号110~117)
	(平面、土層断面)	写真図版98	H I - 4 住居跡出土遺物……390
写真図版84	I II 池跡……376		(遺物番号118~127)
	(礫分布状況、平面)	写真図版99	H I - 4 住居跡出土遺物……391
	(土層断面)		(遺物番号128~133)
写真図版85	J II カマド跡……377	写真図版100	H I - 4 住居跡出土遺物……392
	(検出状況、平・断面)		(遺物番号134~141)
写真図版86	F I - 1 住居跡出土遺物……378	写真図版101	H I - 5 住居跡出土遺物……393
	(遺物番号1~11)		(遺物番号142~145)
写真図版87	F I - 2 住居跡出土遺物……379	写真図版102	H I - 6 住居跡出土遺物……394
	(遺物番号12~21)		(遺物番号146~152)
写真図版88	F I - 2 住居跡出土遺物……380	写真図版103	H I - 6 住居跡出土遺物……395
	(遺物番号22~26)		(遺物番号153~161)
写真図版89	F I - 2 住居跡出土遺物……381	写真図版104	H I - 8 住居跡出土遺物……396
	(遺物番号27~32)		(遺物番号162~169)
写真図版90	H I - 1 住居跡出土遺物……382	写真図版105	H I - 8 住居跡出土遺物……397
	(遺物番号33~37)		(遺物番号170~175)
写真図版91	H I - 1 住居跡出土遺物……383	写真図版106	H I - 8 住居跡出土遺物……398

	(遺物番号176~185)		(遺物番号317~326)
写真図版107	H I - 8 住居跡出土遺物 … 399 (遺物番号186~192)	写真図版121	I I - 1 住居跡出土遺物 … 413 (遺物番号327~328)
写真図版108	H I - 8 住居跡出土遺物 … 400 (遺物番号193~199)		I I - 2 住居跡出土遺物 (遺物番号329~330)
写真図版109	H I - 8 住居跡出土遺物 … 401 (遺物番号200~205)	写真図版122	I I - 2 住居跡出土遺物 … 414 (遺物番号331~335)
写真図版110	H I - 8 住居跡出土遺物 … 402 (遺物番号206~226)	写真図版123	I I - 2 住居跡出土遺物 … 415 (遺物番号336~342)
写真図版111	H I - 9 住居跡出土遺物 … 403 (遺物番号227~235)	写真図版124	I I - 2 住居跡出土遺物 … 416 (遺物番号343~348)
写真図版112	H I - 9 住居跡出土遺物 … 404 (遺物番号236~242)	写真図版125	I I - 2 住居跡出土遺物 … 417 (遺物番号349~363)
写真図版113	H I - 9 住居跡出土遺物 … 405 (遺物番号243~255)	写真図版126	I I - 2 住居跡出土遺物 … 418 (遺物番号364~366)
写真図版114	H I - 9 住居跡出土遺物 … 406 (遺物番号256~262)	写真図版127	I I - 3 住居跡出土遺物 … 419 (遺物番号367~373)
写真図版115	H I - 9 住居跡出土遺物 … 407 (遺物番号263~266)	写真図版128	I I - 3 住居跡出土遺物 … 420 (遺物番号374~384)
	H II - 1 住居跡出土遺物 (遺物番号267~272)	写真図版129	I I - 3 住居跡出土遺物 … 421 (遺物番号385~394)
写真図版116	H II - 1 住居跡出土遺物 … 408 (遺物番号273~282)	写真図版130	I I - 3 住居跡出土遺物 … 422 (遺物番号395~413)
写真図版117	H II - 1 住居跡出土遺物 … 409 (遺物番号283~290)	写真図版131	I I - 4 住居跡出土遺物 … 423 (遺物番号414~424)
	I I - 1 住居跡出土遺物 (遺物番号291~293)	写真図版132	I I - 4 住居跡出土遺物 … 424 (遺物番号425~439)
写真図版118	I I - 1 住居跡出土遺物 … 410 (遺物番号294~300)	写真図版133	I I - 4 住居跡出土遺物 … 425 (遺物番号440~443)
写真図版119	I I - 1 住居跡出土遺物 … 411 (遺物番号301~316)		I I - 6 住居跡出土遺物 (遺物番号444~448)
写真図版120	I I - 1 住居跡出土遺物 … 412	写真図版134	I I - 7 住居跡出土遺物 … 426

- (遺物番号449~457)
- 写真図版135 I I - 8 住居跡出土遺物 … 427
(遺物番号458~463)
- I I - 9 住居跡出土遺物
(遺物番号464~466)
- 写真図版136 I I - 9・10住居跡出土遺物…428
(遺物番号467~472)
- 写真図版137 I I -10住居跡出土遺物 … 429
(遺物番号473~483)
- 写真図版138 I II - 3 住居跡出土遺物 … 430
(遺物番号484~490)
- 写真図版139 I II - 3 住居跡出土遺物 … 431
(遺物番号491~501)
- 写真図版140 J I - 1 住居跡出土遺物 … 432
(遺物番号502)
- J I - 2 住居跡出土遺物
(遺物番号503~507)
- J I - 4 住居跡出土遺物
(遺物番号508~514)
- 写真図版141 J I - 5 住居跡出土遺物 … 433
(遺物番号515)
- J I - 6 住居跡出土遺物
(遺物番号516~517)
- J I - 7 住居跡出土遺物
(遺物番号518~522)
- 写真図版142 J II - 2 住居跡出土遺物 … 434
(遺物番号523~526)
- K I - 1 住居跡出土遺物
(遺物番号527~529)
- 写真図版143 K I - 1 住居跡出土遺物 … 435
(遺物番号530~536)
- 写真図版144 K I - 1 住居跡出土遺物 … 436
(遺物番号537~542)
- 写真図版145 K I - 1 住居跡出土遺物 … 437
(遺物番号542 a ~ 548)
- 写真図版146 K I - 1 住居跡出土遺物 … 438
(遺物番号549)
- K I - 2 住居跡出土遺物
(遺物番号550)
- K II - 1 住居跡出土遺物
(遺物番号551~553)
- 写真図版147 K II - 1 住居跡出土遺物 … 439
(遺物番号554~555)
- G II - 1 住居跡出土遺物
(遺物番号556~561)
- 写真図版148 I II - 2 住居跡出土遺物 … 440
(遺物番号562~569)
- 写真図版149 J I - 3 住居跡出土遺物 … 441
(遺物番号570~575)
- J II - 1 住居跡出土遺物
(遺物番号576~579)
- 写真図版150 J II - 1 住居跡出土遺物 … 442
(遺物番号580~581)
- H I - 3 住居跡状遺構出土遺物
(遺物番号582~585)
- 写真図版151 F I -53・56・57ピット出土遺物……443
(遺物番号586~591)
- 写真図版152 G I -51・52ピット出土遺物…444
G II -52ピット出土遺物
H I -51ピット出土遺物
I I -51ピット出土遺物
(遺物番号592~601)
- 写真図版153 I I -51・52ピット出土遺物…445
I I -53・55ピット出土遺物

	(遺物番号602～610)		
写真図版154	I I -57・60・61ピット出土遺物……446	写真図版166	遺構外出土遺物(土器) ……458 (遺物番号723～731)
	I I -62・65・67ピット出土遺物	写真図版167	遺構外出土遺物(土器) ……459 (遺物番号732～739)
	I I -69ピット出土遺物	写真図版168	遺構外出土遺物(土器) ……460 (遺物番号740～749)
	I II -55ピット出土遺物 (遺物番号611～620)	写真図版169	遺構外出土遺物(土器) ……461 (遺物番号750～765)
写真図版155	I II -58・63・70ピット出土遺物……447	写真図版170	遺構外出土遺物(土器) ……462 (遺物番号766～775)
	J I -51ピット出土遺物 (遺物番号621～629)	写真図版171	遺構外出土遺物(土器) ……463 (遺物番号776～784)
写真図版156	J I -51・52・60ピット出土遺物……448 (遺物番号630～635)	写真図版172	遺構外出土遺物(土器) ……464 (遺物番号785～794)
写真図版157	J I -60ピット出土遺物 ……449	写真図版173	遺構外出土遺物(土器) ……465 (遺物番号795～802)
	J II -54ピット出土遺物	写真図版174	遺構外出土遺物(土器) ……466 (遺物番号803～811)
	G I 埋設土器No1・2 (遺物番号636～642)	写真図版175	遺構外出土遺物(土器) ……467 (遺物番号812～820)
写真図版158	G I 埋設土器No2 ……450	写真図版176	遺構外出土遺物(土器) ……468 (遺物番号821～836)
	I II ・ J I 埋設土器 (遺物番号643～645)	写真図版177	遺構外出土遺物(土器・土製 品) ……469 (遺物番号837～854)
写真図版159	遺構外出土遺物(土器) ……451 (遺物番号646～660)	写真図版178	遺構外出土遺物(土器・土製 品) ……470 (遺物番号855～858)
写真図版160	遺構外出土遺物(土器) ……452 (遺物番号661～674)	写真図版179	遺構外出土遺物(石器) ……471 (遺物番号859～889)
写真図版161	遺構外出土遺物(土器) ……453 (遺物番号675～684)	写真図版180	遺構外出土遺物(石器) ……472 (遺物番号890～925)
写真図版162	遺構外出土遺物(土器) ……454 (遺物番号685～692)		
写真図版163	遺構外出土遺物(土器) ……455 (遺物番号693～701)		
写真図版164	遺構外出土遺物(土器) ……456 (遺物番号702～717)		
写真図版165	遺構外出土遺物(土器) ……457 (遺物番号718～722)		

写真図版181 遺構外出土遺物（石器）…473

（遺物番号926～933）

写真図版182 遺構外出土遺物（石器）…474

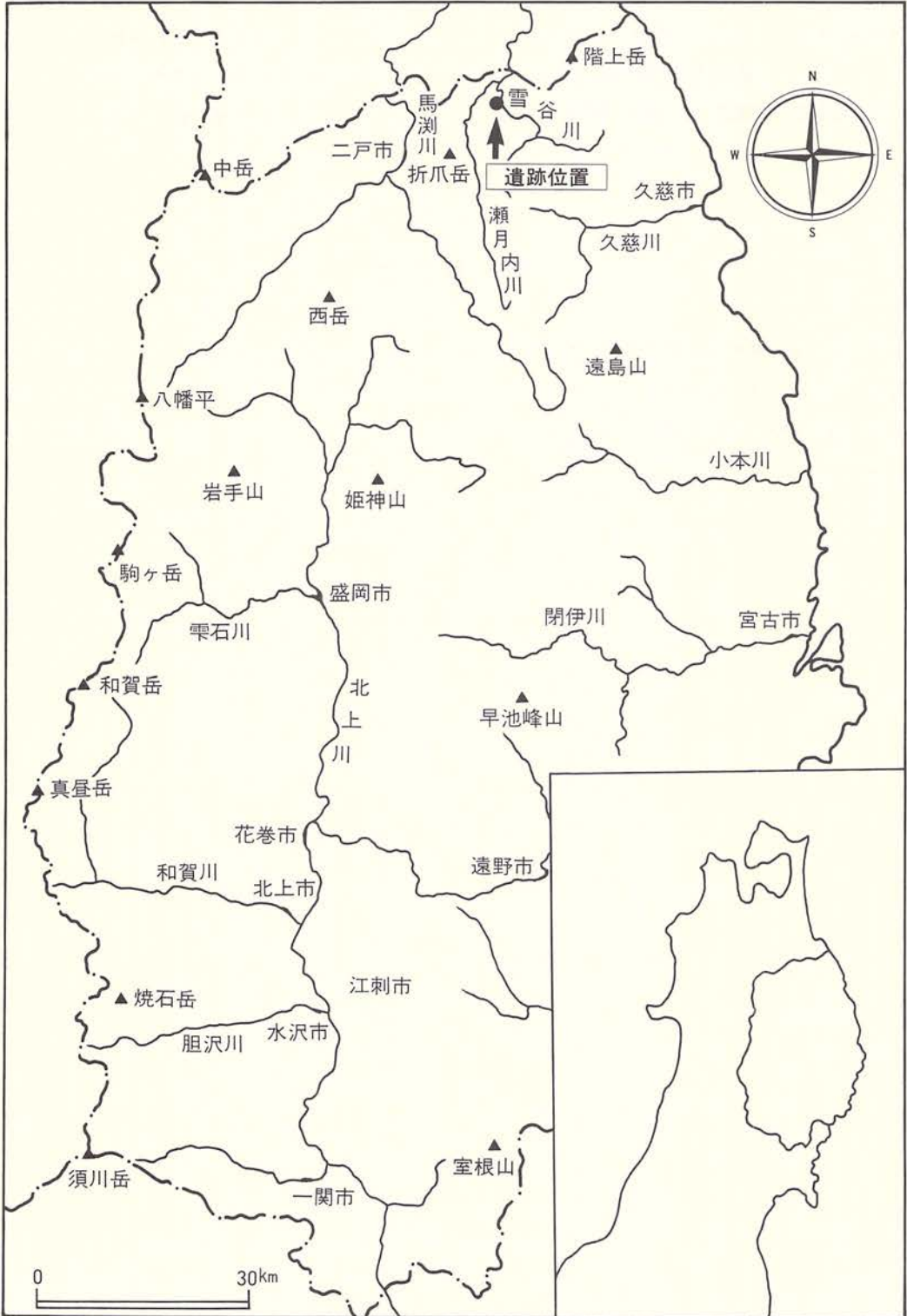
（遺物番号934～938）

写真図版183 遺構外出土遺物（石器）…475

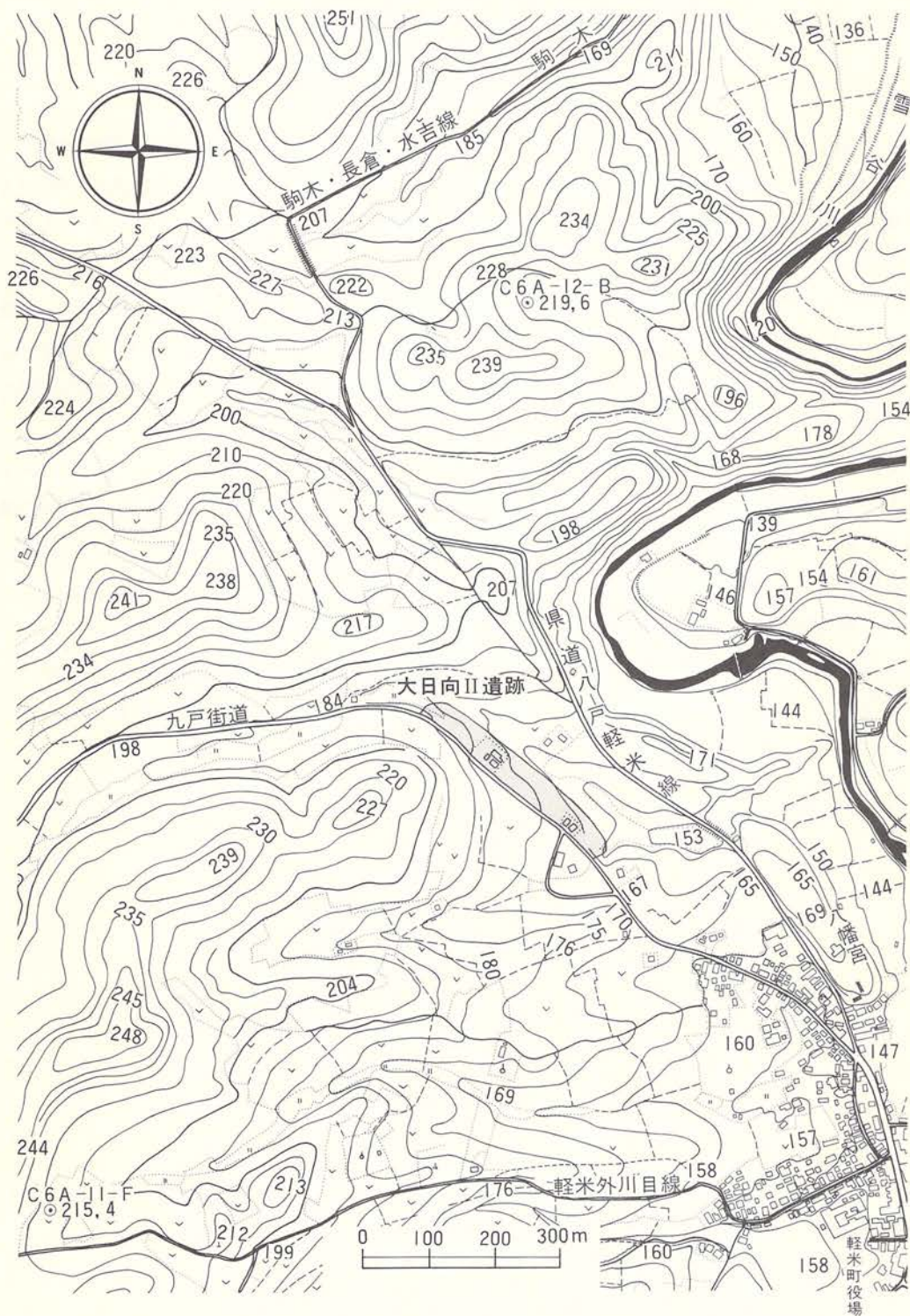
（遺物番号939～943）

表 目 次

表1～3 縄文時代住居跡一覧表	276～278
表4～7 ピット一覧表	279～282
表8～15 石器計測一覧表	283～290



第1図 岩手県全体図



第2図 遺跡位置図

I 調査に至る経過

昭和58年9月、岩手県土木部から県教育委員会事務局文化課に対して、九戸郡軽米町地内の一般国道340号道路改良工事の計画が提示された。この工事は、東北縦貫自動車道八戸線建設に関連して、設けられる軽米インターチェンジに接続する国道340号の改良を目的とするものである。

県教育委員会文化課は計画提示を受けた後、現地確認調査を行った。この地区には周知の遺跡として大日向遺跡などの存在が知られており、道路改良工事予定線内には大日向Ⅱ遺跡が存在することから、その後岩手県土木部と文化課の間で協議を重ね、11月に至って昭和59年度に発掘調査することになった。

昭和59年4月、岩手県土木部からの委託を受けて、当岩手県埋蔵文化財センター（昭和60年4月、岩手県文化振興事業団に包括）が発掘調査に着手した。岩手県土木部の当初計画は昭和59年7月までに用地取得をし、昭和59年9月には工事発注することであり、当センターの発掘調査計画も8月までに調査を終了しようとするものであった。しかし発掘調査が進展するに従い、多数の縄文時代竪穴住居跡やピット、そして多量の出土遺物が発見され、期間内に終了できる見通しがたたなくなった。そこで文化課の指導と調整、関係三者（岩手県土木部、文化課、当埋蔵文化センター）の協議を経て、野外調査期間を10月31日まで延長することになった。

II 調査方法と室内整理

1. 調査方法

(1) 座標軸の設定

調査範囲内に基準点とする杭がないため、基準点測量を委託し、調査範囲内の長軸に一直線上となる基1・基2の2杭を設定した。

基1 (X = +36901^M26 Y = +53032^M75)

基2 (X = +36786^M24 Y = +53171^M20)

この2杭のうち基1を座標原点とし、原点と基2を結ぶ線と、原点を通りこれと直交する線を基準線とした。これをもとに調査対象区全体を30m毎に大区画した。各区画は原点から北西にB・A、南東にC～Kのアルファベットを付し、また原点から北東をI、南西をIIのローマ字を付した。

地区名は両者の組み合わせによって、例えばA I区・B I区……のように表わした。

(2) 粗掘り・遺構検出

調査範囲内のうちII区は表土が薄いため、人力で表土を除去したが、I区は表土が厚く、重機を導入して表土を除去した。表土を除去した後は、作業員によって遺構を検出した。

検出された遺構は、各地区名毎に住居跡・住居跡状遺構は1から、ピットは51から、陥し穴状遺構は101から、焼土・カマド跡は151から一連の分類番号を与え、この分類番号に区画名を合わせ、遺構名とした(例、F I—1住居跡、F II—51ピット、F I—101陥し穴状遺構など)。

また、掘立柱建物跡、池跡、配石遺構、埋設土器については、地区名を前に付すのみで呼称したが、一地区で同遺構が複数検出された場合はNo1・No2の番号を付した。

(例、I II池跡、G I配石遺構、G I土器埋設遺構No1など)

(3) 精査方法

精査は原則として、住居跡・住居跡状遺構を4分法、ピット・陥し穴状遺構を2分法とし移植ベラ、竹ベラを使用して精査した。図面の作成と写真撮影は精査の各段階において必要に応じて行なったが(土器分布状況、炭化材分布状況、完掘り状況など)、ピットで埋土が単層であるものについてのみ写真撮影を省略した。

出土遺物の取り上げは、遺構内のは遺構名・出土位置を、また遺構外のは地区名を記入のうえ取り上げたが、遺構外で遺物が密に分布している範囲は3mグリットを設定し、地区名とグリット名を付して取り上げた。

(4) 実測方法

遺構が検出されたF区からK区は、遺構が密集しているため、遺構を破壊しないよう遣り方を設定して実測を行なった。

遺構の実測図は1/20の縮尺を基本とした。レベル計測は50cm間隔を基本としたが、遺構内の計測は必要に応じて細かくした。

(5) 写真撮影

撮影には6×7cm版と35mm版カメラ2台を1セットとして使用した。撮影にあたっては当埋文センター作成の「撮影カード」を使用し、整理の際の資料とした。

2. 室内整理

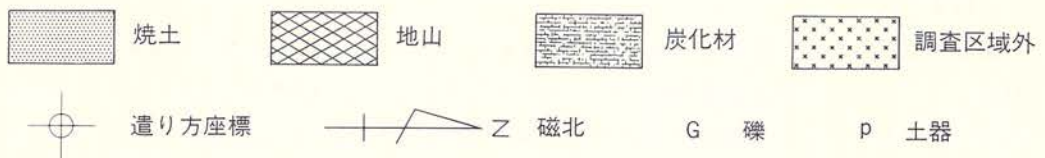
(1) 作業内容及び分担

整理作業は、昭和59年度と60年度の2ケ年にわたって行なった。年度毎の主な作業内容と分担は次のとおりである。

- ・昭和59年11月5日～60年3月31日
 - ・遺構図面の点検、合成、トレース、図版作成
 - ・遺構写真の整理、写真図版作成
 - ・土器の接合、復元
 - ・遺構の原稿執筆
- ・昭和60年4月1日～61年3月25日
 - ・土器の接合、復元、遺物の仕分け、登録
 - ・遺物の実測、トレース、図版作成
 - ・遺物写真撮影、整理、写真図版作成
 - ・遺物の原稿執筆

(2) 遺構の図版

遺構個々の平面図と埋土断面図は主に1/60に、炉断面図とカマド断面図は1/40に縮小して掲載した。また図版の中で、焼土・地山・炭化材・調査区域外・遣り方座標・礫・土器・柱穴はスクリーンとアルファベットで下記のとおり図示した。



P₁・P₂・P₃ 柱穴

(3) 遺物の図版

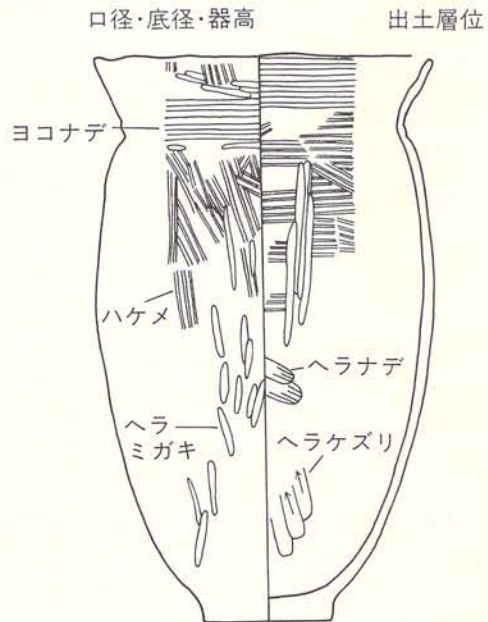
当遺跡から出土した遺物には縄文時代住居跡から出土した遺物、古代住居跡から出土した遺物、住居跡状遺構から出土した遺物、ピットから出土した遺物、さらに埋設土器、遺構外から出土した遺物の順に一連の遺物番号を付した。

土器については、左上に 口径・底径・器高の順にその測定値 (cm) を記した。() 付の数値は反転実測によって推定した値である。また住居跡床面、床面上2~3cmに浮いて出土した遺物には右上に“床面”“床面直上”と記した。

土師器の器面調整については右の図に示したとおりである。

(4) 写真図版

遺物の写真番号は、遺物図版番号と同一番号とした。



挿図1. 土師器の器面調整・計測値の表わし方

III 遺跡の立地と地質

1. 立地

大日向Ⅱ遺跡は岩手県九戸郡軽米町大字軽米13地割吠屋敷に所在する。位置は基1基準点で北緯40°19'50"576 東経141°27'27"097である。

北上山地は、岩手県を南北に細長い紡錘形に伸び、北は青森県八戸市付近まで、また南は宮城県牡鹿半島付近まで達するが、本遺跡の所在する軽米町は、岩手県北部の北上山地北縁に位置する。

軽米町周辺には、北東に階上岳(740m)・久慈平岳(706m)、南西に折爪岳(852m)の山々があるが、ほとんどは標高400mから200mの山地及び丘陵で占められている。これら山地及び丘陵は、瀬月内川と雪谷川水系によって開析をうけている。軽米は雪谷川の谷低地帯に発達した街である。

遺跡は軽米町中心部から北西へ約1.3kmの距離にある。遺跡が載るのは、東が雪谷川、西が郷坂川に境された標高227m~239mの丘陵地から東へ緩やかに張り出す緩斜面上で標高168m

～173mである。遺跡は南東から北西に走る国道340号と平行してあり、幅11m～31m・全長約272mである。

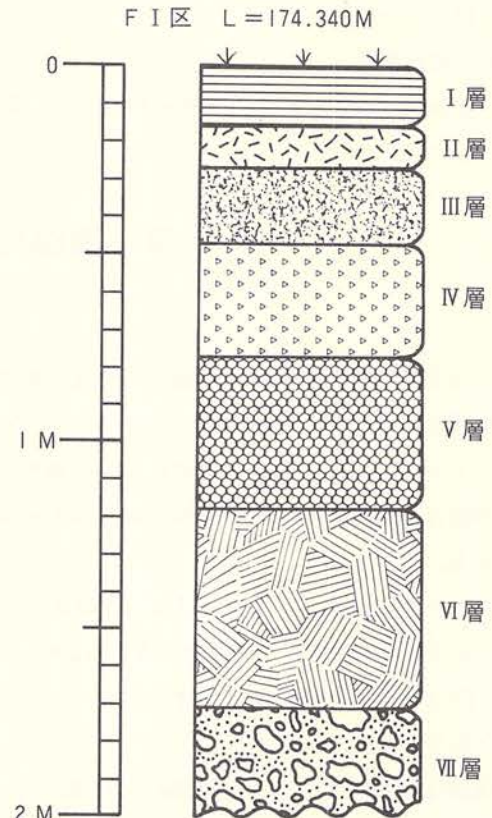
2. 地質

軽米町の地質は、基盤としての古生層を火山碎屑物が覆っているところが大部分である。古生層を形成する岩石は主としてチャート、粘板岩、輝緑凝灰岩、硬砂岩であり、その分布は折爪岳東麓と、瀬月内川及び雪谷川流域付近の山地や丘陵で見られる。中生代の地層は軽米町では見られず、新生代第三紀層は軽米町中心部から、西部の山地や丘陵に続き二戸市に及んで見られる。この層の岩石は凝灰岩、凝灰質砂岩、砂岩、礫岩などで、末の松山層、下斗米層に相当する。洪積層は瀬月内川西側の丘陵や台地、雪谷川流域の小軽米や円子地域の台地や傾斜地を形成している。これらの古生層から洪積層を覆う火山碎屑物は、十和田火山起源のもののみ見られる。

遺跡に分布する火山灰層群のうち、同定できるのは下位から順に、八戸火山灰層、南部浮石層、中振浮石層で、古代竪穴住居跡埋土に十和田a降下火山灰層がみられる。

本遺跡における基本層序は次のとおりである。

- I層 黒色土～黒褐色土(7.5YR $\frac{2}{1}$ ～ $\frac{3}{1}$)
耕作土である。
- II層 黒色土(7.5YR $\frac{1}{2}$) クロボクである。
- III層 黒褐色土(7.5YR $\frac{2}{1}$ ～ $\frac{3}{2}$) 中振浮石相当層であり、浮石だけの純粹な層は断片的に分布するにすぎない。
- IV層 黒色土～黒褐色土(7.5YR $\frac{2}{1}$ ～ $\frac{3}{1}$)
全体に南部浮石を包含する。下位が漸移層を形成する部分もある。
- V層 明褐色土(7.5YR $\frac{5}{8}$) 南部浮石層である。
- VI層 褐色土(7.5YR $\frac{5}{6}$) 八戸火山灰層である。
- VII層 にぶい黄橙色土(10YR $\frac{5}{3}$) 粘土質火山灰である。



押図2. 土層柱状図

以上の基本層のうち、主な遺構が検出される面は次のとおりである。

古代竪穴住居跡は1棟が第Ⅲ層の下位相当で検出されているが、他の4棟は既に遺構上部を削られているため把握できなかった。遺構の掘り込み・埋土状況から判断するに、第Ⅳ層が検出面になると思われる。縄文時代竪穴住居跡、住居跡状遺構、掘立柱建物跡・ピット・陥し穴状遺構・配石遺構・埋設土器は第Ⅳ層が検出面である。

3. 周辺の遺跡

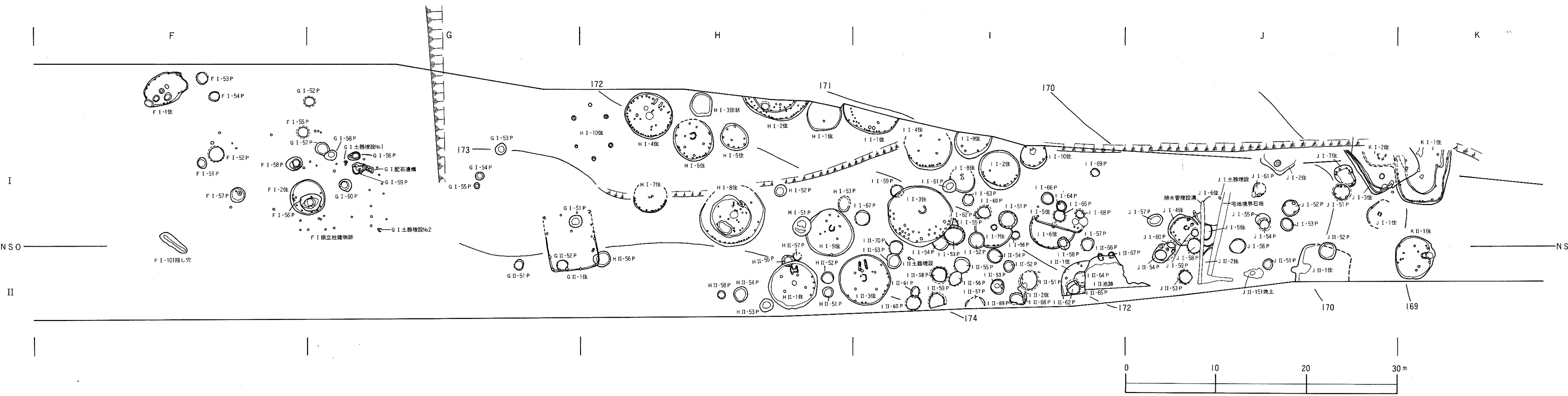
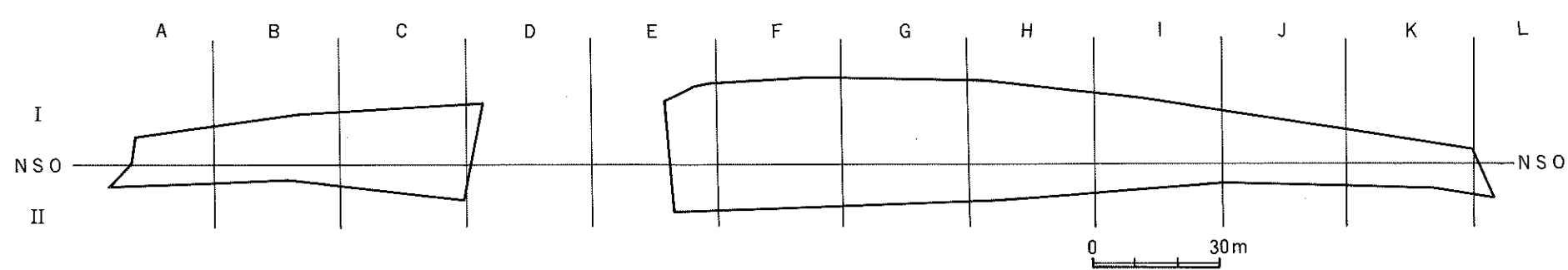
当埋文センターが昭和54年～58年までに発掘調査した9遺跡の調査結果は次のとおりである。

- (1) 土弓Ⅰ遺跡 時期不明のピット5基、縄文土器片（早期～晩期）。
- (2) 叭屋敷Ⅰa遺跡 竪穴住居跡49棟（縄文前期1棟、縄文中期末葉34棟、縄文後期初頭1棟、縄文後期中葉2棟、縄文晩期1棟、縄文時代に位置づけられるが時期不明のもの2棟、奈良時代1棟、平安時代7棟）
炉跡2基、ピット100基、陥し穴状遺構4基。
- (3) 叭屋敷Ⅰb遺跡 竪穴住居跡6棟（縄文前期2棟、縄文中期末葉1棟、平安時代1棟、時期不明2棟）
建物跡1棟、小屋跡1棟、ピット29基、陥し穴状遺構7基。
- (4) 叭屋敷Ⅱ遺跡 竪穴住居跡19棟（縄文中期末葉～後期初頭9棟、縄文後期6棟、平安時代1棟、時期不明3棟）、ピット13基。
- (5) 叭屋敷Ⅲ遺跡 縄文竪穴住居跡13棟（中期末葉～後期初頭5棟、後期8棟）
ピット26基、焼土遺構1基、土器埋設遺構1基。
- (6) 君成田Ⅳ遺跡 竪穴住居跡50棟（縄文後期44棟、縄文晩期4棟、奈良時代2棟）
ピット50基、石囲炉2基、陥し穴状遺構2基、その他4。
- (7) 駒板遺跡 縄文後晩期竪穴住居跡65棟、奈良時代住居跡15棟、縄文時代ピット270基、陥し穴状遺構17基、炉跡、焼土遺構16基、近世炭窯28基。
- (8) 馬場野Ⅰ遺跡 縄文竪穴住居跡10棟（中期末1棟、中期末～後期初頭1棟、中期末～後期2棟、後期初頭3棟、後期前葉1棟、後期中葉1棟、不明1棟）
陥し穴状遺構5基、土坑76基、近世土坑墓3基、作業小屋跡1棟、ゴロタガメ1基。
- (9) 馬場野Ⅱ遺跡 縄文時代早期の住居跡状竪穴遺構2棟、早期の土坑2基、焼土遺構2基、縄文時代中期末～晩期の住居跡及び住居跡状竪穴遺構63棟、弥生時代住居跡11棟、陥し穴状遺構・フラスコ形土坑・直円筒形土坑など209基、土器埋設遺構3基、焼土遺構9基。

1. 土弓 I 遺跡
2. 叭屋敷 I a 遺跡
3. 叭屋敷 I b 遺跡
4. 叭屋敷 II 遺跡
5. 叭屋敷 III 遺跡
6. 君成田 IV 遺跡
7. 駒板遺跡
8. 馬場野 I 遺跡
9. 馬場野 II 遺跡



第3図 大日向II遺跡と周辺遺跡位置図



第4図 遺構配置図

IV 検出遺構と遺構内出土遺物

1. 縄文時代竪穴住居跡

F I—1 住居跡

遺 構（第5図、写真図版3～4）

この住居跡は第V層を切って構築されている。ピット No.1 は西壁より張り出すが、この埋土はピット No.2 と同質土のにごりある南部浮石の単層であり、住居跡埋土との層位関係から判断して、この住居跡に伴うものと断定される。

平面形は東西に長軸をもつ楕円形を呈する。規模はピット No.1 の張り出し部を含めて、開口部径3.3×5.1m、床面部径3.1×4.2mである。埋土は中央部上位が黒色土、下位及び壁際が極暗褐色土で構成される。

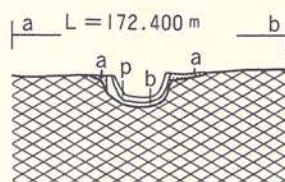
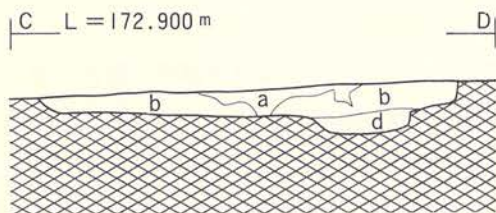
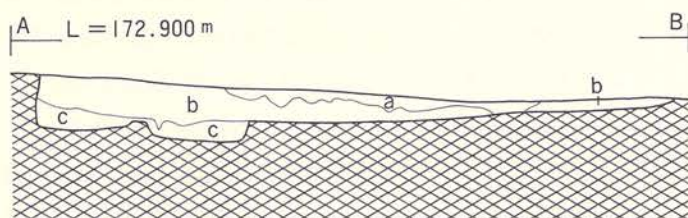
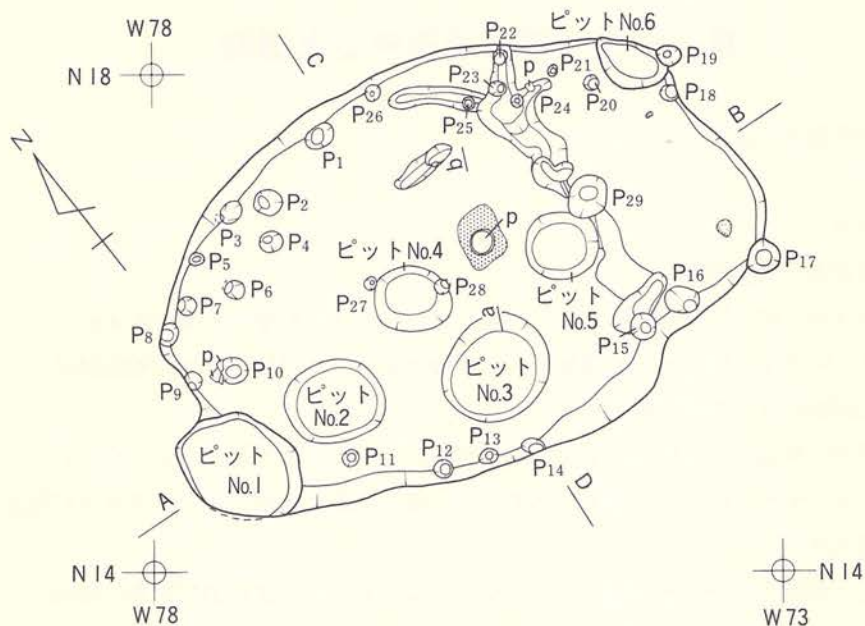
壁高は東壁・北壁で5cm、西壁で37cm、南壁で18cmである。床面は第V層を使用面としており、全体に凹凸が認められ、堅くしまっている。

この住居跡に伴うピットは6基に及ぶ。ピット No.3 の埋土は黒褐色土であり、住居跡床面同等レベルには、にごりある南部浮石が帯状に多く包含される。ピット No.4～No.6 の埋土は極暗褐色土の単層であり、住居跡埋土下位と同質土である。ピット No.1～No.3 の埋土と住居跡の埋土は住居跡床面同等のレベルを境にして異にするところから、この3基のピットは使用後閉覆された可能性が強い。これらピットの規模は、No.1 が開口部径80×105cm・底部径70×90cm・深さ9cm、No.2 が開口部径65×80cm・底部径54×65cm・深さ17cm、No.3 が開口部径78×91cm・底部径62×73cm・深さ15cm、No.4 が開口部径52×62cm・底部径33×40cm・深さ7cm、No.5 が開口部径53×58cm・底部径38×42cm・深さ5cm、No.6 が開口部径36×60cm・底部径25×50cm・深さ6cmである。周溝は床面中央部からやや東側の南壁から北壁近くまで短軸を区切る。規模は幅10～30cm・深さ3～9cmである。

炉は土器埋設炉で、床面ほぼ中央部に位置する。利用している土器は深鉢形土器の下半で、土器底部には小角礫を敷き詰めている。焼土は径35×50cmの範囲に分布し、焼土最大層厚は3cmに及ぶ。柱穴はP₁～P₂₉が検出されているが、柱穴配置は不明である。

これら柱穴のうち、P₁₇とP₁₉は遺構外に張り出し、この間の壁下床面が踏み堅められていると

P _{No.}	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅
径 cm	19×26	21×23	15×18	16×20	9×12	14×15	14×14	13×18	13×15	20×20	12×14	14×16	11×15	12×17	20×20
深さcm	27	26	14	19	6	23	22	9	8	10	8	10	6	19	35



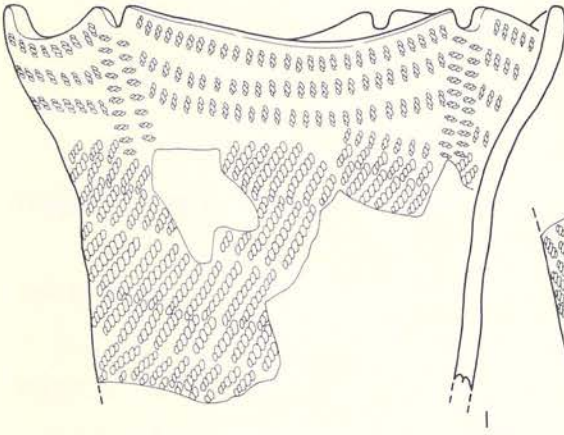
- a. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石15%)
- b. 7.5Y R2/3 極暗褐色土 (含南部浮石20%)
- c. 7.5Y R4/6 褐色土 (汚れた南部浮石)
- d. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石30%)

- a. 5Y R4/8 赤褐色土 (焼土)
- b. 7.5Y R2/3 極暗褐色土 (含南部浮石5%)

第5図 FI-1住居跡(平・断面 $S = \frac{1}{60}$, 炉断面 $S = \frac{1}{30}$)

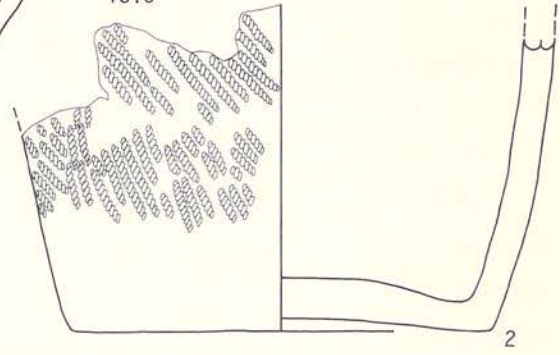
21.1

床面

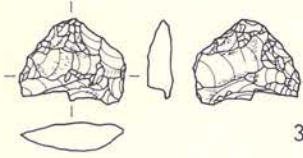


15.9

炉埋設

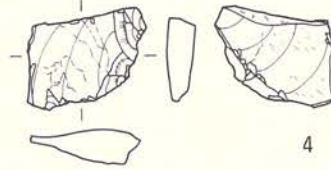


床面



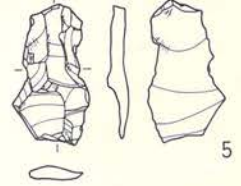
3

床面



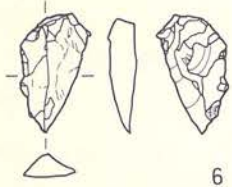
4

床面



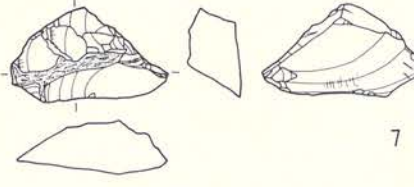
5

床面



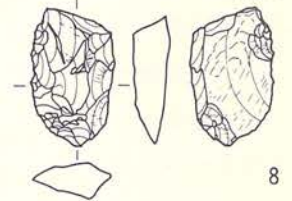
6

床面



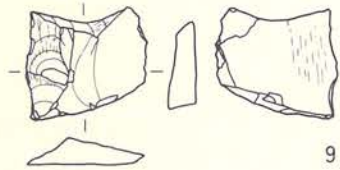
7

床面



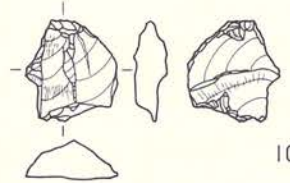
8

床面



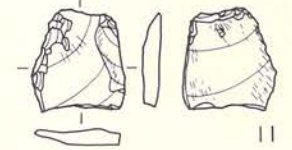
9

床面



10

床面



11

3~11 約 $\frac{1}{2}$
1~2 約 $\frac{1}{3}$

第6图 F I - 1 住居跡出土遺物(遺物番号1~11)

P _{No}	P ₁₆	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄	P ₂₅	P ₂₆	P ₂₇	P ₂₈	P ₂₉
径 cm	21×27	23×28	12×15	16×20	12×12	8×9	10×12	11×14	10×10	10×10	12×13	9×11	10×12	30×34
深さcm	25	16	11	28	19	7	7	22	13	6	29	11	19	70

ころから出入口と考える。

出土遺物（第6図、写真図版86）

1・2の土器と3～11の石器が出土している。これらのうち、2は炉埋設土器、その他は床面から出土したものである。

1は深鉢形土器の体部上半で、口縁は6個の波状を呈するものと思われる。口縁部文様帯幅は3～4cmで、絡条体圧痕文が施文されている。2は深鉢形土器の体部下半で、原体 $R < \frac{L}{L}$ の単節斜縄文が施文されている。底面は揚げ底である。3のスクレーパーは両面周縁に刃部剥離調整が施されている。4～11はフレークで、いずれにも剥離調整の認められないものである。

これらの遺物のうち1は第I群土器2類に属するものである（P216参照）。

遺構の時期

床面から出土している土器からみて、前期後半に位置づけられる。

F I—2 住居跡

遺 構（第7図、写真図版4～5）

この住居跡は第IV層を切って構築されている。この住居跡床面下からF I—56ピットが検出されており、F I—56ピットが廃棄された後にこの住居跡が構築されたものである。

平面形はほぼ円形を呈する。規模は開口部径3.7×4.0m、床面部径3.4×3.7mである。埋土は上位が黒色土、下位が黒褐色土・極暗褐色土で構成される。

壁高は東壁で23cm、西壁で29cm、南壁で33cm、北壁で22cmである。床面は平坦である。

炉は地床炉で、床面中央部からやや南側に位置する。焼土の分布は2個所に分かれ、いずれも不整形を呈する。規模は中央部寄りが径17×30cm・焼成最大層厚2cm、壁寄りが径15×50cm・焼成最大層厚5cmを測る。柱穴は壁際床面に支柱穴と考えられるP₁～P₉が検出されているのみである。

P _{No}	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉
径 cm	12×13	10×11	11×12	10×11	12×15	10×12	12×13	11×12	14×15
深さcm	15	10	10	14	10	14	11	11	21

出土遺物（第8～10図、写真図版87～89）

12～36の土器が出土している。これらのうち12～14は床面から、15は床面及びb層埋土下位から、16・17はc層床面上約3cmに浮いて、18～24はb・c層埋土中位から、25～36はa層埋土上位から出土したものである。

12・17・25・26は粗製深鉢形土器である。12は口縁部破片、17は体部上半、25・26はほぼ完形の土器である。17・25の口縁部は内側に反る。25・26の口唇部にはB状突起が配されている。これら土器の地文はいずれも原体 $L < \frac{R}{R}$ の単節斜縄文である。

28・29・33は台付鉢形土器である。28は口唇部に刻目とB突起が配され、体部上半には雲形文が施文されている。29は口唇部にB状突起が規則的に配され、口縁部には沈線間刻目が施されている。体部にはC字文を基調とする文様が施文されている。33は体部下半で地文は $L < \frac{R}{R}$ の単節斜縄文が施されている。

13・14・24は台付鉢形土器の口縁破片と思われるものである。13は口縁部が「<」の字状に短く開くもの、14は口唇部に刻目とB突起が施されているものである。24は口唇部に口縁部隆帯に連続する独特の突起とB状突起を配し、口縁部には沈線間に刺突文が施されている。体部の地文は $L < \frac{R}{R}$ の単節斜縄文である。

15・34は鉢形土器である。15は口縁部に山形状の小突起が規則的に配され、2条の沈線が巡るもので、体部地文は $R < \frac{L}{L}$ 単節斜縄文である。34はほぼ完形に復元された土器で、口縁部に刻目と3条の平行沈線を巡らせ、沈線下に5個のB突起を規則的に配しているもので、体部には $R < \frac{L}{L}$ の単節斜縄文が施されている。18・20・21・22は鉢形土器の口縁部破片、19は体部破片と思われる。

36は坩形を呈する無文の浅鉢形土器である。

27は注口部が欠損した注口土器である。正面口唇部にはB突起を5個配す。体部上半には平行沈線間刻目を上下に巡らせ、この間にC字文が施文されている。

16・23・30・31・32・35は壺形土器である。16は口頸部で、口縁部にB突起を配す。23は体部が球状に脹り、口頸部がほぼ直立するもので、口頸部には隆帯を巡らせその上に突起を配している。体部は無文である。30は口頸部が欠損しているもので、体部には $L < \frac{R}{R}$ 単節斜縄文が施されている。31は口頸部が無文、体部には $L < \frac{R}{R}$ の単節斜縄文が施されている。32は無文である。35は体部が球状に脹るもので、彩色が施されている。

これら出土遺物のうち、14・15・24・27・29・34・35は第V群土器2類に属するものである。

遺構の時期

床面及び埋土から出土している土器から、晩期中葉に位置づけられよう。

HI-1 住居跡

遺 構（第7図、写真図版6）

この住居跡は、北東側約1/3が調査区外にはいる。

平面形は検出された壁面から隅丸方形を呈するものと思われる。規模は開口部径3.7m、底面部径3.5m程度と推定される。埋土は中央部が焼土をブロック状に包含する黒褐色土、壁寄

りが黒褐色土で構成されるが、中位まで耕作により局部的に攪乱を受けている。

壁高は南東壁で16cm、北西壁で21cm、南西壁で22cmである。床面は平坦で比較的やわらかく、中央部がやや凹む。

炉は検出されていない。柱穴はP₁（径20×20cm・深さ37cm）が検出されている。

出土遺物（第11～12図、写真図版90～91）

37～52の土器と53～55の石器が出土している。これらのうち37・55は床面から、38はb層床面上3cmに浮いて、53はb層埋土下位から、39～41はb層埋土中位から、42～52・54は埋土上位から出土したものである。

37はほぼ完形に復元された器高15cmの注口土器である。器形は口頸部が開きぎみに直線的に立ち上がり、体部が上半で脹り、最脹部から底部へ逆台形状にすぼむものである。文様は瘤付土器に施文される入組文ではなく、磨消された三叉文と変形菱形文が主文様を構成し、この2つの文様が自由に区画・施文されているものである。貼瘤は口頸部から体部まで多用され、注口部付け根にも上下左右に4個付されている。器形・貼瘤から見ると後期末葉の様相を呈するが、文様的に見ると晩期の範疇にはいるものである。38は注口土器か壺形土器の体部、43・44は口頸部破片で、38には $L < \frac{R}{R}$ の単節斜縄文が施されている。

42は台付鉢形土器の体部下半で、2個所に透かしが認められる。45は小型の粗製鉢形土器底部で、 $R < \frac{L}{L}$ の単節斜縄文が施されている。

39～41・46～52は粗製深鉢形土器の口縁部破片である。40・41・46～49・51は口縁部が折り返し状に内側に肥厚する。48と52は同一個体である。

53の石鏃は凹基無茎鏃で、両面から入念に刃部剝離調整が施されている。54のスクレーパーは肉厚で両面周縁に刃部剝離調整が施され、長軸両先端は尖るものである。55の磨石は平面形が楕円形を呈するもので、全面が研磨されているものである。

これら出土遺物のうち、37は第IV群土器の5類に属する土器である。

遺構の時期

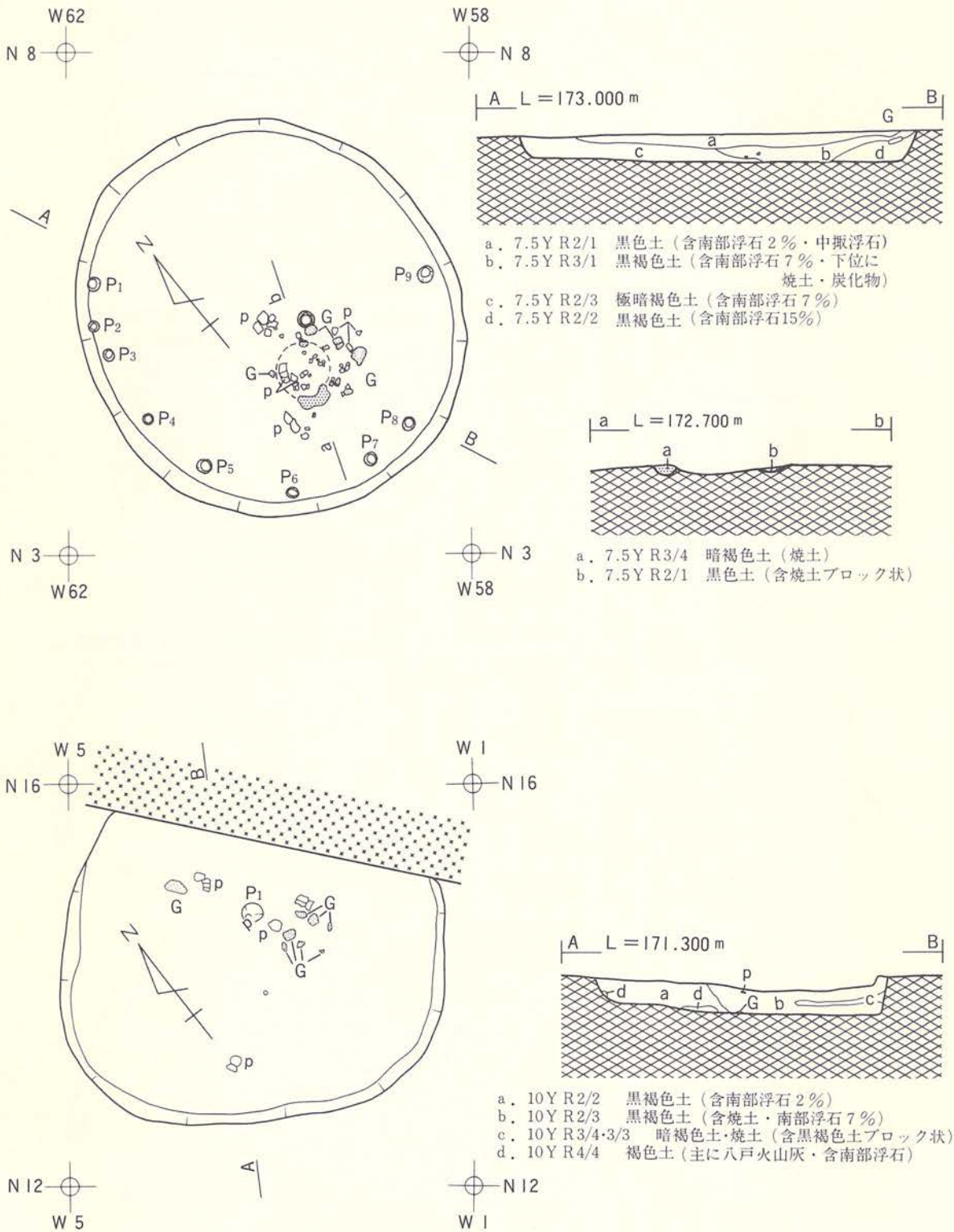
床面から出土している土器から、第IV群5類期に位置づけられる（P216～P219参照）。

H I—2 住居跡

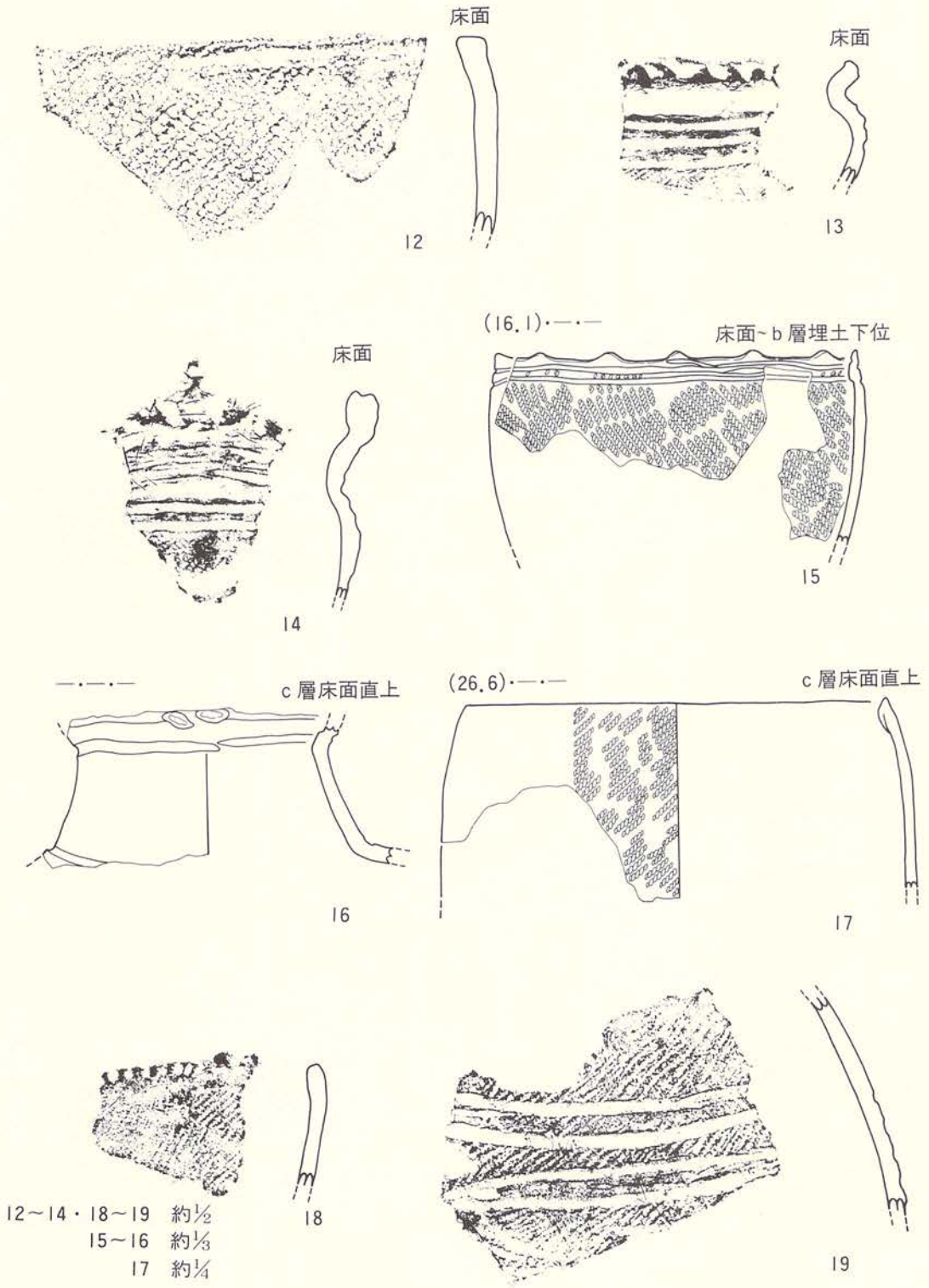
遺 構（第13図、写真図版7～8）

この住居跡は北東側約2/3が調査区外にはいる。床面には列を異にする柱穴列が3列に及び、床面下からさらに1棟の住居跡が検出され、計4棟の住居跡が存在する。これらの住居跡を、H I—2a住居跡・H I—2b住居跡・H I—2c住居跡・H I—2d住居跡と呼称し記述する。

新旧関係については、H I—2d住居跡が最も古く、この住居跡を埋め戻し、H I—2c住居跡を構築し、その後H I—2b住居跡、さらにH I—2a住居跡の順に拡張したものである。い

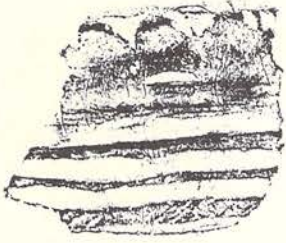


第7図 F I -2・H I -1住居跡(平・断面S = 1/60, 炉断面S = 1/30)



第8図 F I - 2 住居跡出土遺物(遺物番号12~19)

24.9・8.7・32.3



20

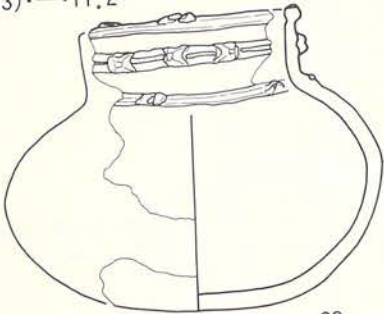


21



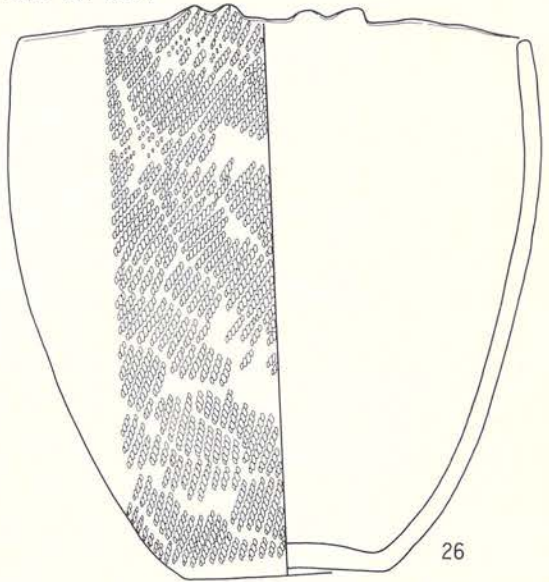
22

(8.3)・—・11.2



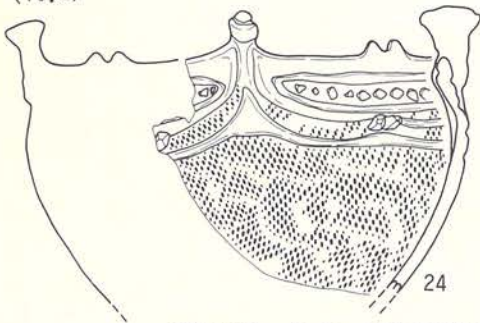
23

19.4・7.7・21.7



26

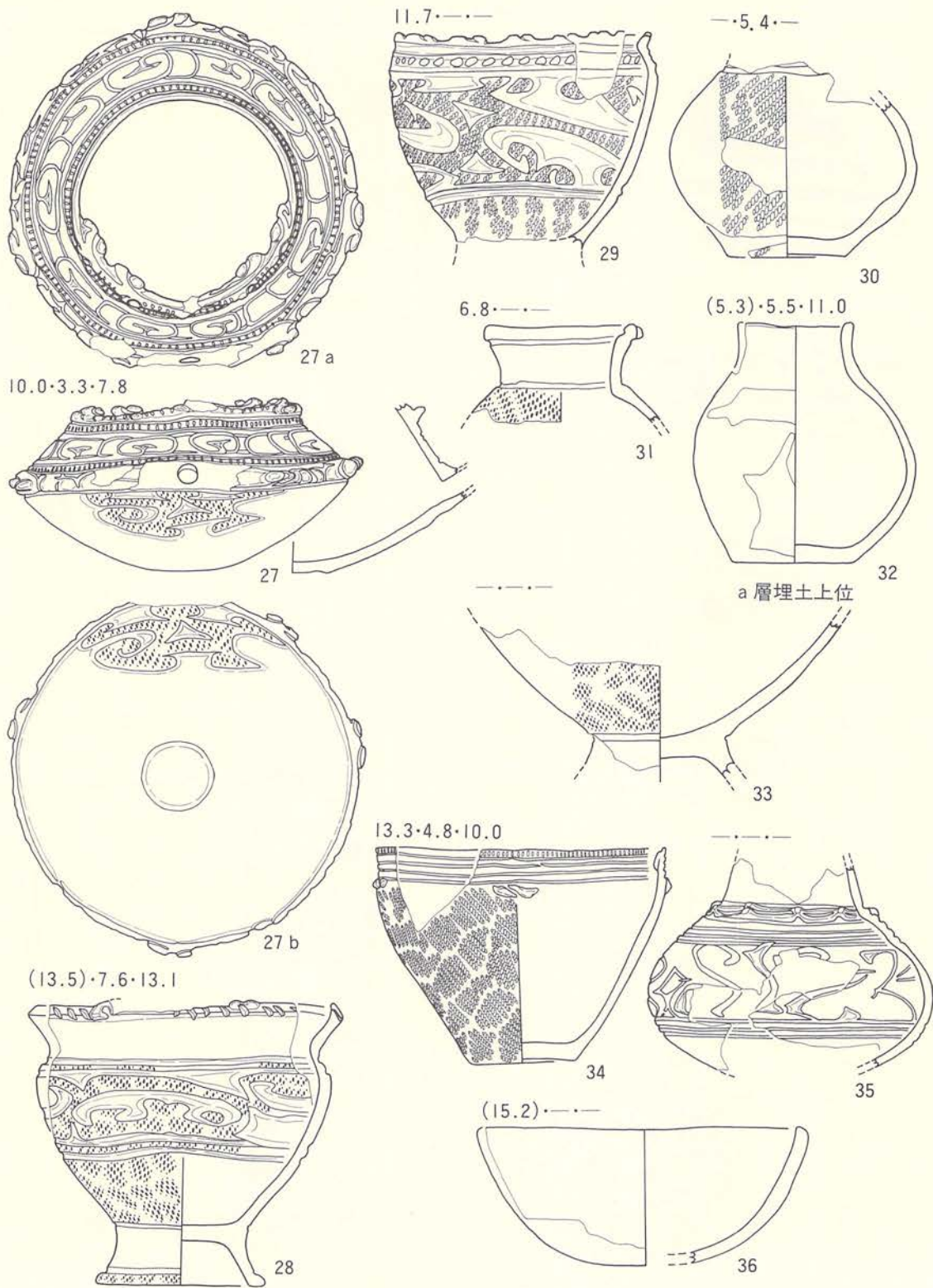
(18.0)・—・—



24

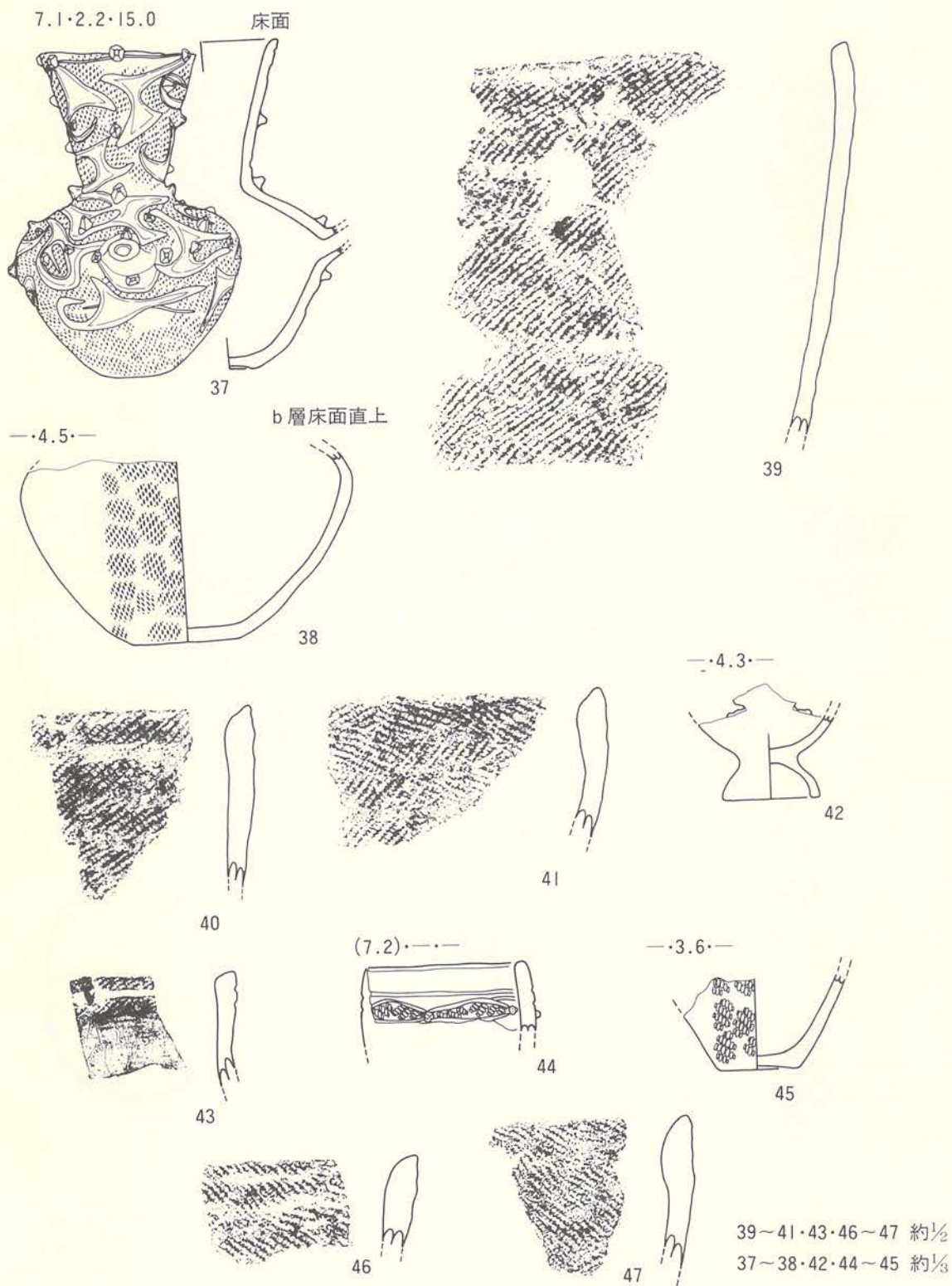
20-22 約 $\frac{1}{2}$
23-26 約 $\frac{1}{3}$

第9図 F I - 2 住居跡出土遺物(遺物番号20-26)

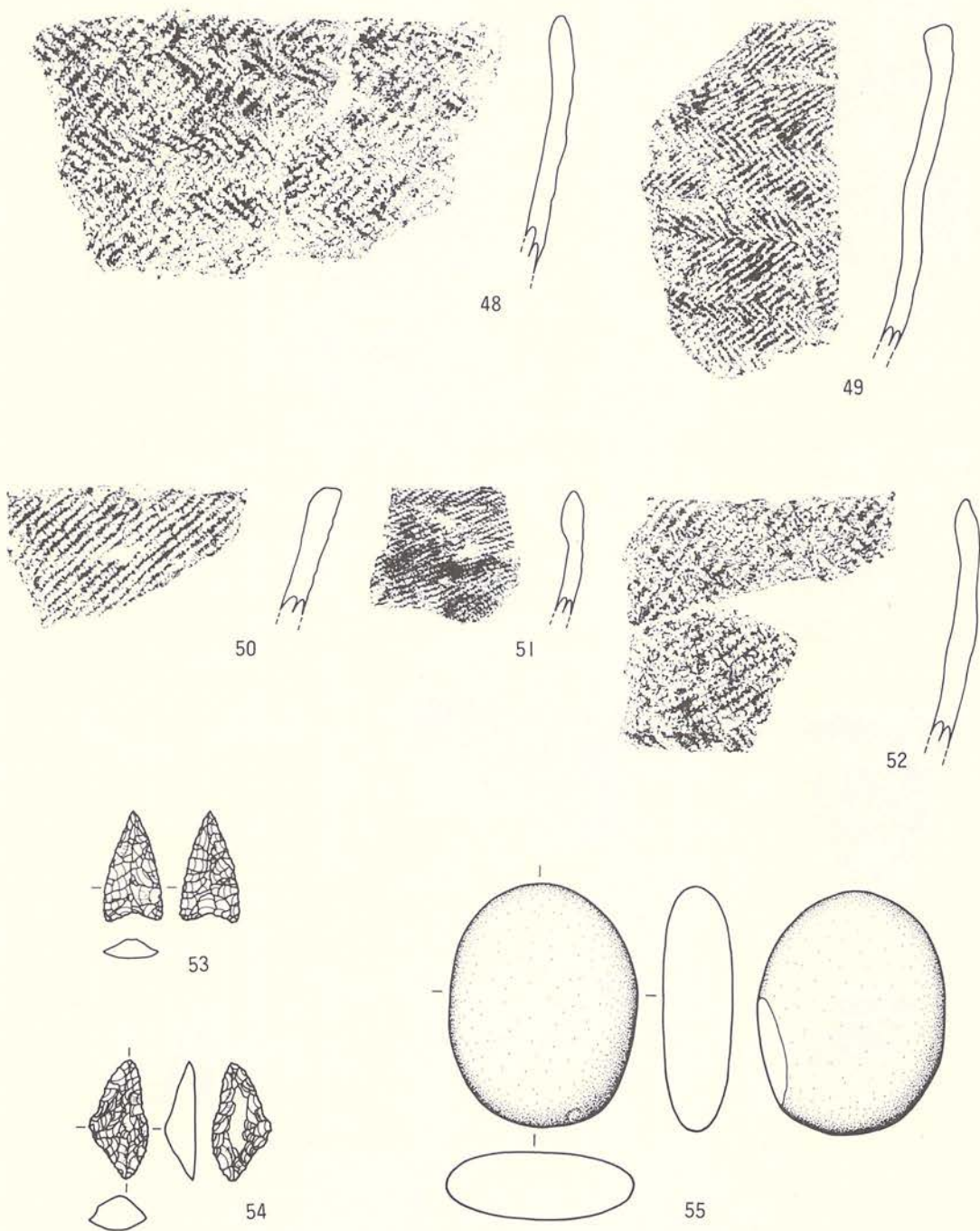


第10図 F I - 2 住居跡出土遺物(遺物番号27~36)

27~36 約 $\frac{1}{3}$



第11圖 HI-1住居跡出土遺物(遺物番号37~47)



48~54 約 $\frac{1}{2}$
 55 約 $\frac{1}{3}$

第12図 HI-1 住居跡出土遺物(遺物番号48-55)

ずれの住居跡にも炉は検出されていない。

H I—2a住居跡

平面形は円形を呈する。規模は検出された壁面から推定して、開口部径8m前後の住居跡と思われる。埋土は上位が耕作によって攪乱されている。中位より下位は中央部と壁際が色調のやや異なる黒褐色土で構成される。

壁高は南東壁で55cm、北西壁で84cm、南西壁で63cmである。床面は第V層面で堅くしまり、凹凸が認められる。壁際から中央部にむかって約1.5mの範囲には、褐色土及び灰白色シルト質土で貼り床が施されているが、この住居跡に伴う柱穴部分には認められない。西側床面には開口部径80×85cm、底面部径50×70cm、深さ19cmの規模をもつピットが検出されている。このピットはH I—2d住居跡に伴うピットの真上に構築されているもので、埋土は黒色土・暗褐色土で構成され、底面は床面の貼り床に使用された同質のシルト質土で固められている。柱穴は壁際床面のP₁～P₂₆で構成される。

P _{No}	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃
径 cm	9×9	16×16	12×13	13×14	14×16	13×16	8×8	12×14	15×16	14×18	8×15	6×9	10×12
深さcm	21	17	33	15	22	20	17	19	22	37	35	33	29

P _{No}	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄	P ₂₅	P ₂₆
径 cm	11×13	10×12	10×14	10×11	10×10	18×19	16×17	18×21	12×15	14×14	15×17	16×18	9×10
深さcm	33	18	24	18	28	19	21	41	21	24	21	23	18

H I—2b住居跡

この住居跡はH I—2a住居跡の貼り床下から検出された柱穴列のP₂₉～P₄₀で構成されるものである。これらの柱穴列が壁際床面にあったものと仮定すると、この住居跡は開口部径7m前後の規模をもつものと思われる。

P _{No}	P ₂₇	P ₂₈	P ₂₉	P ₃₀	P ₃₁	P ₃₂	P ₃₃	P ₃₄	P ₃₅	P ₃₆	P ₃₇	P ₃₈	P ₃₉	P ₄₀
径 cm	13×13	11×13	15×17	19×22	16×16	13×13	13×13	16×16	9×15	10×10	18×18	18×18	13×15	12×15
深さcm	24	18	33	57	33	35	31	30	25	16	15	18	35	29

H I—2c住居跡

この住居跡はH I—2b住居跡同様、貼り床下から検出された柱穴列のP₄₆～P₅₃で構成されるものである。これらの柱穴列が壁際床面にあったものと仮定すると、この住居跡は開口部径5m前後の規模をもつものと思われる。

P ₄₁	P ₄₂	P ₄₃	P ₄₄	P ₄₅	P ₄₆	P ₄₇	P ₄₈	P ₄₉	P ₅₀	P ₅₁	P ₅₂	P ₅₃	P ₅₄
16×18	8×15	12×13	14×15	15×17	23×23	16×18	14×14	9×11	11×14	13×16	13×15	13×14	15×15
17	29	16	42	38	32	44	35	22	41	40	31	34	26

H I—2d住居跡

この住居跡はH I—2c住居跡床面下から検出されたもので、H I—2a住居跡床面から25cmの段差をもって床面となる。平面形は円形を呈する。規模は開口部径5m前後の規模をもつものと推定され、H I—2c住居跡とほぼ同規模であろう。H I—2a住居跡床面からの埋土は、南部浮石を包含する黒褐色土で構成される。床面は第VI層面で平坦である。西壁下には開口部径80×100cm・底部径85×100cm・深さ48cmの規模をもつフラスコ形ピットが検出され、壁からやや張り出す。このピットの埋土は主に黒色土で構成され、壁際に極暗褐色土・黒褐色土がはいる。柱穴はP₁（径20×33cm・深さ15cm）、P₂（径25×33cm・深さ43cm）が検出されている。

以上4棟の住居跡について記述したが、H I—2a住居跡に伴うピットの底面貼り床下には一時期使用されたと考えられる底面が確認されており、恐らくH I—2b住居跡に伴うピットの底面であったものと思われる。

出土遺物（第14～17図、写真図版92～95）

遺物はH I—2d住居跡から56～60の土器が、H I—2a住居跡から61～98の土器と99～101の石器が出土している。

〈H I—2d住居跡出土遺物〉

56・57は床面から、58～60はg層埋土上位から出土したものである。56は体部上半にくびれをもつ深鉢形土器で、帯縄文主体の文様が施文されている。地文はL< $\frac{R}{R}$ の単節斜縄文である。57は無文の浅鉢形土器である。58は深鉢形土器の口縁部破片で、地文にL< $\frac{R}{R}$ の単節斜縄文が施されている。59・60は注口土器か壺形土器の背部破片と思われるもので、いずれにも弧帯状入組文が施文されている。これらの土器のうち、床面から出土した56・57は第IV群土器1～2類に、埋土から出土した60は3類に属するものと思われる。

〈H I—2a住居跡出土遺物〉

61はピット底面から、62は床面から、63～81はc層埋土から、82～101はa・b層埋土から出土したものである。

61の深鉢形土器の器形は、体部中位にくびれをもち、くびれから口縁部に直線的に開くものである。口縁は波状を呈し、口唇部に刻目が施されている。文様は口縁部直下から左下がりの入組文と磨消縄文が施されている。この入組文と磨消部分を見ると、入組文が主たる文様なのか、磨消部に主たるものを求めたのか、判断しかねるものである。地文はL< $\frac{R}{R}$ の単節斜縄文である。貼瘤はない。

62・63は粗製鉢形土器である。62は口縁部直下に浅いくびれをもつ。地文は62がR< $\frac{L}{L}$ 、63がL< $\frac{R}{R}$ の単節斜縄文である。66は鉢形土器の口縁部破片と思われるもので、細い帯状入組文が施文されている。

64・72・86は壺形土器、65・68・73・78・79・84・85は壺形土器か注口土器の破片と思われるものである。72は無文で、背部にB突起が配されている。

71・83は注口土器である。71は注口部が欠損したもので、C字文が画一化されたと考えられる文様が施文されている。83は無文である。

67・69・70・74～77・81・82・87～98は深鉢形土器である。81は口唇部にB突起が配されているもの、82の口縁部には玉抱き三叉文が施文されているもの、85・87・88・89には弧帯状入組文が施文されているものである。

99の石鏃は凹基無茎鏃で、両面から刃部剝離調整が施されている。100の縦型石匙は細身・長身で、片面両側縁に刃部剝離調整が施されている。101の磨製石斧は両凸刃・円刃で基部が欠損しているものである。

これらの出土遺物のうち、61・66は第IV群土器の4類、68・73・85・87・88は3類に、また72・82は第V群土器の1類、71は2類に属するものであろう。

遺構の時期

H I—2d住居跡は床面から出土している土器から、第IV群2類期に位置づけられ、H I—2a住居跡は、第IV群4類期に位置づけられよう。

H I—4住居跡

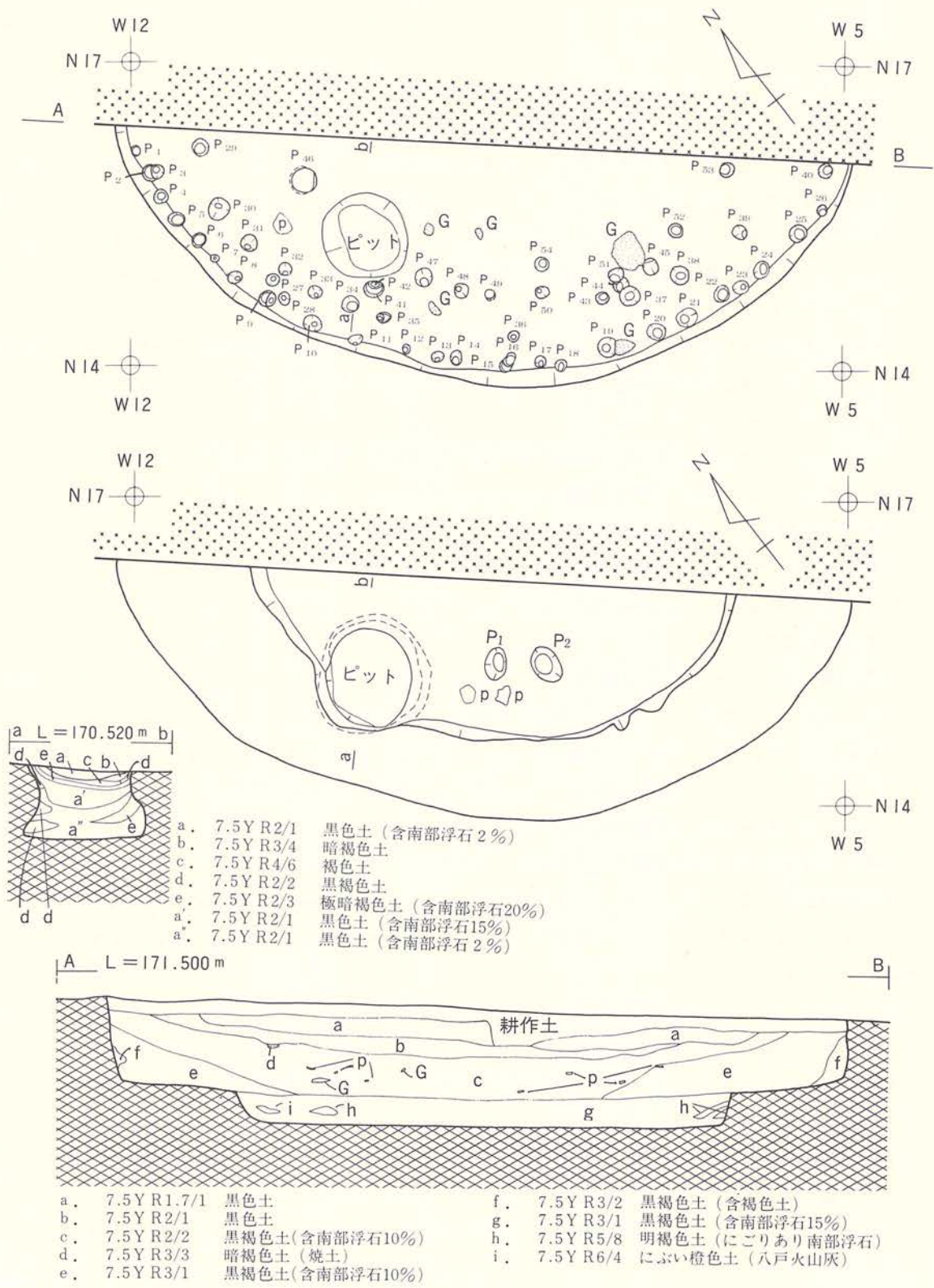
遺 構（第18～19図、写真図版9～11）

この住居跡の平面形は、北西から南東に長軸をもつ楕円形を呈する。規模は、開口部径5.3×4.9m、床面部径5.1×4.5mである。埋土は、上位が黒色土で土器や礫を多数包含している。中位が炭化物層の黒色土と黒褐色土、下位が黒色土、壁寄りが完形土器を包含する中冪浮石主体の黒色土と黒褐色土で構成される。なお、a層中(b層の上方)に灰様のものが含まれている。

壁は、北東～東部が明瞭でない。壁高は、東壁23cm、西壁39cm、南壁47cm、北壁38cmである。床面は南部浮石層～黒褐色土層でしまりがなく、小刻みな凹凸がある。床面には完形の壺形土器や注口土器があるが、これは、炉を中心に半径1.8mの円周に載る形でe層中に出土するものの一部である。

炉は地床炉で、床面中央部に位置する。規模は78×75cmで不整形円形を呈する。その周囲には炭化物を含む黒褐色土が入る。炉床面はやや凹んでおり、焼成層厚は12cmに及ぶものである。柱穴はP₁～P₄₇が検出されている。柱穴埋土はいずれも黒色～黒褐色土である。これらのうち、支柱穴を構成するものは、台形の配置と推定してP₃₇—P₄₂—P₄₄—P₄₅と思われる。P₁～P₃₀、P₃₄～P₃₆は支柱穴である。P₆～P₂₉までほぼ1個おきに深くなっている。P₃₁～P₃₃は他の壁柱穴と比較して規模が大きいことから、支柱穴と関係があるものかもしれない。

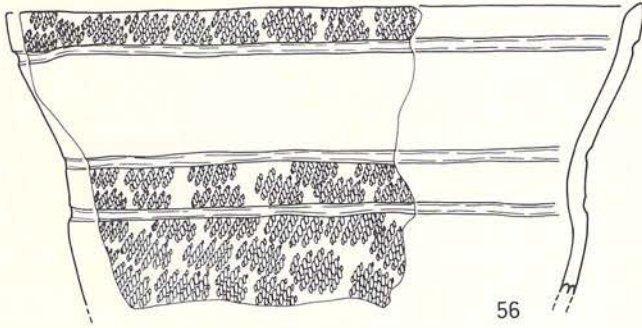
住居跡内東北東壁寄りに2条の溝状の掘り込みが平行してある。埋土は黒色土で、深さが25



第13図 HI-2住居跡(平・断面・ピット断面 $S = \frac{1}{60}$)

(24.0) ·····

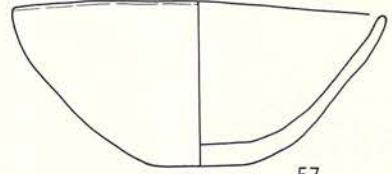
床面



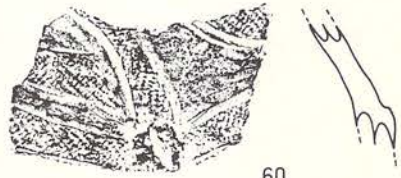
56

14.1・3.6・6.3

床面



57

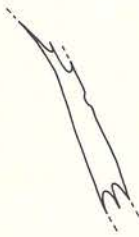
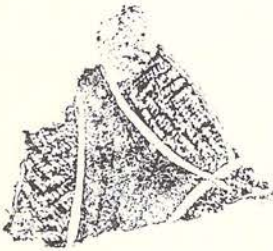


60

56~60、H I - 2 d 住居跡出土



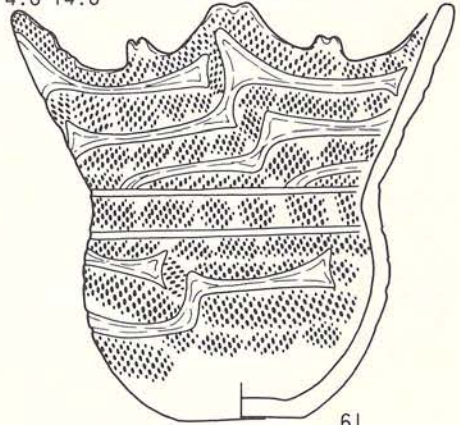
58



59

(16.4)・4.6・14.8

H I - 2 a 住 ビット底面

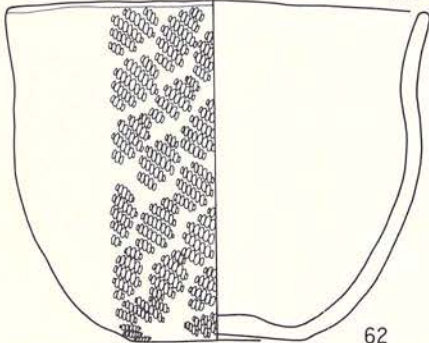


61

61~101、H I - 2 a 住居跡出土

16.0・6.5・13.0

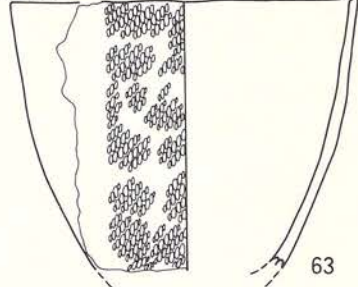
床面



62

62・63、H I - 2 a 住居跡出土

(13.1) ·····

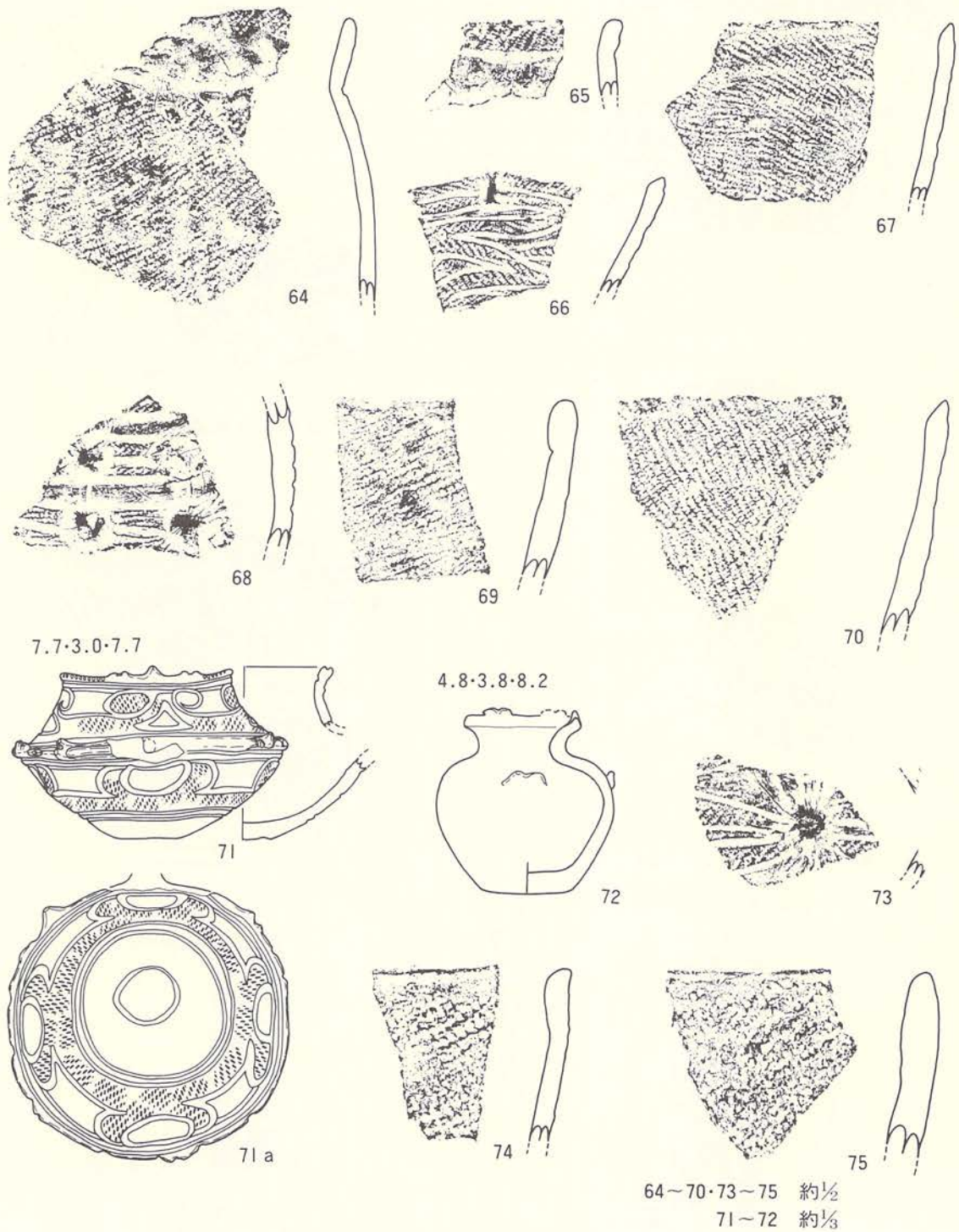


63

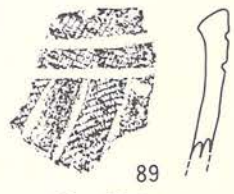
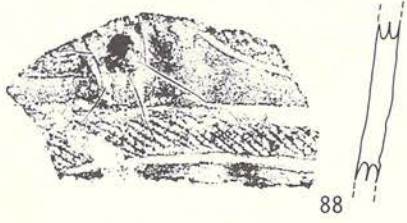
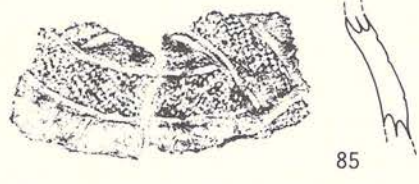
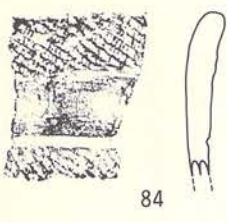
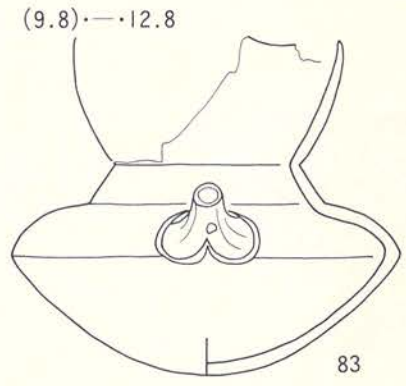
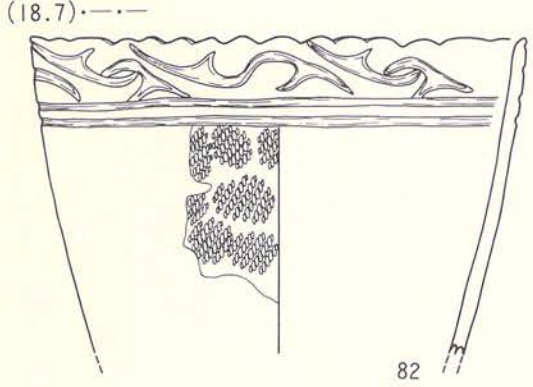
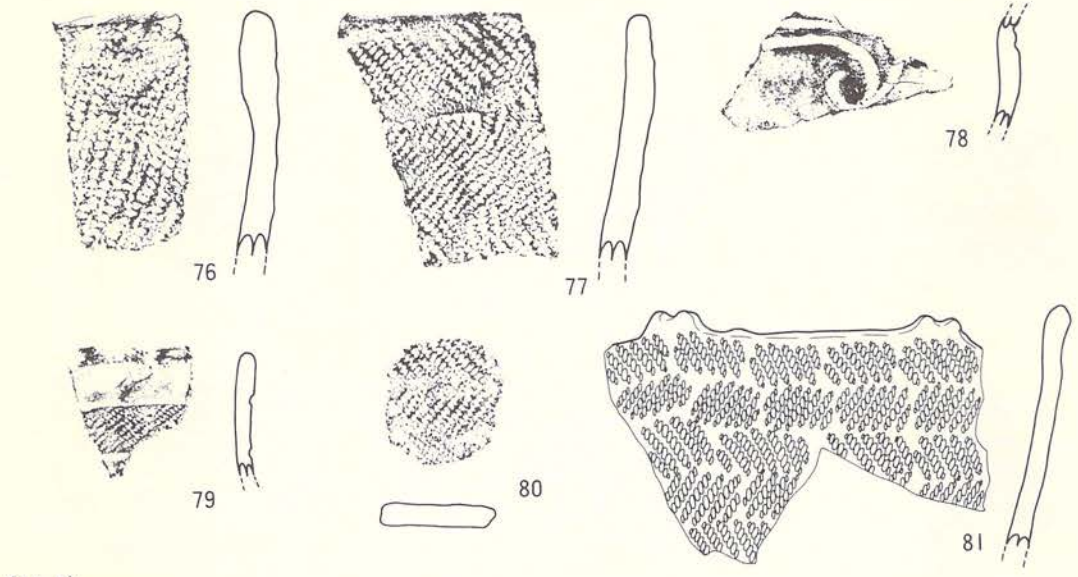
58~60 約 $\frac{1}{2}$

56~57・61~63 約 $\frac{1}{3}$

第14図 H I - 2 住居跡出土遺物(遺物番号56~63)

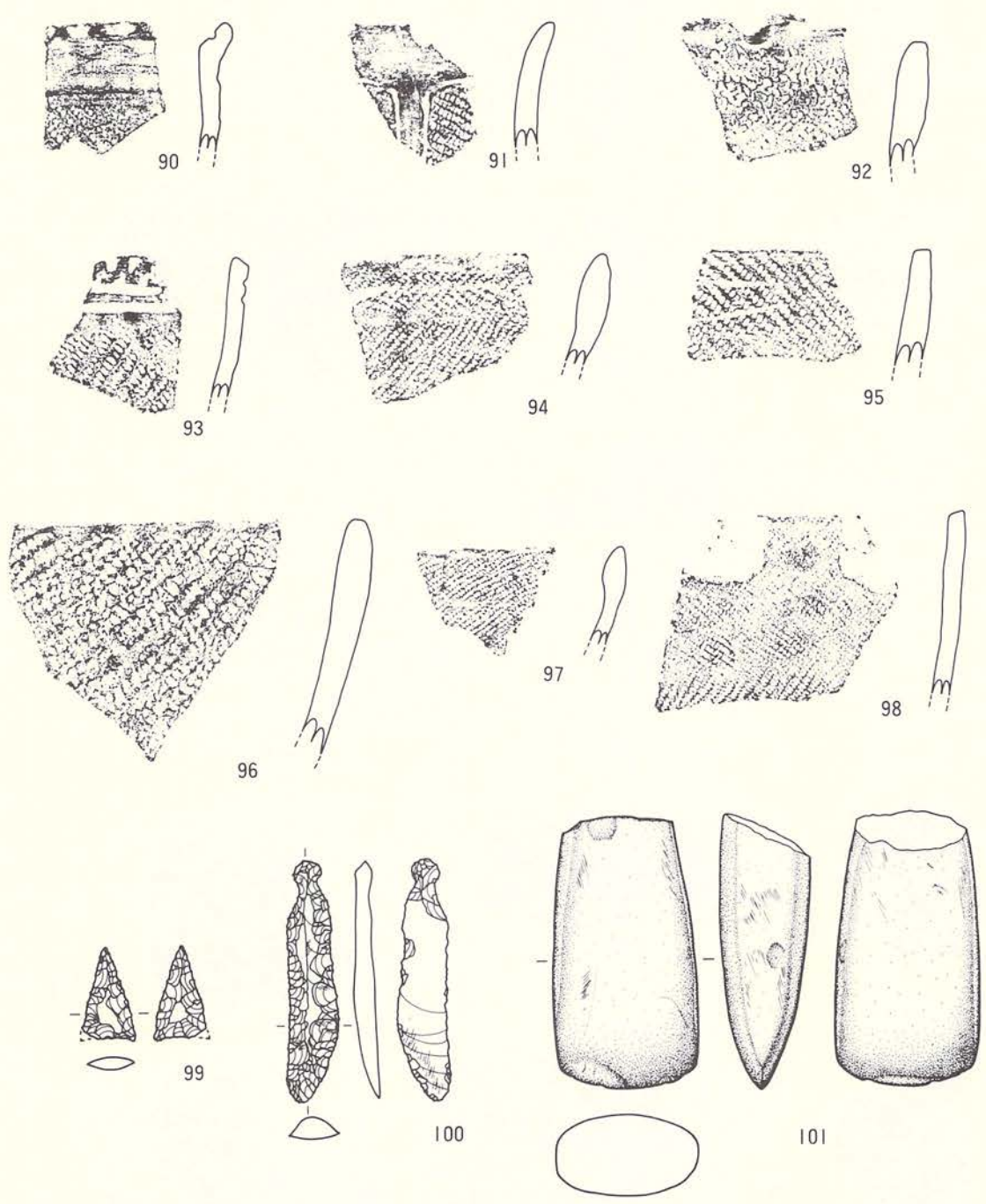


第15图 HI-2住居跡出土遺物(遺物番号64-75)



76~80·84~89 約 $\frac{1}{2}$
81~83 約 $\frac{1}{3}$

第16図 H I - 2 住居跡出土遺物(遺物番号76~89)



90~101 約 $\frac{1}{2}$

第17図 HI-2 住居跡出土遺物(遺物番号90~101)

P _{No}	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃
径 cm	16×16	11×11	12×11	12×12	10×9	10×9	10×8	7×7	11×6	10×10	12×7	10×7	11×6
深さ cm	19	11	12	11	11	15	9	21	14	18	10	20	9

P _{No}	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄	P ₂₅	P ₂₆
径 cm	6×6	10×6	8×7	10×7	11×11	13×11	12×9	9×7	17×11	9×8	10×8	10×9	9×7
深さ cm	12	20	13	11	17	18	7	8	19	13	17	15	10

P _{No}	P ₂₇	P ₂₈	P ₂₉	P ₃₀	P ₃₁	P ₃₂	P ₃₃	P ₃₄	P ₃₅	P ₃₆	P ₃₇	P ₃₈	P ₃₉
径 cm	8×7	11×10	10×8	15×11	21×21	34×31	34×31	16×16	12×11	12×12	38×34	15×14	14×13
深さ cm	10	11	17	17	34	49	45	34	28	30	22	27	17

P _{No}	P ₄₀	P ₄₁	P ₄₂	P ₄₃	P ₄₄	P ₄₅	P ₄₆	P ₄₇
径 cm	15×13	15×14	24×18	9×8	29×23	14×12	14×14	16×14
深さ cm	16	20	25	14	20	18	35	32

cm、幅20cm、長さ70cm、さらに内側へ深さ15cm、幅13cm、長さ20cmの規模で延びているものである。この掘り込みは、斜面下方側であり、住居跡の短軸方向とほぼ一致するもので、出入口施設につながるものと思われる。また、炉の北側床面には、開口部径55×43cm、底部径48cm、深さ50cmの規模をもつピットが検出されている。この埋土はすべてやわらかく、下位は焼土が主体で炭化物を含むものである。

出土遺物（第20～25図、写真図版95～100）

102～135の土器と、136～141の石器が出土している。これらのうち、102～106がe層の範囲にはいる床面から、107～115・136・137・140・141がe層埋土下位から、116～123・136・137がc～d層にかけて、124～135・138・139が主にa層から出土したものである。

102はほぼ完形に復元された器高22.3cmの注口土器である。器形は口頸部が長く、体部上半に最脹部をもち、最脹部から底部へスマートにすぼむ。底面は狭く、落ちつきが悪い。文様は口頸部に浮きぼりにした帯縄文を4条巡らし、その上に規則的に瘤を付している。背部には比較的細い弧帯状入組文が施文されている。注口部付け根下部には瘤を付した痕跡が認められる。地文には入組文に $L < \frac{R}{R}$ の単節斜縄文が充填され、体部下半には $L < \frac{R}{R}$ と $R < \frac{L}{L}$ の横位の羽状縄文が施されている。

103・104は完形で出土した壺形土器である。103は器高17.9cmのもので、体部が球状に脹り、口頸部が外反する。地文は原体 $L < \frac{R}{R}$ の横・縦及び斜め回転である。104は器高26cmのもので、体部上半が脹り、口頸部が直立するものである。文様は口頸部から体部上半まで帯縄文が施文されている。地文は原体 $L < \frac{R}{R}$ と $R < \frac{L}{L}$ の細い縄を交互に施文し羽状縄文を作り出しているが、流れに一定性を欠き、横位の羽状となる部分と縦位の羽状となる部分が見られる。103・104と

も底面は落ちつきが悪い。

105・106は深鉢形土器である。105には無節斜縄文が、106には $L < \frac{R}{2}$ の単節斜縄文が施されている。

107は完形で出土した台付鉢形を呈する器高12.5cmの注口土器である。器形は波状口縁を呈し、体部上半に浅いくびれをもつ。文様は体部に弧帯状入組文が施文されている。瘤は口縁部から体部下半まで付され、注口部付け根下部にも付される。地文は $R < \frac{L}{2}$ の単節斜縄文である。

108は碗状を呈する鉢形土器で、粗雑に区画された弧帯状入組文が施文されている。瘤は口縁部と体部に付されている。地文は $L < \frac{R}{2}$ の単節斜縄文である。

112の台付鉢形土器の器形は、台付け根から口縁部までほぼ直線的に開くもので、地文は原体 $L < \frac{R}{2}$ の単節斜縄文が施されている。

109～111・113～115は深鉢形土器である。109・110には原体 $L < \frac{R}{2}$ と $R < \frac{L}{2}$ の羽状縄文が施されている。113～115は体部にくびれをもつものである。113は波状口縁を呈し、体部に弧帯状入組文が施文されている。114は体部破片で左下がり入組文が施文されているものと思われる。115は口縁部破片である。116はくびれをもつ深鉢形土器の体部破片で、帯状入組文が施文されているものと思われる。

118・129は鉢形土器と思われるものである。118は波状口縁を呈し、口縁部に曲線的沈線で三叉文状の文様が施文されている。129は口唇部にB状突起を配し、体部には三叉文を内包した変形菱形文が施文されている。

131・132は鉢形土器か台付鉢と思われるもので、131には大腿骨文、132にはX字文が施文されている。

133は注口土器でX字文が施文されている。

136～139の石鏃はいずれも凸基有茎鏃で、両面から刃部剝離調整が施されている。140の磨石は平面形が楕円形を呈するもので、ほぼ全面が研磨されている。141の石皿は片面に擦痕が認められ、中央がやや凹状を呈するものである。

これら出土遺物のうち、102～110・112・113は第IV群土器の3類に属するものである。また114～116も3類相当と思われるが、破片であり断定できない。118・124・126・128・129は第V群土器の1類に、131・132・133は2類に属する土器であろう。

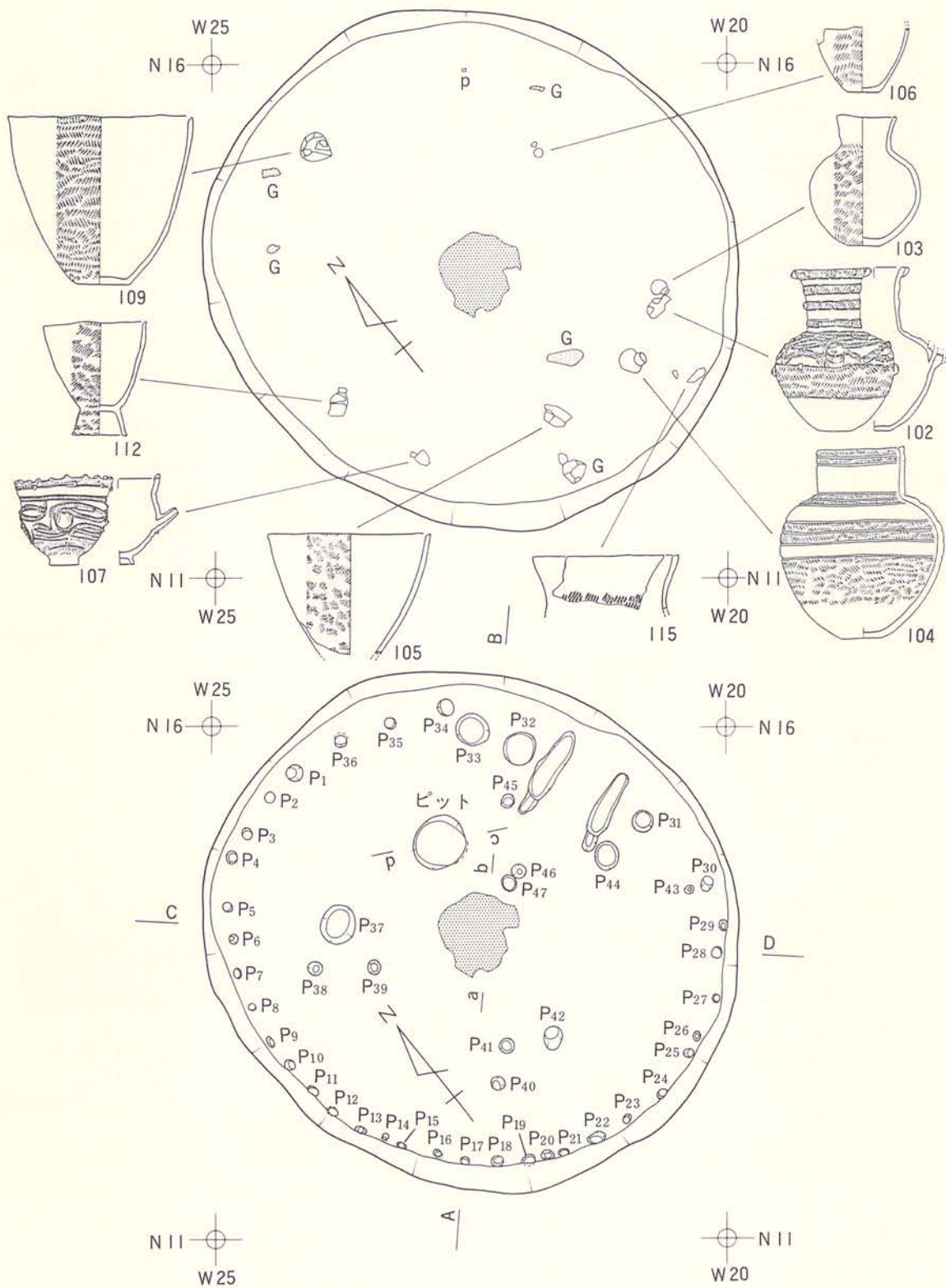
遺構の時期

床面からe層にかけて出土した土器から、第IV群3類期に位置づけられる。

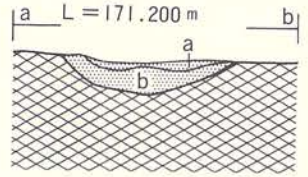
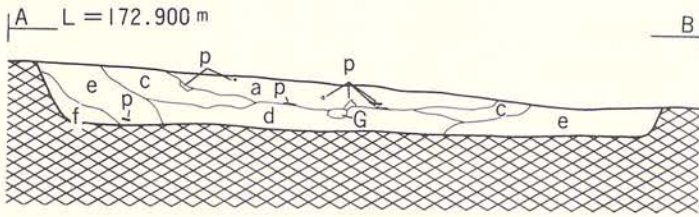
H I — 5 住居跡

遺 構 (第19図、写真図版11)

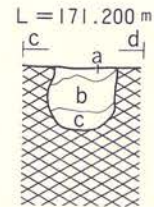
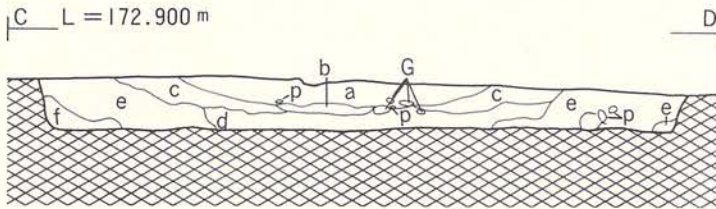
この住居跡の平面形は南北に長軸をもつ楕円形を呈する。規模は開口部径2.8×3.2m、床面



第18図 HI-4住居跡・遺物出土状況(平面 $S = \frac{1}{60}$)

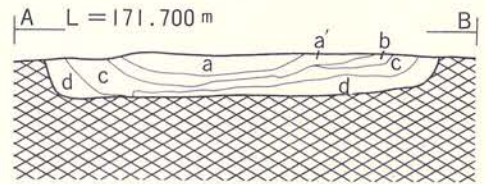
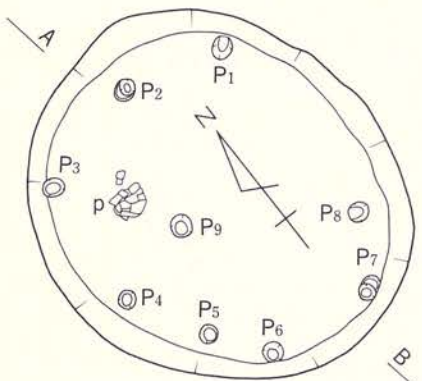
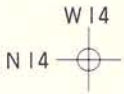


- a. 10Y R2/2 黑褐色土 (含烧土)
- b. 5Y R5/8 明赤褐色土 (烧土)

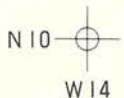


- a. 7.5Y R1.7/1 黑色土 (含南部浮石2%·炭化物少量)
- b. 10Y R1.7/1 黑色土 (含南部浮石1%·炭化物)
- c. 10Y R3/1 黑褐色土 (含南部浮石5%·炭化物)
- d. 7.5Y R2/1 黑色土 (含南部浮石3%·炭化物少量)
- e. 10Y R2/1 黑色土 (含南部浮石2%·炭化物)
- f. 7.5Y R2/2 黑褐色土 (含南部浮石3%)

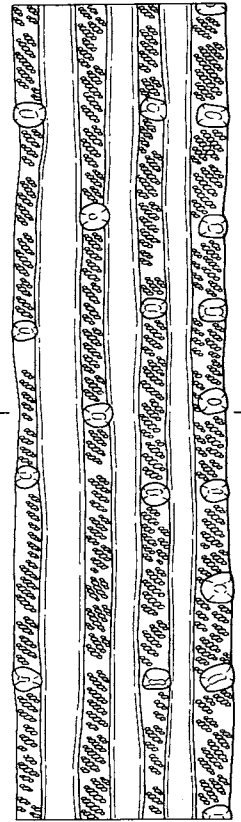
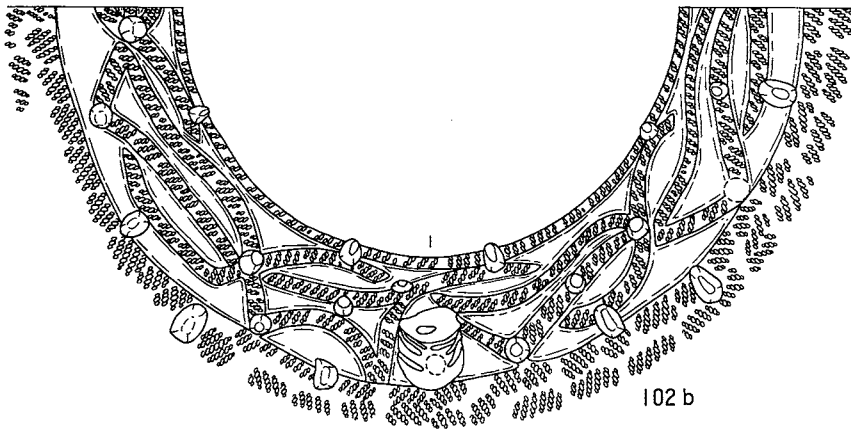
- a. 7.5Y R2/1 黑色土 (含南部浮石2%)
- b. 10Y R4/6 褐色土 (含10Y R2/2黑褐色土)
- c. 5Y R2/2-2/3 黑褐色土·極暗褐色土 (主に烧土·含炭化物)



- a. 7.5Y R2/1 黑色土 (含南部浮石3%)
- a'. 7.5Y R2/1 黑色土 (含南部浮石7%·炭化物)
- b. 7.5Y R2/3 極暗褐色土 (含南部浮石10%)
- c. 7.5Y R5/6 明褐色土 (汚れた南部浮石層)
- d. 7.5Y R1.7/1 黑色土 (含南部浮石7%·炭化物多量)

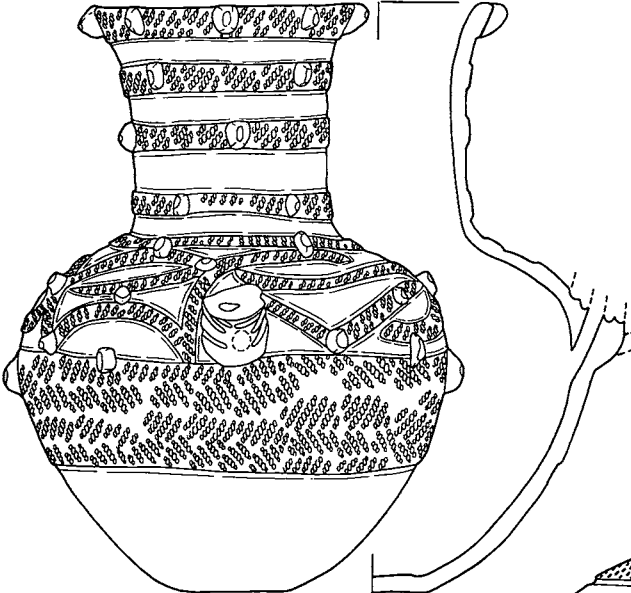


第19図 HI-4·HI-5住居跡 (断面 S = 1/60, 炉断面 S = 1/30, 平面 S = 1/60)



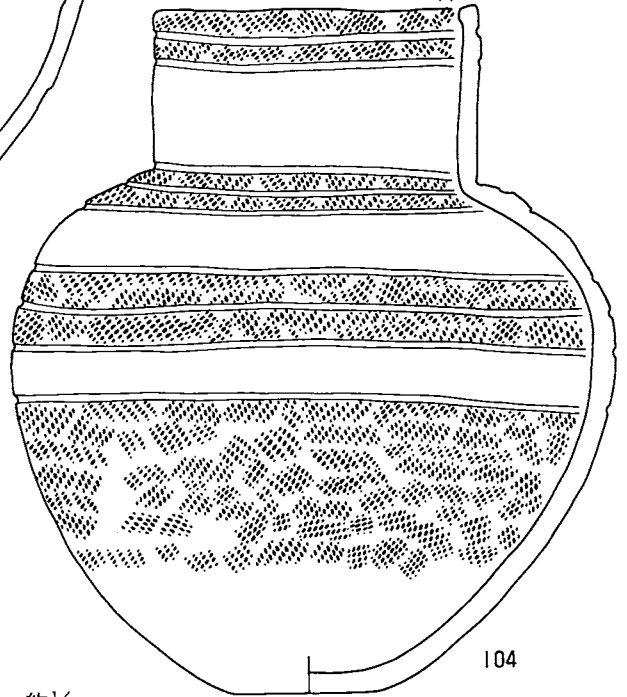
9.8・4.0・22.3

床面



12.3・5.5・26.0

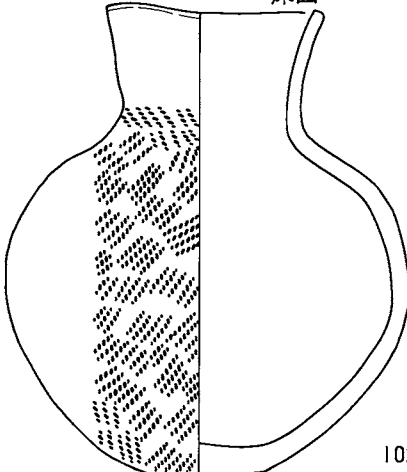
床面



8.2・4.0・17.9

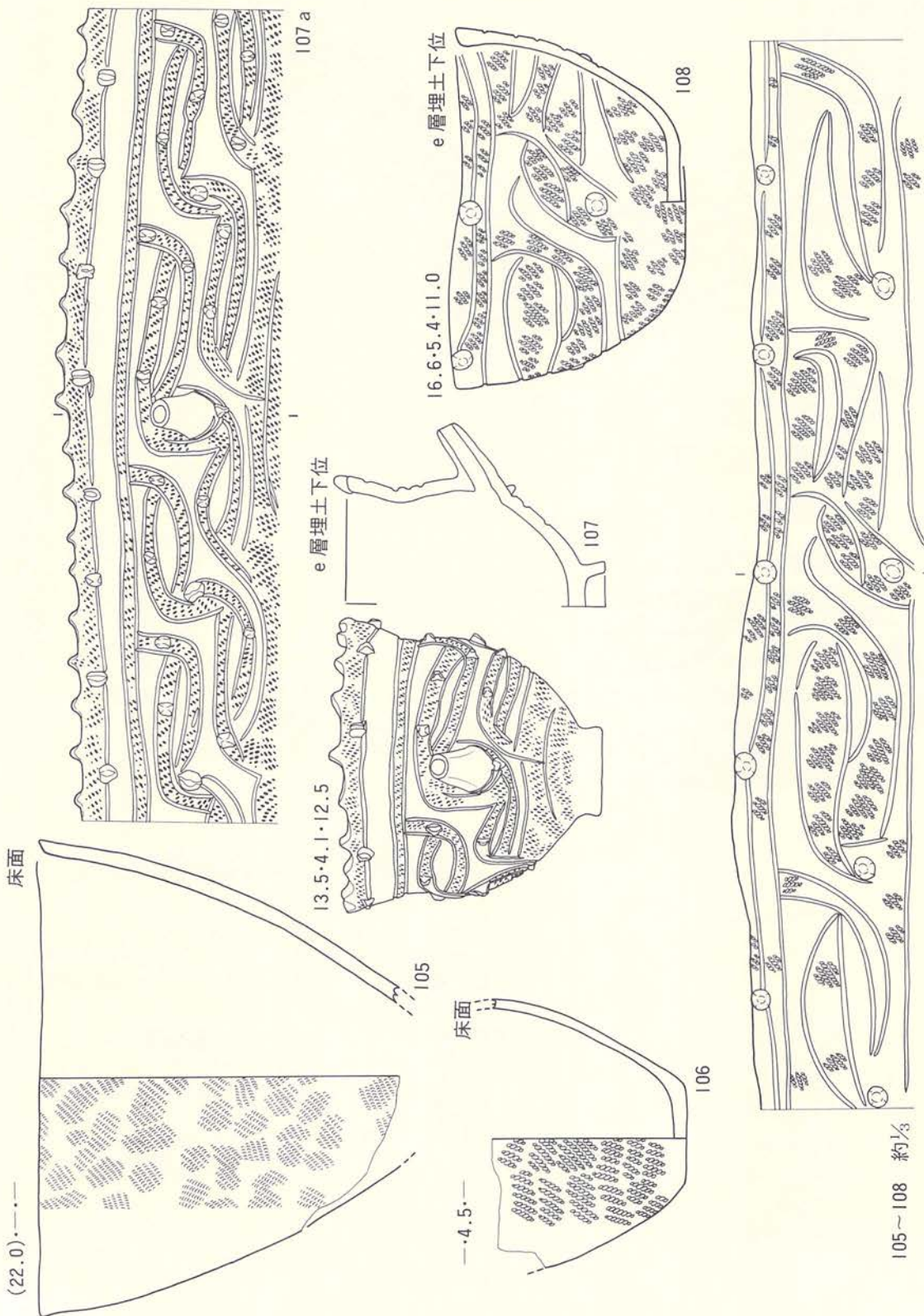
床面

102



102~104 約 $\frac{1}{3}$

第20図 HI-4 住居跡出土遺物(遺物番号102~104)

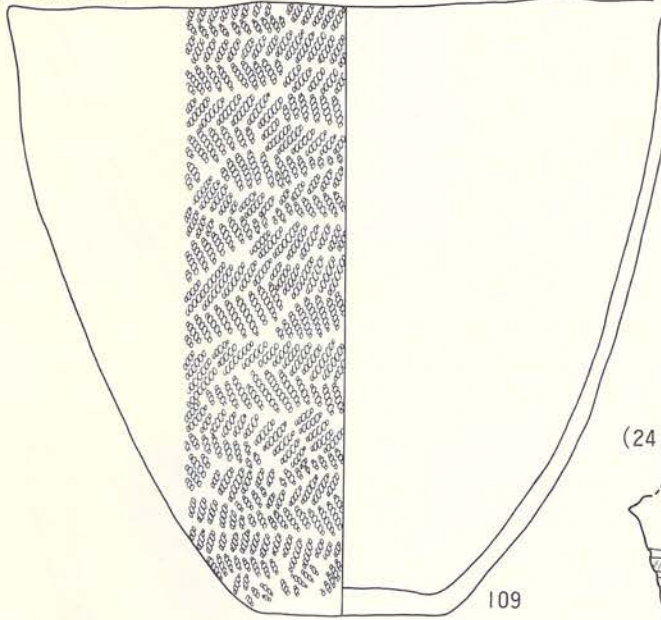


第21図 H I - 4 住居跡出土遺物(遺物番号105~108)

108 a

25.1・6.8・23.5

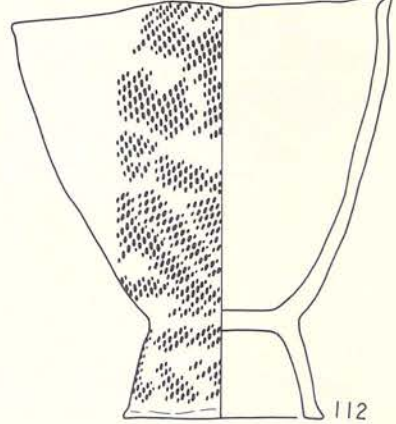
e層埋土下位



109

14.4・7.6・15.9

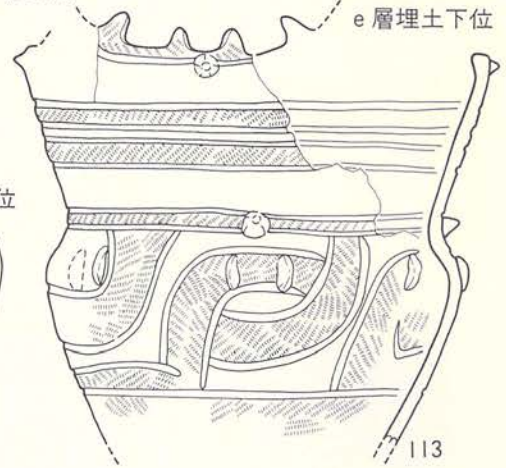
e層埋土下位



112

(24.0) ·····

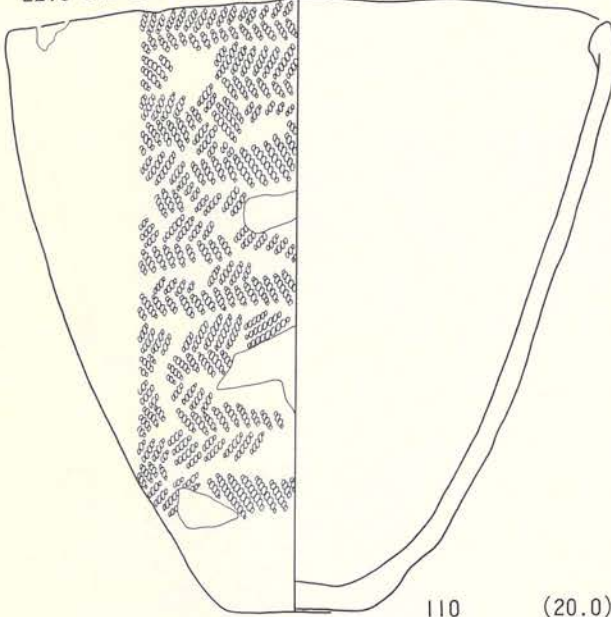
e層埋土下位



113

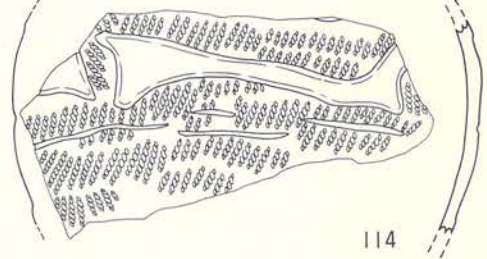
22.8・5.0・23.2

e層埋土下位



110

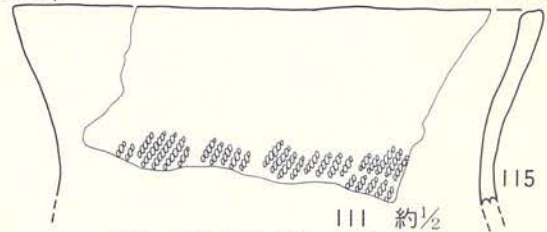
e層埋土下位



114

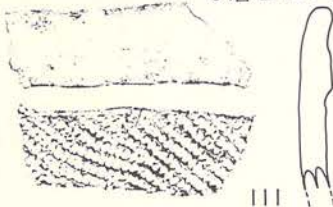
(20.0) ·····

e層埋土下位



115

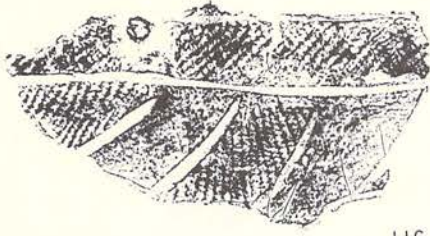
e層埋土下位



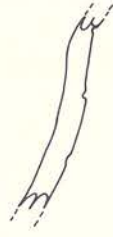
111

111 約 $\frac{1}{2}$
 109~110・112・114~115 約 $\frac{1}{3}$
 113 約 $\frac{1}{4}$

第22図 HI-4 住居跡出土遺物(遺物番号109~115)



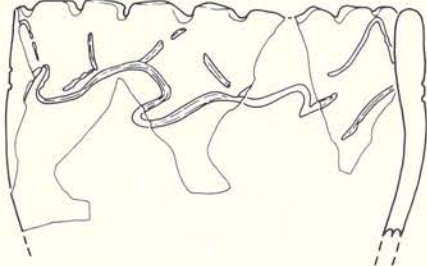
116



117



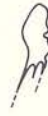
(14.7) ·····



118



119



120



121



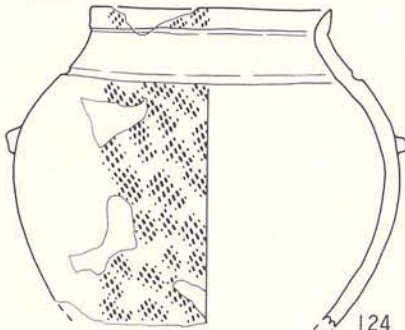
122



123



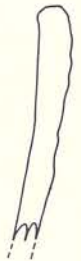
(9.0) ·····



124



125

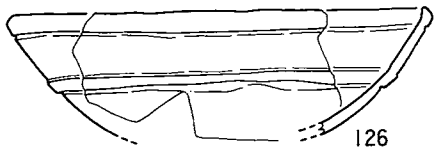


116~117·119~123·125 約 $\frac{1}{2}$

118·124 約 $\frac{1}{3}$

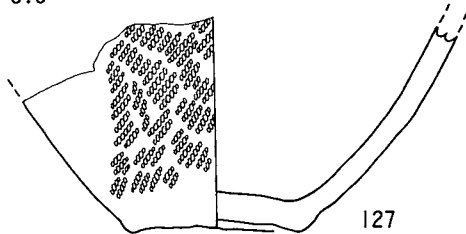
第23図 HI-4 住居跡出土遺物(遺物番号116~125)

(15.6) ·····

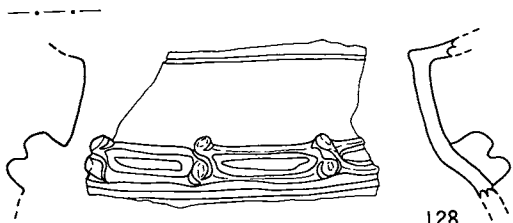


126

·6.6·

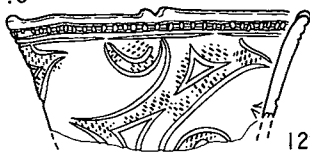


127

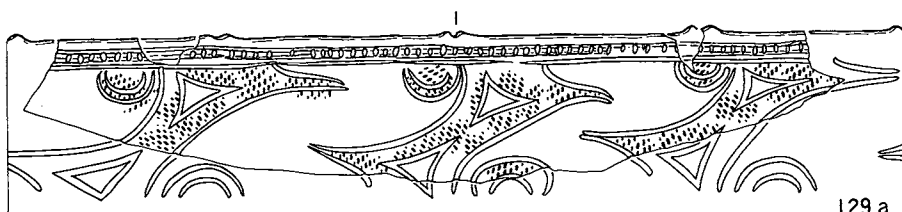


128

11.5 ·····

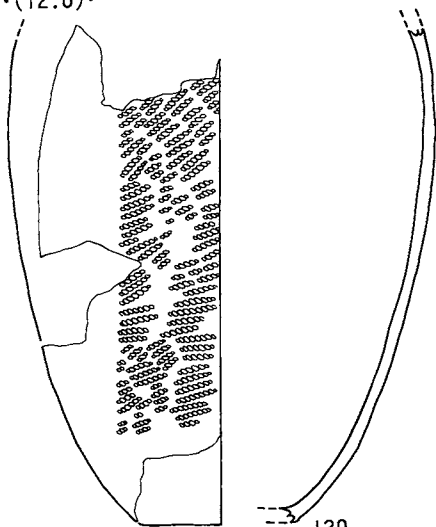


129



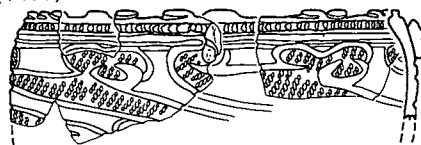
129 a

·(12.0)·



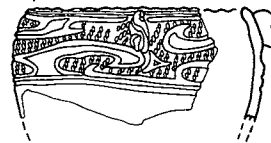
130

(14.0) ·····



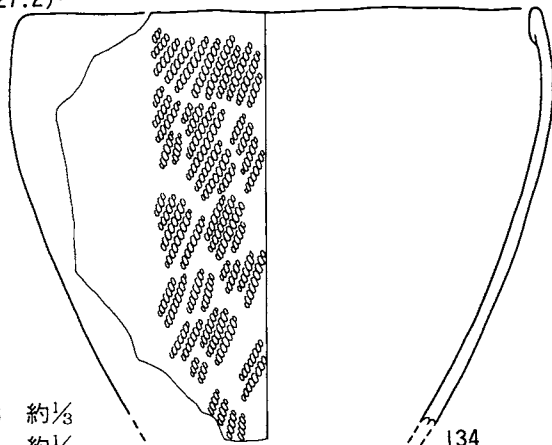
131

(8.2) ·····

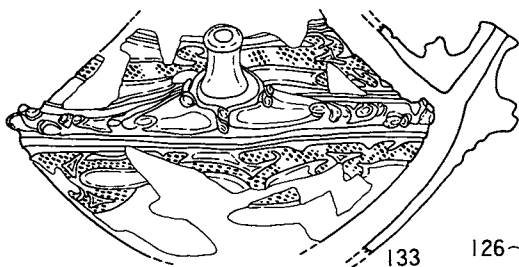


132

(27.2) ·····



134

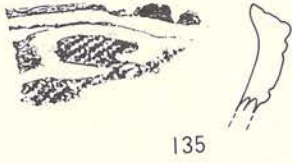


133

126~133 約 $\frac{1}{3}$

134 約 $\frac{1}{4}$

第24図 HI-4 住居跡出土遺物(遺物番号126-134)

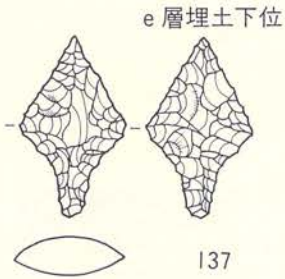


135



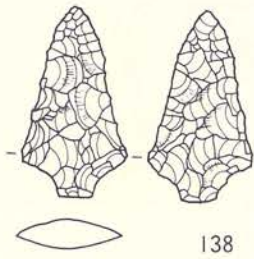
e 層埋土下位

136

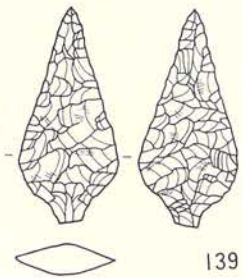


e 層埋土下位

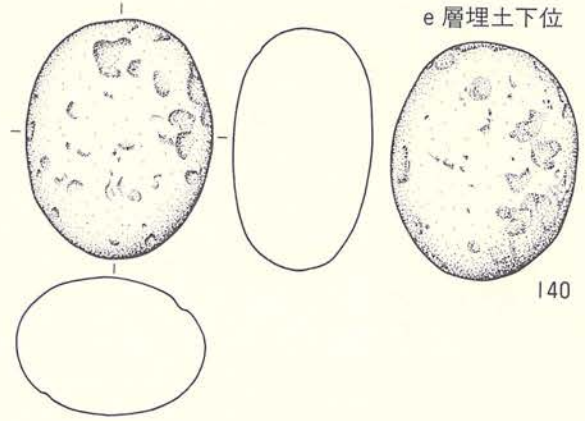
137



138

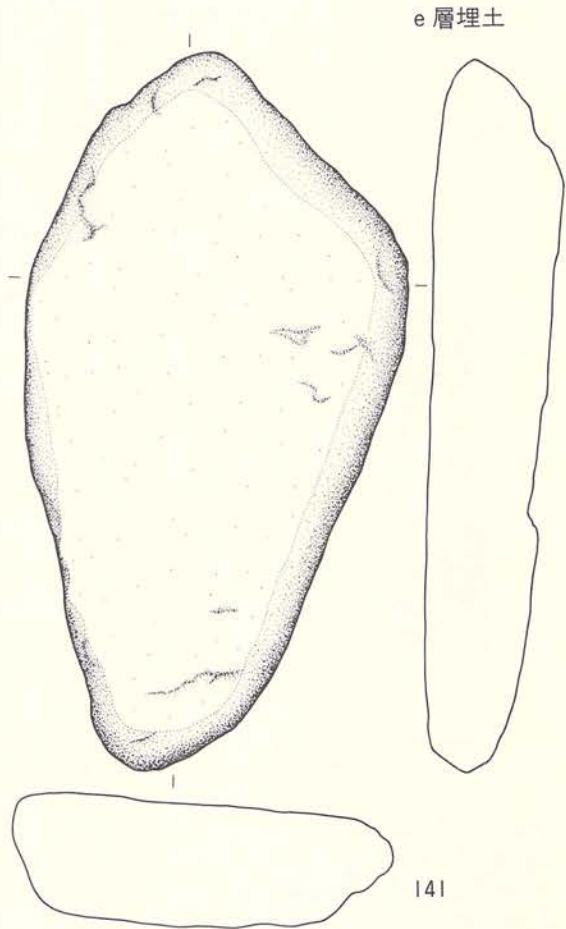


139



e 層埋土下位

140

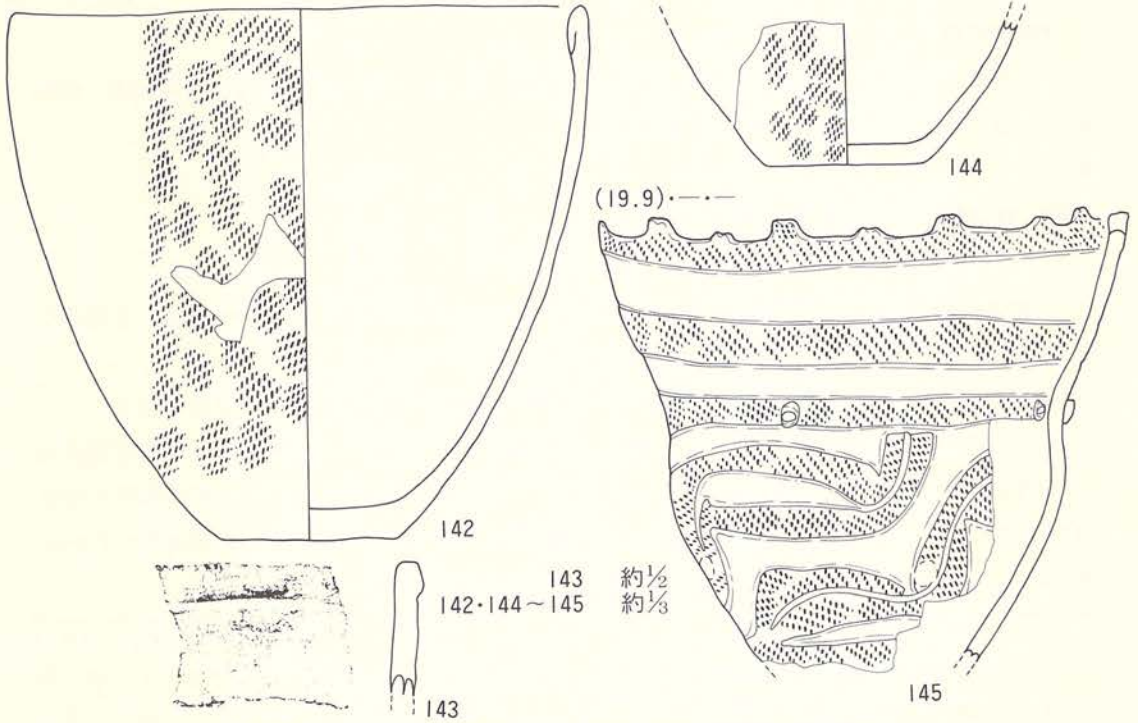


e 層埋土

141

136~139 約原寸
135 約 $\frac{1}{2}$
140 約 $\frac{1}{3}$
141 約 $\frac{1}{4}$

第25図 H I - 4 住居跡出土遺物(遺物番号135~141)



第26図 HI-5住居跡出土遺物(遺物番号142~145)

部径2.4×2.8mである。埋土は上位が黒色土、中位は極暗褐色土を混在する明褐色土、下位が黒色土で構成される。

壁高は東壁で23cm、西壁で36cm、南壁で26cm、北壁で29cmである。床面は第V層面で、平坦である。

炉は検出されていない。柱穴は壁際床面に8個、中央部に1個のP₁~P₉が検出されている。

P _{No.}	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉
径 cm	16×19	16×19	15×18	14×15	15×16	15×16	15×19	15×17	16×18
深さcm	12	12	22	10	8	19	15	22	19

出土遺物(第26図、写真図版101)

遺物は142~145の土器が出土している。これらのうち142はd層の床面上3cmに浮いて、143・145はc層のよごれた南部浮石層から、144はa層から出土したものである。

142・144は深鉢形土器で、地文にはL<^R/_Rの単節斜縄文が施されている。143は壺形土器の口頸部と思われるものである。145は体部にくびれをもつ深鉢形土器で、口唇部には角状突起を配し体部下半には弧帯状入組文が施文されている。瘤はくびれから体部下半まで付される。

これらの出土遺物のうち、145は第IV群土器の3類に属するものであろう。

遺構の時期

床面から出土した土器を欠き、断定できかねるが、埋土から出土した土器から第IV群2類期から3類期に位置づけられるものと考ええる。

H I — 6 住居跡

遺 構（第27図、写真図版12）

この住居跡の北東壁はすでに削られ、検出されていない。

平面形は南西から北東に長軸をもつ楕円形を呈する。規模は開口部径4.4×4.9m、床面部径4.2×4.8mである。埋土は中央部が黒褐色土、壁際が極暗褐色土で構成される。

壁高は東壁で9cm、西壁で35cm、南壁で27cmである。床面は第V層面で、平坦である。

炉は石囲い炉で、床面ほぼ中央部に位置する。規模は径60×80cmで、硬質砂岩・砂質粘板岩・角閃珩岩・頁岩・安山岩を北西を開く「コ」の字状に埋置している。炉内部の焼成最大層厚は15cmに及ぶ。柱穴は壁際に18個、壁寄りから中央にかけて7個のP₁～P₂₅が検出されている。P₁～P₁₈は支柱穴と思われるが、支柱穴の柱穴配置は不明である。

P _{No}	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃
径 cm	10×10	12×13	13×13	15×15	13×14	12×12	13×16	13×20	13×17	14×16	10×18	9×11	15×15
深さcm	37	29	24	36	13	15	21	22	19	37	25	20	19

P _{No}	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄	P ₂₅
径 cm	14×14	7×18	12×13	11×12	15×15	11×17	15×15	30×34	22×26	15×17	22×27	15×17
深さcm	40	19	27	26	29	47	47	65	18	39	55	50

出土遺物（第26図、写真図版101）

146～159の土器と、160・161の石器が出土している。これらのうち、146・147は壁寄り床面から、148・149は中央部床面から、150はa層の床面上3cmに浮いて、151はa層の床面上3cmから埋土中・上位にかけて、152は中央部床面からa層埋土下位と粗掘りから出土した土器が復元されたもの、153はb層埋土下位から、160は炉内部から、161は床面から出土したもの、その他はa層埋土から出土したものである。

146は口頸部が欠損している注口土器である。体部は球状に脹り、注口は斜め上むきに立ち上がる。注口部付け根下部は「L」字状に太くなる。体部上半には弧帯状入組文が施文されている。地文はL<^Rの単節斜縄文である。

147は厚手の鉢形土器で、口縁部に比較的大きな瘤と上下2個一對の小さな瘤を交互に配し隆沈線で結んでいるものである。体部は無文、底部は揚げ底となる。

148～152・155～158は深鉢形土器、159は深鉢形土器の口縁部と思われるものである。151は口唇部に2個一對の角状突起を配し、口縁部が折り返し状に内側で肥厚するもので、地文はL

<R_R>の単節斜縄文である。152は口縁部に小さな瘤を一行に配し、体部上半に左下がりの帯状入組文を施文しているもので、体部に貼瘤はない。

153は小型の壺形土器で、無文である。154は台付鉢形土器の体部下半と思われるもので、隆線・沈線で文様が施文されている。

160の異形石器は、先端が欠損している為、用途・機能を明確に断定できかねるもので、茎部が長く茎部端が雁股状に2つに開く。石鏃か石銛の一種であろう。161の石皿は扁平なもので、片面に擦痕の認められるものである。

これら出土遺物のうち、146・147は第IV群土器の1類に、151・152は4類に属するものである。

遺構の時期

床面から出土した土器から、第IV群1類期に位置づけられよう。

H I - 7 住居跡

遺 構 (第30図、写真図版13)

この住居跡は、段差のある畑地の下位の畑部分に位置し、北東側約半分が耕作のためすでに削り取られて消失しているものである。

平面形は、円形ないし楕円形を呈するものであろう。規模は、残存部最大径3.6mである。埋土は黒褐色土で、bの黒色土は柱痕と思われる。

壁高は、西壁7cm、南壁10cmである。床面は南部浮石層で、小刻みな凹凸があるがわりあいしまっている。

炉は石囲い炉と思われる。遺構のほぼ中央に位置する。焼土は34×24cmの不整楕円形に分布し、礎は、焼土の中心から半径32~45cmで南側に3個ならぶものである。礎はチャート、千枚岩質粘板岩で、焼土の層厚は5cmである。

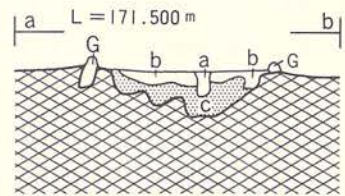
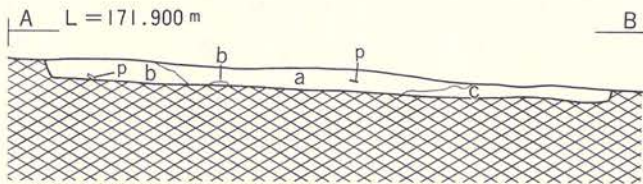
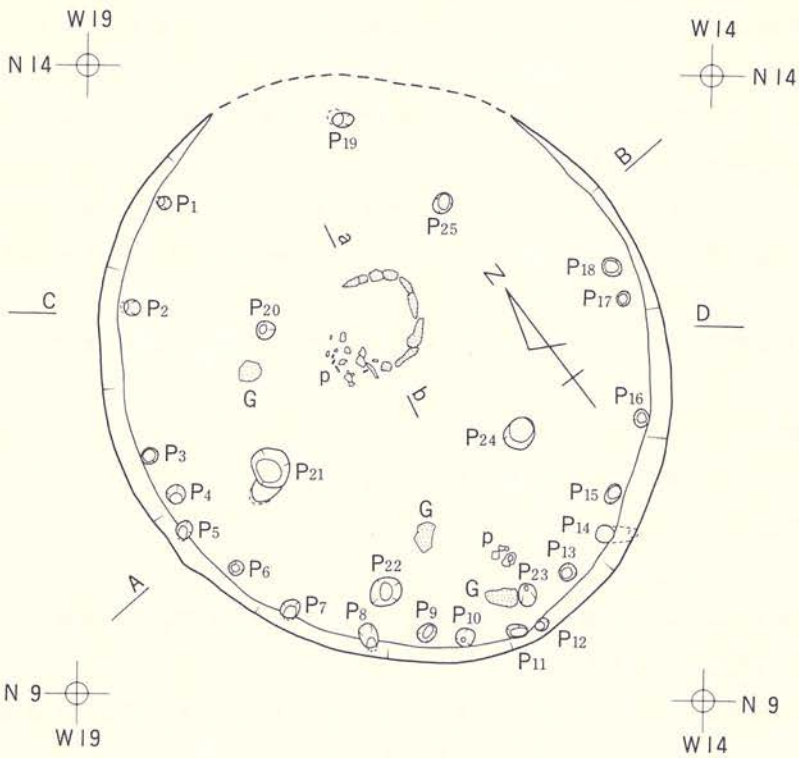
柱穴はP₁~P₁₄が検出されている。すべて壁柱穴であり、支柱穴は1個も検出されていない。埋土はいずれも黒色~黒褐色土である。

P _{No}	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇
径 cm	19×11	15×11	11×9	13×9	15×13	17×13	16×14
深さcm	10	10	10	7	12	5	4

P _{No}	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄
径 cm	15×13	18×14	10×8	12×10	9×8	15×11	10×8
深さcm	13	6	5	2	6	8	5

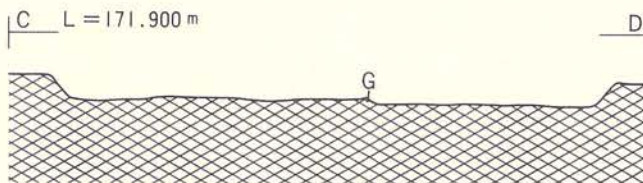
出土遺物はない。

遺構の時期

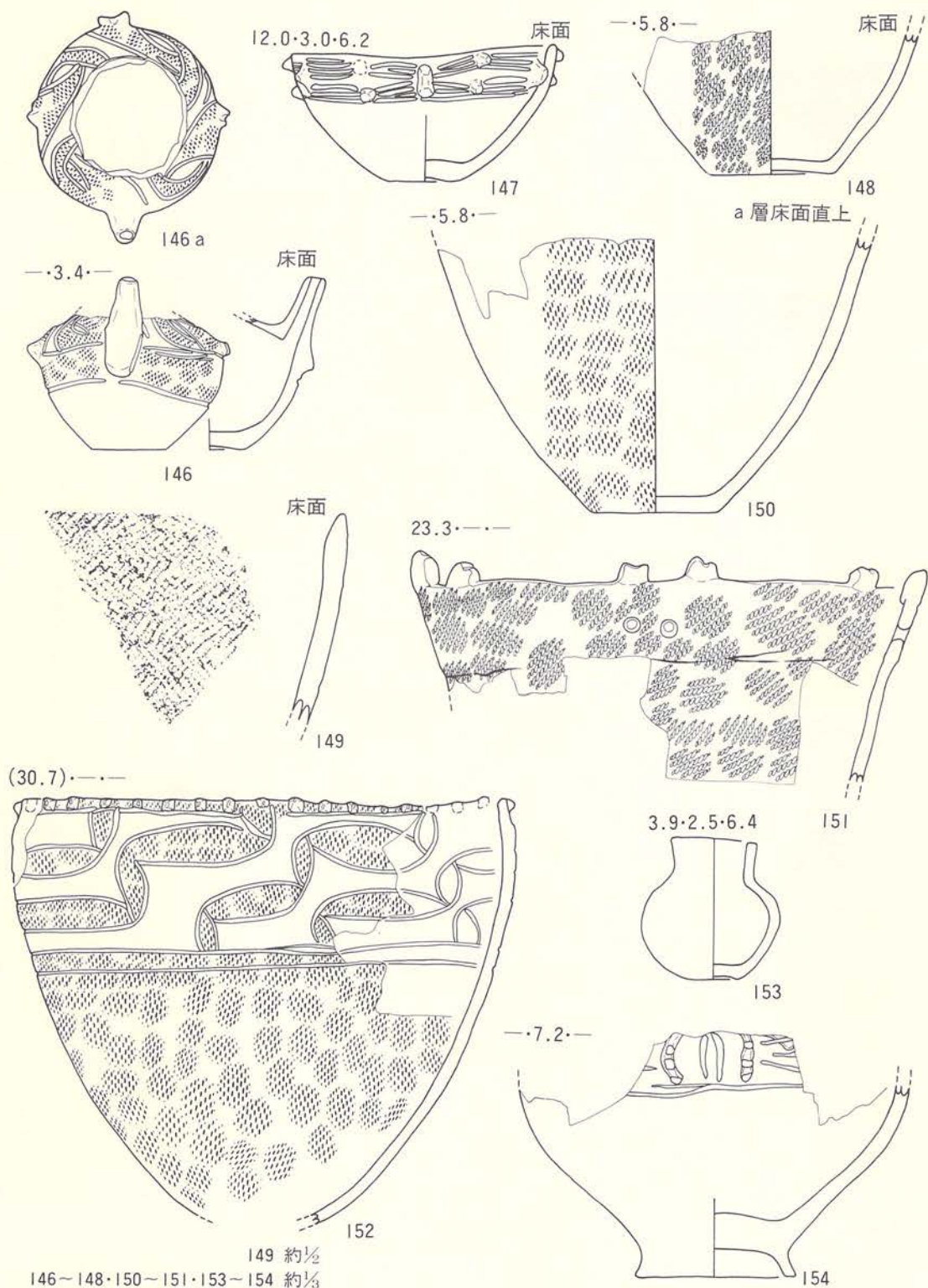


- a. 7.5Y R3/2 黒褐色土 (含炭化物多量)
- b. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石 3%)
- c. 7.5Y R2/3 極暗褐色土 (含南部浮石 15%)

- a. 7.5Y R2/1 黒色土
- b. 7.5Y R3/4 暗褐色土 (含下位に焼土ブロック状)
- c. 5Y R5/8 明赤褐色土 (焼土)

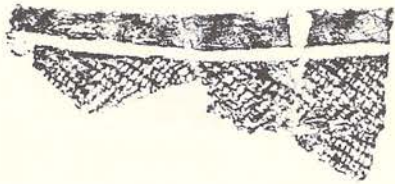


第27図 HI-6住居跡(平・断面 $S = \frac{1}{60}$, 炉断面 $S = \frac{1}{30}$)



149 約 $\frac{1}{2}$
 146~148·150~151·153~154 約 $\frac{1}{2}$
 152 約 $\frac{1}{2}$

第28図 HI-6 住居跡出土遺物(遺物番号146~154)



155



156



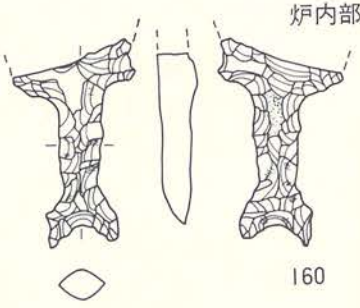
157



158

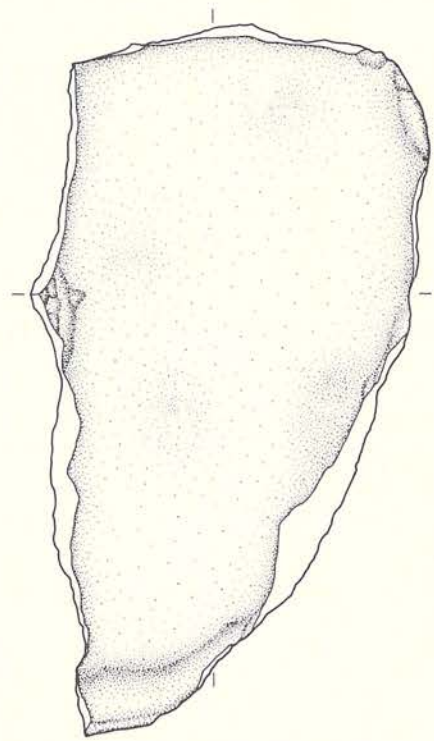


159

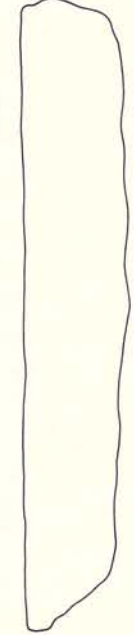


炉内部

160



床面



161

160 約原寸
155~159 約1/2
161 約1/3

第29図 H I - 6 住居跡出土遺物(遺物番号155~161)

この遺構から遺物は出土していないが、住居跡の形態・柱穴配置及び周囲の遺構時期から判断して、第IV群3類期か、その前後に位置づけられよう。

HI-8住居跡

遺構（第30～32図、写真図版14～16）

この住居跡にはレベルを異にする2基の炉と、床面下から1棟の住居跡が検出され、計3棟の住居跡が存在する。これらの住居跡を、HI-8a住居跡・HI-8b住居跡・HI-8c住居跡と呼称し記述する。

これら3棟の住居跡のうち、床面下から検出されたHI-8c住居跡が最も古い住居跡である。この住居跡を拡張するにあたり、住居跡を埋め戻し、HI-8a住居跡の規模に拡張改築し、炉を構築し使用したと思われるが、使用過程でHI-8c住居跡埋め戻し部分にあたる床面のみ、順次沈下したものがHI-8b住居跡である。さらに沈下した部分を埋め、炉を構築したものがHI-8a住居跡である。

従って新旧関係は、HI-8c住居跡・HI-8b住居跡・HI-8a住居跡の順に新しくなる。

HI-8a住居跡

この住居跡の北東壁はすでに削られ、検出されていない。

平面形は円形を呈する。規模は開口部径7.1m、床面部径7mである。埋土は上位が黒色土、中位が極暗褐色土・黒褐色土、下位が暗褐色土、壁際下位が黒褐色土で構成される。

壁高は東壁で31cm、西壁で78cm、南壁で100cmである。床面には凹凸が認められる。南西壁下から中央部にむかって約1.2～1.5mの範囲には、にぶい黄褐色シルト質土で、また北東壁下と推定される床面部分、径1.5×2.0mの範囲には八戸火山灰で貼り床が施されている。

炉は3個の小礫を埋置しているところから、石囲い炉の範疇にはいるものと思われ、床面ほぼ中央部に位置する。規模は径65×75cmを測る。炉内部には炭化物・焼土粒が分布するものの焼成痕は認められなかった。柱穴は支柱穴P₁～P₁₅が壁際床面にほぼ等間隔に配される。支柱穴はP₁₈—P₁₉—P₂₀—P₂₁—P₂₂の5本で構成されると思われる。

P _{No}	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃
径 cm	13×14	14×14	12×13	12×15	13×13	14×14	13×16	12×12	16×17	15×16	14×16	10×11	12×14
深さcm	10	8	13	19	13	12	11	8	16	10	8	6	11

P _{No}	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂
径 cm	14×20	14×16	12×13	13×15	23×23	16×19	22×32	20×25	16×17
深さcm	7	12	28	35	38	47	82	80	97

HI-8b住居跡

この住居跡はHI-8a住居跡炉立ち割りと貼り床除去の際検出されたものである。規模はH

I—8a住居跡と同等であると思われる。床面の沈下はH I—8c住居跡プラン内に確認され、中央部にむかって順次下がる。沈下最大厚は10cmである。H I—8a住居跡床面からH I—8c住居跡床面までの土層断面でみるに、H I—8a住居跡貼り床に使用された同質のシルト質土及び八戸火山灰が、沈下した床面部分に顕著に認められる。当住居跡床面に貼り床が施されていたものであろう。H I—8a住居跡床面から当住居跡床面までの盛土は、南部浮石を5%包含する黒褐色土である。

炉は石囲い炉で、H I—8a住居跡炉の直下に位置する。規模は径80cmの円形を呈し、チャートを半円に埋置している。炉内部の焼成最大層厚は10cmに及ぶ。支柱穴は当住居跡床面に検出されたものはなく、H I—8a住居跡の支柱穴と同じと思われる。支柱穴があったかどうかは不明である。

H I—8c住居跡

平面形は円形を呈する。規模は開口部径4.2×4.4m・床面部径3.8×4.1mである。H I—8b住居跡床面から当住居跡床面までの盛土は、南部浮石を5%包含する黒色土である。

当住居跡床面からH I—8a住居跡床面までの壁段差は、東壁で23cm・西壁・南壁で41cm・北壁で30cmである。床面は第VI層面で、平坦である。西壁際床面には、開口部径120×180cm・底部径80×150cm・深さ30cmの規模をもつ楕円状のピットが検出されている。このピットの埋土は、上位から下位に、黒色土・極暗褐色土・黒色土・暗褐色土で構成される。

炉は地床炉で、床面ほぼ中央部に位置する。規模は径75×85cmの円形を呈する。炉内部の焼成最大層厚は7cmに及ぶ。柱穴はP₁～P₂₂が検出されている。これらのうち支柱穴を構成するものはP₁₃—P₁₄—P₁₅—P₁₆であり、この4本にのみ掘り方が認められた。

P _{No}	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃
径 cm	10×10	17×21	12×13	15×20	11×11	20×21	10×14	15×23	7×17	23×23	12×14	13×16	16×17
深さcm	3	7	16	35	32	18	9	43	12	36	24	23	54

P _{No}	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂
径 cm	17×24	17×20	13×14	12×13	17×22	18×20	15×16	11×12	10×11
深さcm	53	57	52	23	43	23	12	8	15

斜面下方にあたる東壁下には出入口状施設が設けられている。これは壁下床面に柱穴P₁₀とP₈を、また壁間に柱穴P₉とP₇を対とし、対となる柱穴間を溝状に掘り込んでいるものである。

出土遺物（第33～40図、写真図版104～110）

遺物はH I—8c住居跡床面から検出されたピットの埋土から214のスクレーパーが、H I—8a住居跡から162～213の土器・土偶と215～226の石器が出土している。

〈H I—8c住居跡出土遺物〉

ピット埋土から出土した214のスクレーパーは、片面周縁及び他面2側縁に刃部剥離調整が施されているものである。

〈H I—8a住居跡出土遺物〉

出土遺物のうち、215～224は南西壁際床面下約3cmから一括して、162～166・225が床面から、167・171・173・177が床面とd層埋土下位から出土し復元されたもの、169・170・184・191・194・201がd層埋土下位・中位・粗掘りから出土し復元されたもの、206がa層から一括して出土し復元されたものである。その他は主にc～d層埋土から出土したものである。出土量はd層からのものが多い。

162・167は台付鉢形土器である。器形は体部上半にごく浅いくびれをもつもので、このくびれを断面で見ると、器内には顕著に認められるが、器表にはほとんど現われないものである。162の口唇部には2個一対の瘤状突起を規則的に配し、体部上半には平行沈線が、体部下半には瘤を抱く左下がり入組文が施文されている。167の文様は主として細い帯縄文が施文されている。地文は162が原体 $R < \frac{L}{L}$ の縦回転、167が $L < \frac{R}{R}$ の横回転である。

163は香炉形土器で口唇部には刻目が施され、体部は数条の平行沈線が施されている。164は無文のミニチュア壺形土器である。

166は器高13.7cmの深鉢形土器である。器形は波状口縁を呈し、体部に浅いくびれをもつ。文様は口縁部から体部下半まで瘤を連結する左下がり入組文が施文されている。地文は $L < \frac{R}{R}$ の単節斜縄文である。

165は深鉢形土器の口縁部破片で、三叉文が施文されているものである。床面から出土しているがd層に伴う流れ込みと考えられる。

170・171・173・177・193・205・206・208・209は粗製深鉢形土器である。171は無文、193・205の口唇部にはB状突起が配されているものである。

168・169・199・201は鉢形土器、175・184・190・192・194・202・213は台付鉢形土器である。168は口縁部の内外にB状突起が配されているもので無文である。169には渦巻状の文様が施文されている。184は無文である。190は口縁部に羊歯状文と沈線間刻目が施されているものである。

174・176・178・183・185・187・189・197・200は壺形土器である。174は器高が14.7cmのもので口頸部は無文、体部には原体 $L < \frac{R}{R}$ の単節斜縄文が施されている。178・185・187は無文である。189は口頸部が欠損したもので、体部に三叉状入組文が施文されている。

179・180はミニチュア鉢形土器で、いずれも口唇部突起と口縁部沈線間に刻目が施されているものである。

188 a は深鉢形土器の口縁部破片、188 b は体部のくびれ部の破片であり同一個体である。い

ずれにも弧帯状入組文が施文されている。

191は半精製の深鉢形土器である。口唇部には刻目間に刺突を施し、口縁部には上下に2条一対の平行沈線を巡らせ、その間にさらに斜位の平行沈線間刻目を施しているものである。この施文方法は、195・196の土器に施文されている斜位及び横位の刻目に類似するものである。

207は遮光器土偶の足部と思われるもので、沈線及び刻目文様の認められるものである。

215～224の加工痕ある剥片は、いずれも一側縁に荒い剝離が認められるものである。225の磨石は楕円状のもので、全面が研磨されているものである。226の磨石は円錐状を呈するもので、研面と擦痕が認められるものである。

これらの出土遺物のうち、床面から出土した162・163・164・166と床面とd層埋土下位から出土し復元された167は第IV群土器の4類に属するものである。また174・176・188は第IV群土器の3類から4類に、191・195・196は第IV群土器5類から第V群土器1類に、165・168・169・172・175・179～181・183・189・190・192・194・197・198・199・201・202・205は第V群土器1類に、200は2類に属するものである。

遺構の時期

H I—8a住居跡は床面から出土した土器より、第IV群4類期に位置づけられる。H I—8b住居跡はH I—8a住居跡に継続するもので、時期差はないものとする。H I—8c住居跡は第IV群4類期か、3類期に位置づけられる住居跡であろう。

H I—9 住居跡

遺 構（第41図、写真図版16～17）

この住居跡は、H I—51ピットに北西壁を切られているものである。

平面形はほぼ円形を呈する。規模は開口部径5.1×5.2m・床面部径4.8×4.9mである。埋土は中央部上位が黒色土、下位が黒褐色土で構成される。

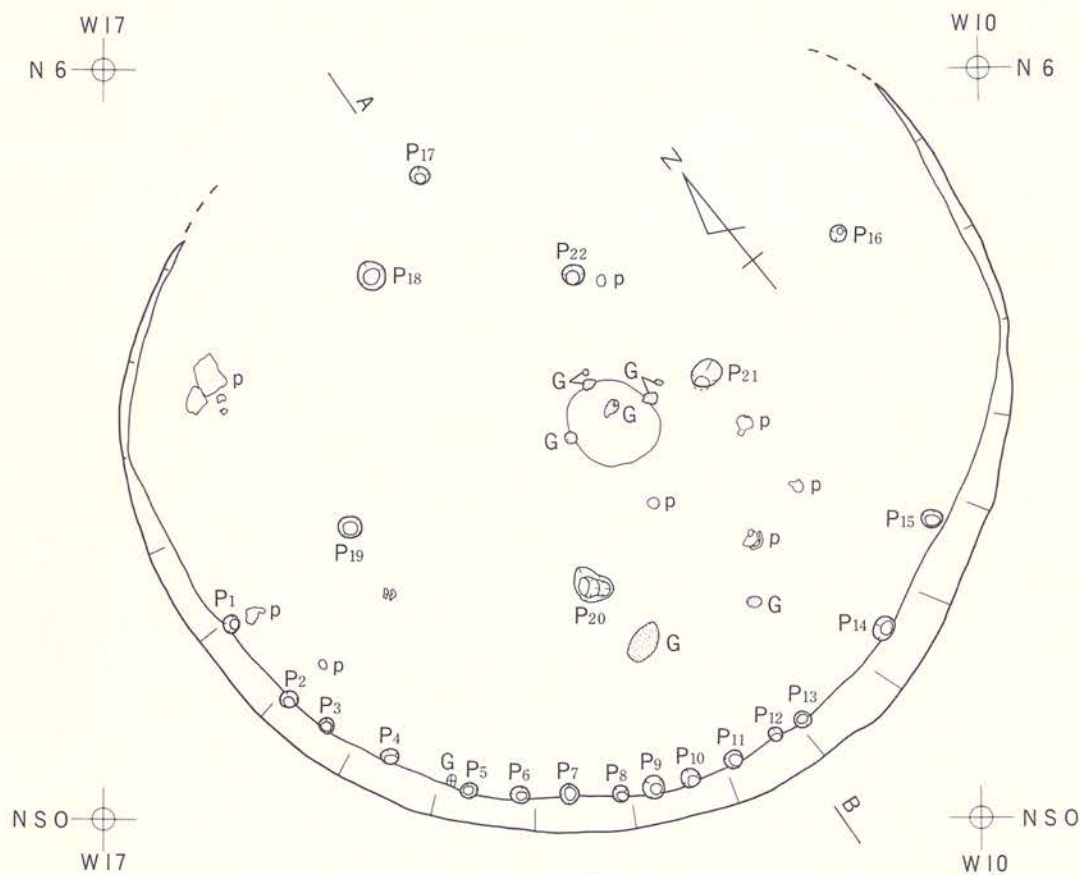
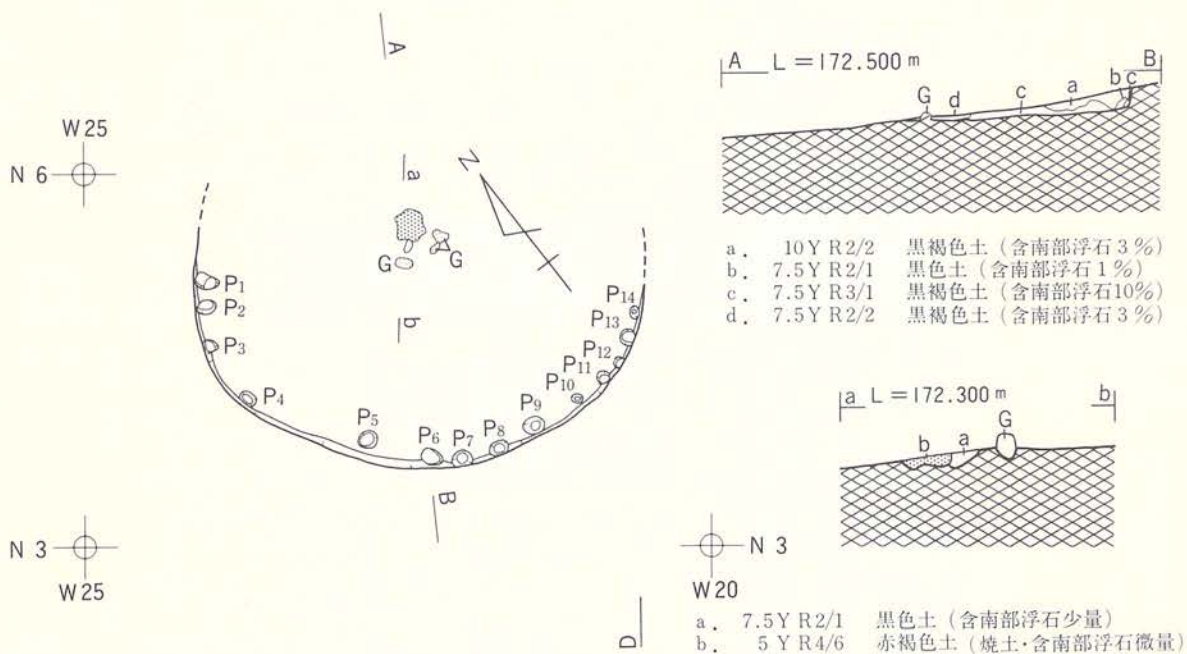
壁高は東壁で26cm・西壁で43cm・南壁で44cm・北壁で12cmである。床面は第V層面で、平坦である。

炉は石囲い炉で、床面ほぼ中央部に位置する。規模は径70×85cmを測り、チャート・礫岩を楕円状に埋置している。炉内部の焼成最大層厚は10cmに及ぶ。柱穴はP₁～P₈が検出されている。これらのうち支柱穴を構成するものはP₅—P₆—P₇—P₈の4本とする。

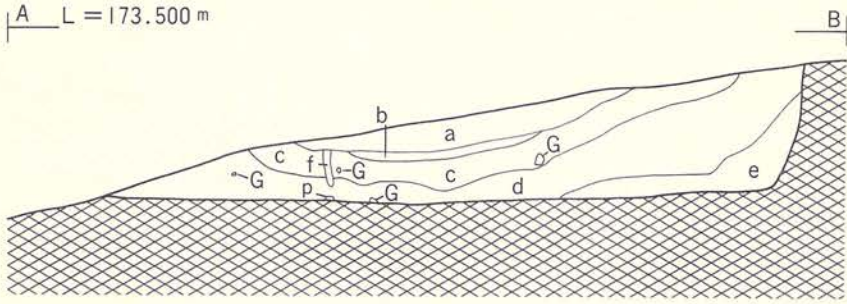
P _{No}	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
径 cm	13×13	17×20	12×15	16×18	15×15	18×20	20×20	16×17
深さcm	10	46	19	54	46	29	67	42

出土遺物（第42～46図、写真図版111～115）

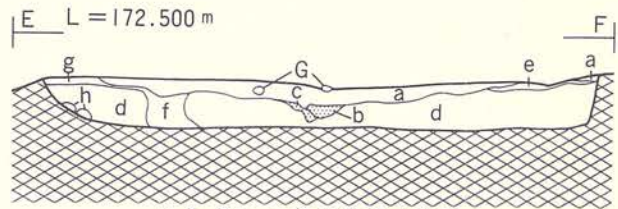
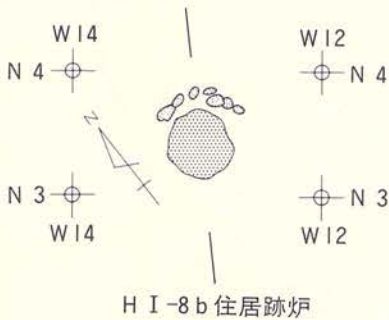
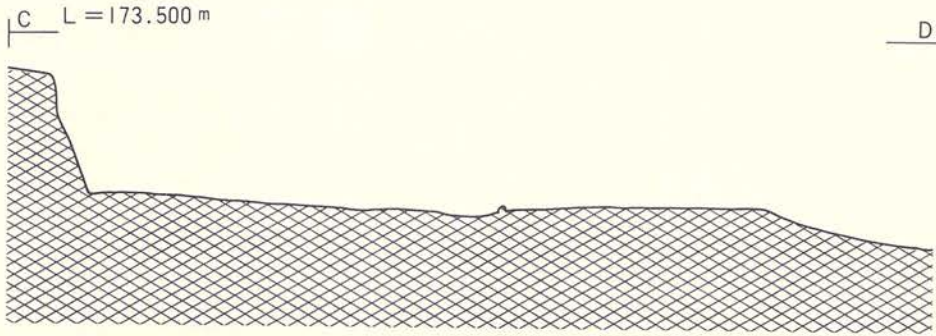
227～249・251～264の土器と、250の土偶足部、265・266の石器が出土している。これらのう



第30图 HI-7·HI-8住居跡(平·断面 $S = \frac{1}{60}$, 炉断面 $S = \frac{1}{30}$)

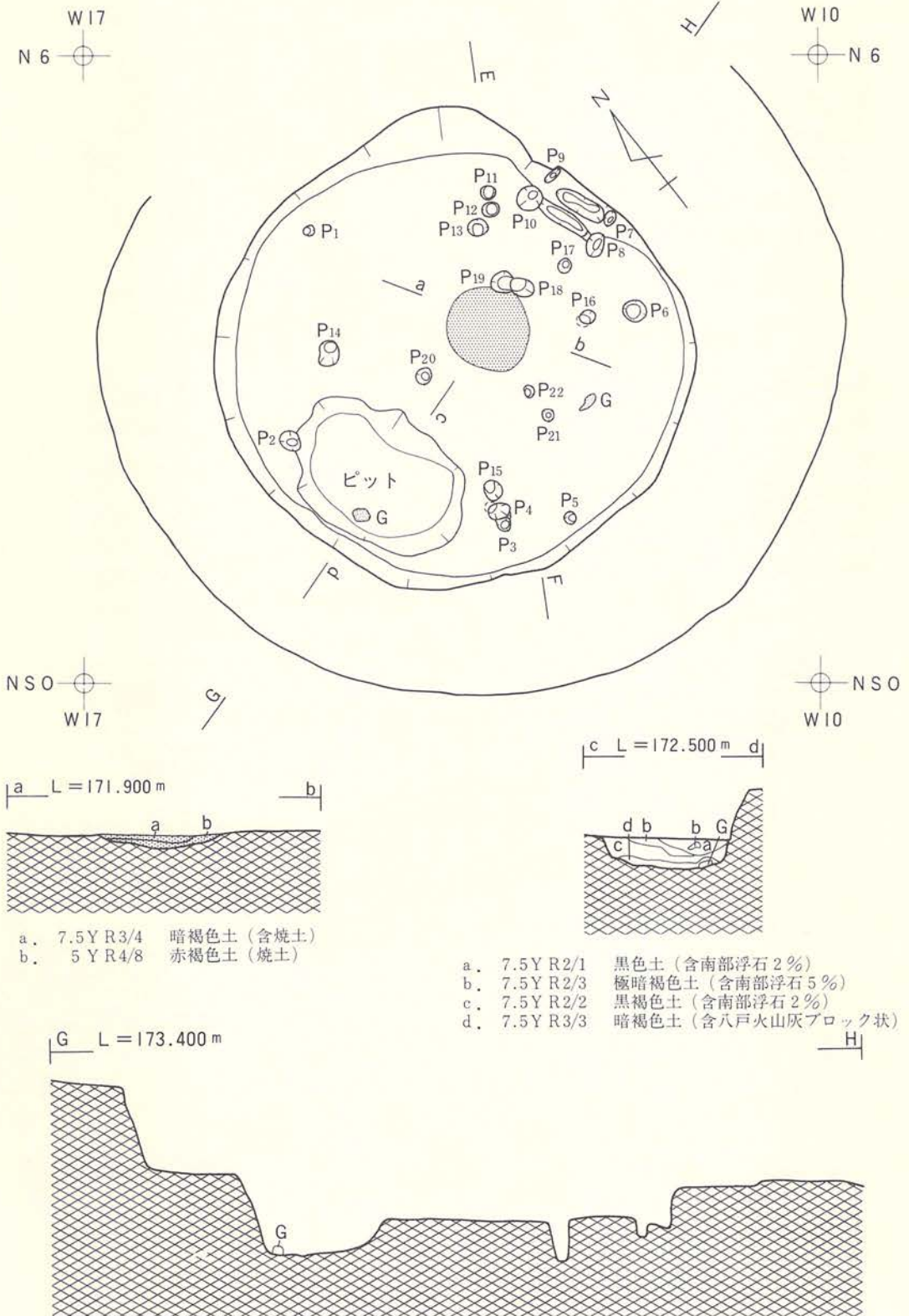


- a. 7.5Y R2/1 黒色土 (含汚れた南部浮石1%)
- b. 7.5Y R2/3 極暗褐色土 (含南部浮石1%)
- c. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含下部南部浮石10%)
- d. 7.5Y R3/3 暗褐色土 (含南部浮石30%)
- e. 7.5Y R3/2 黒褐色土 (含南部浮石7%)
- f. 7.5Y R3/1 黒褐色土 (含砂質性南部浮石)

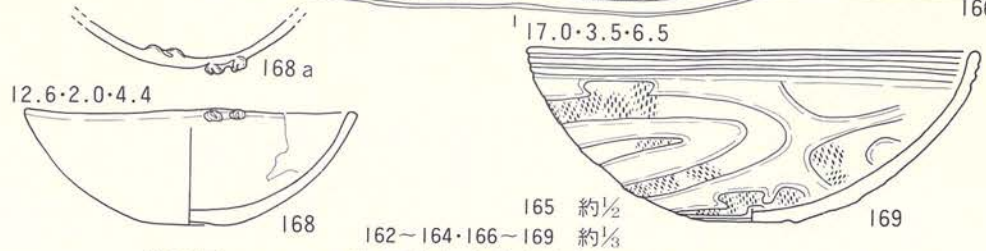
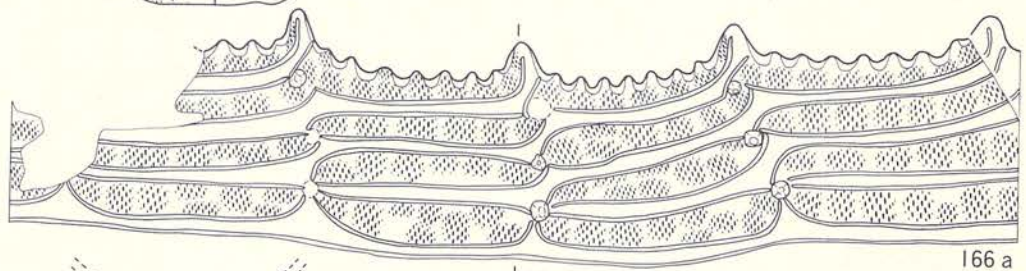
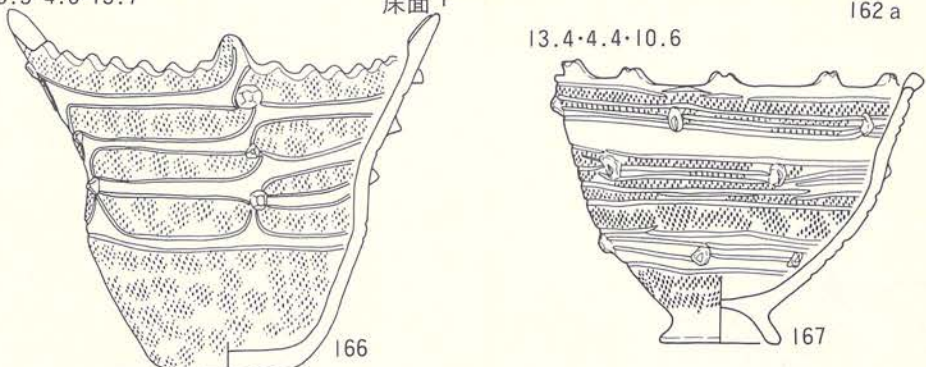
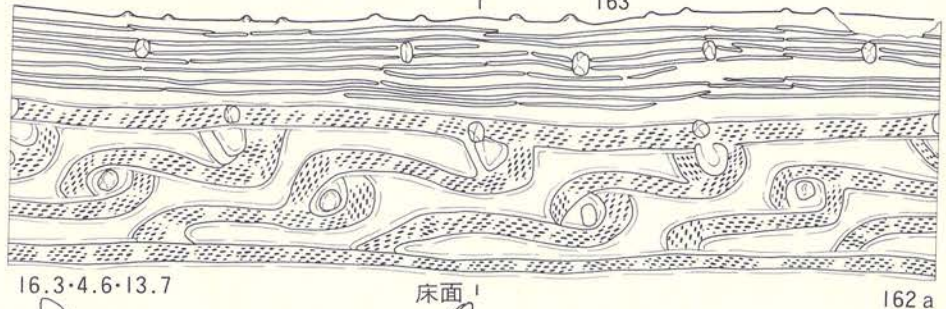
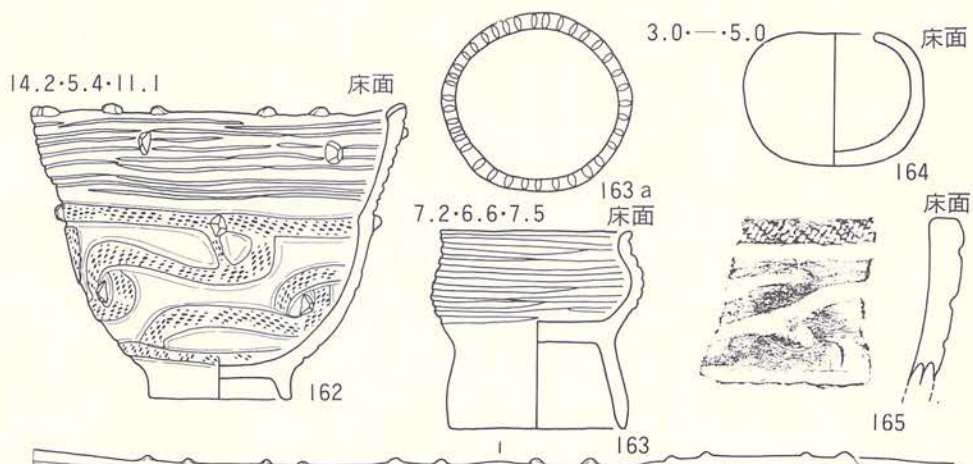


- a. 7.5Y R2/2 黒褐色土・HI-8b 住埋土 (含南部浮石5%)
- b. 7.5Y R5/8 明褐色土
- c. 7.5Y R3/4 暗褐色土 } HI-8b 炉焼土
- d. 7.5Y R2/1 黒色土・HI-8c 住埋土 (含南部浮石5%)
- e. 10Y R4/3 にぶい黄褐色土 (貼り床層)
- f. 7.5Y R2/3 極暗褐色土 (含南部浮石5%)
- g. 10Y R4/6 褐色土 (貼り床層)
- h. 7.5Y R5/8 明褐色土 (含南部浮石層)

第31図 HI-8住居跡(断面・炉平面・S = 1/60)



第32図 HI-8c 住居跡(平・断面・ピット断面 $S = \frac{1}{60}$, 炉断面 $S = \frac{1}{30}$)

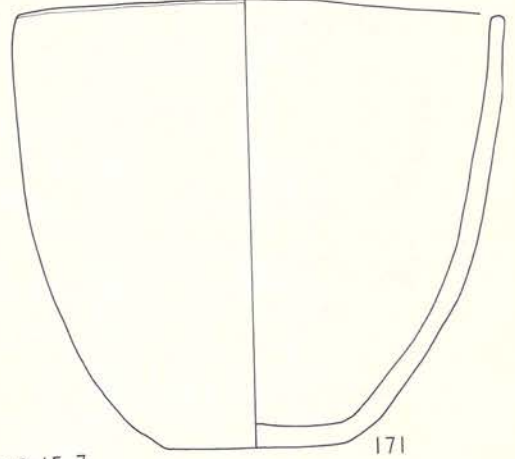
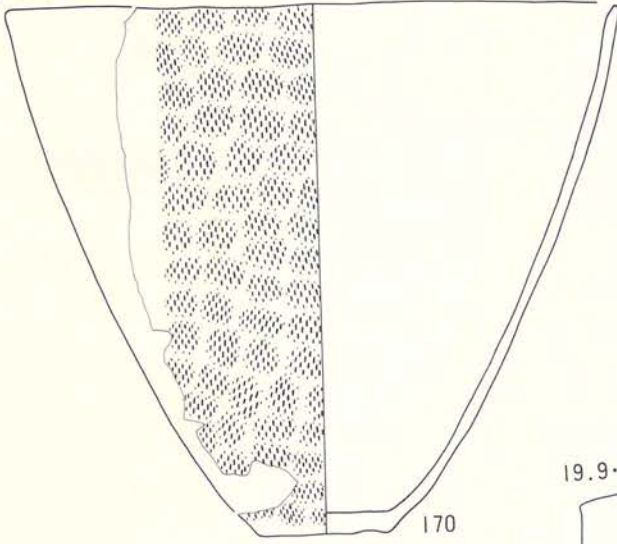


165 約 $\frac{1}{2}$
162~164·166~169 約 $\frac{1}{3}$

第33図 H I - 8 住居跡出土遺物(遺物番号162~169)

(46.6)·10.0·40.4

18.3·6.7·17.1



19.9·6.6·15.7

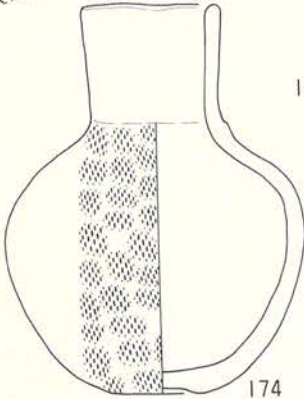
171

170



172

5.2·3.7·14.7



11.5·5.8·10.9

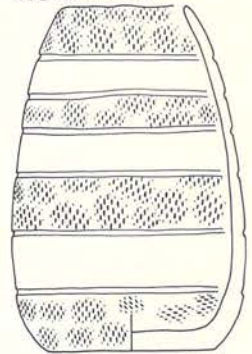
4.8·6.4·13.0

173

174

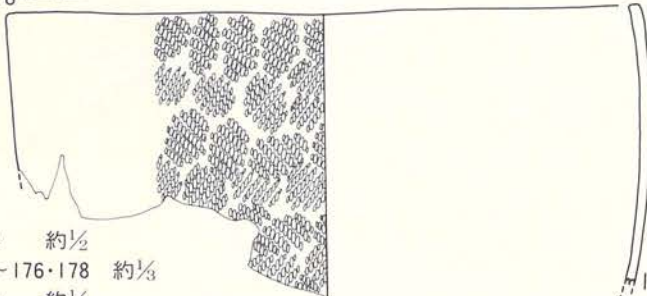


175



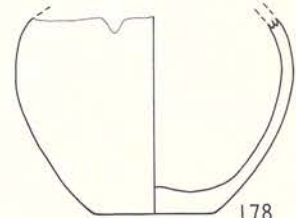
176

33.8·—·—



177

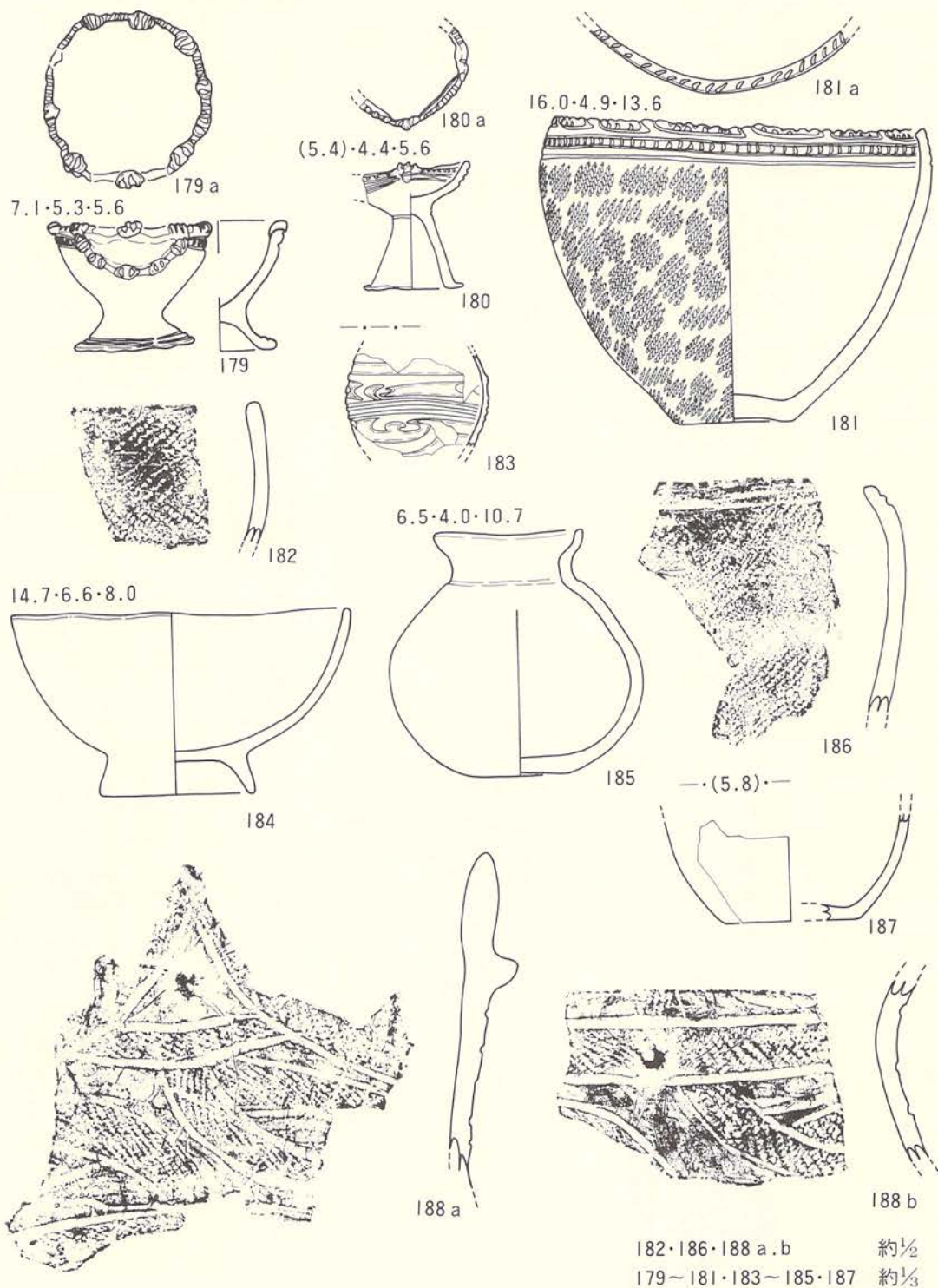
—·4.5·—



178

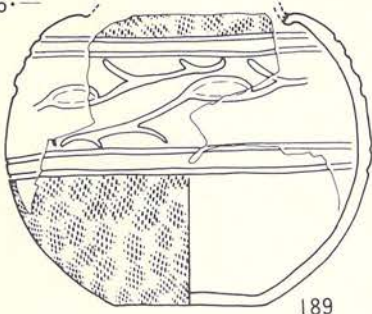
172 約 $\frac{1}{2}$
 171·173~176·178 約 $\frac{1}{3}$
 177 約 $\frac{1}{4}$
 170 約 $\frac{1}{6}$

第34図 H I - 8 住居跡出土遺物(遺物番号170~178)



第35図 HI-8 住居跡出土遺物(遺物番号179~188)

—5.6—

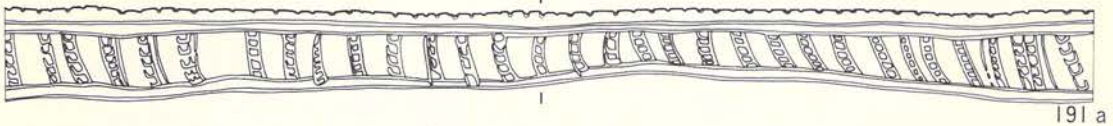


189

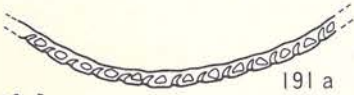
12.9·8.0·14.3



190

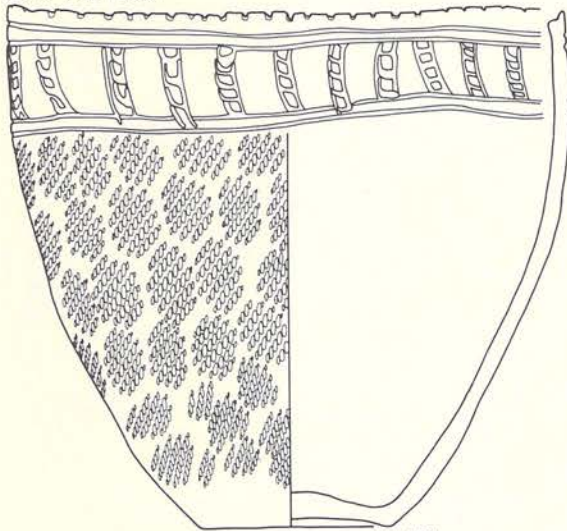


191 a



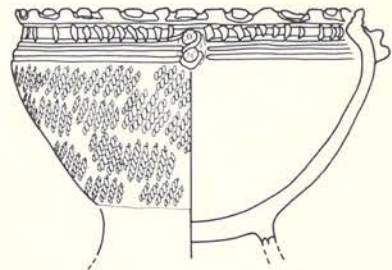
191 a

21.0·7.2·19.6



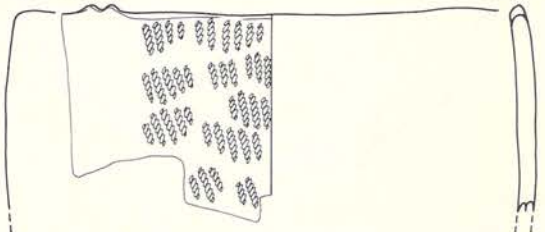
191

13.0·—·—



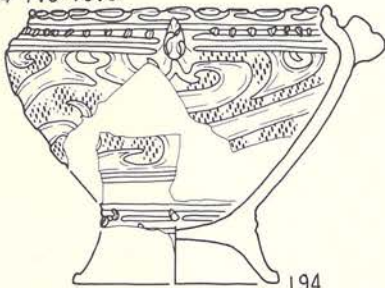
192

(26.4)·—·—



193

11.4·7.8·10.5



194



195



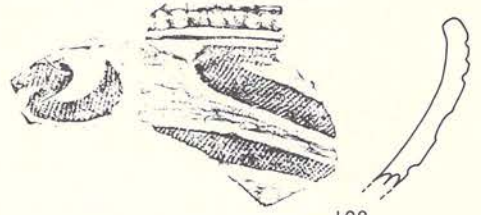
196

195-196 約 $\frac{1}{2}$
 189-192·194 約 $\frac{1}{3}$
 193 約 $\frac{1}{4}$

第36图 H I - 8 住居跡出土遺物(遺物番号189-196)

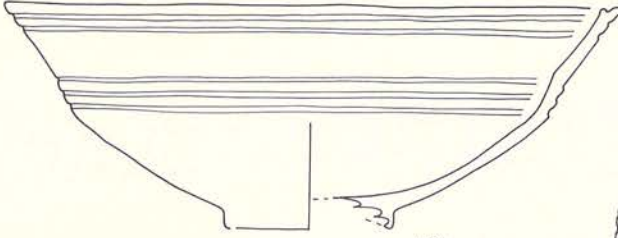


197



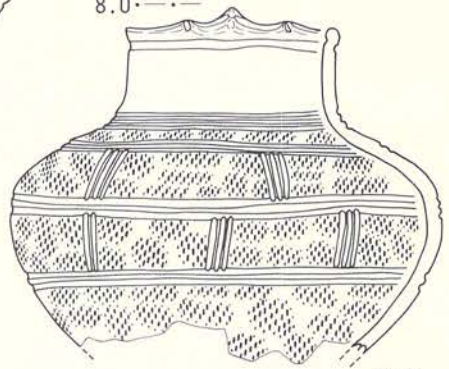
198

23.2・(6.3)・8.4

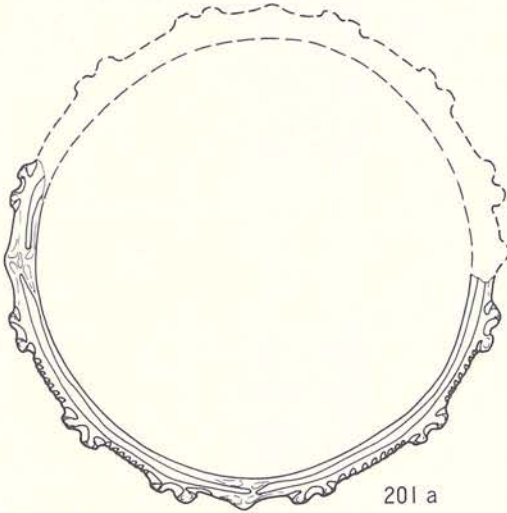


199

8.0

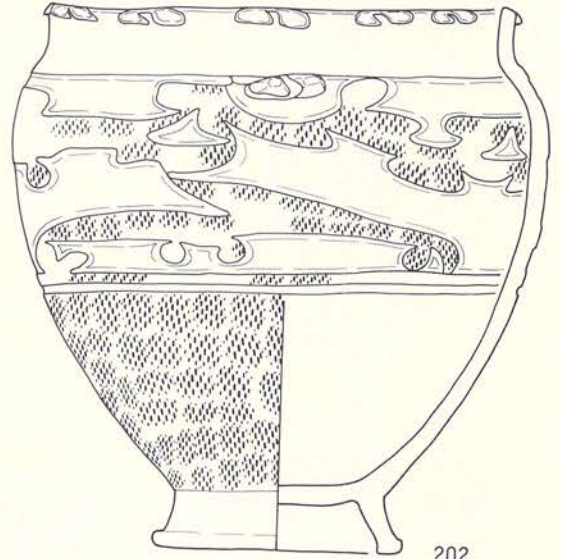


200



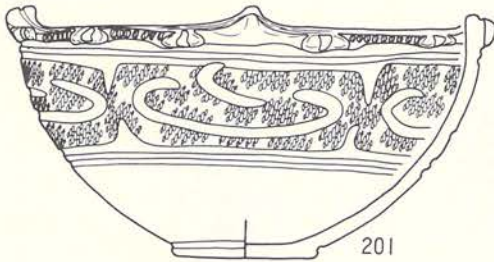
201 a

17.5・9.0・20.8



202

18.5・5.4・9.4



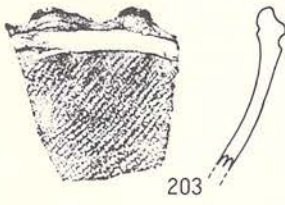
201

197~198 約 $\frac{1}{2}$

199~202 約 $\frac{1}{4}$

第37図 HI-8 住居跡出土遺物(遺物番号197~202)

23.8・8.0・30.0

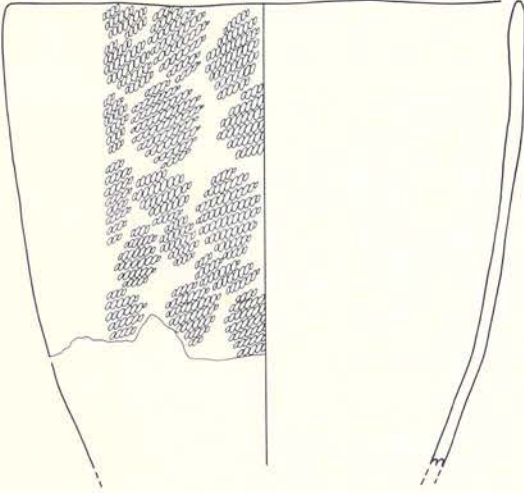


203

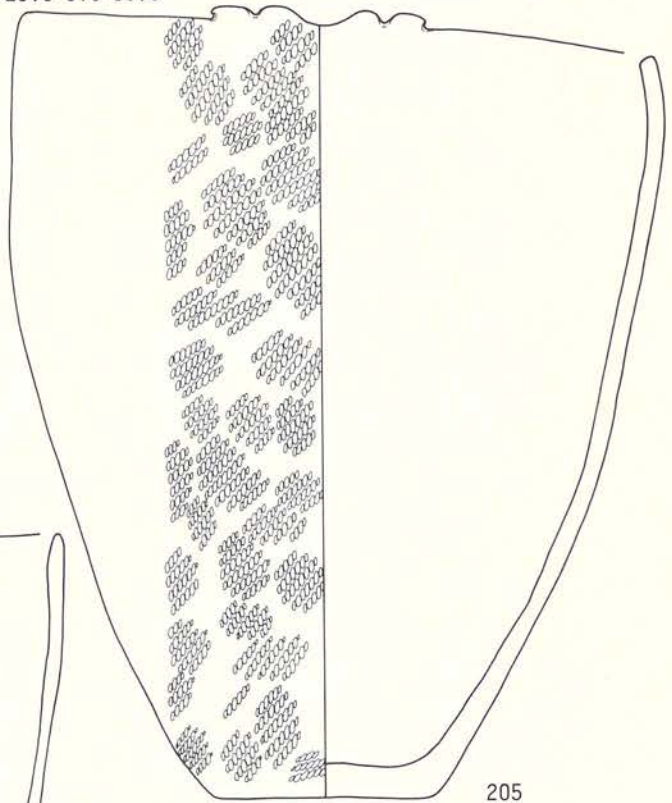


204

(27.0)・—・—



206



205



207



208



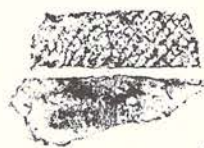
209



210

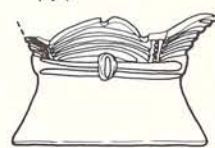


211



212

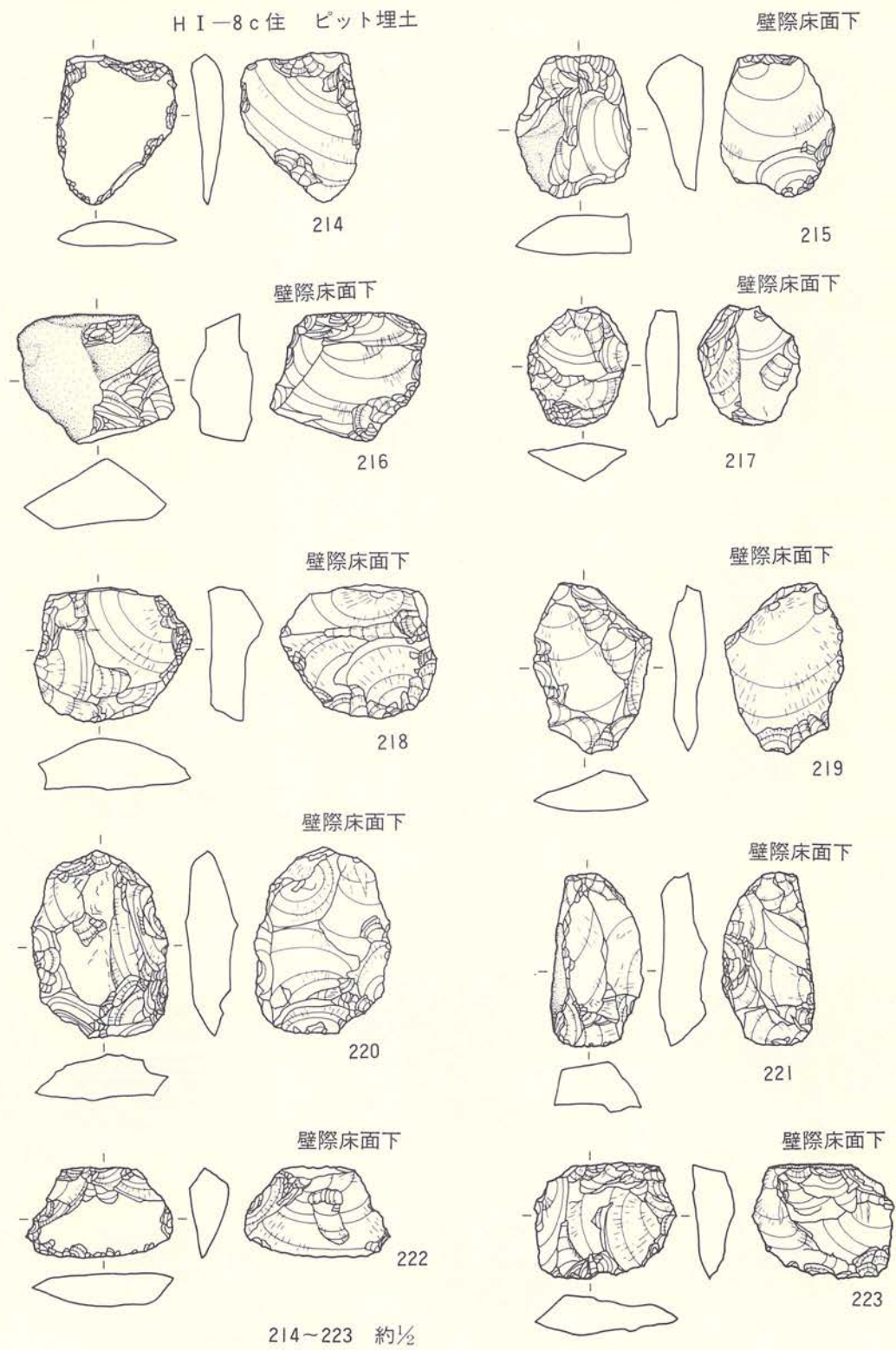
—7.4—



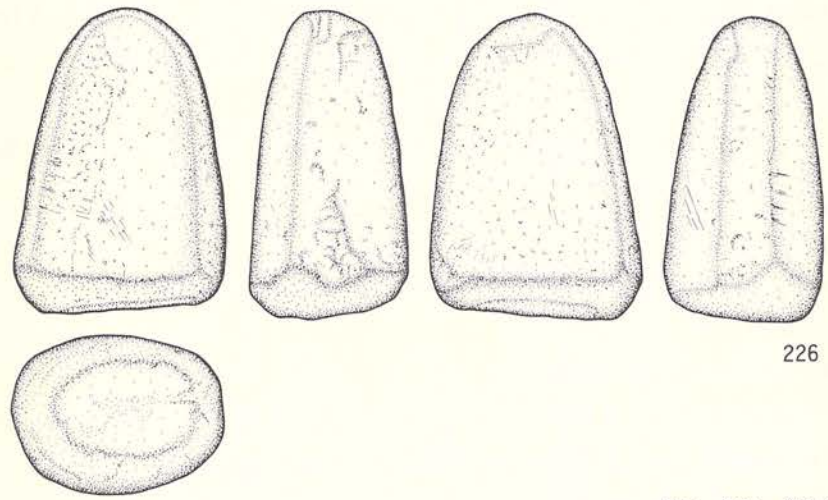
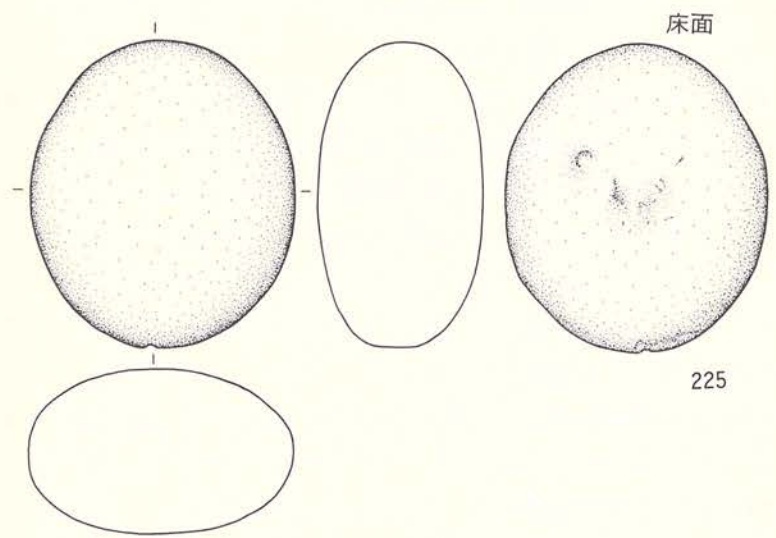
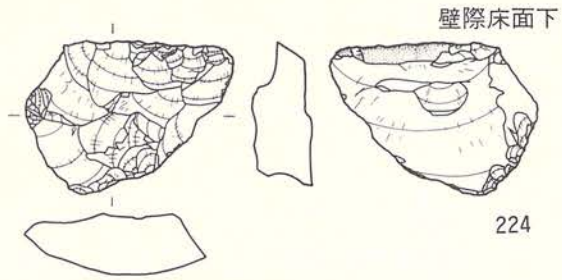
213

203~204・207~212 約 $\frac{1}{2}$
205・213 約 $\frac{1}{3}$
206 約 $\frac{1}{4}$

第38図 H I - 8 住居跡出土遺物(遺物番号203~213)



第39図 HI-8 住居跡出土遺物(遺物番号214~223)



224~226 約 $\frac{1}{2}$

第40図 H I - 8住居跡出土遺物(遺物番号224~226)

ち、227と228は壁寄りの床面から、229～233は中央部床面から、252と260はa層埋土から出土したものとH区粗掘りから出土した破片と接合したもの、その他は主にb～d層から出土したものである。

227は胴長の壺形を呈し、下半に穿孔を有するものである。文様は弧帯状入組文が施文されている。228は体部下半が欠損した深鉢形土器、231は深鉢形土器の底部で228には原体 $L < \frac{R}{R}$ の、231は $R < \frac{L}{L}$ の単節斜縄文が施されている。

229・230は壺形土器で、229は無文、230の体部には原体 $L < \frac{R}{R}$ と $R < \frac{L}{L}$ の横位の羽状縄文が施されている。232・233は無文の鉢形土器である。

234・237・247・248・252・257・258は壺形土器である。237・247には瘤を連結する弧帯状入組文が施文されている。252は体部上半に沈線が認められるがその他は無文である。258は口縁部に角状の突起と瘤を配し、口頸部と体部は隆沈線で区画されているものである。

235・261・262は鉢形土器である。235は口縁部に瘤を規則的に配し、体部には右下がり左下がりの瘤を抱く入組文が施文されているもので、右下がりと左下がりの入組文に挟まれる磨消部は三角状となり、三叉文的文様となっているものである。261は口唇部にB突起を配し、口縁部に2条の沈線を巡らせているものである。

239・241・256は台付深鉢形土器、242は台付鉢形土器である。239は波状口縁を呈し、体部やや上半に浅いくびれをもつ。文様は体部上半に略図化された二段右下がりの入組文が施文されている。256の文様は239と類似するもので、さらに略図化され、一段右下がりの入組文が横位に平行化された文様となっているものである。241は体部下半で原体 $L < \frac{R}{R}$ と $R < \frac{L}{L}$ の羽状縄文が施されている。242は口縁部に2条平行の帯縄文が施文されているものである。

265の石鏃は円礫の剥片を主として片面から剝離調整を施しているもので、製作途中のものである。266は平面形が三味線の撥形を呈し、刃部は主に片面から打ち欠いて刃を作り出している。

これら出土遺物のうち、227～233は第IV群土器の3類に、235は4類に、239・253・256は5類に属する土器である。

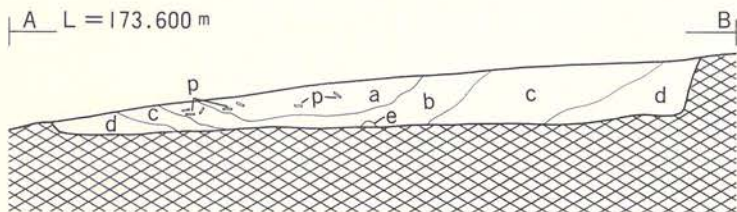
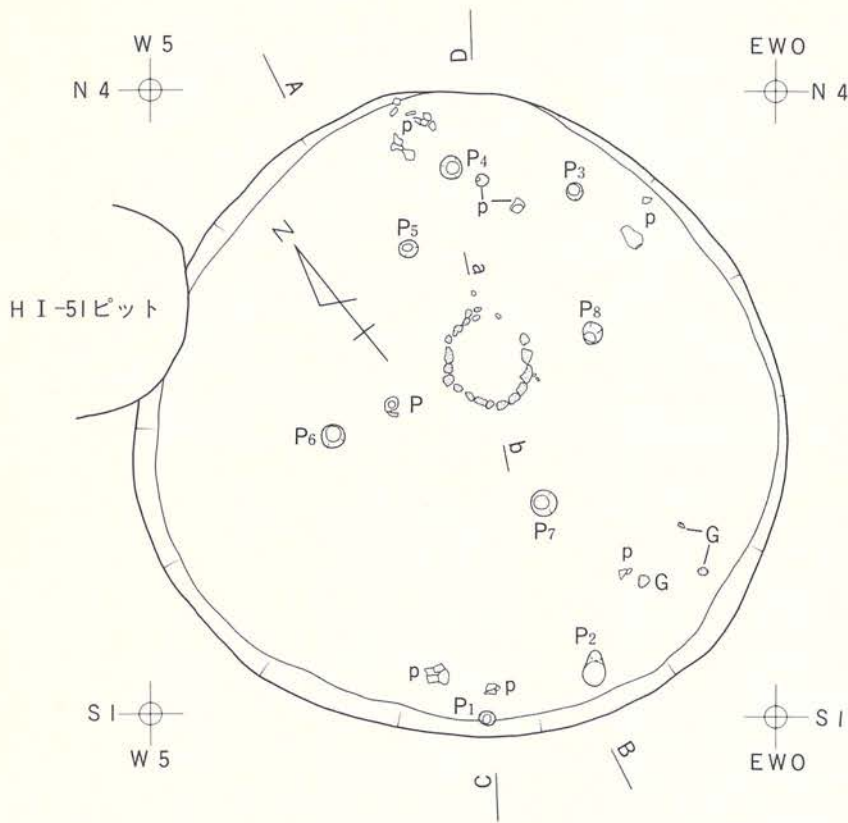
遺構の時期

床面から出土した土器から、第IV群3類期に位置づけられる。

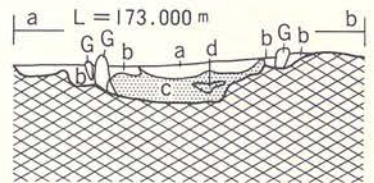
H I—10住居跡

遺 構（第47図、写真図版18～19）

この住居跡は、柱穴のみ検出されたものである。検出面は黒褐色土層である。遺構を含む一帯は、十和田b降下火山灰を含む黒色土で覆われている。遺構の南西、斜面上方（G II—1住の南側）が沢状に落ち込んで、やはり十和田b降下火山灰を含む黒色土が埋土となっている。

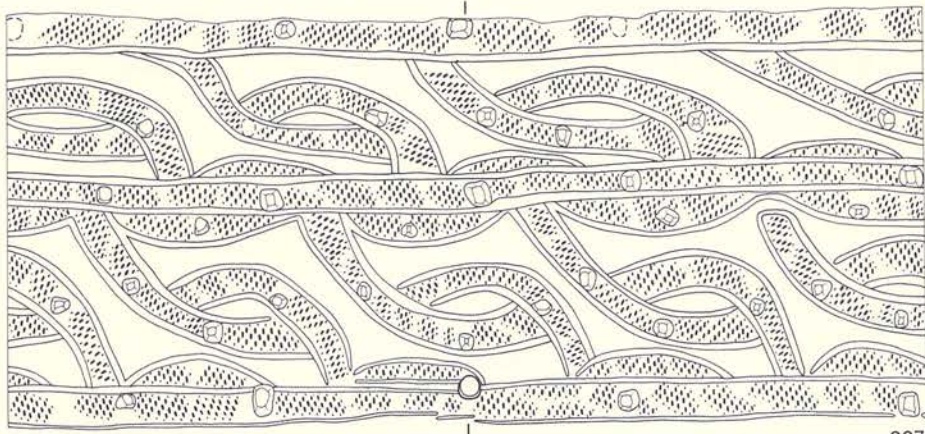


- a. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石 3%)
- b. 7.5Y R3/1 黒褐色土 (含南部浮石 2%)
- c. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石 5%・褐色土ブロック状)
- d. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石 7%)
- e. 10Y R4/3 にぶい黄褐色土



- a. 7.5Y R4/4 褐色土 (含焼土・褐色土)
- b. 7.5Y R4/3 褐色土 (含砂質南部浮石)
- c. 7.5Y R5/8 明褐色土 (焼土)
- d. 2.5Y R4/8 赤褐色土 (焼土)

第41図 HI-9住居跡(平・断面 $S = \frac{1}{60}$, 炉断面 $S = \frac{1}{30}$)



—6.0—

床面

(39.0)·—

227 a

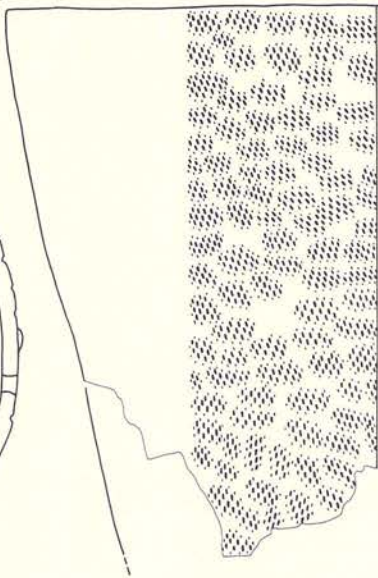
床面



227

8.0·—

床面



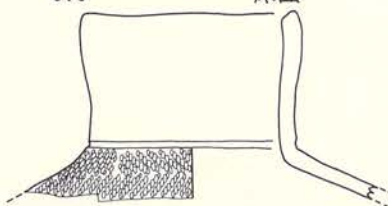
2.8·1.4·6.8 床面

229

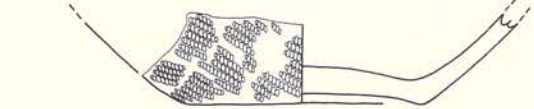
228

床面

—9.0—

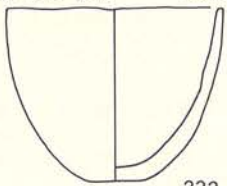


230



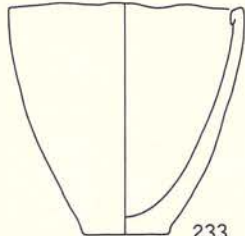
231

8.2·2.2·6.6 床面



232

8.9·3.2·8.8 床面



233



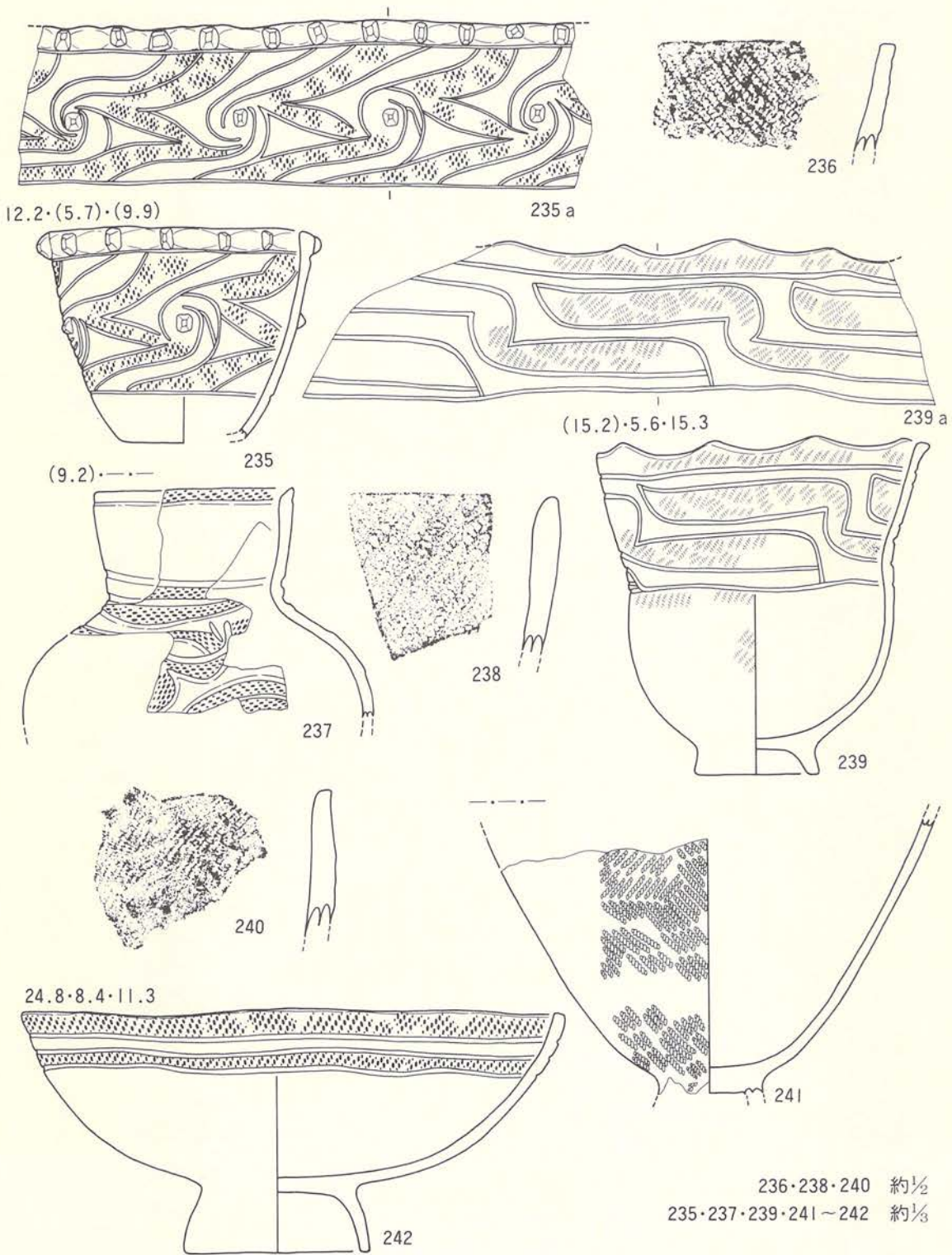
234

234 約 $\frac{1}{2}$

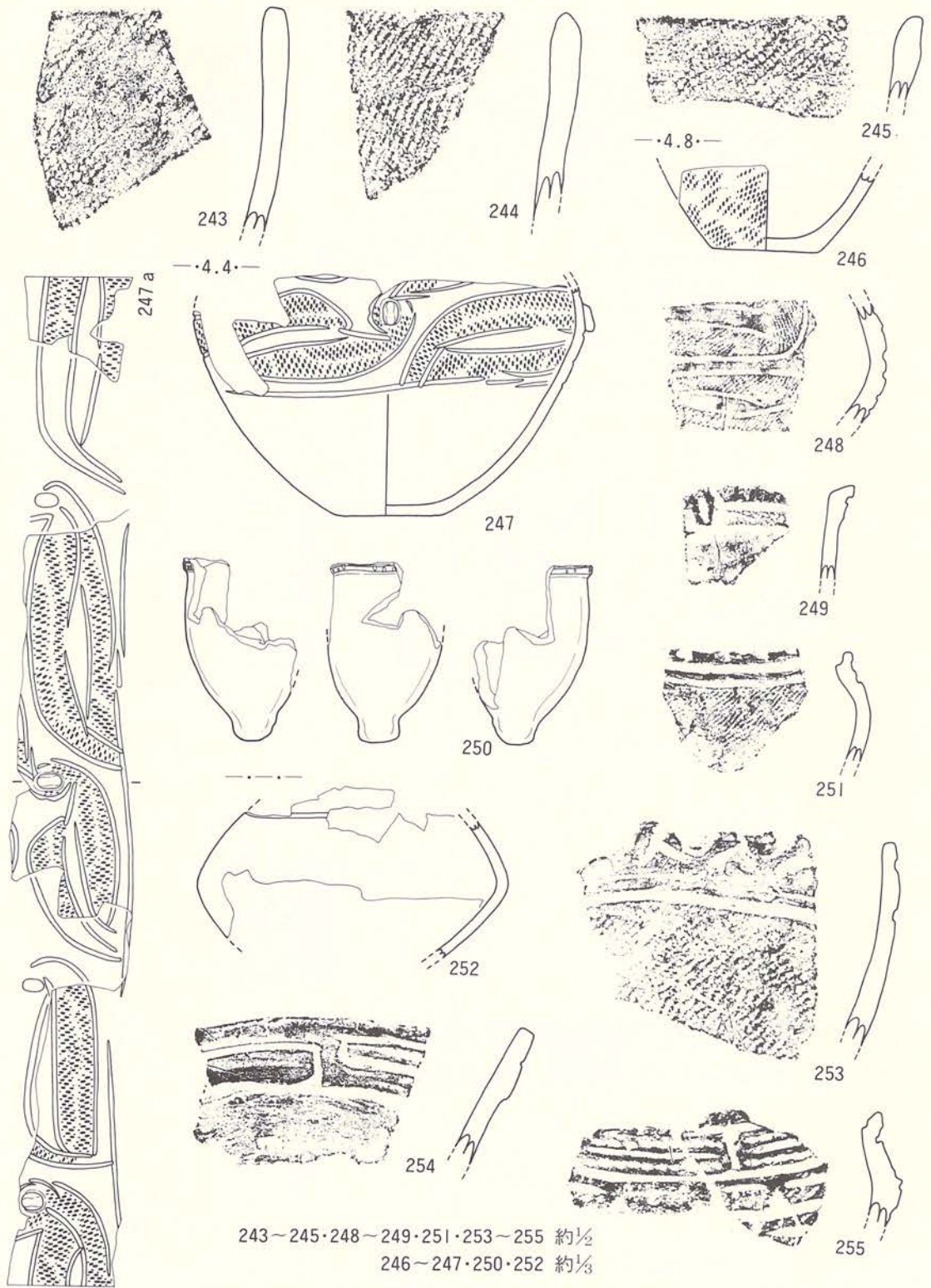
227·229~233 約 $\frac{1}{3}$

228 約 $\frac{1}{4}$

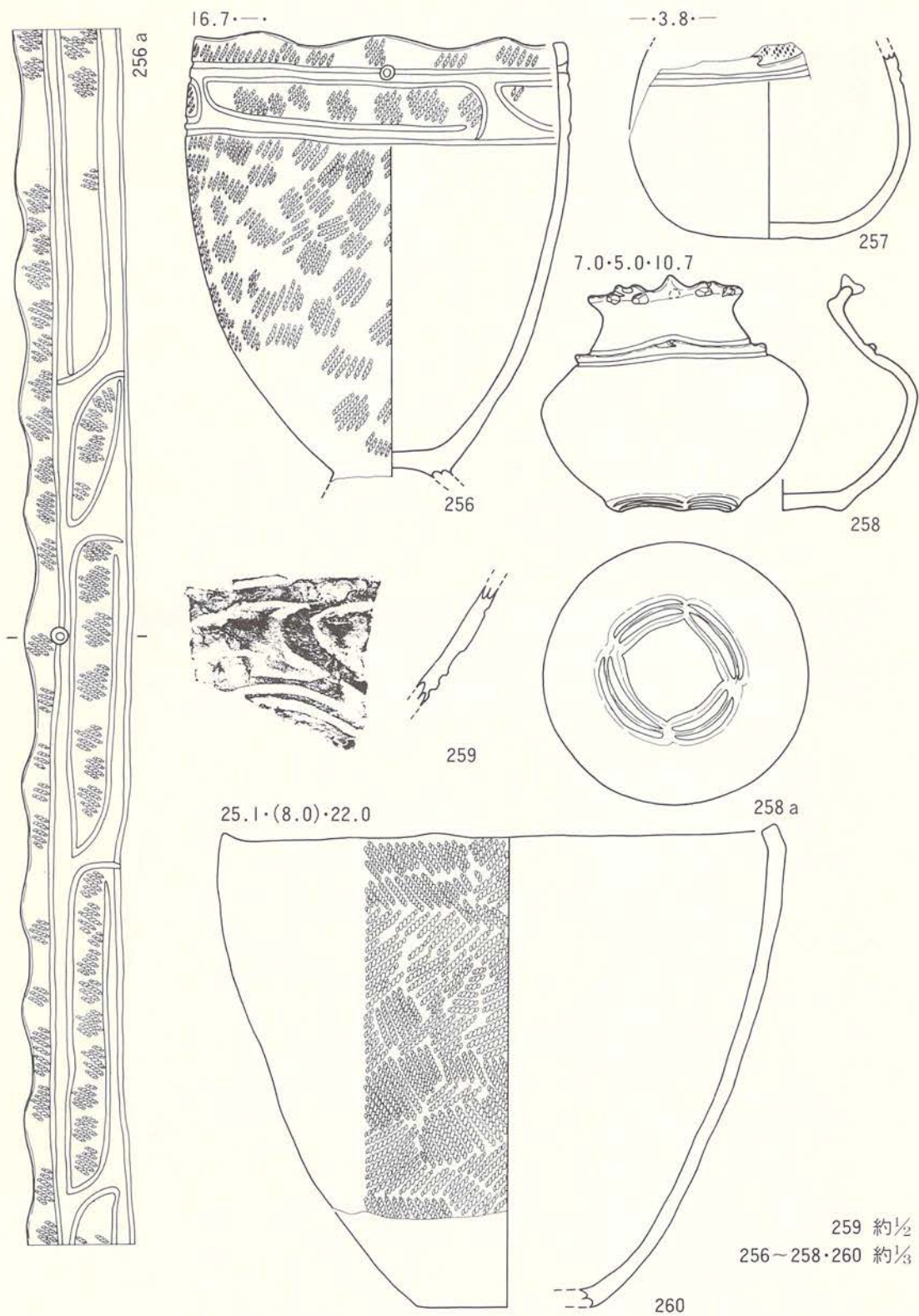
第42図 HI-9 住居跡出土遺物(遺物番号227~234)



第43図 HI-9 住居跡出土遺物(遺物番号235~242)

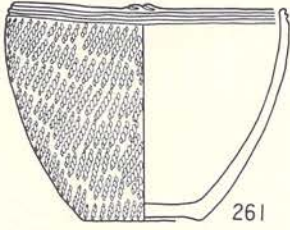


第44図 HI-9 住居跡出土遺物(遺物番号243~255)



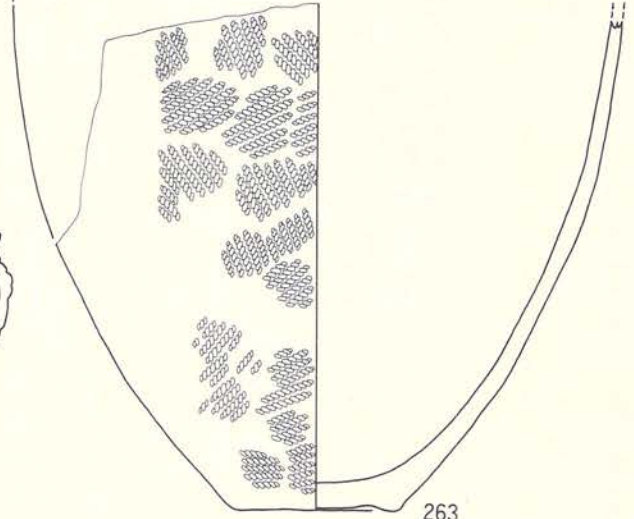
第45図 H I - 9 住居跡出土遺物(遺物番号256~260)

10.4・4.4・8.2



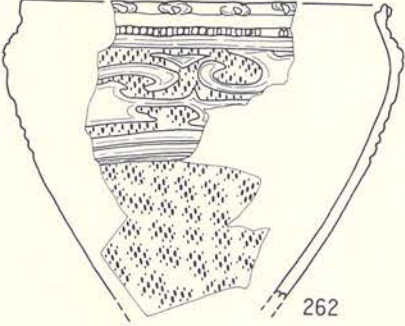
261

—6.4—

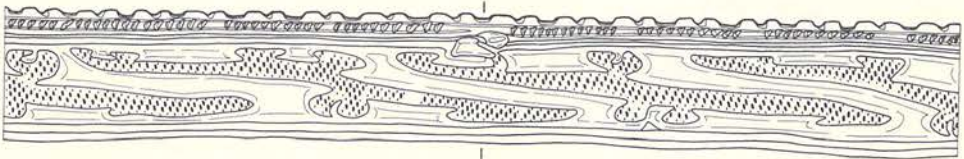


263

(13.8) · — —

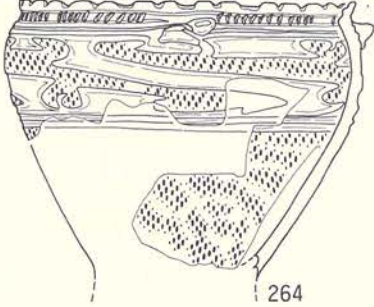


262

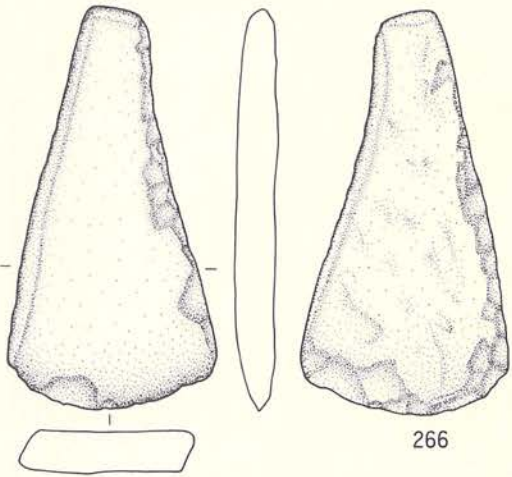


264 a

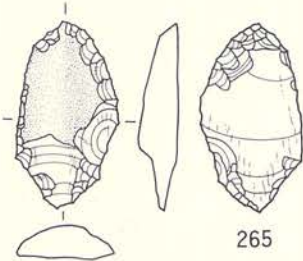
12.7 · — —



264



266



265

265 約原寸
266 約 $\frac{1}{2}$
261~264 約 $\frac{1}{3}$

第46図 H I - 9 住居跡出土遺物(遺物番号261~266)

それと流れの方向が一致するもので、連結するものと思われる。したがって、遺構も流失し、柱穴のみが残されたものと思われる。

当初、粗掘段階で焼土が検出されたことにより遺構の存在が予想された。しかし、土層観察用哇を数本残しながら精査したにもかかわらず、断面にも検出面にも遺構の規模を把握できる痕跡は観察されなかった。ただ、黒褐色土層を掘り下げている段階でP₃～P₅の間に焼土が分布している面が検出されており、その部分が床面であったかとも思われる。それもP₁の検出レベルからすれば30cmほど下がっており、焼土に続く面が確認されなかったものである。

柱穴の検出については、黒褐色土層を掘り下げる前にP₂・P₃を検土杖で確認しており、90cmほどの深さがあったものである。斜面上方側の南部浮石層面で、溝状の黒色土が検出され、完掘した結果柱穴（P₁）となったことにより住居跡と認定した。黒褐色土層が厚く、除去に時間がかかることから、P₁～P₃に対応する位置にP₄～P₆を予想し検出したものである。

柱穴は、P₁とP₄が互いに向かい合うように内傾するもので、他はP₁—P₄を結ぶ線対称の位置に、ほぼ直立するものである。埋土は、下位に南部浮石や八戸火山灰が入り、かたくしまっている。このことから、柱をたてる際に、安定させるため底部に土を入れたものと思われる。その上に柱あたりと思われる黒色土が入るものである。P₄～P₆は上位に検出面の土層と同質の埋土が入っていたものである。柱穴の芯々距離は、P₂—P₆が3.8m・P₃—P₅が3.6m・P₁—P₄は5.9mにも達するものであり、上屋をかけた住居跡は相当大形のものと推定される。

P _{No.}	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆
径 cm	52×49	48×48	44×42	34×28	48×45	50×50
深さcm	86	80	73	55	40	70

(深さは検出面からの実側値である。)

出土遺物

この住居跡に伴うと思われる遺物は出土していない。

遺構の時期

この遺構の時期は不明である。

H II—1 住居跡

遺 構 (第48図、写真図版19～20)

この住居跡はH II—55ピットの南西側約半分を切って構築されているものである。

平面形は円形を呈する。規模は開口部径5.1×5.4m・床面部径4.7×4.9mである。埋土は中央部上位が黒色土で、下位が極暗褐色土、壁際が黒褐色土で構成される。

壁高は東壁で40cm・西壁で70cm・南壁で59cm・北壁で37cmである。床面は平坦である。

炉は地床炉で、床面中央部に位置する。規模は径55×60cmの円形を呈する。炉内部の焼成最大層厚は10cmに及ぶ。柱穴は壁際床面に支柱穴と思われるP₁～P₆が、中央部に主柱穴P₁₁—

P₁₂—P₁₃—P₁₄の4本が、また斜面下方にあたる北東壁寄りには出入口状施設に伴うと思われるP₇～P₁₀が検出されている。

出入口状施設は、柱穴P₉・P₁₀とP₇・P₈をほぼ平行に配し、この間を「H」形の溝状に掘り込んでいるもので、掘り込みは22～26cmに及ぶ。柱穴はP₉とP₇・P₁₀とP₈が対となる。

P _{No}	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄
径 cm	14×19	14×15	11×13	14×15	12×14	13×17	15×35	15×24	26×26	18×21	18×19	16×20	17×18	18×19
深さcm	22	12	11	13	14	21	28	29	28	56	24	55	45	64

出土遺物（第49～50図、写真図版115～117）

遺物は267～288の土器と、289・290の石器が出土している。

これらの遺物のうち267～271・280が床面から、272～274がc層埋土下位から、その他は主にa・b層埋土から出土したものである。

267は台付鉢形土器の台部で、台部と体部の付け根に4個の瘤と、刻目を施し、透かしの見られるものである。体部には2～3条の沈線で弧状入組文が施されている。

268・280は深鉢形土器の体部下半、270・271は口縁部で、268・271は原体 $L < \frac{R}{R}$ の単節斜縄文が、280は綾絡文が、270には口縁部に数条の浅い沈線を巡らせているものである。

269は台部が欠損した小型の台付鉢形土器で、口唇部に刻目を施しているもので、体部は無文である。

272・273・274は壺形土器である。273は口頸部が直立し、体部が脹るもので、口頸部と体部の接点には環状の突起が4個付されており、懸垂したものである。274は口縁部の外反するもので無文である。

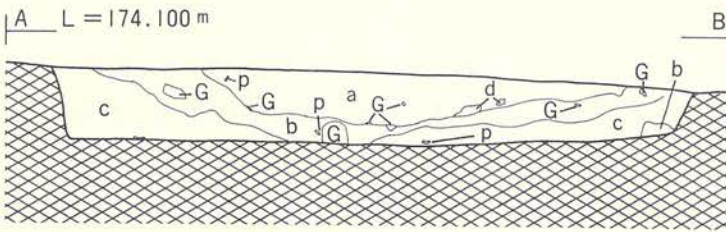
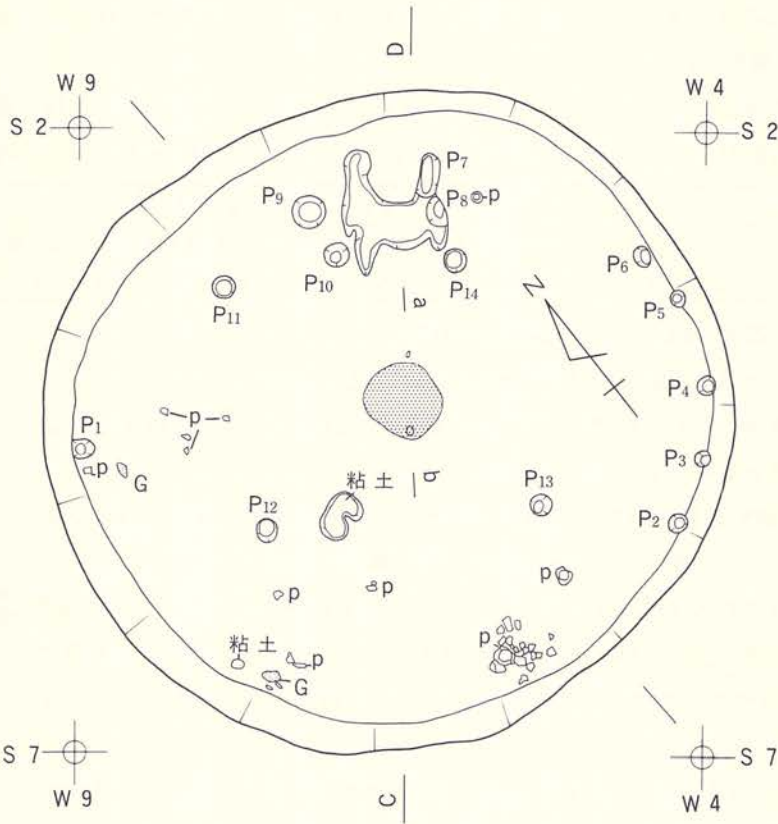
277・283は台付鉢形土器、279・286は鉢形土器か台付鉢形土器と思われる。277の口縁部には斜位沈線間に刻目が施されているもので、羊歯状文の祖型と考えられるものである。279は口唇部に刻目を施し、体部上半に大腿骨文が施文されている。

281・282は深鉢形土器の口縁部破片、285は台付鉢形土器か鉢形土器の口縁部破片と思われるもので、281は波状口縁を呈し、口唇部に刺突を施し、口縁部に沈線で三叉文状の文様が施文されているもの、282には口唇部に刻目と口縁部に沈線間刺突が施されている。289の石鏃は片面基部が欠損した凹基無茎鏃で、両面から入念に剝離調整が施されている。290の磨製石斧は基部が欠損している。

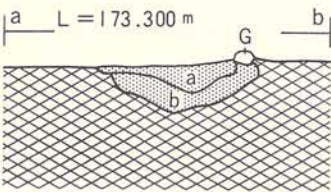
これら出土遺物のうち、267・269は第IV群土器の3類から4類に、277・281～287は第V群土器の1類に、279は2類に属するものである。

遺構の時期

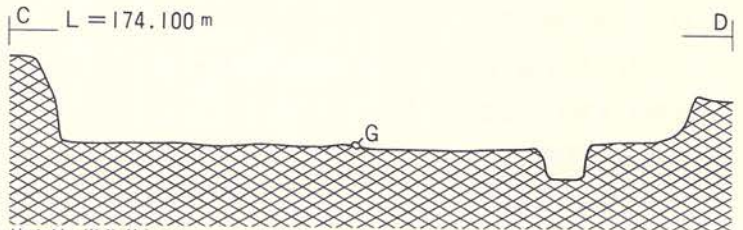
床面から出土した土器から、第IV群3類期から4類期に位置づけられよう。



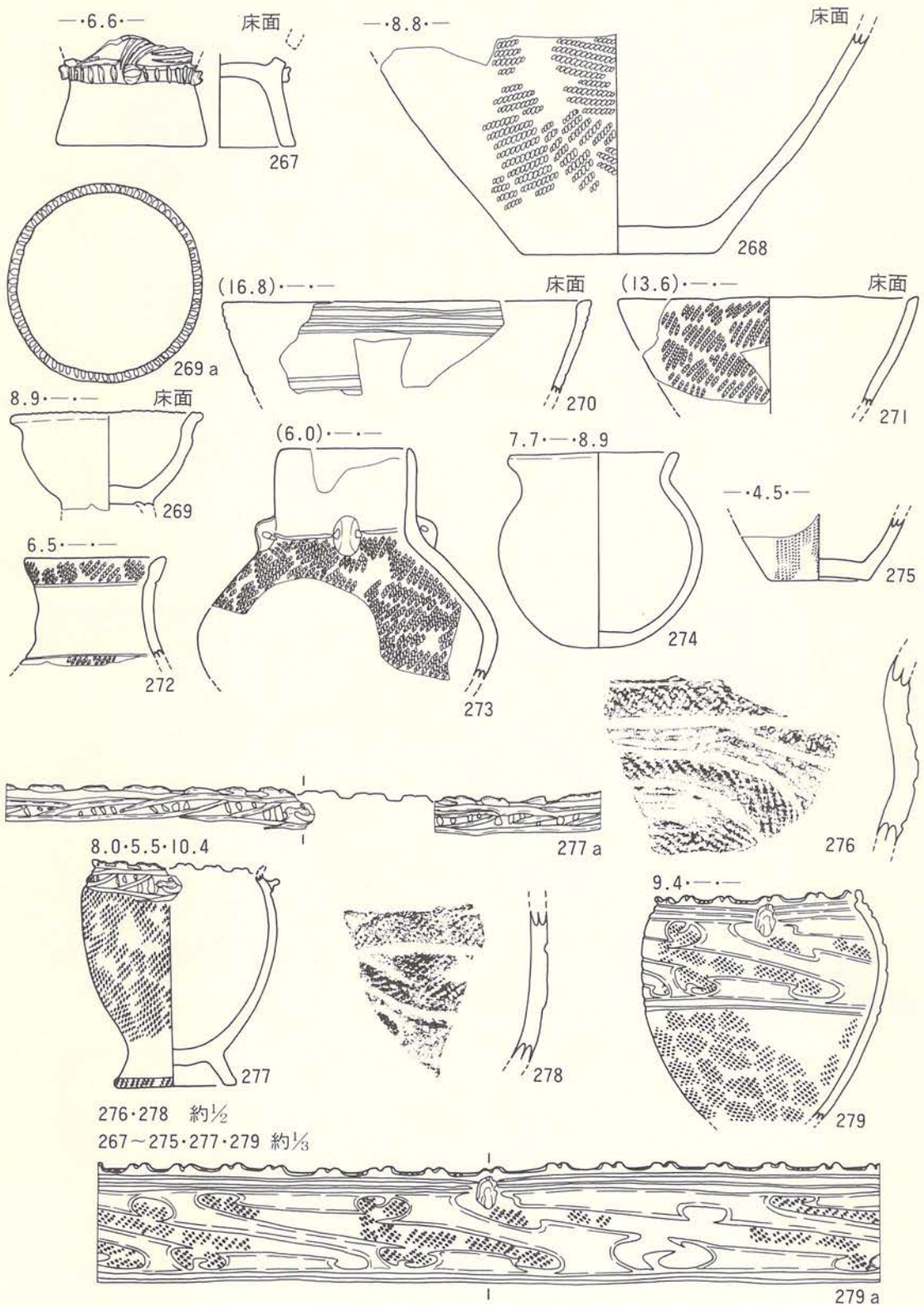
- a. 7.5Y R2/1 黑色土 (含南部浮石 5%)
- b. 7.5Y R2/3 極暗褐色土 (含南部浮石 7%・7.5Y R4/3褐色土ブロック状)
- c. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石15%)
- d. 7.5Y R4/6 褐色土 (南部浮石)



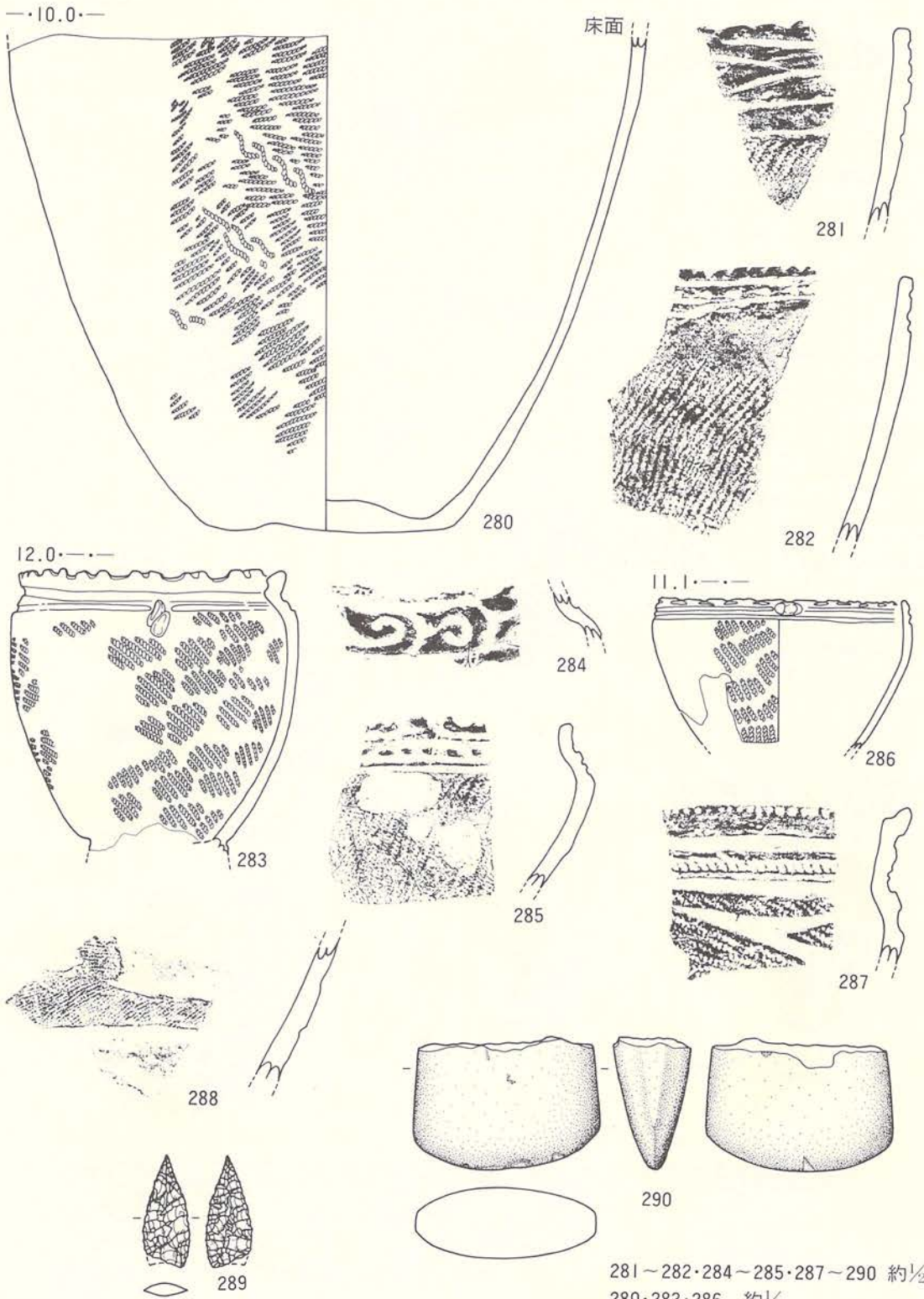
- a. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石2%・焼土粒・炭化物)
- b. 5Y R4/8 赤褐色土 (焼土)



第48図 H II-1住居跡(平・断面 S = 1/60, 炉断面 S = 1/30)



第49図 H II-1 住居跡出土遺物(遺物番号267~279)



第50図 H II-1 住居跡出土遺物(遺物番号280~290)

281~282・284~285・287~290 約 $\frac{1}{2}$
 280・283・286 約 $\frac{1}{3}$

ⅠⅠ-1 住居跡

遺構（第51図、写真図版21～22）

この住居跡は北東側約2/3が調査区外にはいる。床面には検出された平面プランとは異なる柱穴列が確認され、2棟の住居跡が存在する。これらの住居跡をⅠⅠ-1a住居跡・ⅠⅠ-1b住居跡と呼称し記述する。炉は検出されていない。

新旧関係については埋土断面でみる限り、住居跡を縮小した条件は見当たらず、ⅠⅠ-1b住居跡をⅠⅠ-1a住居跡の規模に拡張したものと思われる。従ってⅠⅠ-1a住居跡が新しい。

ⅠⅠ-1a住居跡

平面形は円形を呈する。規模は検出された壁から推定して、開口部径6.6m前後の住居跡であると思われる。埋土は上位が耕作土、下位が部分的に攪乱されている黒色土、南東側下位が極暗褐色土で構成される。

壁高は南東壁で30cm、南西壁で36cm、北西壁で37cmである。床面は平坦である。柱穴は支柱穴と思われるP₁・P₂がこの住居跡に伴うものと思われる。床面中央部寄りに主柱穴と思われるP₂₂が検出されているが、これはいずれの住居跡に伴うものか不明である。

ⅠⅠ-1b住居跡

この住居跡は柱穴列P₄～P₂₁で構成されるものである。この柱穴列が壁際床面にあったと仮定すると、開口部径5.8m前後の規模をもつものと思われる。南西壁寄り床面にはピットNo.1とピットNo.2が検出されているが、いずれの住居跡に伴うものか不明である。規模はピットNo.1が開口部径32×40cm・底部径25×30cm・深さ15cm、ピットNo.2が開口部径40×44cm・底部径30×33cm・深さ34cmである。埋土はピットNo.1が黒色土の単層、ピットNo.2が上位黒色土、下位黒褐色土で構成される。

P _{No.}	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃
径 cm	17×20	12×13	11×12	12×14	11×11	9×9	11×12	10×10	8×8	7×7	9×9	10×10	8×9
深さcm	70	70	20	24	10	11	12	15	7	11	14	19	15

P _{No.}	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂
径 cm	10×10	10×10	8×10	9×11	10×12	9×10	8×10	7×10	26×26
深さcm	15	17	16	22	19	14	21	28	74

出土遺物（第52～55図、写真図版117～121）

遺物は291～320の土器・土偶と321～328の石器が出土している。これら遺物のうち291～294・296・326・327が床面から、328が柱穴の埋土から、295・297～300・321・323・324・325がb層埋土下位から、その他はb層の中・上位・a層埋土から出土したものであるが、a層からb層上位は耕作によって攪乱されているものである。

291・292・295は注口土器である。291は口頸部上半と注口部が欠損しているものである。器形は口頸部が直立し、体部が球状に脹る。体部には横位に展開する木葉状入組文が施文されている。瘤は口頸部と体部最脹部に付される。地文は原体 $L < \frac{R}{2}$ の単節斜縄文である。292は体部上半が欠損しているもので、弧帯状入組文が施文されているものである。295は完形の注口土器である。器形は291と同様に口頸部が直立し、体部が球状に脹る。注口部付け根の下部は「L」字状に太くなる。文様は体部最脹部に付された瘤間を長形状に沈線で区画し磨消しているものである。地文は原体 $L < \frac{R}{2}$ の単節斜縄文である。

293は体部にくびれをもつ深鉢形土器で、くびれから上半が欠損しているものである。くびれは沈線によって区画されているものと思われる。地文は原体 $R < \frac{L}{2}$ の単節斜縄文である。

294は小型の鉢形土器で、原体 $R < \frac{L}{2}$ と $L < \frac{R}{2}$ の横位に流れる羽状縄文が施文されている。底部は平らで落ちつきが良い。

297・298は注口土器か壺形土器と思われるもの、303・314は壺形土器で、297・298・303には左下がりの弧帯状入組文が施文されている。314は胴長で、地文に $L < \frac{R}{2}$ の単節斜縄文が施されている。

296・299・300・319は粗製深鉢形土器、318・320は粗製深鉢形土器と思われるもの、316は精製深鉢形土器である。296・299・319の口縁部は折り返し状に内側で肥厚するものである。316は波状口縁を呈し、体部に浅いくびれをもつもので、口唇部に刻目が施されている。文様は体部上半に平行化する沈線の上下に半円状の区画沈線が施されているものである。貼瘤は口縁部からくびれ直下まで付される。

317は台付鉢形土器で無文である。

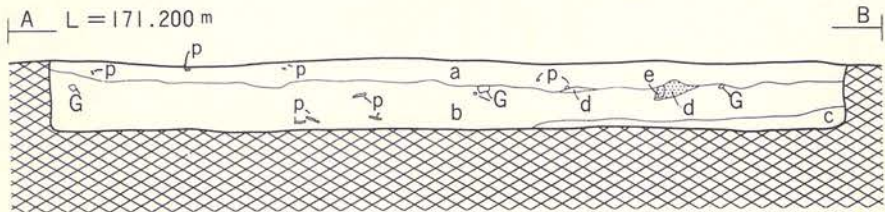
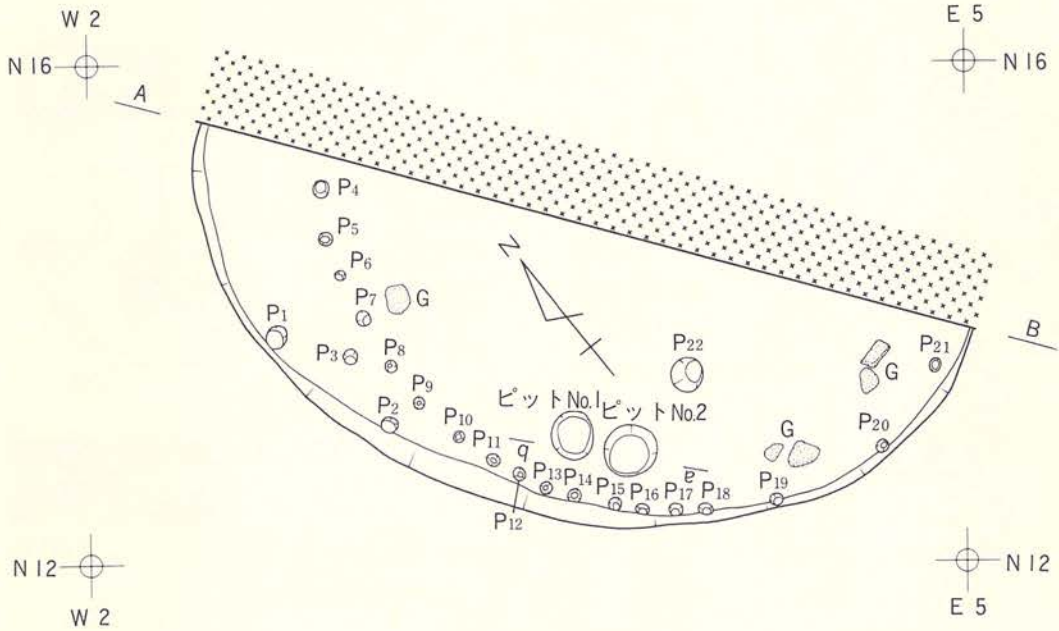
315は土偶の足で無文である。

321の石鏃は円基鏃で、肉薄であり、両面から入念に剝離調整が施されている。322の石錐はつまみをもち、錐部を順次細身にしているものである。323・324は縦型石匙で、片面両側縁に刃部剝離調整が施されている。325の磨製石斧は基部及び刃部片面が欠損しているもので、刃部と側面に敲打痕が認められるところから敲石に転用したものであろう。326・327の石皿はどちらも扁平な角礫で、326の片面中央は凹状を呈する。328は長楕円状を呈し、両面にそれぞれ2個の凹みを有するものである。

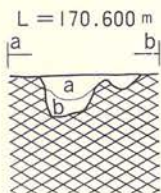
これら出土遺物のうち、291～295は第IV群土器の1類に、297・298・303は2類から3類に、316は3類から4類に属するものである。

遺構の時期

床面から出土した土器から、第IV群1類期に位置づけられる。

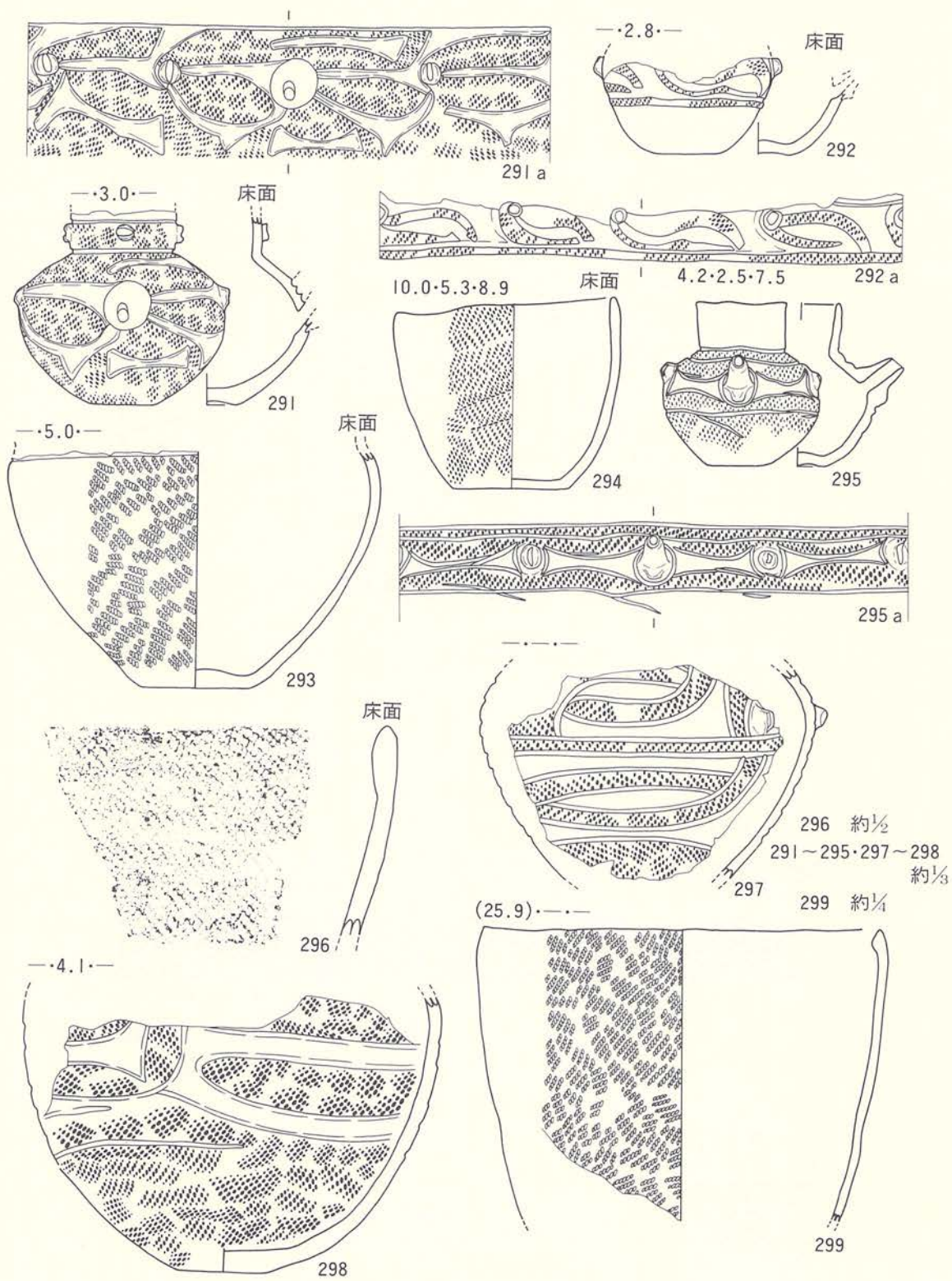


- a. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (耕作土)
- b. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石 2%)
- c. 7.5Y R2/3 極暗褐色土 (含南部浮石10%)
- d. 7.5Y R3/3 暗褐色土 (含焼土)
- e. 7.5Y R4/4 褐色土 (焼土)



- a. 7.5Y R1.7/1 黒色土 (含南部浮石10%)
- b. 7.5Y R3/1 黒褐色土 (汚れた南部浮石層)

第51図 I I - 1 住居跡(平・断面 $S = \frac{1}{60}$)



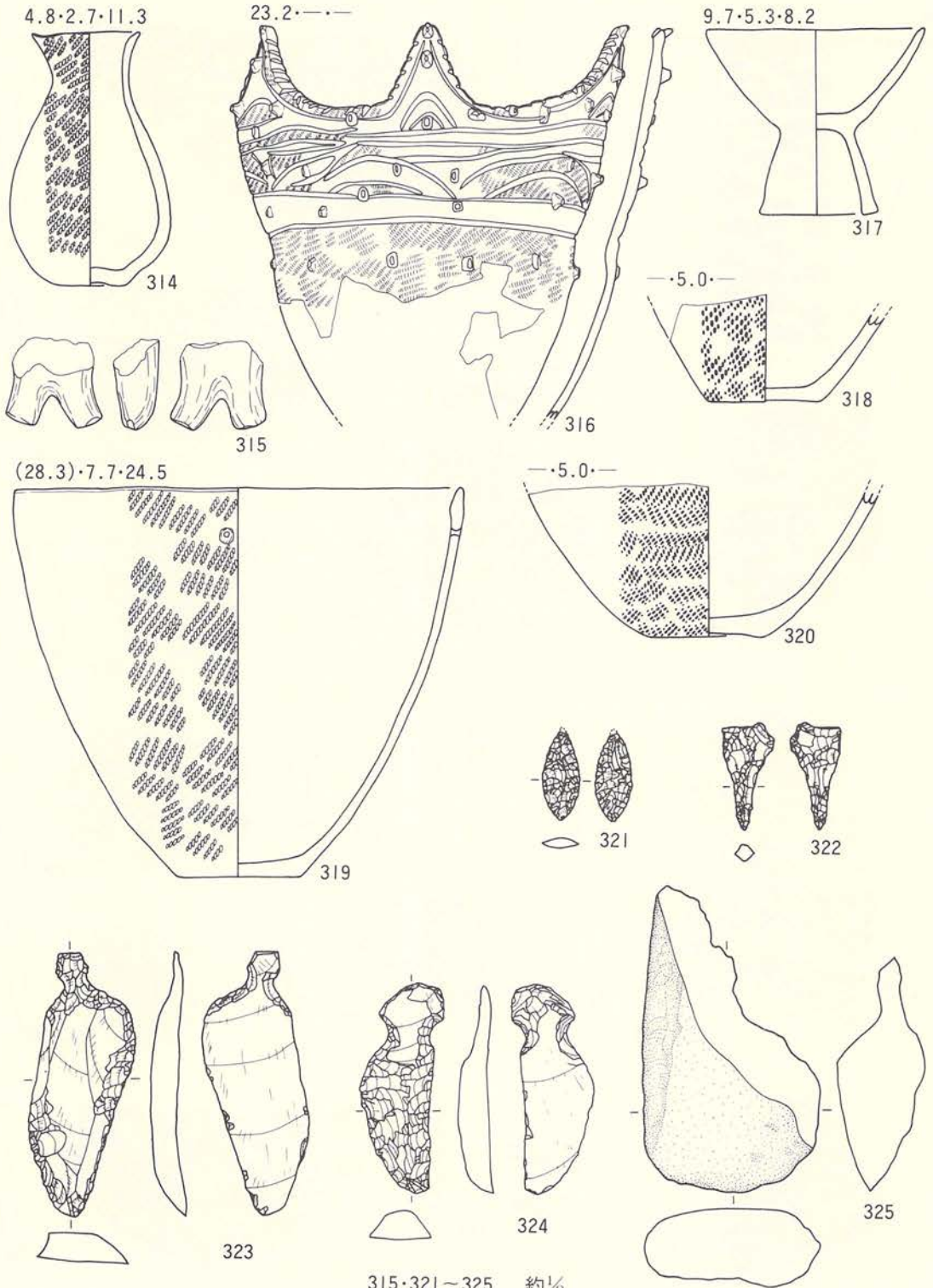
第52図 I I - 1 住居跡出土遺物(遺物番号291~299)

19.2. ---



第53図 I I - 1 住居跡出土遺物(遺物番号300~313)

301~302・304~313 約 $\frac{1}{2}$
300・303 約 $\frac{1}{3}$

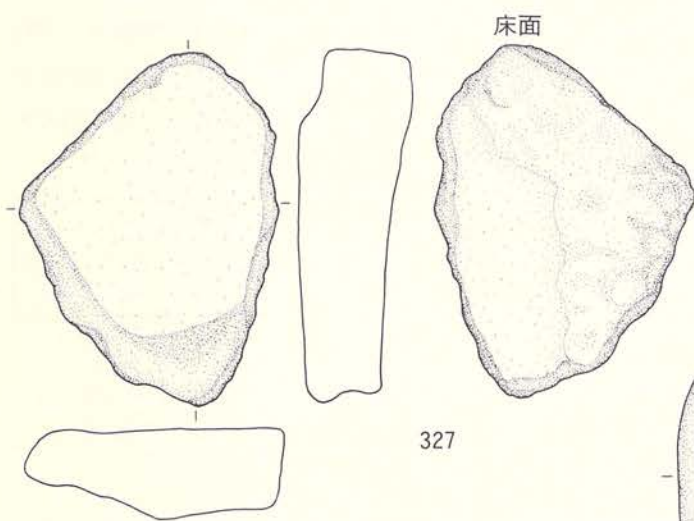
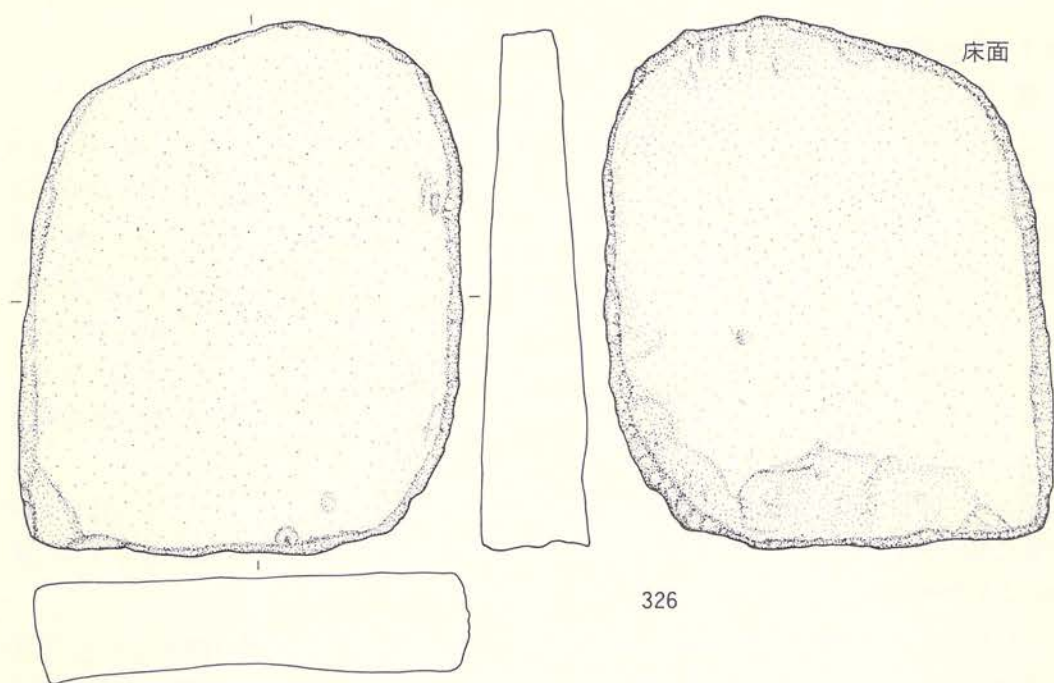


315·321~325 約 $\frac{1}{2}$

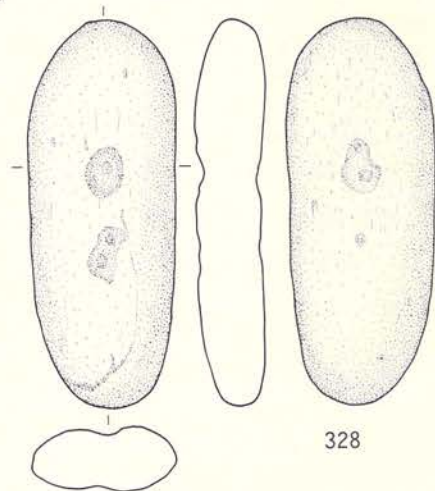
314·317~318·320 約 $\frac{1}{3}$

316·319 約 $\frac{1}{4}$

第54図 I I - 1 住居跡出土遺物(遺物番号314~325)



326~328 約 $\frac{1}{3}$



第55図 I I-1 住居跡出土遺物(遺物番号326~328)

I I—2 住居跡

遺 構（第56図、写真図版22～24）

この住居跡の平面形は、北西から南東に長軸をもつ楕円形を呈する。規模は、開口部径4.6×4.3m、床面部径4.3×3.7mである。埋土は、上位中心部が黒褐色砂質土、その下位がパミスの多い黒色土で平面で見るとドーナツ状に見える。中位が黒褐色土であるが、dは焼土が主体となるもので、南東半には面的な広がりをもって分布している。eは灰様のものが含まれ上半が白っぽく見える。下位が暗褐色土で、hには焼土が含まれる。壁寄りには黒色土である。北壁、東壁に灰様のものがブロック状に入る。ほとんどが炭化物を包含しているが最も多いのはgである。また、ほとんどの層から土器や石器が出土している。特に南東半にある焼土層上には、つぶれた深鉢が載っている。

壁高は、東壁30cm、西壁88cm、南壁94cm、北壁33cmである。急斜面にあることから南西部が非常に高く、最大1mにも達する。床面は、南部浮石層から黒褐色土層でほぼ平坦である。床面から石斧や石棒が出土している。

炉は地床炉で、床面中央から30cm北東に寄ったところに位置する。規模は62×57cmで、不整な楕円形を呈する。焼土の層厚は9cmであるが、上位は汚れており、下位の純粋焼土厚は最大7cmである。柱穴はP₁～P₂₅が検出されている。これらのうちP₁～P₁₉は壁柱穴である。主柱穴を構成するものは、規模から推定してP₂₂又はP₂₃—P₂₄—P₂₅である。P₂₄については炉に近いこともあり含まないのかもしれないが、それに代わる規模の柱穴が北東側床面には検出されていない。

P _{No}	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃
径 cm	15×14	10×9	12×10	11×10	11×10	10×10	15×12	9×7	10×10	12×11	11×9	12×9	14×11
深さcm	15	10	13	6	3	15	9	3	7	7	4	6	9

P _{No}	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄	P ₂₅
径 cm	16×14	7×7	10×7	10×10	13×12	9×7	15×14	23×20	25×20	23×20	18×18	25×22
深さcm	3	2	7	8	9	10	33	7	41	37	40	37

出土遺物（第57～62図、写真図版121～126）

遺物は329～349の土器と、350～366の石器が出土している。これら遺物のうち、329・350・361・363が床面から、その他は埋土から出土したものであるが、337・341・343は粗掘りから出土した破片と接合したもの、336はH I—9住居跡埋土から出土した破片と、また349はI I—3住居跡埋土から出土した破片と接合したものである。

329は体部上半及び注口部が欠損した注口土器である。器形は体部上半が脹るもので、最腹部に3個の貼瘤を付し、その下位に右下がりの弧帯状入組文が施文されている。入組文には原

体 $L < \frac{R}{R}$ の単節斜縄文が充填されている。

330は完形の香炉形土器である。口縁部は波状を呈し、体部には4個の瘤を連結する弧状入組文が沈線で施文されている。貼瘤の上下にはそれぞれ穿孔を有するところから懸垂したものと思われる。

332は小型の台付鉢形土器で、波状口縁を呈し、体部上半のくびれに沈線を巡らせているものである。

331・337・340はくびれをもたない精製深鉢形土器、333はくびれをもつ精製深鉢形土器、334・341・343・347・348は粗製深鉢形土器である。331は大型で、口唇部に2個一対の角状突起を規則的に配し、体部には主として左下がりの弧帯状入組文が施文されているもので、貼瘤は口縁部と体部中位に付されている。337も大型で、口唇部には大小の突起を交互に配し、体部上半には格子状入組文と右下がりの弧帯状入組文が施文されている。貼瘤は口縁部から体部まで付されている。340の体部には沈線で区画された変形菱形の磨消が施されているものである。333は体部上半にくびれをもち、口唇部には2個一対の突起を配し、体部には左下がりの帯状入組文が施文されている。335は片口土器で、口の左右にはそれぞれ2個一対のB状突起を配し、地文に原体 $L < \frac{R}{R}$ の単節斜縄文が施されている。

336は壺形土器か注口土器の口頸部、338・342・349は注口土器である。336は地文に原体 $L < \frac{R}{R}$ と $R < \frac{L}{L}$ の横位羽状縄文が施されている。338は体部上半が欠損しているもので、太めの弧帯状入組文が施文されている。342は台付鉢形を呈する注口土器で、口唇部には角状突起を規則的に配し、体部上半に浅いくびれをもつもので、体部には沈線で弧帯状入組文が施文されている。貼瘤は口縁部から体部に付され、注口部付け根下部にも付される。349は大型の注口土器で、体部上半が脹り、口頸部が外反する。体部には弧帯状入組文が施文されている。貼瘤は口頸部下位と体部最腹部に付されている。入組文に充填されている原体には $L < \frac{R}{R}$ と $R < \frac{L}{L}$ とがあり、この両方を帯毎に使い分けて施文しているが、一部に両方を使用した縦位に流れる羽状縄文もみられる。

344・345・346はミニチュア土器で、344は無文、345には刺突文が、また346には平行する沈線が施されている。

350～354の石鏃はいずれも凸基有茎鏃で、351～353は両面から入念に剝離調整が、また350と354には粗雑な剝離調整が施されている。351の茎部には膠着剤であるアスファルトが付着している。355の石錐はつまみをもつもので、錐部が欠損している。356・357は縦型石匙で、356は長身、357は先端部が欠損しているものである。358・359は横型石匙で、358は肉厚である。359は片面周縁及び他面2側縁に刃部剝離調整が施されている。360～362の磨製石斧はいずれも刃部か基部が欠損しているものである。363は石棒の頭部で陰刻が施されている。364の石皿は扁

平な角礫で、片面は面全体が凹状に研磨されている。365は磨石併用敲石で、研磨面と長軸端両方に敲打痕の認められるものである。366の磨石はほぼ全面が磨かれているものである。

これら出土遺物のうち、329～331・333・337・342・349は第IV群土器の3類に属する。338は第IV群土器1類から2類に、340は第IV群土器5類から第V群土器1類に属するものである。

遺構の時期

床面から出土した土器から、第IV群3類期に位置づけられる。

ⅠⅠ-3住居跡

遺構（第63図、写真図版25～26）

この住居跡は、ⅠⅠ-55ピットとⅠⅠ-59ピットを切って構築しているもので、さらにⅠⅠ-53ピットとⅠⅠ-54ピットに南壁を切られているものである。床面には列を異にする柱穴列が3列に及び、計3棟の住居跡が存在する。これらの住居跡を、ⅠⅠ-3a住居跡・ⅠⅠ-3b住居跡・ⅠⅠ-3c住居跡と呼称し記述する。

ⅠⅠ-3a住居跡

平面形は円形を呈する。規模は開口部径6.7×7.3m・床面部径6.2×6.9mである。埋土は上位が黒色土、中位が暗褐色土、下位が黒褐色土で構成される。

壁高は東壁で31cm・西壁で29cm・南壁で91cm・北壁で25cmである。床面は平坦である。床面北西寄りには、開口部径80×80cm・底部径55×65cm・深さ27cmの規模をもつピットが検出されているが、いずれの住居跡に伴うものか不明である。このピットの埋土は黒褐色土の単層である。

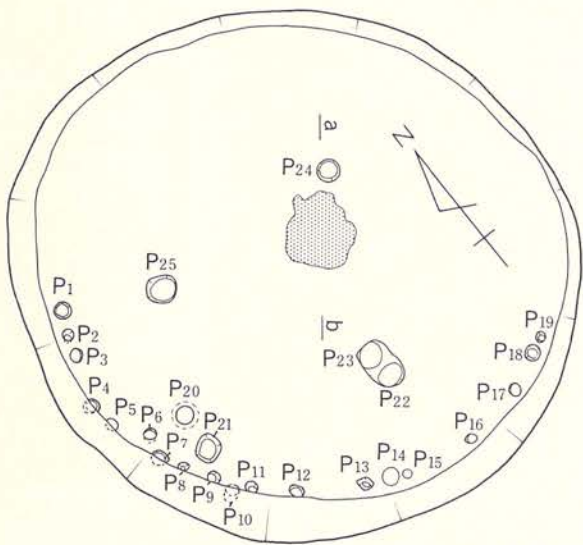
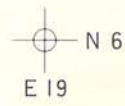
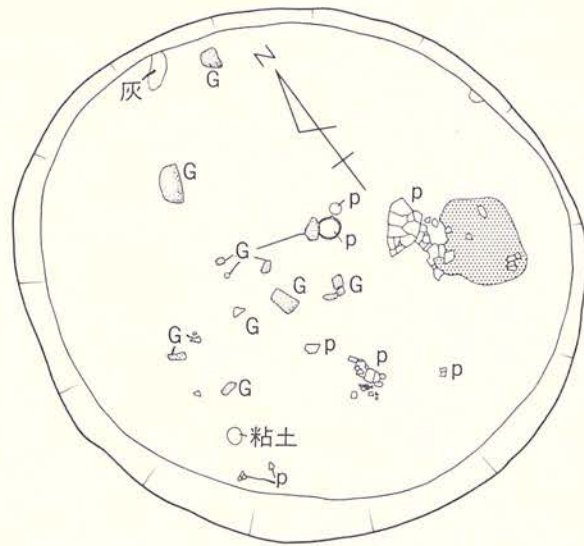
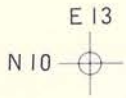
炉は石囲い炉で、床面中央部からやや東寄りに位置する。規模は径75cmの円形を呈し、チャート・礫岩・砂岩を北側を開く半円状に埋置している。炉内部の焼成最大層厚は18cmに及ぶ。柱穴は壁際床面のP₁～P₁₉の支柱穴列で構成される。主柱穴については、どの柱穴がいずれの住居跡に伴うものであるか断定できない。

P _{No}	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃
径 cm	13×14	11×11	12×12	12×15	14×16	14×16	12×12	11×11	15×16	14×16	13×16	10×11	10×10
深さcm	19	10	14	17	11	18	12	12	16	27	23	21	12

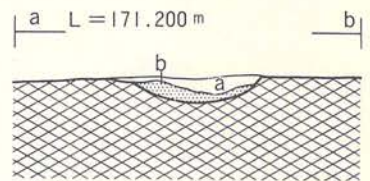
P _{No}	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄	P ₂₅
径 cm	14×15	17×25	17×17	19×20	11×13	10×11	18×18	16×16	25×25	11×12	13×13	13×16
深さcm	19	20	17	29	23	8	12	7	5	34	10	10

ⅠⅠ-3b住居跡

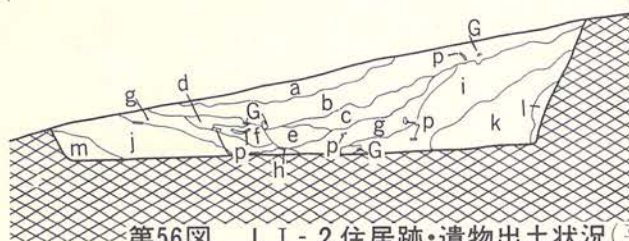
この住居跡は支柱穴P₂₆～P₄₀で構成されるものである。この支柱穴が壁際床面にあったと仮



- a. 7.5Y R3/3 暗褐色土 (含南部浮石 2%·炭化物少量)
- b. 5 Y R5/8 明赤褐色土 (含南部浮石 1%)

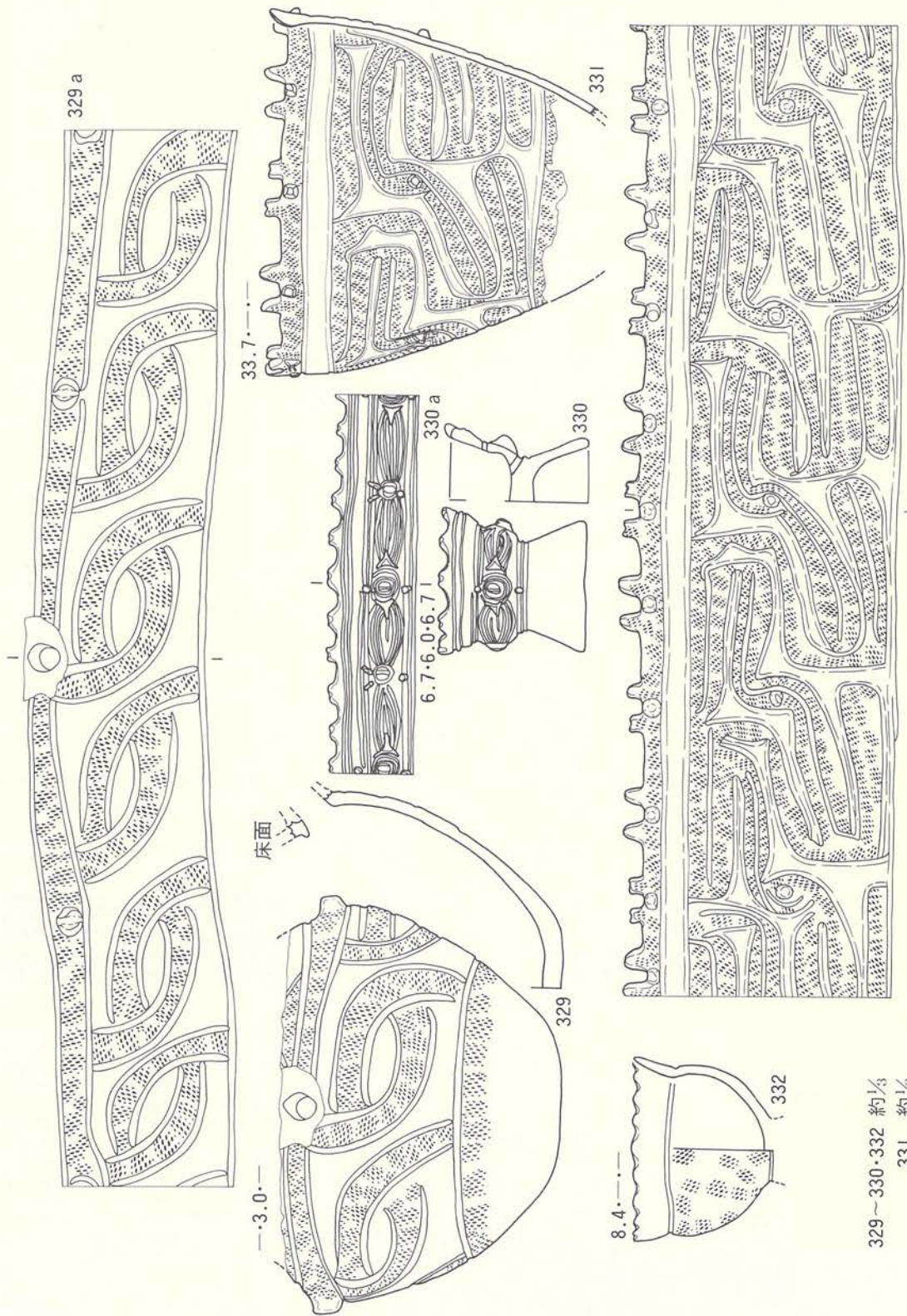


A L = 172.400 m



- a. 7.5Y R3/1 黑褐色土 (含南部浮石 5%)
- b. 10Y R1.7/1 黑色土 (含南部浮石 15%·炭化物)
- c. 7.5Y R2/2 黑褐色土 (含南部浮石 7%·炭化物少量)
- d. 10Y R2/2 黑褐色土 (含南部浮石 3%·炭化物)
- e. 7.5Y R3/2 黑褐色土 (含南部浮石 5%·炭化物)
- f. 7.5Y R2/3 极暗褐色土 (含南部浮石 7%·炭化物)
- g. 7.5Y R3/3 暗褐色土 (含南部浮石 7%·炭化物)
- h. 10Y R3/3 暗褐色土 (含南部浮石 3%·炭化物)
- i. 10Y R2/1 黑色土 (含南部浮石 5%·炭化物少量)
- j. 7.5Y R2/1 黑色土 (含南部浮石 3%)
- k. 7.5Y R1.7/1 黑色土 (含南部浮石 2%·炭化物)
- l. 7.5Y R3/4 暗褐色土 (含南部浮石 5%)
- m. 7.5Y R2/1 黑色土 (含南部浮石)

第56图 I I - 2 住居跡・遺物出土状況(平・断面 $S = \frac{1}{60}$, 炉断面 $S = \frac{1}{30}$)



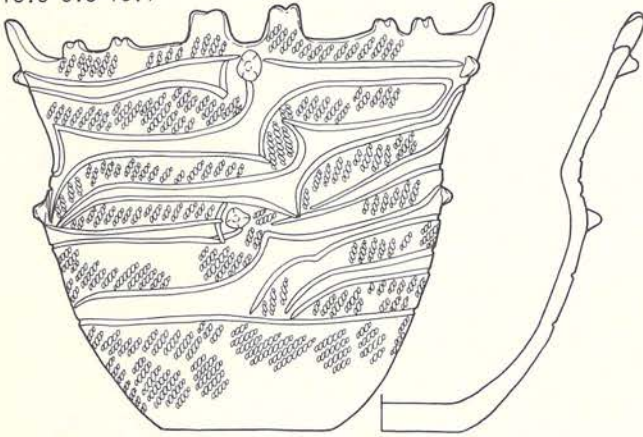
331 a

第57図 I-2 住居跡出土遺物(遺物番号329~332)

329~330・332 約 $\frac{1}{8}$

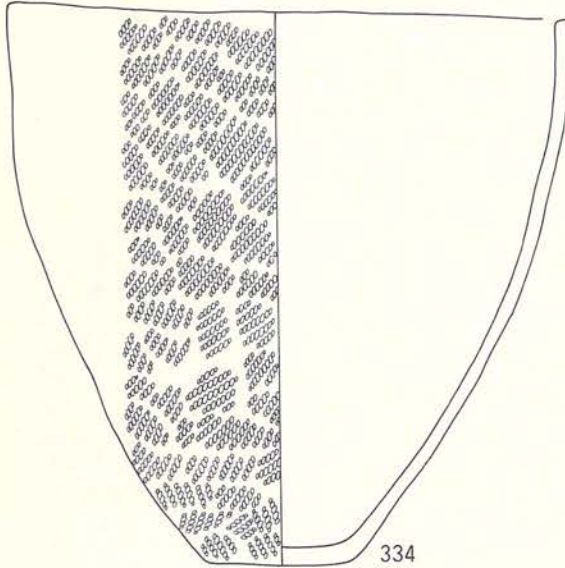
331 約 $\frac{1}{6}$

18.5・6.3・16.1



333

(21.1)・5.4・21.3



334

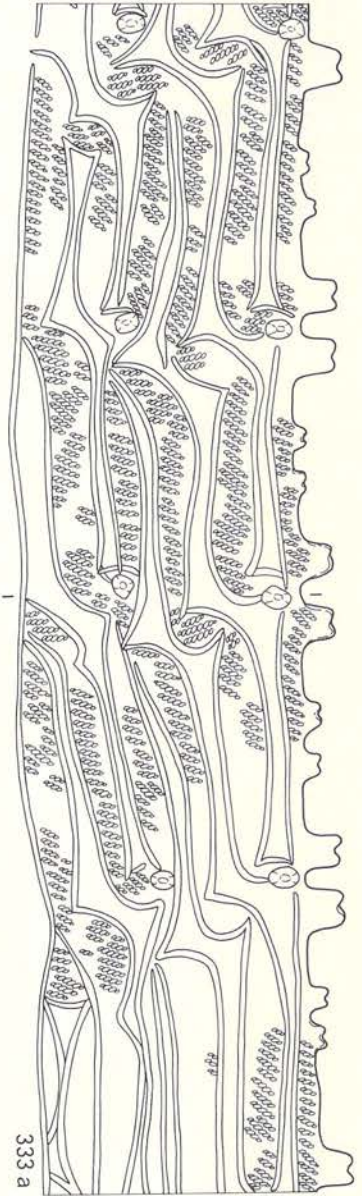
(25.9)・—・—



335

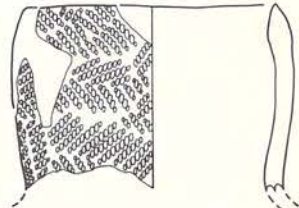
333~334・336 約 $\frac{1}{3}$

335 約 $\frac{1}{4}$



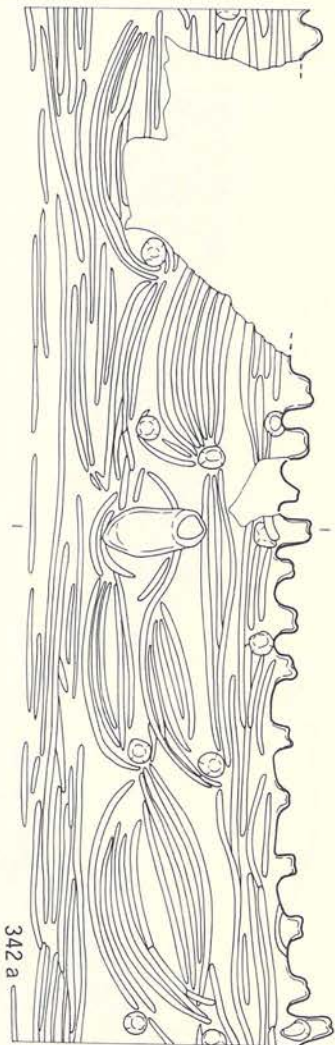
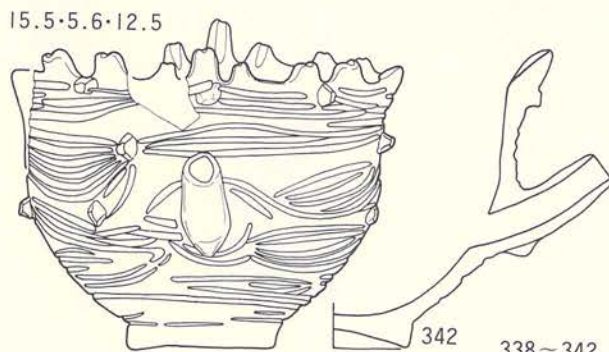
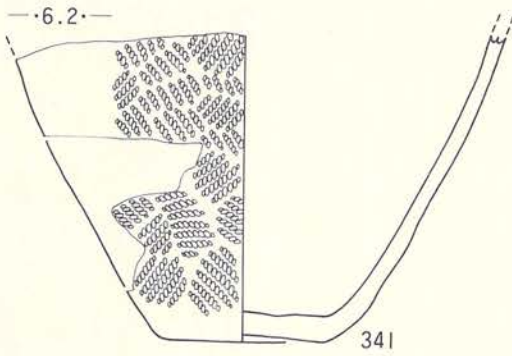
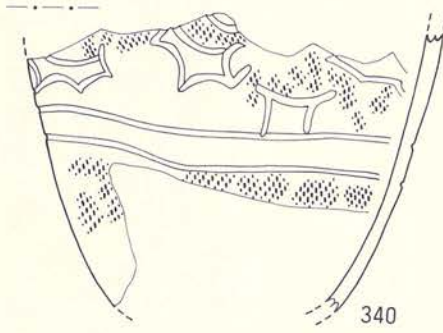
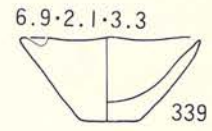
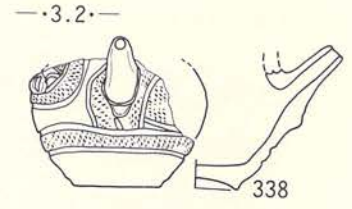
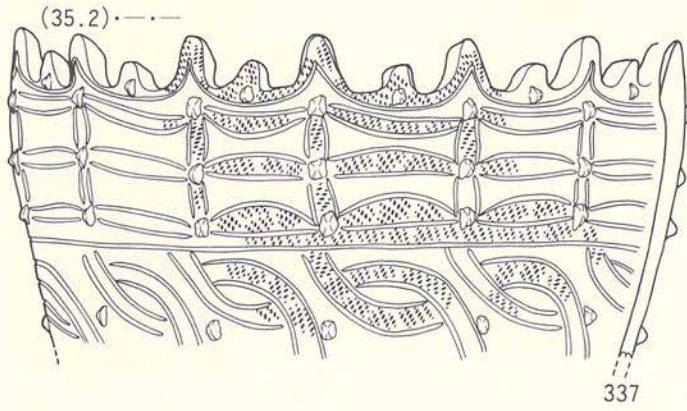
333 a

9.6・—・—



336

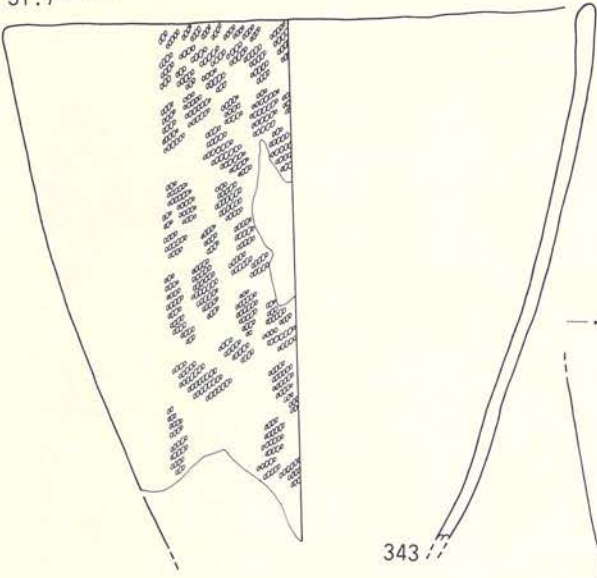
第58図 I I - 2 住居跡出土遺物(遺物番号333~336)



338~342 約 $\frac{1}{3}$
337 約 $\frac{1}{4}$

第59図 I I-2 住居跡出土遺物(遺物番号337~342)

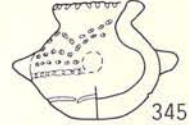
31.7



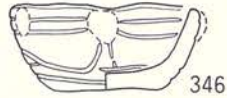
2.7 · 1.2 · 1.8



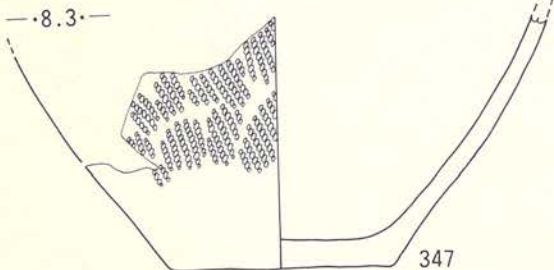
2.1 · (1.3) · 3.2



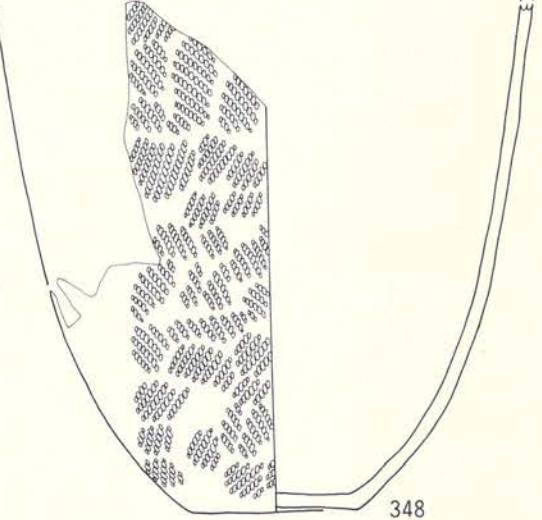
5.0 · 2.8 · 2.2



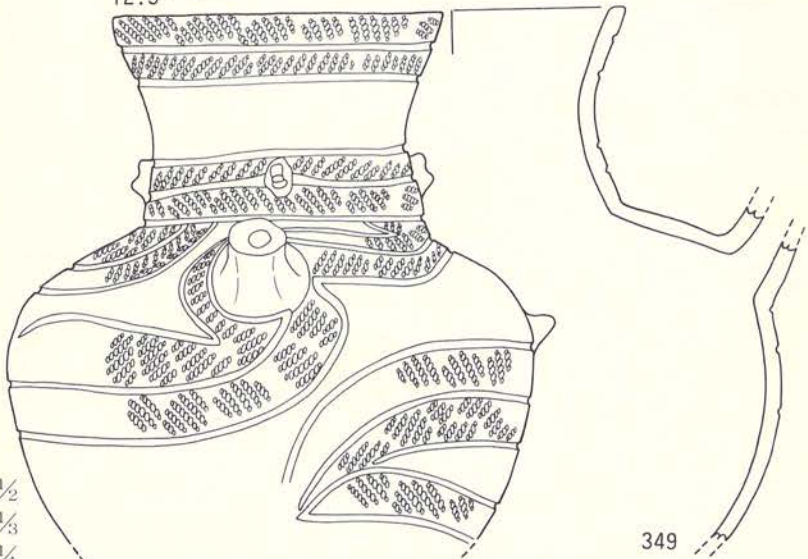
8.3



8.7



12.5

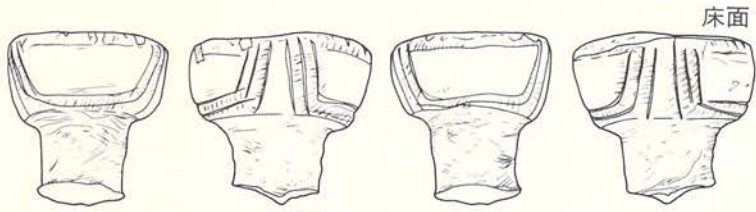


344~346 約 $\frac{1}{2}$
347~349 約 $\frac{1}{3}$
343~348 約 $\frac{1}{4}$

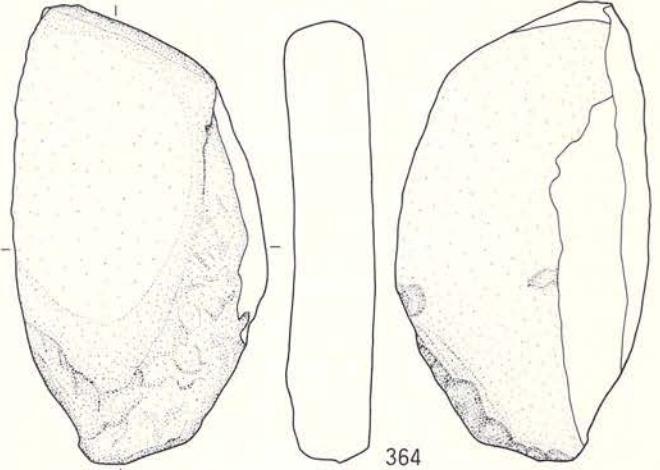
第60図 I I - 2 住居跡出土遺物(遺物番号343~349)



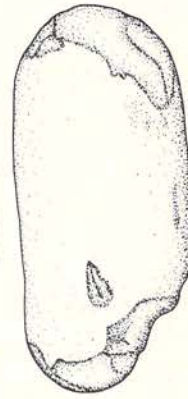
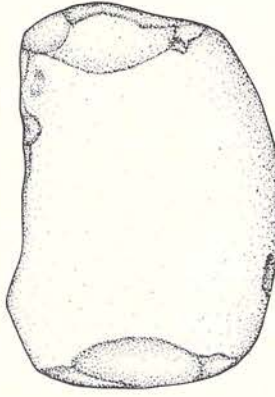
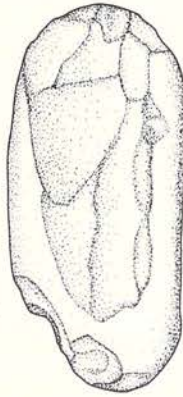
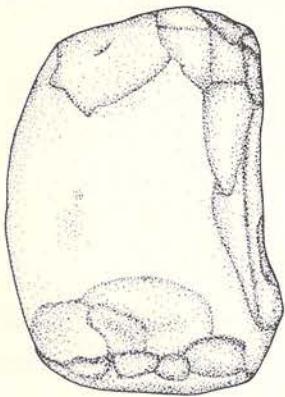
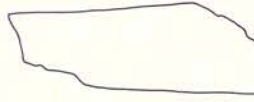
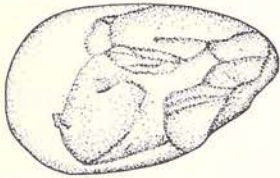
第61图 I I-2 住居跡出土遺物(遺物番号350~362)



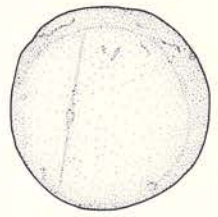
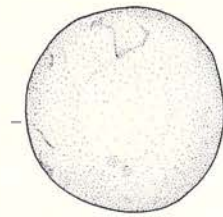
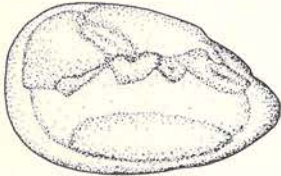
363



364

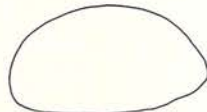


365



366

363・365～366 約 $\frac{1}{2}$
364 約 $\frac{1}{6}$



第62図 I I-2 住居跡出土遺物(遺物番号363-366)

定すると、開口部径6.6m前後の規模をもつものと思われる。

P _{No}	P ₂₆	P ₂₇	P ₂₈	P ₂₉	P ₃₀	P ₃₁	P ₃₂	P ₃₃	P ₃₄	P ₃₅	P ₃₆	P ₃₇	P ₃₈	P ₃₉	P ₄₀
径 cm	14×16	20×22	18×22	20×31	24×24	14×16	18×20	14×15	10×13	18×20	13×15	10×11	10×10	12×13	11×12
深さcm	19	23	24	35	37	20	34	19	27	11	21	16	12	14	13

ⅠⅠ—3c住居跡

この住居跡は支柱穴P₄₆～P₅₅で構成されるものである。この支柱穴が壁際床面にあったと仮定すると、開口部径6m前後の規模をもつものと思われる。

P ₄₁	P ₄₂	P ₄₃	P ₄₄	P ₄₅	P ₄₆	P ₄₇	P ₄₈	P ₄₉	P ₅₀	P ₅₁	P ₅₂	P ₅₃	P ₅₄	P ₅₅	P ₅₆
12×14	10×12	11×12	16×16	30×30	21×25	16×16	16×18	13×15	10×14	20×28	15×16	20×23	12×17	22×24	26×31
27	8	10	15	20	33	20	24	17	14	26	14	23	18	21	57

P ₅₇	P ₅₈	P ₅₉	P ₆₀	P ₆₁	P ₆₂	P ₆₃	P ₆₄	P ₆₅	P ₆₆	P ₆₇	P ₆₈	P ₆₉	P ₇₀	P ₇₁	P ₇₂
18×22	15×17	10×11	13×14	22×23	24×25	25×31	16×18	10×12	11×11	14×15	15×22	27×30	27×32	17×17	14×15
8	12	12	23	27	32	65	13	10	15	26	34	35	68	13	32

出土遺物（第64～67図、写真図版127～130）

遺物は367～399の土器と、400～413の石器が出土している。これらのうち368～370は床面から、367と376が床面から約3～4cmに浮いたc層埋土から、371・377・378・380がc層埋土から、その他はa～b層から出土したものであるが、373・388はⅠⅠ区粗掘りで出土した破片と接合したものである。

367～369・372・374・375・377・379・382・383・385・386～388・394・395・399は深鉢形土器、371・373は鉢形土器である。369の器形は口縁部が肥厚し、内側に反るもの、373は口縁部が外反するものである。386は口唇部に角状突起が配され、体部に弧帯状入組文が施文されているものである。370は壘状を呈する鉢形土器で無文である。

376・380・381は注口土器である。376の器形は体部上半が脹り、口頸部が二段になっているものである。文様は隆線で楕円状の入組文と「し」字状の沈刻が施文され、楕円状入組文の接点には三叉文的要素の認められるものである。380は体部下半に穿孔を有するもので、弧帯状入組文が施文されている。

397は台付鉢形土器で大腿骨文が施文されている。

400～405の石鏃は凸基有茎鏃、406は平基無茎鏃である。404～406は両面から入念に剝離調整が、400・401には粗雑な剝離調整が施されている。402の基部及び茎部には膠着剤であるアスファルトが付着している。407・408は縦型石匙で、407には片面両側縁に刃部剝離調整が施されている。409～411は加工痕のある剝片で、いずれにも側縁部に剝離痕の認められるものである。412の磨石は球状を呈するもので、敲打痕の認められるものである。413の磨製石斧は両

凸刃で、基部が欠損している。

これら出土遺物のうち、376は第IV群の5類に属し、380・386は3類から4類に属するものである。

遺構の時期

床面から出土した土器から、第IV群4類期から5類期に位置づけられよう。

I I—4 住居跡

遺 構（第68図、写真図版27）

この住居跡の北東側約半分の壁及び床面は既に削られ検出されていない。

平面形は円形を呈する。規模は検出された部分の計測で、床面部径5mである。埋土は上位から下位に暗褐色土・極暗褐色土・黒褐色土で構成され、壁際中位が暗褐色土、下位が黒色土で構成される。

炉は石囲い炉で、床面ほぼ中央部に位置する。規模は径60cmのほぼ円形を呈し、チャート・砂岩を間隔的に埋置している。この炉の下位は径120cmの不整形の範囲にわたって、深度10cmに掘り込まれ、黄褐色土で貼られている。炉内部の焼成最大層厚は5cmに及ぶ。柱穴は南西壁際床面に支柱穴P₁～P₁₁が、また支柱穴は炉を囲む形でP₁₂—P₁₃—P₁₄—P₁₅が配される。

P _{No}	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅
径 cm	11×11	13×15	14×15	12×14	10×11	13×13	14×14	15×15	11×14	10×10	13×16	16×25	19×19	17×20	17×19
深さcm	25	14	6	7	6	26	13	22	18	15	10	78	79	72	52

出土遺物（第69～70図、写真図版131～133）

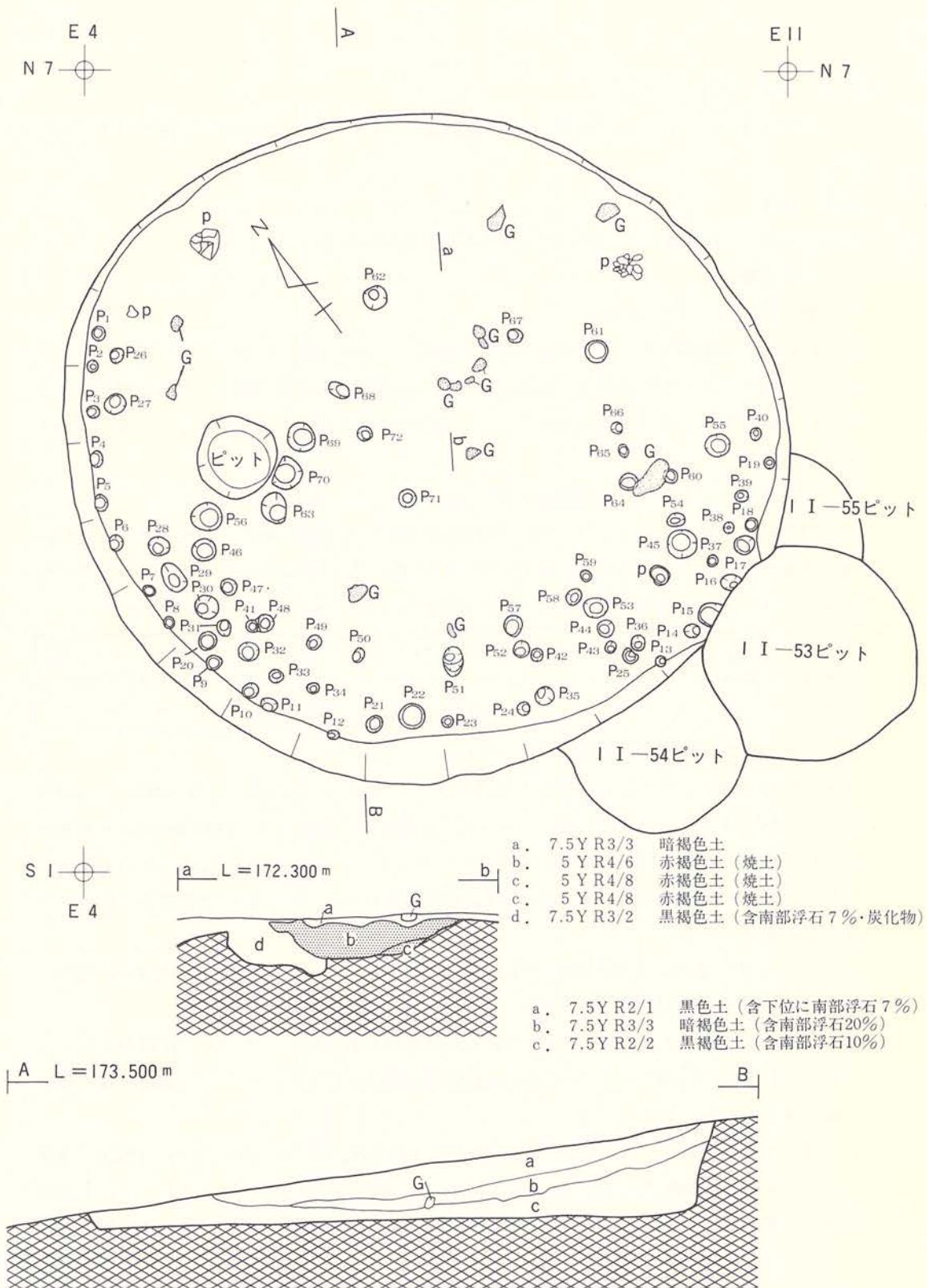
遺物は414～430の土器と、431～443の石器が出土している。これら出土遺物のうち、414は床面から、415～427・430～438・440～442はc～d層から、428・429・439・443はa～b層から出土したものである。425～427はd層埋土下位からセットとなって出土したものである。

414・416・417・419・421・428・430は深鉢形土器である。419・421には弧帯状入粗文が施文されている。

415・420・422・423は壺形土器か注口土器と思われるもの、429は壺形土器である。420と429には弧帯状入粗文が施文されている。

425・427はミニチュア土器で、425の口縁部には角状突起を配し、くびれに沈線を巡らせているものである。427は注口土器で、沈線で弧帯状入粗文が施文されている。426は壺状を呈する土器で無文である。

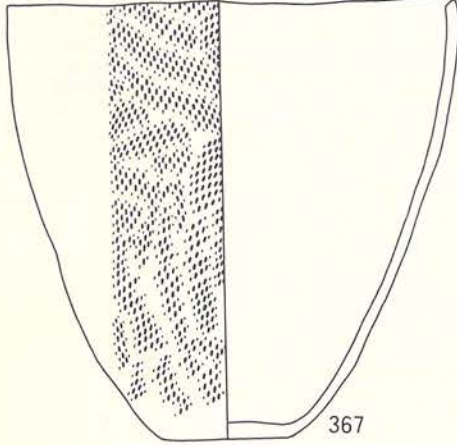
431・432は石鏃である。431は凸基有茎鏃で、粗雑な剝離調整が施されている。432は三角状を呈し、両面周縁に剝離調整が施されているもので、製作途中のものと推定される。433～435の石鏃はつまみをもたない細身棒状のものである。436・437は横型石匙で、436は片面2側縁



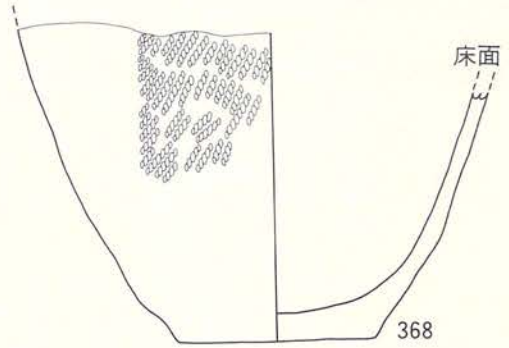
第63図 I I-3 住居跡(平・断面 $S = \frac{1}{60}$, 炉断面 $S = \frac{1}{30}$)

24.1・7.0・23.5

c層床面直上

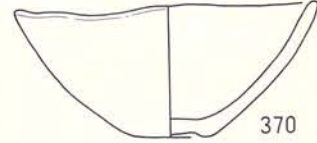


—7.4—



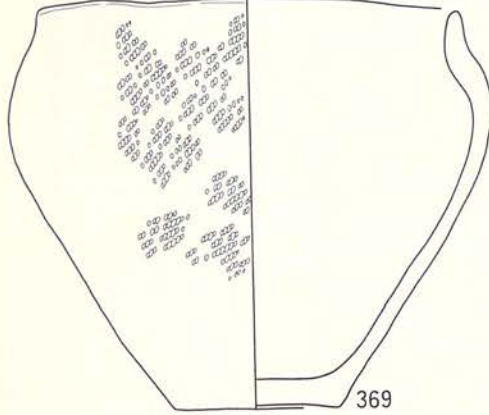
11.5・2.7・5.1

床面

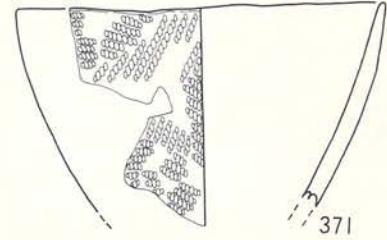


15.9・6.2・15.5

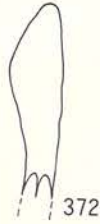
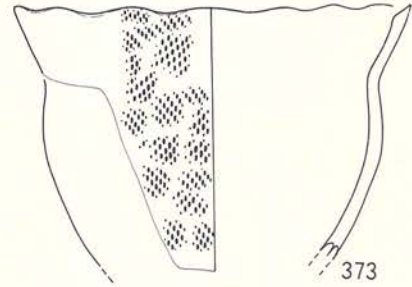
床面



(14.0)···

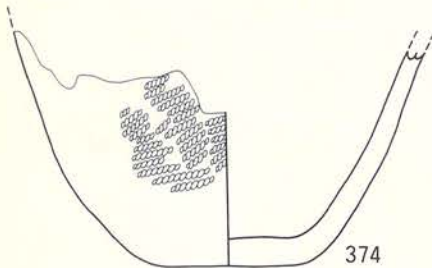


(15.0)···

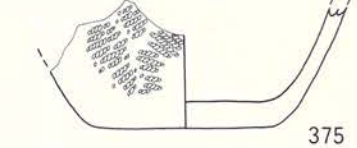


372

—5.7—

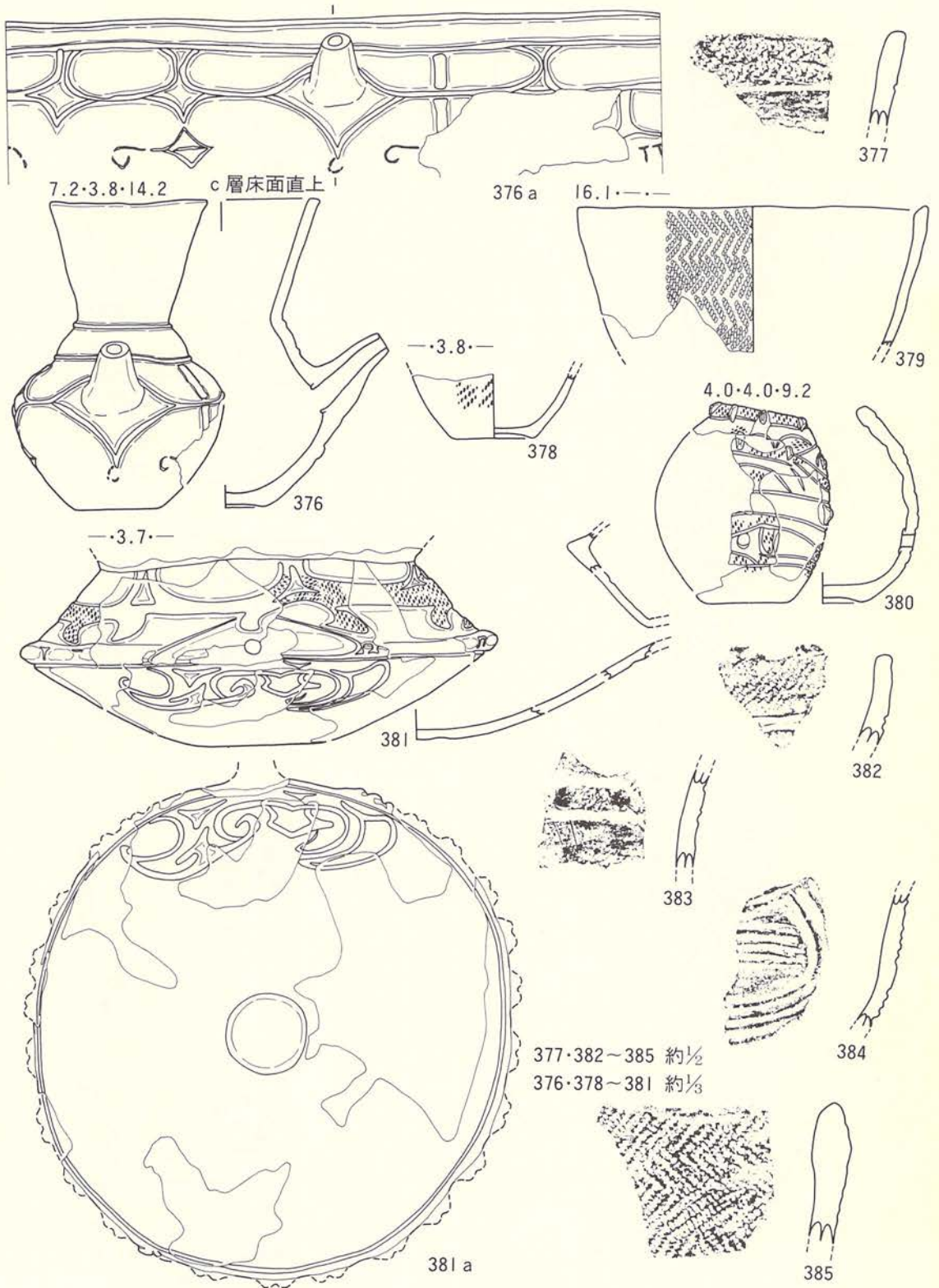


—7.0—

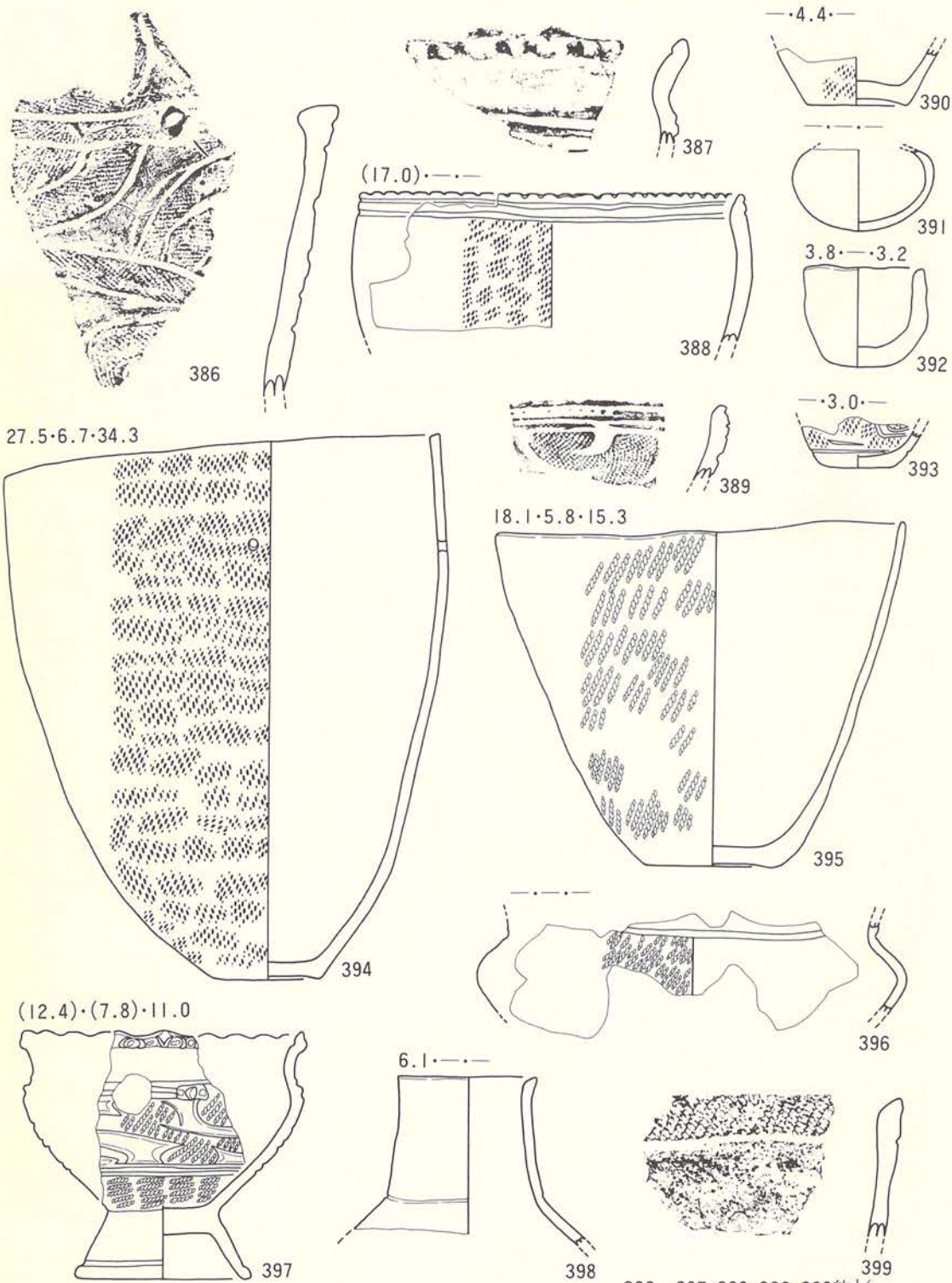


372 約 $\frac{1}{2}$
 368~371・373~375 約 $\frac{1}{3}$
 367 約 $\frac{1}{4}$

第64図 I I - 3 住居跡出土遺物(遺物番号367~375)



第65圖 I I - 3 住居跡出土遺物(遺物番号376~385)

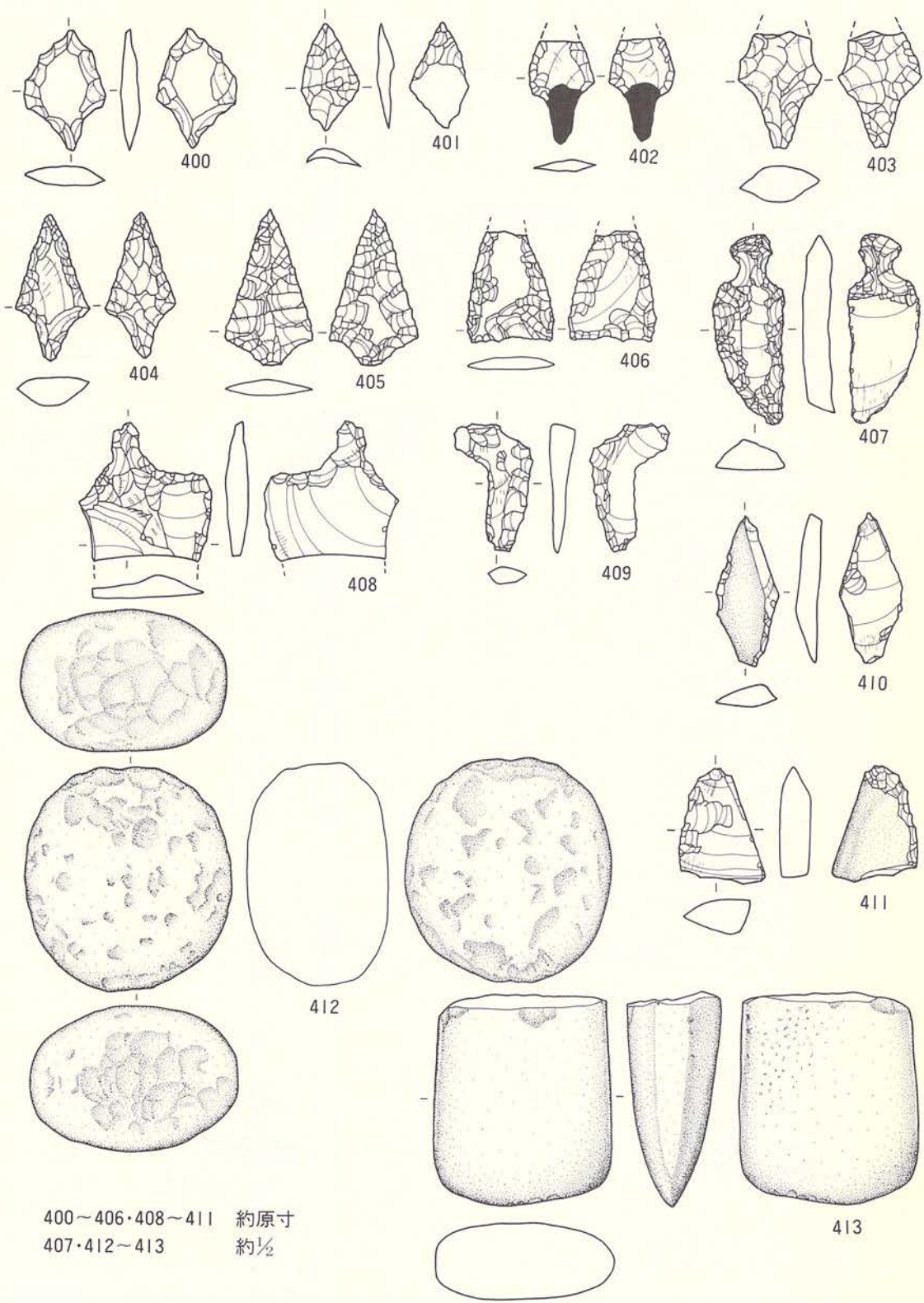


386~387·389·392·399約 $\frac{1}{2}$

388·390~391·393·395~398 約 $\frac{1}{3}$

394 約 $\frac{1}{4}$

第66図 I I - 3 住居跡出土遺物(遺物番号386~399)



400~406・408~411 約原寸
 407・412~413 約 $\frac{1}{2}$

第67図 I I - 3 住居跡出土遺物(遺物番号400~413)

に、437は片面周縁に刃部剥離調整が施されている。440～442はスクレーパーで、いずれにも片面1側縁に刃部剥離調整が施されている。438は長さ3.5cmのミニ石斧で、全体に研磨痕は認められないが、両面から刃部加工が施されているものである。439の石皿は扁平な角礫を利用したもので、中心面は磨擦によって凹んでいるものである。また片面に1個の凹みを有するところから凹石としても利用されたものと思われる。443の磨石は平面形が楕円形を呈するもので、全体が研磨されている。

これら出土遺物のうち、425・426・427・429は第IV群土器の3類に属するものであろう。

遺構の時期

埋土から出土した土器と住居跡の形態及び柱穴配置から、第IV群1類期から3類期に位置づけられよう。

ⅠⅠ－6住居跡

遺 構（第68図、写真図版28）

この住居跡は、北東側約半分の上部分がⅠⅠ－5住居跡に切られ、さらに3分の1は斜面のため消失している。また南端部をⅠⅠ－58ピットに切られているものである。

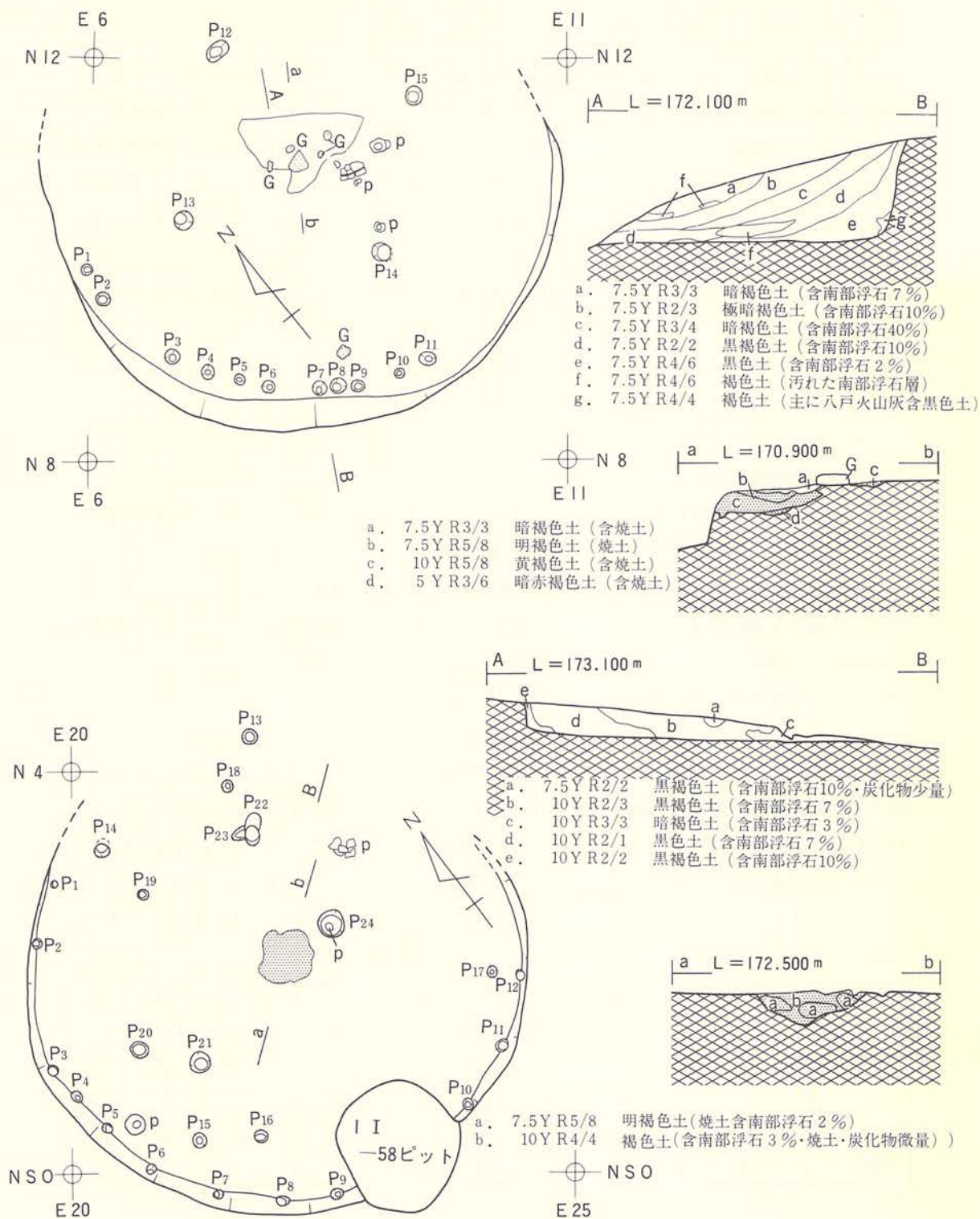
平面形は円形を呈する。規模は、開口部径5.0m、床面部径4.9mである。埋土は、上位（a）が南部浮石の人為的埋積で、断面裏側では幅1.2m、厚さ2cm程度ある。下位（b）が黒褐色土と褐色土との混合土、壁寄り（d）は黒色土である。

壁高は、西壁26cm、南壁14cmである。床面は南部浮石層で、壁寄りが高く、中央にむかってわずかに傾斜する。西壁寄りに完形の鉢形土器が伏せられた形で出土している。

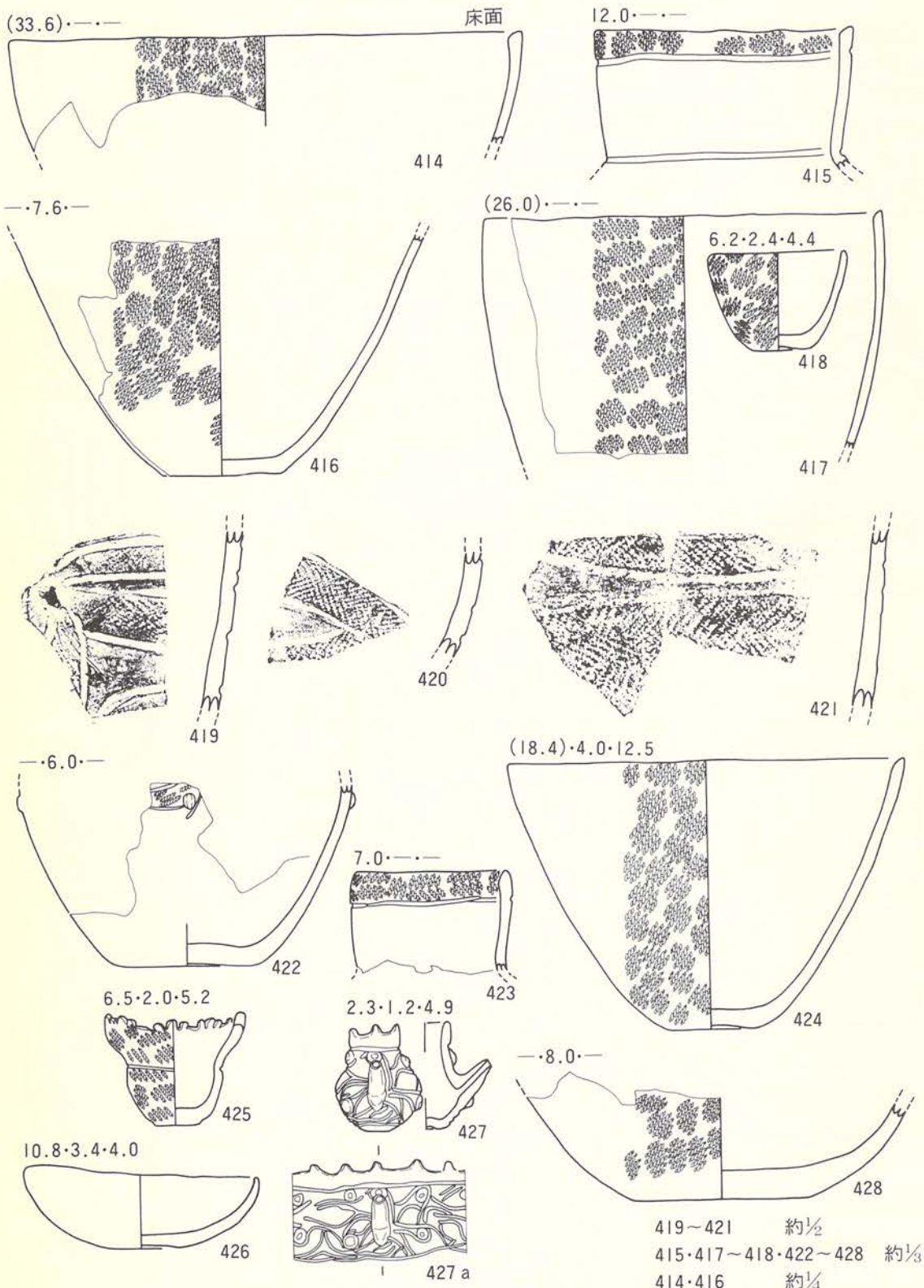
炉は地床炉で、床面ほぼ中央部に位置する。規模は60×58cmで、不整形円形を呈する。焼土の層厚は最大16cmあるが、純粋焼土厚は8cmである。柱穴はP₁～P₂₄が検出されている。これらのうち、P₁～P₁₂は壁柱穴である。支柱穴を構成するものとして、P₂₁—P₂₂、P₁₈—P₁₉—P₂₀などが推定されるが、いずれも対応する柱穴が検出されていない。なお、P₂₃の埋土は、土器片の付いた粘土と砂と小石であり、柱穴ではなく他用途の柱穴状ピットかもしれない。その他の埋土は黒褐色～黒色土である。

P _{No.}	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂
径 cm	8×7	10×9	10×10	12×10	10×9	10×10	11×8	13×10	12×10	11×10	13×11	10×9
深さcm	9	8	9	6	2	3	3	10	5	8	9	15

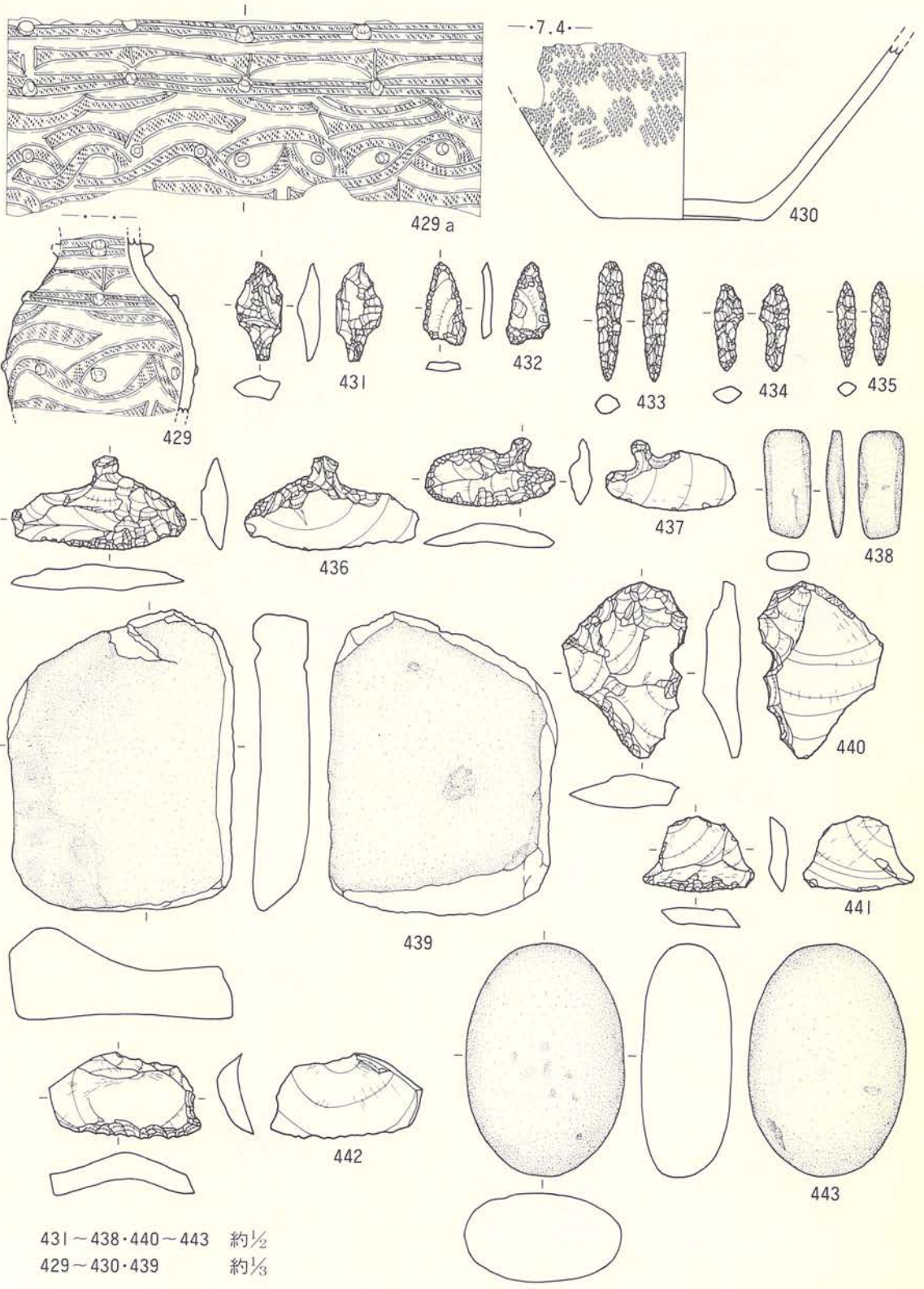
P _{No.}	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄
径 cm	15×15	15×15	14×13	13×13	11×10	11×11	10×10	18×15	21×21	25×16	13×11	28×26
深さcm	33	56	7	12	4	23	14	26	27	42	25	25



第68図 I I-4・I I-6住居跡(平・断面 S = 1/60, 炉断面 S = 1/30)



第69図 I I-4 住居跡出土遺物(遺物番号414~428)

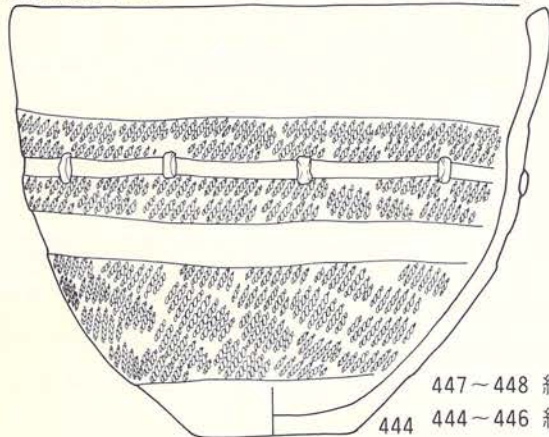


431 ~ 438 · 440 ~ 443 約 $\frac{1}{2}$
 429 ~ 430 · 439 約 $\frac{1}{3}$

第70図 I I - 4 住居跡出土遺物(遺物番号429~443)

20.0・5.8・16.3

床面

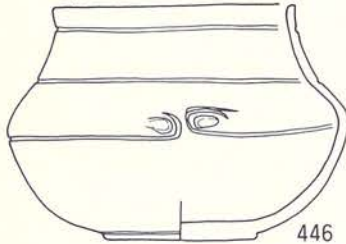


447~448 約原寸

444~446 約 $\frac{1}{3}$



9.1・5.7・9.0



第71図 I I-6 住居跡出土遺物(遺物番号444~448)

出土遺物(第71図、写真図版133)

遺物は444~446の土器と447・448の石器が出土している。これら出土遺物のうち、444は床面から、その他は埋土から出土したものである。

444は深鉢形土器である。器形は体部上半にくびれをもつが、器裏には顕著に認められるものの器表にはほとんど現われないものである。体部には帯縄文が施され、貼瘤が規則的に配されている。445は胴長の壺形土器、446は体部にB状突起を配した無文の壺形土器である。

447・448は石鏃で、447は荒い剝離調整が、448には入念な剝離調整が施されている。

これら出土遺物のうち、444は第IV群土器の4類に、445・446は第V群土器の1類に相当するものである。

遺構の時期

床面から出土した土器から、第IV群4類期に位置づけられる。

I I-7 住居跡

遺 構(第72図、写真図版29)

この住居跡は、北東側約 $\frac{1}{3}$ が斜面のため、また耕作のため消失している。さらに東部をI I-51ピットに、西部をI I-52ピットに切られているものである。

平面形は円形を呈する。規模は、開口部径4.1m、床面部径4.0mである。埋土は黒褐色土が主体で、炉の上部が暗褐色土、壁際が黒色土で構成される。

壁高は、南壁で17cm、最大壁高は南西部で27cmである。床面は、南西壁寄りが南部浮石層で他は黒褐色土層である。炉に向かって斜面なりにやや傾斜する。

炉は石囲い炉で、床面ほぼ中央部に位置する。規模は、78×74cmで、14個の礫をほぼ円形に埋置している。このうち、北側2個は沈んでいる。石質はいずれもチャートである。焼土の層厚は11cmあるが、純粹焼土層は最大8cmである。柱穴はP₁～P₄が検出されている。支柱穴は検出されず、壁を巡る柱穴のみである。また、南西部に溝状に落ち込むところが2箇所検出されているが、柱穴か、または周溝の一部とも考えられる。

P _{No}	P ₁	P ₂	P ₂	P ₄
径 cm	16×15	11×9	10×9	15×15
深さcm	25	11	14	12

溝 ₁	溝 ₂
50×15	35×15
8	9

出土遺物（第73図、写真図版134）

遺物は449～455の土器と456・457の石器が出土している。これら出土遺物のうち、456は床面から、その他は主にb層埋土から出土したものである。

449～453は深鉢と鉢形土器である。453の口縁部には羊歯状文と沈線間に刻目が施されているものである。

454・455は口頸部が欠損した壺形土器である。455には沈線で弧帯状入組文が施文され、貼瘤に穿孔を有するところから懸垂したものと思われる。

456の石鏃は凸基有茎鏃で、基部が欠損しているもので、茎部には膠着剤であるアスファルトが付着している。457の磨石は約半分が欠損しているもので、全体が研磨されている。

これら出土遺物のうち、455は第IV群土器の3類から4類に、453は第V群土器の1類に属する。

遺構の時期

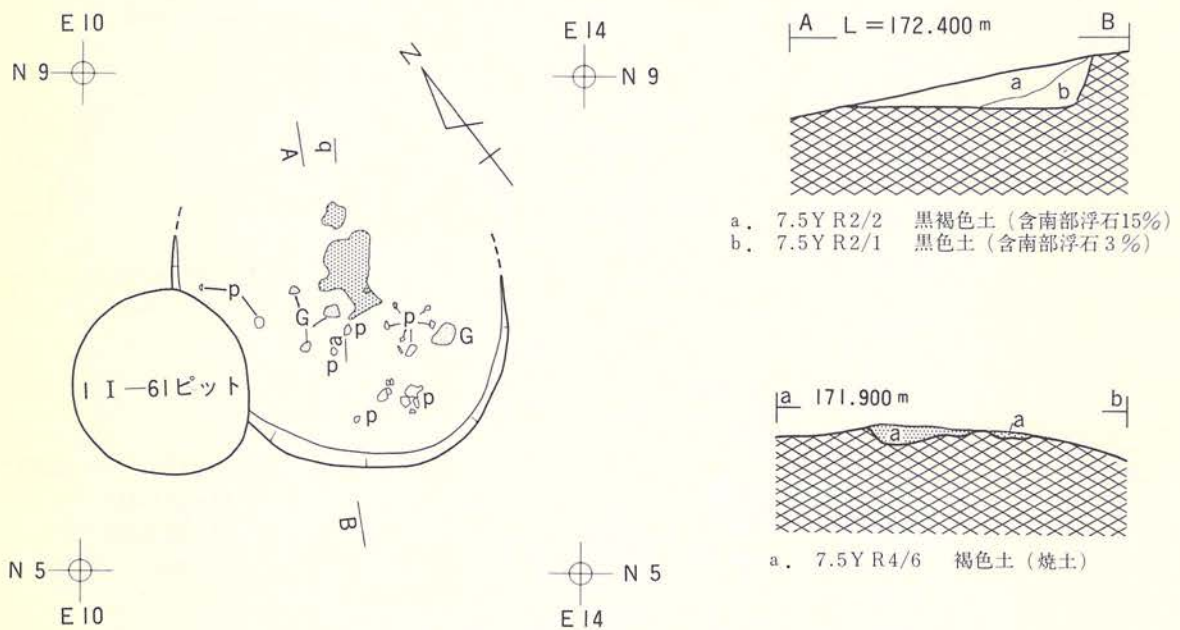
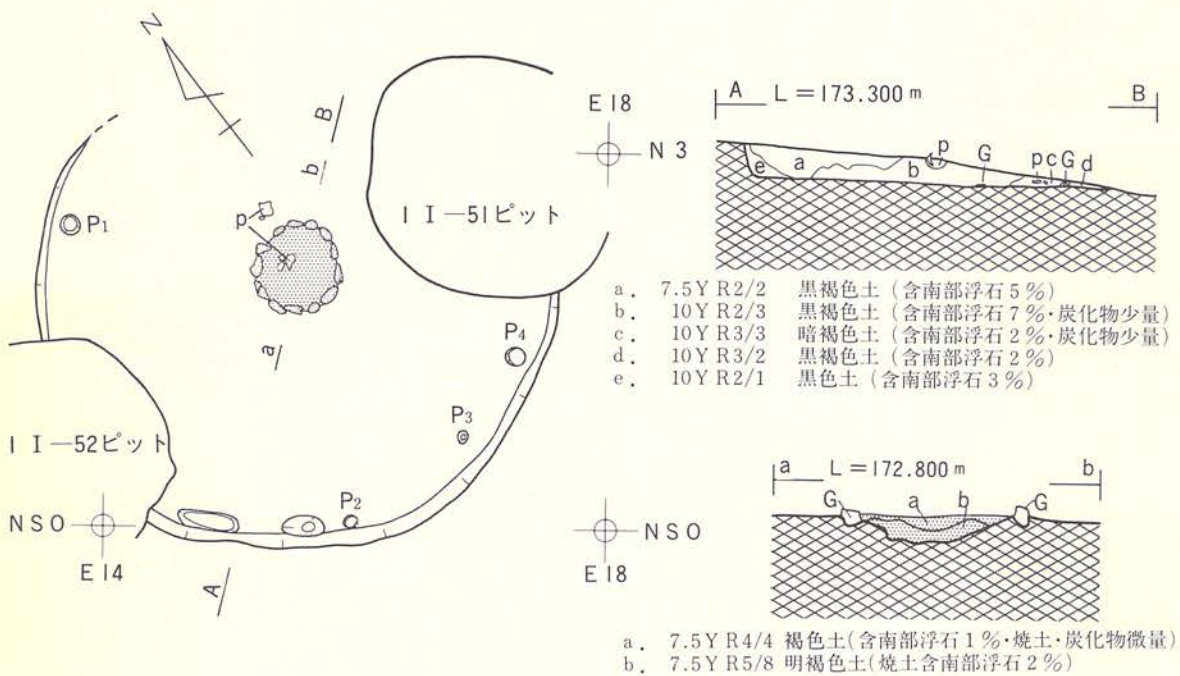
埋土から出土した土器と住居跡の形態及び周囲の遺構から、第IV群3類期から4類期に位置づけられよう。

I I—8 住居跡

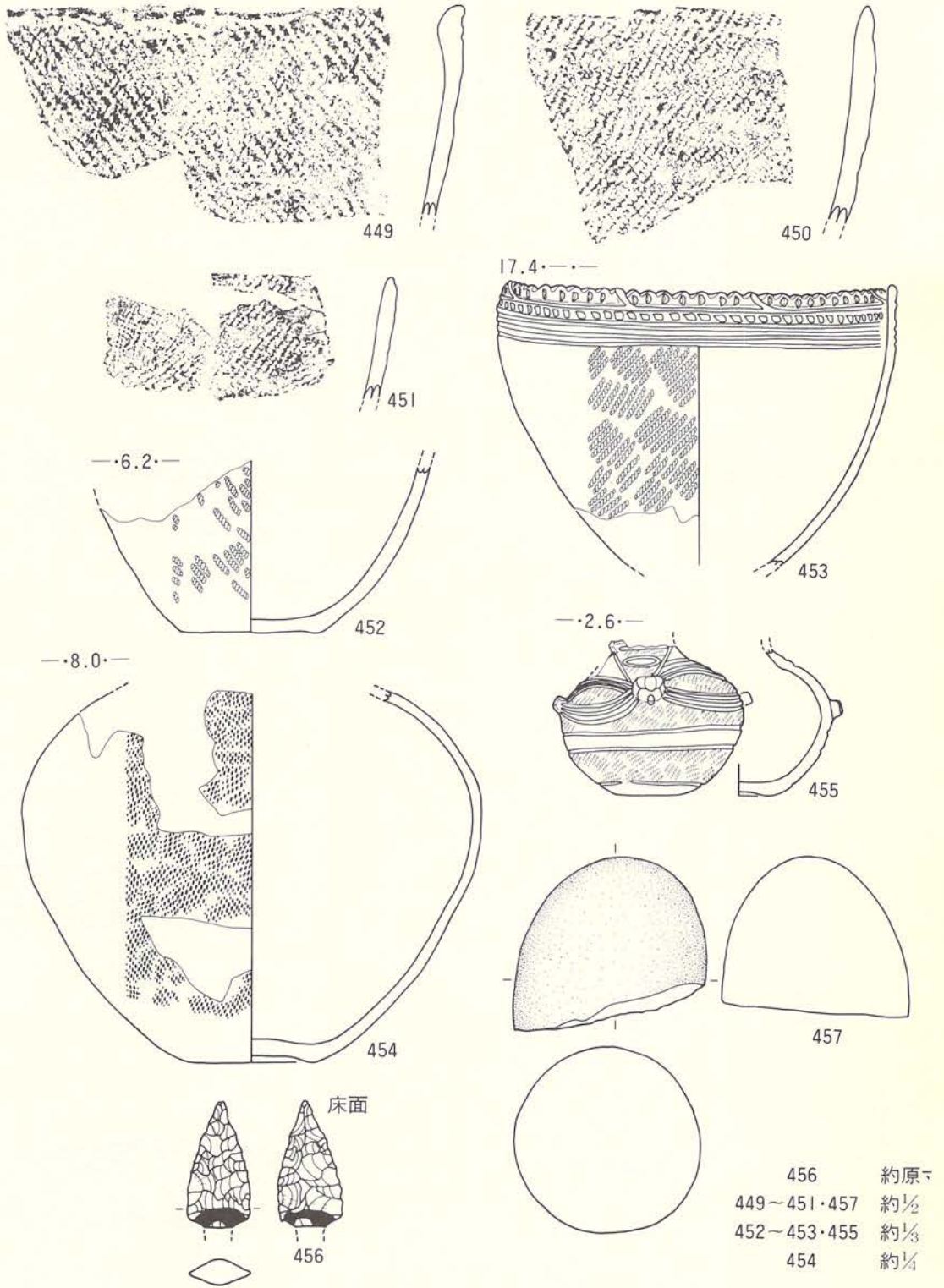
遺構（第72図、写真図版30）

この住居跡は北西壁をI I—61ピットに切られているものである。北東側約半分の壁及び床面は既に削られ検出されていない。

平面形は南北に長軸をもつ楕円形を呈するものと思われる。規模は検出された壁から推定して開口部径2.5×3.0m前後の住居跡と思われる。埋土は黒褐色土で大半を占めるものと思われ



第72図 II-7・II-8住居跡(平・断面 $S = \frac{1}{60}$, 炉断面 $S = \frac{1}{30}$)



456 約原寸
 449~451・457 約 $\frac{1}{2}$
 452~453・455 約 $\frac{1}{3}$
 454 約 $\frac{1}{4}$

第73図 I I - 7 住居跡出土遺物(遺物番号449~457)

る。南西壁際は黒色土で構成される。

壁高は南東壁で13cm、北西壁で13cm、南西壁で40cmである。床面は平坦で、比較的やわらかい。

炉は地床炉で、床面ほぼ中央部に位置する。焼土は2面に分かれて分布する。規模は中央部焼土が径35×60cmの不整形、北東寄り焼土が径20×20cmの不整形をなす。炉内部の焼成最大層厚は8cmと3cmを測る。柱穴は検出されていない。

出土遺物（第74図、写真図版135）

遺物は458～463の土器が出土している。これら出土遺物のうち、458は床面に埋まる形で、459は床面から、460～463はa層埋土から出土したものである。

458の注口土器の器形は、体部上半が脹り、口頸部が外反するもので、底部は揚げ底となり落ちつきが良い。文様は体部に横位に流れる帯縄文と木葉状の文様が施文されている。貼瘤は体部最脹部に付される。

459の壺形土器の器形は、体部上半が「く」の字状に脹り、口頸部がやや外反するもので、口頸部に沈線で区画された帯縄文が施されている。地文は原体L<^R/_Rの単節斜縄文である。

460～463は深鉢形土器で、460・463の口縁部は折り返し状に内側で肥厚するものである。

これら出土遺物のうち、458・459は第IV群土器の2類に属するものである。

遺構の時期

床面から出土した土器から、第IV群2類期に位置づけられる。

I I-9 住居跡

遺構（第75図、写真図版31）

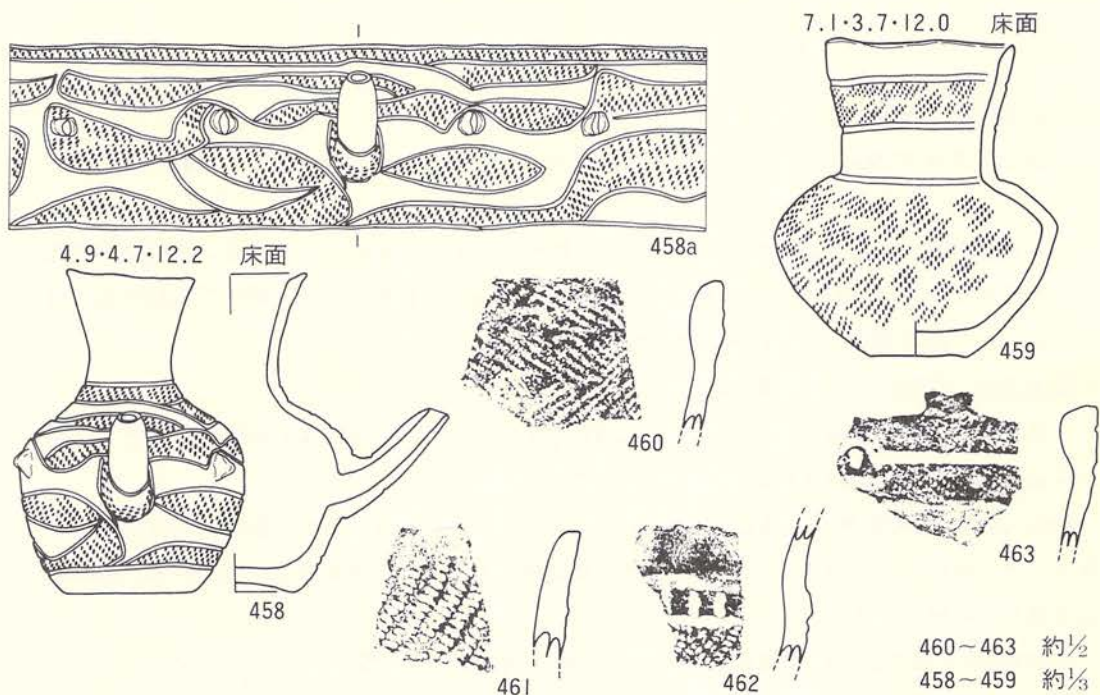
この住居跡は、北東側約1/3が調査区外にはいるものである。しかも、段差の大きい上下の畑の境界部に位置するため、検出プランも約1/4しかみえず、他は耕作のため削り取られているものである。

平面形は、北西から南東に長軸をもつ楕円形になるようである。規模は、開口部長径4.1m、床面部長径3.8mである。埋土は、上位が中振浮石質の黒色土、下位が黒褐色土で構成される。埋土のe相当から壺形土器、床面相当から台付鉢形土器を中に入れた深鉢形土器が出土している。この深鉢形土器はP₁の北東側に立つものである。

壁高は、西壁93cm、南壁103cmである。床面は南部浮石層で凹凸があり特定不能である。壁との区分も明瞭ではない。深鉢形土器の底面よりやや下がることから掘り過ぎも考えられる。

炉は検出されていない。柱穴はP₁～P₄が検出されている。支柱穴は検出されず、壁際を巡る柱穴のみである。

P _{Na}	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄
径 cm	20×17	18×17	16×15	15×14
深さcm	7	10	6	8



第74図 I I-8 住居跡出土遺物(遺物番号458~463)

出土遺物(第76図、写真図版135~136)

遺物は464~469の土器が出土している。これら出土遺物のうち、464と468は床面相当、465・467・469はa層埋土から、466は埋土上位から出土したものである。

464は粗製深鉢形土器で $L < \frac{R}{R}$ の単節斜縄文が施されている。468の台付鉢形土器は台部に透かしを有するもので、口縁部直下には横位に流れる渦巻状の文様が施文されている。

465・466は鉢形土器で $L < \frac{R}{R}$ の単節斜縄文が施されている。

467は完形の壺形土器で、地文に $L < \frac{R}{R}$ の単節斜縄文が施されている。

これら出土遺物のうち、464・467・468は第V群土器の1類に属するものである。

遺構の時期

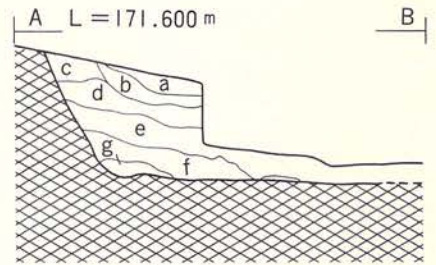
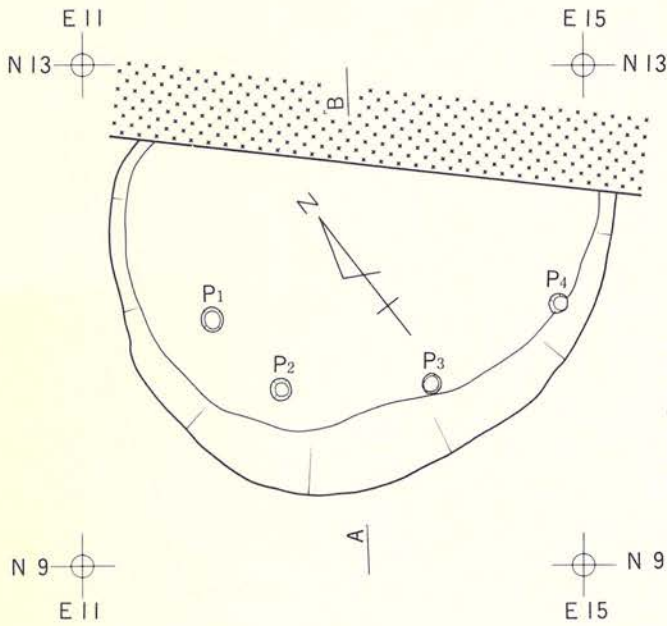
床面相当から出土した土器から、晩期前葉に位置づけられる。

I I-10住居跡

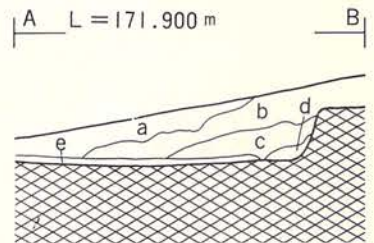
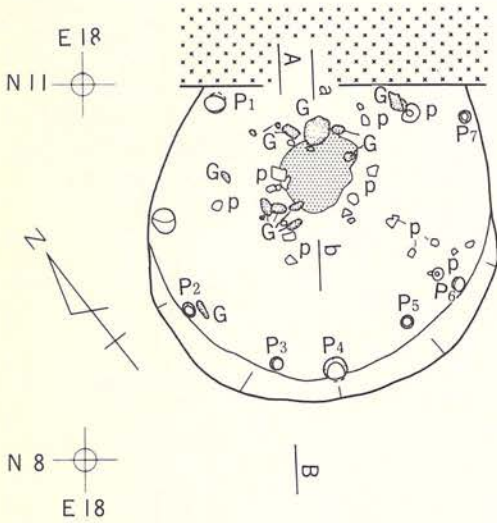
遺構(第75図、写真図版32)

この住居跡は、畑の段差のため北東部約 $\frac{1}{4}$ を欠くものである。

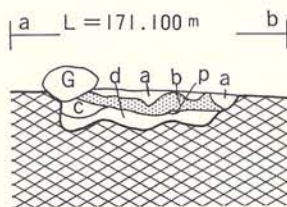
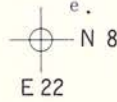
平面形は、北東から南西に長軸をもつ楕円形を呈する。規模は、開口部長径、推定3.2m、短径2.8m、床面部短径2.7mである。埋土は、すべて黒色土で、上部に砂が混入し、中位から



- a. 10Y R2/1 黑色土 (含南部浮石 7%・炭化物少量)
- b. 10Y R1.7/1 黑色土 (含南部浮石 2%)
- c. 7.5Y R2/1 黑色土 (含南部浮石 1%)
- d. 7.5Y R1.7/1 黑色土 (含南部浮石 3%)
- e. 10Y R2/2 黑褐色土 (含南部浮石 5%)
- f. 10Y R2/3 黑褐色土 (含南部浮石 20%)
- g. 10Y R5/6 黄褐色土 (主に南部浮石層含
10Y R2/3 黑褐色土)



- a. 7.5Y R2/1 黑色土 (含南部浮石 3%)
- b. 10Y R1.7/1 黑色土 (含南部浮石 5%)
- c. 7.5Y R1.7/1 黑色土 (含南部浮石 1%)
- d. 10Y R2/2 黑褐色土 (含南部浮石 5%)
- e. 10Y R1.7/1 黑色土 (含南部浮石 3%・炭化物)

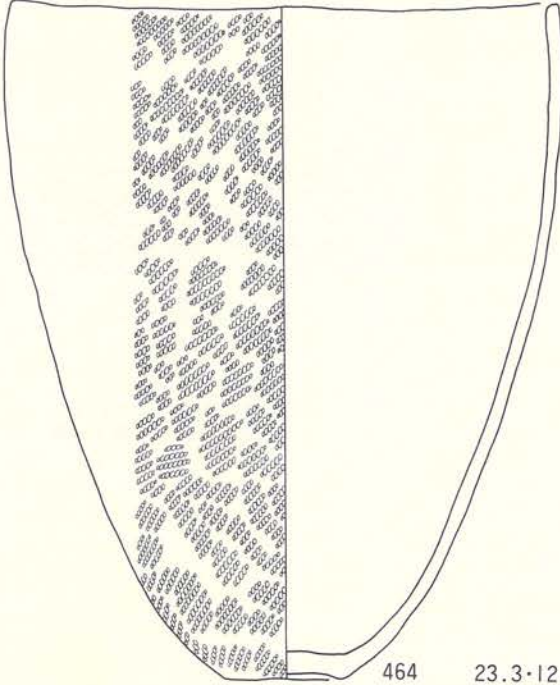


- a. 7.5Y R3/3 暗褐色土 (含南部浮石 1%・炭化物少量)
- b. 10Y R5/6 黄褐色土 (烧土含炭化物少量)
- c. 7.5Y R2/1 黑色土 (含南部浮石少量)
- d. 10Y R2/3 黑褐色土 (含南部浮石 1%)

第75图 I I-9・I I-10住居跡(平・断面 $S = \frac{1}{60}$, 炉断面 $S = \frac{1}{30}$)

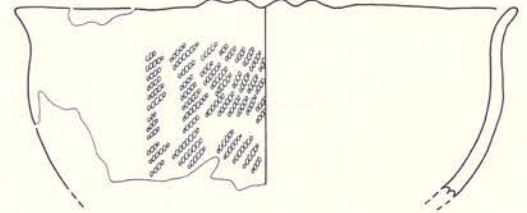
29.0・6.4・36.4

床面



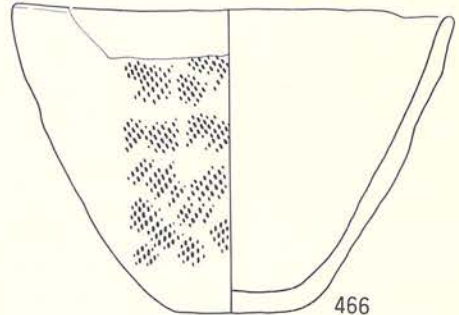
464

(18.9)・---



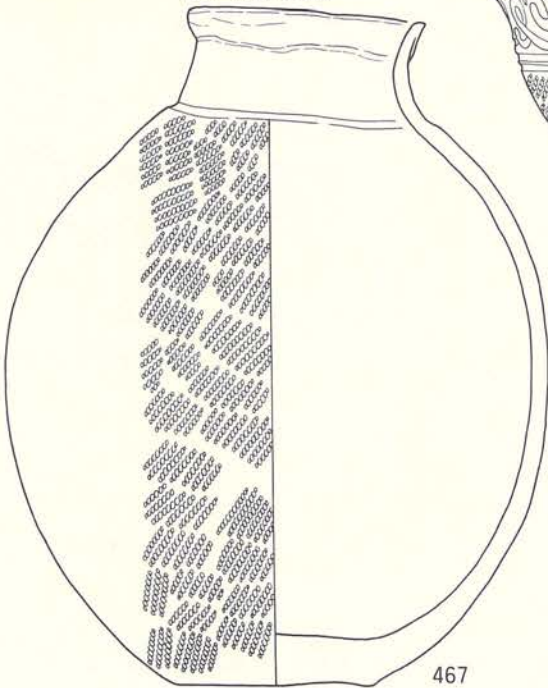
465

16.5・4.2・11.8



466

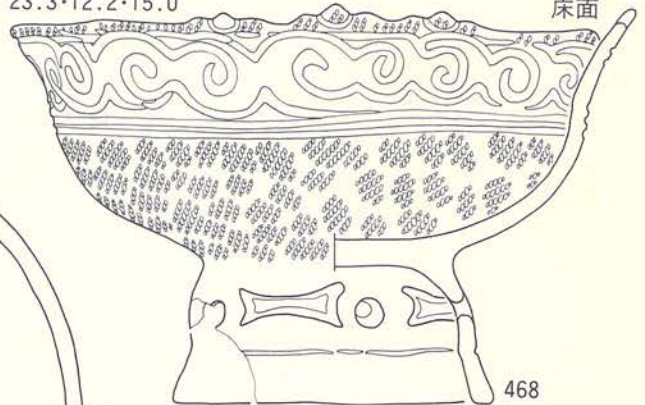
9.0・7.3・25.6



467

23.3・12.2・15.0

床面



468



469

469 約 $\frac{1}{2}$
 465~468 約 $\frac{1}{3}$
 464 約 $\frac{1}{4}$

第76図 I I - 9 住居跡出土遺物(遺物番号464~469)

下位にかけてはやわらかく、土器や礫を多量に包含し、炭化物も含んでいる。

壁高は、西壁46cm、南壁45cmである。床面は、黒色土でやわらかく、特定は困難であるが、炉の焼土面と土器の分布面とから推定したものである。西壁際に深鉢型土器が斜位にある。

炉は礫（砂岩）を1個伴うもので、床面中央から北東寄りに位置する。規模は78×58cmで、不整楕円形を呈する。焼土の層厚は10cmあるが、純粹焼土厚は最大8cmである。柱穴はP₁～P₇が検出されている。支柱穴は検出されず、いずれも壁を巡る柱穴である。

P _{No}	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇
径 cm	17×15	11×10	10×10	19×17	11×10	11×11	9×9
深さcm	24	12	8	18	10	12	9

出土遺物（第77図、写真図版136～137）

遺物は470～479の土器と480～483の石器が出土している。これら出土遺物のうち、470～472・474・480・481は床面から、482は炉内部から、その他は埋土から出土したものである。

470は口頸部が欠損した壺形土器で、原体 $L < \frac{R}{R}$ と $R < \frac{L}{L}$ の羽状縄文が施されている。472は口縁部が内側に反る深鉢形土器で、 $L < \frac{R}{R}$ の単斜縄文が施されている。473は体部上半が欠損した土器、474は無文の深鉢形土器である。

475の鉢形土器は口縁部に帯縄文と貼瘤を規則的に付しているものである。

480・481・483の石鏃は凸基有茎鏃、482は凹基無茎鏃で、480・481・483には入念に剝離調整が、482には粗雑な剝離調整が施されている。

これら出土遺物のうち、470は第IV群土器の3類から4類に、475は4類に属するものであろう。

遺構の時期

床面及び埋土から出土した土器から、第IV群3類期から4類期に位置づけられる。

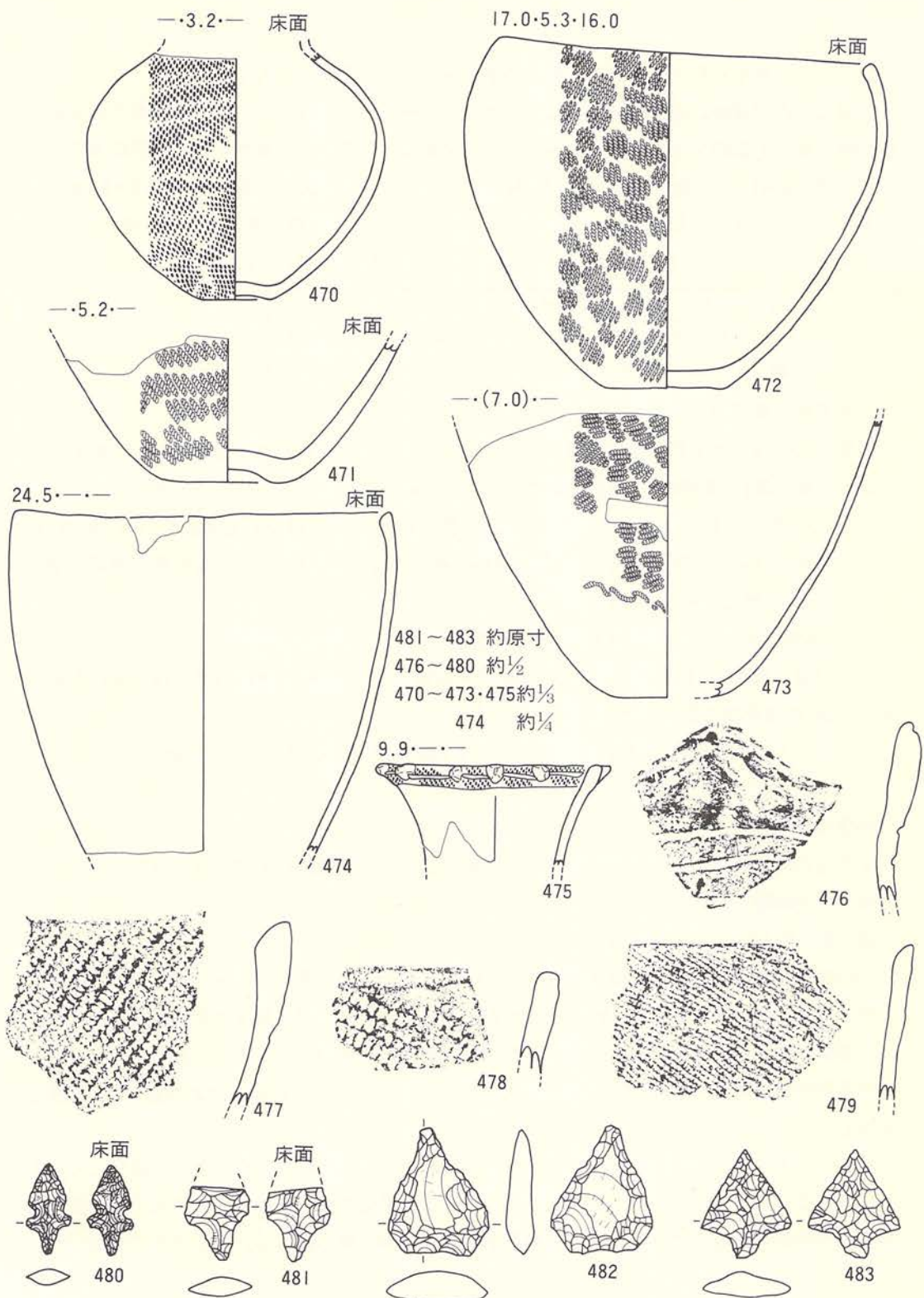
I II—1 住居跡

遺 構（第78図、写真図版33）

この住居跡は、南西部が調査区外（国道）に入り、さらにI II—62ピットに切られている。また、南東半がI II池跡に切られているものである。しかも、東へ張り出す緩斜面頂部にあたり、遺構のほとんどが耕作のため削平され、貼床面だけが残っているものである。

平面形は、円形ないし楕円形を呈するものであろう。規模は、円形とすれば径4.6mと推定される。

床は、ほとんど貼床で、西部のみが八戸火山灰層である。削られて斜面なりに傾斜している。この貼床は、南部浮石をすべて掘り取って八戸火山灰層面を出し、そのうえで八戸火山灰主体の土で平らにしたものである。貼床は残存部最大で20cmの厚さがある。床面が水平であったと



第77図 I I -10住居跡出土遺物(遺物番号470-483)

すれば40cmの厚さとなるものである。

炉は検出されていない。柱穴はP₁～P₅が検出されている。このうち支柱穴を構成するものはP₃—P₄—P₅で、五角形ないし六角形の配置の一部である。P₃とP₄は互いに反対方向に傾いている。北西壁際が八戸火山灰層面であるにもかかわらず柱穴が検出されていないことを考えれば、P₁とP₂はP₃、P₄を支えるものとして立てられた可能性がある。なお、P₃の柱の立て方をみると、断面図のeはf（P₃）の周囲にのみあるもので、柱をおさえたものと考えられる。このことから柱を据えたあとに貼床を施しているのがわかる。

P _{No}	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅
径 cm	24×20	15×14	22×18	17×16	22
深さcm	16	12	62	63	68

出土遺物

この住居跡に伴う遺物は特定できなかった。

遺構の時期

掘り込み面および周辺の遺構から、中期末葉か後期後半に位置づけられるものであろう。

I II—3 住居跡

遺 構（第78～79図、写真図版33～34）

この住居跡の平面形は円形を呈する。規模は開口部径5.6×5.7m、床面部径5.3×5.4mである。埋土は中央部が黒色土で、壁寄りが黒褐色土で構成される。

壁高は東壁で9cm、西壁で33cm、南壁で60cm、北壁で7cmである。床面は平坦である。床面西側には、開口部径50×55cm・底部径45×45cm・深さ50cmの規模をもつピットNo.1が、また北寄りには、開口部径43×48cm・底部径35×35cm・深さ24cmの規模をもつピットNo.2が検出されている。このピットの埋土はいずれもにぎりある南部浮石の単層である。

炉は石囲い炉で、床面ほぼ中央部に位置する。規模は径70×85cmの円形を呈し、チャートを北西側を開く形で埋置している。炉内部の焼成最大層厚は5cmに及ぶ。柱穴は壁際床面に支柱穴P₁～P₁₀が、また支柱穴は炉を囲む形でP₁₁—P₁₂—P₁₃—P₁₄が配される。

斜面下方にあたる北東床面には出入口状施設が設けられている。施設には3本ないし4本の柱を連続して配列したと思われる掘り込みが平行に配される。

P _{No}	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃
径 cm	15×18	8×9	10×12	10×10	10×10	10×10	16×18	12×14	11×13	11×11	25×27	23×25	20×24
深さcm	45	15	19	8	8	16	19	14	14	18	56	62	60

P _{No}	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂
径 cm	27×34	13×14	20×20	20×30	20×25	20×35	20×25	14×16	16×33
深さcm	53	33	32	40	34	74	54	24	56

出土遺物（第80～81図、写真図版138～139）

遺物は484～499の土器と500・501の石器が出土している。これら出土遺物のうち、484・485は床面から2～3cm浮いたc層から、その他は埋土から出土したものであるが、主にa層埋土中位から上位にかけて土器片が多く出土した。

484の注口土器の器形は体部上半が脹り、口頸部がやや開きぎみに立ち上がるもので、底面は平らで落ちつきが良い。文様は横位に流れる帯縄文と木葉状が2つに割れたと思われる弧帯状入組文が施文されている。貼瘤は口頸部から体部下半まで付され、注口部付け根下部は瘤状に太くなる。入組文に充填されている縄文原体は $R < \frac{L}{L}$ の単節斜縄文である。

485・490は深鉢形土器である。485の器形は体部上半に「く」の字状のくびれをもち、口縁部が内側に反るもので、口縁部とくびれ部に帯縄文が施文されている。瘤は付されていない。地文は原体 $L < \frac{R}{R}$ の単節斜縄文である。490の器形は波状口縁を呈し、体部中心に浅いくびれをもつもので、沈線で区画された縄文充填の半円状の文様が施文されている。この土器の口唇部一部には刻目が施されているが、この刻目は一度施文した刻目を磨消したものが部分的に残ったものである。

499は体部上半が脹り、口頸部が外反する壺形土器で、 $L < \frac{R}{R}$ の単節斜縄文が施されている。

500の横型石匙は片面周縁及び他面1側面に刃部剝離調整が施されている。501は石皿の破片で、縁をもち中央は擦面となっている。

これら出土遺物のうち、484・485は第IV群土器の2類に、490は4類に属するものである。

遺構の時期

床面から出土した土器から、第IV群2類期に位置づけられる。

J1-1 住居跡

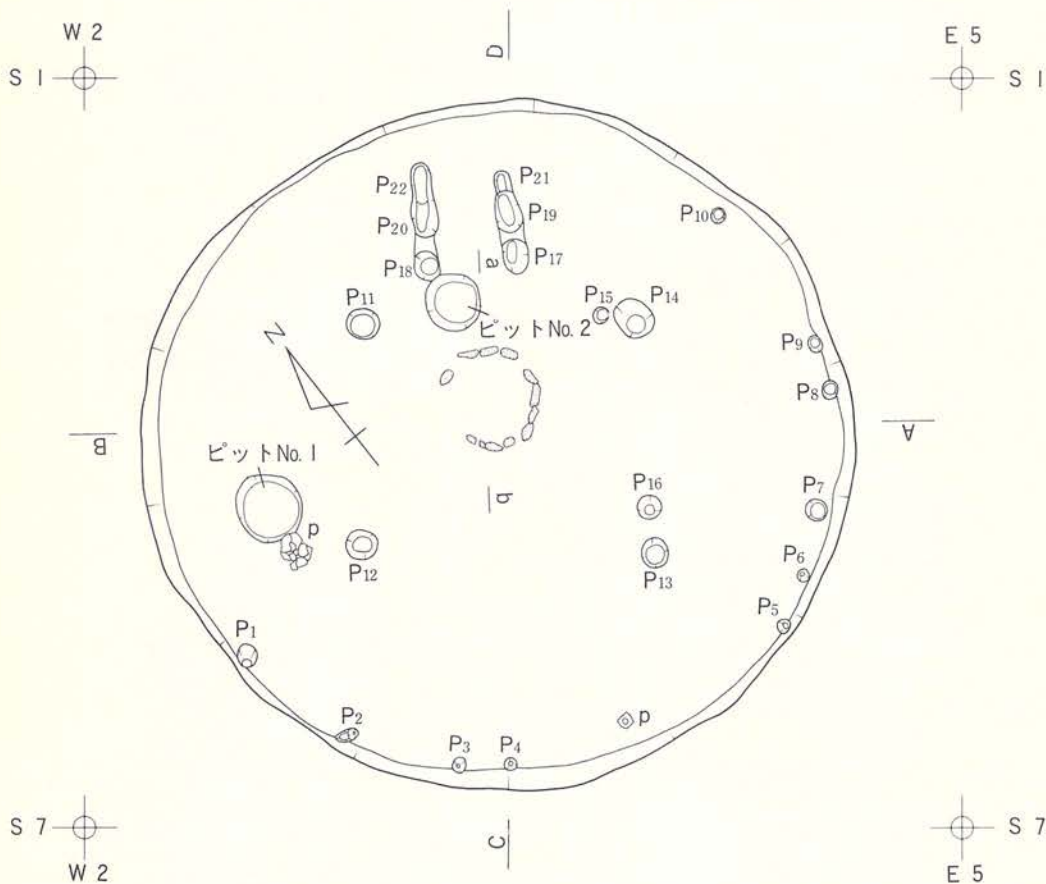
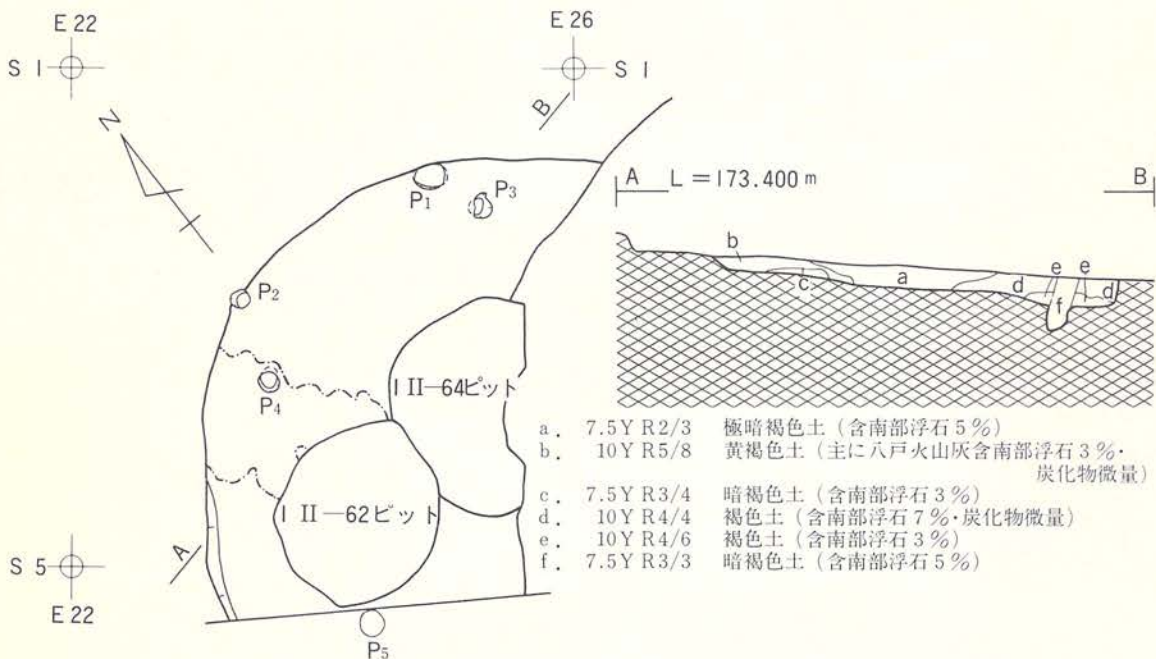
遺 構（第79図、写真図版35）

この住居跡は耕作により上部を削られており、検出されたのは北西壁と床面の一部及び炉である。

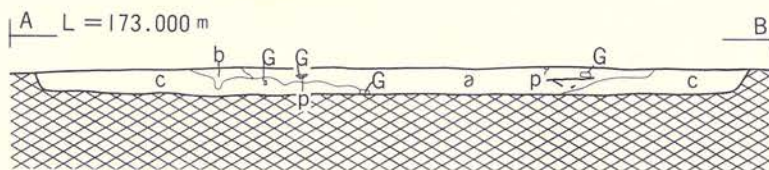
平面形は円形を呈する。規模は検出された壁面から推定して、開口部径3.5m前後の住居跡と考えられる。埋土は黒褐色土の単層である。

壁高は北西壁で10cmを測る。床面は平坦である。

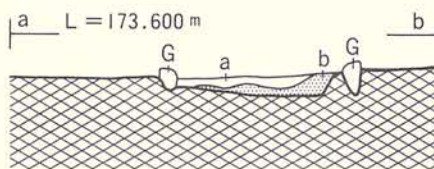
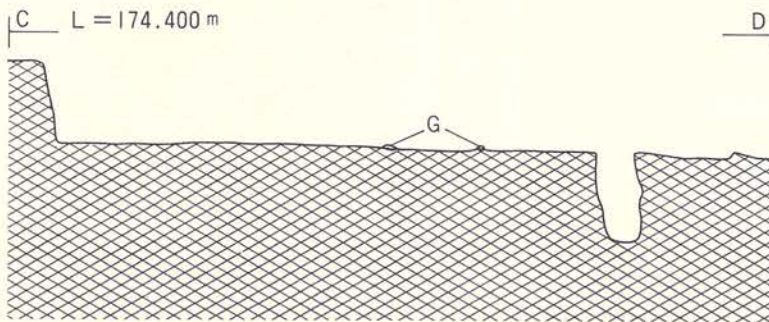
炉は石囲い炉で、床面のほぼ中央部に位置する。規模は33×40cmで、砂岩・安山岩と土器片をほぼ円形に埋置している。炉内部の焼成最大層厚は2cmに及ぶ。柱穴はP₁（径18×18cm・



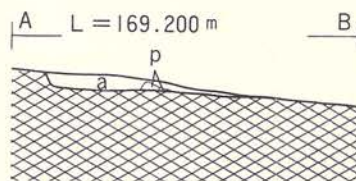
第78図 I II-1・I II-3 住居跡(平・断面 S = 1/60)



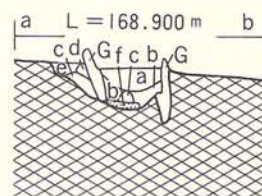
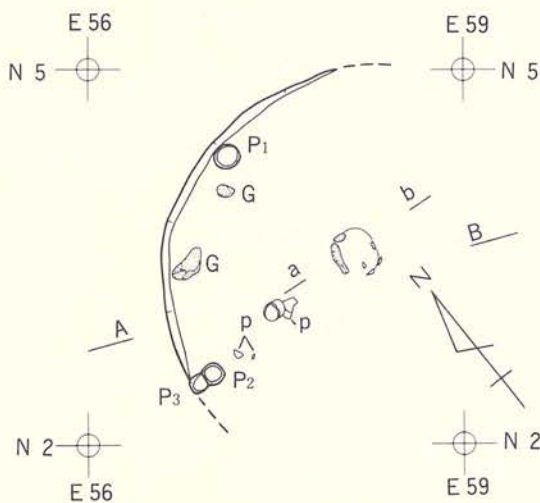
- a. 7.5Y R1.7/1 黑色土 (含南部浮石 5%)
- b. 7.5Y R2/2 黑褐色土 (含南部浮石 10%)
- c. 7.5Y R3/1 黑褐色土 (含南部浮石 5%)



- a. 7.5Y R2/1 黑色土 (含炭化物·烧土粒·南部浮石 5%)
- b. 5Y R4/8 赤褐色土 (烧土)

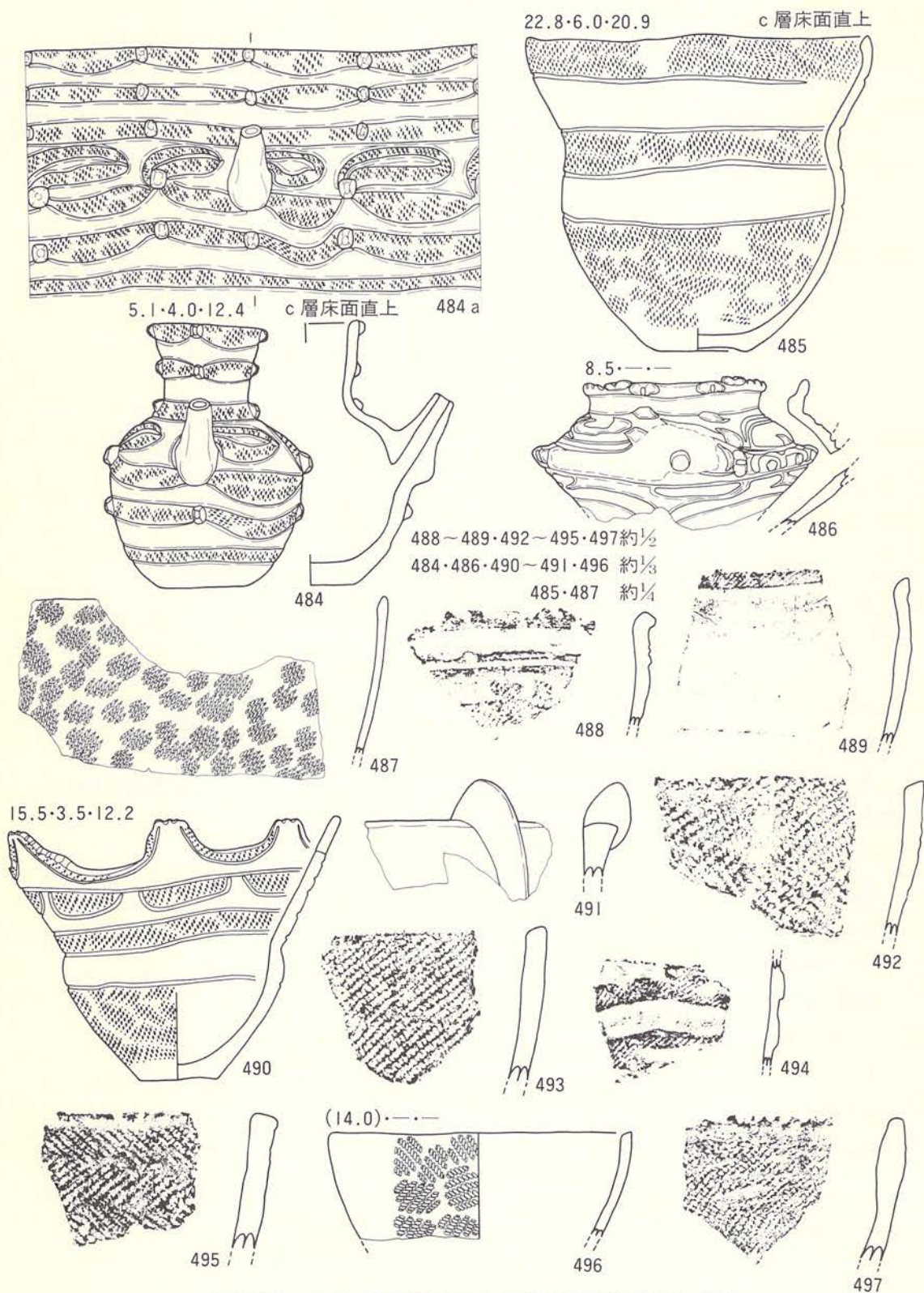


- a. 10Y R2/2 黑褐色土

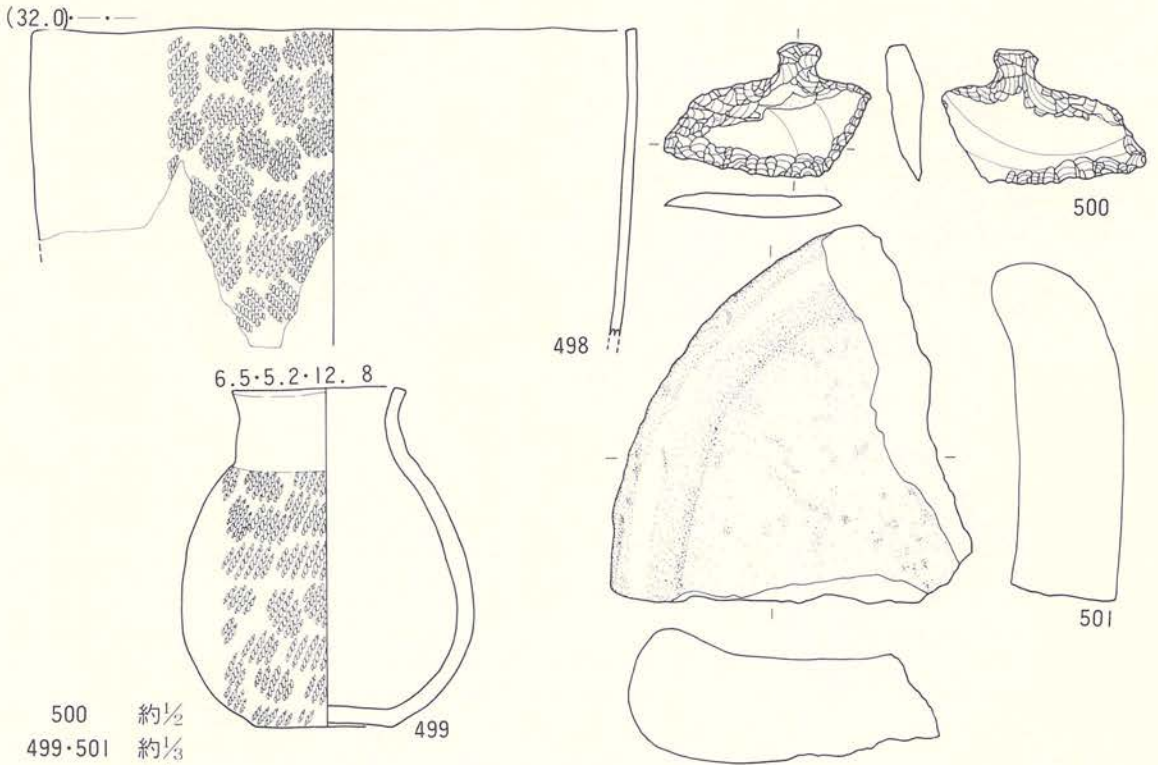


- a. 7.5Y R2/1 黑色土 (含南部浮石 3%)
- b. 7.5Y R2/2 黑褐色土 (含南部浮石 1%)
- c. 7.5Y R1.7/1 黑色土 (含南部浮石 1%)
- d. 7.5Y R3/1 黑褐色土 (含南部浮石 少量)
- e. 10Y R2/3 黑褐色土 (含南部浮石 1%)
- f. 7.5Y R6/8 橙色土 (烧土)

第79图 I II-3·J I-1 住居跡 (断面 S = 1/60, 炉断面 S = 1/30, 平面 S = 1/60)



第80図 I II-3 住居跡出土遺物(遺物番号484~497)



500 約 $\frac{1}{2}$
 499・501 約 $\frac{1}{3}$
 498 約 $\frac{1}{4}$

第81図 I II-3 住居跡出土遺物(遺物番号498~501)

深さ17cm)、P₂ (径15×15cm・深さ20cm)、P₃ (径13×13cm・深さ20cm) が検出されている。

出土遺物 (第83図、写真図版140)

遺物は炉に使用されていた502の土器1点が出土したのみである。この土器は粗製深鉢形土器の体部片で、地文は原体 $L < \frac{R}{R}$ の単節斜縄文が施されている。この土器の時期については特定し兼ねる。

遺構の時期

この遺構の時期については不明である。

J I-2 住居跡

遺構 (第82図、写真図版36)

この住居跡は北東側約 $\frac{2}{3}$ が調査区外にはいるものである。

平面形はほぼ方形を呈するものと考え。規模は検出された壁面から推定して、開口部径2.3m前後の住居跡と思われる。埋土は上位から下位に、黒色土・黒褐色土で構成される。

壁高は南西壁で88cmを測る。床面は平坦である。床面には開口部径60×75cm・底部径25×38cm、深さ22cmの規模をもつピットが検出されている。このピットの埋土は黒色土の単層である。

炉及び柱穴は検出されていない。

出土遺物（第83図、写真図版140）

503～507の土器片が出土している。これらはいずれも埋土中位から上位にかけて出土したものである。507は沈線で楕円状の区画がなされ、楕円状内には連続した刺突文が施文されている。504の口縁部破片にも類似する刺突文が施文されている。505の口縁部破片には網目状捺糸文が施文されている。

これら出土遺物のうち、504・507は第Ⅱ群土器に、505は第Ⅰ群土器Ⅰ類に属するものであろう。

遺構の時期

床面から遺物が出土していないため断定はできないが、掘り込みが深いことと、住居跡の形態から考えると、前期に位置づけられる可能性が強い。

J I—4 住居跡

遺 構（第82図、写真図版37）

この住居跡は宅地跡にあり、南西側約1/3が上部を削平され、南端部をJ I—58ピットに切られているものである。

平面形は、西辺が直線的で他は円形である。規模は、東西径が開口部で3.1m、床面部で3.0m、南北径が推定で床面3.1mである。埋土は、中央上位がパミス量の多い黒褐色土、中位が南部浮石、下位が黒褐色土、東西壁側が極暗褐色土で構成される。中位の南部浮石は、北半の検出面で厚さ最大30cm、径50cmぐらいの量入っているもので、人為的埋積と考えられる。

壁高は、東壁13cm、西壁50cm、北壁33cmである。床面は炉から北東側が貼床で、他は八戸火山灰層である。八戸火山灰層面は平坦でしまっている。炉の東側は南北に長くガリガリにかたくなっている。

炉は石囲い炉で、床面中央から30cm東寄りに位置する。規模は炉縁石の外側で50×44cmで、頁岩、チャート、砂岩をほぼ方形に埋置している。南側は二重に配している。また、炉縁石の外側にも焼土が認められ、八戸火山灰土が周囲にある。その規模は65×65cmである。炉断面から、焼土の層厚は18cmに及ぶが、焼土の形成は2時期と考えられる。つまり、はじめに掘り込み炉がつくられ、c、d、gの焼土が形成された。その後、いくらか規模を小さくし、磔を埋め込むためにd、gが切られ、a、bの焼土が形成されたと考えられる。iの黒褐色土は炭化物を多量に含むもので、炉を掘り込んだあと意図的に形成されたと考えべきであろう。柱穴は、支柱穴を構成するP₁～P₈と壁柱穴、貼床下から4個などが検出されている。このうちP₅には掘り方が明確に認められる。北東壁際に周溝がみられるが、八戸火山灰層面では柱穴状になっており、南部浮石層のために崩れて溝状になったものであろう。

斜面下方にあたる東床面に、壁から炉にむかって溝状に柱穴が平行してある。その内側がか

P _{No}	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
径 cm	31×22	22×19	15×15	20×16	17×16	16×15	22×20	30×18
深さcm	29	39	29	15	38	15	14	26

たくしまっており、炉との間がガリガリにかたくなっているところから、これは出入口状施設と考えられる。また、この施設の東、外に、柱穴を伴う南北1.8mの溝状遺構がある。これは、出入口状施設と関連する施設とは考えられないだろうか。

出土遺物（第83図、写真図版140）

508～513の土器と514の石器が出土している。これら出土遺物のうち、508は床面から、その他は埋土から出土している。508は器高11.1cmの小型の土器で、口縁部から体部下半まで縦位の条線を施している。509はミニチュア土器、510は深鉢形土器の口縁部と思われるもので、どちらも無文である。514の石鏃は凸基有茎鏃で両面から入念に刃部剥離調整が施されている。これらのうち、508は第Ⅱ群土器に属するものであろう。

遺構の時期

床面から出土した土器から、中期末葉に位置づけられよう。

J I—5 住居跡

遺 構（第84図、写真図版38）

この住居跡は宅地跡にあり、南東部を石垣で、中央部を溝に切られている。さらに北西部をJ I—4住居跡、J I—58ピットに、北東部をJ I—6住居跡に切られているものである。

平面形は、北東から南西に長軸をもつ楕円形であろう。規模は、長軸径推定3.9m・短軸径推定3.5mである。内部に約20cmの段差をもって隅丸長方形の堅穴がある。これの規模は、長軸長1.8m・短軸長1.3mである。埋土は、上位が八戸火山灰や南部浮石を主体とする黄褐色～褐色土、中位が黒褐色～黒色土、下位が黒褐色、暗褐色、褐色の混合土、壁際が黒色～黒褐色土で構成される。このうちa、bは明らかに人為的埋積と考えられる。

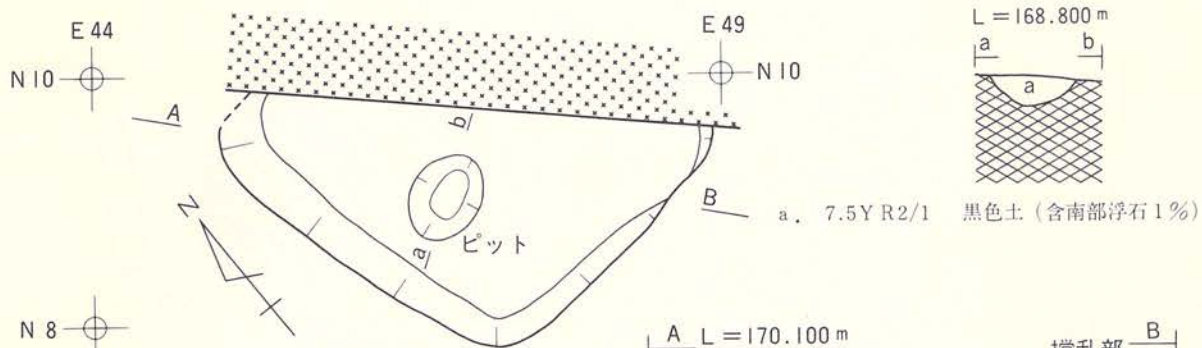
壁高は、南壁は13cm・北壁15cmである。床面は、外側が八戸火山灰層から南部浮石層で、平坦であるが北東にむかって傾斜する。内側は八戸火山灰層で平坦である。北西部、上床面に片口土器が出土している。

炉は検出されていない。柱穴は内部堅穴に1個のみ検出されている。規模は24×21cm・深さ6cmである。

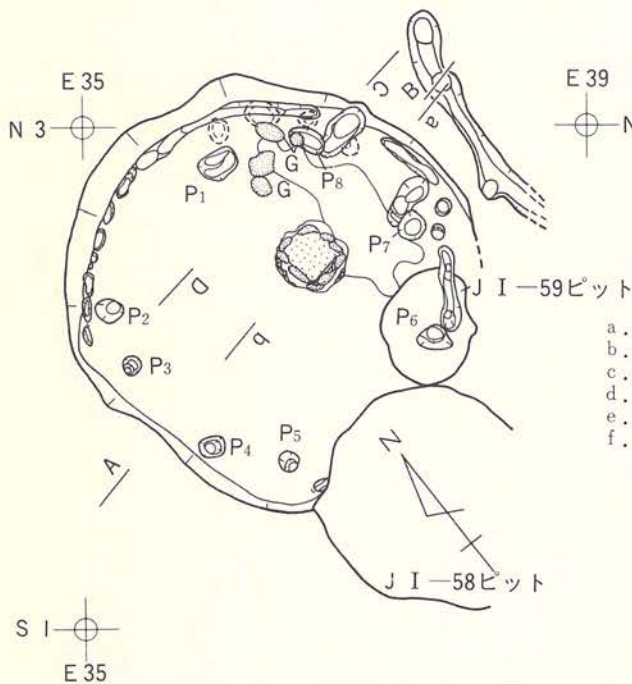
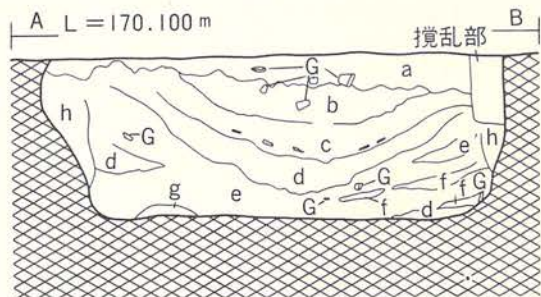
出土遺物（第86図、写真図版141）

遺物は床面から出土した515の片口土器1点のみである。舟形を呈し、順次ほそくなる片口がつけられているもので、片口の真むかい口縁部には縦位の穿孔を有する突起が付されている。

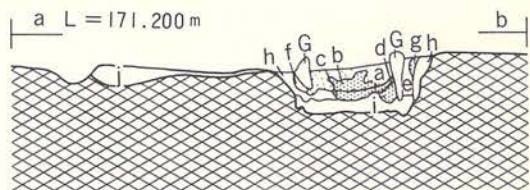
地文は $L < \frac{R}{R}$ と $R < \frac{L}{L}$ の単節斜縄文である。



- a. 10Y R4/6 褐色土 (10Y R2/1黒色土)
 b. 10Y R2/1 黒色土 (含焼土粒)
 c. 10Y R1.7/1 黒色土 (含焼土)
 d. 10Y R1.7/1 黒色土 (含炭化物・南部浮石)
 e. 10Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石2%)
 e'. 10Y R2/2 黒褐色土 (含十和田 a 降下火山灰)
 f. 10Y R2/1 黒色土 (含南部浮石50%)
 g. 10Y R1.7/1 黒色土 (含南部浮石50%)
 h. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (掘りすぎ部分含南部浮石)

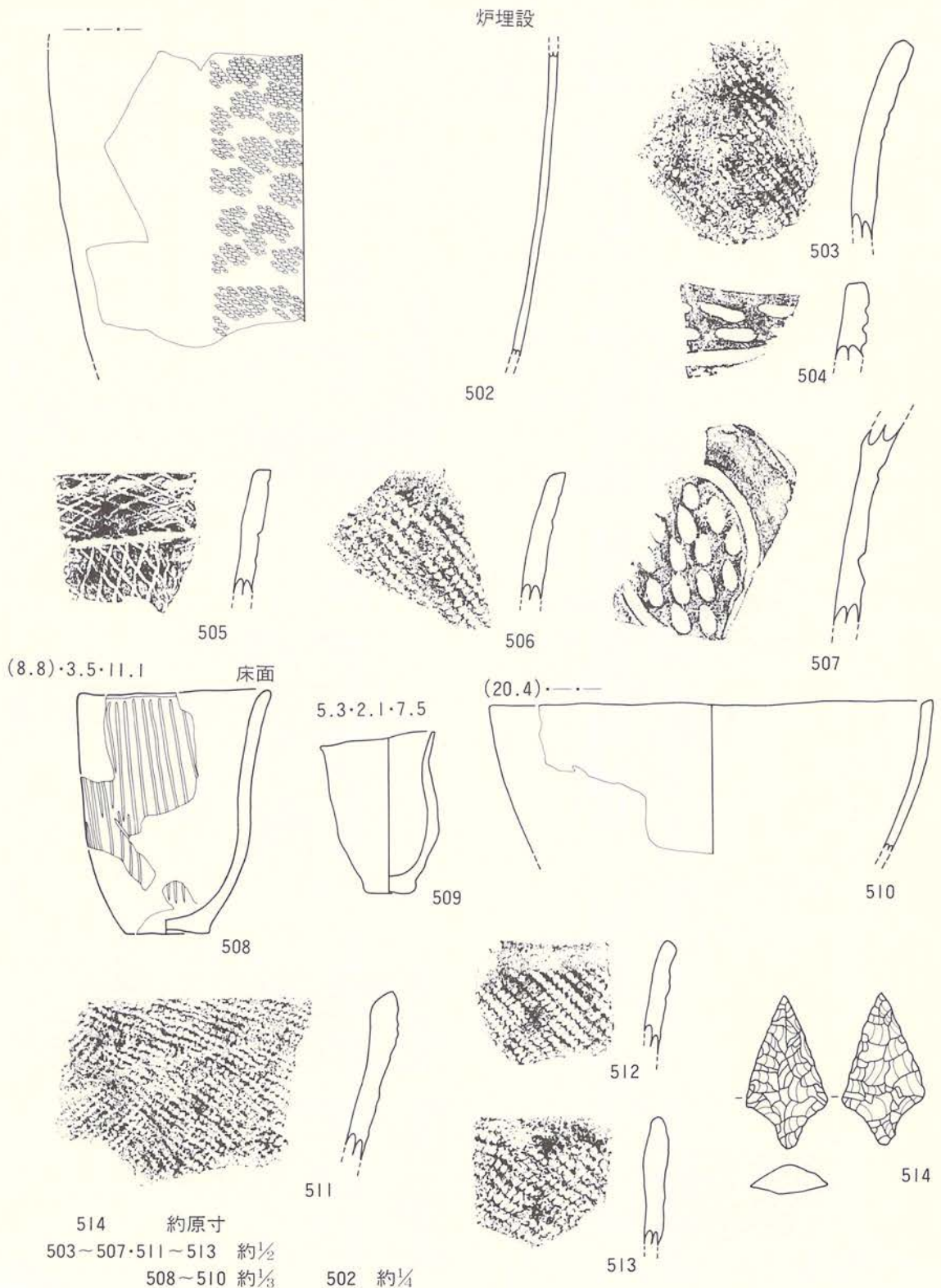


- a. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石30%)
 b. 7.5Y R5/8 明褐色土 (南部浮石)
 c. 7.5Y R3/3 暗褐色土 (含南部浮石上部20%・下部5%)
 d. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石7%・八戸火山灰)
 e. 7.5Y R2/3 極暗褐色土 (含南部浮石15%・炭化物)
 f. 10Y R5/8 黄褐色土 (10Y R3/4 暗褐色土との互層含南部浮石3%)



- C L = 171.500 m D
 a
 b
 a. 10Y R5/6 黄褐色土 (貼床)
 b. 10Y R5/8 黄褐色土 (柱穴埋土)
 a. 7.5Y R3/4 暗褐色土 (焼土含南部浮石3%・炭化物2%)
 b. 5Y R3/6 暗赤褐色土 (焼土含5Y R2/4極暗赤褐色土・南部浮石2%)
 c. 5Y R5/8 明赤褐色土 (焼土含5Y R3/2暗赤褐色土・南部浮石3%)
 d. 5Y R4/8 赤褐色土 (焼土含南部浮石)
 e. 10Y R4/6 褐色土 (主に八戸火山灰含南部浮石)
 f. 10Y R3/3 暗褐色土 (主に八戸火山灰含南部浮石2%・炭化物)
 g. 5Y R5/8 明赤褐色土 (焼土・八戸火山灰)
 h. 10Y R5/6 黄褐色土 (主に八戸火山灰含南部浮石2%)
 i. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石2%・炭化物少量)
 j. 10Y R5/6 黄褐色土 (貼床)

第82図 J I - 2・J I - 4 住居跡(平・断面 $S = \frac{1}{60}$, 炉断面 $S = \frac{1}{30}$)



514 約原寸
 503~507·511~513 約 $\frac{1}{2}$
 508~510 約 $\frac{1}{3}$

502 約 $\frac{1}{4}$

第83図 J I - 1・J I - 2・J I - 4住居跡出土遺物(遺物番号502~514)

遺構の時期

床面から出土した土器と、遺構の切り合い関係から中期後葉から末葉に位置づけられる。

J I—6 住居跡

遺 構（第84図、写真図版39）

この住居跡は宅地跡にあり、南東側を石垣と下の宅地に、北西側を溝に切られ、北東側が斜面下方のため消失しているものである。

平面形は楕円形を呈するものと思われるが長軸方向は不明である。規模は、残存部北東—南西で3.3mである。埋土は黒褐色土の単層で、北西側がややパミス量が多い。

壁高は、北壁が7cm、南西壁が30cmである。床面は、南部浮石層から黒褐色土層で、やや凹凸がある。床面には鉢形土器などが出土している。

炉は石囲い炉で、南東寄りに位置すると思われる。石垣で大部分が破壊されており、規模等は不明であるが、頁岩、砂岩の2個の炉縁石が残存している。柱穴はP₁～P₆が検出されている。P₁～P₄は壁を巡るもので、深さがほぼ似かよっている。大きさはP₁とP₃、P₂とP₄がそれぞれ似る。またP₅とP₆の規模がほぼ同じである。

P _{No.}	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆
径 cm	10×8	19×19	22×20	28×21	19×17	19×18
深さcm	29	28	27	34	47	50

出土遺物（第86図、写真図版141）

遺物は516と517の土器が出土している。どちらも床面から出土したものである。516は体部中位が脹る粗製深鉢形土器で、地文はL< $\frac{R}{R}$ の単節斜縄文である。517は頸部に4個の半環状把手をもつ壺形土器である。体部上半には楕円状の沈線区画が施されている。地文はR< $\frac{L}{L}$ の単節斜縄文である。いずれの土器も第Ⅱ群土器に属するものであろう。

遺構の時期

床面から出土した土器から、中期末葉に位置づけられる。

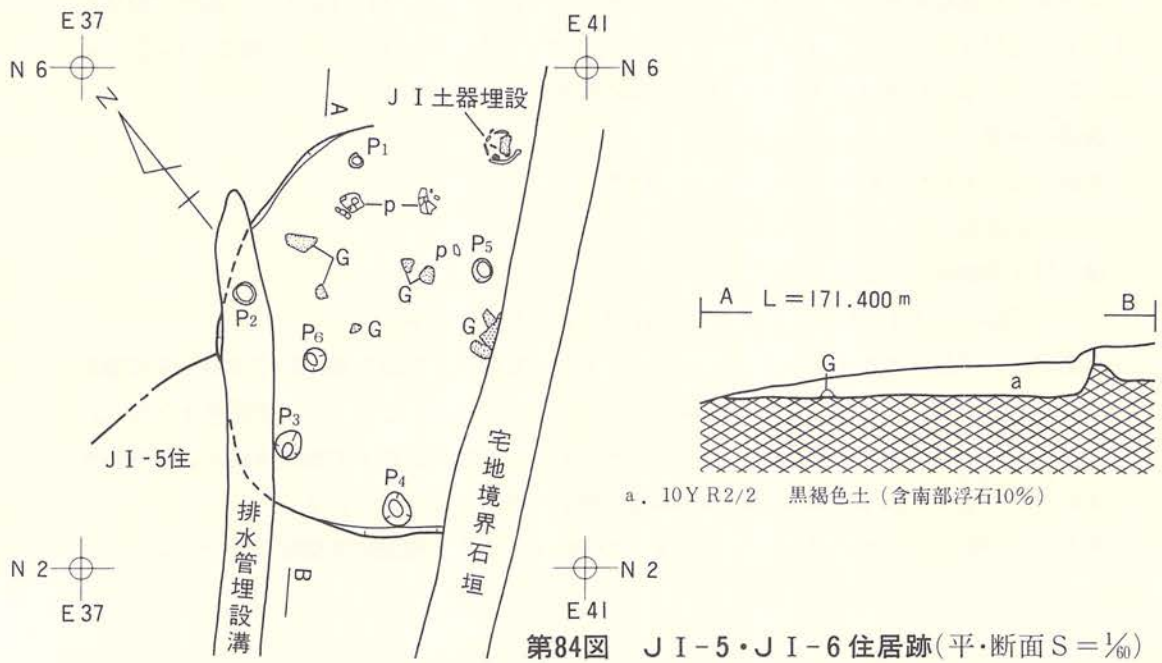
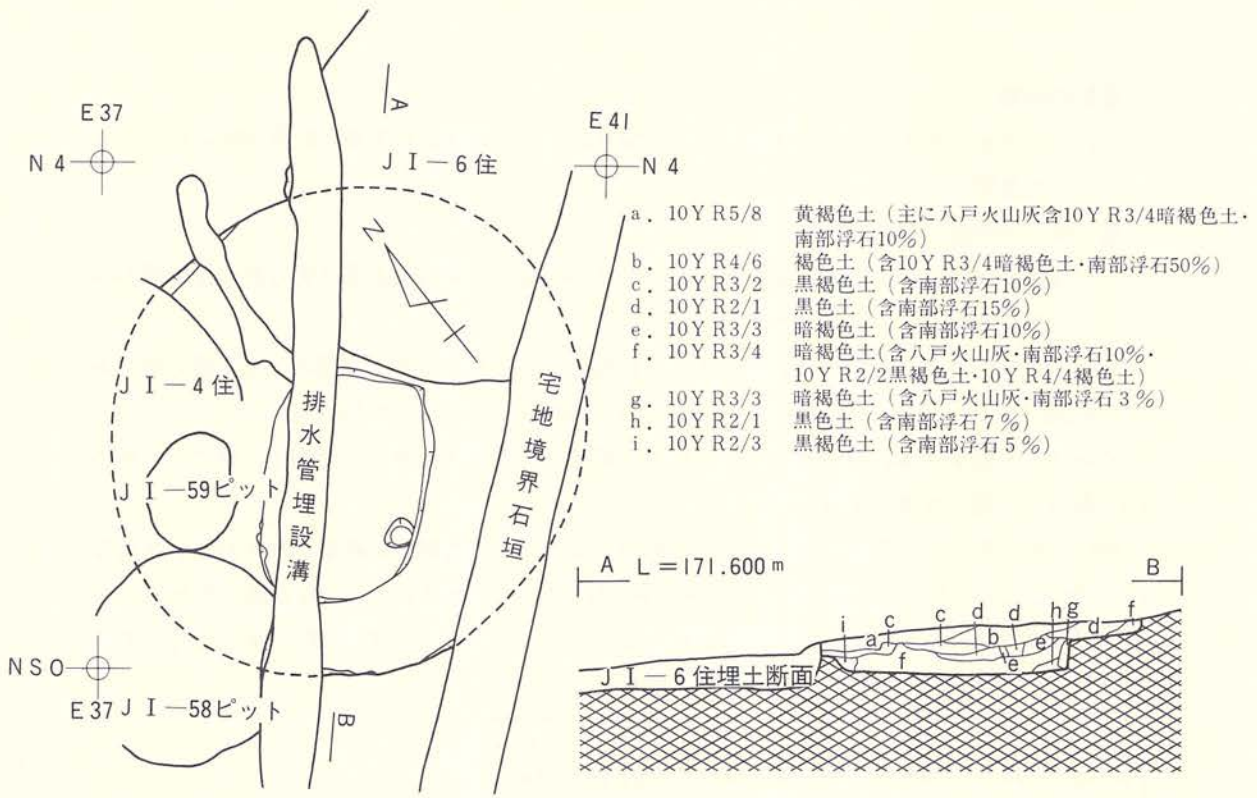
J I—7 住居跡

遺 構（第85図、写真図版40）

この住居跡は、J I—51ピットの東壁に検出されたものである。

平面形は、南北に長軸をもつ隅丸長方形を呈する。規模は、開口部長2.7×2.0m・床面部長2.3×1.7mである。埋土は、上・中位がやわらかい黒色～黒褐色土、下位が黒褐色土と汚れた南部浮石、最下位床面上が炭化物を含む黒色土、周溝上が黒色砂質土で構成される。下位の埋土はかたくしまっており、K I—1・2住居跡の埋土と非常によく似ている。

壁高は、東壁70cm・西壁73cm・南壁69cm・北壁98cmである。床面は南部浮石層で、よくしま



第84図 J I - 5・J I - 6 住居跡(平・断面 S = 1/60)

っており平坦である。壁に沿って幅10～17cm・深さ4～9cmの周溝が巡っている。

炉は検出されていない。柱穴はP₁～P₁₂が検出されている。このうち、周溝内にあるのが9個、壁内にあるのが3個である。壁内の3個をみると、長軸方向の対辺にP₁—P₂・P₆—P₇と2個一対の形で周溝と壁内にある。短軸方向ではP₉—P₁₀と2個一対になるが対辺にはない。周溝内の残りの柱穴をみると、4隅に配置されるものとそうでないものがある。なお、P₁₂は2個の可能性もある。以上の柱穴配置から、2個一対の3組の構成が考えられるし、また、建て替えも考えられる。

P _{No}	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂
径 cm	15×12	23×17	17×16	12×10	17×15	15×14	15×15	24×14	15×15	26×19	14×10	31×16
深さcm	39	35	31	33	37	54	40	40	36	34	22	36

出土遺物（第86図、写真図版141）

518～522の土器が出土している。いずれも埋土から出土したものである。519～522の胎土には繊維が認められる。519～521には綾絡文が、522には撚糸文が施されている。この4破片は第I群土器1類に属するものであろう。

遺構の時期

住居跡の形態、掘り込み及び埋土状況から、前期に位置づけられる可能性が高い。

J II—2 住居跡

遺 構（第85図、写真図版41）

この住居跡は、二段になる宅地跡の境界にあり、北西壁を溝に切られ、東側を石垣と下の宅地に削平され、南西側が調査区外（国道）に入るものである。したがって、全く部分的にしか検出されていないものである。

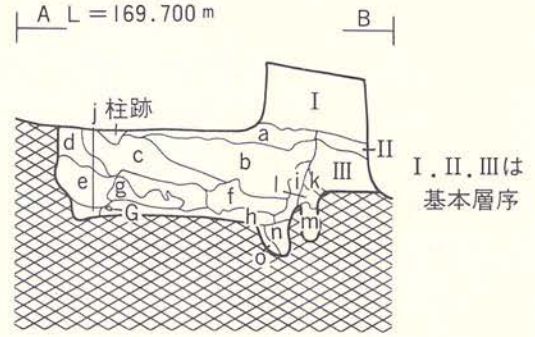
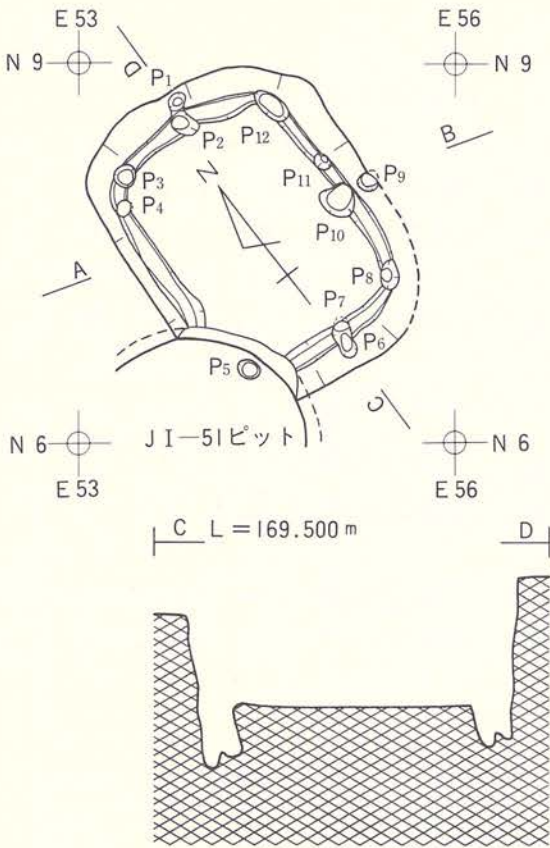
平面形は、検出部分の北壁の状況から隅丸形状を呈するようだが、規模は、全く不明である。埋土は、最上位に黄褐色土がブロック状に入る。上・中位が黄褐色土やにぶい褐色土を含む暗褐色土と黒褐色土、下位がにぶい褐色土を含む暗褐色土、黒褐色土や暗褐色土を含む褐色土と明黄褐色土、壁際が暗褐色土を含むにぶい黄褐色土などで構成される。いずれの層も、2種以上の色調の混合土である。この点は他の住居跡の埋土と異なるものである。

壁高がわかるのは北壁のみで、43cmである。床面は八戸火山灰層で、かたく平坦である。南側は平坦にのびているが、斜面になるため八戸火山灰層床面が自然消滅し、あとは不明となる。

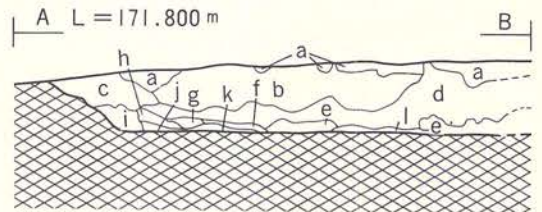
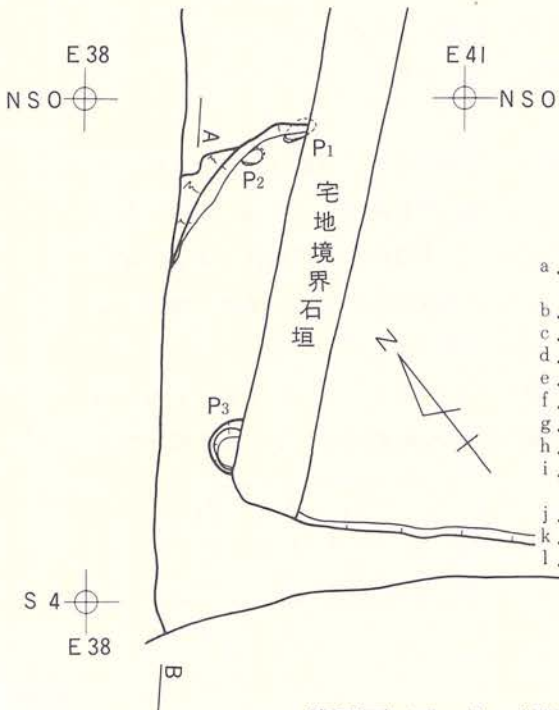
炉は検出されていない。柱穴はP₁～P₃が検出されている。P₁・P₂は壁に沿ってある。P₃は掘り方が認められる。支柱穴となるものであろう。

P _{No}	P ₁	P ₂	P ₃
径 cm	20×11	18×10	42
深さcm	15	9	30

出土遺物（第87図、写真図版142）

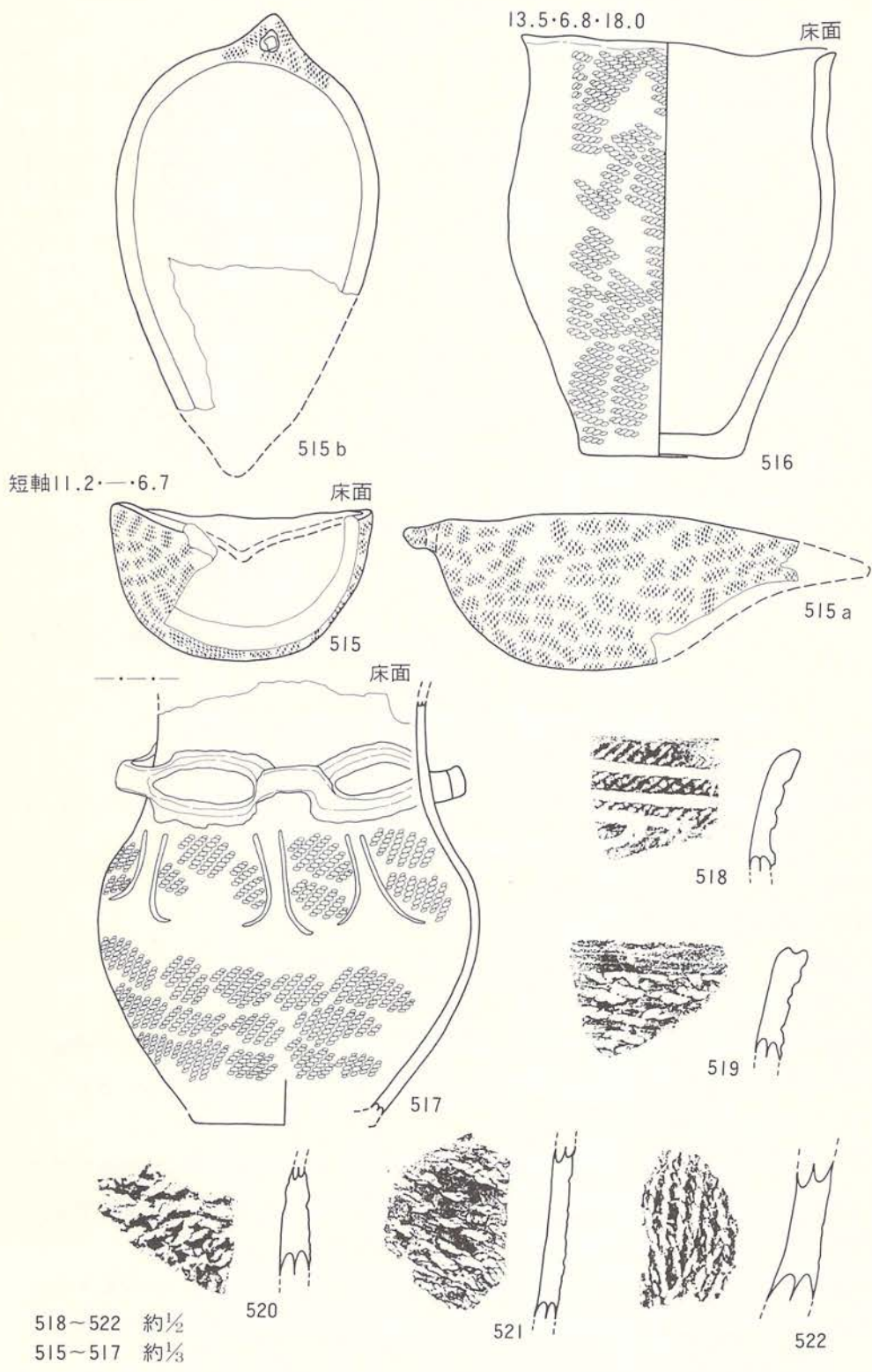


- a. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石3%)
- b. 7.5Y R3/1 黒褐色土 (含南部浮石5%)
- c. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石3%)
- d. 10Y R3/1 黒褐色土 (含南部浮石3%・炭化物)
- e. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石7%)
- f. 10Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石3%)
- g. 10Y R5/8, 4/6 (黄)褐色土 (南部浮石層
含10Y R2/3黒褐色土)
- h. 10Y R1.7/1 黒色土 (含南部浮石10%・炭化物)
- i. 10Y R3/1 黒褐色土 (含南部浮石7%)
- j. 7.5Y R1.7/1 黒色土 (砂質土含南部浮石1%)
- k. 7.5Y R3/1 黒褐色土 (含南部浮石3%)
- l. 7.5Y R2/3 極暗褐色土 (含南部浮石10%)
- m. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石3%)
- n. 7.5Y R3/1 黒褐色土 (南部浮石含黒褐色土)
- o. 10Y R5/8 黄褐色土 (南部浮石含黒色土)

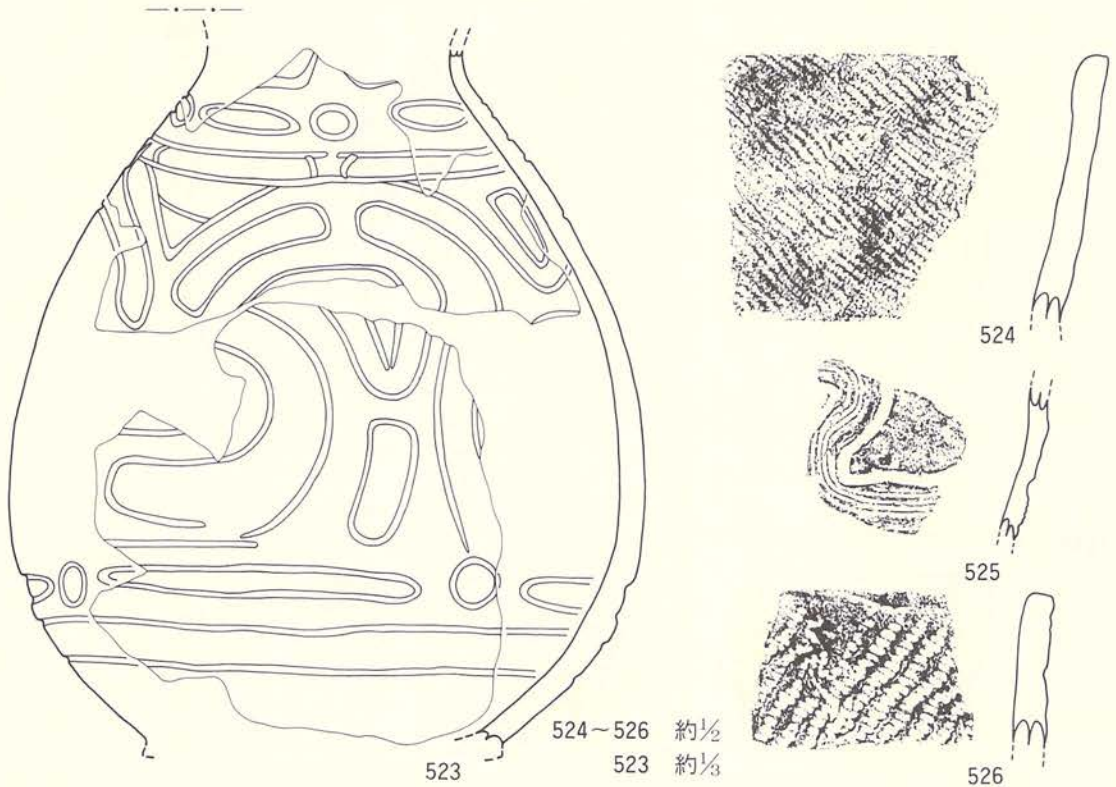


- a. 10Y R5/6 黄褐色土(含7.5Y R5/3にぶい褐色・3/2黒褐色土・南部浮石5%)
- b. 10Y R3/3 暗褐色土(含7.5Y R5/6黄褐色土・南部浮石15%)
- c. 7.5Y R3/4 暗褐色土(含7.5Y R5/3にぶい褐色土・南部浮石10%)
- d. 7.5Y R2/2 黒褐色土(含7.5Y R5/3にぶい褐色土・南部浮石10%)
- e. 10Y R4/6 褐色土(含10Y R3/2黒褐色土・南部浮石1%)
- f. 10Y R6/8 明黄褐色土(含10Y R3/3明褐色土・南部浮石1%)
- g. 7.5Y R3/4 暗褐色土(含7.5Y R5/3にぶい褐色土・南部浮石3%)
- h. 7.5Y R3/3 暗褐色土(含7.5Y R5/3にぶい褐色土・南部浮石5%)
- i. 10Y R5/4 にぶい黄褐色土(含10Y R3/3暗褐色土・6/6明黄褐色土・南部浮石2%)
- j. 10Y R5/4 にぶい黄褐色土(含南部浮石1%)
- k. 10Y R3/3 暗褐色土(含10Y R6/8明黄褐色土・南部浮石3%)
- l. 7.5Y R2/3 極暗褐色土(含7.5Y R5/4にぶい褐色土)

第85図 J I-7・J II-2 住居跡(平・断面 S = 1/60)



第86図 J I - 5・J I - 6・J I - 7 住居跡出土遺物(遺物番号515~522)



第87図 J II - 2 住居跡出土遺物(遺物番号523~526)

523~526の土器が埋土中位から出土している。523は口縁部と底部が欠損した壺形土器で、体部には渦巻文を基調とする文様が施文されている。525の体部破片には沈線区画がなされ櫛歯状工具によって条線が施されている。523は第Ⅲ群土器に属する。

遺構の時期

この遺構の時期については不明である。

K I - 1 住居跡

遺 構 (第88~89図、写真図版42)

この住居跡の北東側約半分は調査区外にはいる。当住居跡はK I - 2 住居跡を切って構築されており、上部にはJ I - 3 古代竪穴住居跡が構築されている。床面に炭化材が検出されているところから、焼失住居跡と思われる。

平面形は隅丸長方形を呈する。規模は短軸最大幅で床面部6.1m、長軸は推定で14m前後になるものと思われる。所謂「大型住居跡」の範疇にはいるものである。埋土は上位が黒色土、中位が暗褐色土、下位が暗褐色土で構成される。

壁高は南東壁で43~61cm・北西壁で56~86cm・南西壁で54~73cmである。床面は壁際から中央部にむかって約1mの幅をもって一段高くなり、中央部は15cmの段差をもって低くなる。い

ずれの面も凹凸があり、堅くしまっている。壁下には幅6～17cm・深さ4～17cmの周溝が巡る。

炉は地床炉で、長軸中央部に沿って3基検出されている。炉No1は床面ほぼ中央部に位置する。焼土は炭化物の分布を狭み、2個所に分布する。炉内部の焼成最大層厚は3cmに及ぶ。炉No2・No3は床面中央部から南西側に位置する。焼土はいずれも薄く、炭化物の分布を主とする。焼成層厚は1cmに満たない。柱穴は壁下周溝の中に支柱穴P₁～P₂₂が、また支柱穴は床面段差部分にP₂₃～P₂₈が配される。

P _{No}	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃
径 cm	17×30	8×18	11×12	10×17	11×14	10×17	13×13	9×17	11×11	7×17	16×20	10×17	14×16
深さ cm	41	45	46	44	58	44	39	31	51	27	54	27	57

P _{No}	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄	P ₂₅	P ₂₆
径 cm	7×15	12×15	17×17	9×17	13×20	10×17	13×17	18×20	15×19	22×28	41×43	20×24	20×22
深さ cm	56	43	57	47	48	36	72	55	59	13	40	62	64

P _{No}	P ₂₇	P ₂₈
径 cm	24×27	20×23
深さ cm	63	76

出土遺物（第92～95図、写真図版142～146）

遺物は527～546の土器と547～549の石器が出土している。これら出土遺物のうち、527は床面から、528～549は埋土下位から上位にかけて出土したものである。

527～544はいずれも円筒形深鉢形土器である。527の口縁部文様帯は3cmで、文様帯には綾絡文が施されている。534は器高41.1cmの土器で、口頸部には2条の隆帯を巡らせている。口縁部文様帯は6.5cmで、捺糸圧痕文が施されている。535は横位の、537は斜位の捺糸文が施されている。536は口縁部文様帯に斜位の捺糸文が施されている。538は口頸部に隆帯を巡らし、隆帯に棒状工具で波状の沈線を施しているものである。539は縦位・斜位の条線が施されている。544の口縁部文様帯は4cmで、文様帯には綾絡文と環付末端の回転圧痕が施されている。528・529・533は単節斜縄文が、530・543は縦位の捺糸文が、531は縦位の綾絡文が、532・540は口縁部文様帯に綾絡文が、541は羽状縄文が、542は複節斜縄文が施されている。これらには胎土に繊維が認められるものである。

546は壺形土器で、地文にL< $\frac{R}{R}$ の単節斜縄文が施されている。

547の石錐はやや肉薄で長身の剝片先端部に両面から剝離調整が施され錐部を作り出しているもので、錐部は太い。548は約半分が欠損した横型石匙で、両面周縁に刃部剝離調整が施されている。549は明瞭なつまみをもたないが、形状から横型石匙に分類した。片面周縁に刃部剝離調整が施されているものである。

これら出土遺物のうち、527～544は第I群土器1類に属する。

遺構の時期

床面及び埋土から出土した土器から、前期前半期に位置づけられる。

K I—2 住居跡

遺 構（第89～90図、写真図版43）

この住居跡の北東側大部分は調査区外にはいる。当住居跡の南東側はK I—1 住居跡によって切られており、上部にはJ I—3 古代堅穴住居跡が構築されている。

平面形・規模は不明である。埋土は上位が黒色土、下位が黒褐色土で構成される。

壁高は南西壁で53cm・北西壁で67cmである。床面は平坦である。床面には深さ19cmのピットが検出されているが、約半分が調査区外にはいる為、平面形の規模は不明である。

炉は検出されていない。柱穴はP₁（径12×12cm・深さ44cm）・P₂（径20×20cm・深さ41cm）が検出されている。

出土遺物（第95図、写真図版146）

遺物は550の石匙が床面から出土したのみである。縦型石匙で両面両側縁に刃部剝離調整が施されている。

遺構の時期

住居跡の切り合い関係から、前期前半期に位置づけられる。

K II—1 住居跡

遺 構（第90～91図、写真図版44～45）

この住居跡は、床面に多くの炭化材が検出されているところから焼失住居跡であると思われる。

平面形は隅丸方形を呈する。規模は開口部径4.2×4.4m・床面部径4.0×4.2mである。埋土は暗褐色土・褐色土をブロック状に包含する黒褐色土の単層である。

壁高は東壁で25cm・西壁で58cm・南壁で35cm・北壁で61cmである。床面は凹凸があり、堅くしまっている。

炉は複式炉で、床面中央部から南東側に位置する。石囲い部は径70×75cmの規模をもち、チャート・砂岩をほぼ方形に埋置している。部内の焼成最大層厚は5cmに及ぶ。前庭部は幅90cm・長さ110cm・床面から掘り込み9cmの規模をもって南東壁まで達する。部内は踏み固められており、焼成痕、炭化物の分布は認められない。柱穴はP₁～P₁₄が検出されている。南東壁は炉前庭部幅にあたる部分がやや張り出し、柱穴P₄とP₅を伴うことから出入口状施設と思われる。

柱穴配置は、出入口状施設に伴うP₄とP₅との位置関係を考慮して推定するに、P₉—P₂—P₇・P₉—P₁₁—P₇・P₁₄—P₁₁—P₇・P₁—P₁₁—P₇—P₈・P₁—P₂—P₇—P₈の配置が考えられる。

P _{No.}	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃
径 cm	24×24	19×19	10×11	13×16	16×16	11×13	16×19	17×17	10×11	6×14	25×26	22×26	15×16
深さ cm	19	64	19	36	11	24	54	38	46	35	55	45	43

P _{No.}	P ₁₄
径 cm	17×19
深さ cm	42

出土遺物（第95図、写真図版146～147）

遺物は551～554の土器と555の石器が出土している。これらのうち、551と552は床面から、553と554は埋土から出土したものである。

551は体部が脹り、口縁部が外反する粗製深鉢形土器で、原体 $L < \frac{R}{R}$ の単節斜縄文が施されている。552はやや大型の、554は小型の深鉢形土器で、どちらにも原体 $L < \frac{R}{R}$ の単節斜縄文が施されている。555の石鏃は凹基無茎鏃で両面から入念に刃部剥離調整が施されている。551・552・554は第Ⅱ群土器に属するものであろう。

遺構の時期

床面から出土した土器から、中期末葉に位置づけられるものであろう。

2. 古代竪穴住居跡

GⅡ-1 住居跡

遺 構（第96図、写真図版46）

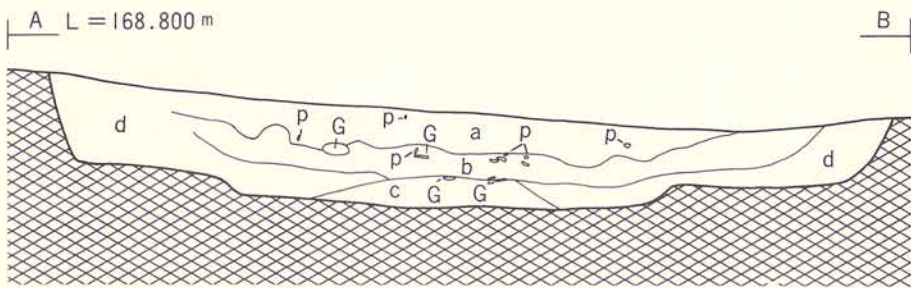
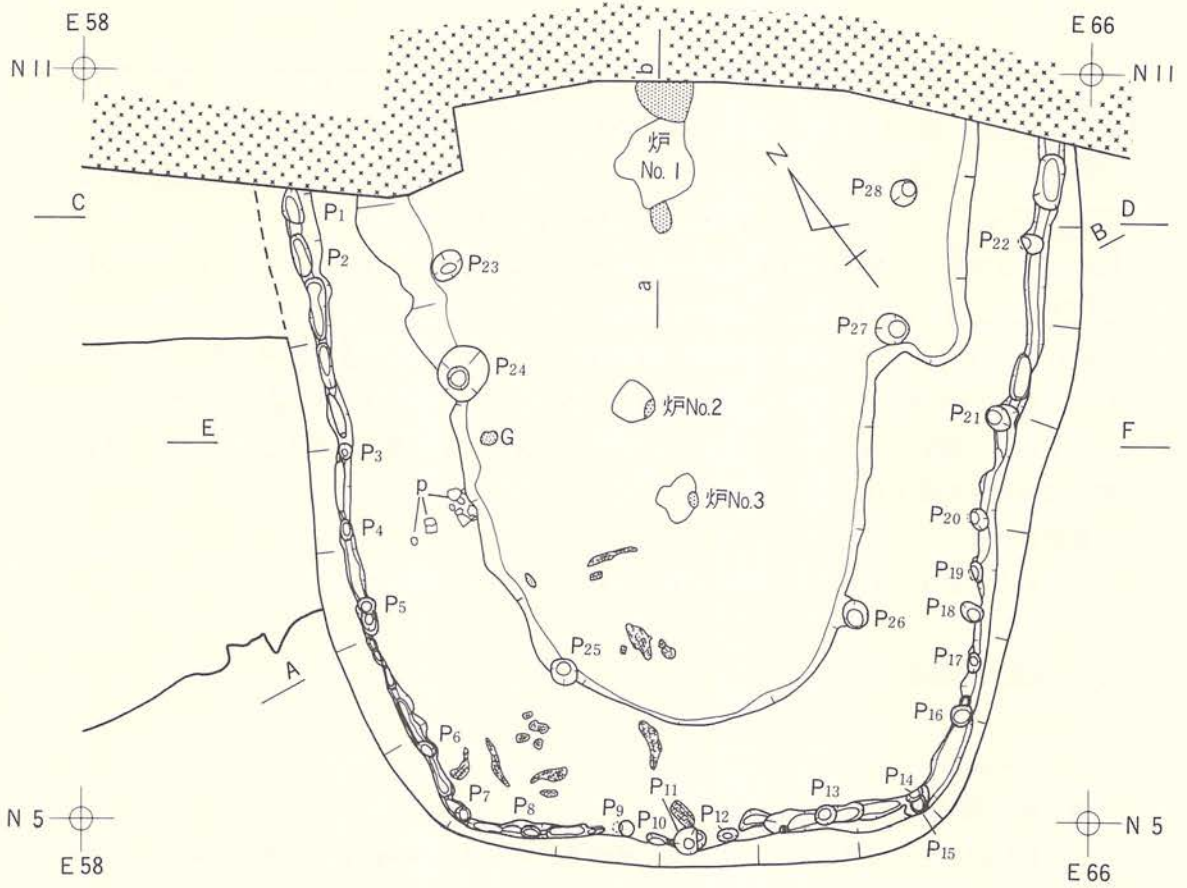
この住居跡の上部は既に削られており、検出されたのは南西側約半分の壁・床面と、全プランを把握できる柱穴である。埋土及び床面には、多くの炭化物と焼土が分布するところから、焼失住居跡と思われる。

平面形は、南西から北東に長軸をもつ長方形を呈する。規模は開口部で、長軸径6.3m、短軸径5.4m前後の住居跡と思われる。埋土は上位が黒色土、下位が黒褐色土で構成される。壁高は南西壁で18cmである。床面は第Ⅳ層面で、平坦である。

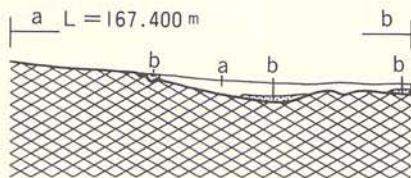
カマドは検出されていない。床面中央部から南西側に、径38cmの円形を呈する焼土が検出されている。この焼土の焼成最大層厚は3cmに及ぶ。柱穴は壁際床面と壁を切る形で、P₁～P₁₇が検出されている。これらのうち支柱穴を構成するものはP₁～P₁₃と思われるが、間尺は一定しない。

まず北東壁際はP₁—P₁₃—P₁₂—P₁₁で構成され、柱間距離は順に177cm・180cm・143cmである。これと対比される南西壁際はP₄—P₅—P₆—P₇で構成され、柱間は順に165cm・150cm・150cmとなる。

次に南東壁際はP₇—P₈—P₉—P₁₀—P₁₁で構成され、柱間距離は順に165cm・160cm・133cm・132cmである。これと対比される北西壁際はP₄—P₃—P₂—P₁で構成され、柱間距離は順

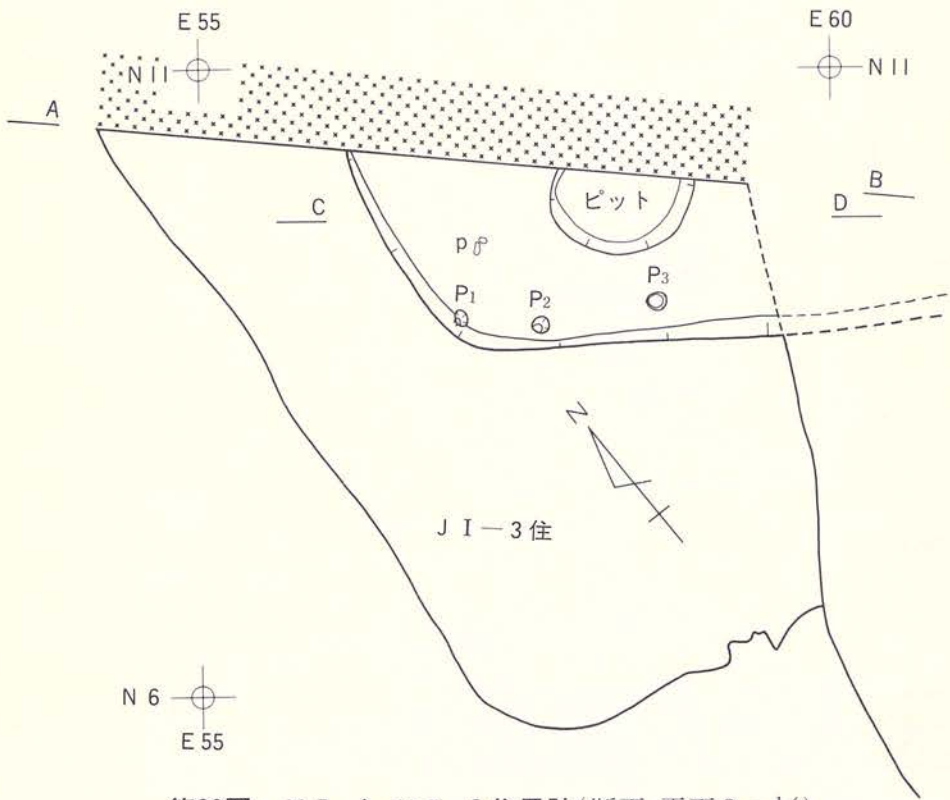
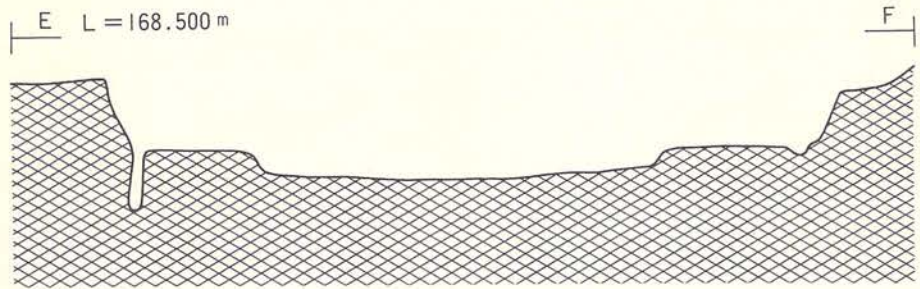
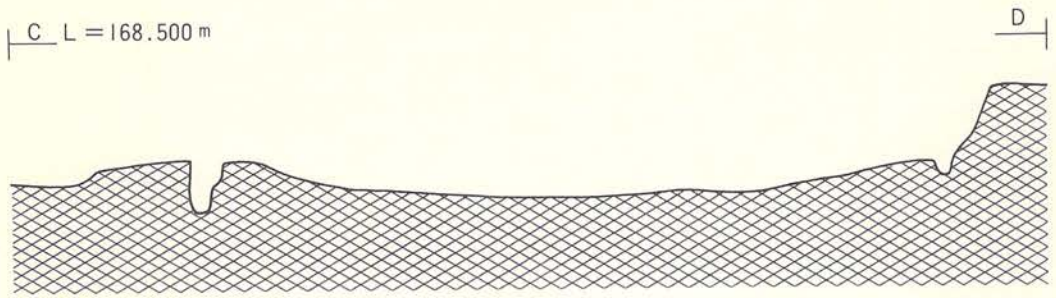


- a. 7.5Y R2/1 黑色土 (含南部浮石 3%)
- b. 10Y R3/3 暗褐色土 (含南部浮石 15%)
- c. 10Y R2/3 黑褐色土 (含南部浮石 1%・炭化物多量)
- d. 10Y R3/3 暗褐色土 (含炭化物・烧土)

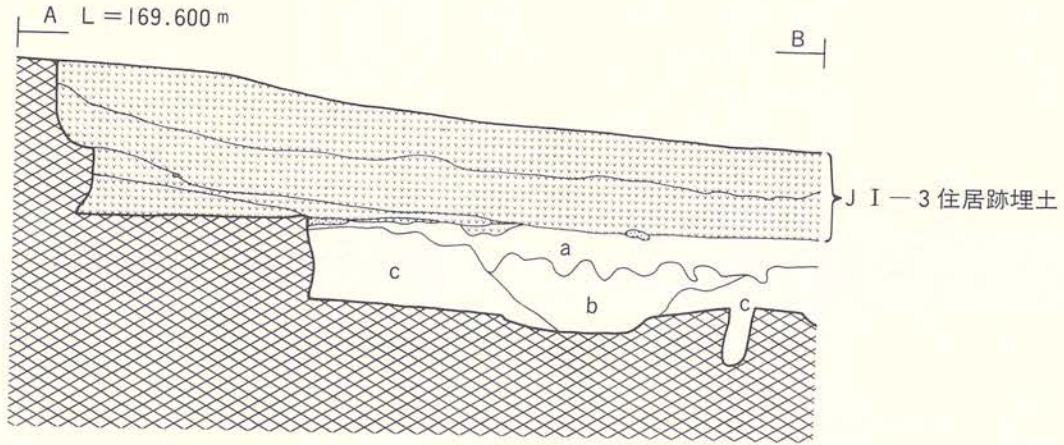


- a. 7.5Y R2/3 極暗褐色土 (含烧土粒・炭化物多量)
- b. 5Y R4/8 赤褐色土 (烧土)

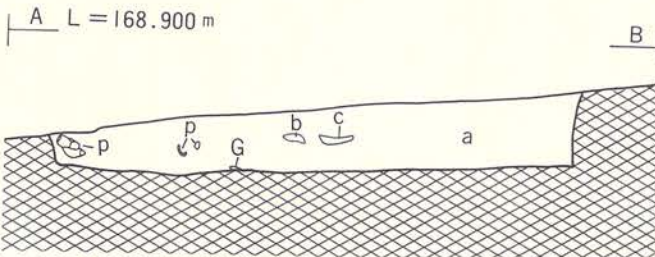
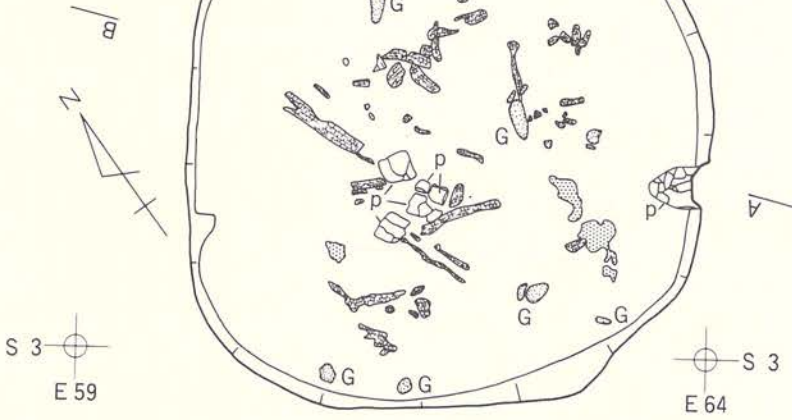
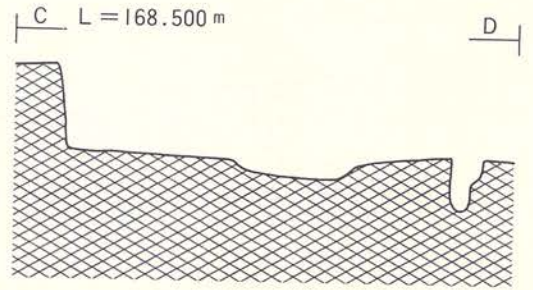
第88図 K I - 1 住居跡 (平・断面 S = 1/60, 炉断面 S = 1/30)



第89図 K I - 1・K I - 2 住居跡(断面・平面 S = 1/60)

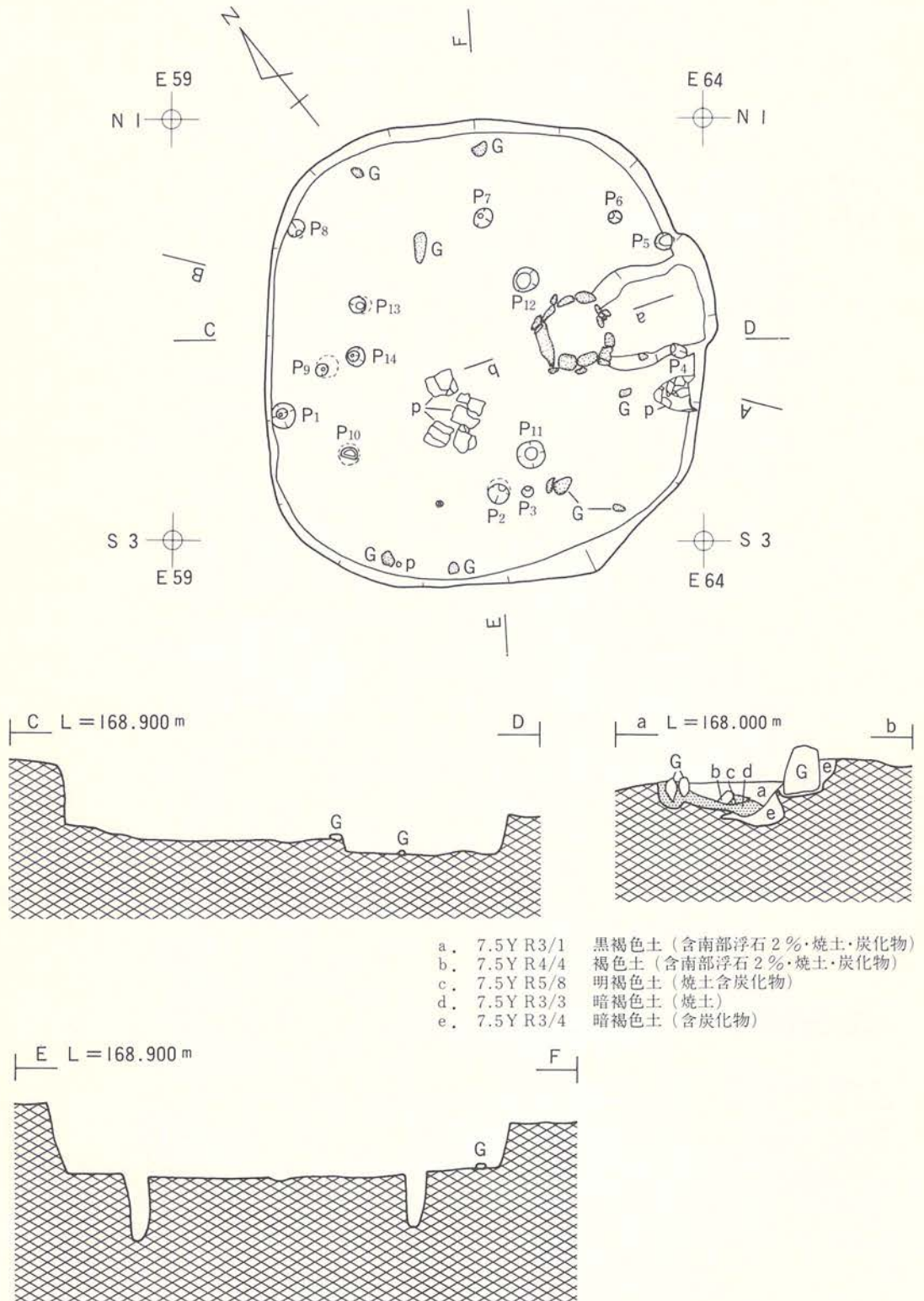


- a. 7.5Y R1.7/1 黑色土 (含南部浮石 3%)
- b. 10Y R2/3 黑褐色土 (含南部浮石 10%)
- c. 10Y R3/2 黑褐色土 (含南部浮石 15%)

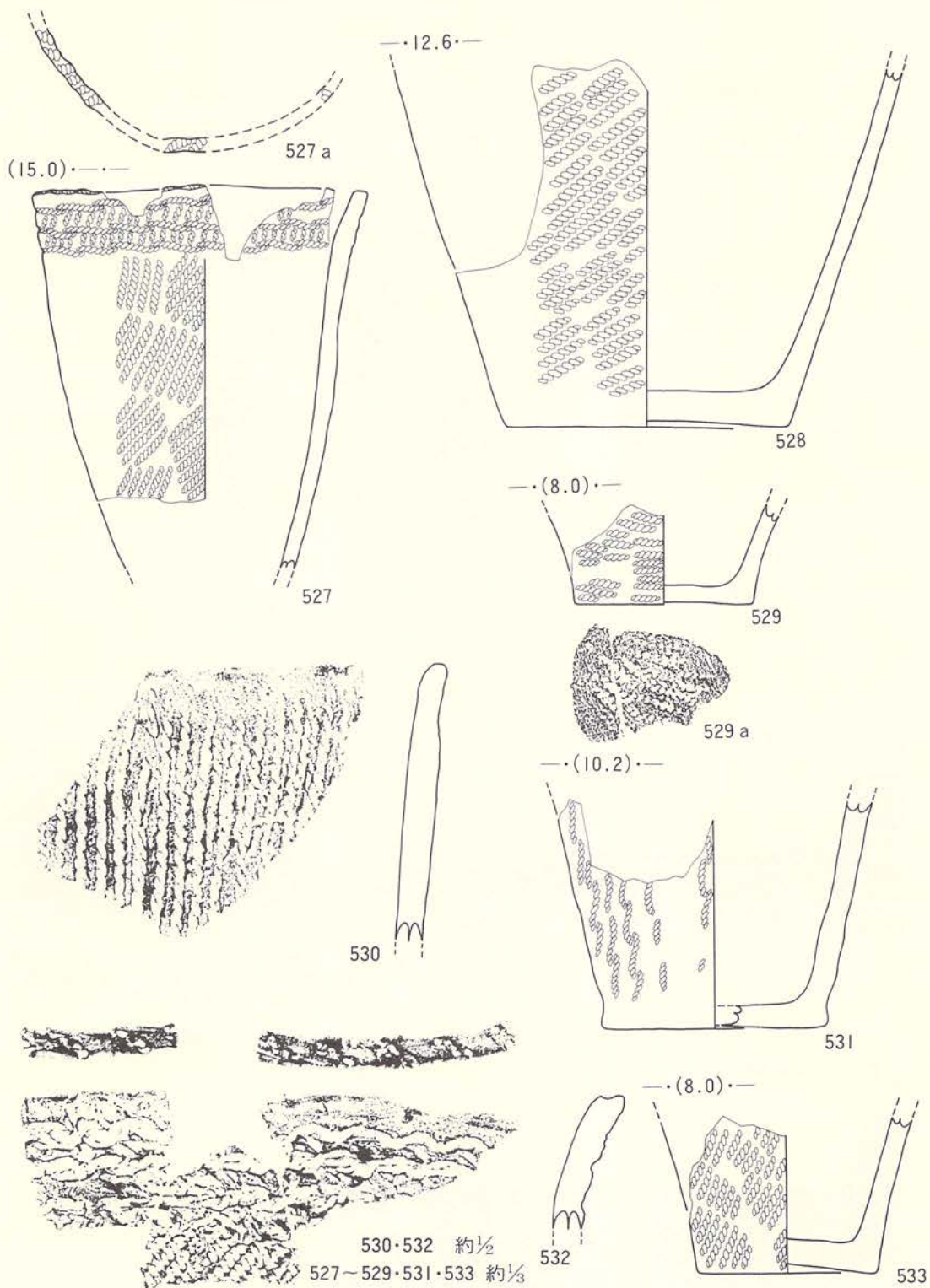


- a. 10Y R2/2 黑褐色土
- b. 10Y R3/3 暗褐色土
- c. 10Y R4/4 褐色土

第90図 K I - 2・K II - 1 住居跡 (断面・炭化材分布状況 S = 1/60)

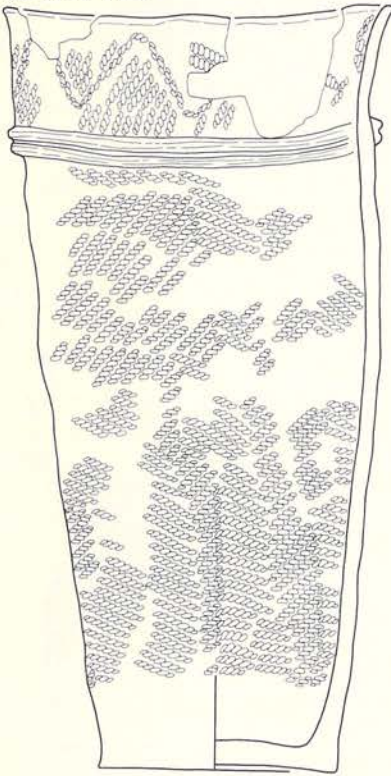


第91图 K II-1 住居跡(平·断面 S = 1/60, 炬断面 1/30)



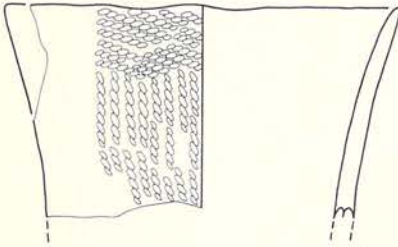
第92図 K I - 1 住居跡出土遺物(遺物番号527~533)

21.0・12.6・41.1



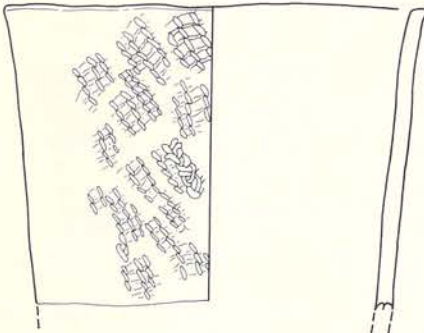
534

(15.0) ·····

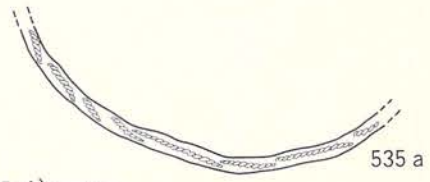


536

(16.0) ·····

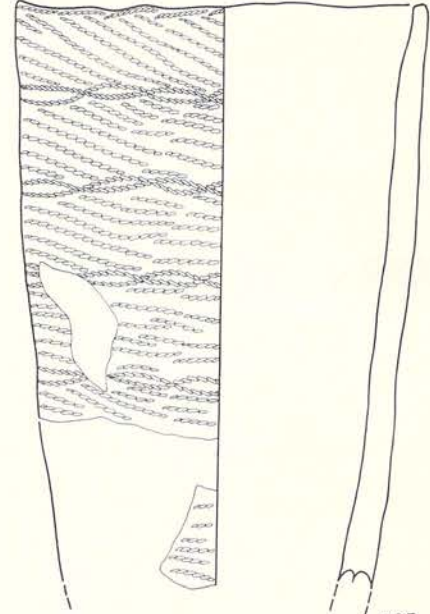


537



535 a

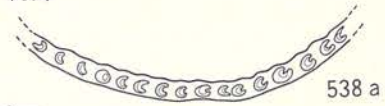
(15.4) ·····



535

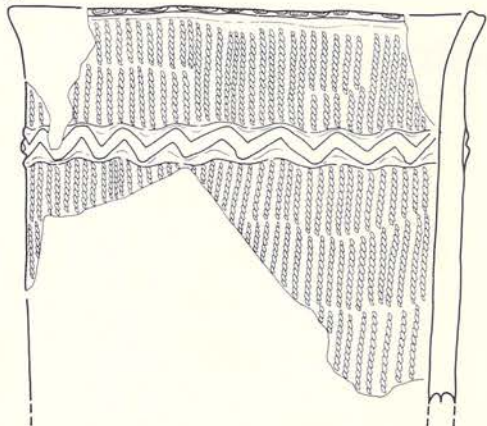
535~538 約 $\frac{1}{3}$

534 約 $\frac{1}{4}$



538 a

(18.0) ·····



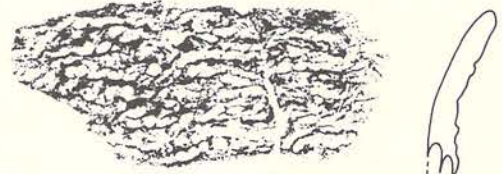
538

第93図 K I - 1 住居跡出土遺物(遺物番号534~538)

(14.5) ···

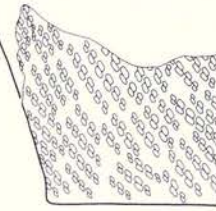


539



540

·18.2·

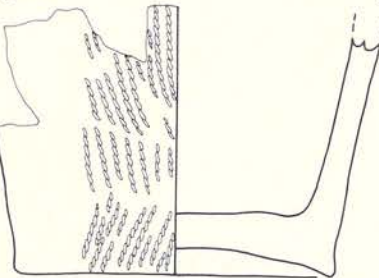


542

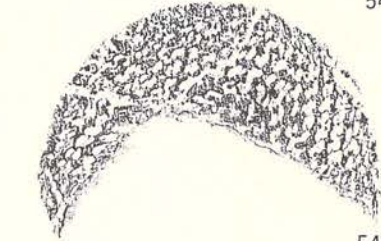


541

·12.0·

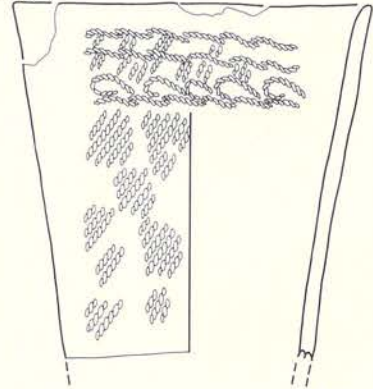


543



542 a

(13.6) ···

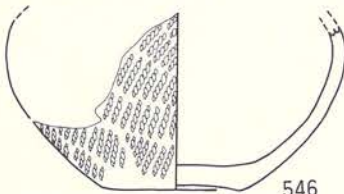


544



545

·5.0·



546



547



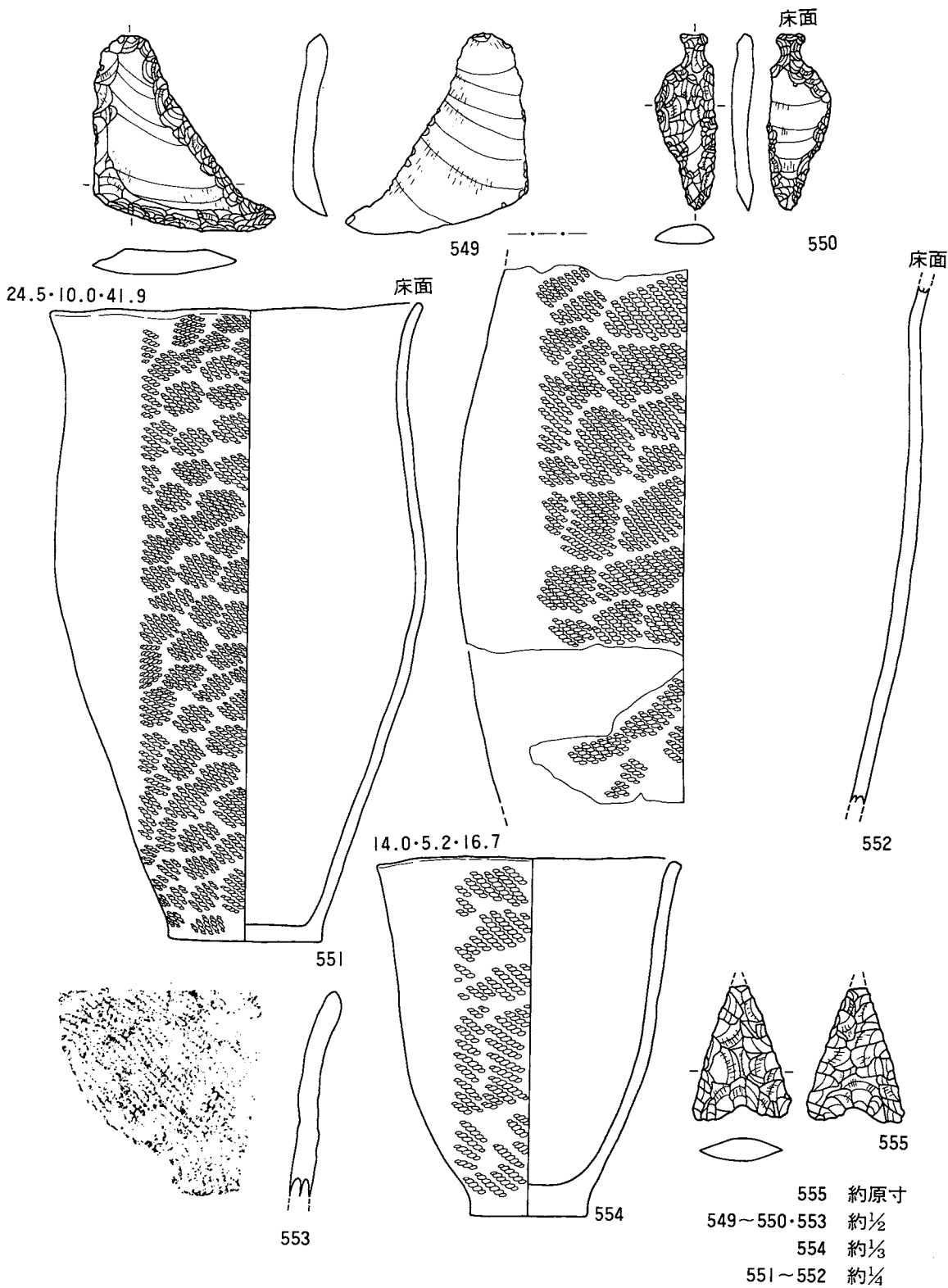
548

540~541·545·547~548 約 $\frac{1}{2}$

539·543~544·546 約 $\frac{1}{3}$

542 約 $\frac{1}{4}$

第94図 K I - 1 住居跡出土遺物(遺物番号539~548)



第95図 K I - 1・K I - 2・K II - 1 住居跡出土遺物(遺物番号549~555)

に135cm・263cm・173cmである。

P _{No}	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃
径 cm	17×18	20×23	28×33	22×25	23×26	23×26	19×23	18×21	20×25	13×13	15×15	15×15	21×21
深さcm	14	23	34	27	20	26	30	22	42	22	37	17	22

P _{No}	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇
径 cm	23×25	12×16	18×26	21×24
深さcm	61	26	31	46

出土遺物（第100図、写真図版147）

床面から556～561の土師器口縁部破片と琥珀が出土している。556・558・560・561は口縁部が短く外反するもの、557・559は直立するもので、器面には内外ともにヘラミガキ・ヘラナデ・ヘラケズリが施されている。琥珀は長さ8mm、直径12mmの円筒状のもので、孔を有する。装飾品として使用したものであろう。

遺構の時期

床面から出土した遺物から、平安時代に位置づけられるものである。

I I—5 住居跡

遺 構（第97図、写真図版47）

この住居跡は、I I—6 住居跡の炉から北東側の埋土を切って構築されており、斜面上方側で、等高線に沿った南西壁のみが検出されたものである。

平面形は、北西から南東に長軸をもつ長方形を呈すると思われる。規模は、長軸方向で5.5mである。埋土は、黒褐色土が壁側にわずかに認められる程度である。

壁高は7cmである。床面は、I I—6 住居跡の埋土面で暗褐色土層である。壁に沿って、幅12cm、深さ5m程の周溝がある。周溝の中には柱穴状に凹むところが多数みられる。床面の検出された範囲は、周溝から最大80cmまでである。

カマドにつながるかどうか不明であるが、南側に2箇所連続して焼土の分布がある。焼土の厚さは8～11cmである。カマドを構成する礫などは検出されていない。柱穴はP₁～P₇が検出されている。P₁は北西隅に位置するもので、この住居跡の支柱穴と思われるが、他の柱穴は、この住居跡の柱穴として配置されるかどうかは不明である。

P _{No}	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇
径 cm	16×15	18×18	16×14	16×16	12×12	22×22	15×14
深さcm	31	8(11)	10(11)	11(31)	9(49)	55(85)	10(31)

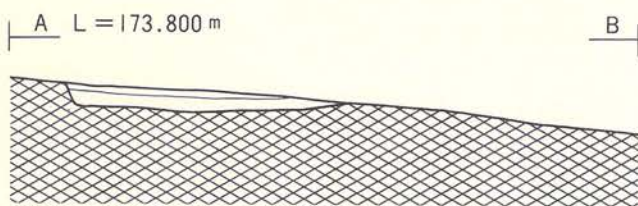
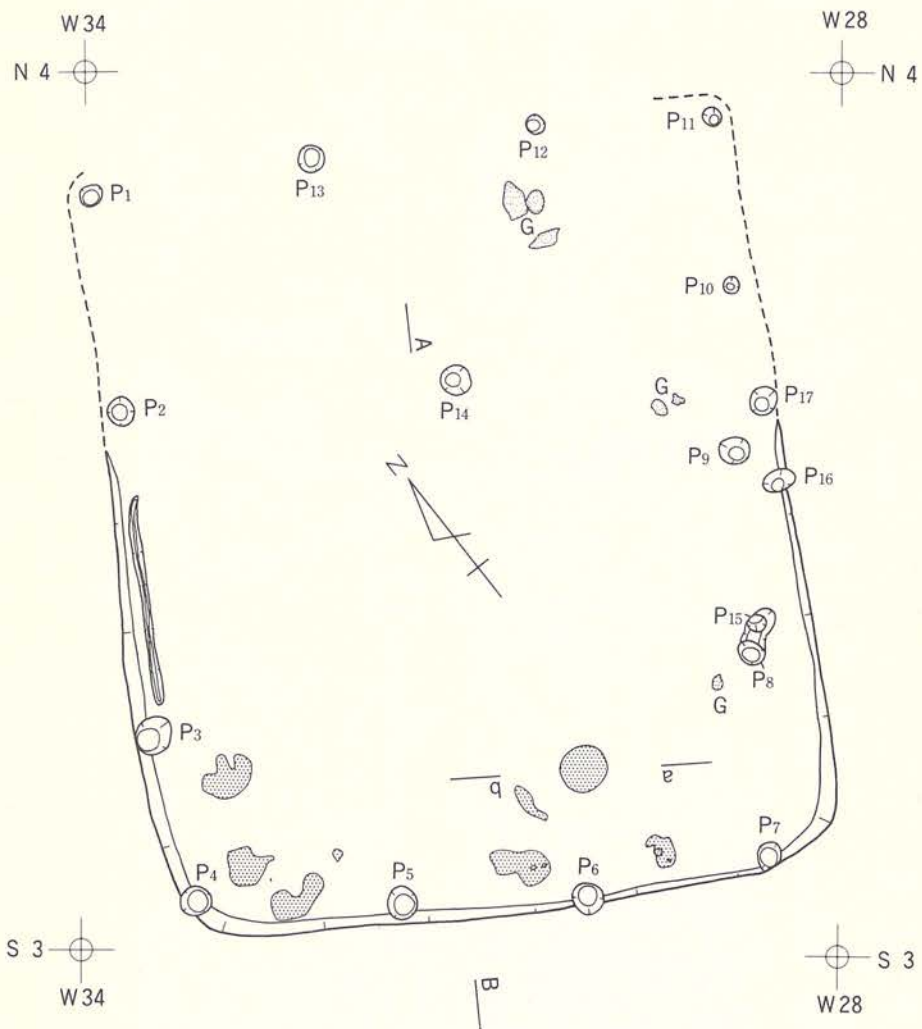
（ ）はP₁の検出面からの深さ）

出土遺物

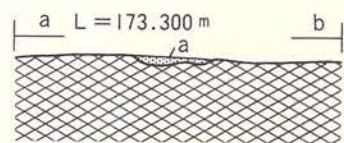
この遺構から遺物は得られず、時期も不明である。

I I—2 住居跡

遺 構（第98図、写真図版47～48）

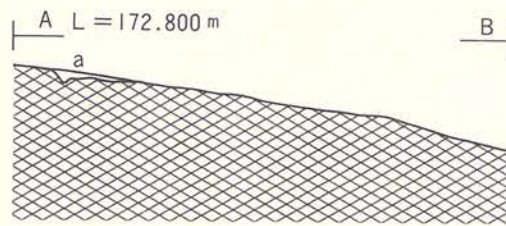
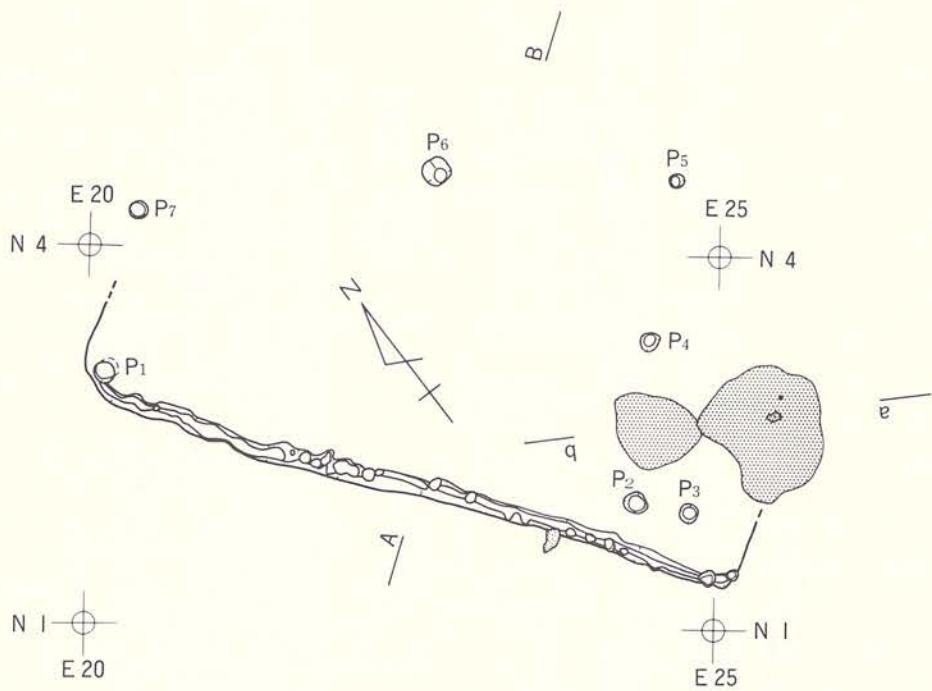


- a. 7.5Y R2/1 黑色土 (含南部浮石 1%)
- b. 7.5Y R2/2 黑褐色土 (含南部浮石 5%)

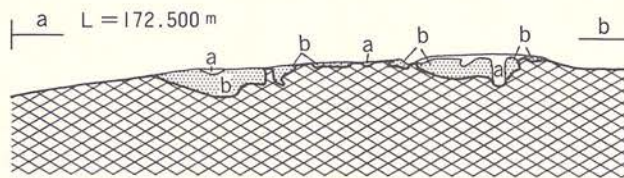


- a. 5Y R5/8 明赤褐色土 (烧土)

第96图 G II-1 住居跡(平·断面 $S = \frac{1}{60}$, 炉断面 $S = \frac{1}{30}$)



a. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石1%)



a. 7.5Y R3/4 暗褐色土 (含南部浮石少量・炭化物微量)
 b. 5Y R5/8 明赤褐色土 (焼土含7.5Y R6/8明褐色土)

第97図 I I-5 住居跡(平・断面 $S = \frac{1}{60}$, カマド断面 $S = \frac{1}{30}$)

この住居跡の南西側は調査区外にはいる。壁は既に削られており、検出をみたのはカマドと床面である。床面から炭化材が検出されているところから焼失住居跡と思われる。

平面形はほぼ方形を呈するものと思われる。規模については不明である。埋土は上位が暗褐色土、中位に十和田 a 降下火山灰が帯状に堆積する。下位は主に黒色土で構成される。床面は第Ⅴ層面で、平坦である。

カマドは北西壁に位置する。燃焼部から煙道部の焼成層厚は3～5cmに及ぶ。煙道部には左右とも、千枚岩質粘板岩を直立に組み合わせ、この上から灰白色シルト質土及び粘土を覆って補強している。この煙道部には上からも同質岩で覆われていた。煙道はゆるやかな傾斜をもって立ち上がり煙出し部に達する。柱穴はP₁（径17×19cm・深さ47cm）・P₂（径20×24cm・深さ50cm）・P₃（径22×23cm・深さ41cm）が検出されている。これらのうちP₁・P₂がこの住居跡の柱穴を構成するものと思われる。

出土遺物（第100～101図、写真図版148）

562～569の土師器が出土している。562～567はカマドから、568・569は床面から出土したものである。

562は器高14.8cmの無底式甗で、口縁部は長く、直立する。口縁部には内外ともにヨコナデが、体部には外面にヘラミガキ、内面にヘラナデが施されている。565は底部が欠損しているもので、外面にハケメとヘラミガキが、内面にハケメ調整が施されている。567は底部で内外ともハケメ調整が施されている。568・569は坏形土器の破片で、主にヘラミガキが施されている。

遺構の時期

カマド及び床面から出土した遺物から、8世紀初頭に位置づけられるものとする。

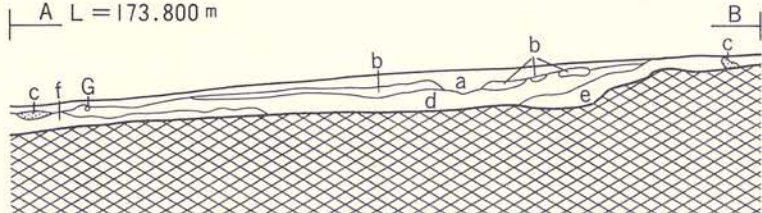
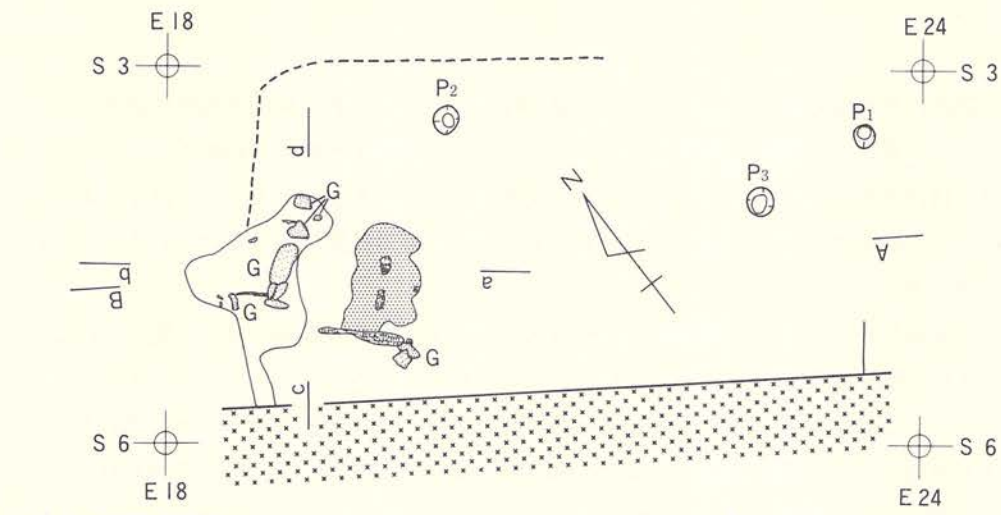
J I—3 住居跡

遺 構（第99図、写真図版49～50）

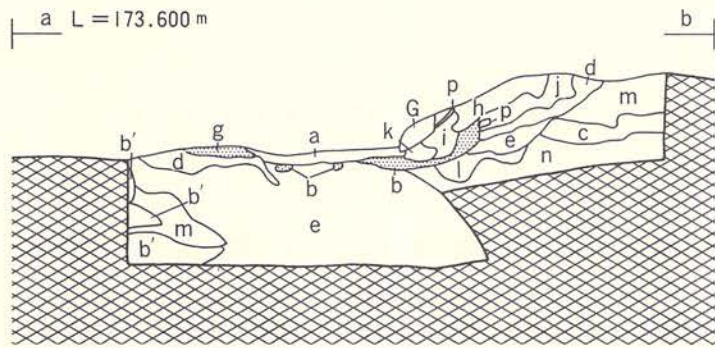
この住居跡の北東側約1/3は調査区外にはいる。当住居跡はK I—1・K I—2縄文時代竪穴住居跡の上部に構築されているものである。南東壁は攪乱されており、検出できなかった。

平面形はほぼ方形を呈するものと思われる。規模は開口部径6.2m前後の住居跡と推定される。埋土は上位に黒褐色土がレンズ状に堆積し、中位が黒色土、下位が極暗褐色土で構成されると思われるが、南東側は攪乱され、明確な埋土状況を把握できない。

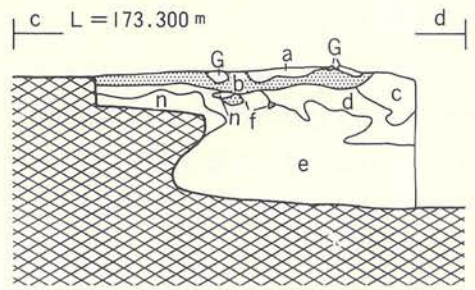
壁高は西壁で60cmを測る。床面は第Ⅴ層面で、平坦である。床面には2基のピットが検出されている。ピットNo.1は床面南西側に位置し、開口部径60×65cm・底部径30cm・深さ6cmの規模をもつ。ピットNo.2は床面南東側に位置し、開口部径100×110cm・底部径87×97cm・深さ20cmの規模をもつ。埋土はいずれも黒色土の単層である。西壁下には周溝が巡る。この周溝は西



- a. 7.5Y R3/4 暗褐色土 (含十和田 a 降下火山灰)
- b. 10Y R5/3 にぶい黄褐色土 (十和田 a 降下火山灰)
- c. 5Y R4/8 赤褐色土 (焼土)
- d. 7.5Y R2/1 黒色土 (含炭化物)
- e. 7.5Y R3/2 黒褐色土
- f. 7.5Y R4/4 褐色土 (含南部浮石10%)



- a. 7.5Y R3/3 暗褐色土 (含焼土粒・炭化物・炭化材・南部浮石)
- b. 7.5Y R4/4 褐色土 (焼土)
- b'. 7.5Y R4/4 褐色土 (主に八戸火山灰・含南部浮石)
- c. 7.5Y R3/4 暗褐色土 (含炭化物・褐色土・南部浮石)
- d. 7.5Y R2/3 極暗褐色土 (含炭化物・南部浮石3%)
- e. 7.5Y R3/2 黒褐色土 (含南部浮石3%)
- f. 5Y R3/6 暗赤褐色土 (焼土)
- g. 5Y R5/8 明赤褐色土 (焼土)
- h. 7.5Y R3/2 黒褐色土 (含炭化物・褐色土)
- i. 5Y R2/4 極暗赤褐色土 (含炭化物・灰・焼土)
- j. 10Y R5/6 黄褐色土 (含焼土)
- k. 7.5Y R6/3 にぶい褐色土 (灰)
- l. 7.5Y R3/4 暗褐色土 (含炭化物・焼石)
- m. 7.5Y R5/8 明褐色土 (南部浮石層)
- n. 7.5Y R4/6 褐色土 (よごれた八戸火山灰層)



第98図 I II-2 住居跡 (平・断面 S = 1/60, カマド断面 S = 1/30)

壁を巡り、南壁のカマド付近で途絶える。規模は開口部幅 9～65cm、底部幅 6～55cm・深さ 3～4cm である。

カマドは南壁西寄りに位置する。燃焼部の焼成層厚は 6cm に及ぶ。煙道部には左右とも、千枚岩質粘板岩・安山岩を直立に組み合わせ、この上から粘土を覆って補強している。この煙道部には上からも同質岩で覆われていた。煙道はゆるやかな傾斜をもって立ち上がり煙出し部に達する。柱穴は P₁ (径 26×30cm・深さ 46cm)・P₂ (径 23×25cm・深さ 36cm) が検出されている。

出土遺物 (第101図、写真図版149)

570～572の土師器破片と、573・574の鉄滓、575の刀が出土している。これらのうち、570・571はカマドから、572は埋土から、573・574は壁際床面から、575は北西壁周溝部から出土したものである。

570は口縁部が直立するもの、572は短く外反するものである。

遺構の時期

床面から出土した遺物から、平安時代に位置づけられるものである。

J II-1 住居跡

遺 構 (第102～103図、写真図版50～51)

この住居跡の南西側約 1/3 は調査区外にはいる。壁は既に削られており、検出をみたのは北西壁の一部とカマド、それに床面である。床面は部分的に攪乱されている。床面から炭化材が検出されているところから焼失住居跡と思われる。

平面形は方形を呈する。規模は検出された床面から、床面部径 5.2m を測る。埋土は上位が黒色土、中位が十和田 a 降下火山灰をブロック状に包含する黒褐色土、下位が黒色土・黒褐色土で構成される。

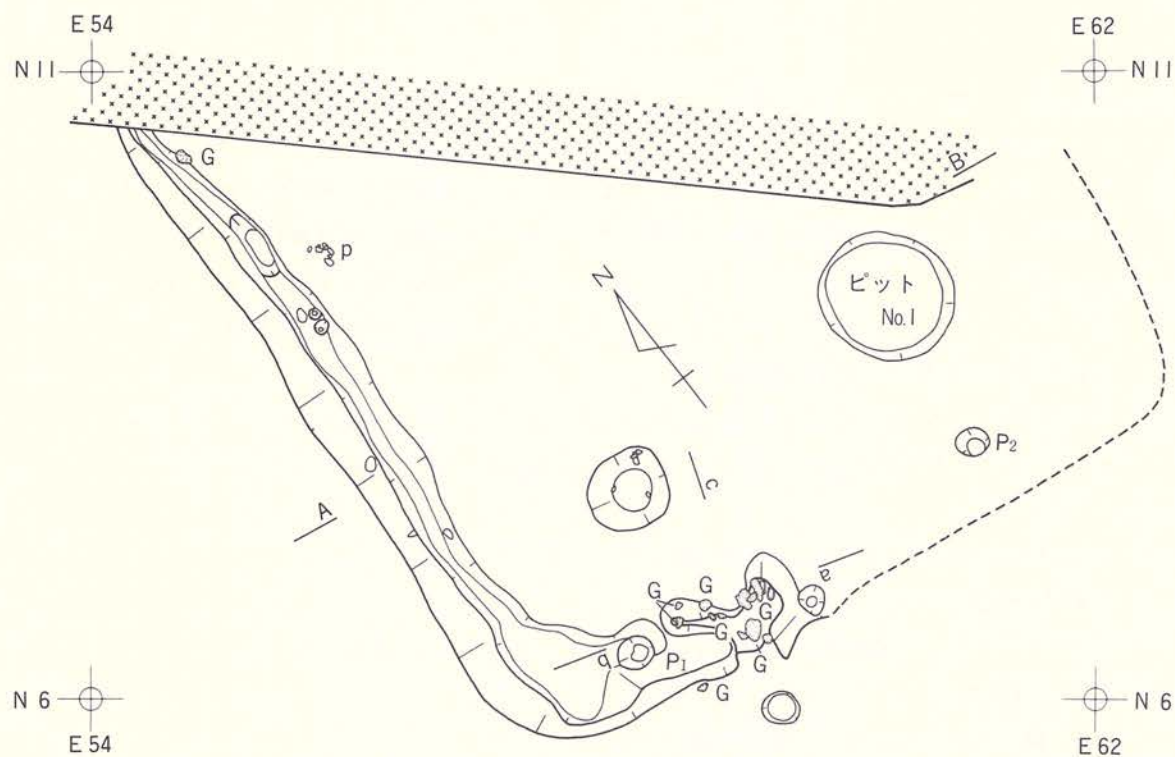
壁高は北西壁で 48cm である。床面は第 V 層面で、平坦である。

カマドは北西壁ほぼ中央部に位置する。燃焼部の焼成層厚は 5cm に及ぶ。煙道部には左右とも千枚岩質粘板岩を直立に組み合わせ、この上から灰白土シルト質土及び粘土を覆って補強している。この煙道部には上からも同質岩で覆われていた。煙道は斜位に立ち上がり煙出し部に達する。柱穴は検出されていない。

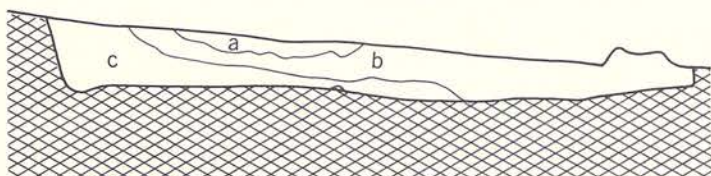
出土遺物 (第104図、写真図版149～150)

576～581の土師器が出土している。これらのうち、576はカマドから、577・578・580は床面から、579・581は埋土から出土している。

576はカマド燃焼部に倒立に据えられていたもので、支脚として転用されていた。器面には内外ともにハケメを施したのちヘラミガキが施されている。577は器高 30cm の甕形土器で、体部には内外ともにハケメとヘラミガキが施されている。578の壺形土器は口縁部に段をもつ。

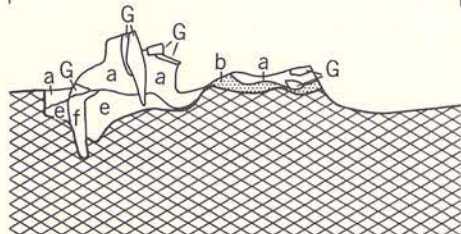


A L = 169.100 m



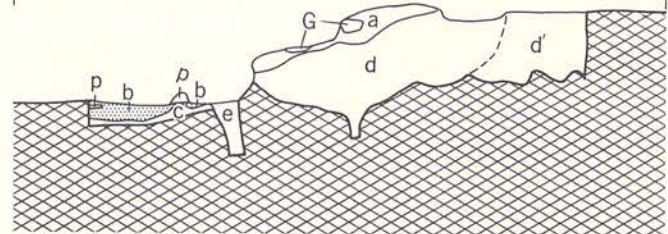
- a. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含7.5Y R3/2黒褐色土)
- b. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石・焼土粒・炭化物)
- c. 7.5Y R2/3 極暗褐色土 (含南部浮石・焼土・炭化物)

a L = 168.600 m



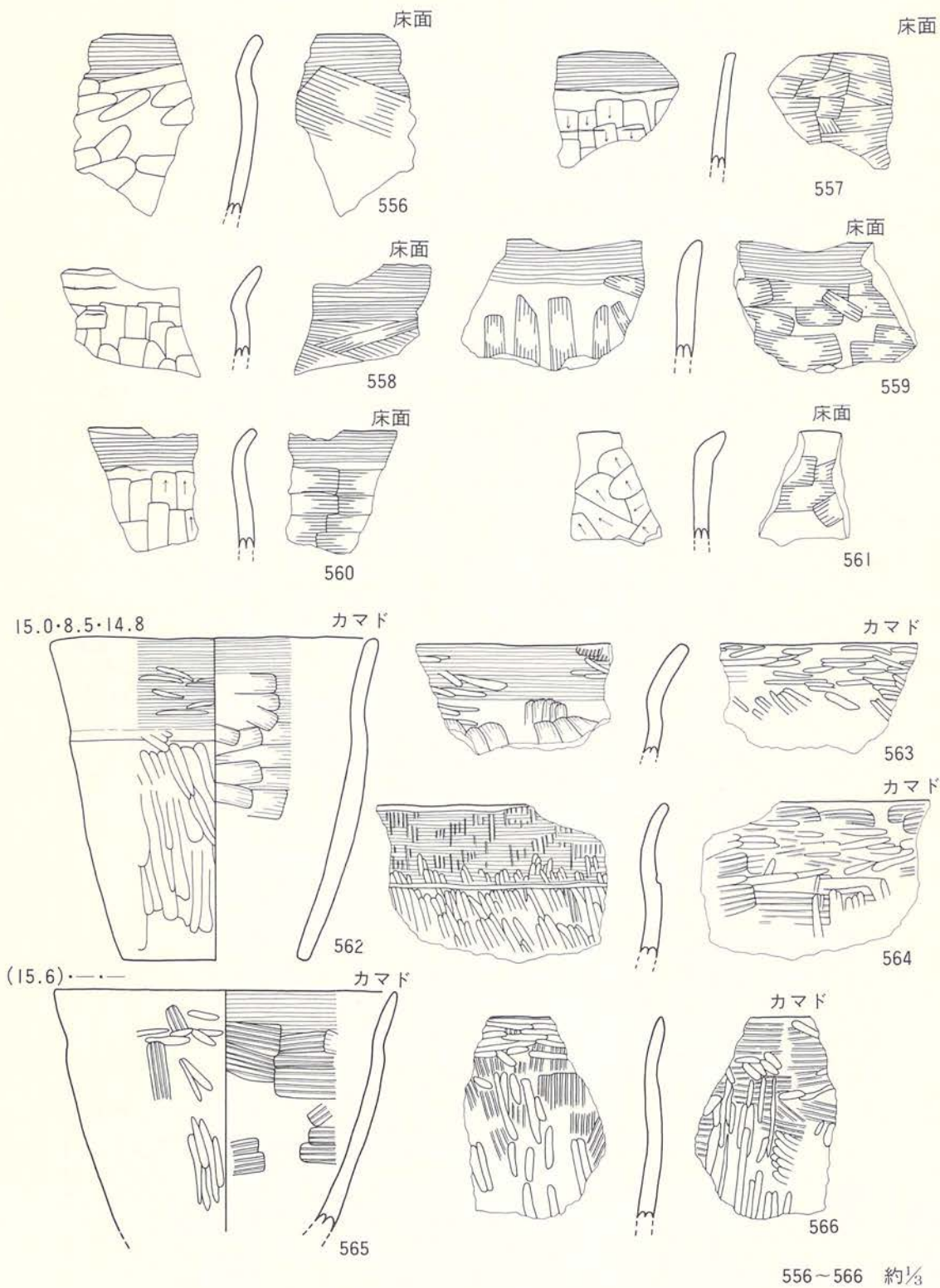
b

c L = 168.600 m

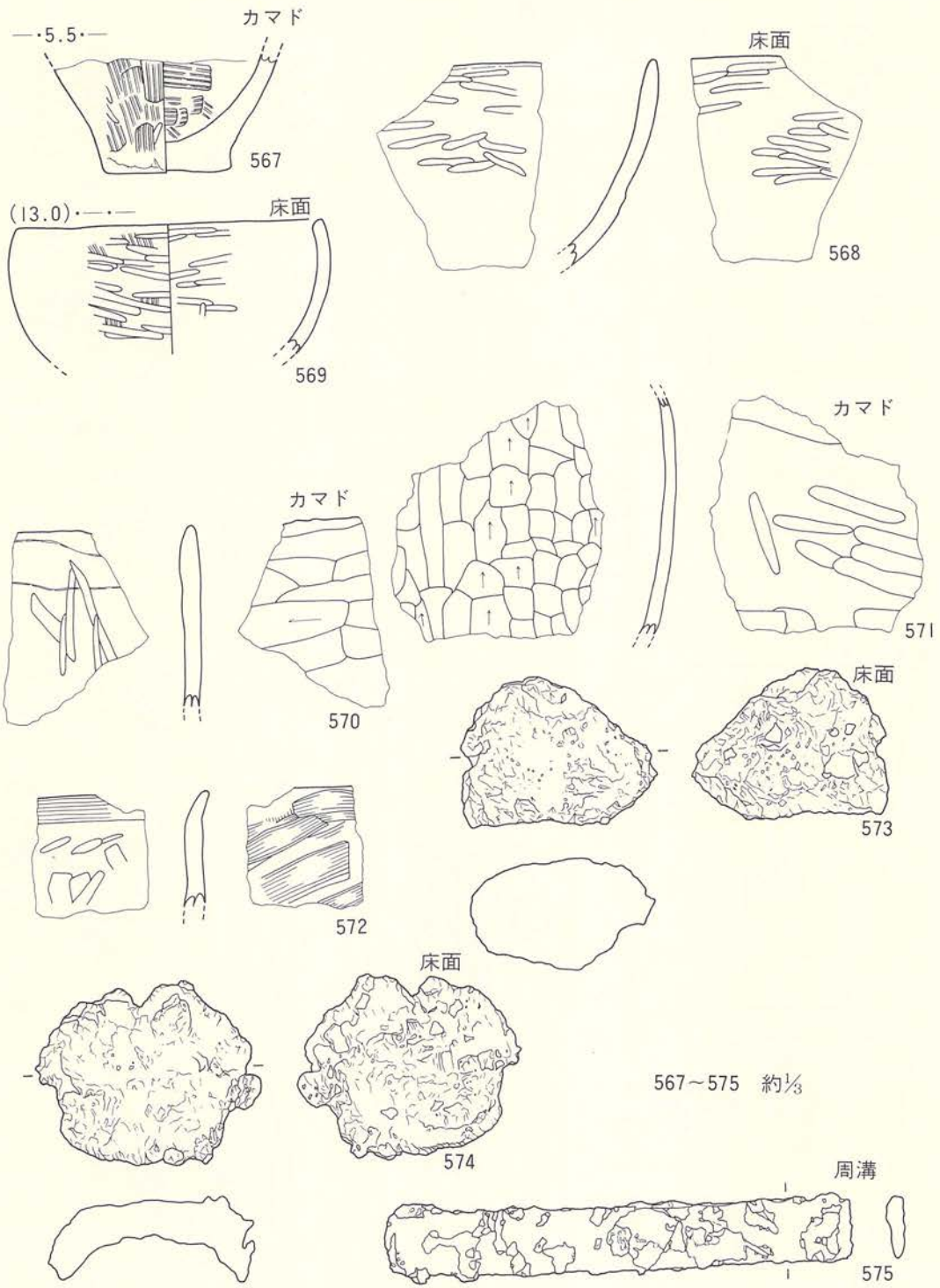


- a. 7.5Y R3/3 暗褐色土 (含炭化物・焼土粒)
- b. 5Y R4/8 赤褐色土 (焼土)
- c. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含炭化物・灰)
- d. 7.5Y R2/3 極暗褐色土 (煙道部含炭化物・南部浮石10%)
- d'. 7.5Y R2/3 極暗褐色土
- e. 7.5Y R4/4 褐色土 (南部浮石相当層)
- f. 7.5Y R2/2 黒褐色土

第99図 J I - 3 住居跡 (平・断面 S = 1/60, カマド断面 S = 1/60)



第100図 G II - 1・I II - 2 住居跡出土遺物(遺物番号556~566)



第101図 I II - 2・J I - 3 住居跡出土遺物(遺物番号567~575)

器面には口縁部にヨコナデを施したのち、部分的に山形状の沈線文を施文している。体部外面にはヘラミガキ、内面にはハケメ調整が施されている。580は体部上半が欠損している甕形土器で、外面にヘラミガキ、内面にはハケメ調整が施されている。579・581の坏形土器はやや下半に段をもち、内外ともにヘラミガキが施されている。

遺構の時期

床面から出土した遺物から、8世紀初頭に位置づけられるものとする。

3. 住居跡状遺構

H I—3 住居跡状遺構

遺 構（第103図、写真図版52）

この住居跡状遺構の平面形は隅丸方形を呈する。規模は、開口部2.5×2.3m・床面部2.4×2.2mである。埋土は、上位が南部浮石と黒褐色土、下位が黒色土で構成される。南部浮石の下から土偶の頭部、黒褐色土の下から小型の鉢が出土している。上位は人為的埋積である。

壁高は、東壁28cm・西壁41cm・南壁38cm・北壁32cmである。床面は南部浮石層で、比較的やわらかく、北東に傾斜する。

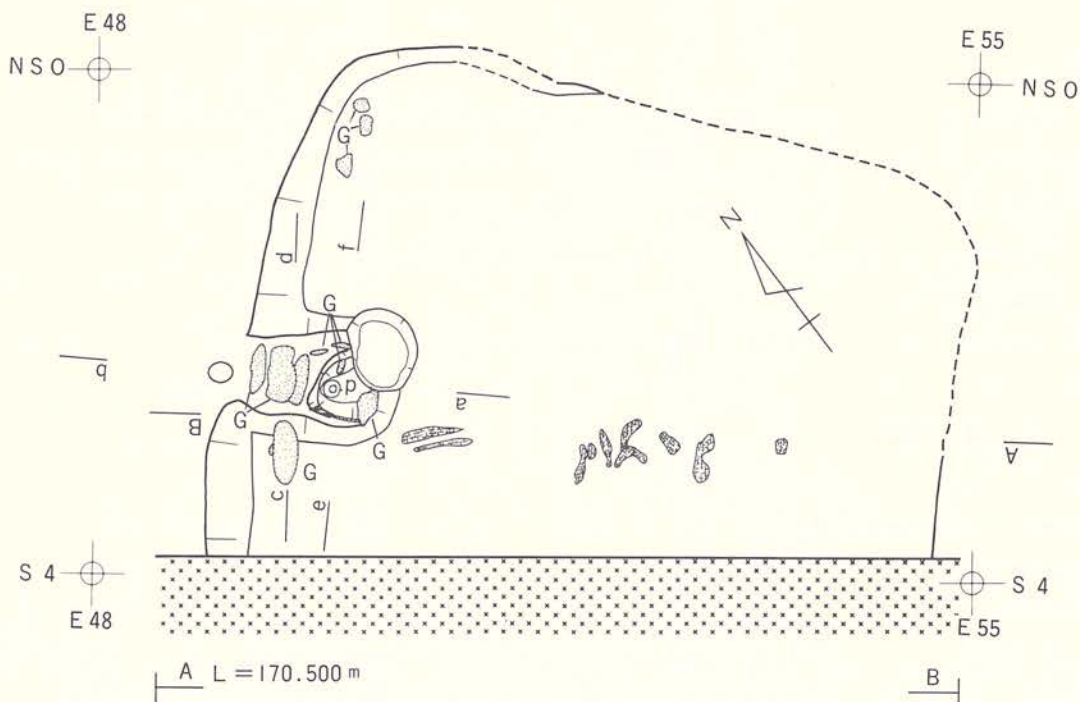
炉、柱穴など住居跡と決定するものは何も検出されていない。

出土遺物（第105図、写真図版150）

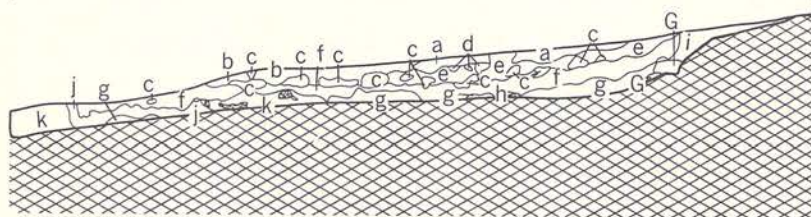
遺物は582～584の土器と585の土偶が出土している。これらのうち582はd層から583～585はb・c層から出土したものである。582は深鉢形土器の体部破片、583は口縁部破片である。582は瘤間を連結する弧帯状入組文が施文されている。584は無文の鉢形土器である。585は胸部から上半の土偶で前後とも沈線で文様が施文されているものである。

遺構の時期

埋土から出土した遺物から推定して縄文時代後期末葉のものとする。



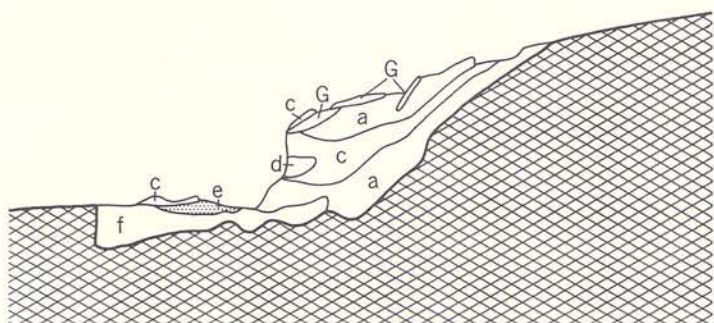
A L = 170.500 m



- a. 7.5 Y R1.7/1 黑色土 (含木根・炭化物・十和田 a 降下火山灰)
- b. 7.5 Y R2/1 黑色土 (含炭化物・十和田 a 降下火山灰)
- c. 10 Y R6/3 にぶい黄橙色土 (十和田 a 降下火山灰)
- d. 10 Y R5/6 黄褐色土
- e. 10 Y R3/1 黒褐色土 (含十和田 a 降下火山灰)
- f. 7.5 Y R1.7/1 黑色土 (含炭化物・十和田 a 降下火山灰)
- g. 7.5 Y R3/1 黒褐色土 (含炭化物・南部浮石 2%)
- h. 5 Y R4/6 赤褐色土 (焼土)
- i. 7.5 Y R2/2 黒褐色土
- j. 7.5 Y R3/3 暗褐色土 (含南部浮石 20%)
- k. 7.5 Y R2/1 黑色土 (含南部浮石 3%)

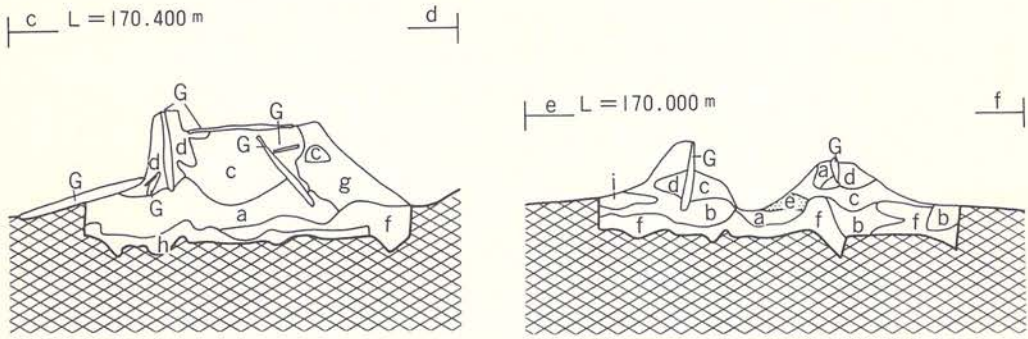
a L = 170.600 m

b



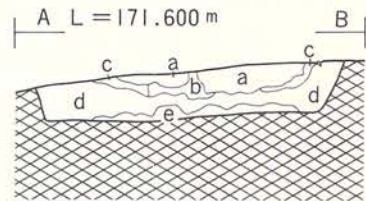
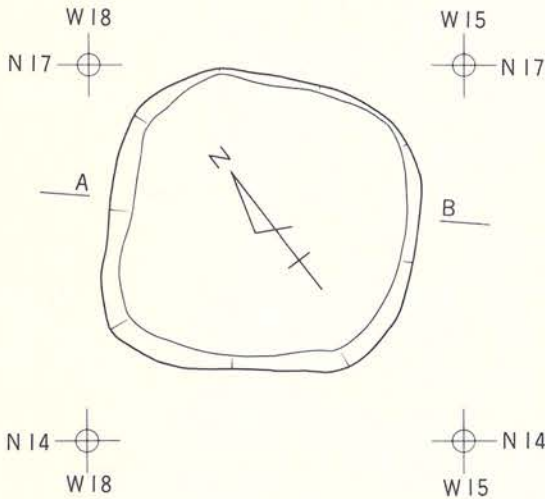
- a. 7.5 Y R2/3 極暗褐色土 (含焼土・灰)
- c. 7.5 Y R3/4 暗褐色土 (含炭化物・焼土塊)
- d. 10 Y R5/3 にぶい黄褐色土
- e. 5 Y R3/6 暗赤褐色土 (焼土)
- f. 7.5 Y R6/8 橙色土 (南部浮石層)

第102図 J II-1 住居跡 (平・断面 S = 1/60, カマド断面 S = 1/30)



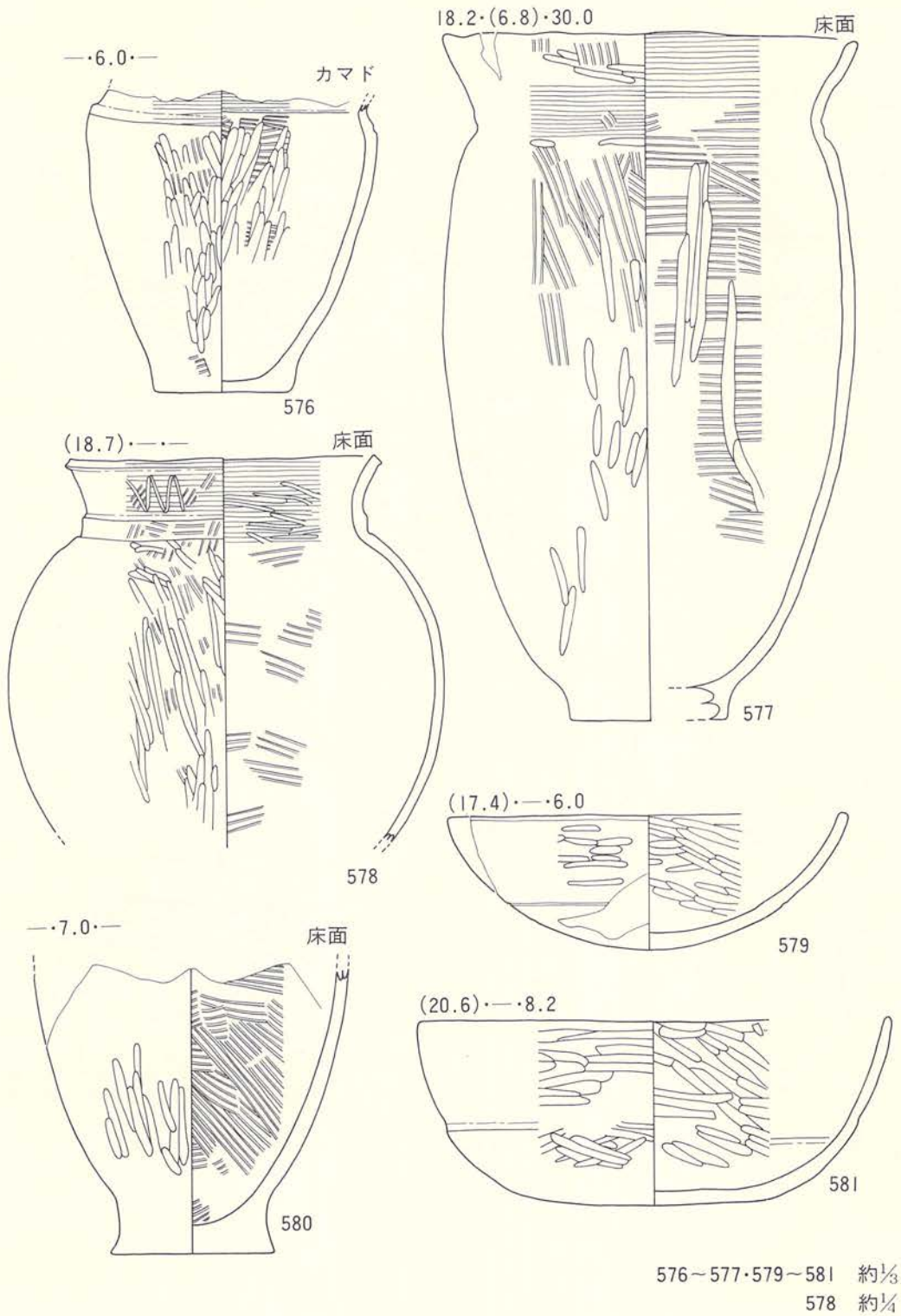
- | | | |
|----|-----------|-----------------|
| a. | 7.5Y R2/3 | 極暗褐色土 (含焼土・灰) |
| b. | 7.5Y R2/1 | 黒色土 (含木根) |
| c. | 7.5Y R3/4 | 暗褐色土 (含炭化物・焼土塊) |
| d. | 10Y R5/3 | にぶい黄褐色土 |
| e. | 5Y R3/6 | 暗赤褐色土 (焼土) |
| f. | 7.5Y R6/8 | 橙色土 (南部浮石層) |
| g. | 7.5Y R4/2 | 灰褐色土 (含南部浮石3%) |
| h. | 10Y R3/4 | 暗褐色土 (汚れた八戸火山灰) |
| i. | 10Y R4/6 | 褐色土 (含南部浮石) |

H I - 3 住居跡状遺構

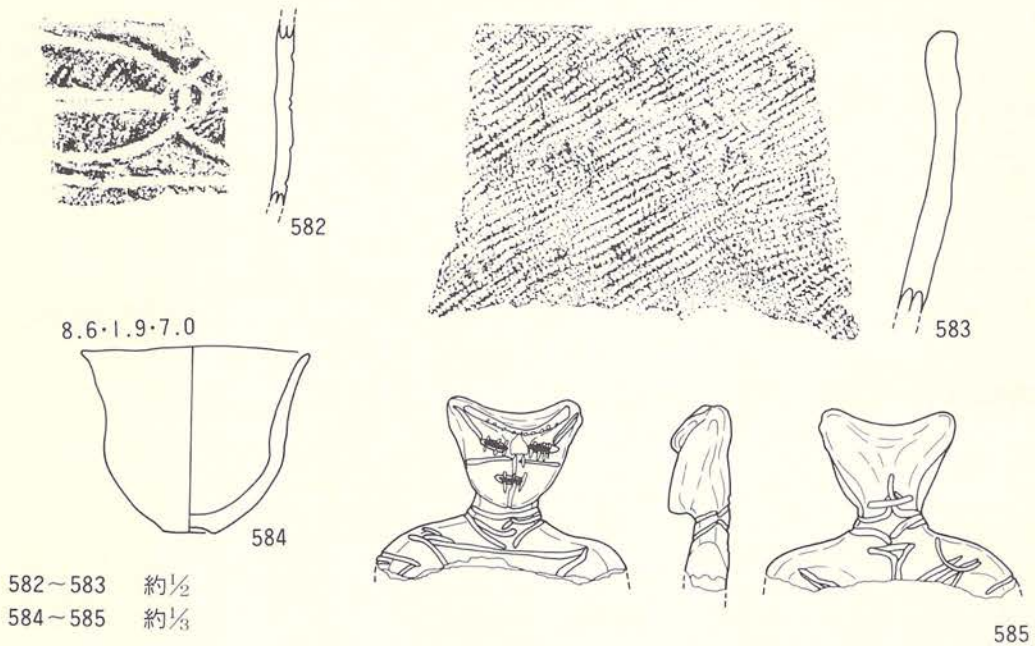


- | | | |
|----|-------------|-----------------------------|
| a. | 7.5Y R4/6 | 褐色土と2/2黒褐色土の混合土 (ほとんどが南部浮石) |
| b. | 7.5Y R3/1 | 黒褐色土 (含南部浮石20%) |
| c. | 7.5Y R3/1 | 黒褐色土 (含南部浮石7%) |
| d. | 7.5Y R2/1 | 黒色土 (含南部浮石10%・炭化物・焼土) |
| e. | 7.5Y R1.7/1 | 黒色土 (南部浮石15%・炭化物微量) |

第103図 J II - 1 住居跡・H I - 3 住居跡状遺構(カマド断面 $S = \frac{1}{30}$, 平・断面 $S = \frac{1}{60}$)



第104図 J II - 1 住居跡出土遺物(遺物番号576～581)



第105図 H I - 3 住居跡状遺構出土遺物(遺物番号582~585)

4. 掘立柱建物跡

F I 掘立柱建物跡

遺 構 (第106図)

この掘立柱建物跡は、F I 区のほぼ平坦面に検出されたもので、柱の一部はF I—2縄文時代住居跡の上部にある。

梁行は北西から南東にもつ。北東側柱はP₁—P₁₁—P₁₀—P₉で構成され、3間となる。柱間距離は順に2.5m・3.2m・2.0mを測り、計7.7mである。これに対比される南西側柱はP₃—P₄—P₅—P₆で構成され、柱間距離は順に2.2m・3.4m・2.2mを測り、計7.8mとなる。

桁行は北東から南西にもつ。北西側柱はP₁—P₂—P₃で構成され、2間となる。柱間距離は順に3.3m・2.6mを測り、計5.9mとなる。これに対比される南東側柱はP₉—P₈—P₆で構成され、柱間距離は順に2.7m・3.1mを測り、計5.8mとなる。

南西面と南東面には廂がつく。南西面の廂は柱P₁₃—P₁₄—P₁₅—P₁₆—P₁₇で構成され、柱間距離は順に0.9m・1.9m・1.0m・4.2mを測り、計8mとなる。また南東面の廂は柱P₂₂—P₂₁—P₂₀—

P _{No.}	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃
径 cm	24×25	25×25	26×30	18×22	17×17	22×25	21×22	23×25	17×18	18×21	20×22	14×17	20×28
深さcm	7	11	32	62	33	33	13	26	5	11	15	39	8

P _{No.}	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂
径 cm	18×20	20×23	17×22	23×23	15×16	13×16	19×20	19×19	18×19
深さcm	17	13	18	13	10	5	6	6	6

P₁₉—P₁₈で構成され、柱間距離は順に0.8m・1.0m・1.1m・2.9mを測り、計5.8mとなる。

間尺は梁行、桁行、廂とも不揃いである。

遺構の時期

この遺構からの出土遺物はなく、時代・時期は不明である。

5. ピット

F 区

F I—51ピット

遺 構 (第107図、写真図版53)

このピットの平面形は開口部・底部とも南北に長軸をもつ楕円形を呈し、断面形は浅鉢形を呈する。規模は開口部径100×110cm・底部径78×93cm・深さ15cmである。埋土は黑色土の単層である。底面は平坦である。

出土遺物はない。

F I—52ピット

遺 構 (第107図、写真図版53)

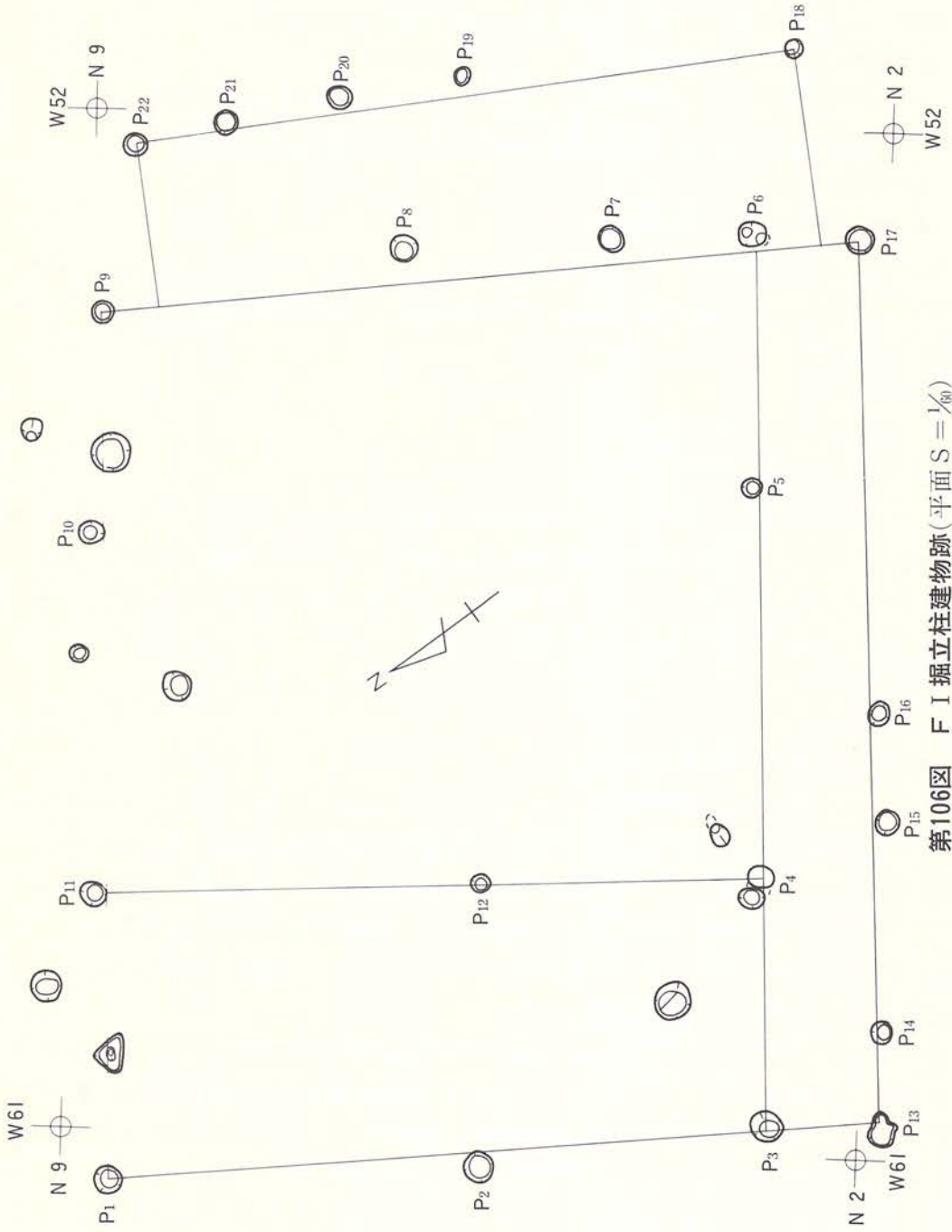
このピットの平面形は開口部・底部とも円形を呈し、断面形はフラスコ形を呈する。規模は開口部径170×175cm・底部径180×180cm・深さ68cmを測る。埋土は上位が極暗褐色土を包含する黒褐色土、下位が極暗褐色土・よごれた南部浮石を包含する黑色土で構成される。底面は平坦である。

出土遺物はない。

F I—53ピット

遺 構 (第107図、写真図版53)

このピットの平面形は開口部・底部とも東西に長軸をもつ楕円形を呈し、断面形はピーカー形を呈する。規模は開口部径150×167cm・底部径135×162cm・深さ60cmである。埋土は上位か



第106图 F I 掘立柱建物跡(平面 S = 1/100)

ら中位までの中央部が黒褐色土で、壁際が主に黒色土で構成される。下位はよごれた南部浮石で構成される。中央部には土器が埋設されている。底面は平坦である。

出土遺物（第112図、写真図版151）

中央部に埋設されていた586の土器1点が出土している。器高32.4cmの粗製深鉢形土器で、口縁部が内側に反る。原体は $L < \frac{R}{2}$ の単節斜縄文である。晩期前葉の土器である。

F I—54ピット

遺構（第107図、写真図版54）

このピットの平面形は開口部・底部とも円形を呈し、断面形はピーカー形を呈する。規模は開口部径109×114cm・底部径95×104cm・深さ30cmである。埋土は黒褐色土の単層である。底面は平坦である。

出土遺物はない。

F I—55ピット

遺構（第108図、写真図版54）

このピットの平面形は開口部・底部とも円形で、断面形はフラスコ形を呈する。規模は、開口部径118×114cm・底部径139×136cm・深さ67cmである。埋土は全て黒色土であるが、特に上位、下位層にパミスが多く、上・中位層に炭化物を包含するものである。底面は南部浮石層で平坦である。壁はよく原形をとどめて内傾している。

出土遺物はない。

F I—56ピット

遺構（第108図、写真図版54～55）

このピットはF I—2住居跡床面下から検出されたものである。平面形は開口部が東西に長軸をもつ楕円状を呈し、底面は円形を呈する。規模は開口部径195×250cm・底部径66×76cm・深さ127cmである。埋土は上位から中位が黒褐色土を中央部にレンズ状に包含する黒色土で、下位が腐植土を帯状に包含する灰褐色土で構成される。東壁は底面より直立ぎみに立ち上がり、中部で一端平坦となった後ゆるやかな傾斜をもって立ち上がる。底面からは湧水する。

出土遺物（第112図、写真図版151）

587と588の土器2点が出土している。587は東壁中場の平坦部に直立して埋設されていたもの、588は同じ底面に一括して出土したものである。587は器高25.7cmの粗製深鉢形土器で、原体 $L < \frac{R}{2}$ の単節斜縄文が施されている。588は粗製深鉢形土器の口縁部から体部で、原体 $L < \frac{R}{2}$ の単節斜縄文が施されている。どちらも晩期前葉の土器と考える。

F I—57ピット

遺構（第108図、写真図版55）

このピットの平面形は開口部・底部とも円形を呈する。断面形は底部壁が内湾し、フラスコ形を呈する。規模は開口部径160×169cm・頸部径127×133cm・底部径135×145cm・深さ63cmである。埋土は上位から中位までの中央部が暗褐色土・黒褐色土で、下位が主によごれた八戸火山灰で構成され、壁際には崩落したと思われるよごれた南部浮石がはいる。底面東寄りには、開口部径45×52cm・底部径24cm・深さ32cmの規模をもつ柱穴状ピットが検出されている。

出土遺物（第112～113図、写真図版151）

589と590が埋土上位から、591が底面から出土している。589は口頸部が欠損した壺形土器で、体部上半が脹る。口頸部と体部は沈線によって区画され、体部には原体 $L < \frac{R}{R}$ の単節斜縄文が施されている。590と591は粗製深鉢形土器で、どちらも原体 $L < \frac{R}{R}$ の単節斜縄文である。いずれも晩期前葉の土器と考える。

F I—58ピット

遺構（第108図、写真図版55）

このピットの平面形は開口部が東西に長軸をもつ楕円状を、底部が円形を呈する。規模は開口部径150×190cm・底部径82×84cm・深さ115cmである。埋土は上位が黒褐色土・よごれた南部浮石で、中位が黒色土で、下位が南部浮石・黒褐色土を包含する暗褐色土で構成される。壁の立ち上がりは直立に立ち上がる部分、斜位に立ち上がる部分とあり一定ではない。底面からは湧水する。

出土遺物はない。

G 区

G I—51ピット

遺構（第109図、写真図版56）

このピットはG II—1古代竪穴住居跡の床面下から検出されたものである。

平面形は開口部が北西から南東に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、底部はほぼ円形を呈する。断面形は浅鉢形を呈する。規模は開口部径126×148cm・底部径75×90cm・深さ40cmである。埋土は上位が黒色土・下位が黒褐色土で構成される。底面は平坦である。

出土遺物（第113図、写真図版152）

埋土から592と593土師器と594の石鏃が出土している。592・593は主にヘラナデが施されているものである。594の石鏃は凸基有茎鏃で基部と先端部が欠損している。肉薄で両面から刃部剥離調整が施されている。

G I—52ピット

遺 構（第109図、写真図版56）

このピットの平面形は、開口部は円形であるが、底部は北西から南東に長軸をもつ楕円形を呈する。断面形はフラスコ形を呈する。規模は、開口部径105×100cm・底部径134×119cm・深さ38cmである。埋土は黒褐色土の単層であるが、炭化物のほか、灰黄色の粘土をブロック状あるいは粉状に含むものである。南西壁寄り中位から深鉢が出土している。底面は南部浮石層で、中央部がややもり上がる。壁は北西部の内傾の度が大きい。

出土遺物（第113図、写真図版152）

595の土器が埋土中位から出土している。器高35.5cmの粗製深鉢形土器で、原体 $L < \frac{R}{R}$ の単節斜縄文が施されている。晩期前葉に位置づけられる土器と考える。

G I—53ピット

遺 構（第109図、写真図版56）

このピットの平面形は開口部・底部とも円形を呈し、断面形は浅鉢形を呈する。規模は開口部径117×127cm・底部径62×65cm・深さ37cmである。埋土は黒褐色土の単層である。底面は平坦である。

出土遺物はない。

G I—54ピット

遺 構（第109図、写真図版57）

このピットの平面形は開口部・底部とも円形を呈し、断面形は浅鉢形を呈する。規模は開口部径91×94cm・底部径57×65cm・深さ28cmである。埋土は黒褐色土の単層である。

出土遺物はない。

G I—55ピット

遺 構（第109図、写真図版57）

このピットの平面形は開口部・底部とも円形を呈し、断面形は皿形を呈する。規模は開口部径61×63cm・底部径42cm・深さ17cmである。埋土は黒褐色土の単層である。

出土遺物はない。

G I—56ピット

遺 構（第110図、写真図版57）

このピットの平面形は開口部が北西から南東に長軸をもつ不整形を、底部が円形を呈する。断面形はピーカー形を呈する。規模は開口部径90×132cm・底部径59×68cm・深さ66cmである。埋土は上位中央部が黒色土で、下位は黒褐色土で構成される。北西壁のみ上部でゆるやかな傾斜をもって立ち上がる。底面に凹凸がある。

出土遺物はない。

G I—57ピット

遺構（第110図、写真図版57）

このピットはG I—58ピットの北壁を切って構築されているものである。

平面形は開口部・底部とも円形を呈し、断面形は浅いピーカー形を呈する。規模は開口部径141×144cm・底部径127cm・深さ14cmである。埋土は中央部が黒褐色土で、壁際が黒色土で構成される。底面は平坦である。

出土遺物はない。

G I—58ピット

遺構（第110図、写真図版58）

このピットはG I—57ピットに北壁を切られているものである。

平面形は開口部が東西に長軸をもつ楕円状を、底部が円形を呈する。規模は開口部径110×137cm・底部径63×65cm・深さ115cmである。埋土は上位が黒色土で、中位が黒褐色土・褐色土・よごれた南部浮石で、下位が黒褐色土・黒色土で構成される。壁は底部から上部付近まで直立し、上部から開口部までゆるやかな傾斜をもって立ち上がる。

出土遺物はない。

G I—59ピット

遺構（第110図、写真図版58）

このピットの平面形は、開口部が東西に長軸をもつ楕円形ないし隅丸長方形、底部が隅丸長方形を呈する。断面形は、下部が柱状を呈する。規模は、開口部径150×96cm・底部径84×66cm・深さ105cmである。埋土は、上位北西壁寄りが中振浮石起源層、南東壁寄り下位が黒色土・南部浮石起源層・八戸火山灰の互層で、その中間にやわらかい、八戸火山灰と黒色土との混合土層が入るものである。底面は、八戸火山灰層で南側に傾斜し、南壁寄りがやや凹む。また、地下水が湧出するものである。壁は、中位が緩い傾斜になり、テラス状になる部分もある。この形状は、F I—56ピットに似るものである。

出土遺物はない。

G I—60ピット

遺構（第111図、写真図版58）

このピットの平面形は、開口部・底部とも北西から南東に長軸をもつ楕円形を呈する。断面形は、下部が柱状を呈する。規模は、開口部径138×120cm・底部径76×67cm・深さ110cmである。埋土は、上位はかたくしまった黒色土で、下位はやわらかく、褐色土をブロック状に包含する極暗褐色土、黒色土、最下層が粘性のある明褐色土で構成される。底面は、八戸火山灰層で中央部がややもり上がる。これも地下水が湧出する。壁は、上部が外傾する。

出土遺物はない。

G II—51ピット

遺構（第111図、写真図版59）

このピットの平面形は、開口部が北東から南西に長軸をもつ楕円形、頸部・底部が円形を呈する。断面形はフラスコ形を呈する。規模は、開口部径117×104cm・頸部径100×91cm・底部径104×99cm・深さ37cmである。埋土は、上位が黒色土、下位が黒褐色土で、いずれもかたくしまっている。底面は南部浮石層上面で、ほぼ平坦である。

出土遺物はない。

G II—52ピット

遺構（第111図、写真図版59）

このピットはG II—1住居跡と重複し、上部を切られているものである。平面形は、開口部・底部とも円形を呈する。断面形はフラスコ形を呈する。規模は、開口部径126×124cm・底部径126×122cm・深さ29cmである。埋土は、中央上位に黒褐色土があるほかは、大部分が灰褐色土をブロック状に包含するやわらかい黒色土である。底面は南部浮石層で中央にむかってやや傾斜する。

出土遺物（第113図、写真図版152）

596が埋土中位から、597が埋土下位から出土している。596は器高11.5cmの鉢形土器で、原体 $L < \frac{R}{R}$ の単節斜縄文が施されている。597は壺形土器か注口土器の口頸部と考えられるもので、沈線で区画された帯縄文が施されている。597は後期末葉に位置づけられる土器と考える。596は後期末葉から晩期前葉の土器であろう。

H 区

H I—51ピット

遺構（第114図、写真図版59）

このピットはH I—9縄文時代住居跡の北西壁を切って構築されているものである。

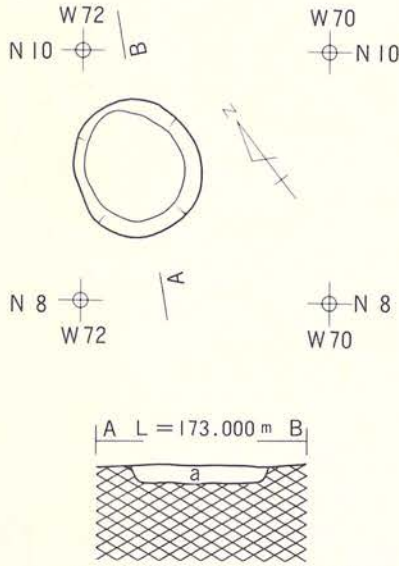
平面形は開口部が東西に長軸をもつ楕円形を呈し、底部が不整形を呈する。規模は開口部径175×215cm・底部径103×120cm・深さ65cmである。埋土は黒褐色土の単層と言える。西壁は底面からゆるやかな傾斜で立ち上がり中部で段をなす。底面には凹凸がある。

出土遺物（第120図、写真図版152）

598と599の粗製深鉢形土器口縁部破片がa層埋土から出土している。時期は不明である。

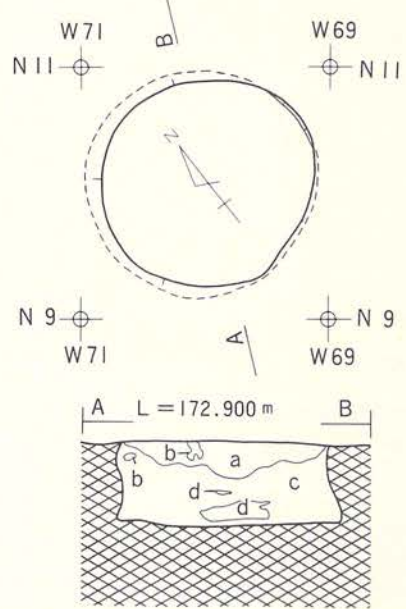
H I—52ピット

a. FI-51ピット



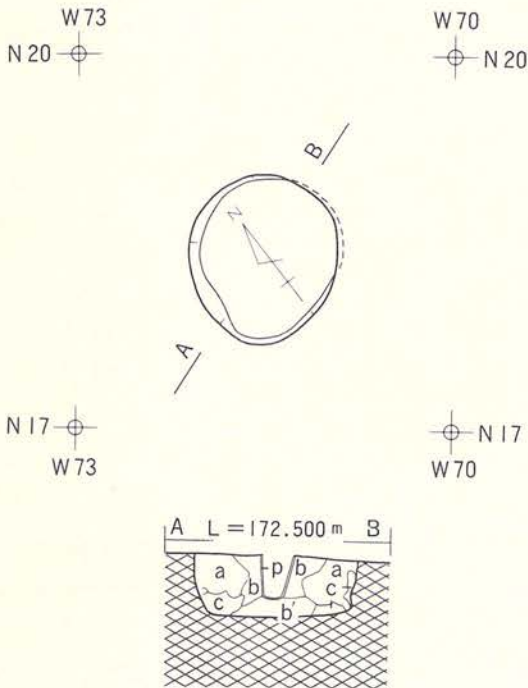
a. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石)

b. FI-52ピット



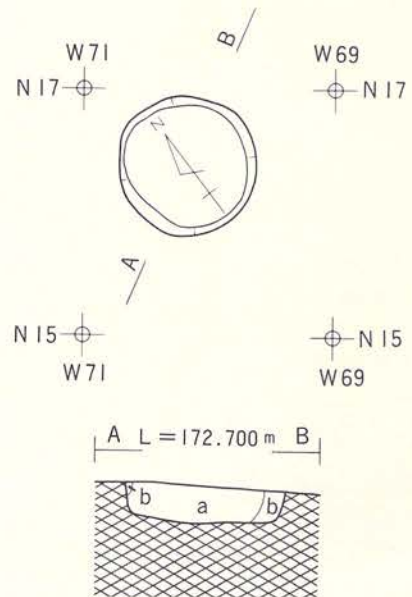
- a. 7.5Y R3/1 黒褐色土 (含にごりある南部浮石10%)
- b. 7.5Y R2/3 極暗褐色土 (含南部浮石7%)
- c. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石7%)
- d. 7.5Y R3/3 暗褐色土 (にごりある南部浮石層)

c. FI-53ピット



- a. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石2%)
- b. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石10%)
- b'. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (にごりある南部浮石層)
- c. 7.5Y R3/1 黒褐色土 (含南部浮石5%)

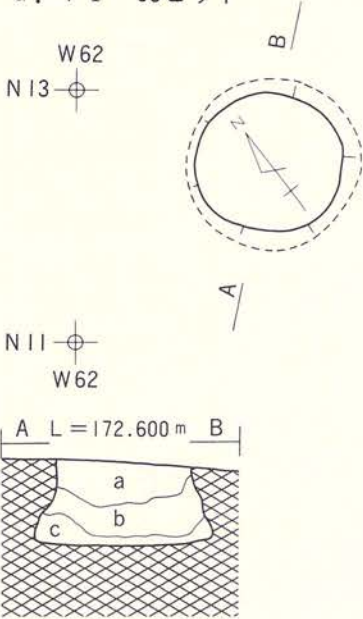
d. FI-54ピット



- a. 7.5Y R3/1 黒褐色土 (含南部浮石7%)
- b. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石10%)

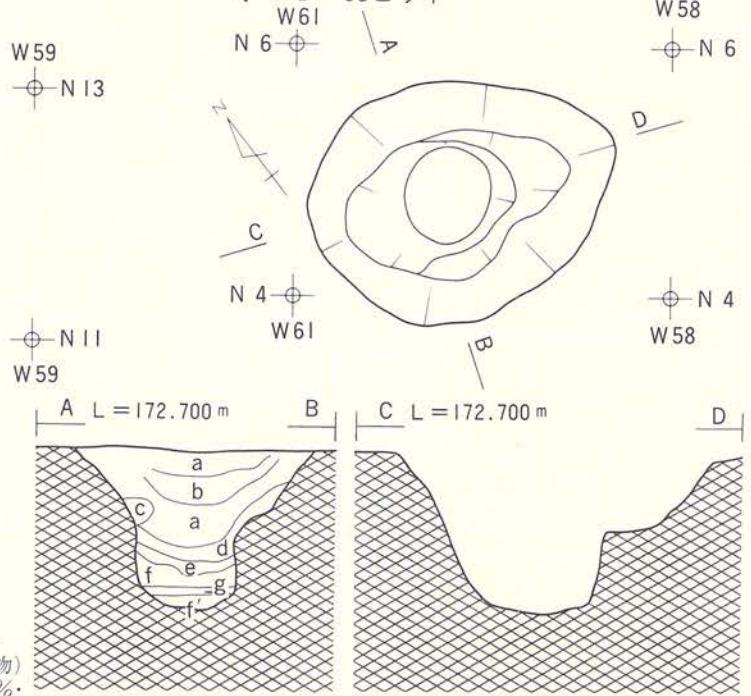
第107図 FI-51・52・53・54ピット (平・断面 $S = \frac{1}{60}$)

a. FI-55ピット



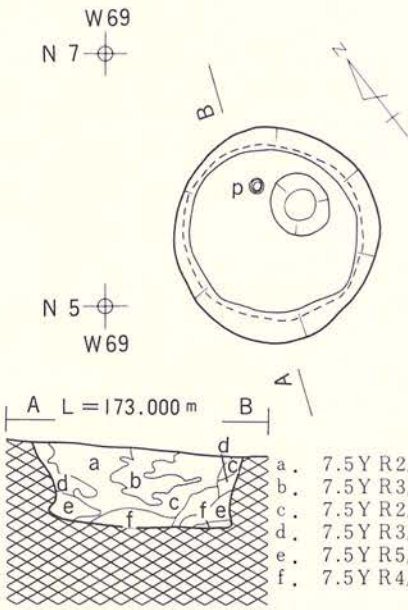
- a. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石15%・炭化物)
- b. 10Y R1.7/1 黒色土 (含南部浮石10%・炭化物)
- c. 10Y R2/1 黒色土 (含南部浮石20%)

b. FI-56ピット



- a. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石10%)
- b. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石30%)
- c. 7.5Y R5/8 明褐色土 (南部浮石層)
- d. 7.5Y R3/2 黒褐色土 (含南部浮石40%)
- e. 7.5Y R3/1 黒褐色土 (含南部浮石5%)
- f. 7.5Y R4/2 灰褐色土
- g. 7.5Y R4/2 灰褐色土

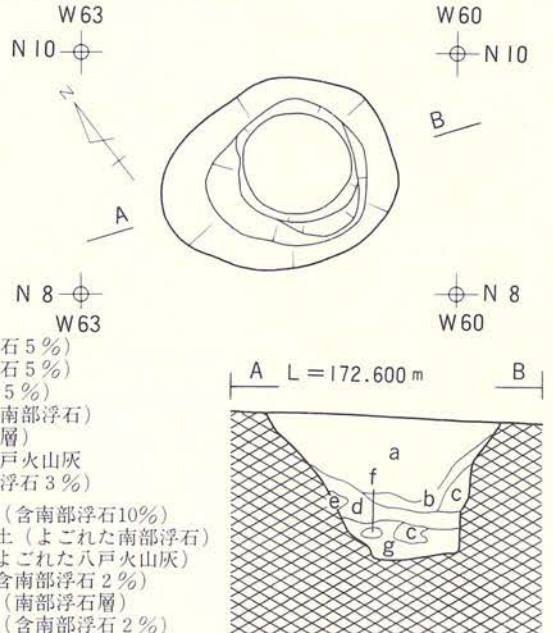
c. FI-57ピット



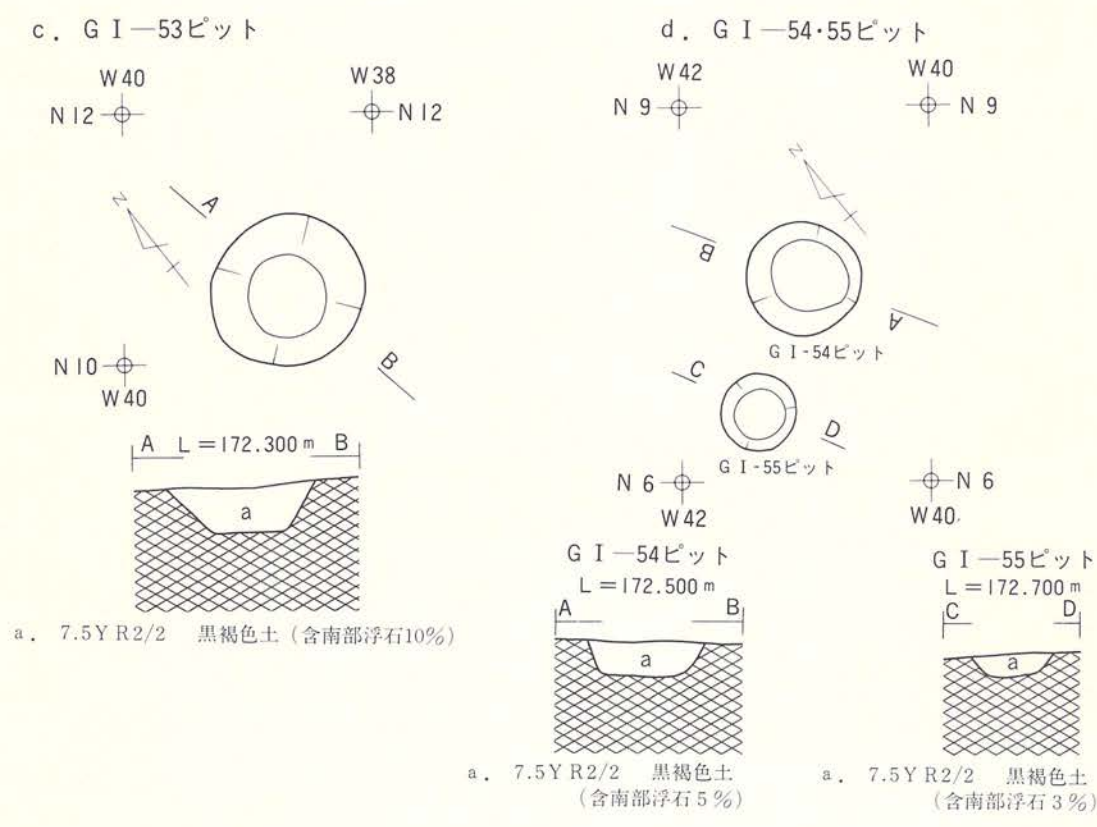
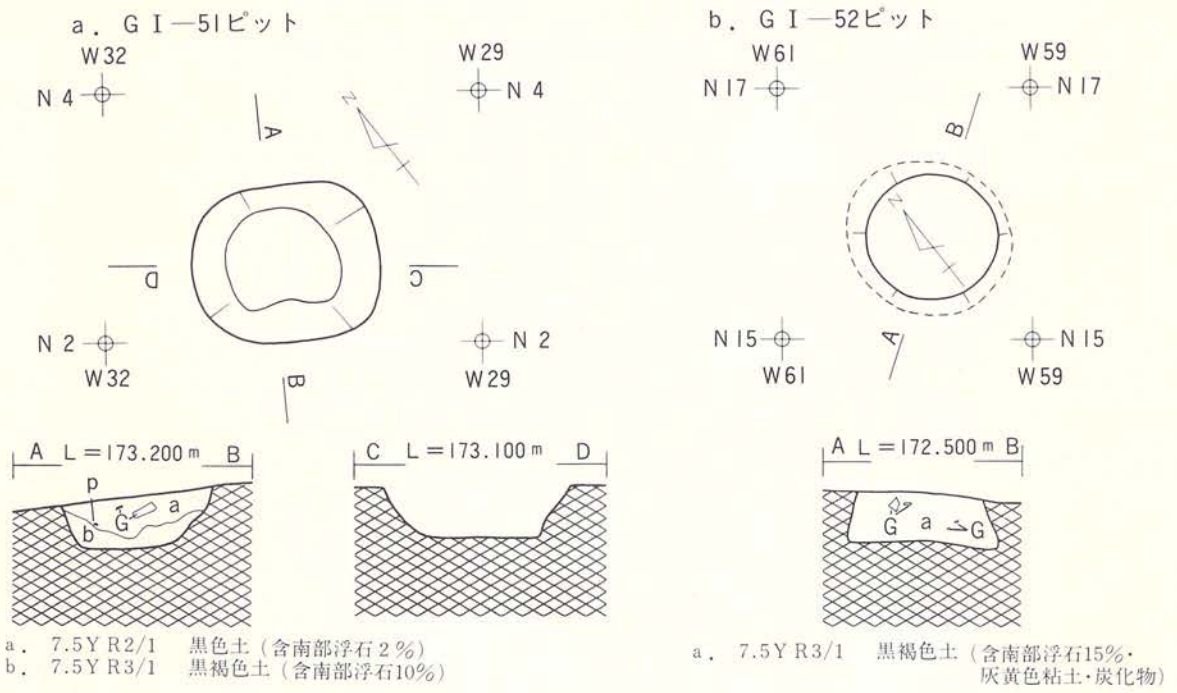
- a. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石5%)
- b. 7.5Y R3/4 暗褐色土 (含南部浮石5%)
- c. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石5%)
- d. 7.5Y R3/3 暗褐色土 (よごれた南部浮石)
- e. 7.5Y R5/8 明褐色土 (南部浮石層)
- f. 7.5Y R4/4 褐色土 (よごれた八戸火山灰 含南部浮石3%)

- a. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石10%)
- b. 7.5Y R2/3 極暗褐色土 (よごれた南部浮石)
- c. 7.5Y R4/6 褐色土 (よごれた八戸火山灰)
- d. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石2%)
- e. 7.5Y R5/6 明褐色土 (南部浮石層)
- f. 7.5Y R3/2 黒褐色土 (含南部浮石2%)
- g. 7.5Y R3/4 暗褐色土

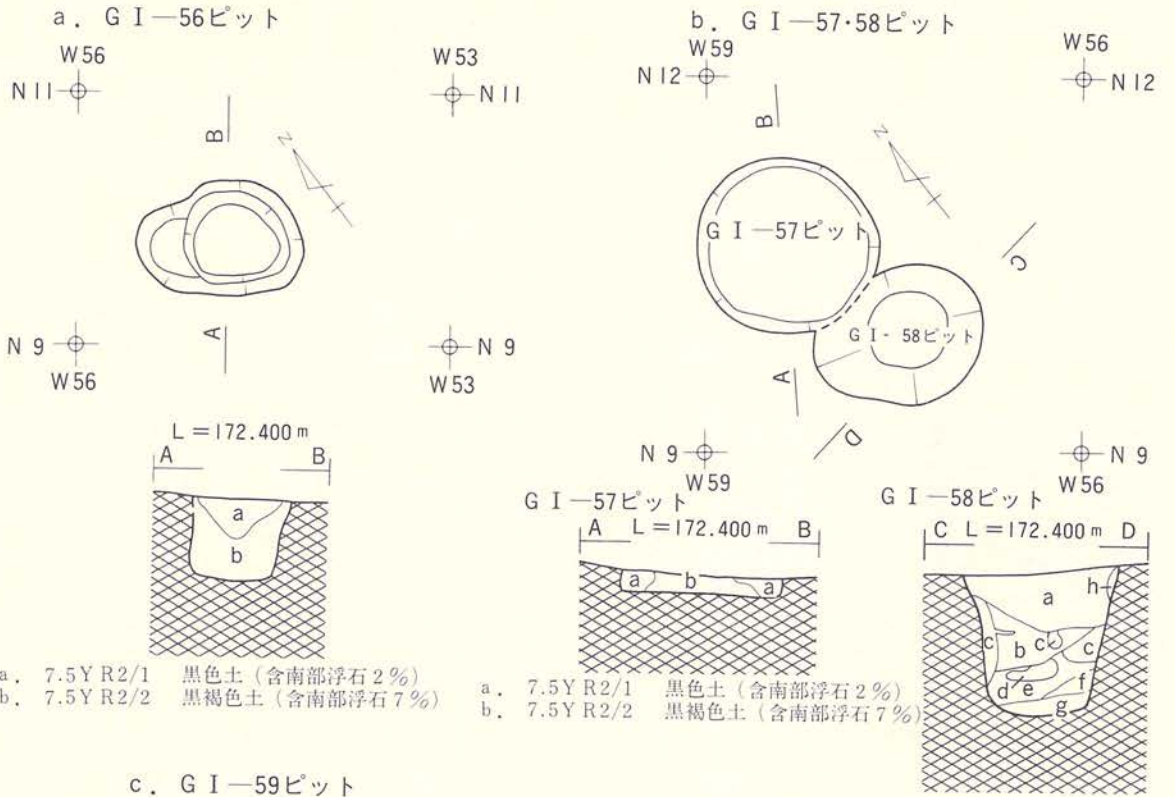
d. FI-58ピット



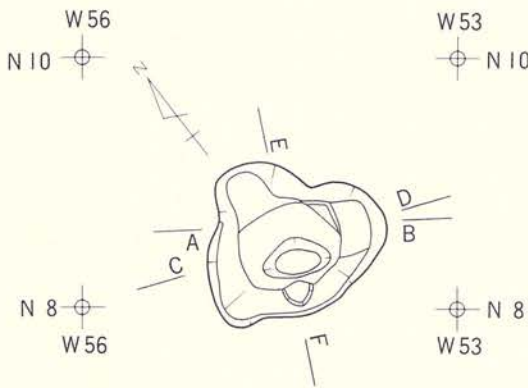
第108図 FI-55・56・57・58ピット (平・断面 S = 1/60)



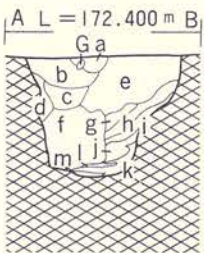
第109図 GI-51・52・53・54・55ピット(平・断面 $S = \frac{1}{60}$)



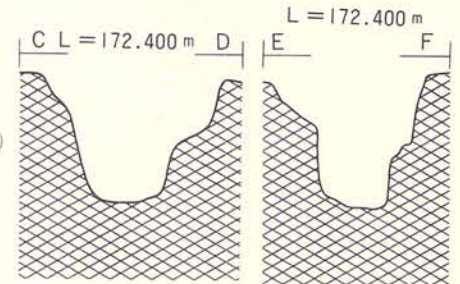
c. G I-59ピット



- a. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石 7%)
b. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石 5%)
c. 7.5Y R4/6 褐色土 (含南部浮石 3%)
d. 7.5Y R3/4 暗褐色土 (南部浮石層)
e. 7.5Y R4/3 褐色土 (含南部浮石 2%)
f. 7.5Y R3/2 黒褐色土 (含南部浮石 2%)
g. 7.5Y R1.7/1 黒色土 (含南部浮石 2%)
h. 7.5Y R5/8 明褐色土 (南部浮石層)

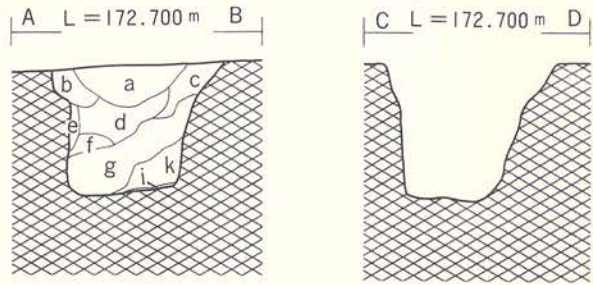
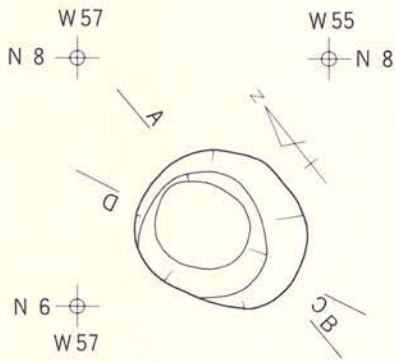


- a. 10Y R2/1 黒色土 (含南部浮石 3%)
b. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石)
c. 7.5Y R3/1 黒褐色土 (含南部浮石 3%)
d. 10Y R3/1 黒褐色土 (含南部浮石 7%)
e. 10Y R4/4 褐色土 (八戸火山灰・黒色土混合)
f. 10Y R2/3 黒褐色土 (含南部浮石 10%)
g. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (黒色土・南部浮石)
h. 7.5Y R3/4 暗褐色土 (八戸火山灰混合)
i. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石 7%)
j. 10Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石 40%)
k. 10Y R4/6 褐色土 (含南部浮石 15%)
l. 10Y R4/6 褐色土 (主に八戸火山灰・含南部浮石 2%)
m. 7.5Y R1.7/1 黒色土 (主に八戸火山灰・含南部浮石 3%)
n. 10Y R5/4 にぶい黄褐色土 (主に八戸火山灰・含南部浮石 2%)
o. 10Y R4/6 褐色土 (主に八戸火山灰・含南部浮石 2%)



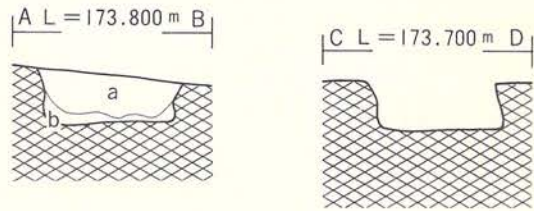
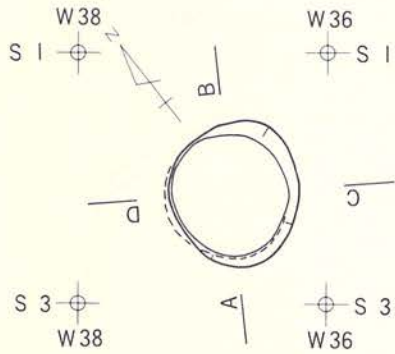
第110図 G I-56・57・58・59ピット (平・断面 $S = \frac{1}{60}$)

a. GI-60ピット



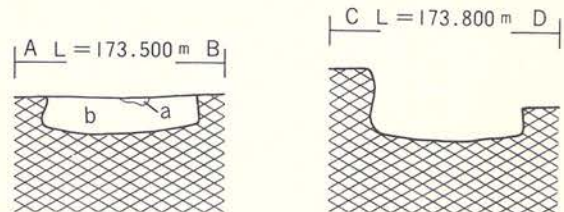
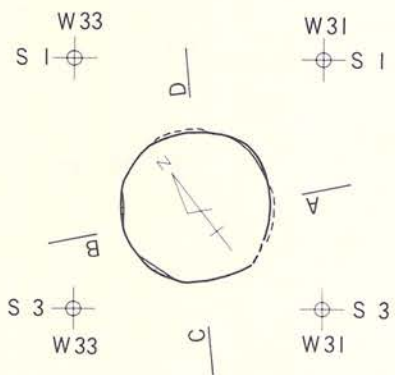
- a. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石 5%)
- b. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石 7%)
- c. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石 3%)
- d. 10Y R2/1 黒色土 (含南部浮石 2%)
- e. 10Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石 5%)
- f. 7.5Y R3/1 黒褐色土 (含南部浮石 2%)
- g. 7.5Y R2/3 極暗褐色土 (含南部浮石 15%)
- h. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石 2%)
- i. 7.5Y R5/8 明褐色土

b. GII-51ピット



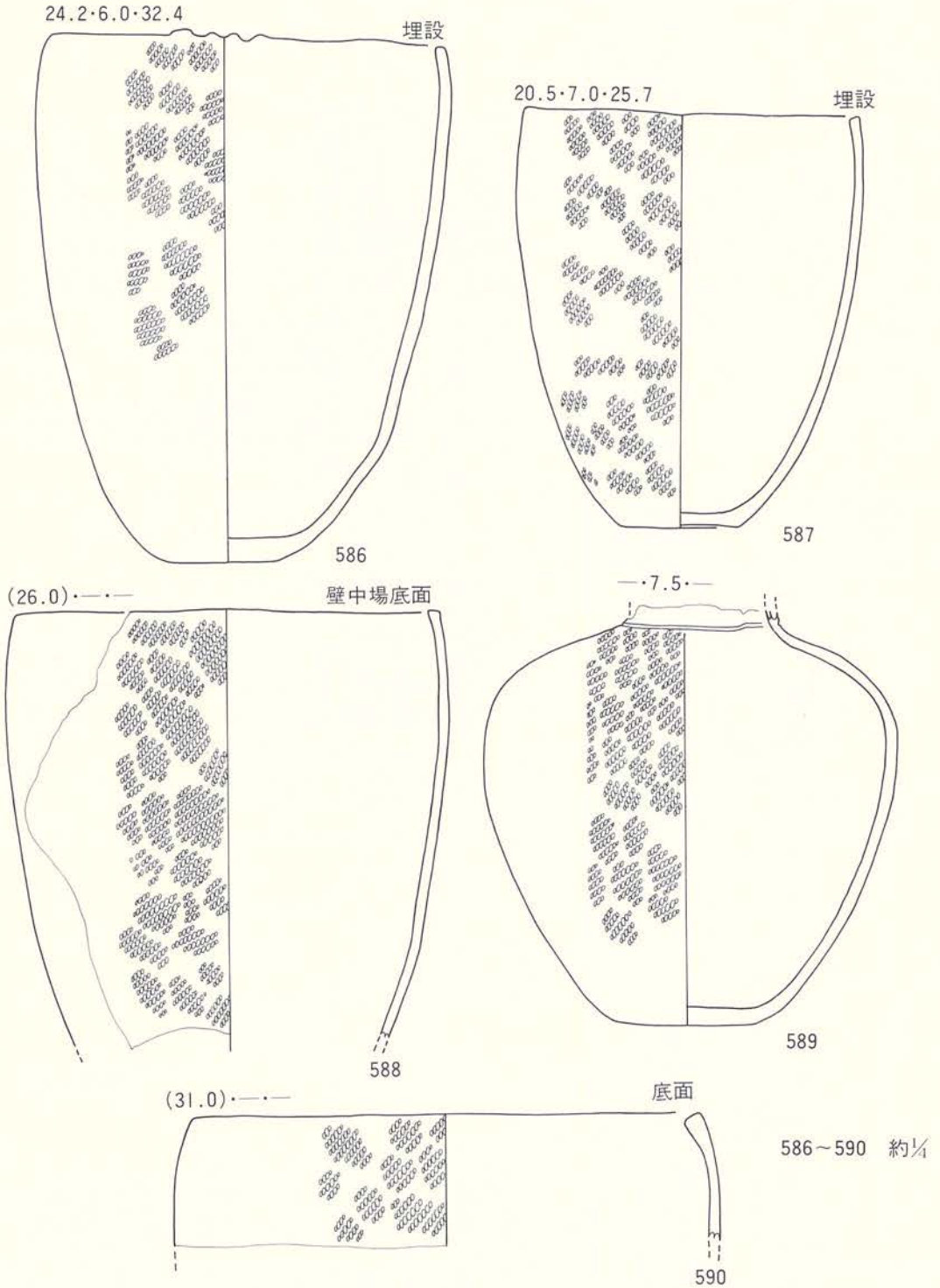
- a. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石 3%)
- b. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石 3%)

c. GII-52ピット

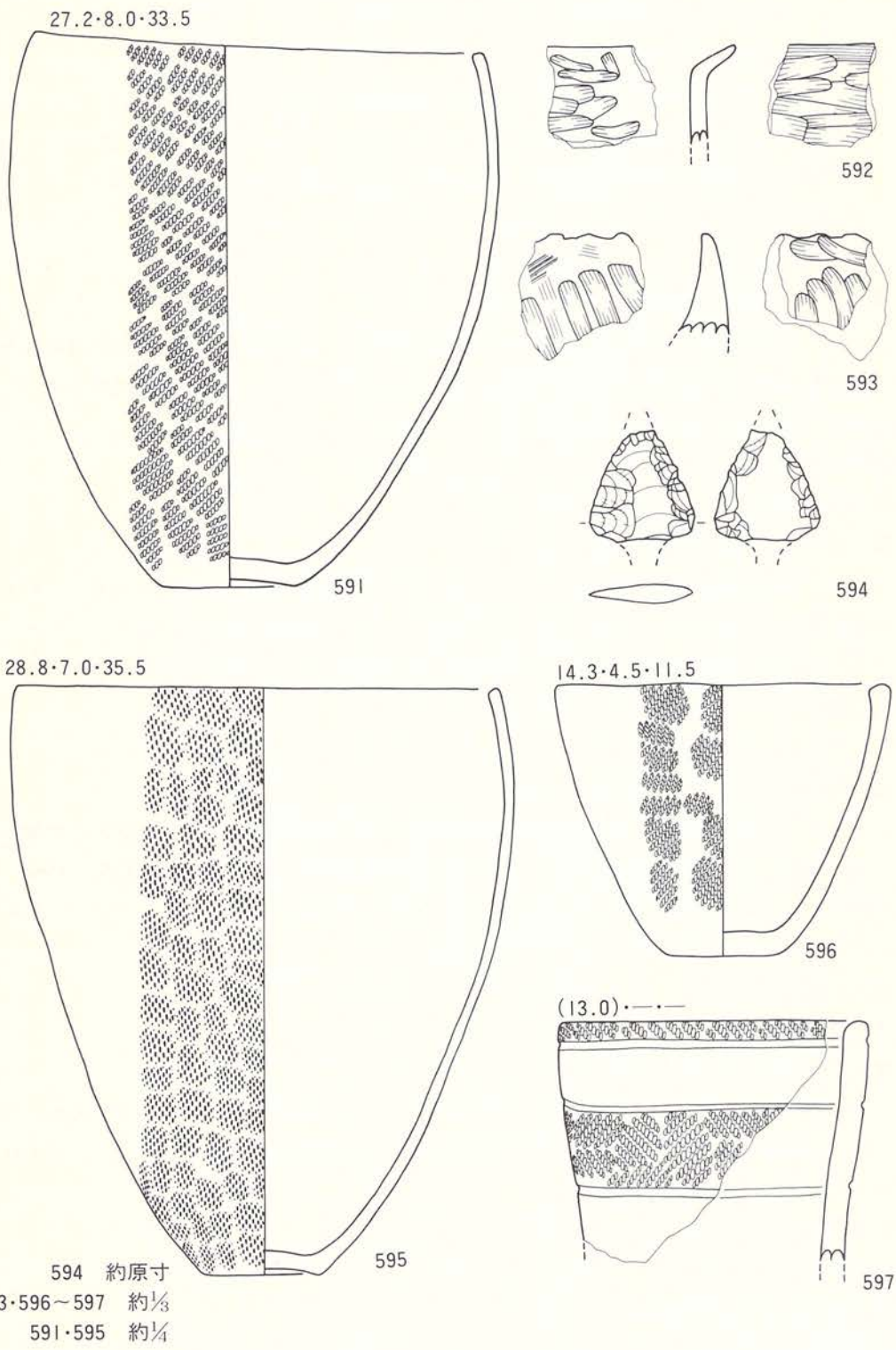


- a. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (にぎりある南部浮石と黒色土の混合)
- b. 7.5Y R2/1 黒色土 (含7.5Y R4/2灰褐色土ブロック状)

第111図 GI-60・GII-51・52ピット (平・断面 $S = \frac{1}{60}$)



第112図 F I -53・56・57ピット出土遺物(遺物番号586~590)



第113図 F I -57・G I -51・52・G II -52ピット出土遺物(遺物番号591~597)

遺 構（第114図、写真図版60）

このピットの平面形は開口部が円形、底部が不整形を呈する。規模は開口部径131×133cm・底部径37×60cm・深さ33cmである。埋土は十和田 a 降下火山灰と思われる白色細粒浮石が径1～3cmのブロック状に包含される黒色土の単層である。底面には溝状の凹みがある。出土遺物はない。

H I—53ピット

遺 構（第114図、写真図版60）

このピットの平面形は開口部・底部とも東西に長軸をもつ楕円形を呈し、断面形は皿形を呈する。規模は開口部径135×173cm・底部径110×144cm・深さ14cmである。埋土は黒褐色土の単層である。底面にはゆるやかな凹凸がある。

出土遺物はない。

H II—51ピット

遺 構（第115図、写真図版60）

このピットの平面形は開口部・底部とも円形を呈し、断面形はビーカー形を呈する。規模は開口部径108×113cm・底部径84×91cm・深さ41cmである。埋土は上位が焼土をブロック状に包含する黒褐色土、中位が極暗褐色土、下位が褐色土で構成される。底面はほぼ平坦である。

出土遺物はない。

H II—52ピット

遺 構（第115図、写真図版61）

このピットの平面形は開口部・底部とも円形を呈する。断面形は南壁下部一部のみ内湾するが、全体形としてはビーカー形を呈する。規模は開口部径150×155cm・底部径135×145cm・深さ55cmである。埋土は上位が黒色土を包含するよごれた南部浮石、中位が黒色土、下位が黒褐色土で構成される。底面にはゆるやかな凹凸がある。

出土遺物はない。

H II—53ピット

遺 構（第115図、写真図版61）

このピットの平面形は開口部・底部とも円形を呈し、断面形は浅鉢形を呈する。規模は開口部径148×159cm・底部径82×83cm・深さ52cmである。埋土は黒褐色土の単層である。底面はほぼ平坦である。

出土遺物はない。

H II—54ピット

遺 構（第115図、写真図版61）

このピットの平面形は開口部・底部とも円形を呈し、断面形はビーカー形を呈する。規模は開口部径154×165cm・底部径124×130cm・深さ46cmである。埋土は上位が黒褐色土、下位が褐色土で構成される。底面は平坦である。

出土遺物はない。

H II—55ピット

遺構（第116図、写真図版62）

このピットはH II—1 縄文時代住居跡に南西側約半分を切られているものである。

平面形は開口部・底部とも円形を呈し、断面形は壁中部に頸部をもつフラスコ形を呈する。規模は開口部径126×130cm・頸部径95×103cm・底部径103×107cm・深さ85cmである。埋土は上位中央部が黒褐色土で、その他は主に黒色土で構成される。壁は底部から中部まで内湾ぎみに立ち上がる。底面は平坦である。

出土遺物はない。

H II—56ピット

遺構（第116図、写真図版62）

このピットはG II—1 古代堅穴住居跡に北西壁上部を切られているものである。

平面形は開口部・底部とも円形を呈し、断面形はビーカー形を呈する。規模は開口部径165×175cm・底部径135×144cm・深さ73cmである。埋土は上位中央部が灰褐色土をブロック状に包含する黒色土で、上位壁際から中位及び下位が黒褐色土で構成される。上位埋土である黒色土の範囲は、比較的新しい時代の掘り込みと思われる。

出土遺物はない。

H II—57ピット

遺構（第116図、写真図版62）

このピットの平面形は、開口部・底部とも北西から南東に長軸をもつ楕円形を呈する。断面形はフラスコ形を呈する。規模は、開口部径86cm・底部径92×80cm・深さ51cmである。埋土は、中央最上位と北西壁際が黒色土、上位が極暗褐色土、中・下位が黒褐色土で構成される。上位・下位層とも少量の炭化物を包含する。底面は南部浮石層で、ほぼ平坦である。

出土遺物はない。

H II—58ピット

遺構（第116図、写真図版63）

このピットの平面形は、開口部・底部とも円形で、断面形はビーカー形（シャーレ形）を呈する。規模は、開口部径95×89cm・底部径88×81cm・深さ22cmである。埋土は黒褐色土の単層である。底面は南部浮石層で、北東にむかってやや傾斜する。

出土遺物はない。

I 区

I I—51ピット

遺 構（第117図、写真図版63）

このピットは、I I—7住居跡の東辺を切ってつくられているものである。平面形は、開口部が南北に長軸をもつ楕円形であるが、頸部・底部は円形を呈する。断面形はフラスコ形を呈する。規模は、開口部径218×192cm・頸部径164×158cm・底部径185×173cm・深さ138cmである。埋土は、壁際に壁の崩落土が入るほかは、基本的に、八戸火山灰混合の暗褐色系（a・b・f・j・k）と黒色系（d・h）との互層となる人為的埋積と考えられる。b層からは完形土器を含む5点の土器が重なる状態で出土し、さらに異形石鏝が1点出土している。壁は崩落もあり、下部のみ内傾する。底面は八戸火山灰層で、壁寄りが登り勾配になるほかは平坦である。

出土遺物（第120図、写真図版152～153）

埋土b層から600～605の土器と606の円盤状土製品及び607の石鏝が出土している。600は器高21.5cmの粗製深鉢形土器で、口縁部が内側に反り、肥厚する。原体は $L < \frac{R}{R}$ の単節斜縄文である。601・604は台付鉢形土器で、口縁部に羊歯状文が施文されている。605は注口土器で、体部上半に大腿骨文が施文されている。607の石鏝は先端部が欠損しているものである。600・601・604は晩期前葉に、605は晩期中葉の土器と考える。

I I—52ピット

遺 構（第117図、写真図版64）

このピットは、I I—7住居跡の西辺を切ってつくられているものである。平面形は、開口部・底部とも円形で、断面形はピーカー形を呈する。規模は、開口部径178×175cm・底部径158×153cm・深さ60cmである。埋土は、中央部上位から下位までパミスを多く包含する黒褐色土で、その周囲に黒色土、壁際に壁の崩落土である。g相当（南部浮石）中、ほぼ底面に土器の破片が埋もれた状態で出土している。この埋土の状況は、J I—51ピットにやや似るものである。底面は南部浮石層で、中央部にむかって緩く傾斜する。

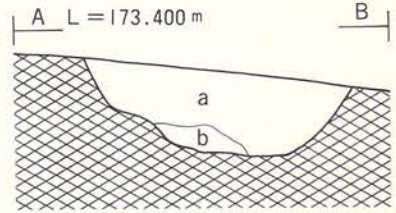
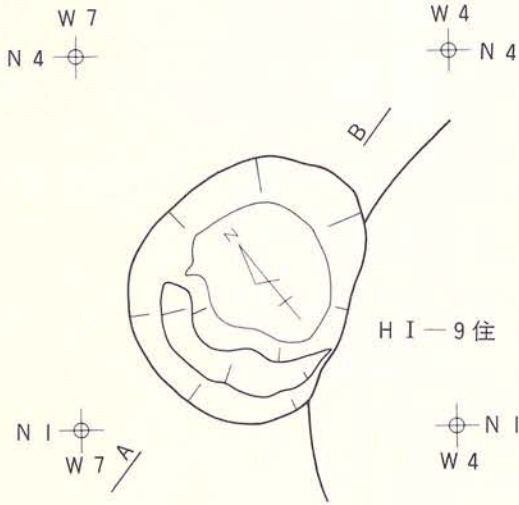
出土遺物（第121図、写真図版153）

608の壺形土器がg層から出土している。器形は体部が脹り、口頸部が短く直立するもので、口頸部は無文、体部には原体 $L < \frac{R}{R}$ の単節斜縄文が施されている。後期末葉の土器と考える。

I I—53ピット

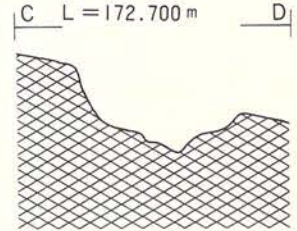
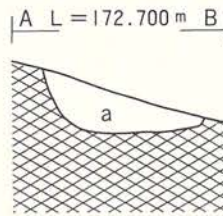
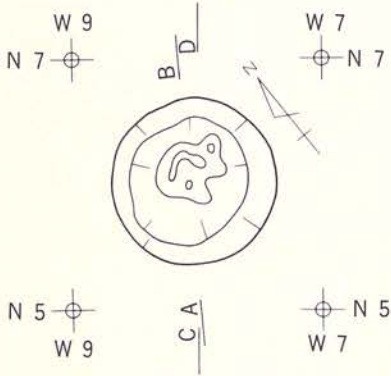
遺 構（第117図、写真図版64）

a. HI-51ピット



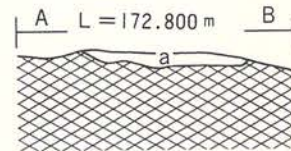
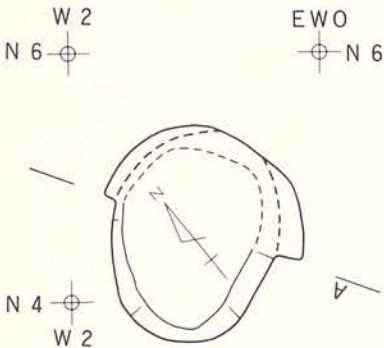
- a. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石 2%)
- b. 7.5Y R3/2 黒褐色土 (含南部浮石 3%)

b. HI-52ピット



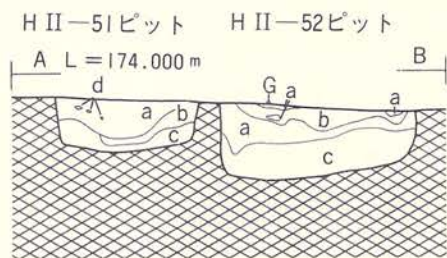
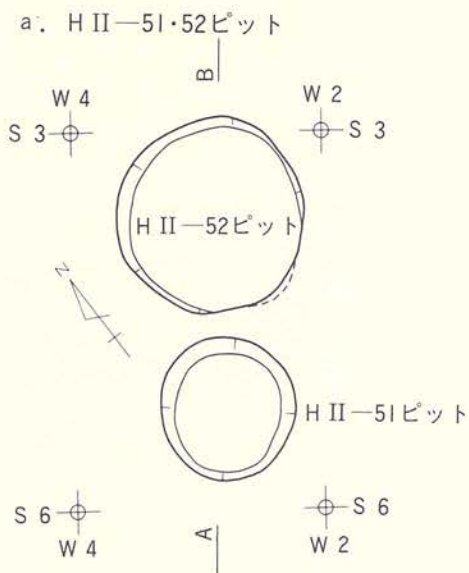
- a. 7.5Y R1.7/1 黒色土 (十和田 a 降下火山灰相当)

c. HI-53ピット

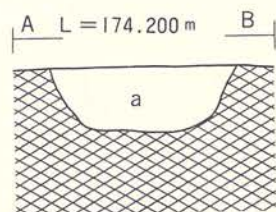
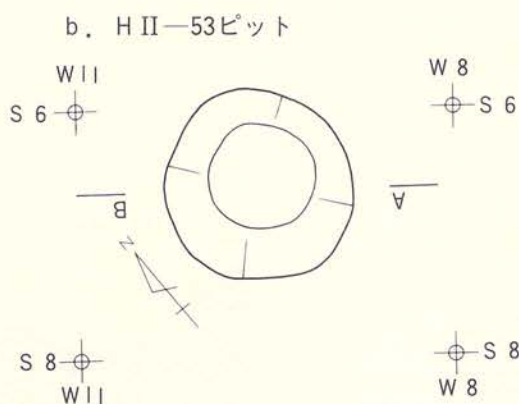


- a. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石 5%)

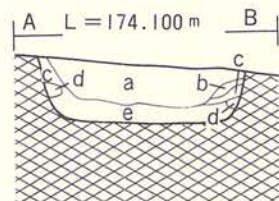
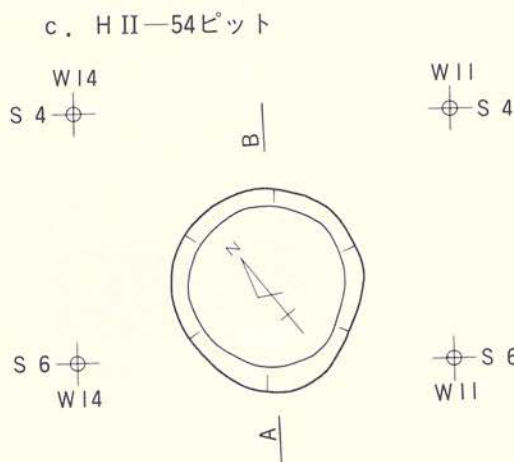
第114図 HI-51・52・53ピット(平・断面 $S = \frac{1}{60}$)



- H II-52ピット
- a. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石2%)
 - b. 7.5Y R2/3 極暗褐色土 (含南部浮石5%)
 - c. 7.5Y R4/6 褐色土
 - d. 5Y R5/8 明赤褐色土 (焼土)
- H II-51ピット
- a. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石2%)
 - b. 7.5Y R4/4 褐色土 (にこりある南部浮石層)
 - c. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石15%)



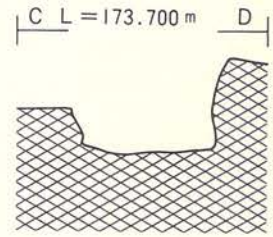
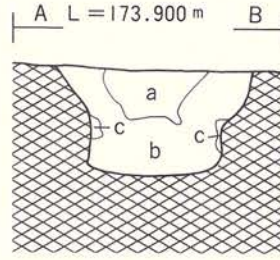
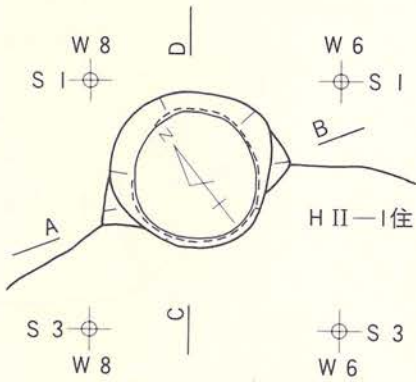
- a. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石15%)



- a. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石5%)
- b. 7.5Y R2/3 極暗褐色土 (含南部浮石5%)
- c. 7.5Y R3/1 黒褐色土 (含南部浮石5%)
- d. 7.5Y R3/2 黒褐色土 (にこりある南部浮石層)
- e. 7.5Y R4/4 褐色土 (含南部浮石中央5%・壁際15%)

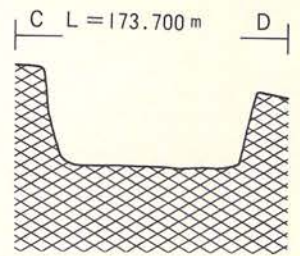
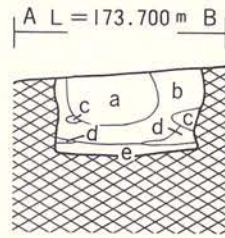
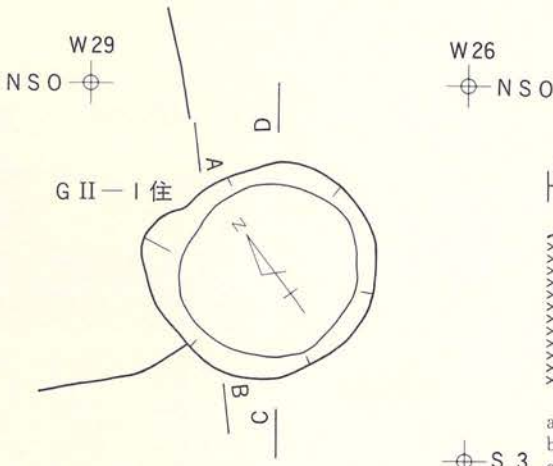
第115図 H I-51・52・53・54ピット (平・断面 S = 1/60)

a. H II-55ピット



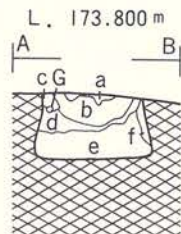
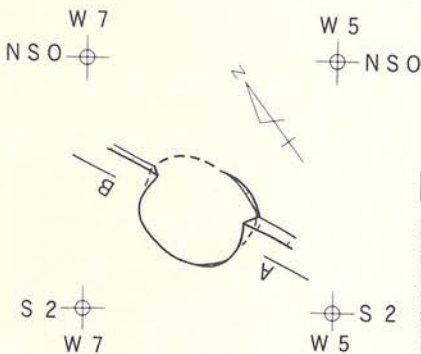
- a. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石15%)
- b. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石5%)
- c. 7.5Y R3/4 暗褐色土 (含南部浮石3%)

b. H II-56ピット



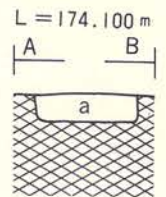
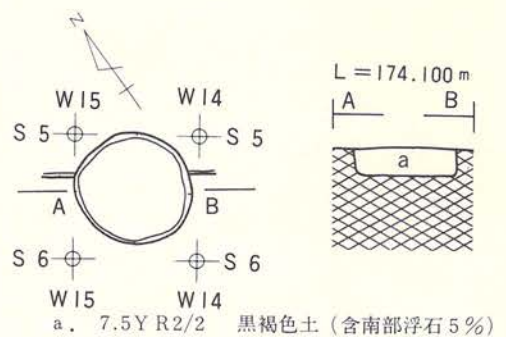
- a. 7.5Y R2/1 黒色土 (含7.5Y R4/2灰褐色)
- b. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石3%・中取浮石相当)
- c. 7.5Y R3/3 暗褐色土 (南部浮石相当)
- d. 7.5Y R3/2 黒褐色土 (南部浮石層)
- e. 7.5Y R3/2 黒褐色土 (含南部浮石)

c. H II-57ピット



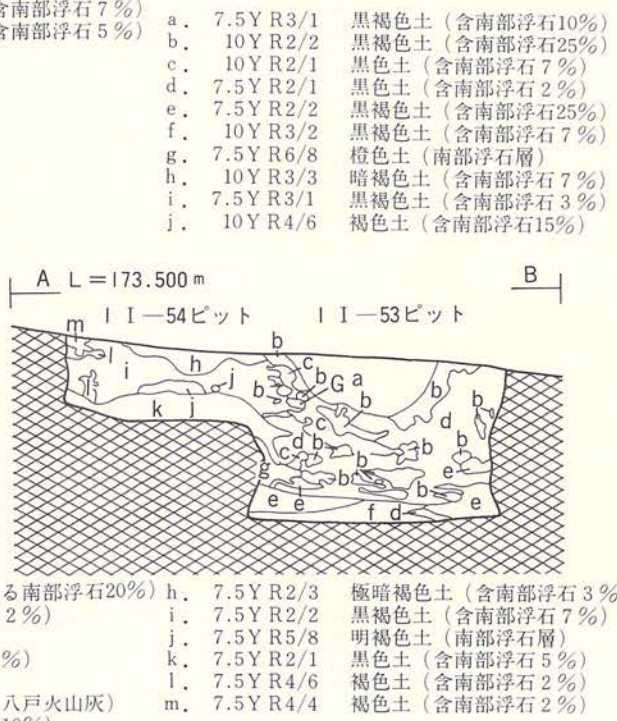
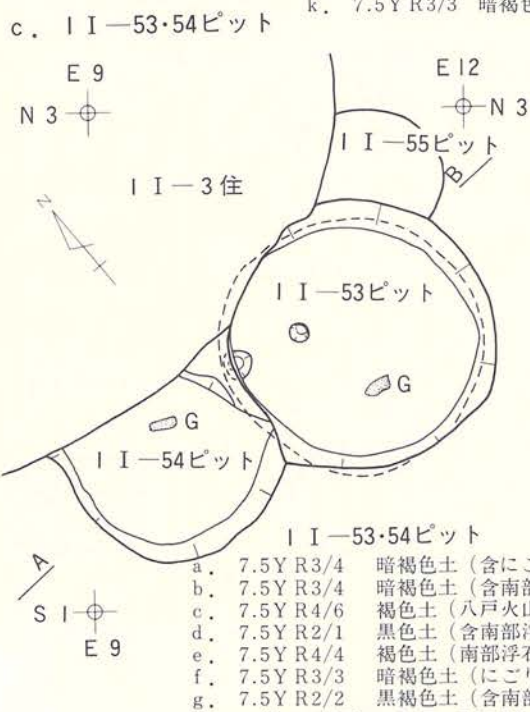
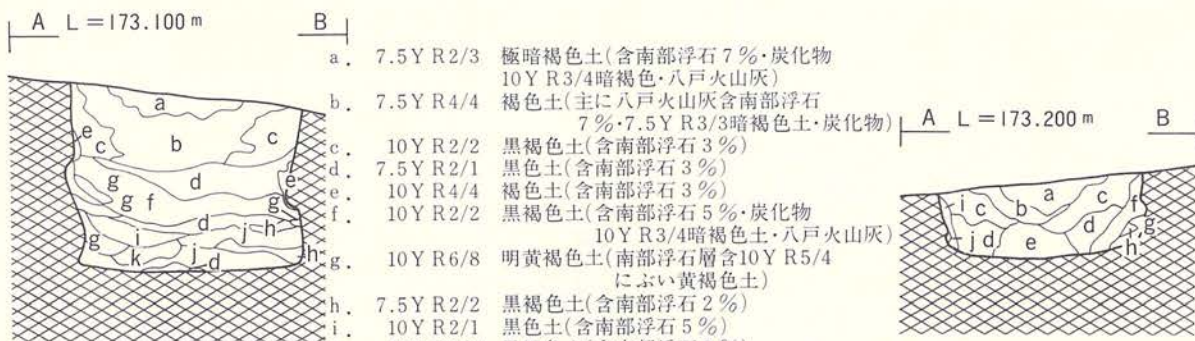
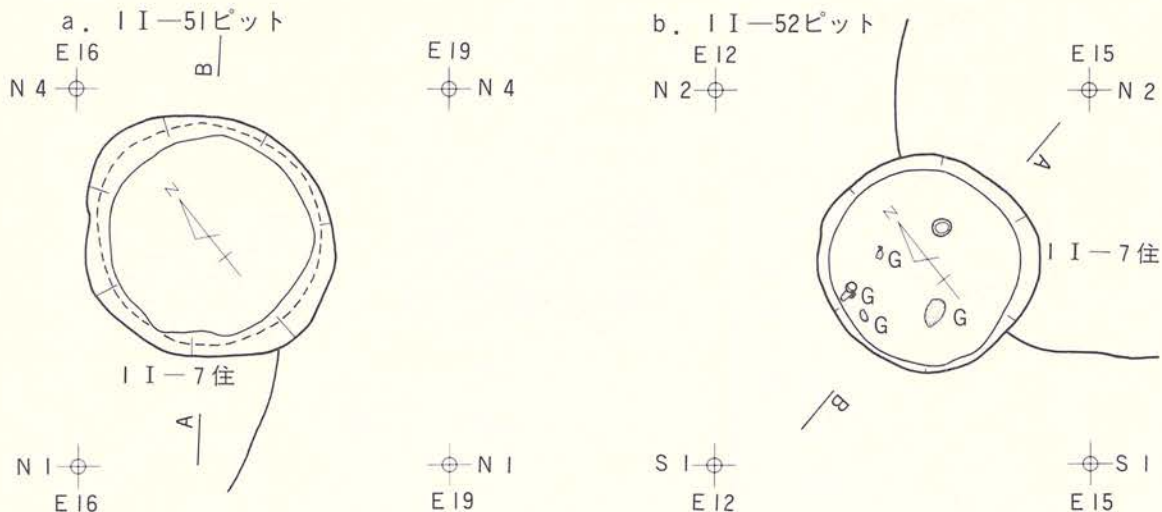
- a. 10Y R2/1 黒色土 (含南部浮石20%)
- b. 7.5Y R2/3 極暗褐色土 (含南部浮石7%・炭化物)
- c. 10Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石2%)
- d. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石3%)
- e. 10Y R2/3 黒褐色土 (含南部浮石7%・炭化物)
- f. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石2%)

d. H II-58ピット

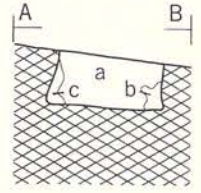
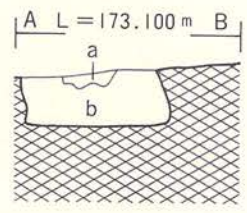
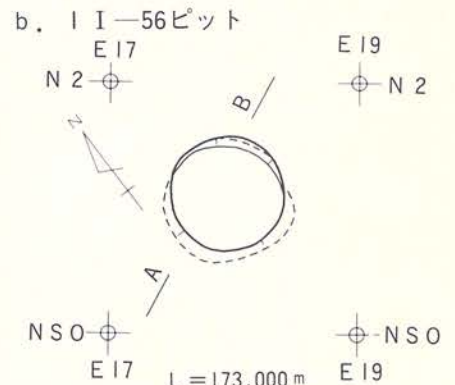
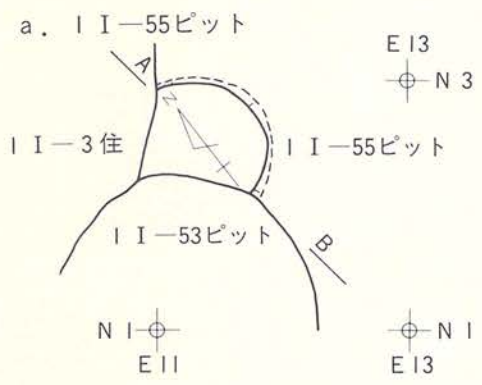


- a. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石5%)

第116図 H II-55・56・57・58ピット (平・断面 S = 1/60)

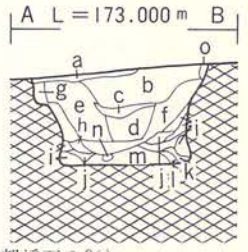
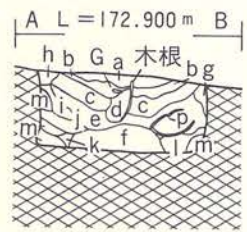
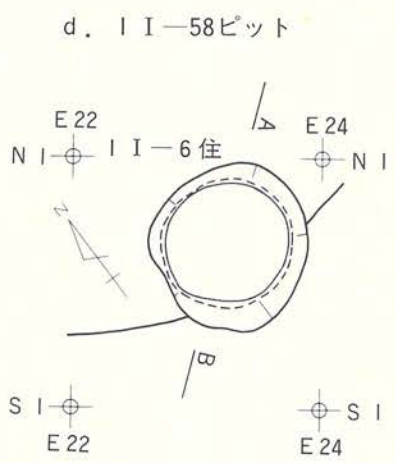
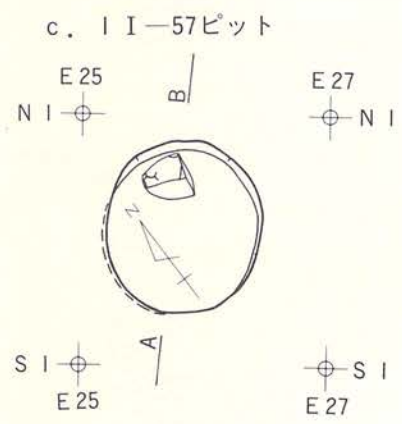


第117図 II-51・52・53・54ピット(平・断面S = 1/60)



- a. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石5%)
 b. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石3%)

- a. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石5%)
 b. 10Y R2/1 黒色土 (含南部浮石3%)
 c. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石3%)

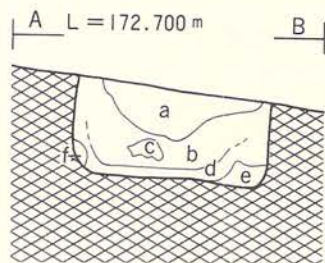
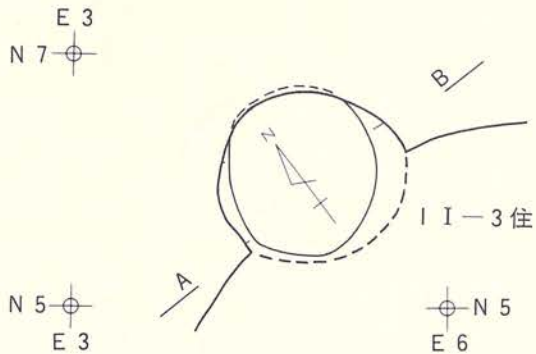


- a. 10Y R3/3 暗褐色土 (含南部浮石2%・炭化物)
 b. 10Y R3/1 黒褐色土 (含南部浮石3%)
 c. 10Y R2/3 黒褐色土 (含南部浮石3%・炭化物)
 d. 10Y R2/3 黒褐色土 (含南部浮石3%)
 e. 7.5Y R3/2 黒褐色土 (含南部浮石5%・炭化物)
 f. 7.5Y R3/3 暗褐色土 (含南部浮石40%)
 g. 10Y R3/2 黒褐色土 (含南部浮石3%)
 h. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石5%)
 i. 7.5Y R3/3 暗褐色土 (含南部浮石3%)
 j. 10Y R2/1 黒色土 (含南部浮石5%)
 k. 10Y R2/1 黒褐色土 (含南部浮石5%)
 l. 10Y R2/1 黒褐色土 (含南部浮石7%)
 m. 10Y R6/8 明黄褐色土 (南部浮石)

- a. 7.5Y R2/3 極暗褐色土 (含南部浮石2%)
 b. 10Y R2/3 黒褐色土 (含南部浮石5%)
 c. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石5%)
 d. 7.5Y R3/2 黒褐色土 (含南部浮石15%)
 e. 10Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石5%・炭化物)
 f. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石3%)
 g. 10Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石3%)
 h. 10Y R2/3 黒褐色土 (含南部浮石3%)
 i. 10Y R5/8 黄褐色土 (南部浮石)
 j. 10Y R2/1 黒色土 (含南部浮石3%)
 k. 10Y R4/4 褐色土 (八戸火山灰)
 l. 7.5Y R3/3 暗褐色土 (含南部浮石1%)
 m. 7.5Y R3/2 黒褐色土 (含南部浮石15%)
 n. 7.5Y R4/4 褐色土 (八戸火山灰塊)
 o. 10Y R3/4 暗褐色土 (南部浮石風化土含南部浮石3%)

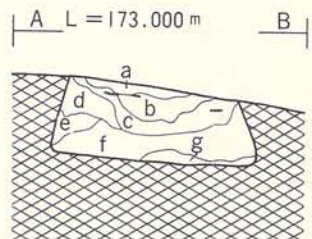
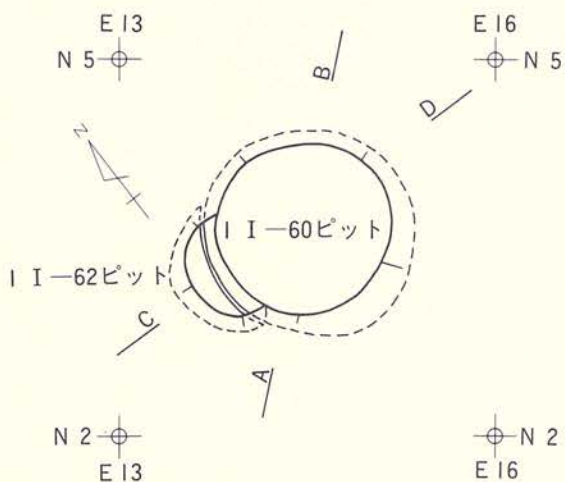
第118図 I I-55・56・57・58ピット (平・断面 S = 1/60)

a. I I-59ピット



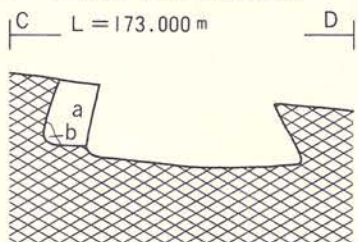
- a. 7.5Y R2/3 極暗褐色土 (含南部浮石 5%)
- b. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石 2%)
- c. 7.5Y R5/8 明褐色土 (にごりある南部浮石)
- d. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含にごりある南部浮石)
- e. 7.5Y R3/4 暗褐色土 (砂質化した南部浮石)
- f. 7.5Y R4/6 褐色土 (砂質化した南部浮石)

b. I I-60・62ピット



I I-60ピット

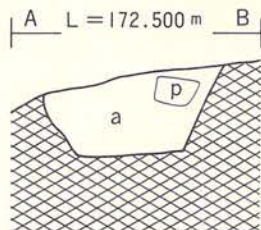
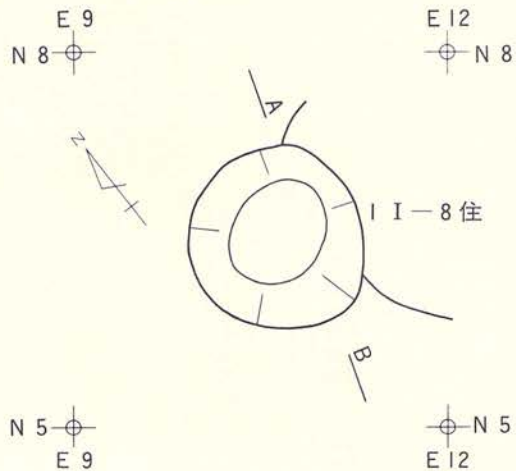
- a. 7.5Y R2/3 極暗褐色土 (含南部浮石 40%)
- b. 10Y R2/1 黒色土 (含南部浮石 7%)
- c. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石 3%)
- d. 10Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石 5%)
- e. 10Y R2/1 黒色土 (含南部浮石 3%・10Y R2/3暗褐色土)
- f. 7.5Y R1.7/1 黒色土 (含南部浮石 3%・炭化物)
- g. 10Y R2/3 黒褐色土 (含南部浮石 3%)



I I-60・62ピット

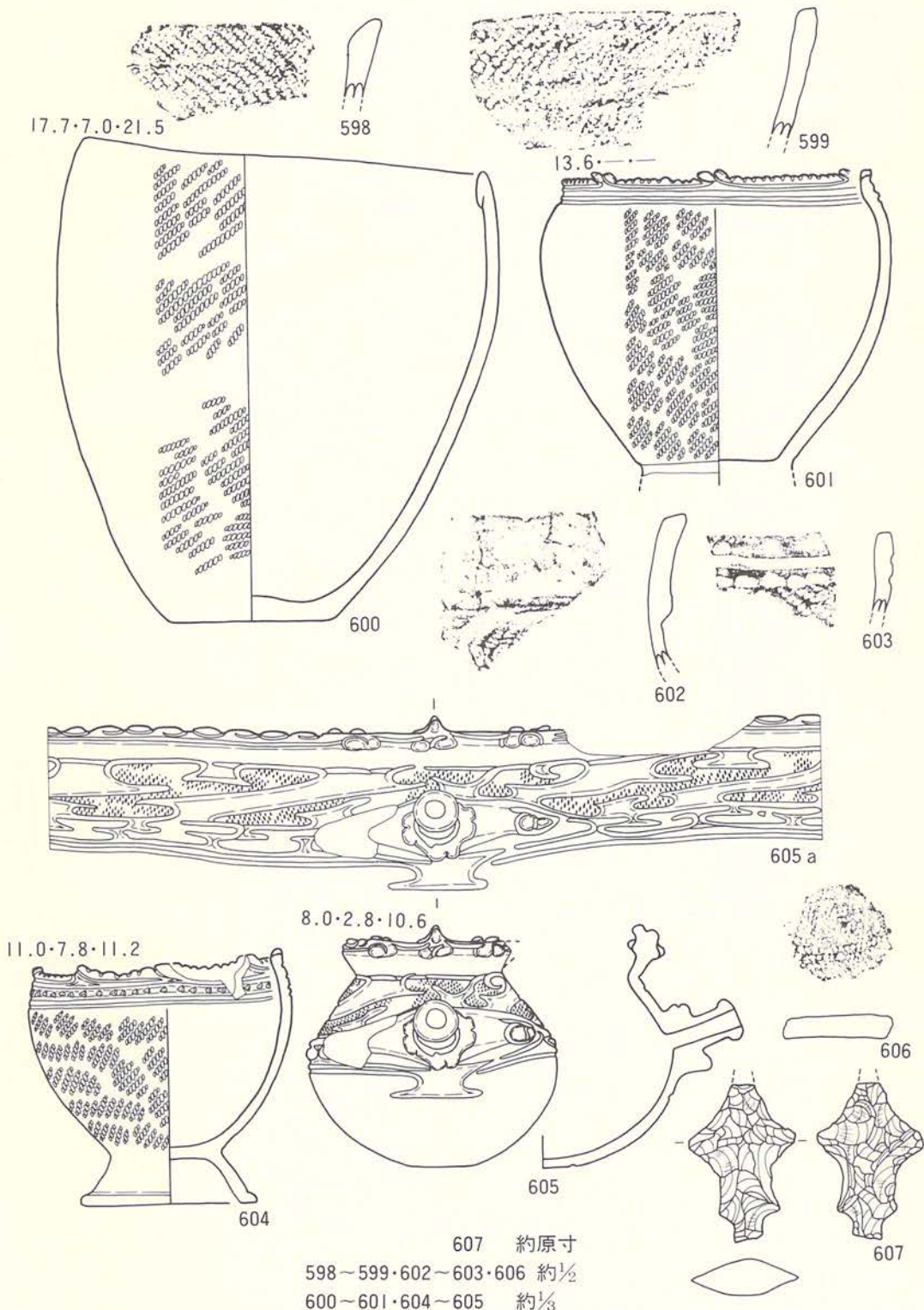
- a. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石 3%)
- b. 10Y R2/3 黒褐色土 (含南部浮石 2%)

c. I I-61ピット

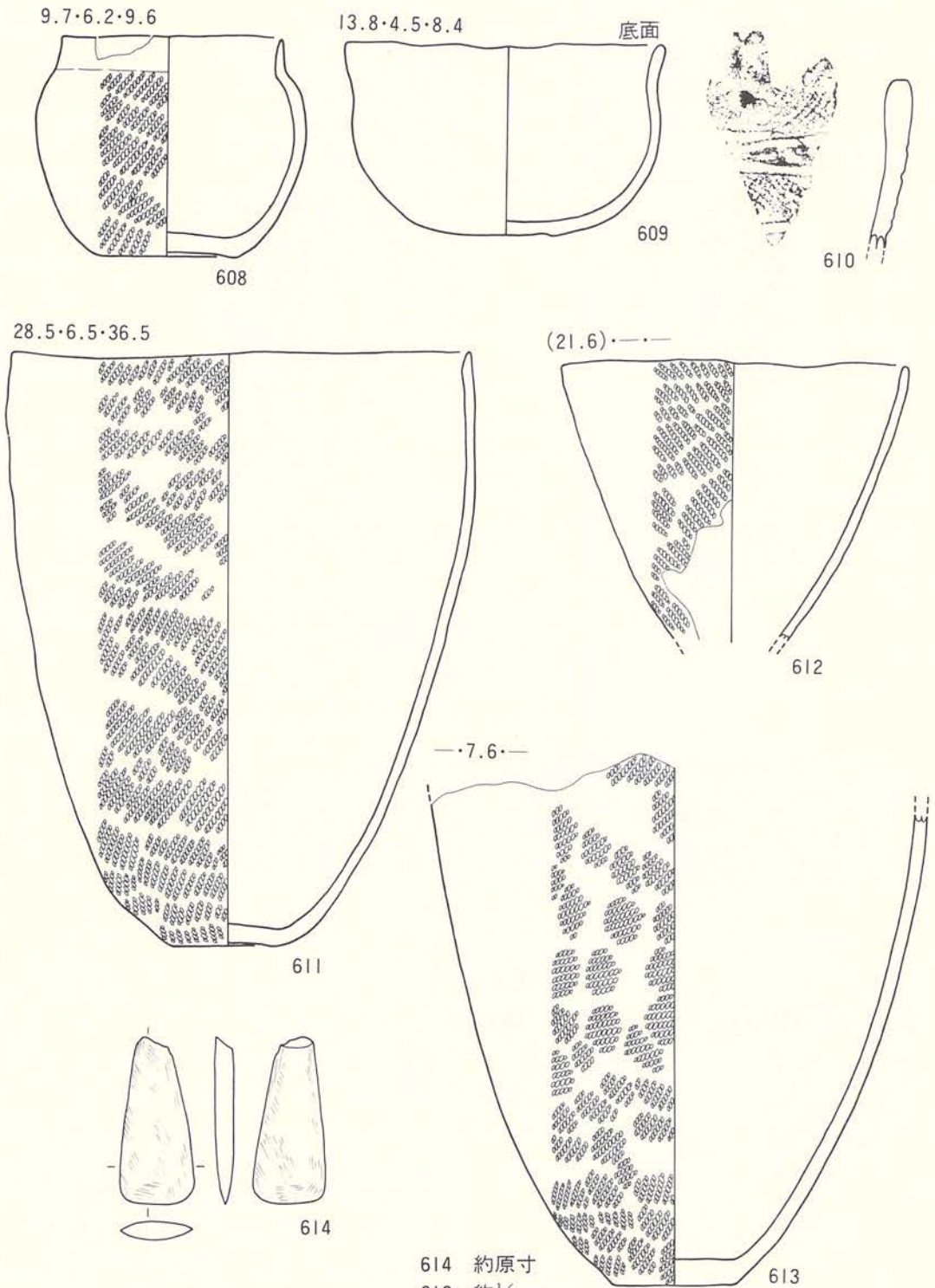


- a. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石 10%)

第119図 I I-59・60・61・62ピット (平・断面 $S = \frac{1}{60}$)



第120図 HI-51・II-51ピット出土遺物(遺物番号598~607)



- 614 約原寸
- 610 約 $\frac{1}{2}$
- 608~609 約 $\frac{1}{3}$
- 611~613 約 $\frac{1}{4}$

第121図 I I -52・53・55・57・60・61ピット出土遺物(遺物番号608~614)

このピットはI I—54・55ピットとI I—3縄文時代住居跡南壁を切って構築されているもので、これら切り合い関係にある4遺構のうち最も新しい遺構である。

平面形は開口部・底部とも円形を呈し、断面形はフラスコ形を呈する。規模は開口部径215cm・頸部径180cm・底部径205cm・深さ133cmである。埋土は上位中央部が暗褐色土で、上位壁際から中位が暗褐色土等を包含する黒色土で、下位がよごれた南部浮石と八戸火山灰で構成される。底面は平坦である。

出土遺物（第121図、写真図版153）

底面から609の埴形土器が出土している。無文の土器である。後期末葉の土器と考える。

I I—54ピット

遺 構（第117図、写真図版64）

このピットはI I—3縄文時代住居跡の南壁を切って構築されているが、北壁をI I—53ピットに切られているものである。

平面形は開口部・底部とも円形を呈し、断面形はビーカー形を呈するものとする。規模は開口部径180cm前後・底部径150cm前後と推定される。深さは57cmである。埋土は上位中央部が極暗褐色土で、中位が褐色土をブロック状に包含する黒褐色土で、下位が黒色土で構成される。底面は西側からI I—53ピット方向の東側に傾斜する。

出土遺物はない。

I I—55ピット

遺 構（第118図、写真図版65）

このピットはI I—3縄文時代住居跡とI I—53ピットに切られているもので、切り合い関係にある3遺構のうち最も古い遺構である。検出された壁及び底面は約1/4にすぎない。

平面形は開口部・底部とも円形を呈するものとする。規模は開口部径110cm前後・底部径125cm前後と推定される。深さは30cmである。埋土は中央部上位が黒褐色土で、その他は黒色土で構成される。壁は底部から開口部まで内湾して立ち上がる。底面は平坦である。

出土遺物（第121図、写真図版153）

610が埋土から出土している。口唇部に角状突起を配した深鉢形土器の口縁部破片で、体部に入組文が施文されているものであろう。後期末葉の土器である。

I I—56ピット

遺 構（第118図、写真図版65）

このピットの平面形は円形で、断面形はフラスコ形を呈する。規模は、開口部径93cm・頸部径93×84cm・底部径105×98cm・深さ41cmである。埋土は、大半が検出面の土層と同じ黒色土で、やや、やわらかいものである。底面は南部浮石層で、東にむかってやや傾斜する。

出土遺物はない。

I I—57ピット

遺 構（第118図、写真図版65）

このピットの平面形は、開口部が北東から南西に長軸をもつ楕円形、底部が円形を呈する。断面形はフラスコ形を呈する。規模は、開口部径140×124cm・底部径133×123cm・深さ61cmである。埋土は、底面上中央がパミス量の多い暗褐色土、その上位が黒褐色土、最上位が八戸火山灰を混入した人為的埋積土、壁際が南部浮石の崩落土で構成される。上・中位層は炭化物を包含する。eには完形の深鉢形土器が横倒しの状態で出土している。壁は崩落のため湾曲ないし垂直に近づいている。底面は八戸火山灰層から南部浮石層で平坦である。

出土遺物（第121図、写真図版154）

611の土器がe層埋土から出土している。粗製土器で、原体 $L < \frac{R}{R}$ の単節斜縄文が施されている。後期末葉から晩期前葉に相当する土器と考える。

I I—58ピット

遺 構（第118図、写真図版66）

このピットはI I—6住居跡と同時検出であるが、埋土の状況から住居跡の南辺を切ってつくられているものである。平面形は円形で、断面形はフラスコ形を呈する。規模は、開口部径135×127cm・頸部径101×95cm・底部径104cm・深さ75cmである。埋土は、上位が黒褐色土、中位が黒色土とパミスの多い黒褐色土、下位がパミスの多い黒褐色土、壁際が南部浮石の崩落土で構成される。gは住居跡の埋土である壁の崩落土と考えられる。この埋土の状況は、J I—51ピットに似るものである。壁は、下部が内傾する以外は崩落のため外傾する。底面は八戸火山灰層で平坦である。

出土遺物はない。

I I—59ピット

遺 構（第119図、写真図版66）

このピットはI I—3縄文時代住居跡に南側壁を切られているものである。

平面形は開口部・底部とも円形を呈する。断面形は北壁下部一部で内湾するが全体形としてはピーカー形を呈する。規模は開口部径145cm・底部径117×135cm・深さ70cmである。埋土は上位が極暗褐色土、中位がよごれた南部浮石を包含する黒色土、下位が主に黒褐色土で構成される。底面は平坦である。

出土遺物はない。

I I—60ピット

遺 構（第119図、写真図版66）

このピットは I I—7 住居跡の北辺と重複し、さらに I I—62 ピットを切ってつくられているものである。平面形は円形で、断面形はフラスコ形を呈する。規模は、開口部径 139×135cm・底部径 175×164cm・深さ 59cm である。埋土は、最上位にパミスを多量に包含する極暗褐色土、底面北東寄りに南部浮石細粒起源の黒褐色土があるほかは黒色土で構成される。壁はほとんど崩落がなく内傾する。底面は南部浮石層で、北東にむかってやや傾斜する。

出土遺物（第121図、写真図版154）

埋土から 612 の粗製深鉢形土器が出土している。原体は $R < \frac{L}{2}$ の単節斜縄文である。後期末葉から晩期前葉に相当する土器と考える。

I I—61 ピット

遺 構（第119図、写真図版67）

このピットは I I—8 縄文時代住居跡の西壁を切って構築されているものである。

平面形は開口部・底部ともほぼ円形を呈し、断面形は浅鉢形を呈する。規模は開口部径 140×150cm・底部径 72×90cm・深さ 64cm である。埋土は黒色土の単層である。底面は平坦である。

出土遺物（第121図、写真図版154）

埋土上位から 613 の粗製深鉢形土器が、埋土下位から 614 のミニチュア石斧が出土している。613 は口縁部が欠損しているもので、原体は $L < \frac{R}{2}$ の単節斜縄文である。614 は基端が欠損しているもので、基部・刃部に擦痕が認められる。613 は後期末葉から晩期前葉に相当する土器と考える。

I I—62 ピット

遺 構（第119図、写真図版67）

このピットは、I I—60 ピットの壁にフラスコ形の黒色土があらわれたことで検出したもので、I I—7 住居跡よりも古く、I I—60 ピットに半分以上切られているものである。平面形は円形と推定され、断面形はフラスコ形を呈する。規模は残存部最大で、開口部径 82cm・底部径 108cm・深さ 51cm である。埋土は、検出面とほとんど区別がつかない黒色土である。壁は、きっちり残って内傾する。底面は南部浮石細粒層で平坦である。

出土遺物（第134図、写真図版154）

615 の深鉢形土器口縁部破片が埋土から出土している。時期は不明である。

I I—63 ピット

遺 構（第122図、写真図版67）

このピットの平面形は、開口部・底部とも円形で、断面形はフラスコ形を呈する。規模は、開口部径 130×126cm・頸部径 123×121cm・底部径 144×139cm・深さ 75cm である。埋土は、上位がパミスを点在あるいはブロック状に包含する極暗褐色土、中位が黒褐色土、下位が黒色土で

構成される。なお、上位のパミス混入土は遺構上方にも続いている。壁は、南西側上部が崩落のため外傾する。底面は、南部浮石粗粒～細粒層で、南西側が壁にむかって登るほかは平坦である。

出土遺物はない。

ⅠⅠ-64ピット

遺構（第122図、写真図版68）

このピットは、ⅠⅠ-65ピットの北東部をわずかに切ってつくられているものである。平面形は円形で、断面形はビーカー形を呈する。規模は、開口部径116×112cm・底部径107×103cm・深さ57cmである。埋土は、上位が十和田b降下火山灰を含む黒褐色土、中位が焼土を全体に混入する黒褐色土、下位がやわらかい黒色土で構成される。底面は南部浮石細粒層で平坦である。

出土遺物はない。

ⅠⅠ-65ピット

遺構（第122図、写真図版68）

このピットは、北東部をⅠⅠ-64ピットに切られるものである。平面形は、開口部・底部とも円形を呈する。断面形はフラスコ形を呈する。規模は、開口部径123cm・底部径134cm・深さ54cmである。埋土は、上位が炭化物を包含する黒褐色土、中位も黒褐色土、下位が炭化物を包含する黒色土、壁際が壁の崩落土で構成される。底面は南部浮石粗粒～細粒層で、ほぼ平坦である。

出土遺物（第134図、写真図版154）

616の壺形土器か注口土器の体部と考えられる破片が埋土から出土している。時期は不明である。

ⅠⅠ-66ピット

遺構（第122図、写真図版68）

このピットの平面形は、開口部・底部とも円形を呈する。断面形はビーカー形を呈する。規模は、開口部径134×131cm・底部径129×122cm・深さ50cmである。埋土は中位に薄く黒色土をさはむが大部分は黒褐色土で構成される。底面は南部浮石細粒層で、中央部がやや凹む。

出土遺物はない。

ⅠⅠ-67ピット

遺構（第122図、写真図版69）

このピットの平面形は開口部・底部とも円形を呈する。断面形は北西壁下部一部のみ内湾するが全体形としてはビーカー形を呈する。規模は開口部径166×170cm・底部径158×172cm・深

さ65cmである。埋土は上位から極暗褐色土・黒褐色土・黒色土・黒褐色土等によって構成される。底面は平坦である。

出土遺物（第134図、写真図版154）

617の勾玉が底面から出土している。最大長2.5cmのもので、石質は石英である。

I I—68ピット

遺 構（第123図、写真図版69）

このピットの平面形は、開口部・底部とも円形を呈する。断面形はフラスコ形を呈する。規模は、開口部径95×89cm・底部径103×95cm・深さ31cmである。埋土は上位から下位まで黒褐色土で構成される。底面は南部浮石細粒層で北東にむかって傾斜する。

出土遺物はない。

I I—69ピット

遺 構（第123図、写真図版69）

このピットの平面形は、開口部・底部とも円形を呈する。断面形はフラスコ形を呈する。規模は、開口部径95×93cm・底部径93×92cm・深さ30cmである。埋土は、上・中位が炭化物を包含する黒色土、下位が黒褐色土で構成されるが、いずれも中振浮石主体である。壁は、斜面下方（北東）が不明瞭で垂直に近くなっている。底面は黒褐色土層で、北東にむかって傾斜する

出土遺物（第134図、写真図版154）

618と619が埋土から出土している。618は深鉢形土器の底部と考えられる。619は壺形土器か注口土器の体部破片と考えられるもので、瘤を付し、弧帯状入組文が施文されている。619は後期末葉の土器である。

I II—51ピット

遺 構（第123図、写真図版70）

このピットはI II—2古代竪穴住居跡床面下から検出されたものである。

平面形は開口部・底部とも円形を呈し、断面形はフラスコ形を呈する。規模は開口部径190×193cm・底部径213×217cm・深さ50cmである。埋土は上位が黒褐色土、中位が黒色土・暗褐色土及び崩落したとみられる南部浮石で、下位はよごれた南部浮石で構成される。壁は底部から開口部まで内湾して立ち上がる。底面は平坦である。

出土遺物はない。

I II—52ピット

遺 構（第124図、写真図版70）

このピットの平面形は開口部、底部とも円形を呈し、断面形は浅いピーカー形を呈する。規模は開口部径112×113cm・底部径98cm・深さ19cmである。埋土は黒色土の単層である。底面は

平坦である。

出土遺物はない。

I II—53ピット

遺 構 (第124図、写真図版70)

このピットの平面形は開口部・底部とも円形を呈し、断面形はほぼビーカー形を呈する。規模は開口部径150×153cm・底部径138×143cm・深さ45cmである。埋土は主に黒褐色土で構成され、底部壁際には崩落したとみられる南部浮石と八戸火山灰がはいる。推定するにフラスコ形を呈していたものと考えられる。底面は中央部がやや盛り上がる。

出土遺物はない。

I II—54ピット

遺 構 (第124図、写真図版71)

このピットの平面形は、開口部・底部とも円形を呈する。断面形は皿形を呈する。規模は、開口部径161×150cm・底部径149×136cm・深さ22cmである。埋土は、中央部が汚れた南部浮石とパミス量の多い黒色土、その周囲が黒色土、壁際が壁の崩落土で構成される。この埋土の状況はJ I—51ピットに似るものである。壁は外傾するが、遺構の下部のみであり詳細は不明である。底面は南部浮石層で、西側が傾斜するほかは平坦である。

出土遺物はない。

I II—55ピット

遺 構 (第124図、写真図版71)

このピットは西壁をI II—56ピットに切られているものである。

平面形は開口部・底部とも円形を呈し、断面形はフラスコ形を呈する。規模は開口部径170×177cm・底部径172×173cm・深さ50cmである。埋土は上位から極暗褐色土・黒褐色土・暗褐色土等によって構成され、底部壁際には崩落したとみられる南部浮石がはいる。壁は底部から開口部まで直立ないし内湾して立ち上がる。底面は平坦である。

出土遺物 (第134図、写真図版154)

620の鉢形土器が底面から出土している。器高16.7cmのもので、口縁部は小波状を呈する。原体はL< $\frac{R}{R}$ の単節斜縄文である。後期末葉から晩期前葉の土器と考える。

I II—56ピット

遺 構 (第124図、写真図版71)

このピットはI II—55ピットの東壁を切って構築されているものである。

平面形は開口部・底部とも円形を呈し、断面形はフラスコ形を呈する。規模は開口部径158cm・底部径162cm・深さ29cmである。埋土は中央部がよごれた南部浮石で、壁際が黒褐色土で

構成され、底部壁際には崩落したとみられる南部浮石がはいる。壁は底部から開口部まで直立か内湾して立ち上がる。底面は平坦である。

出土遺物はない。

I II—57ピット

遺 構（第125図、写真図版72）

このピットの上部は既に削られており、南西側約半分は調査区外にはいる。検出されたのは壁の一部と底面約半分である。

平面形は楕円状を呈するものとする。規模は不明である。埋土は上位が耕作土で、下位は黒褐色土で構成される。底面は凹凸がある。

出土遺物はない。

I II—58ピット

遺 構（第125図、写真図版72）

このピットの平面形は開口部・底部とも円形を呈し、断面形は壁中部に頸部をもつフラスコ形を呈する。規模は開口部径173×176cm・頸部径159×162cm・底部径185×190cm・深さ80cmである。埋土は上位から暗褐色土・褐色土・黒褐色土・褐色土で構成され、壁際中位には崩落したとみられる南部浮石がはいる。底面は平坦である。

出土遺物（第134図、写真図版155）

621と623が埋土下位から、622が埋土上位から出土している。621は鉢形土器と思われるもの、622・623は深鉢形土器で、原体は621・622が $L < \frac{R}{R}$ 、623が $R < \frac{L}{L}$ である。

I II—59ピット

遺 構（第125図、写真図版72）

このピットの南側約半分は調査区外にはいる。

平面形は開口部・底部とも円形か楕円形を呈するものとする。断面形はフラスコ形を呈する。規模は北西から南東に計測して、開口部径165cm・底部径210cm・深さ60cmである。埋土は中央部が暗褐色土で、その他は黒色土で構成される。北西壁際下位には崩落したとみられる南部浮石がはいる。底面は平坦である。

出土遺物はない。

I II—60ピット

遺 構（第126図、写真図版73）

このピットはI II—61ピットに北東壁を切られているものである。

平面形は開口部・底部ともほぼ円形を呈し、断面形はフラスコ形を呈する。規模は開口部径155×180cm・底部径160×166cm・深さ74cmである。埋土は主に黒色土で構成され、壁際下位に

は崩落したとみられる南部浮石がはいる。壁は底部より内湾ぎみか直立ぎみに立ち上がる。

出土遺物はない。

I II-61ピット

遺 構（第126図、写真図版73）

このピットは、I II-60ピットの北東壁をわずかに切ってつくられているものである。平面形は、開口部・底部とも東西に長軸をもつ楕円形を呈する。断面形は皿形ないしピーカー形を呈する。規模は、開口部径115×93cm・底部径108×84cm・深さ25cmである。埋土は、中央部がパミスブロック状を含む極暗褐色土、壁際上位が南部浮石、下位が八戸火山灰で構成される。壁は、一部内湾するところがあるが大部分は直立する。底部は八戸火山灰層で局部的に凹凸がある。

出土遺物はない。

I II-62ピット

遺 構（第126図、写真図版74）

このピットはI II-1縄文時代住居跡床面下から検出されたもので、I II-64・65ピットを切って構築されているものである。

平面形は開口部・底部とも東西に長軸をもつ楕円形を呈し、断面形はフラスコ形を呈する。規模は開口部径127×152cm・底部径150×166cm・深さ50cmである。埋土は暗褐色土・黒褐色土・褐色土で構成される。

出土遺物はない。

I II-63ピット

遺 構（第126図、写真図版73）

このピットはI II-70ピットの南西壁を切って構築されているものである。

平面形は開口部、底部とも円形を呈し、断面形はピーカー形を呈する。規模は開口部径166×170cm・底部径137×140cm・深さ67cmである。埋土は中央部上位が暗褐色土で、中位が黒褐色土で、壁際から下位が暗褐色土・褐色土・黒褐色土等で構成される。底面は平坦である。

出土遺物（第135図、写真図版155）

624と625が埋土から出土している。624は口縁部直下に平行沈線を巡らし、刻目を施している。625は粗製深鉢形土器の口縁部破片である。どちらも後期末葉から晩期前葉の土器と考える。

I II-64ピット

遺 構（第127図、写真図版74）

このピットは、I II-65ピットの北東部をわずかに切り、上部をI II-1住居跡に、西側を

I II-62ピットに、さらに南東部1/3強をI II池跡に切られているものである。平面形は、開口部・底部とも南北にわずかに長い隅丸方形を呈する。断面形は皿形を呈する。規模は、開口部南北長162cm・底部南北長150cm・深さ22cmである。埋土は、暗褐色土が混入する黒色土の単層である。cはこのピットの底面をつくるために貼ったものである。底面は、緩い凹凸があり、中央が凹むものである。

出土遺物はない。

I II-65ピット

遺 構（第127図、写真図版74）

このピットは、南西側約半分が調査区外にはいるものである。しかも、北東部をわずかにI II-64ピットに、上部をI II-1住居跡に、北側をI II-62ピットに、さらに南東側をI II池跡に切られているものである。残存するのは池跡に切れている分以外で壁下部から底面が確認ができる。平面形は円形で、断面形はフラスコ形を呈する。規模は、底部径が264cmと推定される。深さは77cmである。埋土は、上位が炭化物を含む黒褐色土と暗褐色土、中位が南部浮石と八戸火山灰の互層、下位が暗褐色土と黒色土で構成される。これは人為的埋積と考えられる。なお、mはI II-1住居跡の柱穴痕である。底面は八戸火山灰層で、やわらかく平坦である。

出土遺物はない。

I II-66ピット

遺 構（第127図、写真図版74）

このピットは、南西側をI II池跡に切られているものである。平面形は、開口部・底部とも南北に長軸をもつ楕円形を呈する。断面形は皿形を呈する。規模は、開口部径82×63cm・底部径68×56cm・深さ15cmである。埋土は、上位が炭化物を含む黒褐色土、下位が南部浮石とパミス量の多い極暗褐色土で構成される。底部は南部浮石層で、南西側一部欠くが平坦である。

出土遺物はない。

I II-67ピット

遺 構（第127図、写真図版75）

このピットは、南西側をI II池跡に切られるものである。平面形は、開口部・底部とも南北に長軸をもつ楕円形を呈する。断面形は皿形を呈する。規模は、開口部短径62cm・底部径80×56cm・深さ25cmである。埋土は、上位が炭化物を含む黒褐色土、下位が極暗褐色土で構成される。底面は八戸火山灰層で、やや凹凸がみられる。

出土遺物はない。

I II-68ピット

遺 構（第128図、写真図版75）

このピットは、西側をⅠⅡ-69ピットに、上部をⅠⅡ-2住居跡に、さらに南西上部を国道側溝に切られているものである。平面形は、開口部・底部とも北東から南西に長軸をもつ楕円形を呈する。断面形は皿形を呈する。規模は、開口部長径101cm・底部長径81cm・深さ26cmである。埋土は、八戸火山灰を全体に混入し、炭化物を包含する暗褐色土が主体で、人為的埋積である。底面は八戸火山灰層で、西側1/3を欠くがほぼ平坦である。

出土遺物はない。

ⅠⅡ-69ピット

遺構（第128図、写真図版75）

このピットは、南西側1/3が調査区外にはいり、ⅠⅡ-68ピットを切るものである。平面形は、北北東から南南西に長軸をもつ楕円形を呈するものと推定される。断面形はビーカー形を呈する。規模は、開口部短径150cm・底部短径133cm・深さ64cmである。埋土は、八戸火山灰を混入する黒褐色土・暗褐色土・南部浮石主体の明褐色土・八戸火山灰主体の褐色土、パミス量の多い黒褐色土の互層である。ほぼ水平堆積である。最下層に明褐色土等があるが、これはⅠⅡ池跡の最下層と似るものである。底面は八戸火山灰層で、中央がやや凹む。

出土遺物はない。

ⅠⅡ-70ピット

遺構（第128図、写真図版75～76）

このピットはⅠⅡ-63ピットに南西壁を切られているものである。

平面形は開口部・底部とも北東から南西に長軸をもつ楕円形を呈し、断面形はフラスコ形を呈する。規模は開口部径140×157cm・底部径157×176cm・深さ80cmである。埋土は上位から黒褐色土・褐色土・黒色土で構成され、中位に焼土がブロック状にはいる。底面は平坦である。

出土遺物（第135図、写真図版155）

626～628の土器が埋土から出土している。626は器高8.3cmの鉢形土器で、原体 $L < \frac{R}{R}$ と $R < \frac{L}{L}$ の単節斜縄文が施されている。628は深鉢形土器の口縁部破片で、角状突起を配するものである。いずれも後期末葉の土器と考える。

J 区

JⅠ-51ピット

遺構（第129図、写真図版76～77）

このピットの平面形は、開口部・底部とも円形を呈する。断面形はフラスコ形を呈する。規模は、開口部径181×171cm・底部径204×197cm・深さ96cmである。埋土は、上位中央がパミス

量の多い黒褐色土、中位が黒色土、下位がパミスを多量に含む黒褐色土、斜面上方側壁際が壁起源の南部浮石で構成される。この埋土の下位層に載る状態で、3個体の完形土器が出土している。1個体は、北東壁に貼りつく状態で直立する深鉢形土器、1個体は、南西壁寄りに倒立する台付鉢形土器、もう1個体は、南壁寄り斜位にある深鉢形土器である。底面は八戸火山灰層で平坦である。底面には、敷きつめたような状態に土器片が出土している。これは完形の深鉢形土器に復元されている。また、底面には5個の柱穴が検出されている。5個とも埋土は黒褐色土でパミスを多量に含んでいる。P₁とP₃は他よりやや深く、土器の破片も入っている。壁は北東側をのぞき、南部浮石層部分が崩落して抉れているほかは内傾している。

P _{No}	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅
径 cm	39×35	39×30	36×33	29×24	38×33
深さcm	25	7	18	9	9

出土遺物（第135～136図、写真図版155～156）

629～632の4個体の土器が出土している。630は底面から出土し復元されたものである。629の台付鉢形土器は口唇部にB状突起を配し、口縁部直下にくびれをもつもので、体部には原体L< $\frac{R}{R}$ の単節斜縄文が施されている。630～632は粗製深鉢形土器で、632の口縁部直下には補修孔を有する。631・632には異条斜縄文が施される。いずれも晩期前葉の土器と考える。

J I—52ピット

遺 構（第129図、写真図版77）

このピットの平面形は、開口部・底部とも円形を呈する。断面形はフラスコ形を呈する。規模は、開口部径193×187cm・頸部径182×178cm・底部径192×188cm・深さ96cmである。埋土は、上位中央部がパミス量の多い暗褐色土、その周囲が黒褐色土、中位が黒色～黒褐色土、下位が南部浮石起源土と八戸火山灰起源土との互層、壁際が壁の崩落土である南部浮石で構成される。壁は南部浮石層以上が崩落し外傾する。底面は八戸火山灰層で平坦である。底面には3個の柱穴が検出されている。P₁には柱あたりと思われる黒色土が斜位に中位まで入っている。まわりはパミスを多く含む暗褐色土である。P₂は、上位から暗褐色土、黒褐色土、八戸火山灰と南部浮石の混合土で、いずれもパミスを多く含む。P₃は、上位がパミスを多く含む暗褐色土、下位が南部浮石で構成される。これらの柱穴は、いずれもピットの中央上方で1点にまとまるように傾いているものである。

P _{No}	P ₁	P ₂	P ₃
径 cm	53×51	39×39	30×26
深さcm	44	33	21

出土遺物（第136図、写真図版156）

633の土器と634の石器が埋土から出土している。633は櫛歯状工具による条線文様が施されているものである。634のスクレーパーは片面2側縁に刃部剝離調整が施されている。633は後期初頭の土器と考える。

J I—53ピット

遺 構（第130図、写真図版77～78）

このピットの平面形は開口部・底部とも円形を呈する。規模は開口部径130×139cm・底部径122×127cm・深さ15cmである。埋土は極暗褐色土の単層である。底面はほぼ平坦である。

出土遺物はない。

J I—54ピット

遺 構（第130図、写真図版78）

このピットはJ I—55ピットに北東壁を切られているものである。

平面形は開口部が円形を、底部が北東から南西に長軸をもつ楕円形を呈する。断面形はフラスコ形を呈する。規模は開口部径107cm・底部径123×140cm・深さ75cmである。埋土は上位から黒褐色土・灰褐色土・黒褐色土・暗褐色土等で構成される。底面は平坦である。

出土遺物はない。

J I—55ピット

遺 構（第130図、写真図版78）

このピットはJ I—54ピットの北東壁上部を切って構築されているものである。

平面形は開口部・底部とも円形を呈し、断面形は皿形を呈する。規模は東西の計測で、開口部径146cm・底部径110cm・深さ33cmである。埋土は主に黒褐色土・極暗褐色土・暗褐色土で構成される。

出土遺物はない。

J I—56ピット

遺 構（第130図、写真図版78）

このピットは、八戸火山灰層を深く削平した宅地跡にあり、底部のみ検出したものである。

平面形は円形を呈する。規模は底部径178×169cm・深さ5cmである。埋土は黒褐色土が主で、壁寄りにわずかににぶい褐色土が認められた。底面は八戸火山灰層で、ほぼ平坦である。

出土遺物はない。

J I—57ピット

遺 構（第131図、写真図版79）

このピットの平面形は、開口部・底部とも西北西から東南東に長軸をもつ楕円形を呈する。

断面形は浅鉢形を呈する。規模は、開口部径173×110cm・底部径136×67cm・深さ37cmである。埋土は、上位が極暗褐色土、壁際と下位が壁起源の南部浮石と黒褐色土の互層で構成される。壁は上部が崩落のため大きく外傾する。底面は南部浮石層で、北東にやや傾斜する。

出土遺物はない。

J I—58ピット

遺構（第131図、写真図版79）

このピットは、J I—4住居跡の南壁とJ I—5住居跡の西辺を切ってつくられているものである。なお、宅地跡により上部と南東部を欠くものである。平面形は、北東から南西に長軸をもつ楕円形を呈する。断面形はフラスコ形を呈する。規模は、開口部長径170cm・底部長径178cm・深さ44cmである。埋土は、中央部が暗褐色土、その周囲・中位が八戸火山灰土、下位が黒褐色土、壁際が八戸火山灰土で構成される。a～dは人為的埋積と考えられる。底面は八戸火山灰層で、凹凸がある。

出土遺物はない。

J I—59ピット

遺構（第131図、写真図版79）

このピットは、J I—4住居跡内南東部にあるもので、住居跡より古い時期のものである。平面形は、北東から南西に長軸をもつ楕円形を呈する。断面形はフラスコ形を呈する。規模は、開口部径93×76cm・底部径98×73cm・深さ5cmである。埋土は極暗褐色土で、底部に黄褐色土がブロック状に入るものである。東側にJ I—4住居跡の周溝の埋土がみえる。底面は八戸火山灰層で凹凸がある。

出土遺物はない。

J I—60ピット

遺構（第131図、写真図版80）

このピットは、J II—54ピットの東壁を切ってつくられているものである。平面形は円形で、断面形はフラスコ形を呈する。規模は、底部径86×81cm・深さ53cmである。埋土は、上位が暗褐色土、中位が南部浮石と八戸火山灰、下位が黒色土と八戸火山灰で構成される。底面は八戸火山灰層で、ほぼ平坦である。

出土遺物（第136図、写真図版156～157）

635～637の土器が埋土上位から出土している。635と637は渦巻文を基調とする文様が展開していると考えられる土器である。635の口縁部には縦位の隆帯を付し、穿孔を有するものである。636は口縁部が肥厚するものである。635と637は後期前葉の土器である。

J I—61ピット

遺構（第132図、写真図版80）

このピットの平面形は円形を呈する。規模は、開口部径142cm・底部径135cm・深さ4cmである。埋土は黒褐色土である。底面は南部浮石細粒層で、北東にやや傾斜する。

底面には柱穴が1個検出されている。埋土は黒褐色土で、柱あたりは確認さ

径 cm	48×35
深さcm	22

れないが、穴はピットの中央上方を向いて傾くものである。

出土遺物はない。

J II—51ピット

遺 構（第132図、写真図版80）

このピットは、八戸火山灰層が削平された宅地跡に検出されたもので、下部のみ残存しているものである。平面形は、開口部・底部とも北東から南西に長軸をもつ楕円形を呈する。断面形は皿形を呈する。規模は、開口部径119×104cm・底部径109×94cm・深さ16cmである。埋土は単層であるが、褐色土、にぶい黄褐色土、暗褐色土の混合土である。底面は八戸火山灰層で、凹凸がある。

出土遺物はない。

J II—52ピット

遺 構（第132図、写真図版81）

このピットはJ II—1 古代竪穴住居跡の床面下から検出されたものである。

平面形は開口部・底部とも円形を呈し、断面形は浅鉢形を呈する。規模は開口部径185×190cm・底部径170×177cm・深さ27cmである。埋土は暗褐色土の単層である。底部はほぼ平坦である。

出土遺物はない。

J II—53ピット

遺 構（第132図、写真図版81）

このピットの平面形は、開口部・底部とも円形を呈する。断面形はフラスコ形を呈する。規模は、開口部径135cm・底部径167×159cm・深さ95cmである。埋土は、上位が暗褐色土、黒褐色土で炭化物を包含する。上位壁際から下位が八戸火山灰主体の埋土である。八戸火山灰層の壁の崩落がそれほどみられないことから、このピットは人為的埋積を受けたものと考えられる。（開口部南側が広がっているのは、調査中、雨のために崩落したものである。）底面は八戸火山灰層で、やわらかくほぼ平坦である。

出土遺物はない。

J II—54ピット

遺 構（第133図、写真図版81）

このピットは、東壁をJ I—60ピットに切られているものである。平面形は、開口部・底部とも東西に長軸をもつ楕円形を呈する。規模は、開口部径257×178cm・底部径132×109cm・深さ62cmである。埋土は、黒褐色土と八戸火山灰主体の褐色土、それに泥がしみ込んだような褐色灰色の南部浮石が、斜位に堆積する互層である。これは人為的埋積である。壁は湾曲し、底面

からの立ち上がりが明確でない。底面は八戸火山灰層で、西側部分は平坦である。東側部分は凹凸があり、単一遺構なのかどうか不明である。

出土遺物（第136図、写真図版157）

底面から638の土器が、埋土から639の土器と640の石器が出土している。638は壺形土器で無文である。背部には穿孔を有する瘤状突起が付されている。底面には木葉痕が施されている。640のスクレーパーは片面2側縁に刃部剥離調整が施されている。

6. 陥し穴状遺構

F I—101陥し穴状遺構

遺構（第133図、写真図版82）

この遺構は長軸を南北にもつ。規模は開口部長軸350cm・短軸87cm、底部長軸321cm・短軸20cm、深さ120cmを測る。短軸断面はロート状を呈する。埋土は上位から黒色土・崩落したとみられる南部浮石・黒褐色土・よごれた南部浮石及び八戸火山灰・粘土質の黄褐色土で構成される。底面からは湧水する。

出土遺物はない。

7. 池跡

I II池跡

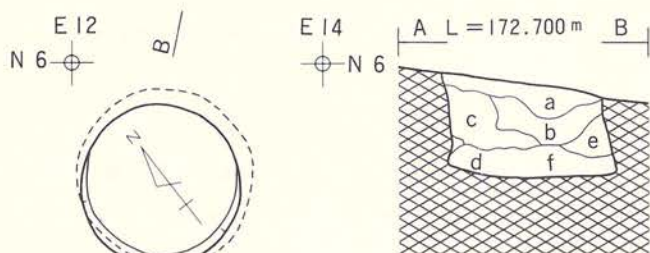
遺構（第137図、写真図版84）

この遺構は、南西側が調査区外（国道）に入り、東側が宅地跡に削平されて部分的にしか検出されていないものである。

平面形も規模も不明であるが、断面部分の長さは7.4mに達する。埋土は、上位に国道法面の土が被り、その下位が黒褐色土、中位が黒色土、下位が暗褐色土で構成される。これらは、ほぼ水平堆積の様相をみせている。詳細にみると、dは粘土質と砂質の互層で、fがその最下層の砂層となるものである。gは粘土質で非常に細かい粒子でしまっている。hは砂質である。以上の堆積状況は水底堆積の特徴と考えられる。lはにぶい黄橙色や褐色の粘土との混土で、I II—69ピットの最下層と似るものである。埋土の中に礫が多量に入っているが、北東壁寄りが高く南西にむかって底面に近づくように入っているものである。底面に入っているのはわずかである。

壁高は、北壁で1.1mある。底面は八戸火山灰層で、北西部に段状に平坦部分があるほかは、

a. I I-63ピット

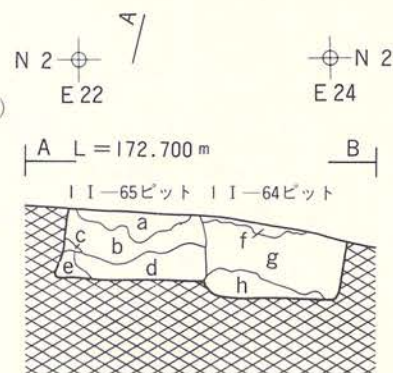
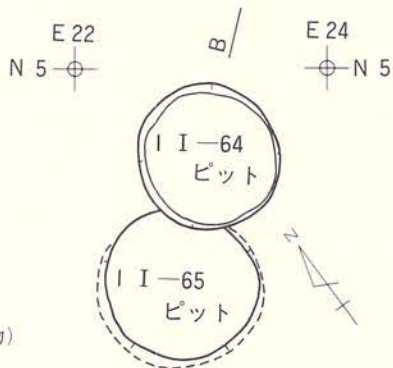


- a. 7.5Y R2/3 極暗褐色土 (含南部浮石15%)
- b. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石5%)
- c. 7.5Y R3/1 黒褐色土 (含南部浮石10%・炭化物)
- d. 7.5Y R3/3 暗褐色土 (含南部浮石3%)
- e. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石3%)
- f. 7.5Y R1.7/1 黒色土 (含南部浮石7%)

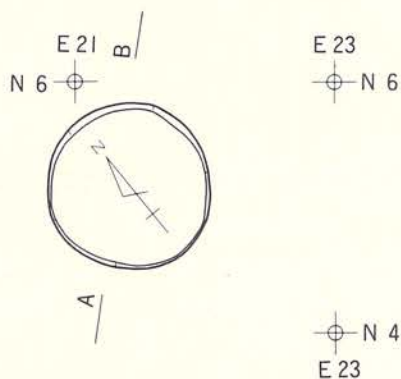
I I-64・65ピット

- a. 10Y R2/3 黒褐色土 (含南部浮石3%)
- b. 10Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石3%・10Y R3/3暗褐色土・焼土)
- c. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石3%)
- d. 10Y R2/3 黒褐色土 (含南部浮石10%・炭化物)
- e. 10Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石10%)
- f. 10Y R3/4 暗褐色土 (含南部浮石2%)
- g. 10Y R2/1 黒色土 (含南部浮石10%・炭化物)
- h. 10Y R3/3 暗褐色土 (含南部浮石15%)

b. I I-64・65ピット

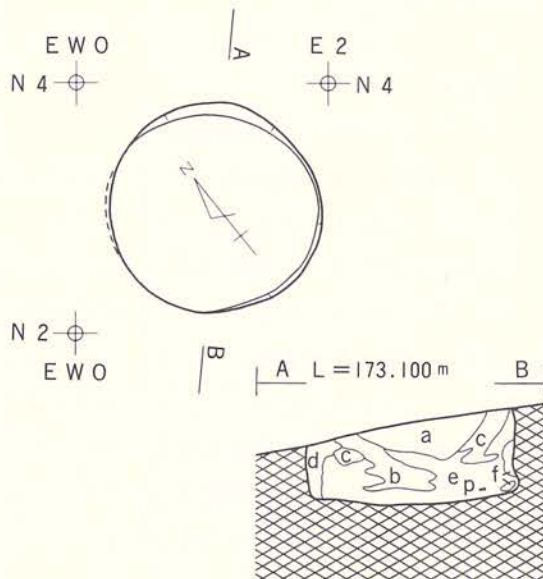


c. I I-66ピット



- a. 10Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石7%)
- b. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石2%)
- c. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石7%・炭化物)
- d. 10Y R2/1 黒色土 (含南部浮石2%)

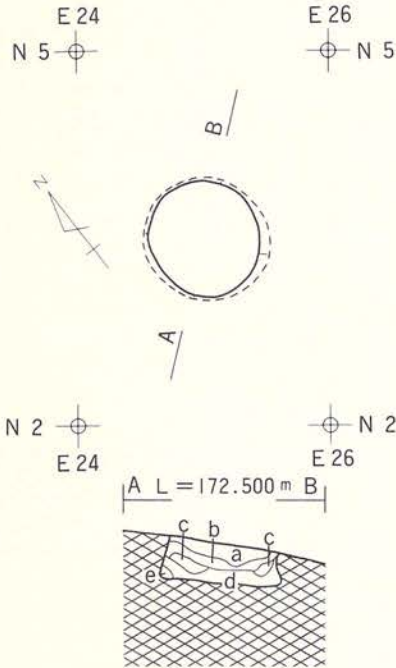
d. I I-67ピット



- a. 7.5Y R3/2 黒褐色土 (含南部浮石15%)
- b. 7.5Y R2/3 極暗褐色土 (含南部浮石10%)
- c. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石3%)
- d. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石7%)
- e. 7.5Y R3/1 黒褐色土 (含南部浮石7%)
- f. 7.5Y R3/4 暗褐色土 (含南部浮石3%)

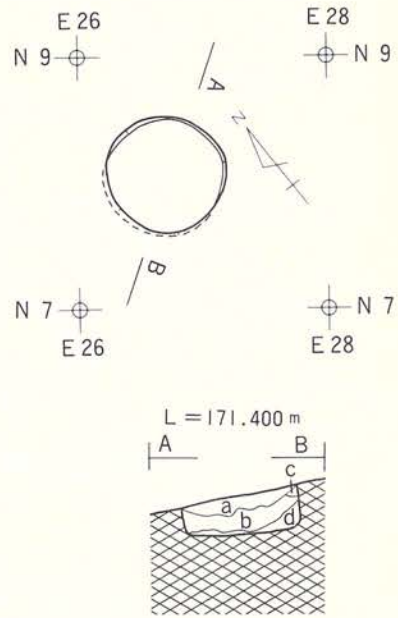
第122図 I I-63・64・65・66・67ピット (平・断面 $S = \frac{1}{60}$)

a. I I-68ピット



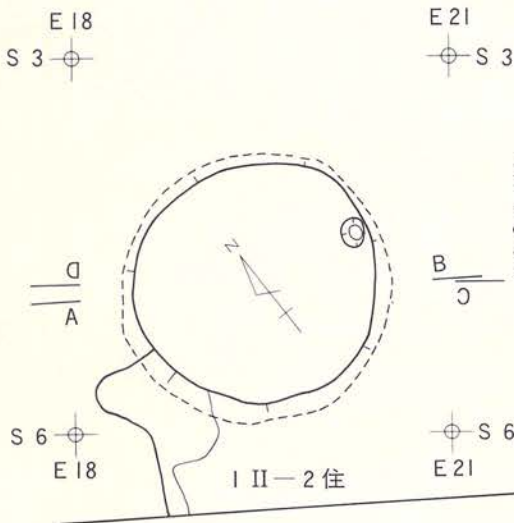
- a. 10Y R2/3 黒褐色土 (含南部浮石 5%)
- b. 10Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石 3%)
- c. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石 7%)
- d. 7.5Y R3/2 黒褐色土 (含南部浮石 7%)
- e. 10Y R3/2 黒褐色土 (含南部浮石 3%)

b. I I-69ピット



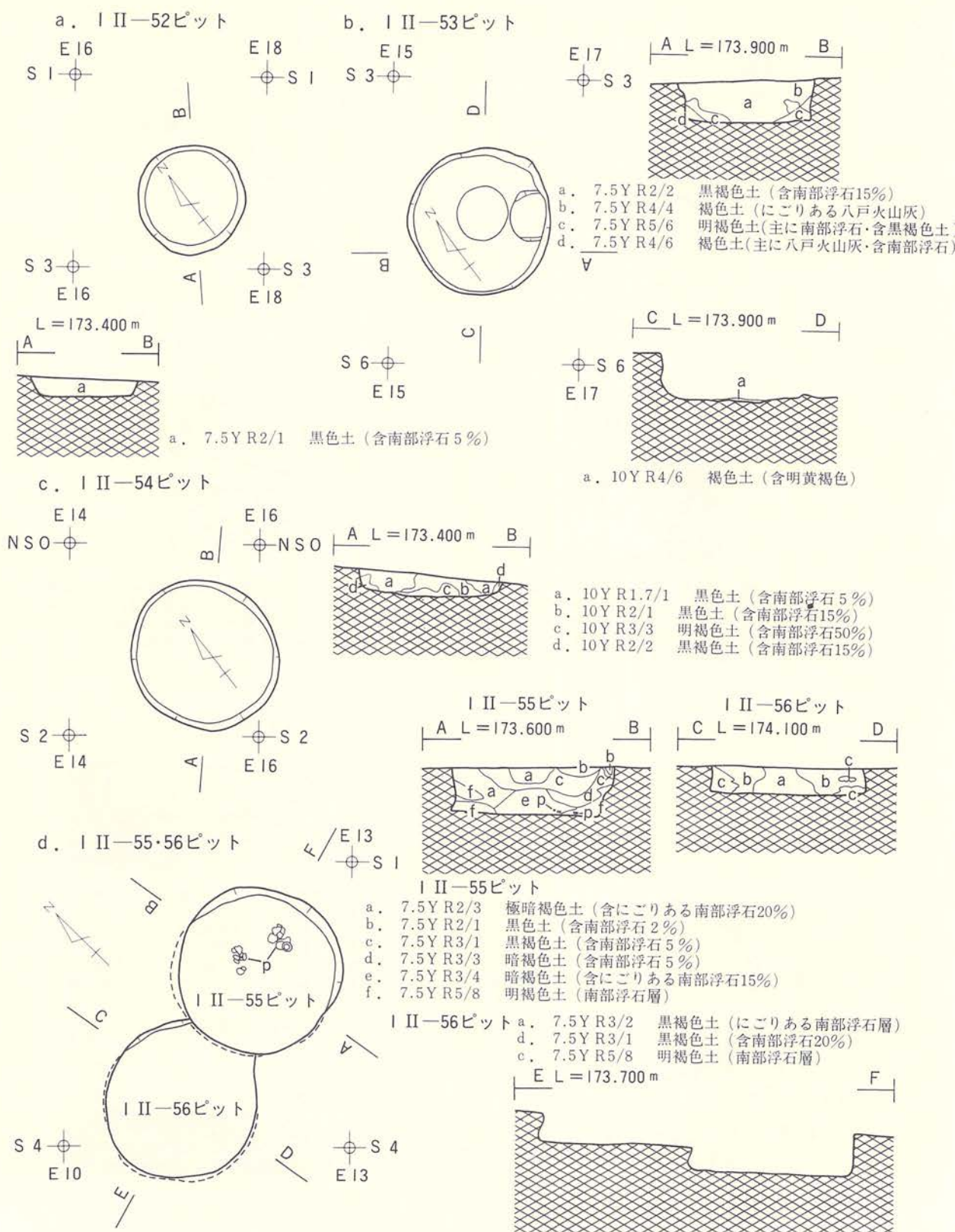
- a. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石 3%・炭化物)
- b. 10Y R2/1 黒色土 (含南部浮石 2%・炭化物)
- c. 10Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石 1%)
- d. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石 3%)

c. I II-51ピット



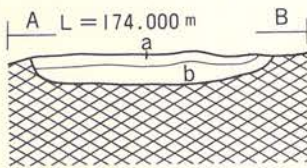
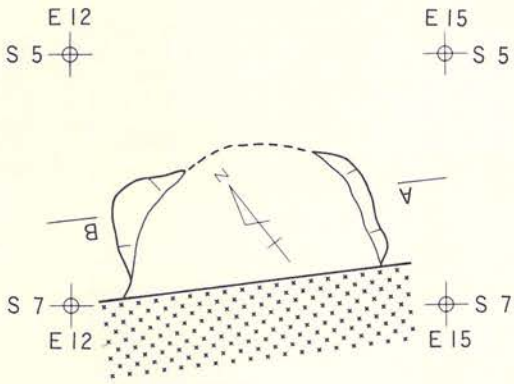
- a. 7.5Y R3/2 黒褐色土 (含焼土・南部浮石・褐色土)
- b. 7.5Y R2/1 黒色土
- c. 7.5Y R3/3 暗褐色土 (含南部浮石)
- d. 7.5Y R5/8 明褐色土 (南部浮石)
- e. 7.5Y R4/6 褐色土 (にごりある八戸火山灰層)
- f. 7.5Y R4/4 褐色土 (主によごれた八戸火山灰含南部浮石 2%)

第123図 I I-68・69・I II-51ピット(平・断面 $S = \frac{1}{60}$)



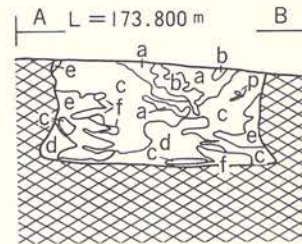
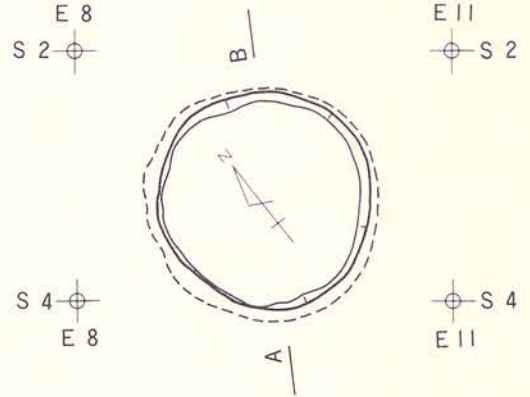
第124図 I II-52・53・54・55・56ピット (平・断面 $S = \frac{1}{60}$)

a. I II—57ピット



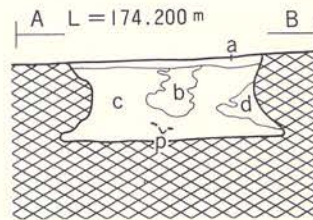
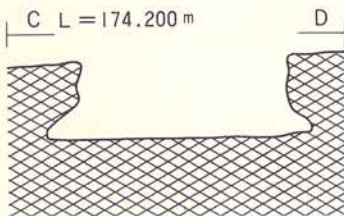
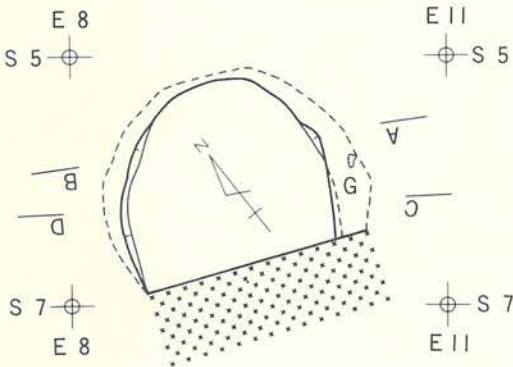
- a. 10Y R2/3 黒褐色土 (耕作土)
- b. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石 5%)

b. I II—58ピット



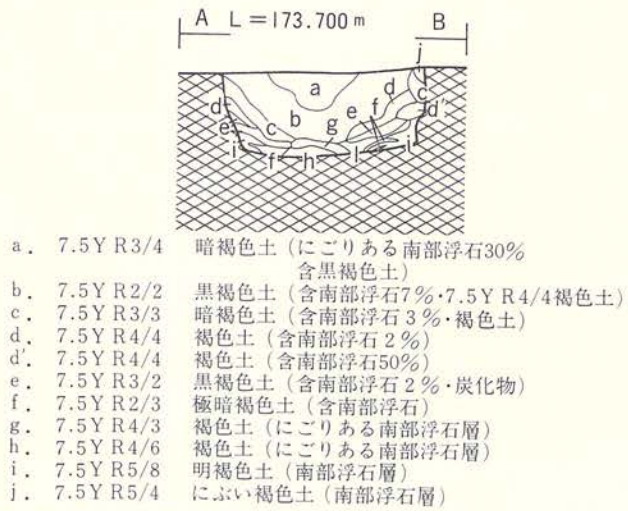
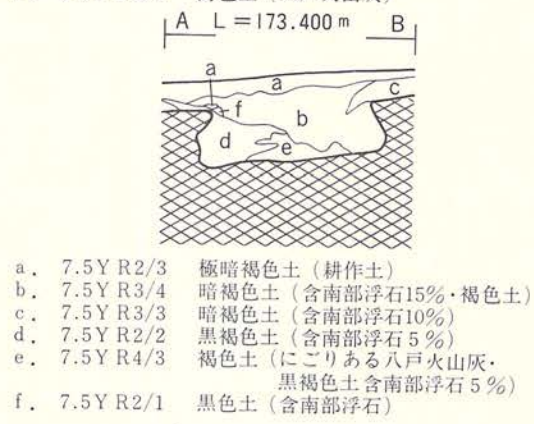
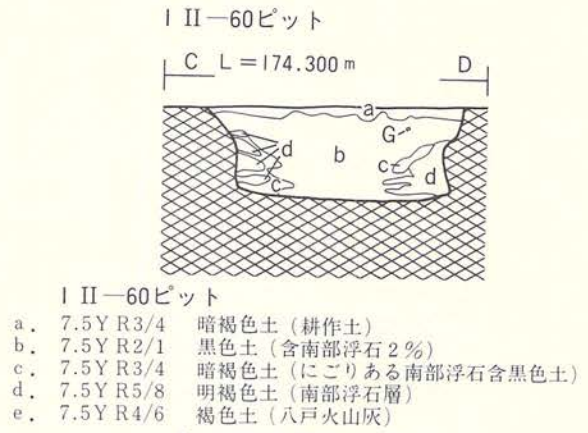
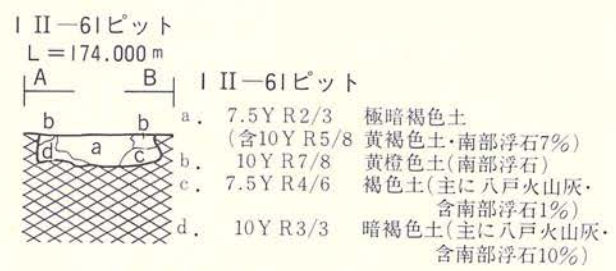
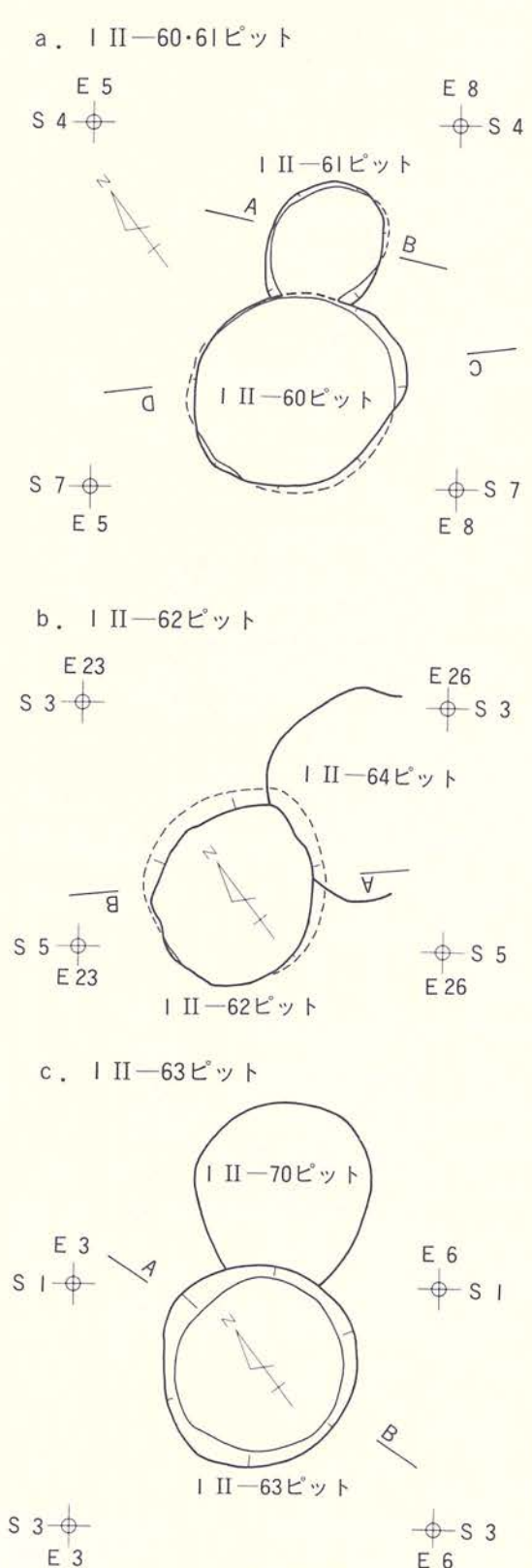
- a. 7.5Y R3/4 暗褐色土 (含南部浮石 2%)
- b. 7.5Y R4/6 褐色土 (含南部浮石 2%)
- c. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石上位 5%)
- d. 7.5Y R4/4 褐色土 (含南部浮石 2%)
- e. 7.5Y R5/8 明褐色土 (南部浮石層)
- f. 7.5Y R3/3 暗褐色土 (にごりある八戸火山灰含南部浮石15%)

c. I II—59ピット



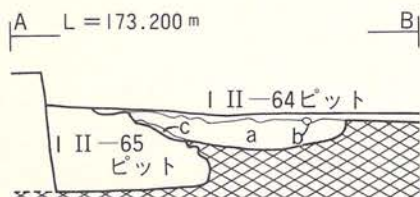
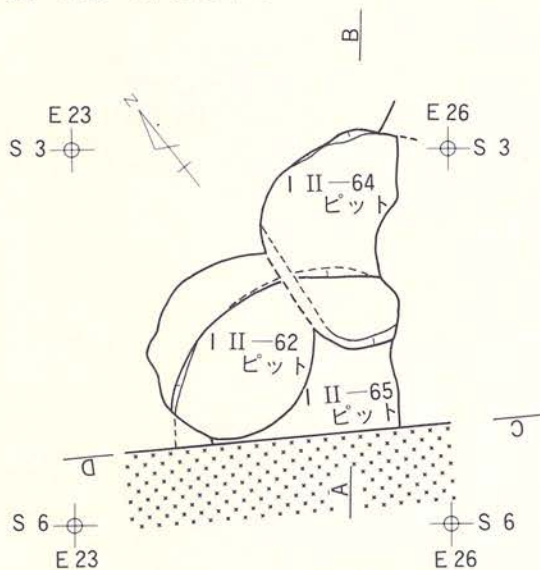
- a. 7.5Y R3/4 暗褐色土 (耕作土)
- b. 7.5Y R4/4 褐色土 (含南部浮石 5%・黒色土)
- c. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石 2%)
- d. 7.5Y R4/6 褐色土 (南部浮石層)

第125図 I II—57・58・59ピット (平・断面 S = 1/60)



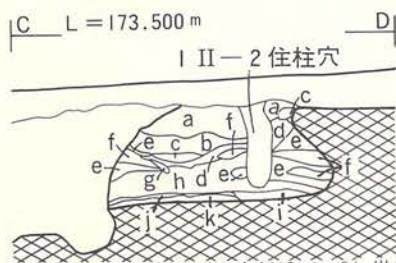
第126図 I II-60・61・62・63ピット(平・断面 S=1/60)

a. I II-64・65ピット



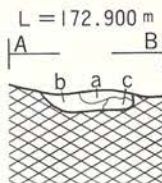
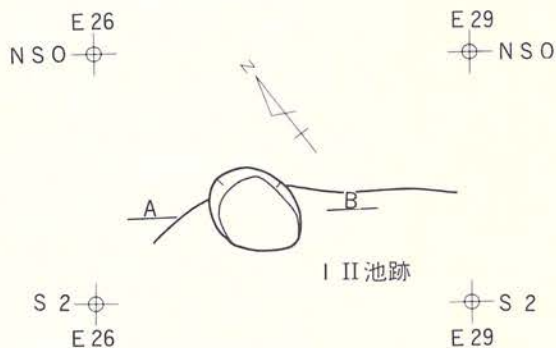
- I II-64ピット
- a. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石7%・暗褐色土)
 - b. 10Y R5/8 黄褐色土 (主に八戸火山灰・含南部浮石)
 - c. 10Y R3/4 暗褐色土 (含南部浮石10%・八戸火山灰)

I II-65ピット



- a. 10Y R2/3 黒褐色土 (含南部浮石3%・炭化物少量)
- b. 10Y R3/4 暗褐色土 (含南部浮石7%)
- c. 10Y R6/8 明黄褐色土 (南部浮石層)
- d. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石5%)
- e. 10Y R4/6 褐色土 (含南部浮石1%)
- f. 7.5Y R6/8 橙色土 (主に南部浮石層・含7.5Y R3/4暗褐色土)
- g. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石少量)
- h. 10Y R6/6 明黄褐色土 (主に南部浮石層・含10Y R2/3黒褐色土)
- i. 10Y R2/1 黒色土 (含南部浮石3%)
- j. 7.5Y R2/3 極暗褐色土 (含南部浮石1%)
- k. 7.5Y R3/3 暗褐色土 (含南部浮石3%)

b. I II-66ピット



- a. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石5%・炭化物)
- b. 7.5Y R 明褐色土 (主に南部浮石層・含7.5Y R2/3極暗褐色土)
- c. 7.5Y R2/3 極暗褐色土 (含南部浮石10%)

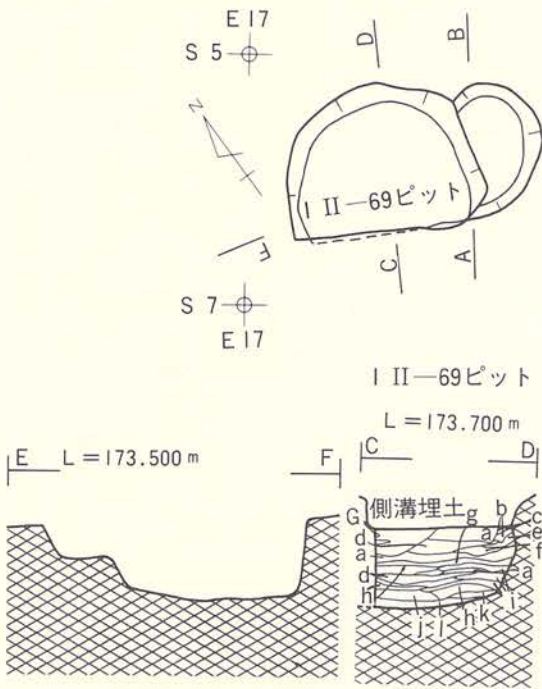
c. I II-67ピット

- a. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (主に表土・含南部浮石2%・炭化物)
- b. 10Y R3/4 暗褐色土 (含南部浮石5%)
- c. 7.5Y R2/3 極暗褐色土 (含南部浮石7%)

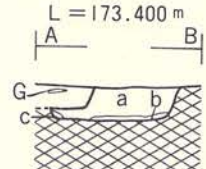


第127図 I II-65・66・67ピット (平・断面 S = 1/60)

a. I II-68・69ピット



I II-68ピット

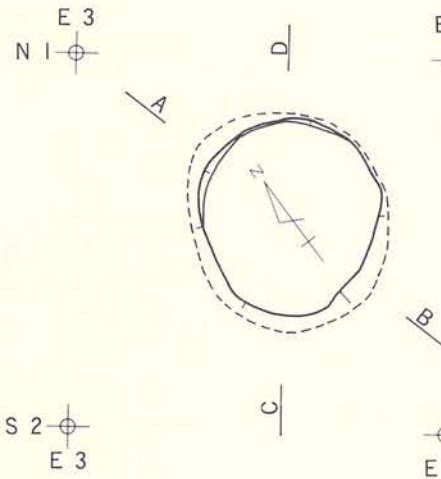


- a. 7.5Y R3/3 暗褐色土 (含南部浮石・八戸火山灰・炭化物)
- b. 10Y R4/4 褐色土 (含南部浮石2%・暗褐色・黄褐色土)
- c. 10Y R3/4 暗褐色土 (含南部浮石1%)

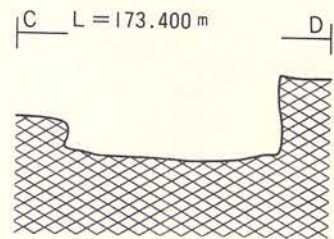
I II-69ピット

- a. 7.5Y R3/3 暗褐色土 (含南部浮石5%, 10Y R4/6褐色土)
- b. 10Y R4/4 褐色土 (含南部浮石1%)
- c. 10Y R5/8 黄褐色土 (南部浮石層)
- d. 10Y R3/4 暗褐色土 (含南部浮石2%)
- e. 10Y R3/3 暗褐色土 (含南部浮石15%)
- f. 10Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石5%・10Y R4/4褐色土)
- g. 7.5Y R5/6 明褐色土 (主に南部浮石層・含7.5Y R3/3暗褐色土)
- h. 7.5Y R4/3 褐色土 (含南部浮石7%)
- i. 7.5Y R3/2 黒褐色土 (含南部浮石15%)
- j. 10Y R6/4 にぶい黄橙色土 (含南部浮石2%・7.5Y R6/4にぶい橙色土)
- k. 7.5Y R5/6 明褐色土 (含南部浮石2%)
- l. 7.5Y R3/4 暗褐色土 (含南部浮石2%・7.5Y R5/6明褐色土)

b. I II-70ピット

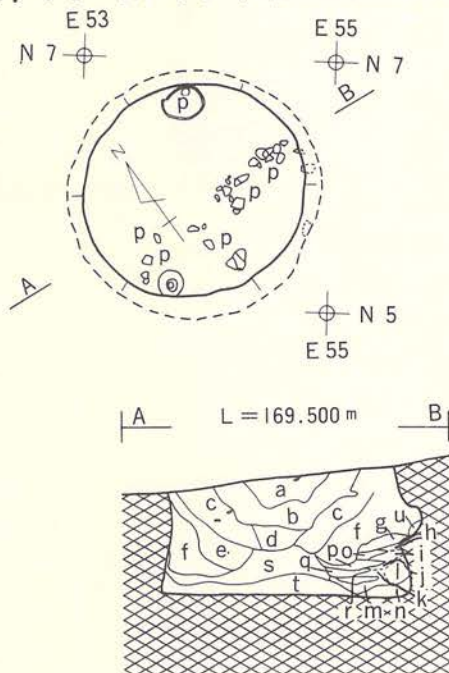


- a. 7.5Y R2/3 極暗褐色土 (にこりある南部浮石層)
- b. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石7%)
- c. 7.5Y R4/1 褐色土 (灰)
- d. 7.5Y R3/1 黒褐色土 (含南部浮石5%・炭化物・焼土・褐色土)
- e. 7.5Y R3/2 黒褐色土 (含にこりある南部浮石50%・褐色土)
- f. 10Y R4/6 褐色土 (主に八戸火山灰・含南部浮石)
- g. 7.5Y R1.7/1 黒色土 (含焼土粒)
- h. 5Y R4/4 にぶい赤褐色土 (焼土)
- i. 7.5Y R3/4 暗褐色土 (南部浮石)
- j. 7.5Y R5/8 明褐色土 (南部浮石層)



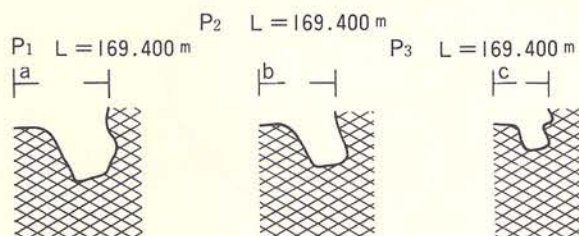
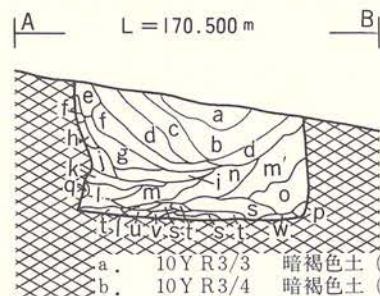
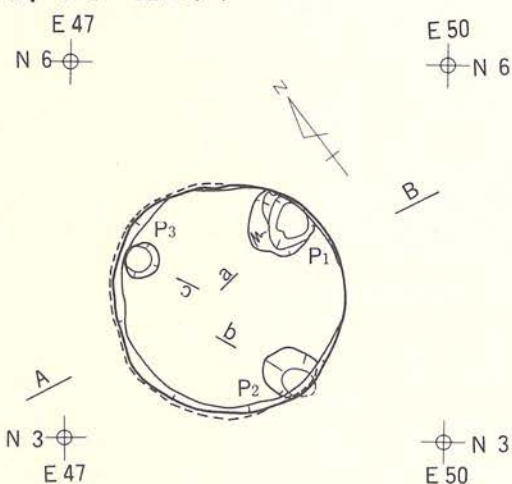
第128図 I II-68・69・70ピット (平・断面 $S = \frac{1}{60}$)

a. J I—51ピット (土器出土状況及び完掘り状況)



- a. 7.5Y R3/1 黒褐色土 (含南部浮石15%)
- b. 7.5Y R3/1 黒褐色土 (含南部浮石30%)
- c. 7.5Y R1.7/1 黒色土 (含南部浮石3%)
- d. 10Y R2/1 黒色土 (含南部浮石20%)
- e. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石3%)
- f. 7.5Y R3/1 黒褐色土 (含南部浮石2%)
- g. 7.5Y R4/3 褐色土 (含南部浮石1%)
- h. 7.5Y R5/6 明褐色土 (主に南部浮石層・含7.5Y R4/6褐色土)
- i. 7.5Y R5/6 明褐色土 (主に南部浮石層・含7.5Y R4/6褐色土)
- j. 7.5Y R5/6 明褐色土 (主に南部浮石層・含7.5Y R4/6褐色土)
- k. 7.5Y R5/6 明褐色土 (主に南部浮石層・含7.5Y R4/3褐色土)
- l. 7.5Y R5/8 明褐色土 (南部浮石層)
- m. 7.5Y R5/6 明褐色土 (主に南部浮石層・含7.5Y R3/3暗褐色土)
- n. 7.5Y R5/6 明褐色土 (主に南部浮石層・含7.5Y R3/2黒褐色土)
- o. 7.5Y R6/8 橙色土 (南部浮石層)
- p. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石)
- q. 7.5Y R3/2 黒褐色土 (含南部浮石2%)
- r. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石2%)
- s. 7.5Y R2/3 極暗褐色土 (含南部浮石1%)
- t. 10Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石30%)
- u. 10Y R2/3 黒褐色土 (含南部浮石40%)

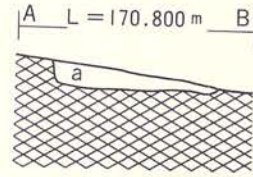
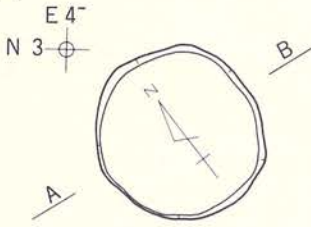
b. J I—52ピット



第129図 J I—51・52ピット (平・断面 S = 1/60)

- a. 10Y R3/3 暗褐色土 (含南部浮石15%)
- b. 10Y R3/4 暗褐色土 (含南部浮石15%)
- c. 10Y R3/2 黒褐色土 (含南部浮石15%)
- d. 10Y R2/3 黒褐色土 (含南部浮石10%)
- e. 10Y R4/4 褐色土 (南部浮石上部層)
- f. 10Y R2/1 黒色土 (含南部浮石5%)
- g. 10Y R3/3 暗褐色土 (含南部浮石風化土起源)
- h. 10Y R2/3 黒褐色土 (含南部浮石7%)
- i. 10Y R3/2 黒褐色土 (含南部浮石7%)
- j. 10Y R3/2 黒褐色土 (含南部浮石15%)
- k. 7.5Y R5/8 明褐色土 (南部浮石)
- l. 10Y R3/1-3/2 黒褐色土 (南部浮石風化土起源)
- m. 10Y R4/6 褐色土
- n. 10Y R5/6 黄褐色土 (南部浮石)
- o. 10Y R2/1 黒色土 (含南部浮石10%)
- p. 10Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石10%)
- q. 10Y R3/2 黒褐色土 (含南部浮石15%)
- r. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石5%)
- s. 10Y R4/4 褐色土 (南部浮石)
- t. 10Y R2/1 黒色土 (八戸火山灰上部層起源)
- u. 10Y R4/6 褐色土 (八戸火山灰起源)
- v. 10Y R3/4 暗褐色土 (含南部浮石50%)
- w. 10Y R2/3 黒褐色土 (八戸火山灰上部層)
- x. 10Y R2/3 黒褐色土 (r層とs層の混合)
- y. 10Y R2/3 黒褐色土 (r層とt層の混合)
- z. 10Y R3/1 黒褐色土 (南部浮石風化土起源)

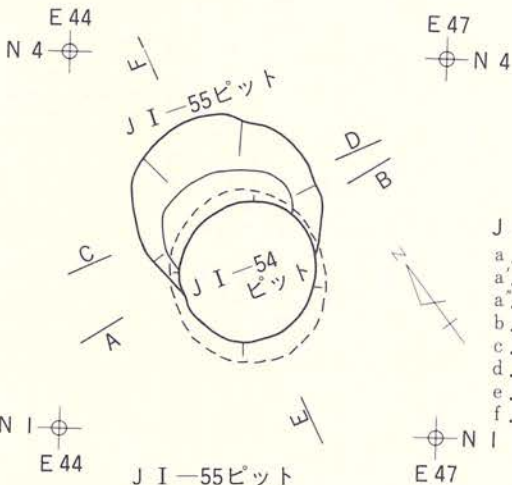
a. J I—53ピット



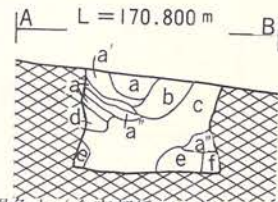
a. 7.5Y R2/3 極暗褐色土 (含南部浮石 3%)



b. J I—54・55ピット



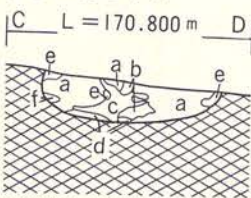
J I—54ピット



J I—54ピット

- a. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石 2%)
- a'. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石 5%)
- a''. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石 5%)
- b. 7.5Y R4/2 灰褐色土 (含南部浮石 7%・7.5Y R3/2黒褐色土)
- c. 7.5Y R3/1 黒褐色土 (含南部浮石 3%)
- d. 7.5Y R6/8 橙色土 (主に南部浮石層含7.5Y R2/2黒褐色土)
- e. 7.5Y R3/3 暗褐色土 (含南部浮石50%)
- f. 7.5Y R4/3 褐色土

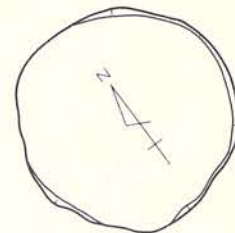
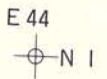
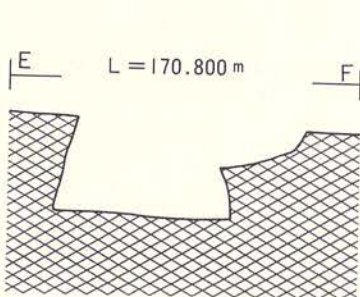
J I—55ピット



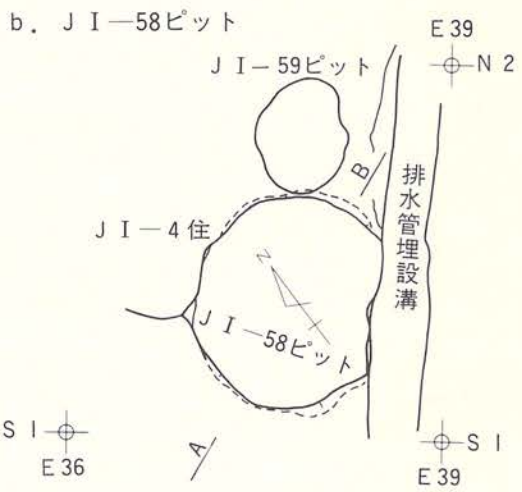
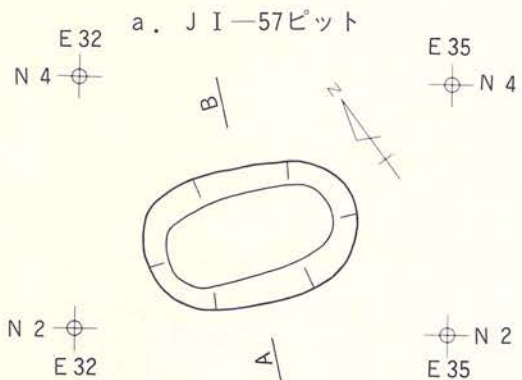
J I—55ピット

- a. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石 2%)
- b. 7.5Y R2/3 極暗褐色土 (含南部浮石 2%)
- c. 7.5Y R3/4 暗褐色土 (含南部浮石 7%)
- d. 7.5Y R3/3 暗褐色土 (含南部浮石 2%)
- e. 7.5Y R4/3 褐色土
- f. 7.5Y R5/8 明褐色土 (南部浮石含黒褐色土)

c. J I—56ピット

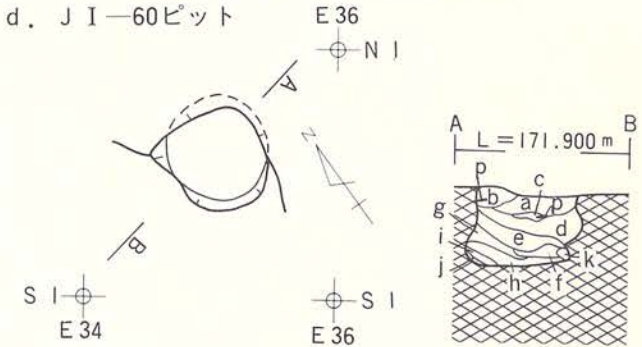
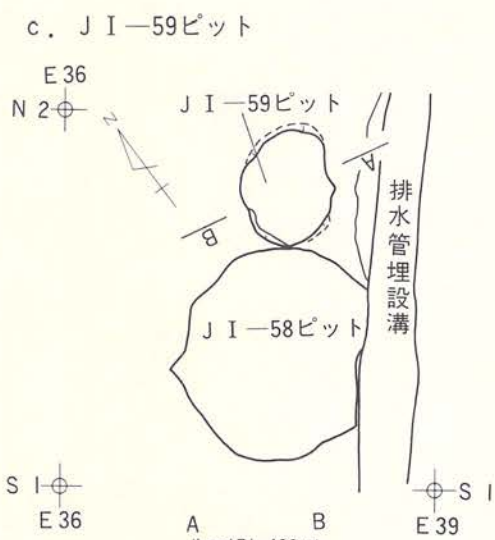


第130図 J I—53・54・55・56ピット (平・断面 S = 1/60)



- a. 7.5Y R2/3 極暗褐色土 (含南部浮石7%)
- b. 7.5Y R3/2 黒褐色土 (含南部浮石左側40%・他10%)
- c. 7.5Y R5/6 明褐色土 (南部浮石層起源)
- d. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石1%)
- e. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石5%)
- f. 7.5Y R4/6 褐色土 (南部浮石層起源)
- g. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石壁寄り15%)

- a. 10Y R3/3 暗褐色土 (含南部浮石15%)
- b. 10Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石7%)
- c. 10Y R3/4 暗褐色土 (主に八戸火山灰混合土含南部浮石10%)
- d. 10Y R5/8 黄褐色土 (主に八戸火山灰土含南部浮石10%)
- e. 10Y R2/1 黒色土 (含八戸火山灰・南部浮石10%)
- f. 10Y R4/6 褐色土 (主に八戸火山灰含南部浮石10%)
- f'. 10Y R4/6 褐色土 (主に八戸火山灰含南部浮石20%)
- f''. 10Y R4/6 褐色土 (主に八戸火山灰含南部浮石20%)
- g. 10Y R2/3 黒褐色土 (含南部浮石7%)
- h. 10Y R2/2 黒褐色土 (主に八戸火山灰混合土含南部浮石2%)
- i. 10Y R3/2 黒褐色土 (含南部浮石5%)

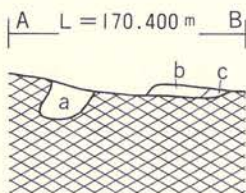
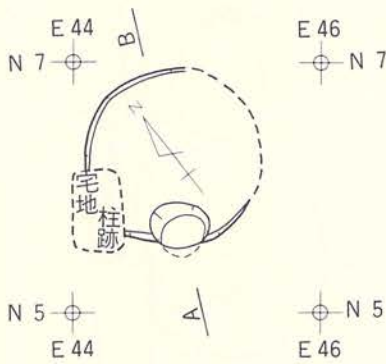


- a. 7.5Y R2/3 極暗褐色土 (含南部浮石5%)
- b. 10Y R5/8 黄褐色土 (含南部浮石少量)
- c. 7.5Y R3/4 明褐色土 (J I-4 住周溝埋土)

- a. 10Y R3/4 暗褐色土 (含南部浮石15%・炭化物・黒褐色土)
- b. 10Y R2/1 黒色土 (含南部浮石3%)
- c. 10Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石3%)
- d. 10Y R6/8 明黄褐色土 (南部浮石層含10Y R2/2 黒褐色土)
- e. 10Y R5/8 黄褐色土 (含南部浮石3%)
- f. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石1%)
- g. 10Y R3/3 暗褐色土 (含南部浮石5%)
- h. 10Y R4/4 褐色土 (含南部浮石3%)
- i. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石2%)
- j. 10Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石2%)
- k. 10Y R6/4 にぶい黄橙色土 (含南部浮石少量)

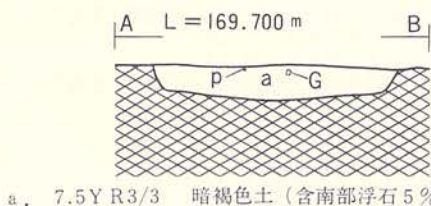
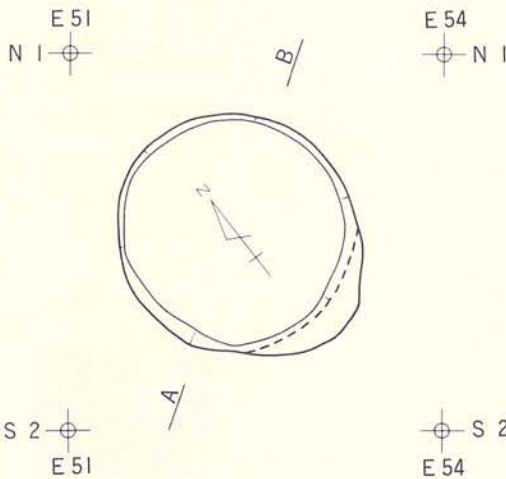
第131図 J I-57・58・59・60ピット (平・断面 S = 1/60)

a. J I-61ピット



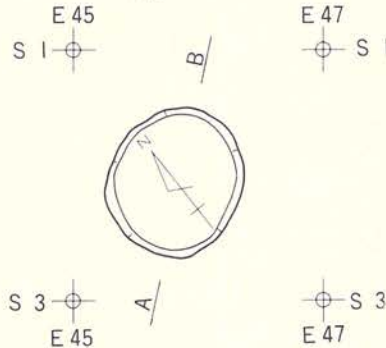
- a. 10Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石 3%)
- b. 10Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石 5%)
- c. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石 2%)

c. J II-52ピット



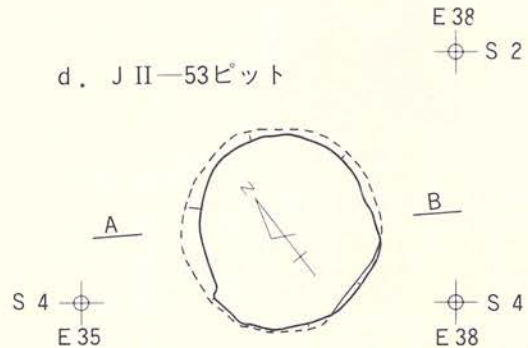
- a. 7.5Y R3/3 暗褐色土 (含南部浮石 5%)

b. J II-51ピット



- a. 10Y R4/4 褐色土 (主に八戸火山灰起源含南部浮石 5%)
- 10Y R5/4 にふい黄褐色土 (八戸火山灰起源)
- 10Y R3/3 暗褐色土 (含南部浮石)
- 3つの混合土

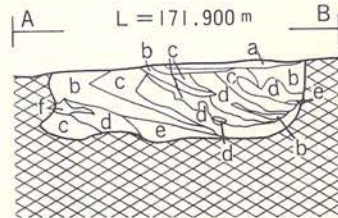
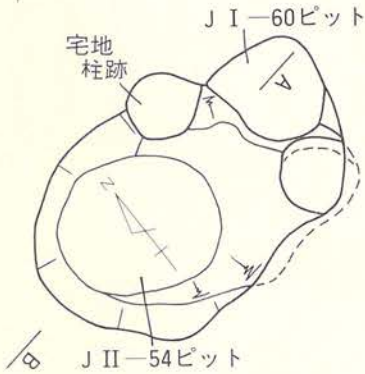
d. J II-53ピット



- a. 7.5Y R4/3 褐色土 (含南部浮石 10%)
- b. 10Y R4/4 褐色土 (含南部浮石 7%)
- c. 7.5Y R3/3 暗褐色土 (含南部浮石 7%)
- d. 7.5Y R3/2 黒褐色土 (含南部浮石 30%・炭化物)
- e. 10Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石 7%・炭化物)
- f. 10Y R6/6 明黄褐色土 (上部に2.5Y R7/6明黄褐色土)
- g. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石 7%)
- h. 10Y S3/3 暗褐色土 (含南部浮石 20%・炭化物)
- i. 10Y R2/3 黒褐色土 (含南部浮石 15%)
- j. 10Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石 5%)
- k. 10Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石 5%・にふい黄橙色土・にふい黄褐色土 (含南部浮石 10%) 黄橙色土)
- l. 10Y R5/4 にふい黄褐色土 (含南部浮石 3%)
- m. 10Y R4/3 にふい黄褐色土 (含南部浮石 15%)
- n. 7.5Y R6/6 橙色土
- n. 10Y R6/4 にふい黄褐色土
- o. 7.5Y R5/6 明褐色土
- o. 7.5Y R5/6 明褐色土 (含3/3暗褐色土)
- p. 7.5Y R6/6 橙色土 (含南部浮石 5%・4/2灰褐色土)
- q. 7.5Y R6/4 にふい橙色土
- r. 5Y R5/6 明赤褐色土 (含7.5Y R5/4にふい褐色土)
- s. 10Y R7/4 にふい黄褐色土
- t. 7.5Y R4/2 灰褐色土 (含南部浮石 15%)

第132図 J I-61・J II-51・52・53ピット (平・断面 S = 1/60)

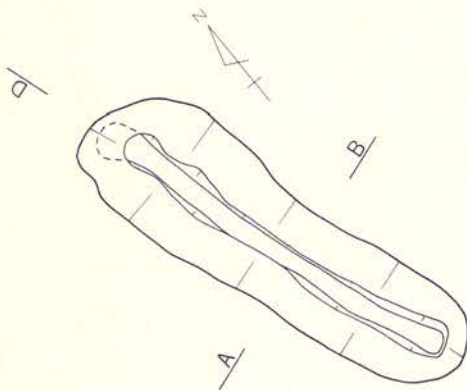
a. J II-54ピット



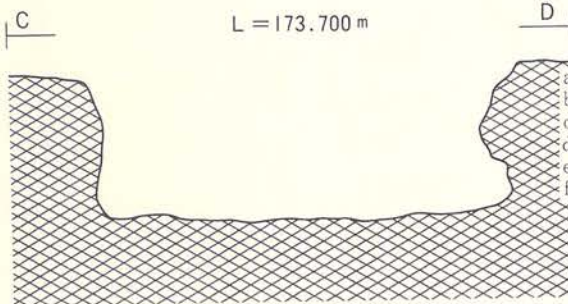
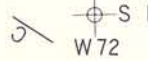
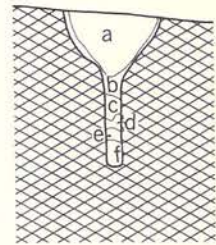
- | | | |
|----|-----------|----------------------------------|
| a. | 10Y R5/8 | 黄褐色土 (含南部浮石5%・10Y R2/2 黒褐色土・炭化物) |
| b. | 7.5Y R2/2 | 黒褐色土 (含南部浮石10%・10Y R4/4 褐色土・炭化物) |
| c. | 10Y R4/1 | 褐灰色土 |
| d. | 10Y R4/6 | 褐色土 (含南部浮石3%) |
| e. | 10Y R6/4 | にぶい黄橙色土 |
| f. | 10Y R6/8 | 明黄褐色土 (南部浮石層) |



b. F I-101陥し穴状遺構

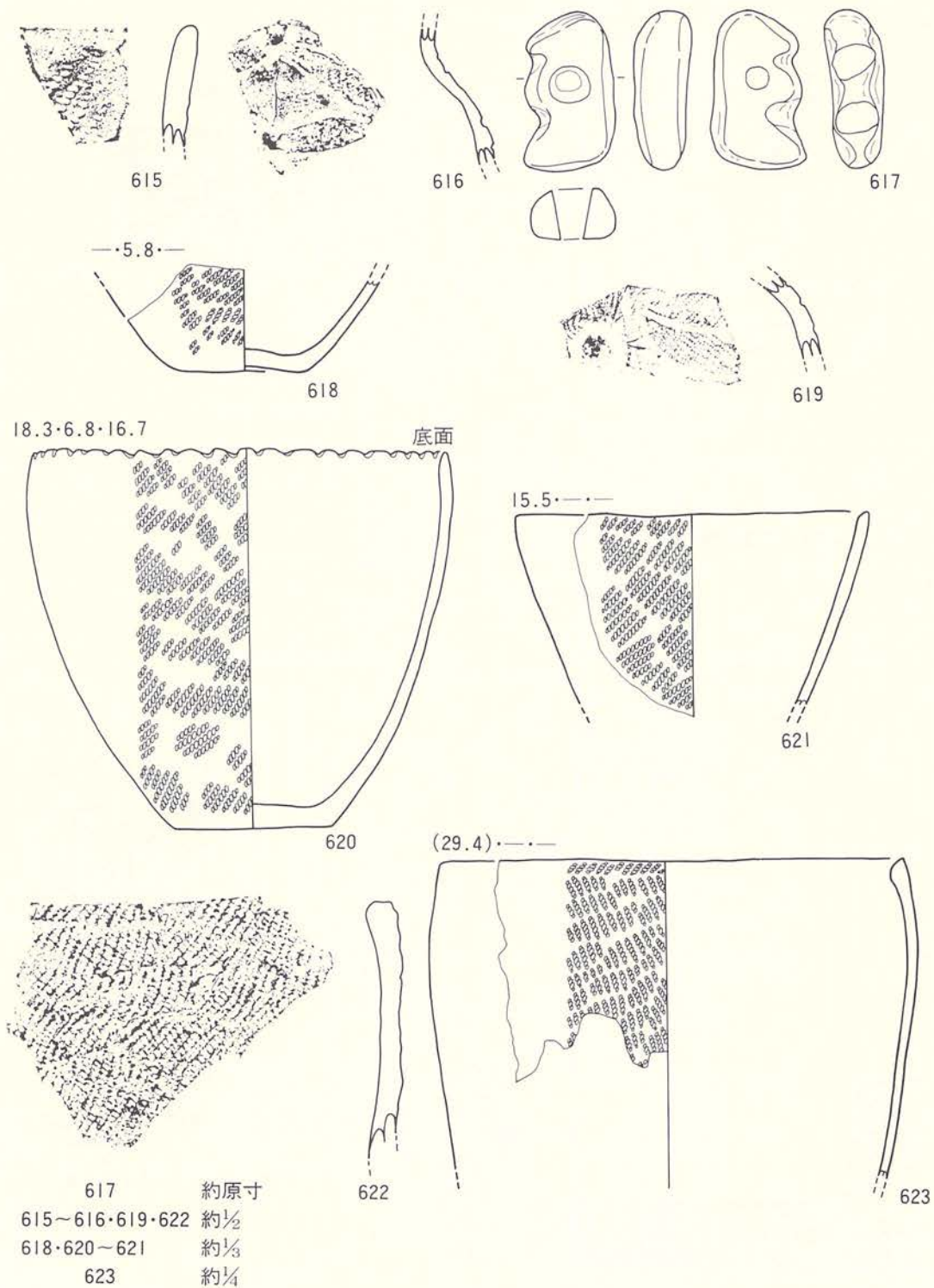


A L = 173.700 m B

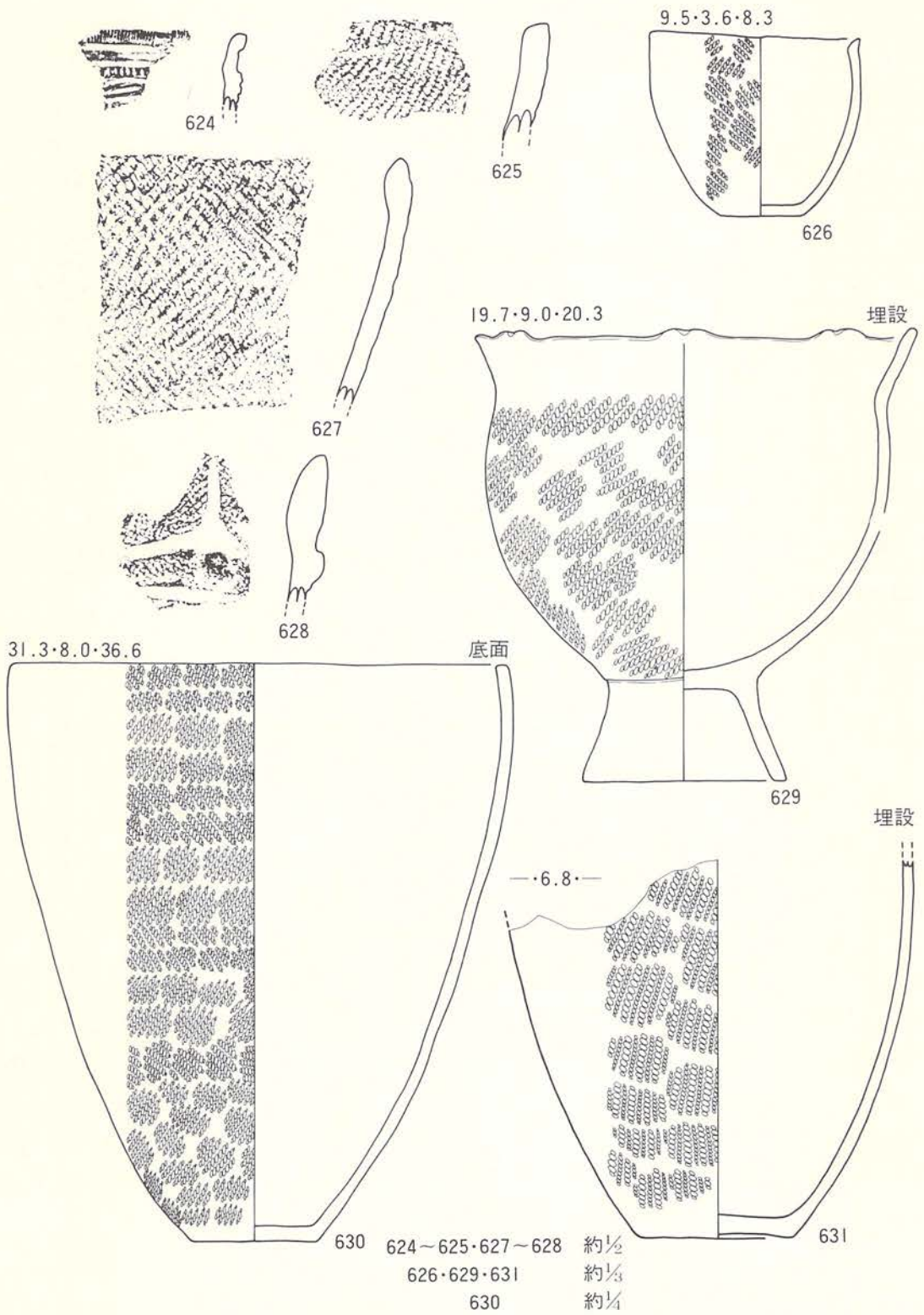


- | | | |
|----|-----------|----------------------|
| a. | 7.5Y R2/1 | 黒色土 (含南部浮石5%) |
| b. | 7.5Y R5/8 | 明褐色土 (南部浮石層) |
| c. | 7.5Y R3/2 | 黒褐色土 (南部浮石・八戸火山灰混成土) |
| d. | 7.5Y R5/6 | 明褐色土 (にごりある南部浮石) |
| e. | 7.5Y R2/3 | 極暗褐色土 (にごりある八戸火山灰) |
| f. | 10Y R5/6 | 黄褐色土 (にごりある粘土層) |

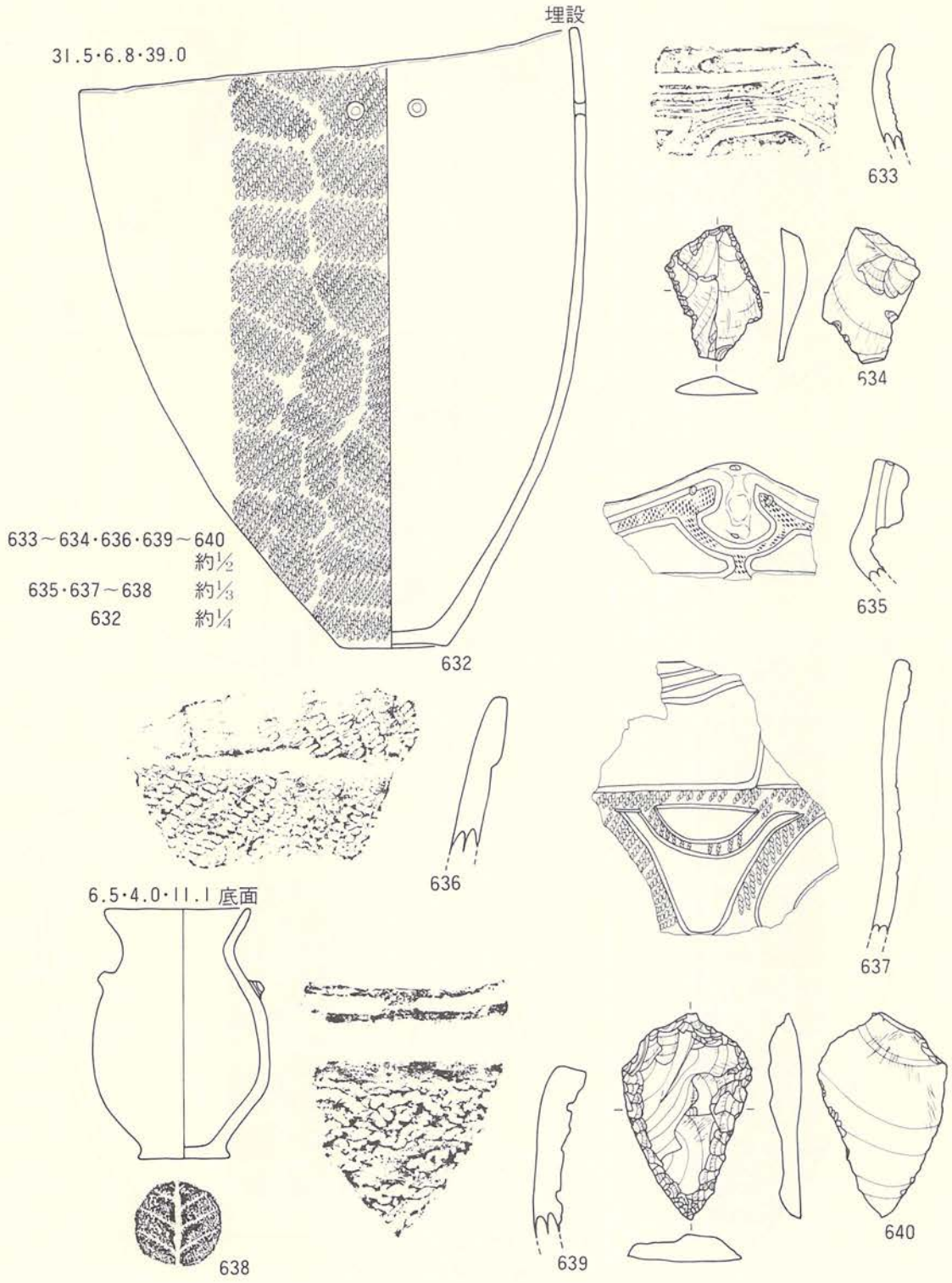
第133図 J II-54ピット・F I-101陥し穴状遺構(平・断面 S = 1/60)



第134図 I I -62・65・67・69・I II -55・58ピット出土遺物(遺物番号615~623)



第135図 I II-63・70・J I-51ピット出土遺物(遺物番号624~631)



第136図 J I - 51・52・60・J II - 54ピット出土遺物(遺物番号632~640)

大きな凹凸がある。

この遺構に伴うと思われる遺物は出土していない。

8. 配石遺構

G I 配石遺構

遺構（第138図、写真図版82）

この遺構は第IV層面に検出されたもので、南北に長軸をもつ。規模は長軸145cm・短軸55cmで、大小のチャート・石英・頁岩・砂岩・硬質砂岩を敷き詰めているものである。

9. 土器埋設遺構

G I 土器埋設遺構 No.1

遺構・遺物（第138・140図、写真図版82・157）

この遺構はG I 配石遺構の北側約1.5mの距離に検出されたものである。検出面は第IV層面で、埋設する際掘り込んだと思われる痕跡は認められない。

土器は641の深鉢形土器である。口縁部は内側に反る。原体は $L < \frac{R}{R}$ の単節斜縄文である。

G I 土器埋設遺構 No.2

遺構・遺物（第138・140図、写真図版83・157～158）

この遺構はG I 配石遺構から南西側に約6mの距離に検出されたものである。検出面は第IV層面で、埋設する際掘り込んだと思われる痕跡が認められる。埋設された土器の中には1個体分の土器が入っていた。

土器は642と643の深鉢形土器で643の中に642が入っていた。642の口唇部にはB状突起が配されている。原体はどちらも $R < \frac{L}{L}$ の単節斜縄文である。

I II 土器埋設遺構

遺構・遺物（第138・141図、写真図版83・158）

この遺構の検出面は第IV層である。埋設された土器底部は第V層にかかり、埋設する際掘り込んだと思われる痕跡が認められる。

土器は644の深鉢形土器である。原体は $L < \frac{R}{R}$ の単節斜縄文である。

J I 土器埋設遺構

遺構・遺物（第139・141図、写真図版83・158）

この遺構は、J I—6住居跡の東端部に、斜位に検出されたものである。検出面から22cmの

深さまで掘り込まれ、上向きに土器が埋設されている。土器内部と掘り込み部の埋土は、ほぼ同質で、炭化物を含みやわらかい黒色土である。また、土器内上位には数個の礫が入っているが、廃絶の際に入れたものであろうか。なお、この遺構は、J I—6 住居跡の床面レベルにあるが、住居跡の範囲が不明であり、住居跡に伴うものかどうかは不明である。

土器は645の深鉢形土器である。平底で、地文に単節斜縄文（ $L < \frac{R}{R}$ ）が施されている。体部下半が褐色を呈するが、上半は炭化物が付着している。

10. カマド跡

J II カマド跡

遺 構（第139図、写真図版85）

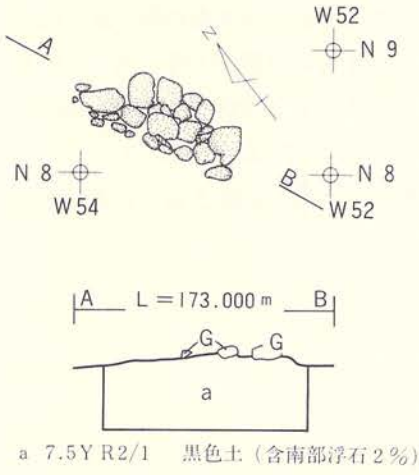
この遺構は国道端に位置し、南西半分が斜面状に残存し、北東半分の上部が宅地による削平を受けている。検出面は八戸浮石層である。

燃焼部と焚口部からなり、煙道及び煙出しは検出されていない。燃焼部は75×58cmの楕円形で潰れた状態を呈しており、かたい焼土が上下2層認められる。上位の焼土は明赤褐色で、下位は赤褐色である。中間は黄褐色系の埋土である。底面はほぼ平坦である。焚口部は燃焼部の南東側にあり、底部が75×70cmの方形を呈する。埋土は上位・下位とも褐色土で炭化物を含むが、下位はさらに焼土も含んでいる。深さは23cmで、底面は碗状を呈する。

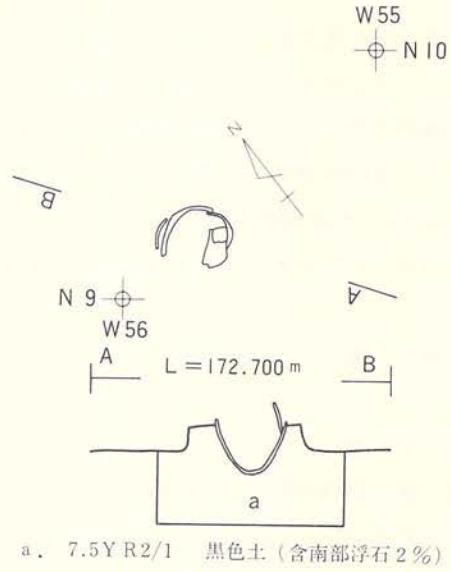
なお、燃焼部から北西側へ70cmほどが、厚さ約10cmに熱変化を受け硬化している。

この遺構に伴うと考えられる遺物は出土していない。

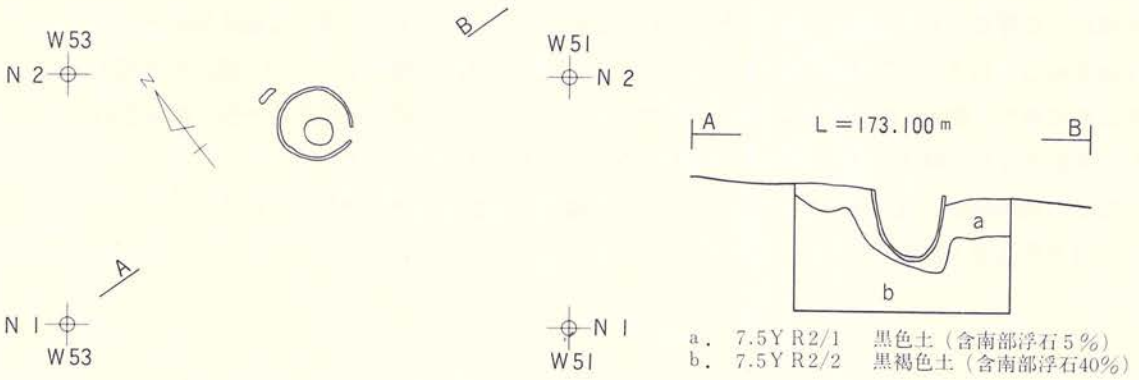
a. G I 配石遺構



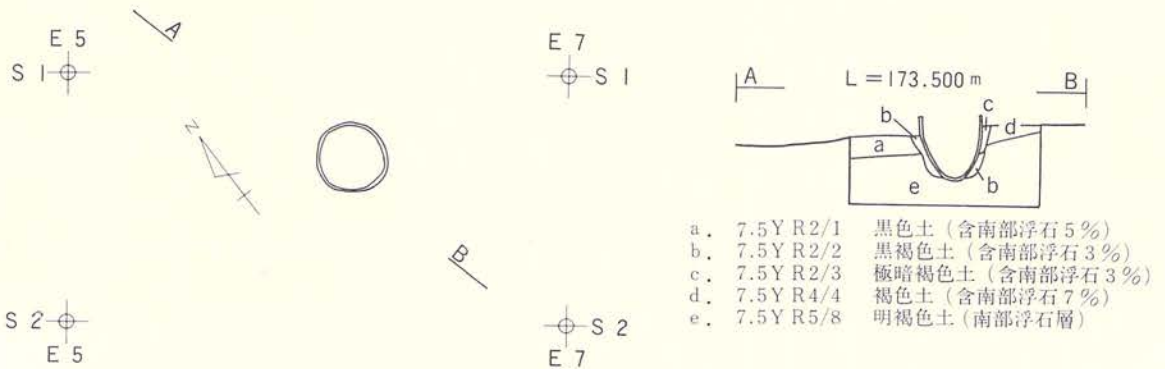
b. G I 土器埋設遺構No. 1



c. G I 土器埋設遺構No. 2

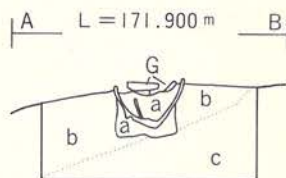
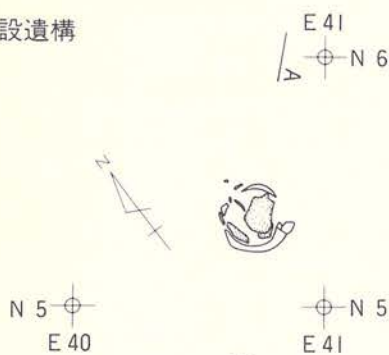


d. I II 土器埋設遺構



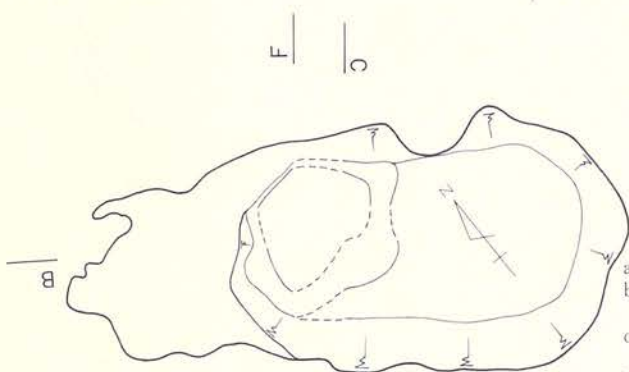
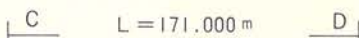
第138図 G I 配石遺構(平・断面 $S = \frac{1}{30}$) G I・I II 土器埋設遺構(平・断面 $S = \frac{1}{30}$)

a. J I 土器埋設遺構

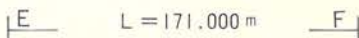
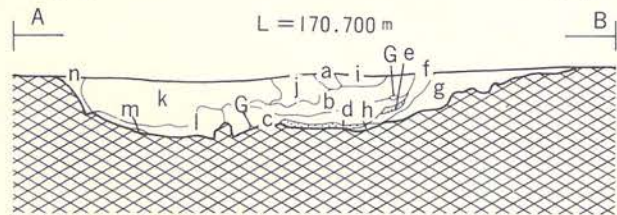


- a. 7.5Y R2/1 黒色土 (含南部浮石少量・炭化物少量)
- b. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石 3%)
- c. 7.5Y R2/3 極暗褐色土 (含南部浮石 5%)

b. J II カマド跡



- a. 7.5Y R5/8 明褐色土 (含南部浮石少量)
- b. 7.5Y R5/6 明褐色土 (含南部浮石 3%・炭化物微量)
- c. 7.5Y R5/4 にぶい褐色土 (含南部浮石 1%・炭化物微量)
- d. 5 Y R5/8 明赤褐色土 (焼土)
- e. 10Y R4/6 褐色土 (含南部浮石 1%)
- f. 7.5Y R3/4 暗褐色土 (含南部浮石少量)
- g. 7.5Y R4/6 褐色土 (含南部浮石 1%)
- h. 7.5Y R3/4 暗褐色土
- i. 10Y R6/6 明黄褐色土
- j. 10Y R4/6 褐色土 (含南部浮石少量)
- k. 5 Y R4/8 赤褐色土 (焼土含10Y R4/6褐色土)

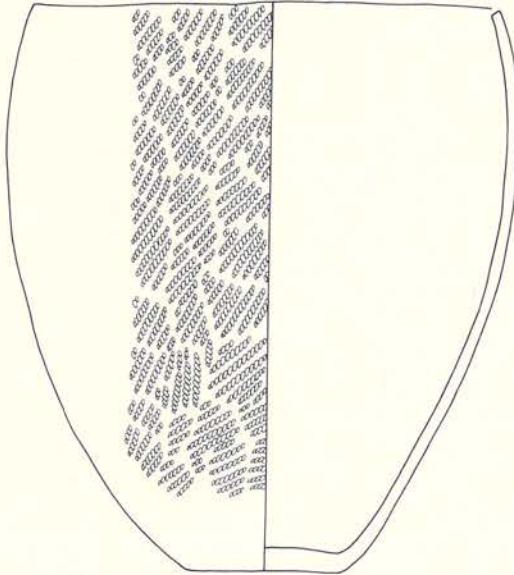


- a. 7.5Y R5/8 明褐色土 (含南部浮石微量・2.5Y R4/6赤褐色土微量)
- b. 7.5Y R5/6 明褐色土 (含南部浮石 3%・7.5Y R3/4暗褐色土)
- c. 7.5Y R5/4 にぶい褐色土 (含左南部浮石 2%・右7.5Y R4/4褐色土)
- d. 5 Y R5/8 明赤褐色土 (炭化物微量)
- e. 5 Y R6/8 橙色土 (焼土)
- f. 上部7.5Y R5/6 明褐色土 (含南部浮石微量)
下部7.5Y R4/4 褐色土
- g. 5 Y R4/8 赤褐色土 (含南部浮石 2%・5 Y R6/6橙色土微量)
- h. 10Y R5/6 黄褐色土 (含南部浮石 2%)
- i. 10Y R4/6 褐色土 (含南部浮石 1%)
- j. 7.5Y R4/4 褐色土 (含7.5Y R2/3極暗褐色土・南部浮石 5%)
- k. 7.5Y R4/3 褐色土 (含南部浮石10%・炭化物微量)
- l. 7.5Y R4/4 褐色土 (含南部浮石10%・炭化物微量)
- m. 7.5Y R6/6 橙色土
- n. 7.5Y R2/2 黒褐色土 (含南部浮石 2%)

- a. 5 Y R5/8 明赤褐色土 (焼土)
- b. 2.5Y R4/8 赤褐色土 (焼土)
- c. 7.5Y R4/4 褐色土
- d. 10Y R6/4 にぶい黄橙色土
- e. 5 Y R5/8 明赤褐色土 (焼土)
- f. 7.5Y R5/4 にぶい褐色土 (含南部浮石層)
- g. 10Y R6/4 褐色土

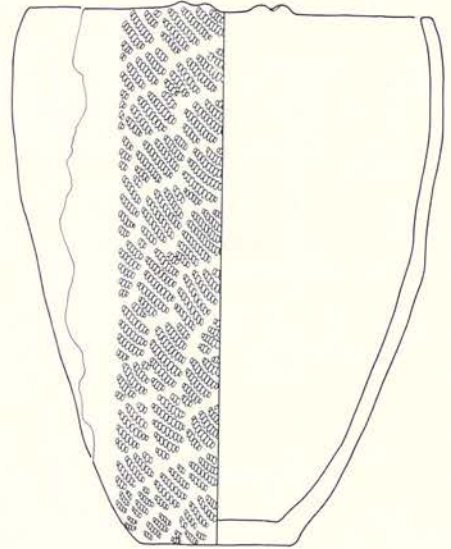
第139図 J I 土器埋設遺構・J II カマド跡(平・断面 S = 1/30)

G I 埋設土器No. 1
25.0・8.2・30.5



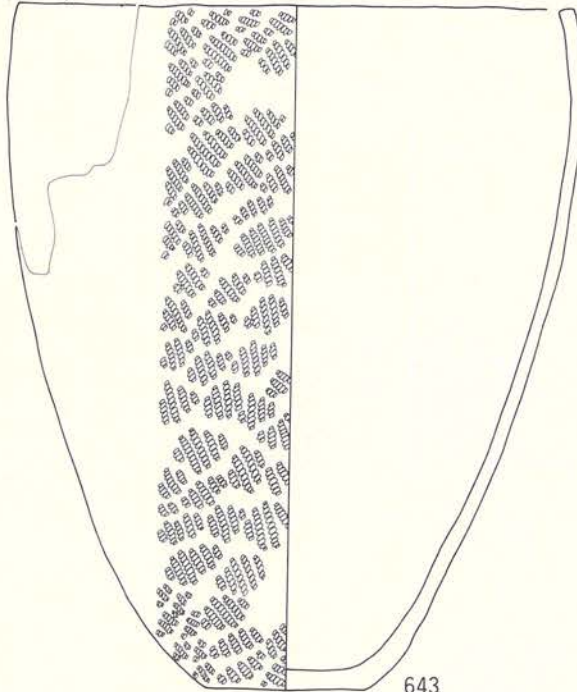
641

G I 埋設土器No. 2
21.6・8.0・29.0



642

G I 埋設土器No. 2
(29.7)・8.5・36.5



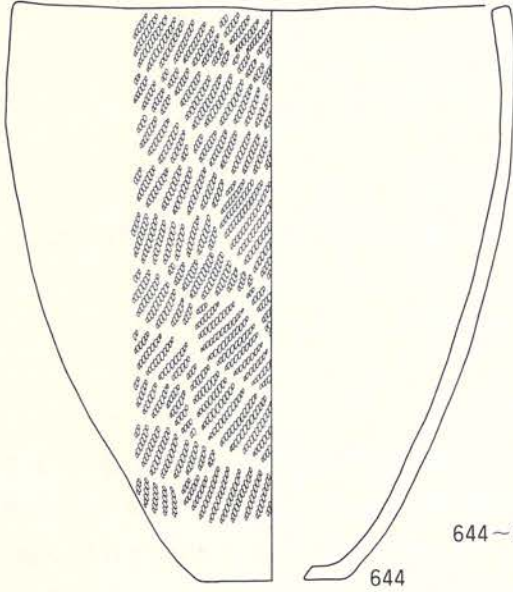
643

641~643 約 $\frac{1}{4}$

第140図 G I 埋設土器No. 1・No. 2 (遺物番号641~643)

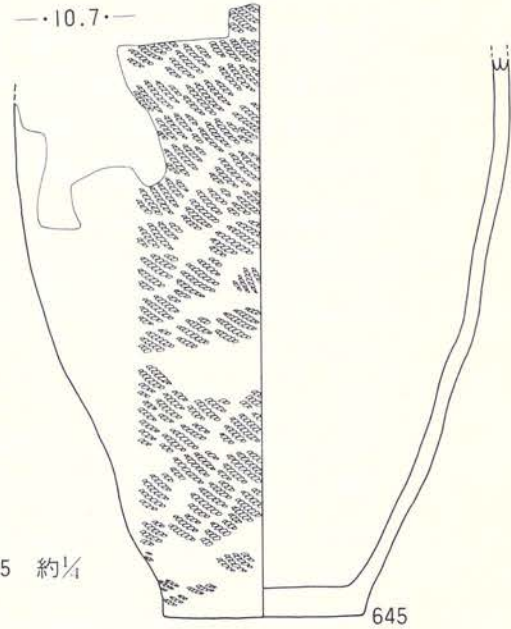
I II埋設土器

26.4・7.8・30.8



J I埋設土器

—・10.7・—



644～645 約1/4

第141図 I II・J I埋設土器(遺物番号644～645)

V 遺構外出土遺物

大日向II遺跡で遺構外から出土した遺物は、縄文時代の土器・土製品・土偶・石器と古代の土師器である。縄文時代土器のうち、前期の土器はK区から、中期末葉から後期前葉の土器はJ区から、後期後半から末葉の瘤付土器はH区とI区から、また晩期の土器はG区から集中して出土した。これらの遺物はI層からIV層中に含まれていたが、出土量の多かった層位は後期後半から晩期の土器がII層～III層にかけて、前期の土器はIV層である。

1. 土器

(1) 縄文土器

当遺跡調査区域から出土した土器を下記のとおり分類した。

- ① 第I群土器 前期に属する土器

- ② 第Ⅱ群土器 中期後半から中期末葉に属する土器
- ③ 第Ⅲ群土器 後期初頭から後期前半に属する土器
- ④ 第Ⅳ群土器 後期後半から後期最終末に属する瘤付土器
- ⑤ 第Ⅴ群土器 晩期に属する土器
- ⑥ 第Ⅵ群土器 以上の群に分類できかねる土器

以上のように分類し、さらに各土器群についてそれぞれの特徴、型式によって細分した。この分類は遺構内出土土器にも適用するものである。

① 第Ⅰ群土器

a) 1類 (第142～143図646～661、写真図版159～160)

前期前半に属し、円筒下層 a～b 式に比定されると思われる土器を本類とした。器形のわかるものは661の1点のみであるが、いずれも円筒形深鉢形土器の破片である。口縁部文様帯に捺糸圧痕文が施文されているもの (646・648・650・655・657・658・660)、口縁部文様帯に綾絡文が施文されているもの (653・656・659)、網目状捺糸文が施文されているもの (647・652・654)、縦位の捺糸文が施文されているもの (649)、単節斜縄文が施文されているもの (661) とがある。いずれも胎土に繊維が認められるものである。

b) 2類

前期後半に属し、円筒下層 c～d 式に比定されると思われる土器を本類とした。F I—1 住居跡床面から出土しているが、遺構外からは出土をみなかった。

② 第Ⅱ群土器 (第143図662～668、写真図版160)

大木 9～10 式に比定される土器が出土している。662～665・667・668 は深鉢形土器の口縁部と体部破片で、沈線で楕円状の区画がなされているものである。666 は器高 15.1 cm のやや小型の深鉢形土器で、無節斜縄文が施されている。

③ 第Ⅲ群土器 (第144～145図676～682、写真図版161)

676～682 が出土している。676 は波状口縁を呈し、沈線で曲線的な入組文が施文されている。677 は体部破片で文様は 676 に類似する。679 は器高 33.7 cm の深鉢形土器で、波状口縁を呈し、口縁部下に浅いくびれをもつ。文様はくびれ部に横位・斜位に区画された帯縄文が、体部には曲線的に区画された入組文が施文されている。678・680 は深鉢形土器の口縁部破片、682 は壺形土器の背部破片で、長方形の区画がなされているものである。

④ 第Ⅳ群土器

前述のとおり、この群は後期後半から後期最終末に属する土器を一括した。遺構内の出土遺物を見て解るように、当遺跡から出土した遺物は本類に属するものが大部分である。これらの

土器の中には、住居跡床面を中心として、注口土器、深鉢形土器、台付鉢形土器などが共伴関係となって出土している。これらいくつかの共伴土器を見ると、器形・文様に変遷の傾向を見出すことができる。特に注口土器においてはそれが顕著である。以下に述べる1類から5類は、共伴関係を土台として文様・器形・貼瘤のあり方などから分類したものである。

a) 1類 (第145図686~688・690、写真図版162)

本類は貼瘤が施された初期の段階からいまだ時期の浅いと思われる土器を一括した。共伴関係として出土したものに、I I—1住居跡床面から291と292の注口土器と、294の小型粗製鉢形土器がある。

遺構外から出土したもので、この類に属すると考えられる土器は3点である。686は波状口縁を呈し、口縁部が内側に反る深鉢形土器で、口唇部に沿って刻目が施され、体部に楕円状の区画帯が施されている。区画帯には原体 $R < \frac{L}{L}$ の横位に流れる羽状縄文が充填されている。687と688は同一個体で、壺形土器である。体部は球状に脹り、口頸部は直立する。文様は瘤から左右横位に流れる三角状の磨消縄文が施されている。瘤には縦位の穿孔を有する。地文は $R < \frac{L}{L}$ の横位羽状縄文である。690は上半が欠損した深鉢形土器で、体部中位にくびれをもち、くびれ部には帯縄文、下半には「く」字状の区画帯が施されている。帯縄文と区画帯には原体 $R < \frac{L}{L}$ の横位羽状縄文が充填されている。

b) 2類 (第146図691~695、写真図版162~163)

本類は瘤付土器全盛期の前段階と考えられ、木葉状文様が割れる過程のみられる土器を一括した。共伴関係として出土したものに、I II—3住居跡から484の注口土器と485の深鉢形土器が、またI I—8住居跡床面から458の注口土器と459の壺形土器がある。

遺構外から出土したもので、この類に属すると考えられる土器は5点である。691は鉢形土器か小型深鉢形土器の口縁部破片で、口縁部に帯縄文、くびれ部に磨消縄文が施されている。地文は $R < \frac{L}{L}$ の単節斜縄文である。692は小型の壺形土器で体部上半が脹る。最脹部には瘤を4個配し、弧带状入組文が沈線で施文されている。693は口頸部が欠損した壺形土器で、体部上半がやや脹る。最脹部には瘤を4個付し、瘤間を連結する弧带状入組文が施文されている。入組文及び帯縄文には原体 $R < \frac{L}{L}$ の単節斜縄文が充填されている。694は上半が欠損した壺形土器で、瘤間を連結する弧带状入組文が沈線で施文されている。台部と瘤に穿孔を有するところから懸垂した土器であろう。695は口頸部が欠損した壺形土器で、器形は逆三角形を呈する。背部と体部には3条の平行沈線で弧状の文様が施文されている。地文は無節斜縄文である。

c) 3類 (第146~149図696~714・718・721、写真図版163~165)

本類は瘤付土器全盛期で、貼瘤が口縁部及び体部に多用され、弧带状入組文主体の文様が施文される土器を一括した。共伴関係として出土したものに、H I—4住居跡床面から出土した

102の注口土器と103・104の壺形土器が、さらにe層埋土から107の注口土器、108の鉢形土器、109・110・113の深鉢形土器、112の台付鉢形土器がある。

遺構外から出土したもので、この類に属すると考えられる土器は21点である。696は器高9.2cmの鉢形土器である。口唇部には角状突起を規則的に配し、体部上半に浅いくびれをもつ。くびれから下半には左下がりの弧帯状入組文が施文されている。地文は $L < \frac{R}{R}$ の単節斜縄文である。

698・701・703・705は壺形土器の体部破片で、弧帯状入組文が施文されている。697・700・702・704・706～708・710～714は深鉢形土器の口縁部破片で、口唇部に角状突起を配すものが多い。705と706は同一個体である。699は器高19.1cmの深鉢形を呈する注口土器である。体部中位にくびれをもち口唇部には角状突起を、口縁部には貼瘤を規則的に配している。

体部上半には右下がりの弧帯状入組文が施文されている。地文は $R < \frac{L}{L}$ の単節斜縄文である。709は深鉢形土器の体部破片と思われるもので、縄文充填の入組文に棒状工具で格子状の沈線を施しているものである。地文は $L < \frac{R}{R}$ の単節斜縄文である。718は体部下半が欠損した鉢形土器で、口唇部に角状突起を配し、体部には左下がりの帯状入組文が施文されている。入組文には原体 $L < \frac{R}{R}$ の単節斜縄文が施されている。721は大型の壺形土器である。体部には左下がりの帯状入組文が施文されている。地文は $L < \frac{R}{R}$ の単節斜縄文である。

d) 4類(第148図719、写真図版165)

本類は全盛期に多用された貼瘤が衰退しはじめ、深鉢形土器等に見られた体部のくびれがとれてくる傾向にある土器を一括した。共伴関係として出土したものに、H I—8住居跡床面から出土した162の台付鉢形土器、163の香炉形土器、166の深鉢形土器がある。

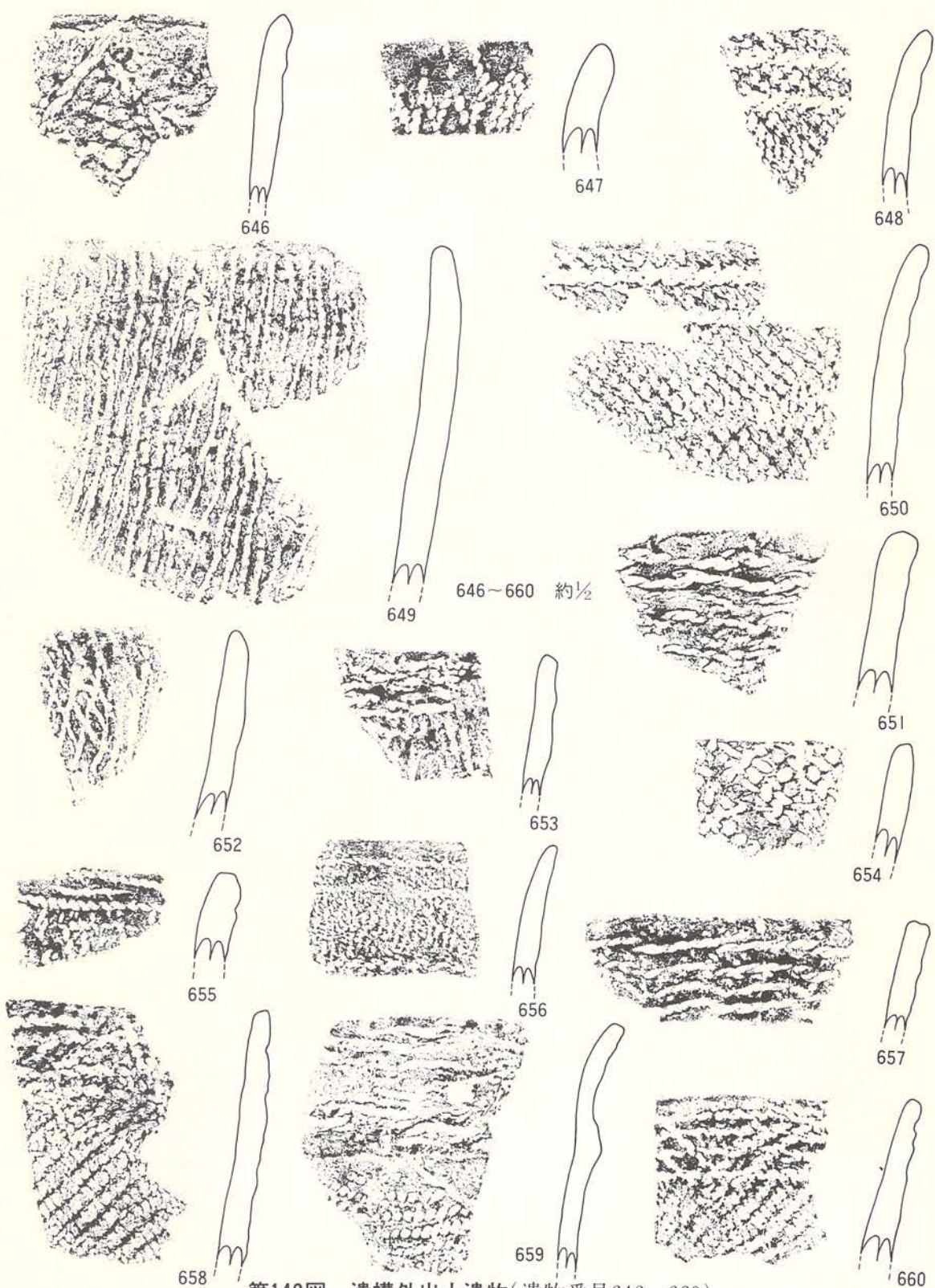
遺構外から出土したもので、この類に属すると考えられる土器は1点である。719は器高12.8cmの鉢形土器で、くびれは浅い。くびれ部は沈線で区画されている。地文は $L < \frac{R}{R}$ の単節斜縄文である。貼瘤はない。

e) 5類(第148～149図720・723、写真図版165～166)

本類は後期最終末から晩期への過渡期にあたり、器形・文様に後期末葉の要素と晩期の要素とが認められる土器を一括した。この類には共伴関係として出土した土器はない。

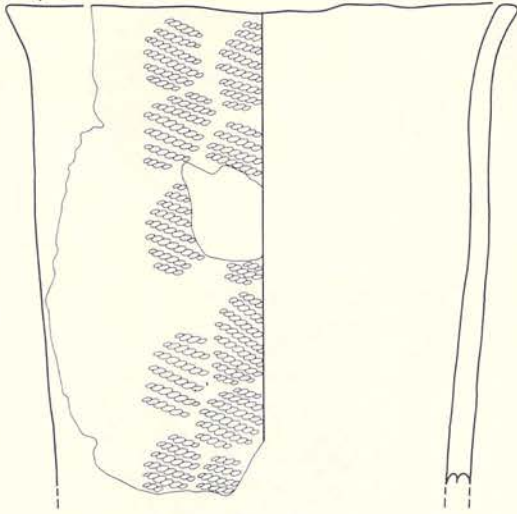
遺構外から出土したもので、この類に属すると考えられる土器は2点である。720は器高12.6cmの壺形土器である。口頸部は二段となる。口頸部には細い帯縄文が施されている。723は台付鉢形土器で、波状口縁を呈し、口縁部は外反する。体部には右下がりの帯状入組文が施されている。地文は原体 $L < \frac{R}{R}$ の単節斜縄文である。

689・715・716はこの群に属するが、小破片のためいずれの類に分類されるのか判断しかねる土器である。717の無文注口土器は器形から推定して3類～5類に属するものであろう。

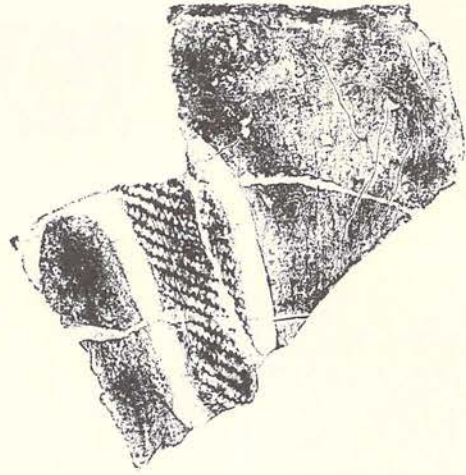


第142図 遺構外出土遺物(遺物番号646~660)

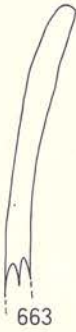
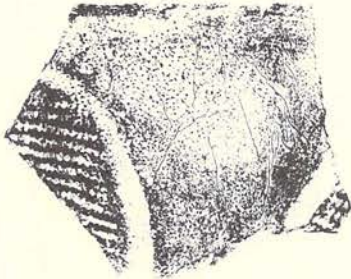
(19.4) ···



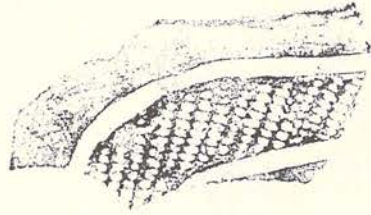
661



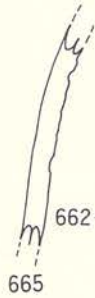
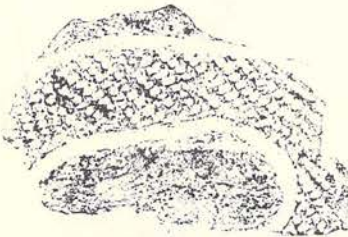
662



663

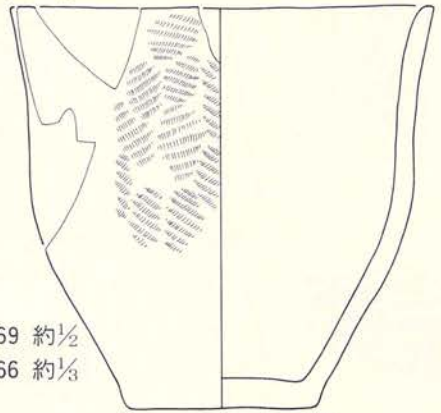


664



665

(16.0)·7.0·15.1

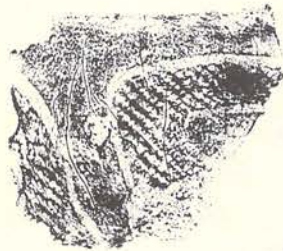


666

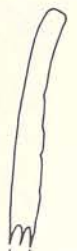
662~665·667~669 約 $\frac{1}{2}$
661·666 約 $\frac{1}{3}$



667

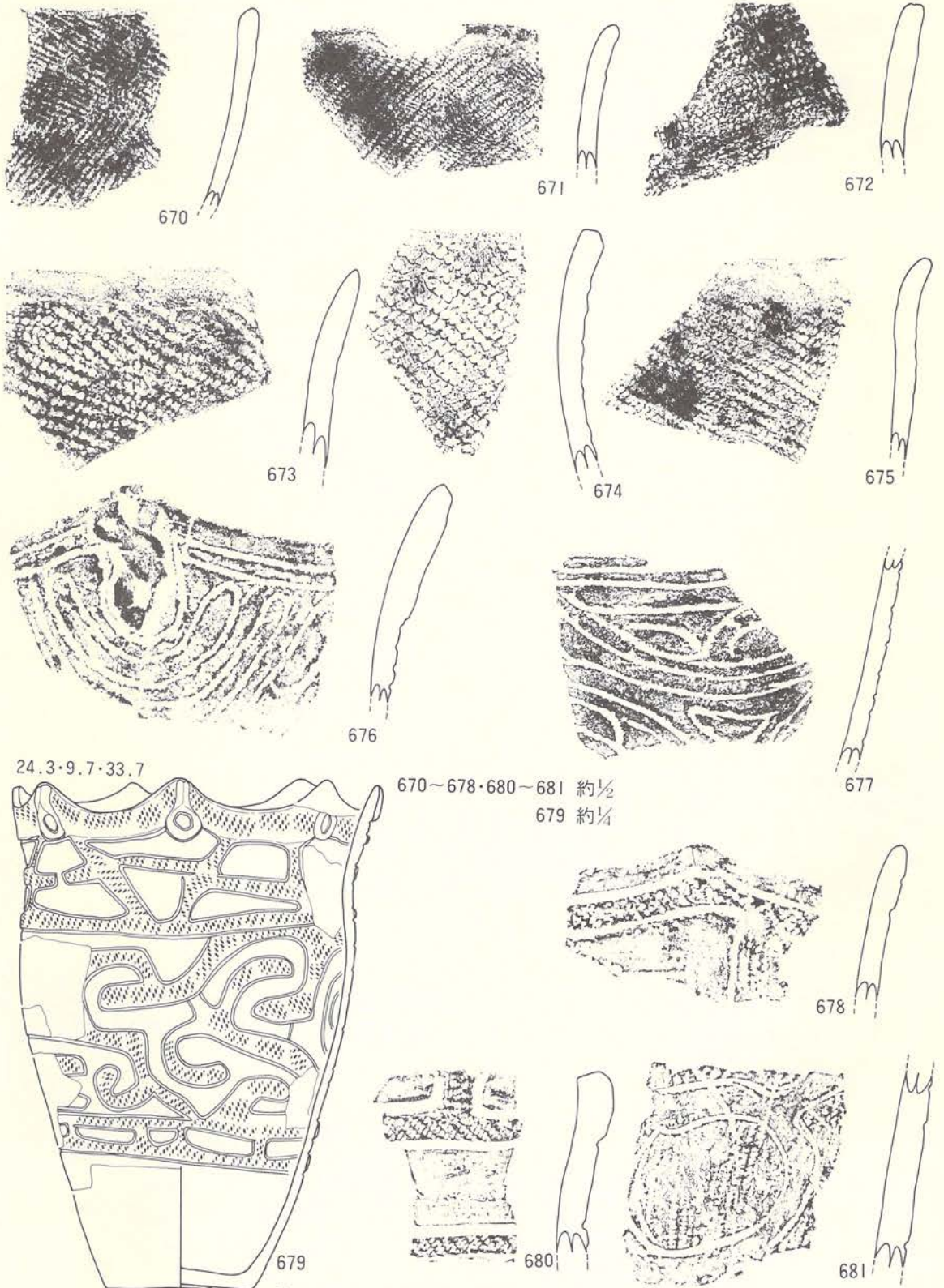


668

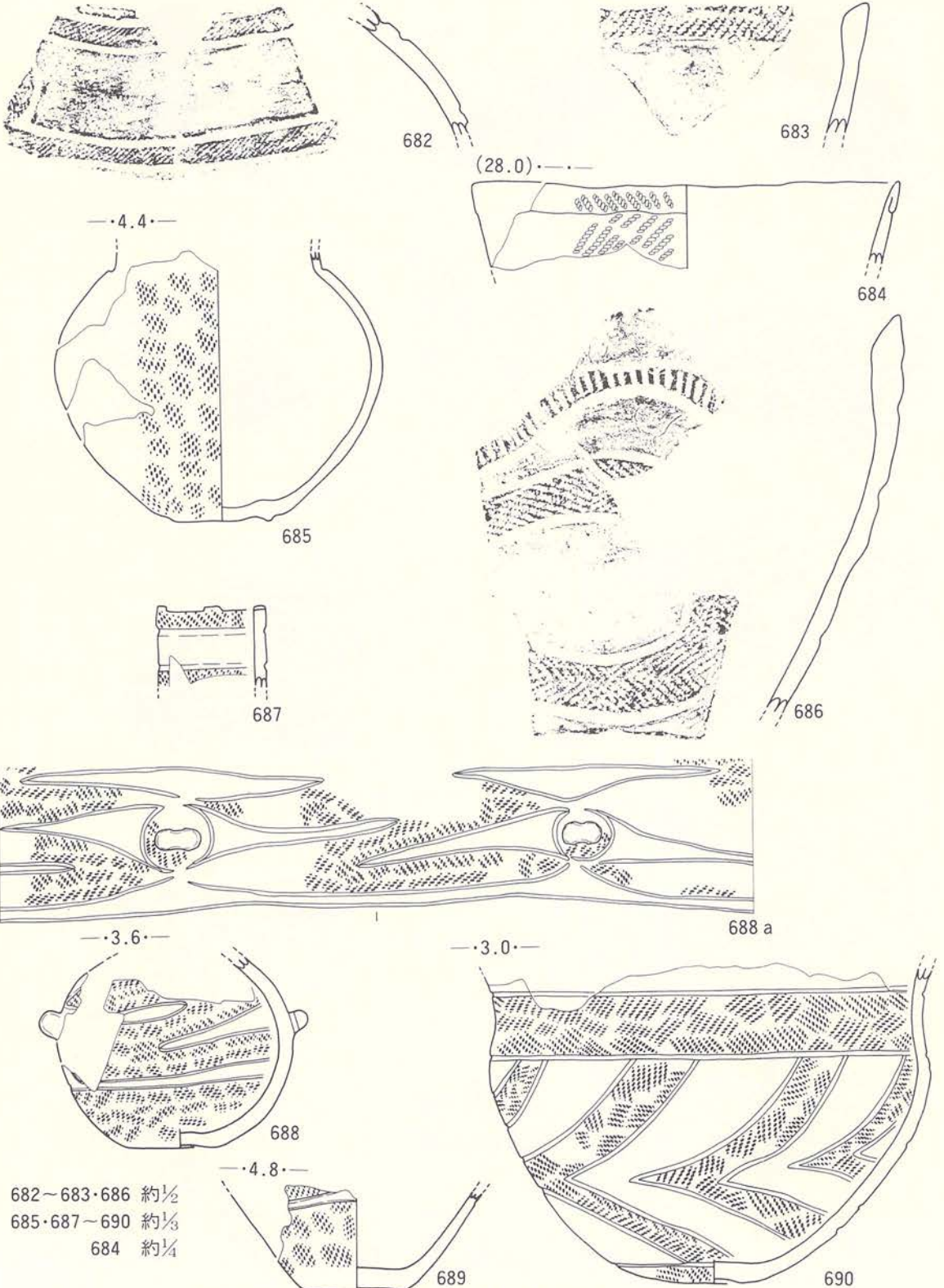


669

第143図 遺構外出土遺物(遺物番号661~669)

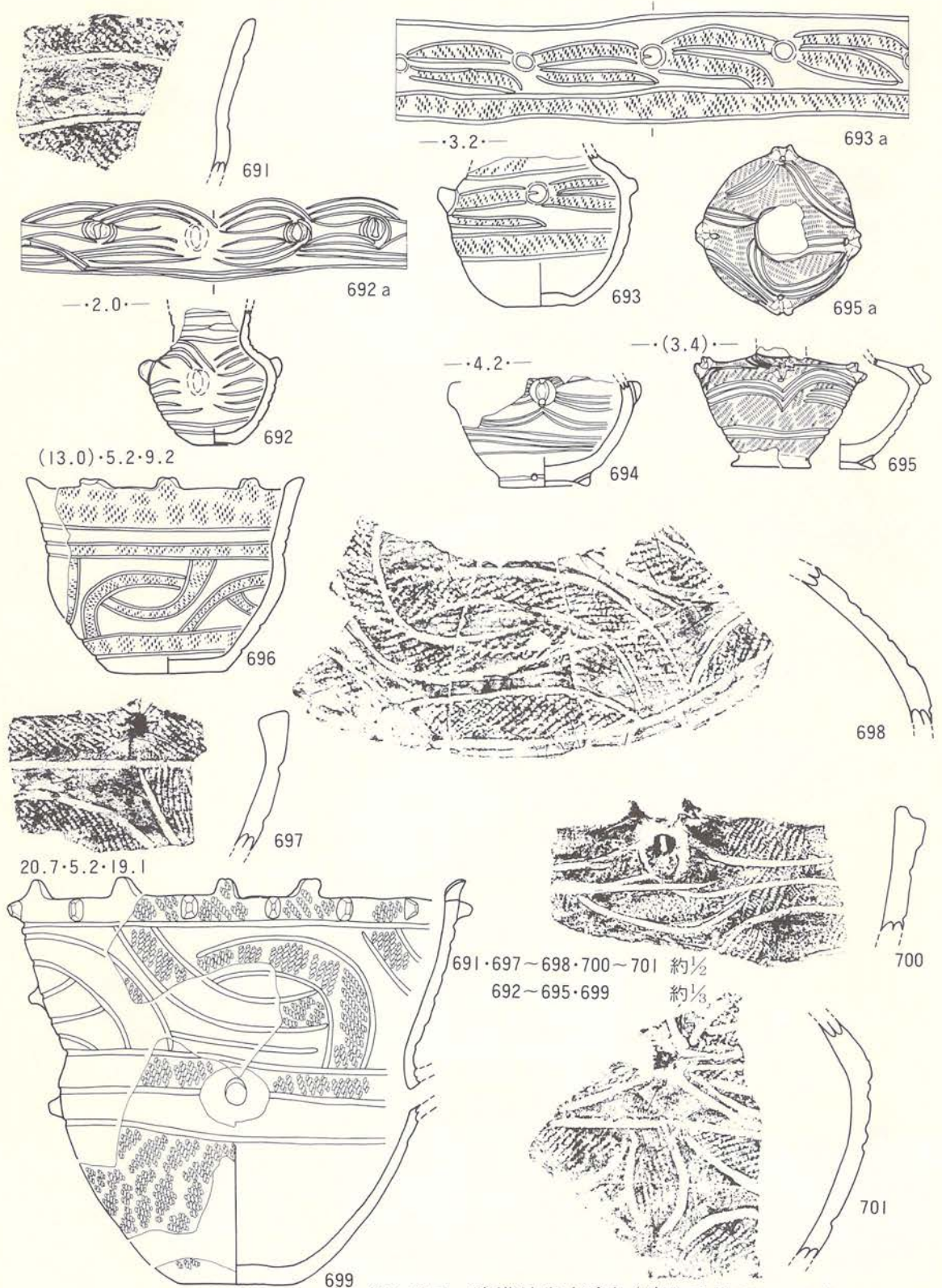


第144図 遺構外出土遺物(遺物番号670~681)

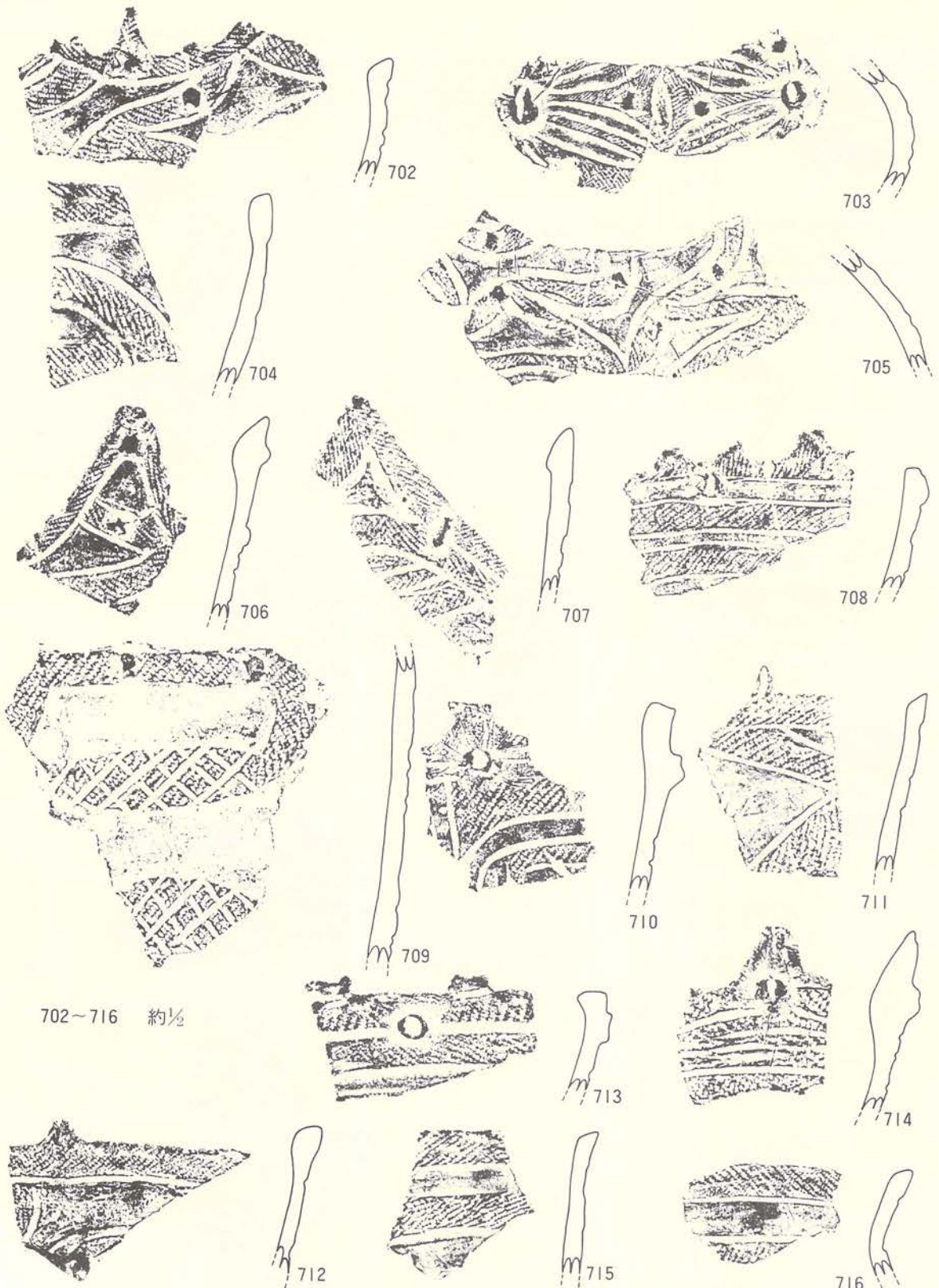


682~683·686 約 $\frac{1}{2}$
 685·687~690 約 $\frac{1}{3}$
 684 約 $\frac{1}{4}$

第145図 遺構外出土遺物(遺物番号682~690)

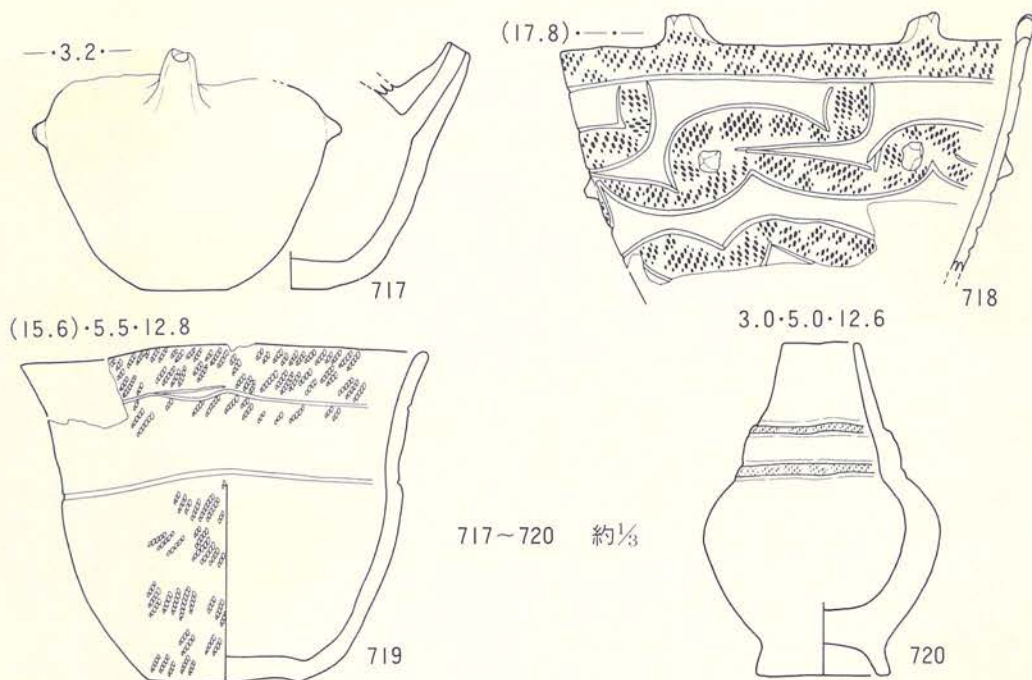


第146図 遺構外出土遺物(遺物番号691~701)



702~716 約 $\frac{1}{2}$

第147図 遺構外出土遺物(遺物番号702~716)



第148図 遺構外出土遺物(遺物番号717～720)

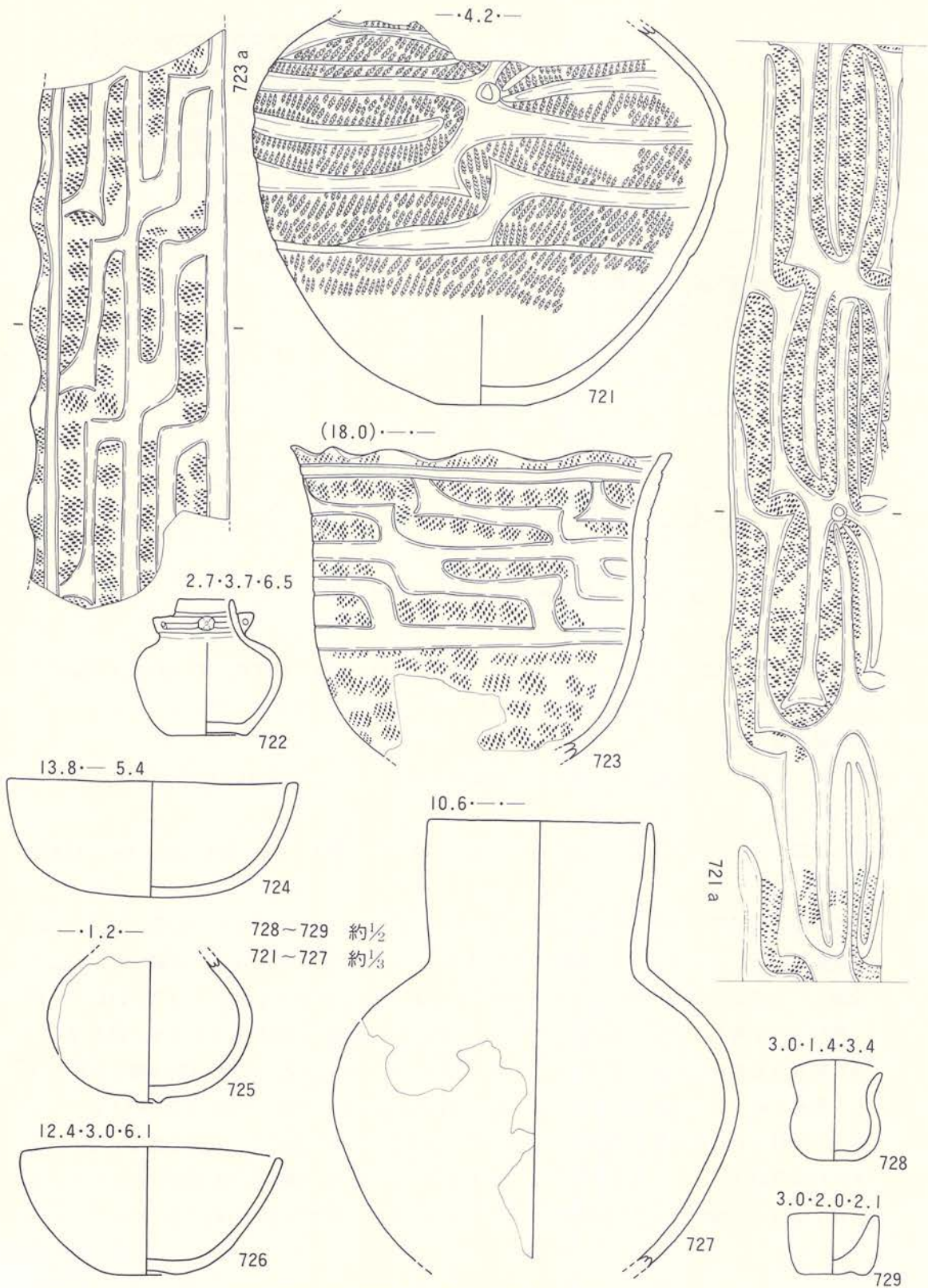
また722・724～729・732・734の無文土器と737・738の土器は、晩期の土器が散乱するG I区から出土したもので、本群4類～第V群土器1類に属するものと思われる。

⑤ 第V群土器

この群に属する土器は、G I区の配石遺構からG I-53ピット周辺に集中的に散乱していた土器である。

a) 1類(第150～154図733・735・736・739～747・749～766・768・769・782・785、写真図版167～172)

この類には晩期前葉に属する土器を一括した。733は波状口縁を呈し、口縁部にB状の突起を規則的に配しているもので、体部は無文である。735は波状口縁を呈し、口縁部に半円状の沈線と三叉文が施文されている。739の壺形土器は無文で、彩色が施されている。742～745の口縁部には玉抱き三叉文が施文されている。747は壺形土器の口頸部から背部で、渦巻文及び変形菱形文を基調とする入組文が施文され、彩色が施されている。752の皿形土器にはC字文から渦巻文の文様が施されている。地文はL $\left\langle \begin{matrix} R \\ R \end{matrix} \right\rangle$ の単節斜縄文である。755は小型の土器で、口唇部の刻目と口縁部のB状突起から左横に流れる沈線によって羊歯状的文様となるものである。また口縁部直下には、口唇部刻目のほぼ直下にあたる部分に同間隔の刻目が施されている。この両文様は、羊歯状文と平行沈線間に施される刻目文様の祖型と考えられるものである。地文



第149図 遺構外出土遺物(遺物番号721~729)

は $L < \frac{R}{R}$ の単節斜縄文である。756・757・759・760・762～766・769には羊歯状文が施文されている。781の注口土器背部にはZ字状の文様が施文されている。785はミニチュアの壺形土器で、C字文から渦巻文の文様が施されている。

b) 2類 (第151～155図748・767・770～781・783・784・786～799、写真図版168～173)

この類には晩期中葉に属する土器を一括した。770・772～774・776・777・780・787・788・789の土器にはX字文主体の文様が、771・791・797の土器には大腿骨文が施文されている。799の皿形土器は波状口縁を呈し、沈線間に刺突が施されているもので、底面器表にも同様の文様が施されている。

c) 3類 (第155～159図800～849、写真図版173～177)

この類には晩期に属すると思われる粗製深鉢形土器、鉢形土器、底部、台付破片を一括したが、中には後期末葉の土器も含まれているかもしれない。801～803・805・814の口唇部にはB状突起が配されている。

⑥ 第VI群土器 (第145図683・684・685、写真図版161～162)

時期を特定できかねる土器は683・684の口縁部破片、685の壺形土器である。683は口縁部が内側で肥厚するもの、684は外側で肥厚するもので後期前半に位置づけられるものであろうか。685は地文に $L < \frac{R}{R}$ の単節斜縄文が施されているもので、後期の土器であらう。

(2) 土師器 (第159図857・858、写真図版178)

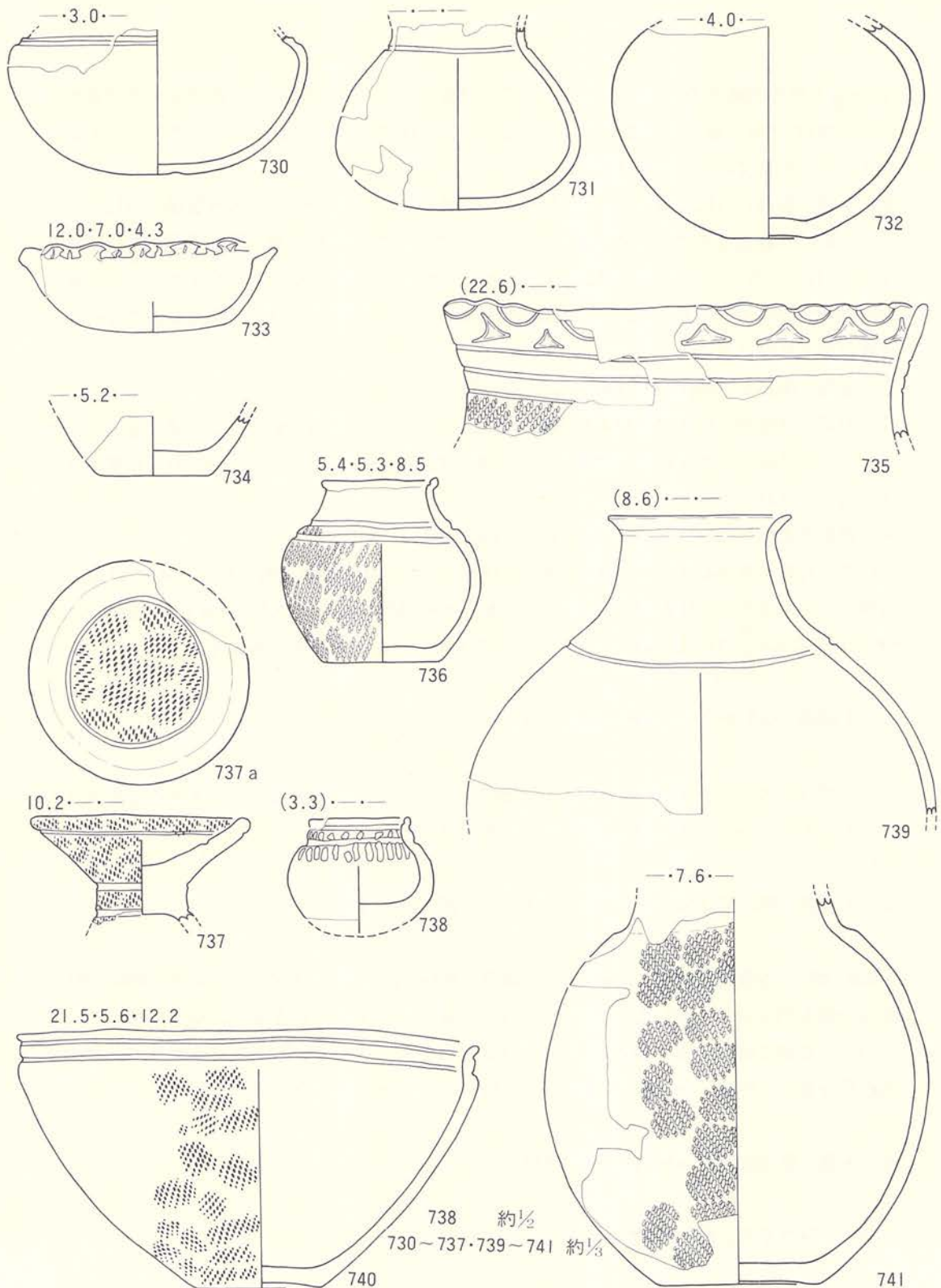
2点出土している。857は甕形土器で外面にはヘラミガキ、内面にはハケメとヘラケズリのみられるものである。858の坏形土器にはヘラミガキが施されている。

2. 土製品 (第159図850・851・855・856、写真図版177～178)

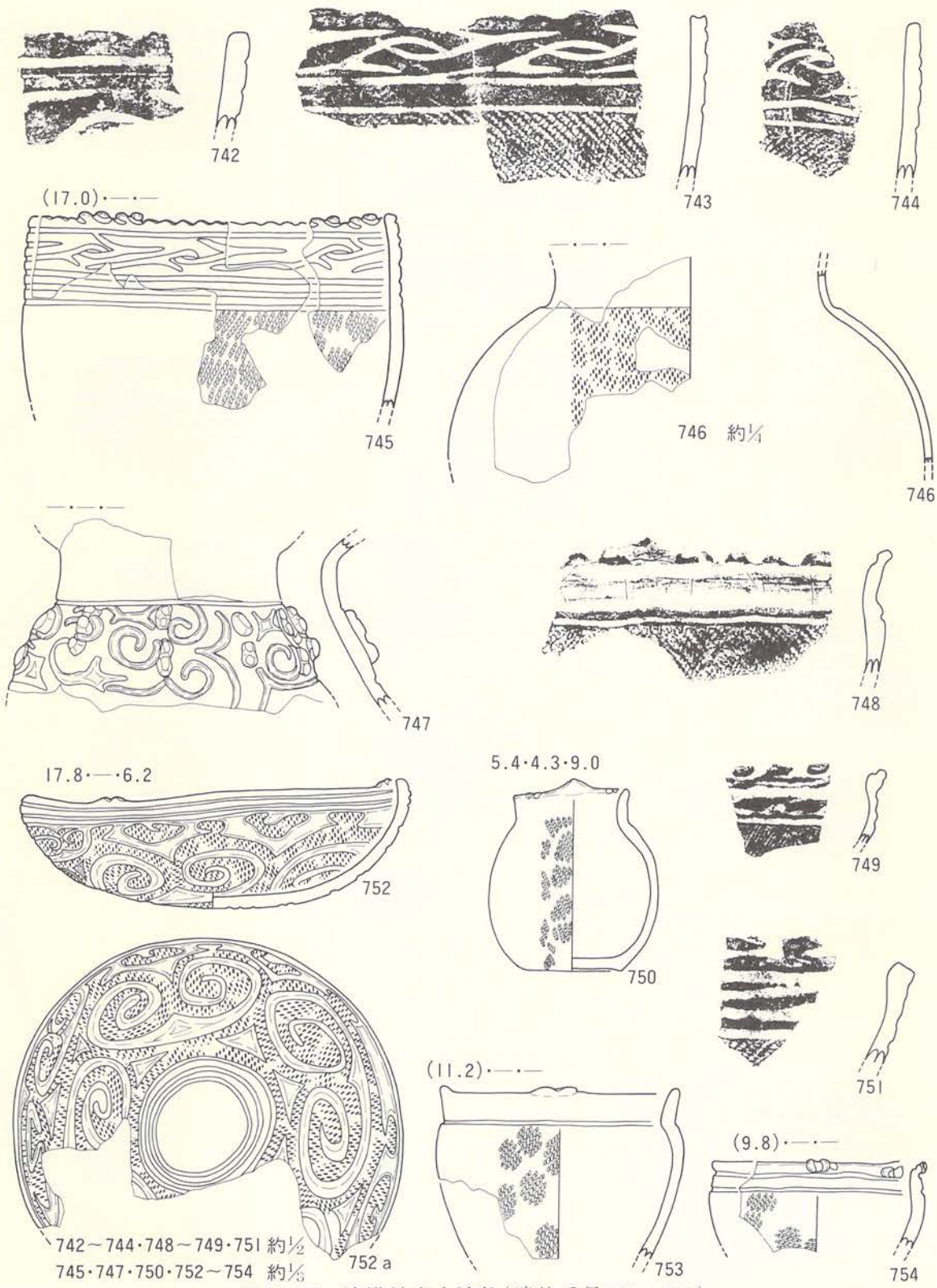
850・851の円盤状土製品と855の異形土製品、856の亀形土製品が出土している。850・851は粗製土器を円状に打ち欠いたものである。855は両面に各1個の孔を有し、中空になっているもので、器表には沈線文が施されている。856は頭部が欠損している亀形の土製品で、裏に2個の孔を有し、中空となっている。器表にはC字文主体の文様が施文されている。

3. 土偶 (第159図852～854、写真図版177)

852・854は足部、853は顔面部である。

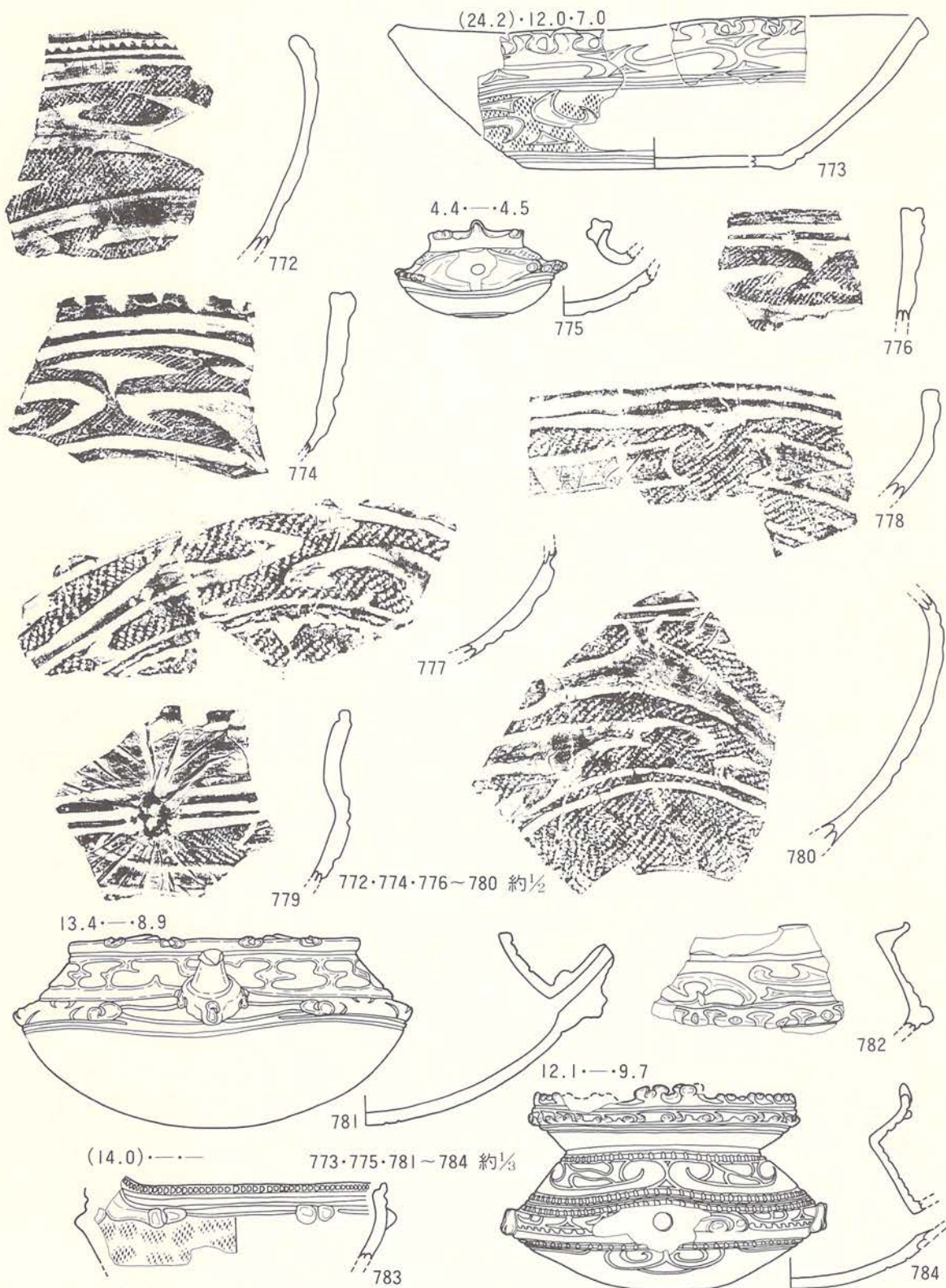


第150図 遺構外出土遺物(遺物番号730~741)

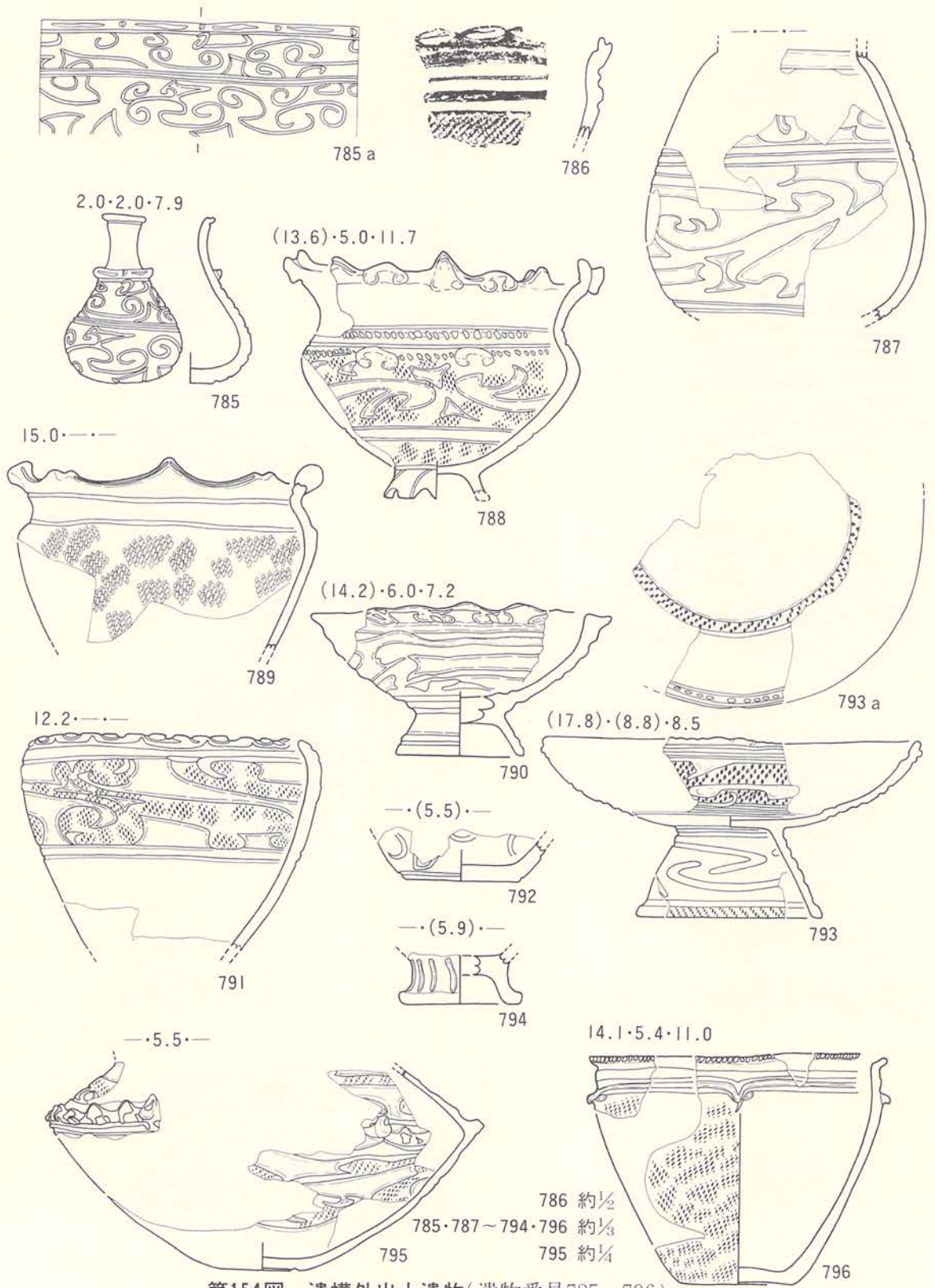


742~744·748~749·751 約 $\frac{1}{2}$
 745·747·750·752~754 約 $\frac{1}{3}$

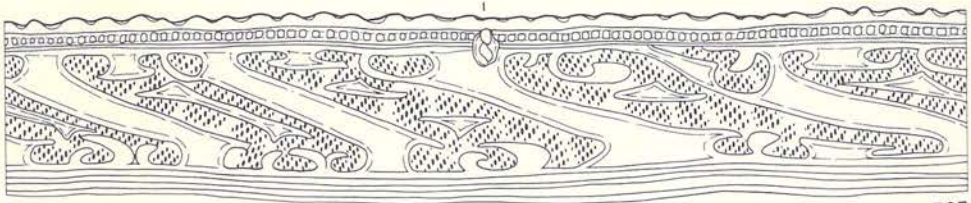
第151図 遺構外出土遺物(遺物番号742~754)



第153図 遺構外出土遺物(遺物番号772~784)



第154図 遺構外出土遺物(遺物番号785~796)

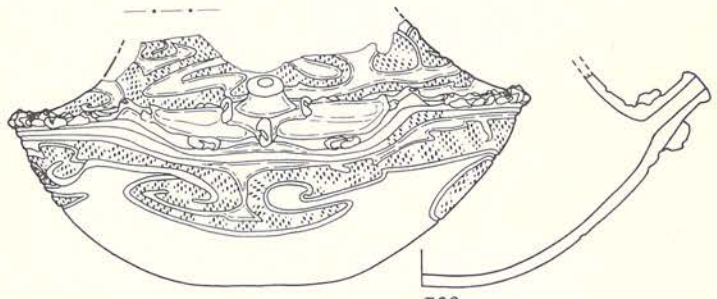


797 a

12.4・7.6・13.0

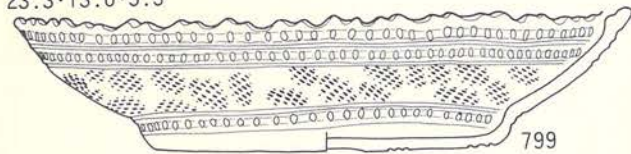


797

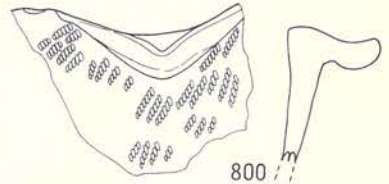


798

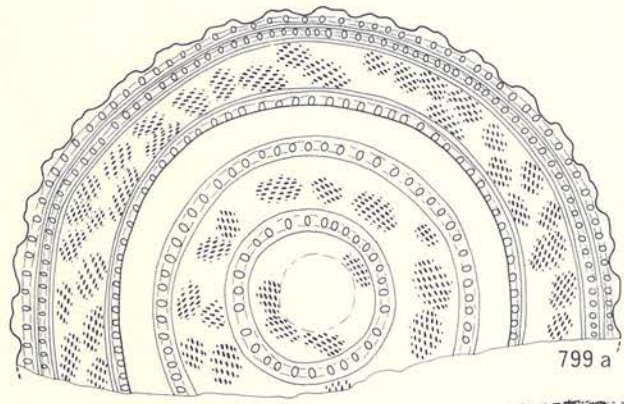
23.3・13.0・5.3



799



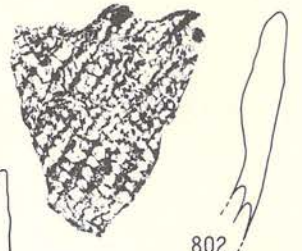
800



799 a



801



802



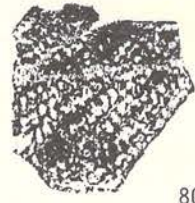
801~805 約 $\frac{1}{2}$
797~800 約 $\frac{1}{3}$



803

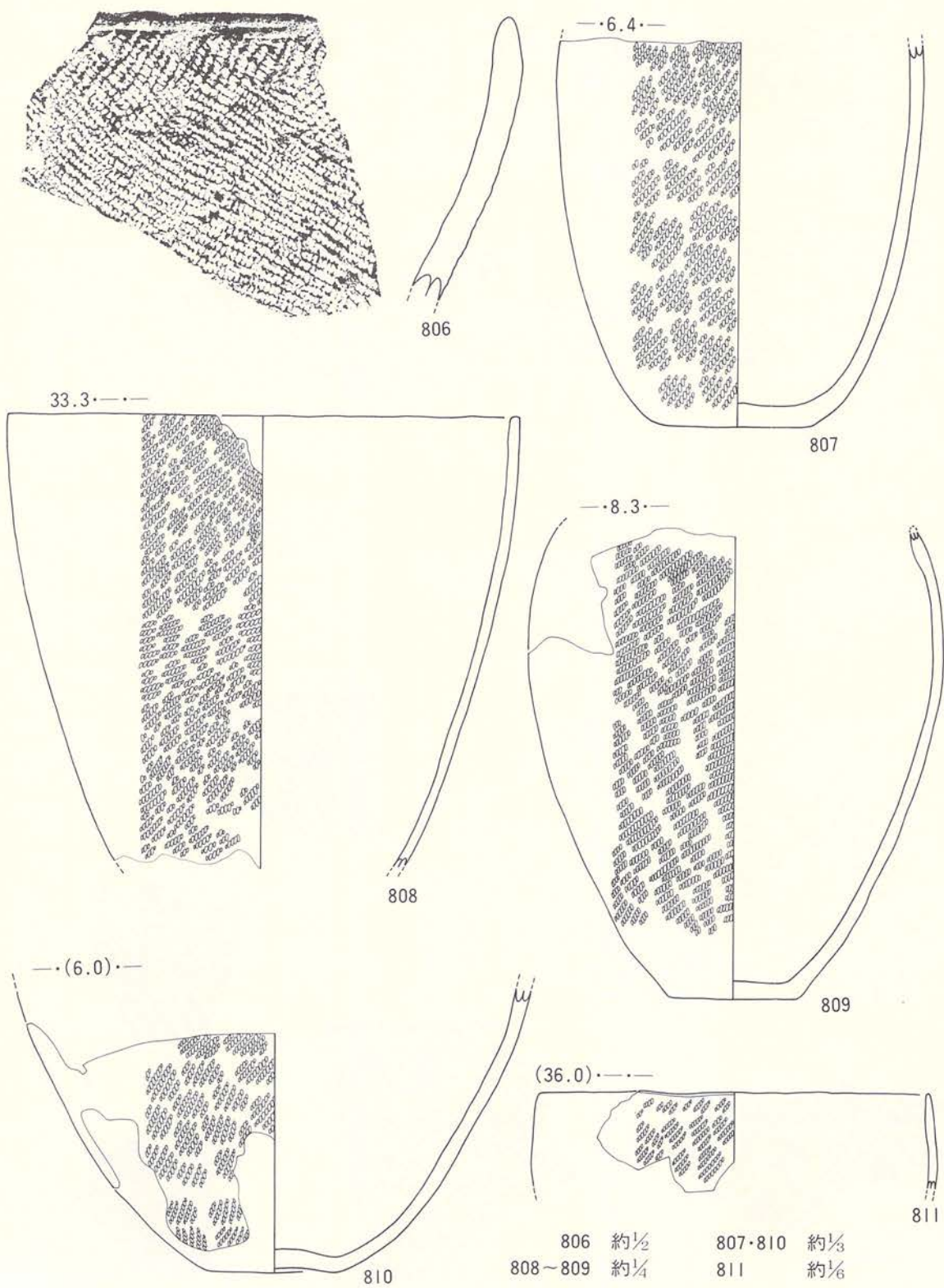


804



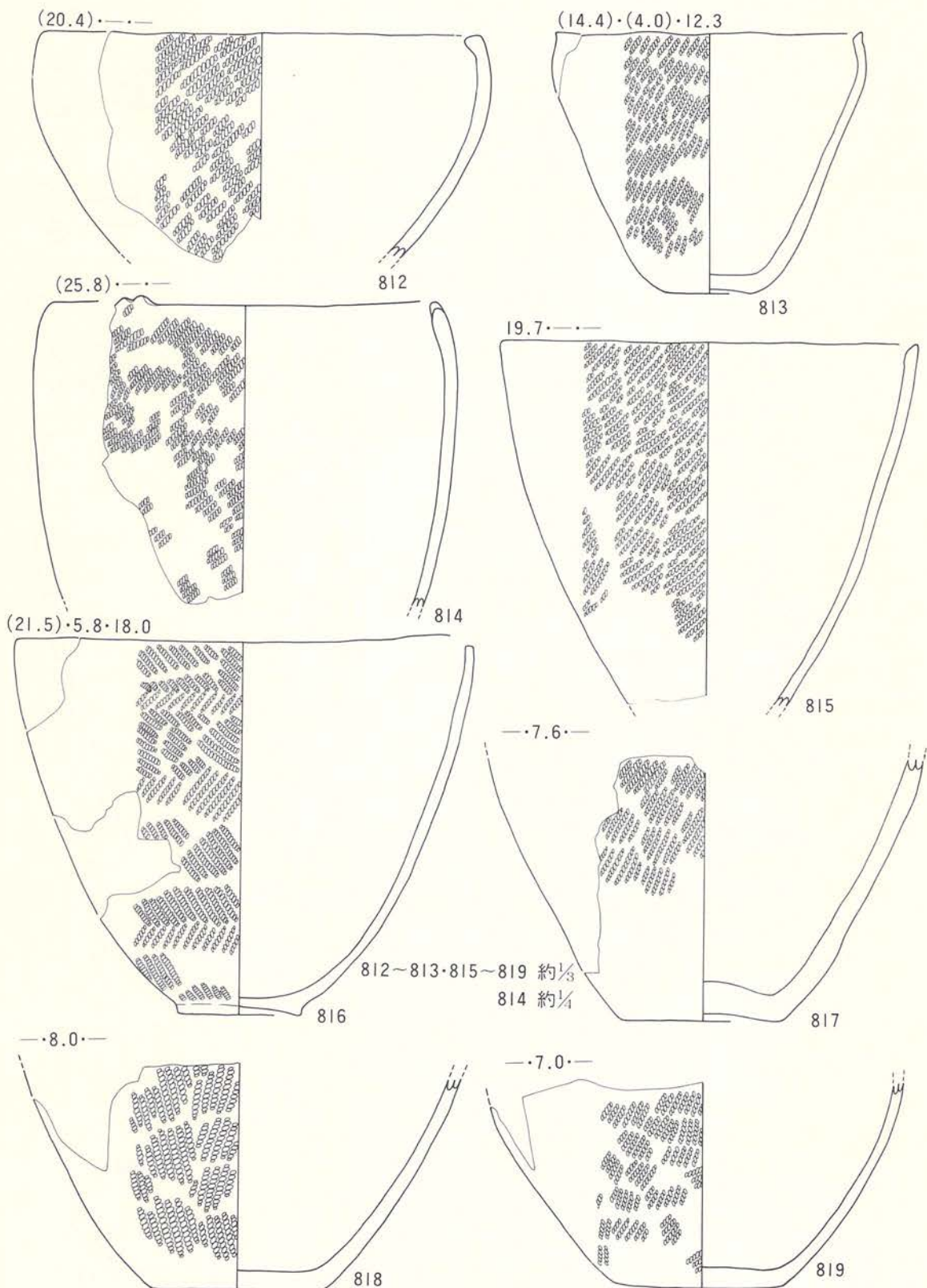
805

第155図 遺構外出土遺物(遺物番号797~805)



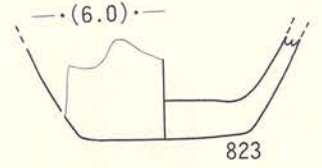
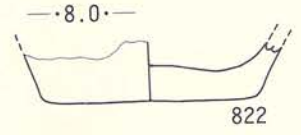
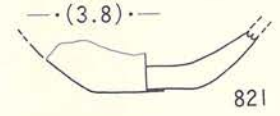
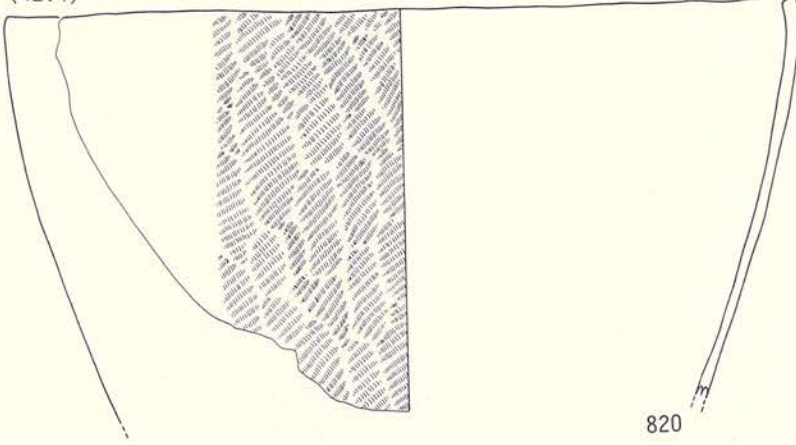
第156図 遺構外出土遺物(遺物番号806~811)

806	約 $\frac{1}{2}$	807-810	約 $\frac{1}{3}$
808~809	約 $\frac{1}{4}$	811	約 $\frac{1}{6}$

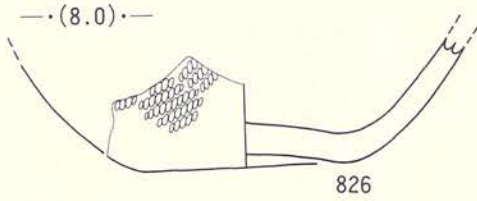
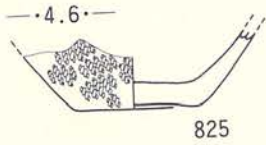
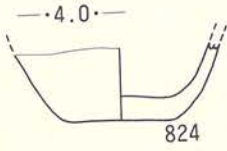
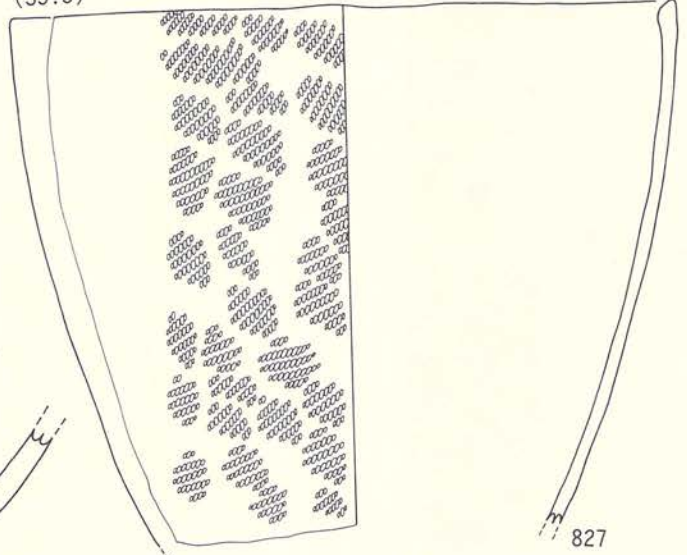


第157図 遺物外出土遺物(遺物番号812~819)

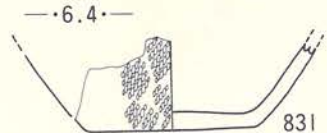
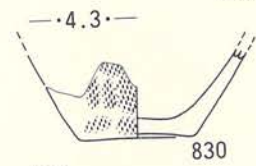
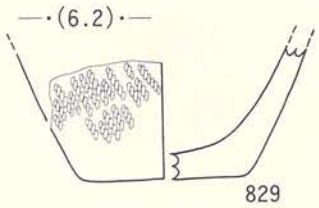
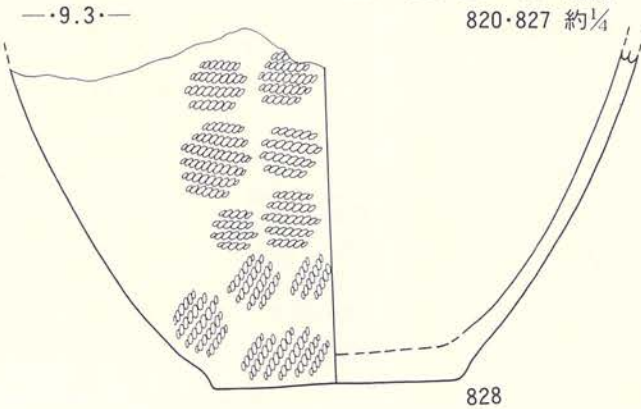
(42.4) ·····



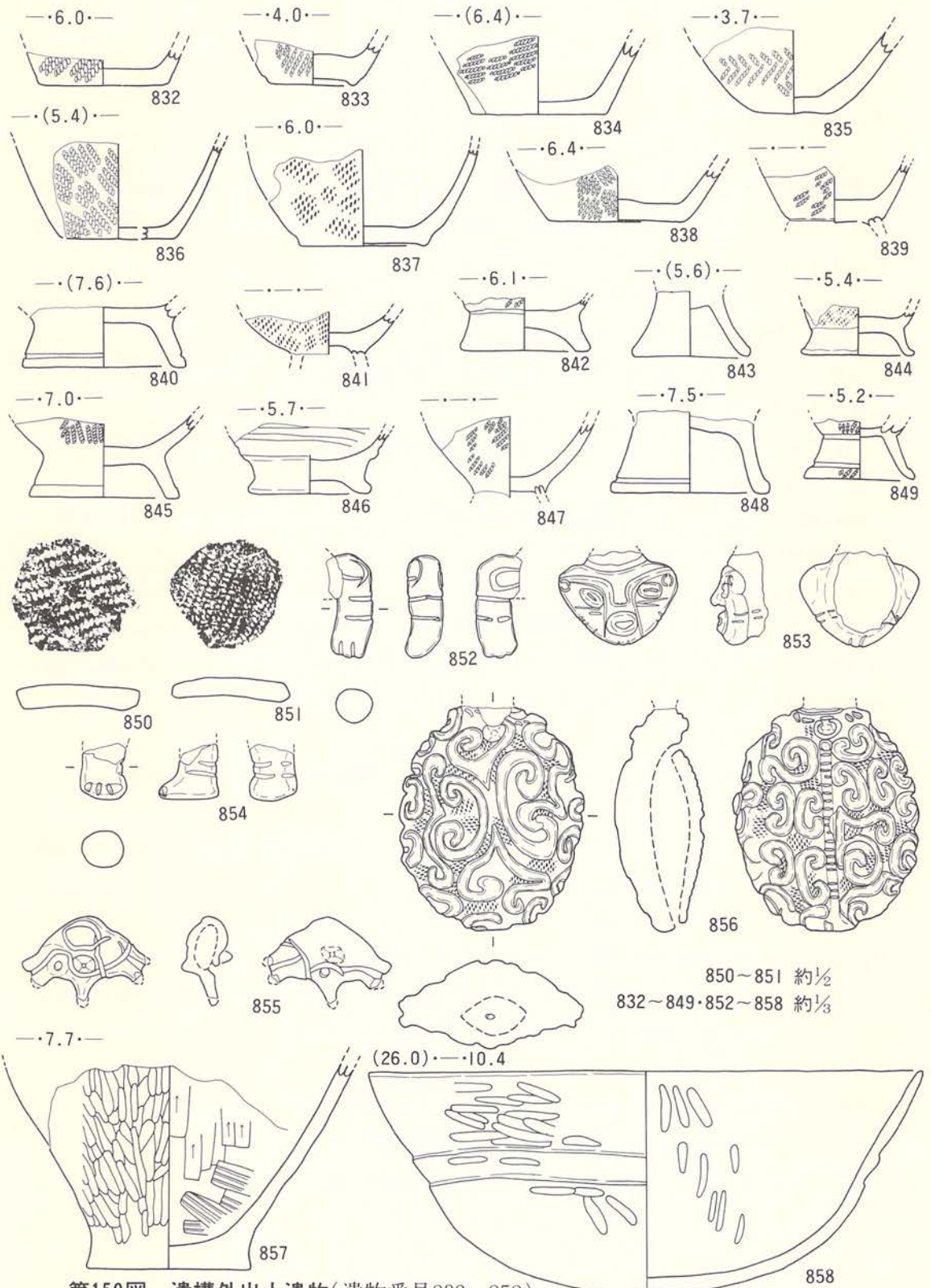
(35.5) ·····



821 ~ 826 · 828 ~ 831 約 $\frac{1}{3}$
 820 · 827 約 $\frac{1}{4}$



第158図 遺構外出土遺物(遺物番号820~831)



第159图 遺構外出土遺物(遺物番号832~858)

850~851 約 $\frac{1}{2}$
 832~849-852~858 約 $\frac{1}{3}$

4. 石器

遺構外から出土した石器は、石鏃、石錐、石匙、スクレーパー、石筥、加工痕ある剥片、磨製石斧、石棒、石刀、石皿、磨石、凹石、円盤状石製品、敲打痕ある石器である。以下器種毎に記述する。

(1) 石鏃（第160図859～875、写真図版179）

石鏃についての形式分類は、佐原 真（1964）によって分類した。16点出土している。

① 平基有茎鏃

859・860が出土している。いずれも大型で、両面から入念に刃部剥離調整が施されている。

② 凸基有茎鏃

861・864が出土している。862は先端部が欠損している。861は小型である。863は肉厚で刃部剥離調整が荒い。864は製作途中のものであろう。

③ 凹基有茎鏃

866～870が出土している。866は肉薄で小型である。865は基部が欠損している。870は基部及び先端部が欠損しているもので長身大型である。いずれにも両面から入念に刃部剥離調整が施されている。

④ 平基無茎石鏃

871が出土している。三角形を呈し、主に両面周縁に刃部剥離調整が施されている。

⑤ 円基鏃

872～875が出土している。872・873は先端部が欠損している。873は肉薄である。872～874は入念に、875は荒い剥離調整が施されている。

(2) 石錐（第160～161図876～904、写真図版179～180）

石錐については、明確につまみをもつものと不定形剥片の一端のみに剥離調整を施し錐部を作り出しているものに分類した。876～904の29点が出土している。

① つまみをもつもの

876～878が出土している。876・877はどちらも錐部先端が欠損しているものである。

② 不定形剥片の一端のみに剥離調整を施し錐部を作り出しているもの

879～904が出土している。これらのうち879～903はG I 区から出土したものである。

(3) 石匙 (第161図905～908、写真図版180)

石匙については形態から縦型と横型に分類した。905～908の4点が出土している。

① 縦型石匙

905・906が出土している。905は片面両側縁に、906は両面の片側縁に刃部剥離調整が施されている。

② 横型石匙

907・908が出土している。907は片面1側縁に、908は片面周縁に刃部剥離調整が施されている。

(4) スクレーパー (第161～162図909～921、写真図版180)

909～921の13点が出土している。

片面1側縁に刃部剥離調整が施されているもの 909～916

片面2側縁に刃部剥離調整が施されているもの 917・918

両面周縁に刃部剥離調整が施されているもの 919・920

両面周縁に断続的に刃部剥離調整が施されているもの 921

921は左右対象にえぐり痕があり、側縁部に剥離調整が認められるところから、石鏃の製作途中のものであろう。

(5) 石筥 (第162図922、写真図版180)

922の1点が出土している。長楕円形を呈し両面から加工して刃部を作り出している。

(6) 磨製石斧 (第162～163図923～928、写真図版180～181)

923～928の6点が出土している。923・926・928は頭部のみ、924は頭部が欠損、925は刃部が欠損、927は刃部と頭部が欠損しているもので、完形品は1点もない。924は刃がこぼれているが、両凸刃・円丸である。

(7) 石棒 (第163図929・930、写真図版181)

929・930が出土している。同一の石棒である。頭部には陰刻を施しているが、形状・大きさについては不明である。

(8) 石刀 (第163図931、写真図版181)

931の1点が出土している。破片であり両側縁に擦痕が認められるものである。

(9) 石皿 (第164図932～934、写真図版181～182)

932～934が出土している。932は片面の縁を打ちかき、中央部が凹状の擦面になっている。934は扁平な角礫の片面が凹状となっているもので擦痕は認められない。933は小破片で縁をもつものである。

(10) 磨石 (第165図935～937、写真図版182)

935～937の3点が出土している。936は敲打痕が認められる。

(11) 凹石 (第165図938、写真図版182)

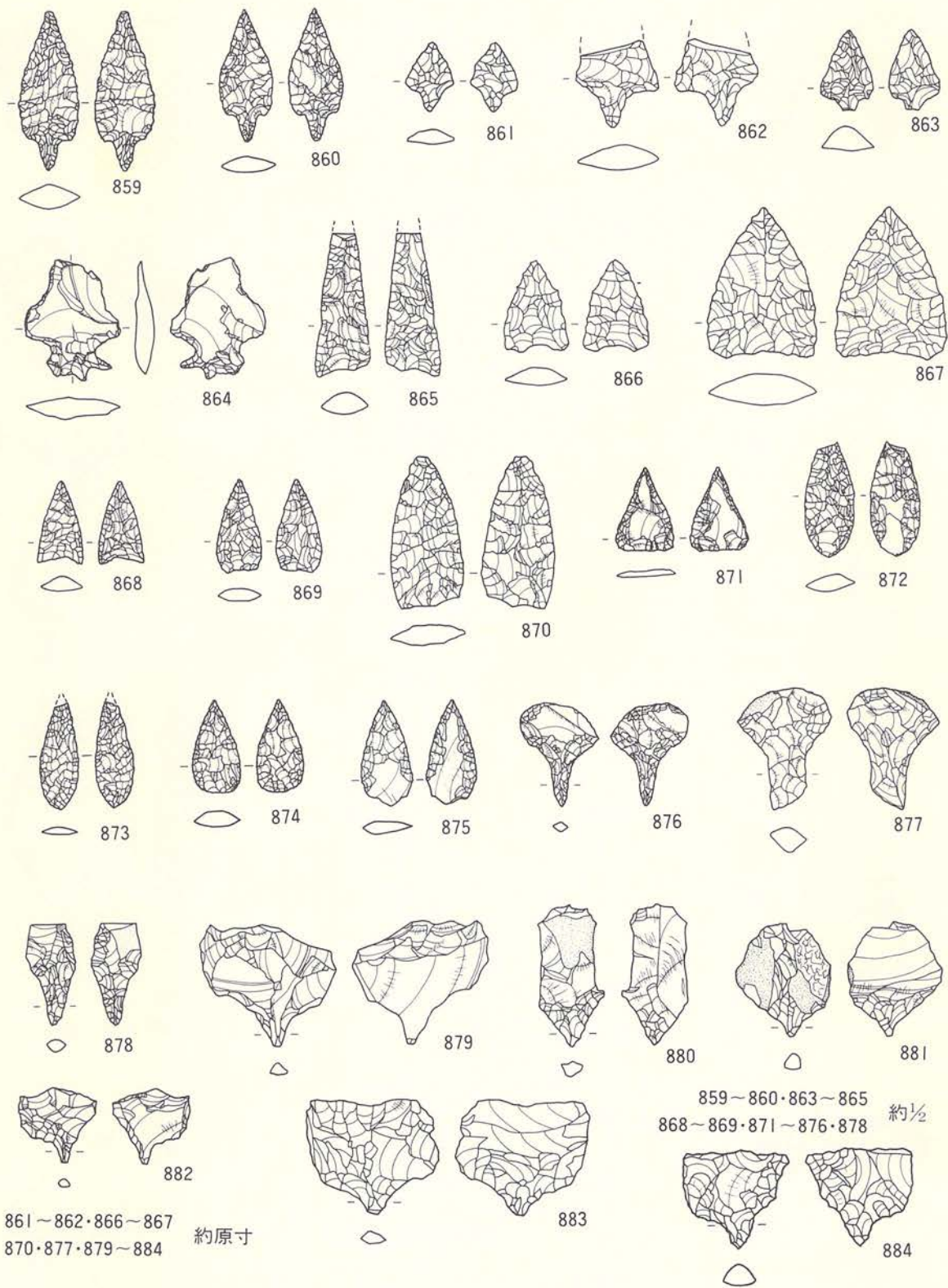
938の1点が出土している。球状の石を半分に割り、自然面に1個の凹みをつけたものである。

(12) 円盤状石製品 (第165～166図939～942、写真図版183)

939～942の4点が出土している。いずれも扁平な礫の周縁を打ち欠いて円状・楕円状にしているものである。

(13) 敲打痕のある石器 (第166図943、写真図版183)

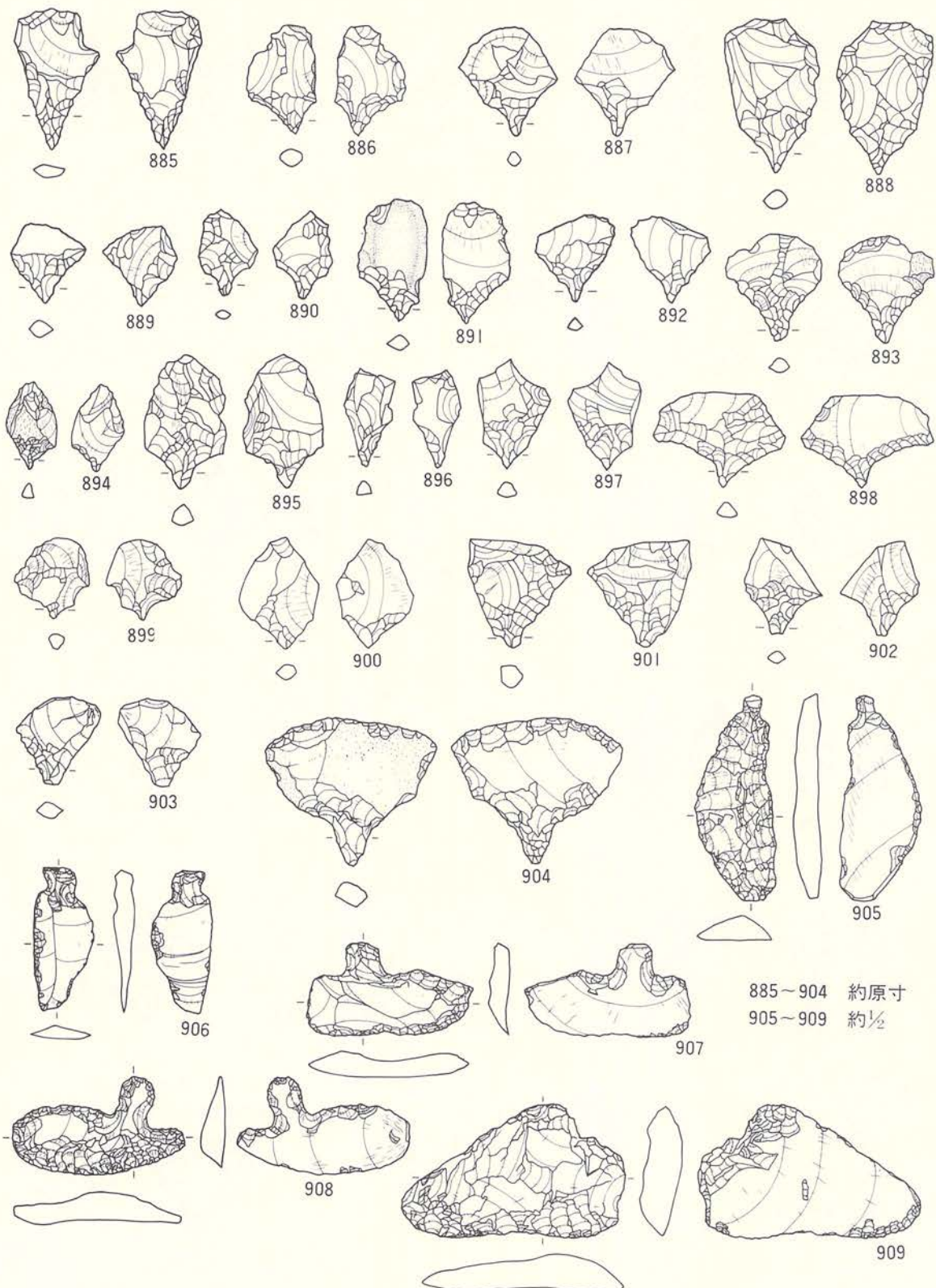
943の1点が出土している。長楕円状を呈し、長軸一端部に敲打痕か、側縁部に擦痕の認められるものである。



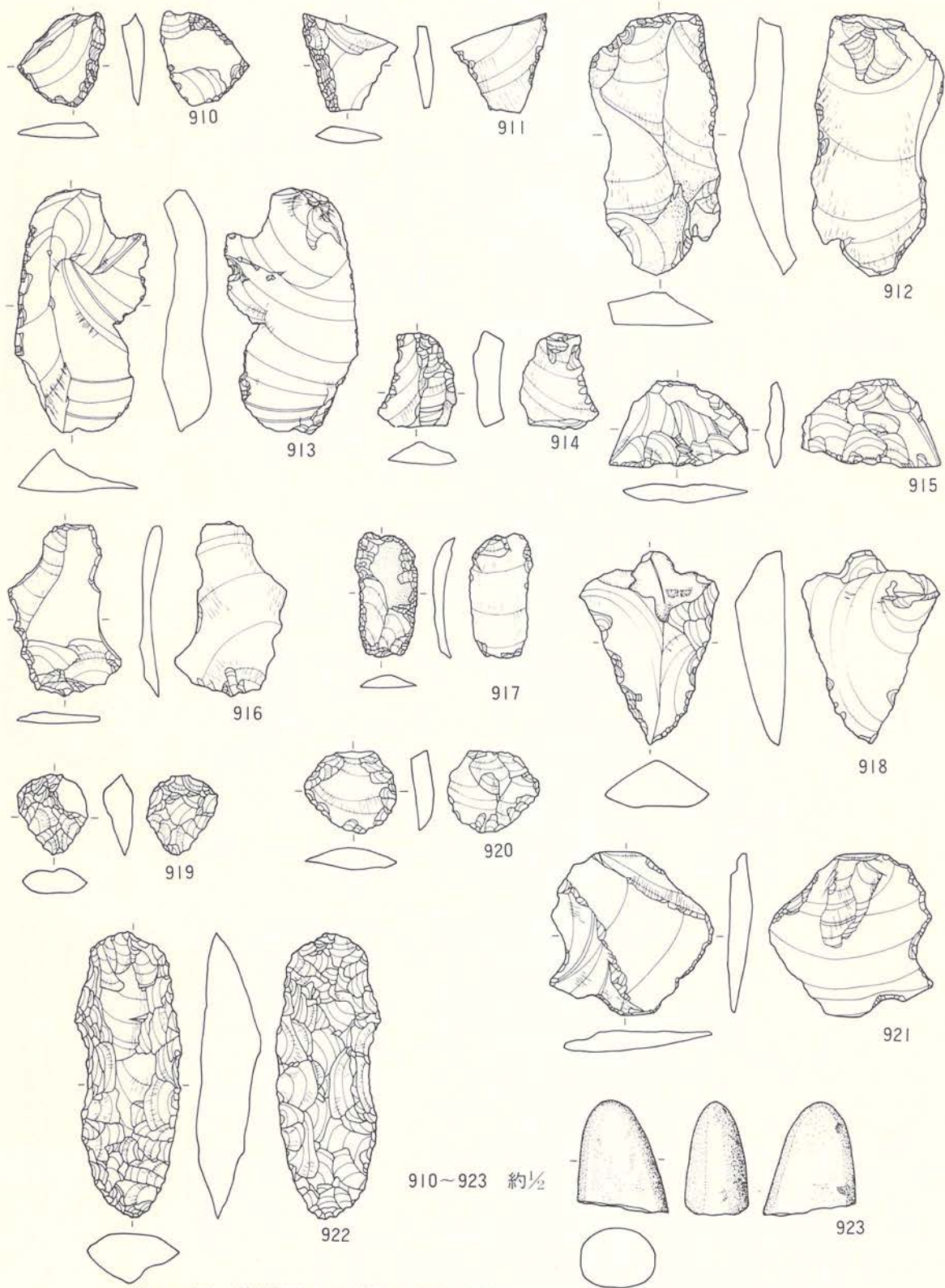
861~862·866~867
870·877·879~884 約原寸

859~860·863~865
868~869·871~876·878 約1/2

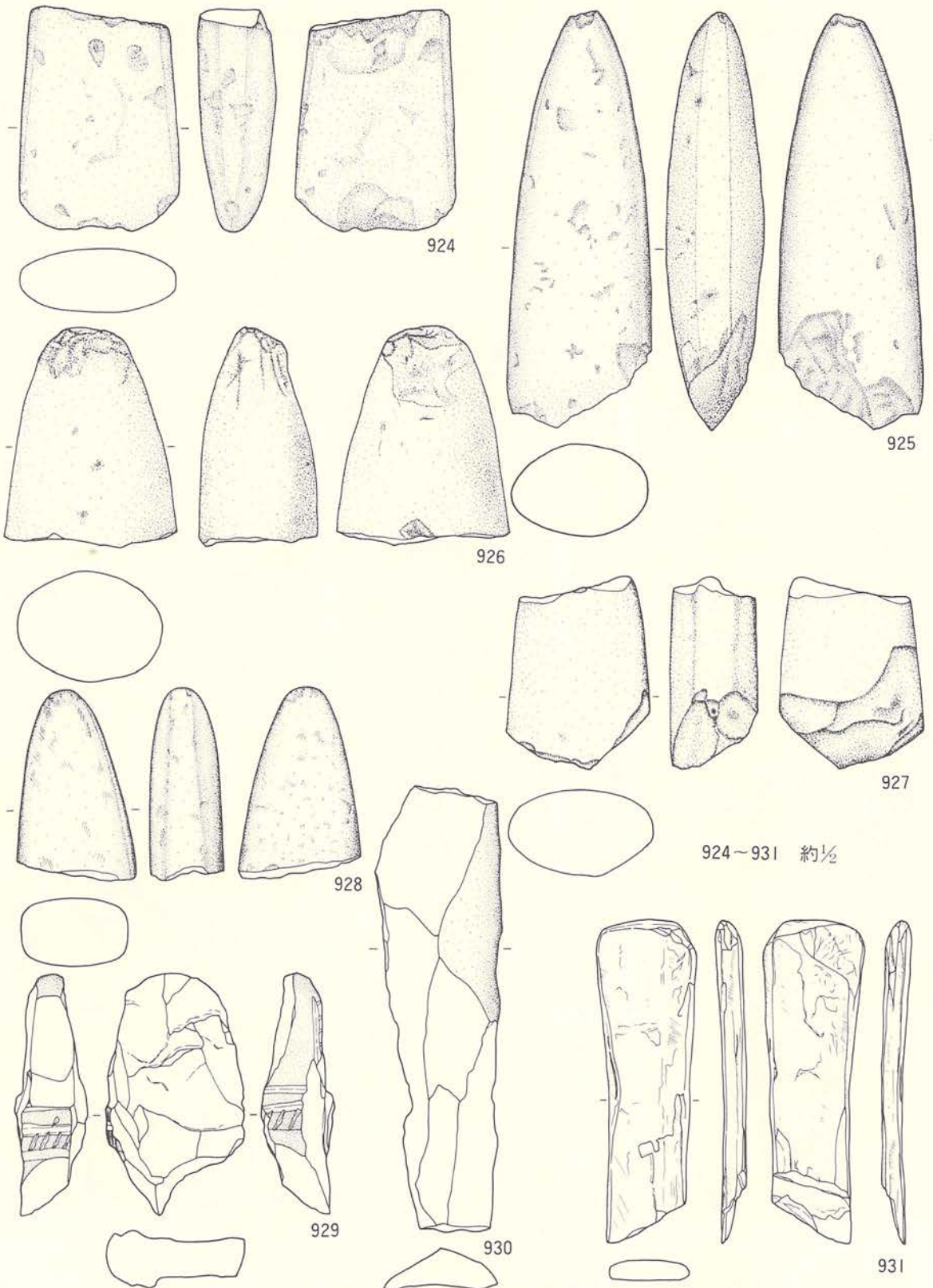
第160図 遺構外出土遺物(遺物番号859~884)



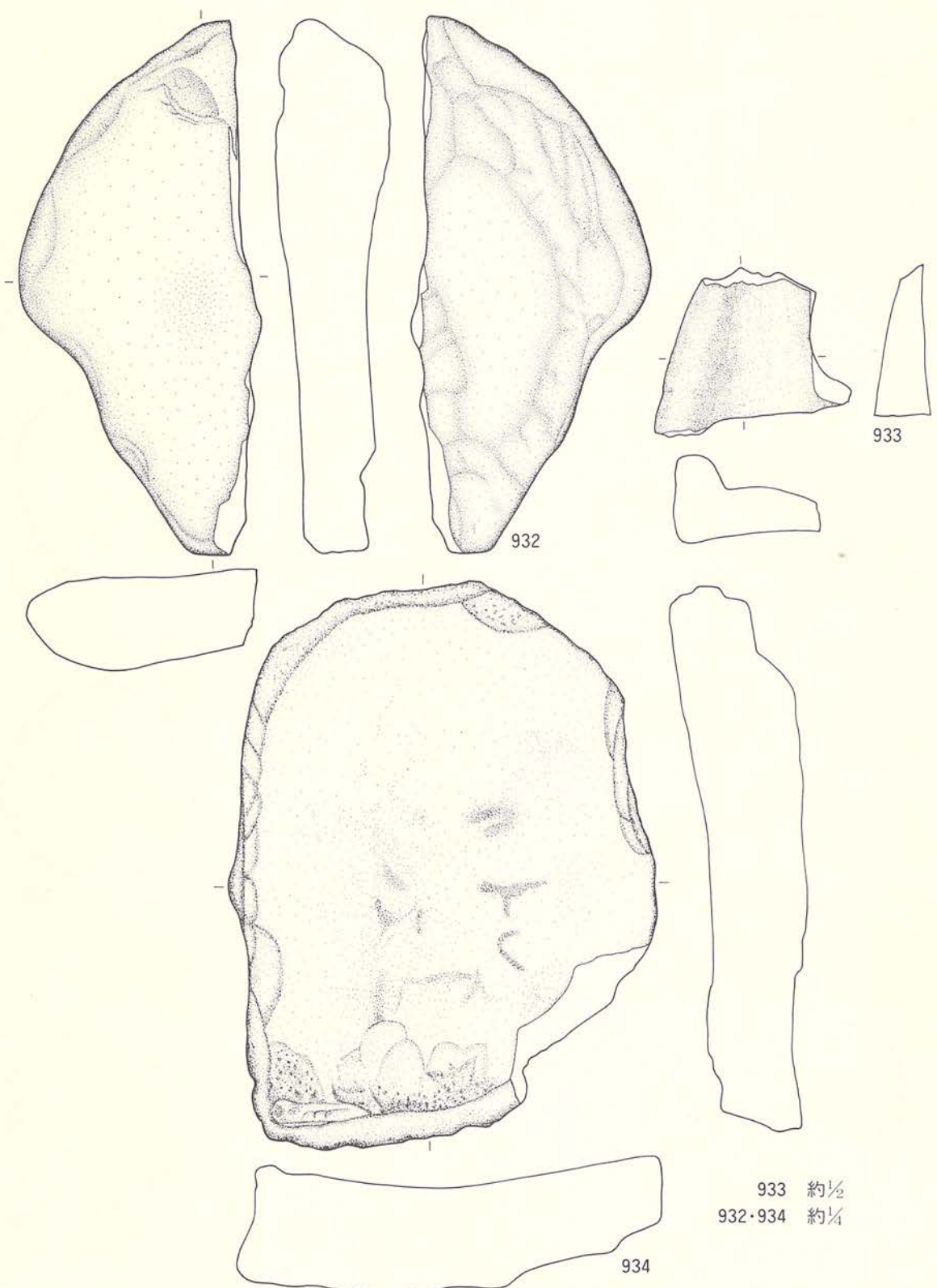
第161図 遺構外出土遺物(遺物番号885~909)



第162図 遺構外出土遺物(遺物番号910~923)



第163図 遺構外出土遺物(遺物番号924~931)



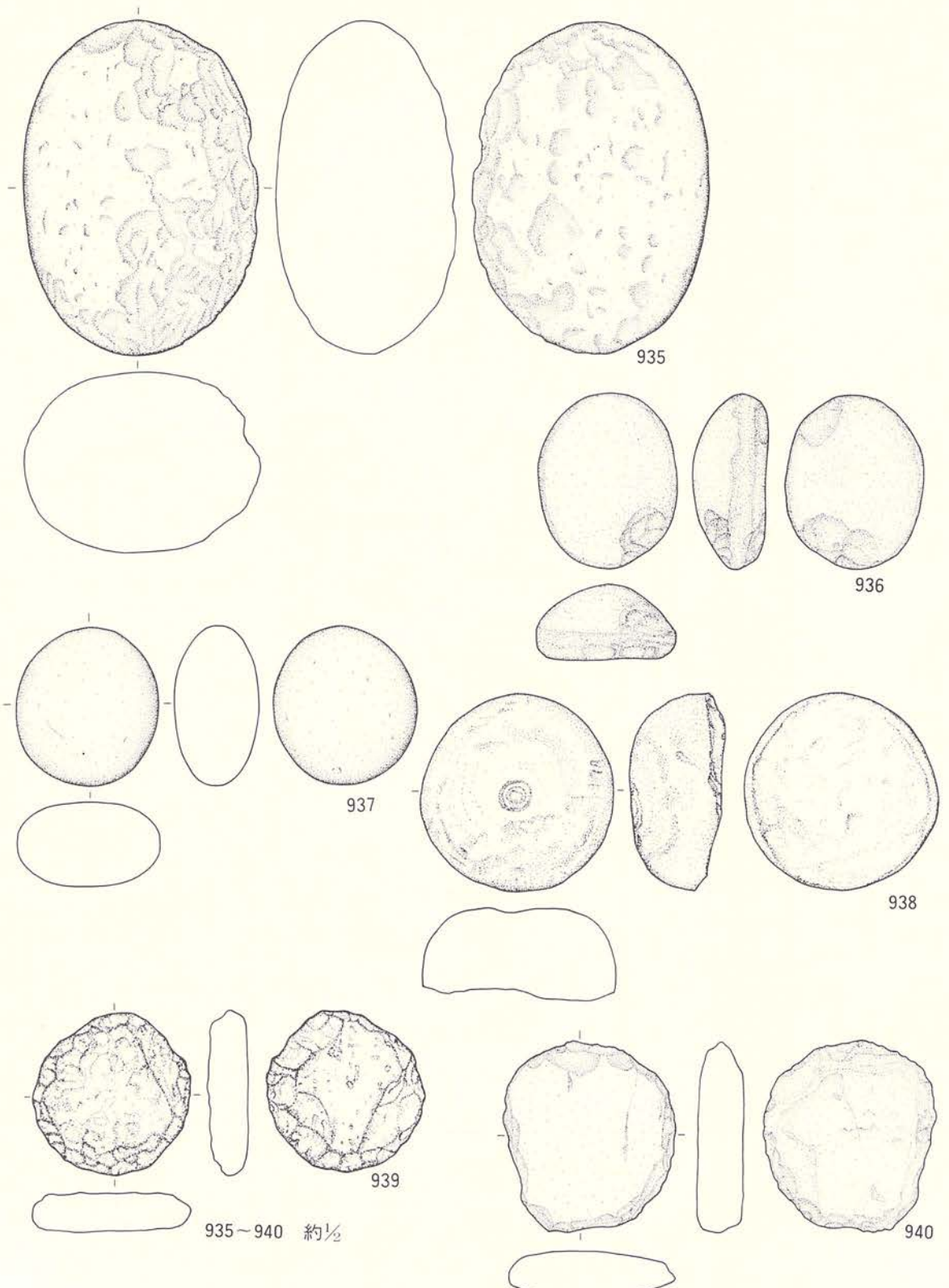
932

933

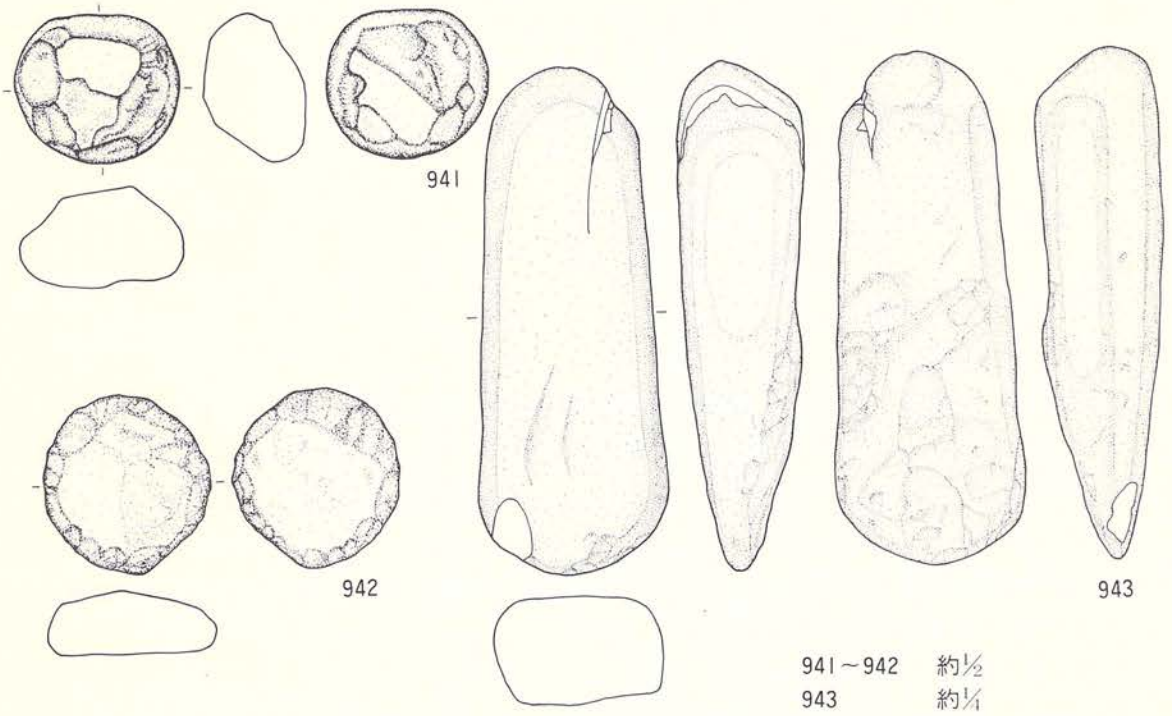
934

933 約 $\frac{1}{2}$
932・934 約 $\frac{1}{4}$

第164図 遺構外出土遺物(遺物番号932~934)



第165図 遺構外出土遺物(遺物番号935~940)



第166図 遺構外出土遺物(遺物番号941~943)

VI ま と め

1. 遺構について

(1) 縄文時代の住居跡

① 前期の住居跡

出土遺物、切り合い関係から、明確に前期の住居跡と断定されたものは3棟（F I—1住、K I—1住、K I—2住）である。さらに掘り込みの状況、形状、埋土状況から前期と考えられる住居跡（J I—2住、J I—7住）が検出されているが、時期決定に足りる遺物は得られなかった。

ここでは遺物を伴い、形状が明確なF I—1住居跡（前期後半期）とK I—1住居跡（前期前半期）について記述する。

●形状、規模、柱穴配置について

K I—1住居跡は形状が隅丸長方形を呈し、規模は短軸最大幅が6.1m、長軸は推定で14m前後と考えられる大型の住居跡である。床面は二段となり、中央部は約15cmの段差をもって低くなる。壁下には周溝が巡る。柱穴は支柱穴が床面段差部分に、短軸に沿って2個一対に配される。また壁下周溝内には支柱穴がほぼ等間隔に配されている。炉は地床炉で、長軸中央部に沿って3基検出されている。この住居跡の形状、床面部の構造は、江釣子村鳩岡崎遺跡で検出された大型住居跡に類似するものである。

F I—1住居跡は形状が楕円形を呈し、規模は3.3×5.1mの住居跡である。壁下に柱穴を配す。炉は土器埋設炉である。斜面下方の壁下床面は踏み堅められ、2個の柱穴が遺構外に張り出すことから、この部分が入出口と考えて間違いなからう。この住居跡の北壁際の柱穴をみると、部分的ではあるが壁下と壁寄りに列を異にする柱穴列が存在し、さらに住居内に検出されたピットNo1～No3は、住居跡居住時には既に閉覆されていた可能性が強いことから推定すると2時期の建て替えがあった遺構かもしれない。

●当遺跡と一連をなす叭屋敷1a・1b遺跡から検出された前期の住居跡について

叭屋敷1a遺跡からは、前期前半期に位置づけられる開口部径2.6×3.4mの隅丸長方形の住居跡1棟が、また叭屋敷1b遺跡からは、前期前半期に位置づけられる開口部径2.5×2.2mの楕円形の住居跡と、開口部3.2×2.6mの隅丸等辺台形の住居跡が検出されている。

●県内で検出された前期の大型住居跡

これまでに県内で検出された前期の大型住居跡は、前期前半期のものが二戸市中曾根遺跡と

松尾村長者屋敷遺跡から、前期後半期のものが松尾村野駄遺跡、長者屋敷遺跡、江釣子村鳩岡崎遺跡から検出されている。

㊦ 中期後葉から中期末葉の住居跡

4棟（J I—4住、J I—5住、J I—6住、K II—1住）検出されている。これらのうちJ I—4・J I—5・J I—6住居跡は宅地跡から検出されたもので、J I—5・J I—6住居跡はほとんど破壊されていたものである。形状及び規模が判明した住居跡は、J I—4住居跡とK II—1住居跡の2棟であり、この2棟について記述する。

●形状、規模、柱穴配置について

J I—4住居跡は、開口部が3.1mのほぼ円形を呈する住居跡で、斜面下方にあたる東壁寄りに出入口状施設をもつ。柱穴配置は東西南北壁寄りにそれぞれ2本ずつの計8本の八角形状の配置となる。

K II—1住居跡は、開口部が4.2×4.4mの隅丸方形を呈する住居跡である。斜面下方にあたる南東壁の複式炉前庭部はやや張り出し、2個一対の柱穴を伴い、踏み堅められていることから出入口状施設と考えてよからう。柱穴配置は5本か6本で構成され、五角形か六角形状の配置となる。

㊧ 後期後半から後期末葉の住居跡

後期後半から後期最終末に位置づけられる住居跡は、建て替えを含めて計27棟検出されている。これらのうち壁下床面に支柱穴あるいは支柱穴を配している住居跡が20棟と圧倒的に多い。また、2時期から4時期の建て替えが確認された住居跡が4棟、出入口状施設をもつ住居跡が4棟存在する。

●形状および規模

形状は円形から楕円形を呈する。規模は最小の住居跡で開口部径約3m、最大の住居跡で開口部径約8mであるが、開口部径5m前後の住居跡が多く、9棟を数える。

●柱穴配置（第167図）

支柱穴の配置が明らかになった住居跡は8棟（H I—4住、H I—8a住、H I—8c住、H I—9住、H II—1住、I I—2住、I I—4住、I II—3住）である。

支柱穴の配置をみるといずれの住居跡も炉を囲む配置となる。住居跡の規模と支柱数の関係を見ると、開口部径が5m前後の住居跡7棟のうち、3本で三角状の配置となるもの1棟（I I—2住）、4本で四角状配置となるもの6棟と、4本柱を基調とする配置が圧倒的に多い。また開口部径が7mの住居跡（H I—8a住）は5本で五角形状の配置となっている。

また壁下に配している支柱穴をみると、全周に配しているものと、斜面の上方に配し、斜面下方になって途切れる配置とがみられる。

● 炉の形態と位置

この時期に位置づけられる住居跡で炉が確認されたものは16棟、炉の位置が確認された住居跡は12棟である。

石囲い炉をもつ住居跡は9棟、地床炉をもつ住居跡は7棟で大差は感じられない。炉の位置については、床面のほぼ中央部に位置するもの3棟、中央部からやや斜面下方に寄るもの9棟であり、中央部からやや斜面下方に寄るものが多い。

● 出入口状施設をもつ住居跡（第168図）

4棟検出されている。いずれも開口部径が5m前後の住居跡で、この施設には2つのタイプがある。1つは壁際に数本の柱を柵状に連結して配したと考えられる平行した溝があるタイプ（H I—4住、H II—1住、I II—3住）と、もう1つは壁下床面と壁中間に2個一対の柱を配し、対となる柱間を溝状に掘り込んでいるタイプ（H I—8c住）である。この施設はいずれも斜面下方の壁下にある。この部分を踏み堅めた痕跡は認められない。

この4棟の柱穴配置をみると、支柱穴は4本を基調とし、その位置関係は出入口方向に寄る配置となるが、出入口に近い左右2本は狭い間隔に、奥の2本は広い間隔に配され、出入口方向からみると逆台形状の配置となる。

このような支柱穴の配し方は、居住性から推定すると奥の居住空間を広くする配し方としてとらえられ、また出入口を念頭において推定すると出入口状施設に関連する上屋構造上からの配し方ともとらえられる。

この4棟を時期的にみると、H I—4住居跡が第IV群3類、H II—1住居跡が同群3～4類に、I II—3住居跡が同群2類期に位置づけられる住居跡である。H I—8c住居跡については遺物を欠き断定はできないが、H I—8a・8b住居跡と大きな時期差は考えにくく、4棟ともに瘤付土器全盛期からその前後の時期に絞られそうである。

● 建て替えのある住居跡について（第169・170図）

2時期から4時期の建て替えが確認された住居跡は4棟存在する。H I—2住居跡には列を異にする支柱穴列が3列検出され、さらに床面下に1棟の住居跡が検出された。H I—8住居跡には層を異にする炉が2基検出され、さらに床面下に1棟の住居跡が検出された。I I—1住居跡には壁と異なる支柱穴列が検出された。またI I—3住居跡には列を異にする支柱穴列が3列検出された。これらの建て替えはいずれも拡張されたものである。

H I—2a住居跡とこの床面下から検出されたH I—2d住居跡は、出土遺物からH I—2a住居跡が第IV群2類期に、H I—2d住居跡が同群4類期に位置づけられるもので、この両住居跡の時期差は判明している。

H I—8a住居跡とH I—8c住居跡の時期差については、H I—8c住居跡からの出土遺物を

欠き、遺物からは時期差が確認できなかったが、H I—8c 住居跡の柱穴が、H I—8a 住居跡の柱穴として再利用されていることから、それほどの時期差があるとは考えにくい。このことについて若干説明を加えるとともに、この住居跡の建て替えの特殊性についても補足しておく。

H I—8c 住居跡の柱穴 P₁₃—P₁₄—P₁₅—P₁₆ の 4 本には掘り方が認められた。このことからこの 4 本がこの住居跡の支柱穴を構成することは間違いないところである。この住居跡の柱穴 P₁₃ は H I—8a 住居跡の柱穴 P₂₂ に、P₁₅ は P₂₀ に、P₁₆ は P₂₁ に位置的に合致するもので、H I—8c 住居跡の柱穴 P₁₃、P₁₅、P₁₆ の 3 本は、H I—8a・8b 住居跡の支柱穴として再利用されている。H I—8a 住居跡床面に検出された支柱穴を構成する P₁₈、P₁₉、P₂₀、P₂₁、P₂₂ の 5 本には掘り方は認められなかった。このことから、H I—8c 住居跡を閉覆する際、3 本の柱を建てたまま埋め戻したことになる。さらに H I—8b 住居跡床面は埋め戻した土層が軟弱のまま使用したため、この部分のみが沈下し、再度床面が平坦となるよう補充している（第170図）。

以上のことから、H I—8c 住居跡から H I—8b 住居跡さらには H I—8a 住居跡まで継続的な建て替えが行なわれ、時期的にも大きな差がないことは明らかである。

H I—2 住居跡、I I—1 住居跡、I I—3 住居跡の建て替えは、同一床面に異なる柱穴列をなすところから、それほど大きな時期差はなく、継続的に建て替えが行なわれたものであろう。

これら建て替えられたそれぞれの最新住居跡の時期をみると、I I—3a 住居跡が第IV群 4 類期、H I—8a 住居跡が同群 5 類期、I I—1a 住居跡が同群 1 類期、H I—2a 住居跡が同群 4 類期に位置づけられる。

(2) 古代の住居跡

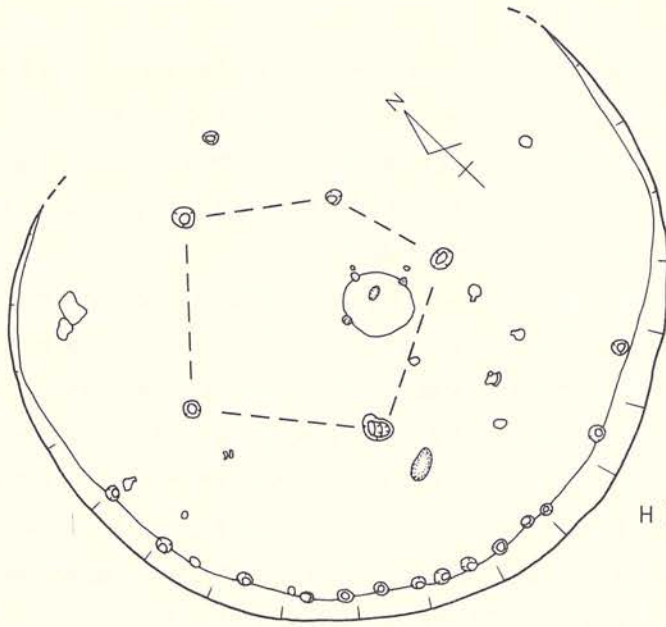
奈良時代の住居跡 2 棟、平安時代の住居跡 2 棟、時代不明の住居跡 1 棟の計 5 棟が検出された。5 棟とも全プランは確認できなかった。

カマドの方向性についてみると、奈良時代住居跡のカマドは 2 棟とも北西むきである。平安時代住居跡のカマドは 1 棟が南むき、カマドを持たない住居跡 1 棟である。他の 1 棟は耕作により削剝され検出されていない。

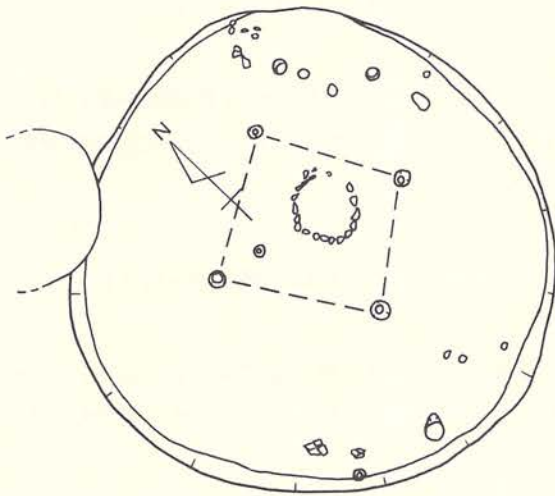
(3) ピット

ピットは 85 基検出された。これらを断面形で大別すると、フラスコ形を呈するピット 35 基、ビーカー形を呈するピット 22 基、浅鉢形を呈するピット 8 基、皿形を呈するピット 9 基、その他 11 基で、フラスコ形を呈するピットが全体の 41% を占める。

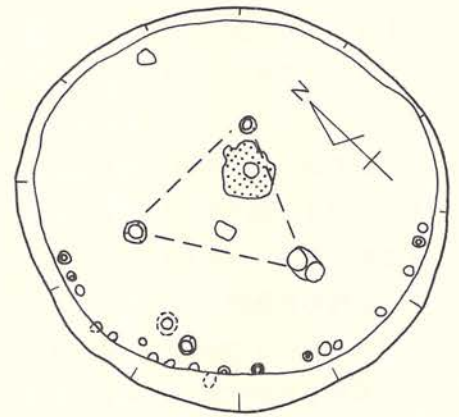
区画毎に検出された基数をみると、F I 区から 8 基、G I・G II 区から 12 基、H I・H II 区から 11 基、I I・I II 区から 39 基、J I・J II 区から 15 基検出され、それぞれの基数は住居跡検出棟数とほぼ比例する。



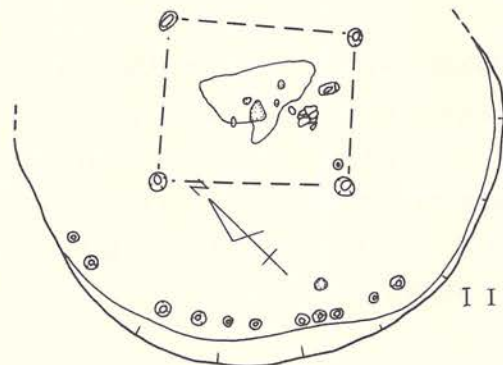
HI-8a 住居跡



HI-9住居跡

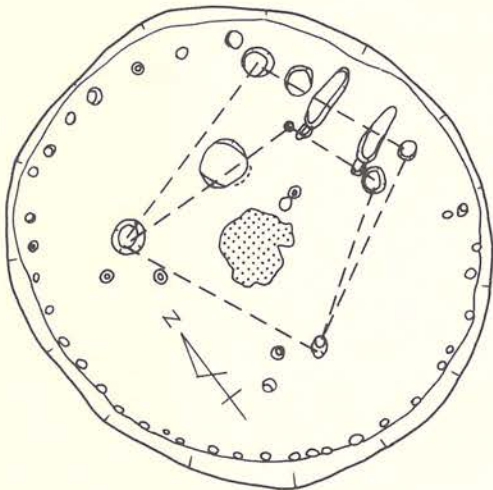


II-2住居跡

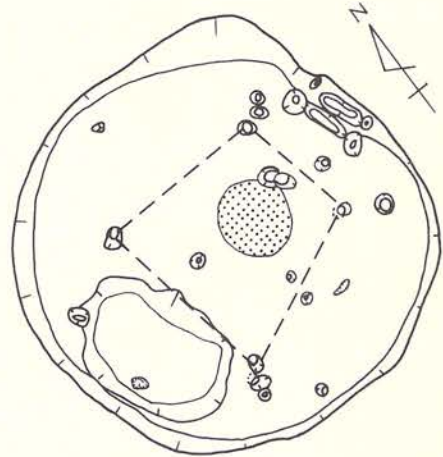


II-4住居跡

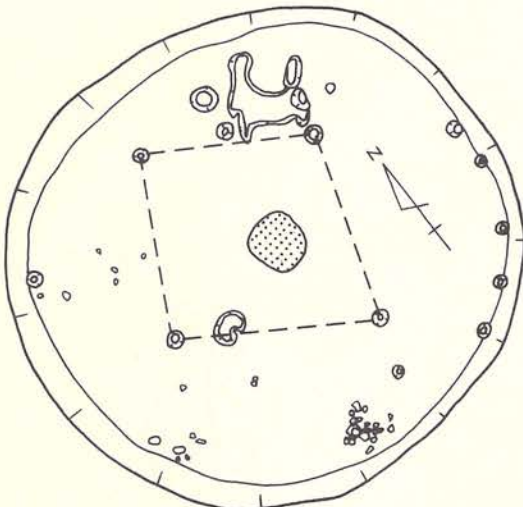
第167図 柱穴配置



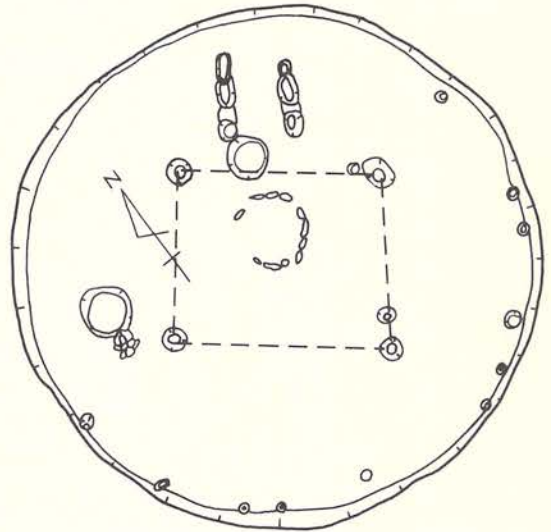
H I-4住居跡



H I-8c住居跡

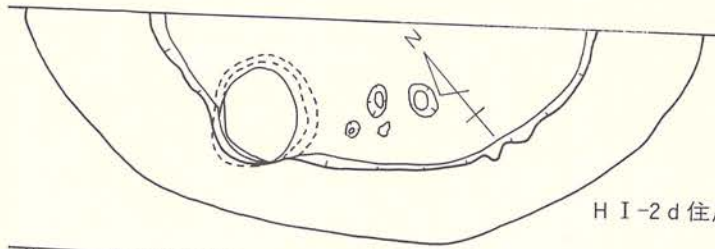


H II-1住居跡

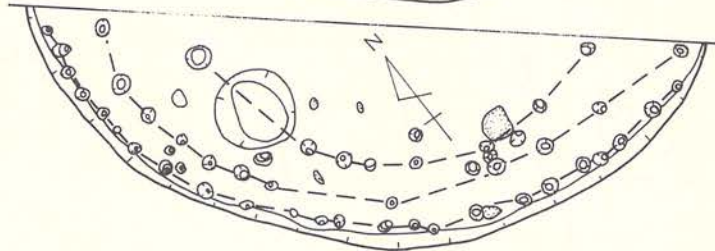


I II-3住居跡

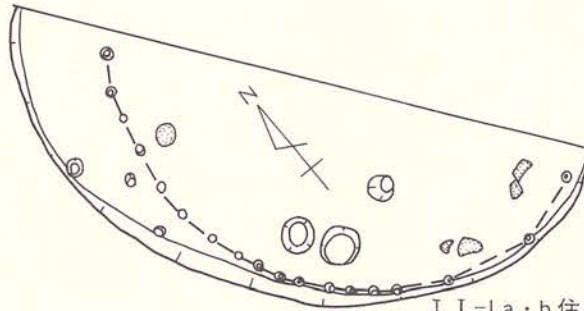
第168図 出入口状施設をもつ住居跡の柱穴配置



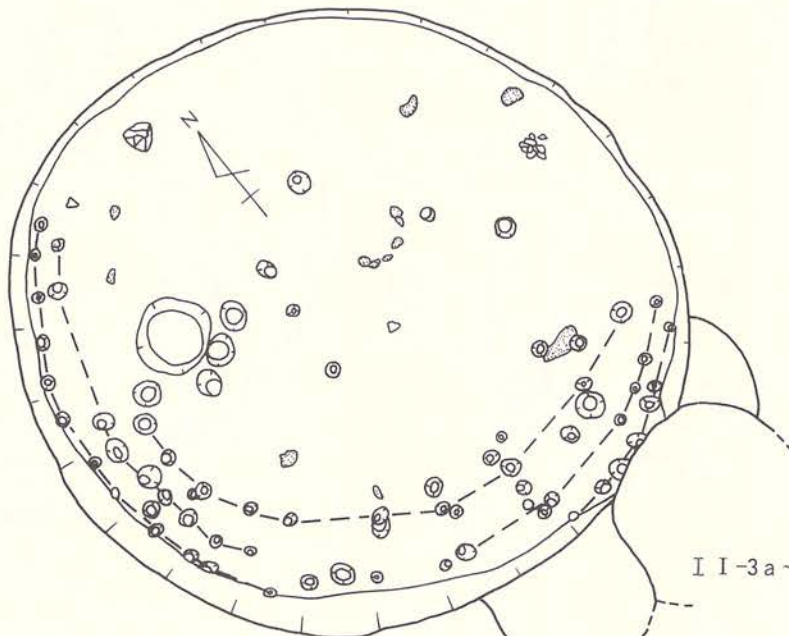
HI-2d 住居跡



HI-2a~c 住居跡

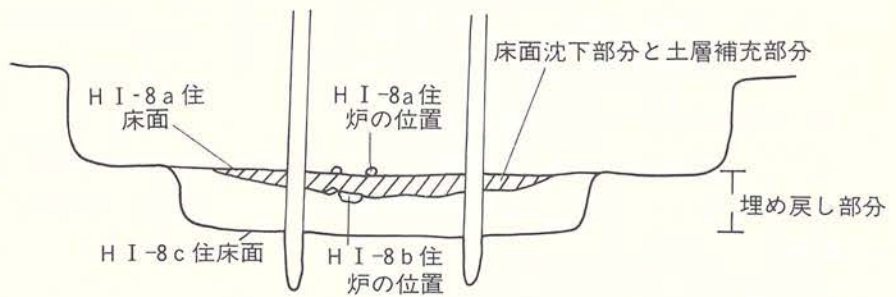
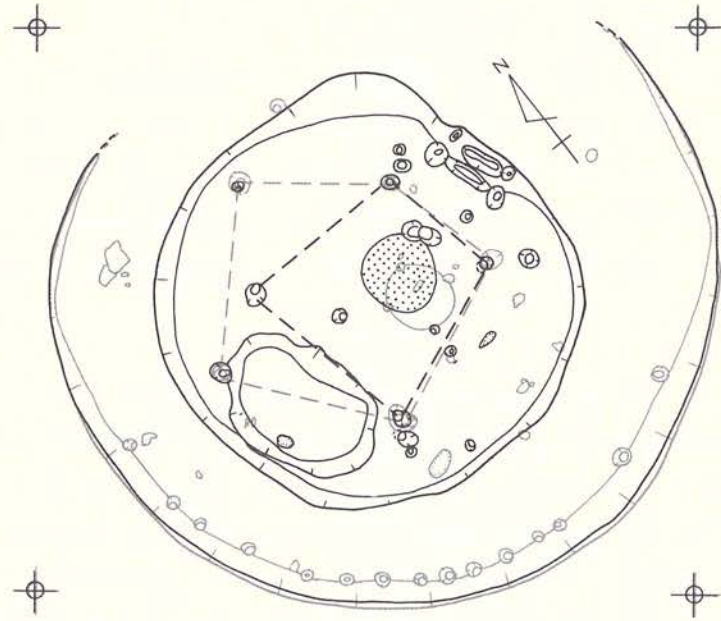


II-1a・b 住居跡



II-3a~c 住居跡

第169図 拡張された住居跡の支柱穴列



第170図 H I - 8住居跡建て替えの特殊性

出土遺物によって時期が判明したピットは少数であるが、F I 区から検出されたピットは主に晩期前葉に、I I・I II 区から検出されたピットは主に後期後半から末葉に位置づけられるピットであろう。

●底面に柱穴をもつピット

J I—51ピットとJ I—52ピット底面壁際に柱穴が検出された。J I—51ピットは5本の柱穴で、J I—52ピットは3本の柱穴で構成される。J I—51ピットの柱穴は掘り込みが浅く、柱を簡略的に据えた状況に見えるが、J I—52ピットの3本の柱穴は掘り込みも深く、その角度は中央部底面から約180cm上方で交わる角度に一定して掘り込まれている。この交点は開口部から約90cm上方の位置となる。J I—51ピットからは晩期前葉に属する鉢形土器1個体と深鉢形土器3個体がセットとなって出土している。

この2基のピットは上屋をもつピットであろう。

(4) 当遺跡と一連をなす吠屋敷 I a・I b 遺跡の時期別占地について (第171図)

当遺跡は昭和55年度に発掘調査された吠屋敷 I a遺跡および昭和56年度に発掘調査された吠屋敷 I b遺跡と一連する遺跡である。この3遺跡から検出された縄文時代住居跡を時期別にみると中期後葉から後期初頭の住居跡と、後期後半から後期末葉の住居跡が、斜面を異にする面にまとまった群で形成されていることが明らかになり、占地的面で注目される。

中期後葉から後期初頭の住居跡（主に中期末葉の住居跡）は、標高181～169mの東から南東緩斜面にまとまった群で形成されているのに対し、後期後半から後期末葉の瘤付土器を伴う住居跡は標高174～171mの東から北東緩斜面にまとまって構築されている。

また前期の住居跡は標高191～190mの南東緩斜面に2棟、175mの南東緩斜面に1棟、169mの緩斜面に数棟点在する。

(5) 中期末葉から後期末葉までの炉の位置と柱穴構成の変遷傾向

軽米町で発掘調査された遺跡の報告例をみると、吠屋敷 I a遺跡からは中期末葉の住居跡が、君成田IV遺跡からは後期前葉の住居跡がまとまって検出されている。また当遺跡からは後期後半から後期末葉の住居跡がまとまって検出された。これらの住居跡を時期別にみると、炉の位置と柱穴の構成に変遷傾向を見出すことができる。このことについて若干ふれておく。

① 中期末葉の炉の位置と柱穴構成

吠屋敷 I a遺跡から検出された住居跡のうち、形状が明確で炉の位置が明確なもの22棟と当遺跡から検出された住居跡1棟の合計23棟を対象として記述する。形状は円形、楕円形、隅丸方形状のものがある。

●炉の形態と位置

23棟のうち石囲い炉をもつ住居跡9棟、複式炉をもつ住居跡14棟で、複式炉をもつ住居跡が

圧倒的に多い。複式炉を大別すると、aタイプ一炉・前庭部とも礎で囲んでいるもの、bタイプ一炉を礎で囲み、前庭部を扇状から台形状に浅く掘り込んでいるものがある。前庭部内の状況を見るとガリガリに踏み堅められているものが全数を占め、部内には焼成痕の認められないものが多い。位置をみると石囲い炉、複式炉ともに斜面下方の壁際に寄るか、前庭部が壁下まで伸びるものが22棟、逆に斜面上方に寄るもの1棟である。前庭部が壁下まで伸びる住居跡の中には、壁外にはみ出す掘り込みをもつもの2棟が含まれている。

以上のように、この時期の複式炉前庭部は、斜面下方の壁際・壁下に伸び、部内がガリガリに踏み堅められ、焼成痕の認められないものが多いこと、なかには壁外にはみ出す掘り込みをもつものも認められることなどから推定すると、炉を構成する部分とみるより出入口状施設としての可能性が強く、この施設は炉と付随関係となることがこの時期の特徴となるとみてよいのではあるまいか。この“複式炉”は後期初頭まで認められる。

●柱穴配置

23棟のうち柱穴配置が明確になっている住居跡は12棟である。構成本数をみると3本～8本の構成となり、その傾向は見い出せない。壁際の支柱穴はない。

㊦ 後期前葉の炉の位置と柱穴構成

君成田IV遺跡から17棟検出されており、この棟数を対象として記述する。形状は円形、楕円形、隅丸方形、長形状のものがある。

●炉の形態と位置

炉の形態とその位置が明確になっている住居跡は12棟である。炉の形態は地床炉をもつ住居跡2棟、石囲い炉をもつ住居跡8棟、1個の礎を伴う地床炉をもつ住居跡2棟である。中期末葉から後期初頭までみられた“複式炉”の形態を示すものは見られない。位置をみるとほぼ斜面下方壁側に寄るものが10棟と多く、壁際まで寄るもの1棟、床面中央部に位置するもの1棟である。

ほぼ斜面下方に寄る10棟についてみると、方形状の石囲い炉をもつもの4棟、「コ」の字状の石囲い炉をもつもの2棟、地床炉に1個の礎を伴うもの2棟、地床炉の形態を示すもの2棟となる。この中の1棟には斜面下方の壁下に配石の施された出入口状が、またもう1棟には方形状の石囲い炉の斜面下方に出入口状と考えられる極めて堅くしまった横長の凹みが検出されている。

以上のことから、この時期においては、中期末葉にみられた炉とこれに付随する施設は特に認められず、石囲い炉の形態を基調としながらも、その構成礎には簡略化の傾向がみられる。

●柱穴配置

柱穴配置が明確になっている住居跡は3棟存在する。3棟ともに開口部4～4.5mの住居跡

で4本の構成となっている。他に開口部が約7mの住居跡は5～6本の構成となると推定している。また開口部4m足らずの住居跡1棟には壁下に支柱穴が検出されている。

㊦ 後期後半から後期末葉の炉の位置と柱穴構成

既に記述したように、住居跡の形状は円形から楕円形を呈する。炉の形態は地床炉か石囲い炉となり、その両者の数に大差は感じられない。位置は床面中央部か中央部からやや斜面下方に寄るもので占められ、壁側あるいは壁際に極端に寄るものはみられない。支柱穴は4本を基調とするものが多く、壁下に支柱穴をもつ住居跡が目立つ。また斜面下方の壁下に入出口状施設をもつ住居跡も出現する。

この入出口状施設の系統を考えるに、仮に中期末葉の“複式炉の前庭部”が入出口状施設として間違いないものとすれば、炉に付随した入出口状施設から、後期前葉に炉と入出口状施設との分立がなされ、この時期に至って完全に分立した構成へと変化する1つの仮説が成り立つ。

2. 遺物について

(1) 瘤付土器の相伴関係とその変遷傾向について（第172～182図）

当遺跡から出土した土器は瘤付土器がその大半を占める。遺構から出土した遺物のなかには床面を中心として注口土器、深鉢形土器、台付鉢形土器などが相伴関係となって出土している。これらいくつかの相伴土器をみると、器形・文様に変遷傾向をみることができる。特に注口土器においてはそれが顕著に認められる。

この変遷傾向については、報告書の紙数の関係もあり、「紀要 VI」に詳しく述べた。ここでは土器集成図に沿って各類の特徴のみを記述する。

1 類土器

注口土器 器形— 一体部が球状に張り、口頸部が短く直立する。注口部付け根は「L」字状に太くなる（146・295）。底面は落ちつきが良い。

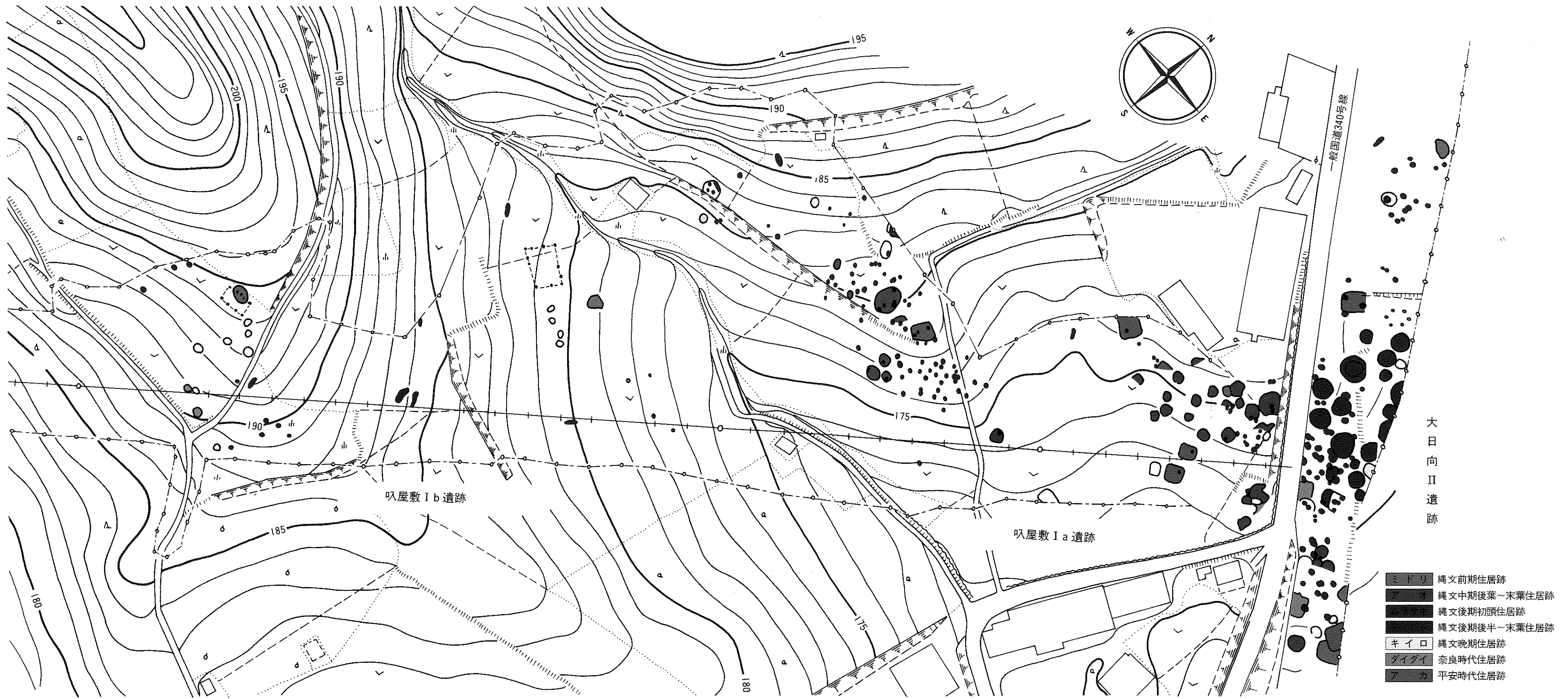
文様— 横位に展開する木葉状入組文（291）、弧带状入組文（146・292）、変形長方形の磨消が施されているもの（295）がある。

壺形土器 器形— 注口土器とほぼ同じである。

文様— 三角形の磨消が施されている（687）。

深鉢形土器 器形— 一体部にくびれをもつ。底面は落ちつきが良い。

文様— 一体部下半に「く」の字状の帯縄文が施されているもの（688）と地文のみのもの（293）がある。



第171図 大日向II遺跡・吹屋敷I a遺跡・吹屋敷I b遺跡の時期別占地 (S = 1/1,000)

2 類土器

注口土器 器形—1 類土器に比べ、最脰部が体部上半に移り、口頸部が長めになり開きぎみに立ち上がる。器高も高くなる。注口部付け根下部は瘤状のふくらみになるか（484）、ふくらみがとれる（458）傾向が見られる。底面は落ちつきが良い。

文様—木葉状入組文が2つに割れて弧带状入組文に変化する過程が認められる。文様はほぼ横位に展開する。底面は落ちつきが良い。

壺形土器 器形—注口土器にほぼ同じである。

文様—口頸部に帯縄文が施されている。

深鉢形土器 器形—体部上半に「く」の字状のくびれをもち、口縁部が内側に反る。

文様—口縁部とくびれ部に帯縄文が施されている。

3 類土器

注口土器 器形—壺形の注口土器（102・329・349・427）、台付鉢形の注口土器（107・342）、胴長の壺に穿孔を有する土器（227）、深鉢形の注口土器（699）と器種が豊富である。壺形注口土器の器形は2類土器に比べ、最脰部から底部へ曲線的にすぼみ、底面が狭く、落ちつきが悪くなる傾向がみられる。台付鉢形注口土器の器形は体部上半に「く」の字状の浅いくびれをもち、口唇部に規模的な角状突起が配される。前類にみられた注口部付け根下部の瘤状ふくらみは、この類になって貼瘤になる。大型が目につく。

文様—左下がり・右下がりの弧带状入組文が主体である。貼瘤は口頸部から体部に多用される。

壺形土器 器形—体部が球状に脹り口頸部が開きぎみに立ち上がるもの（103）と体部上半が脹り口頸部が直立するもの（104）がある。いずれの土器も底面が狭く落ちつきが悪い。

文様—地文のみのもの（103）、帯縄文主体のもの（104）、弧带状入組文が施文されるもの（429）がある。

深鉢形土器 器形—精製土器には体部にくびれをもつもの（113・144・333）とくびれをもたないもの（331・337）がある。粗製土器は底部から口縁部にほぼ直線的に開くものが多い（110・228）。体部にくびれをもつ土器の器形には、体部中位で極端にしまるもの（113）と体部上半に浅いくびれをもつもの（333）とがある。精製土器には、口唇部に角状突起を規則的に配するものが多い。

文様—精製土器は左下がりの弧帯状入組文が主体であるが、格子状入組文の施文されるもの(337)もある。

4 類土器

深鉢形土器 器形—体部に深くびれをもつもの(61)、浅くびれをもつもの(166・490・719)、くびれが器裏には認められるが器表にほとんど現られないもの(444)があり、この類になってくびれがとれる傾向がみられる。

文様—右下がりに流れる帯状の入組文が主体であるが、沈線で区画された半円状の文様が施文されているもの(490)もある。貼瘤は衰退する傾向にある。

台付鉢形土器 器形—体部にごく浅くびれをもつが、器表にはほとんど現われないもの(162・167)である。

文様—瘤を抱く左下がりの入組文が施文されるもの(162)、ほそい帯縄文主体のもの(167)がある。

5 類土器

注口土器 器形—口頸部が開きぎみに直線的に立ち上がり、体部は最腹部から底部が逆台形状になる。

文様—磨消された三叉文と変形菱形文が施文されているもの(37)と隆線で楕円状の入組文と「I」字状の沈刻が施文されているもの(376)がある。

台付深鉢・鉢形土器 器形—体部にゆるやかな曲線のくびれをもつもの(239・723)とくびれをもたないもの(256)がある。

文様—右下がりの帯状入組文が略図化されて施文される。

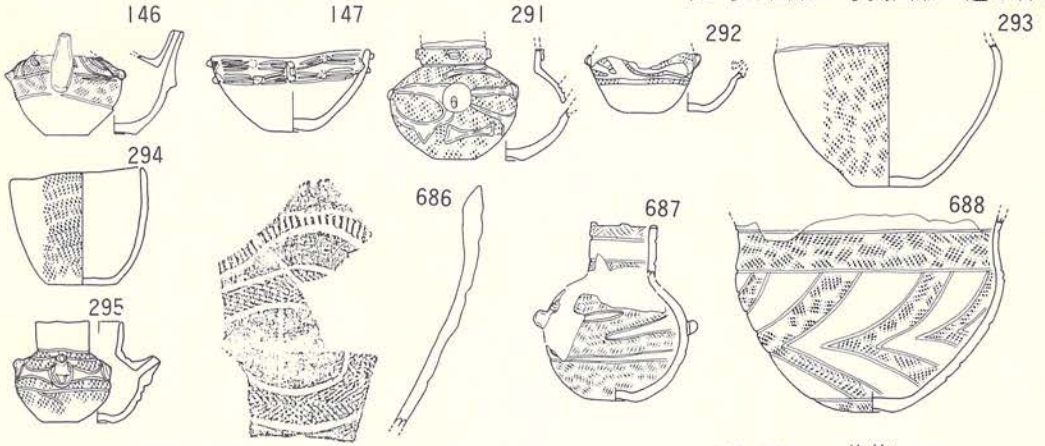
以上に述べた1類土器から5類土器の文様の変遷傾向についてみると、木葉状入組文→横位に展開する弧帯状入組文→斜位に展開する弧帯状入組文→斜位に展開する帯状入組文→略図化された入組文と順次変化している。

また晩期前葉の土器に施文される三叉文は、4類土器の区画沈線および磨消部分に内在されているものと考えられ、5類土器に至って出現をみる(紀要VI参照)。

(2) 遺構外遺物が集中的に分布する場所の性格について

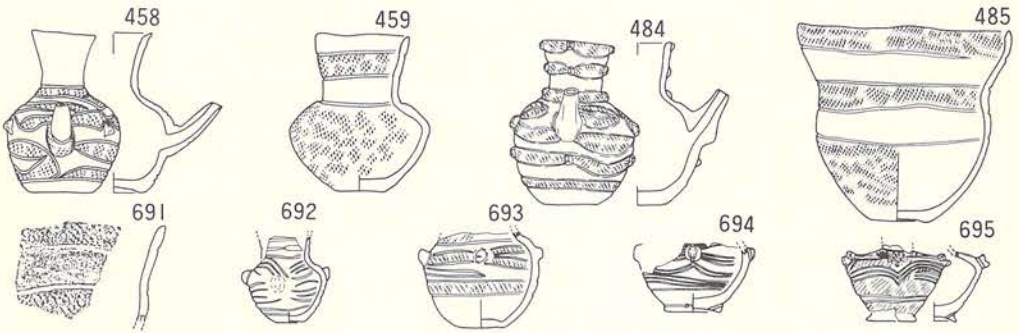
晩期に属する土器は、G I 区の配石遺構からG I—53ピット周辺に集中的に散乱し出土した。この中には亀形土製品、異形土製品をはじめ、製作途中の石鏃や、剥片の一端に剝離調整を施した石錐が1箇所からまとまって出土している。これらのことからこの範囲は、土器・石器製作の“場”あるいは“広場”的役割をもった場所と考える。

(番号は図版・写真図版の通し番号)



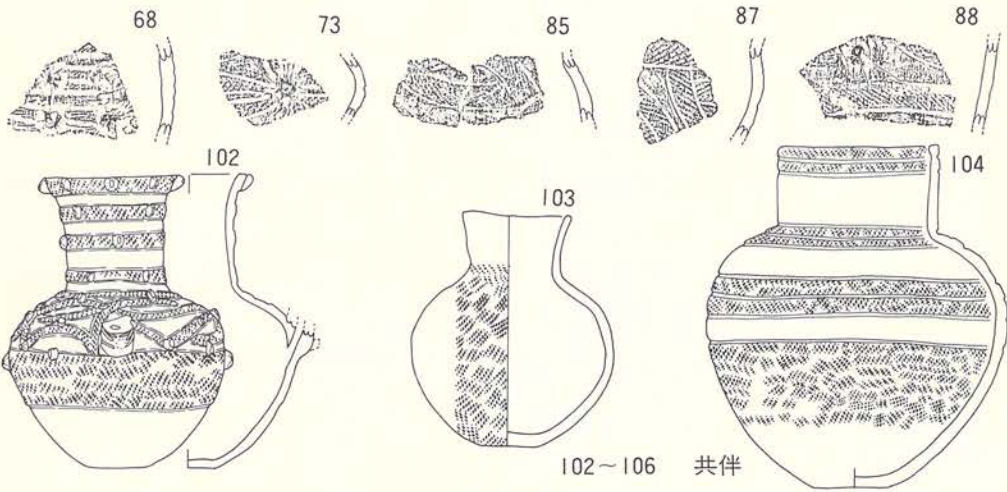
1 類土器

146・147 共伴
291～294 共伴



2 類土器

484・485 共伴

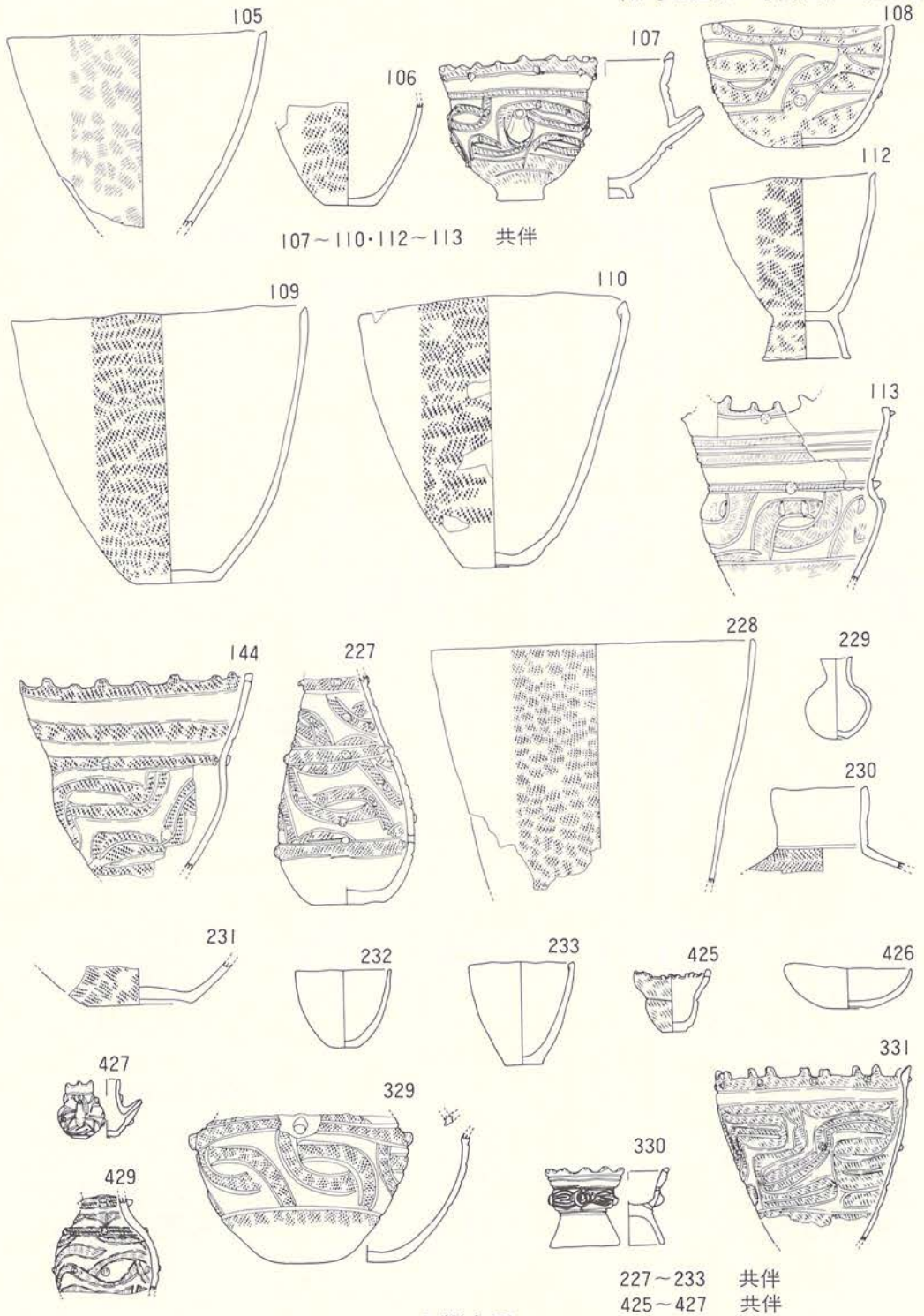


3 類土器

102～106 共伴

第172図 第IV群土器集成図(1)

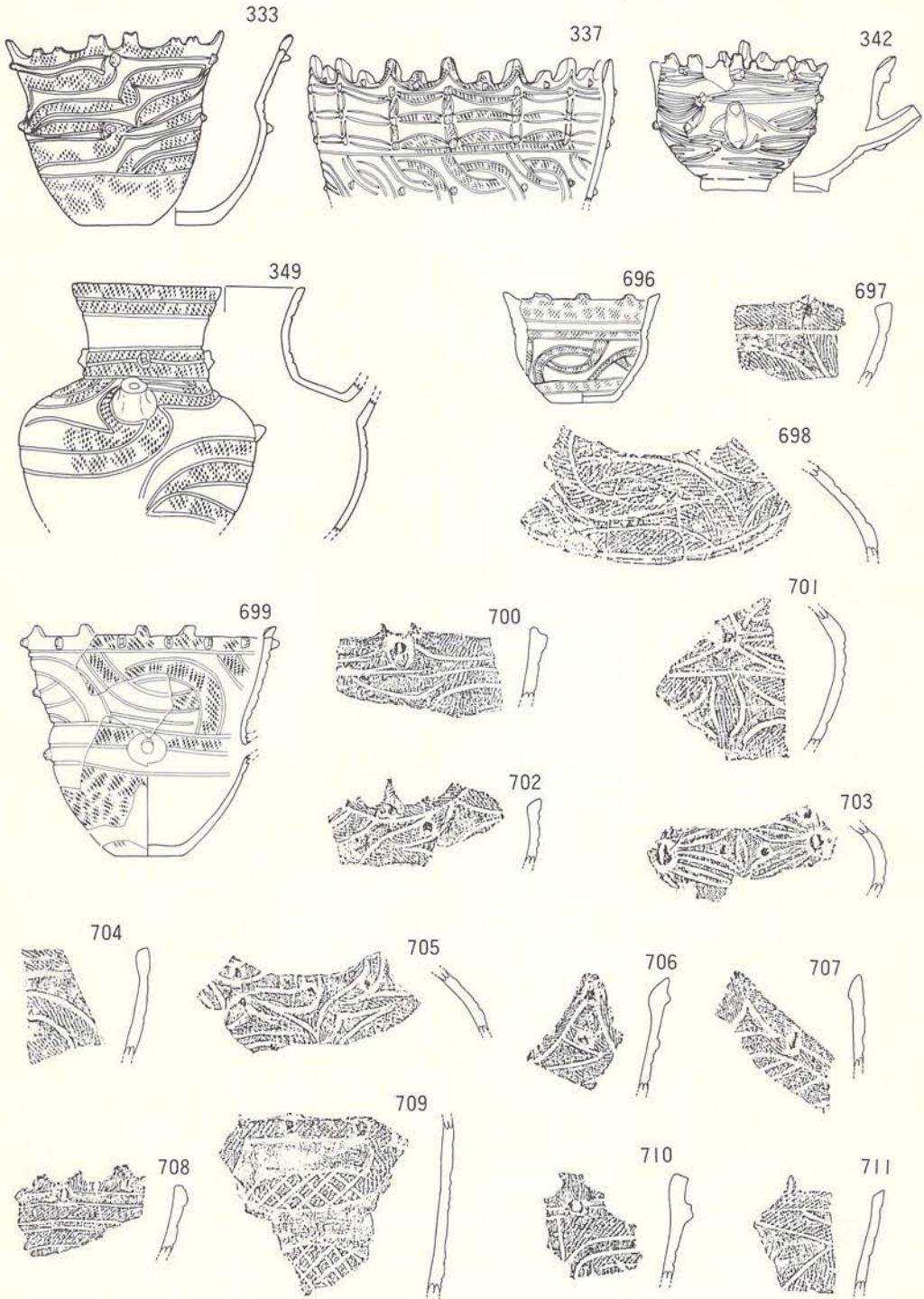
(番号は図版・写真図版の通し番号)



3 類土器

第173図 第IV群土器集成図(2)

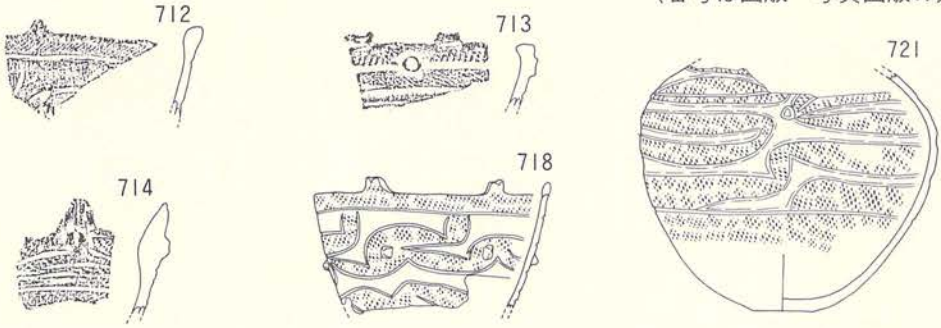
(番号は図版・写真図版の通し番号)



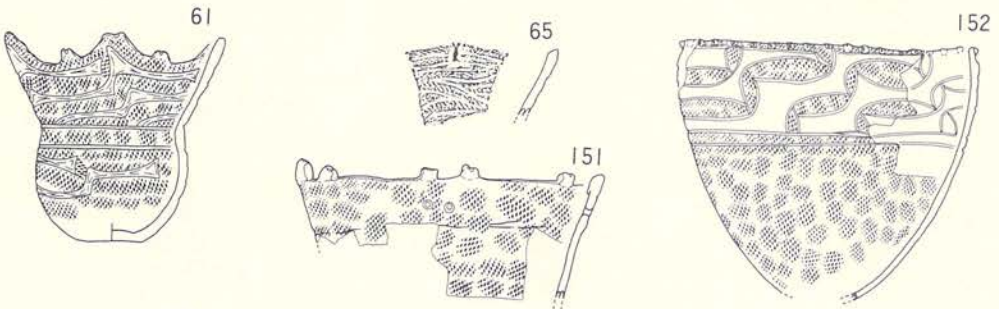
3類土器

第174図 第IV群土器集成図(3)

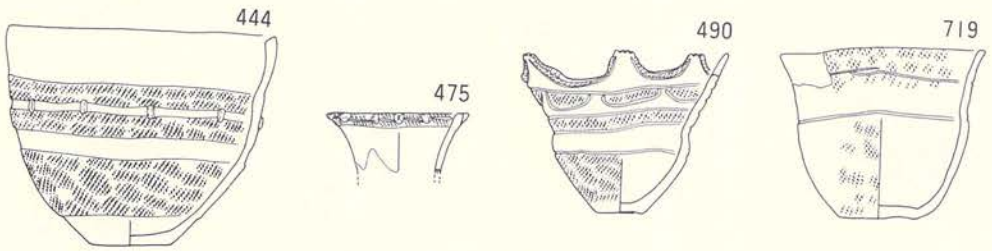
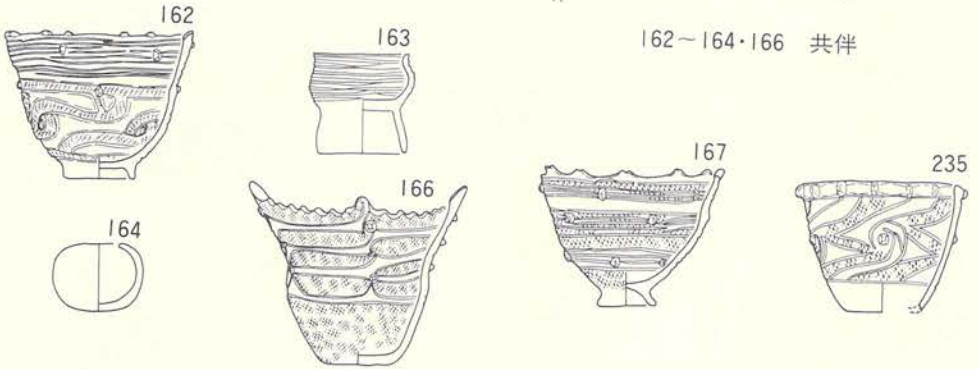
(番号は図版・写真図版の通し番号)



3 類土器



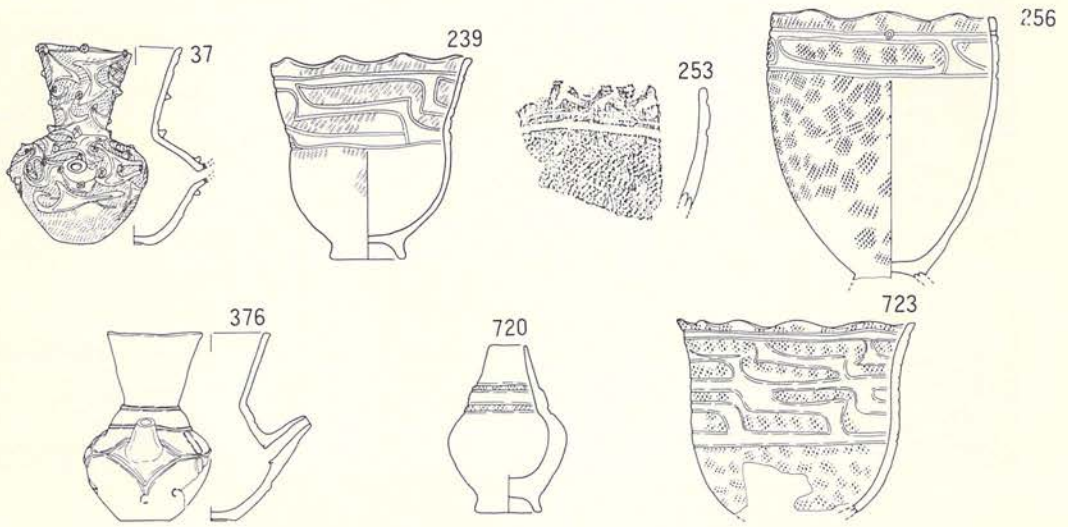
162~164・166 共伴



4 類土器

第175図 第IV群土器集成図(4)

(番号は図版・写真図版の通し番号)



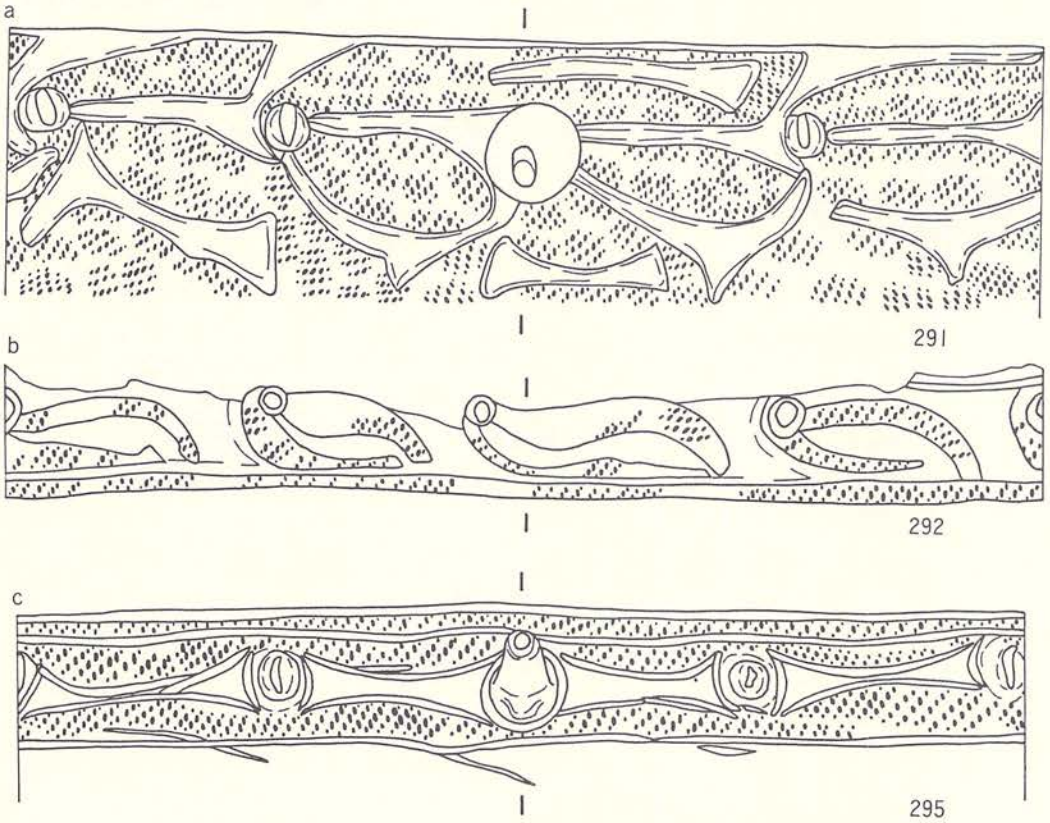
5 類土器

第176図 第Ⅳ群土器集成図(5)

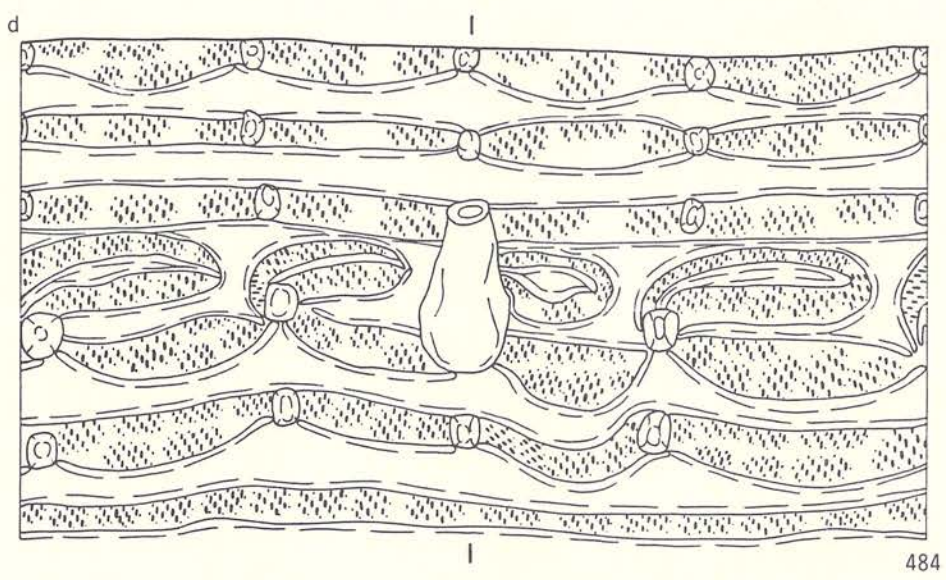
(3) 注口土器の中に残存していた粘土について

I II-3 住居跡床面直上から出土した完形の注口土器(484)の中には、約1/3の容量にあたる粘土が残存していた。この粘土はこの土器が廃棄されたあとに入ったとは考えられず、使用時の残存と思われる。その粘土は、粒子を含まない良好なものであった。

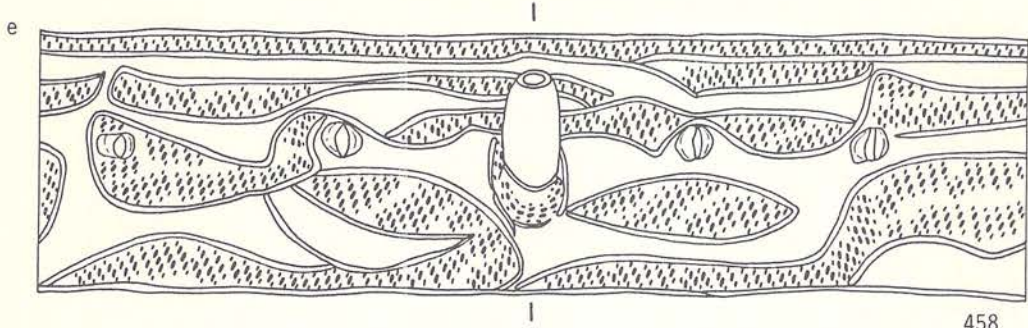
土器製作時に粘土を流し込む用具として使用したものであろうか。



1 類土器の文様(a~c)

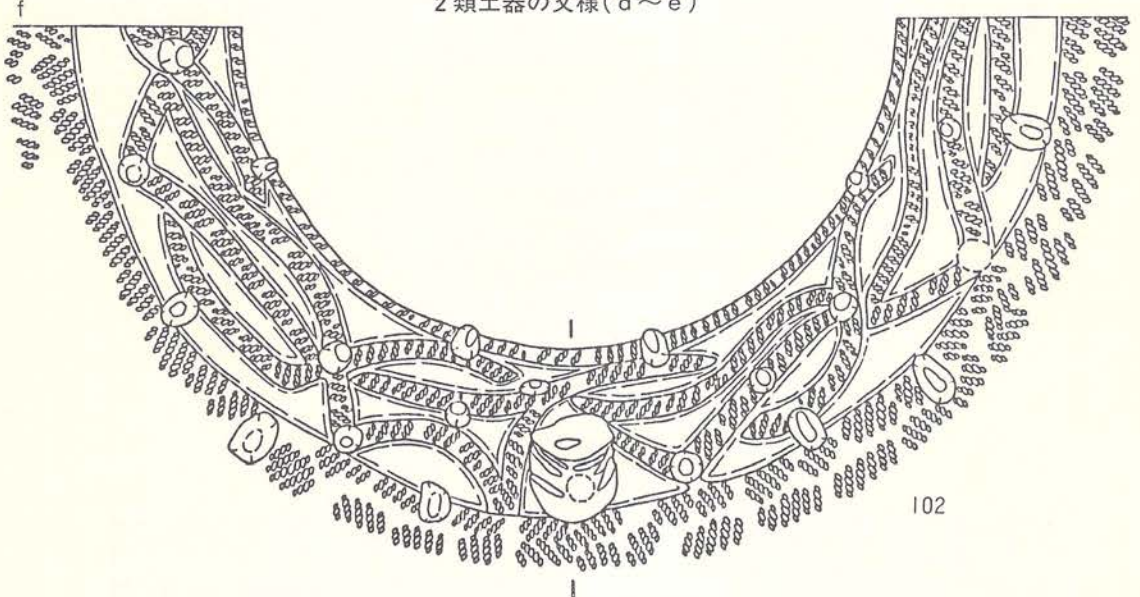


第177図 第IV群土器文様の変遷傾向(1)

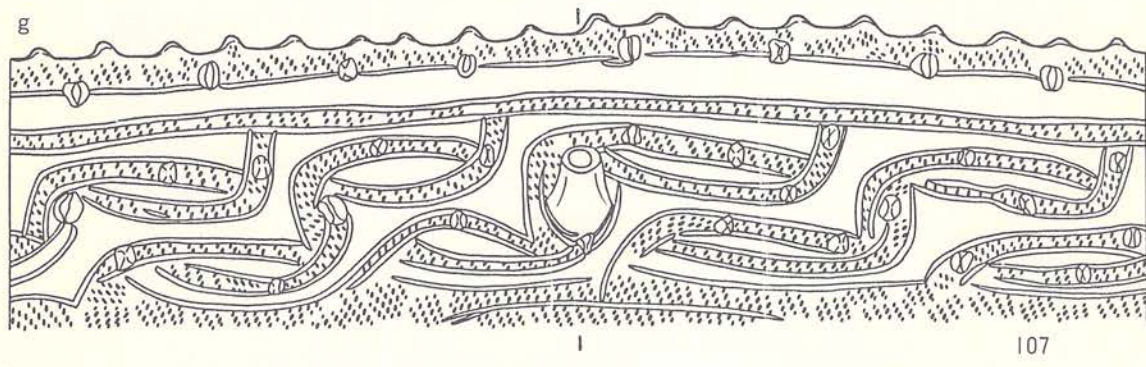


458

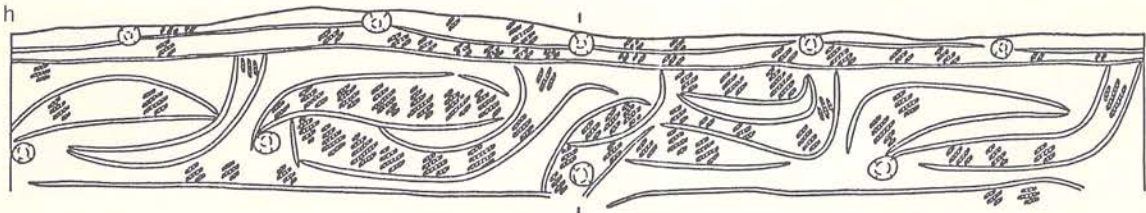
2類土器の文様(d~e)



102

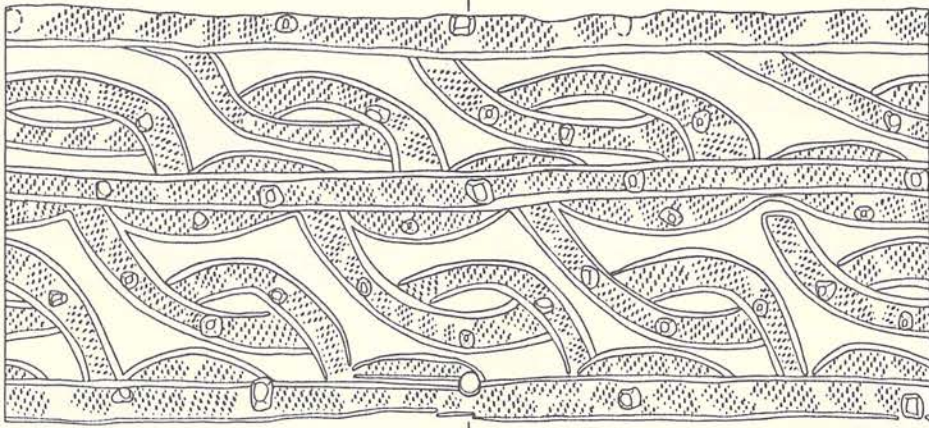


107

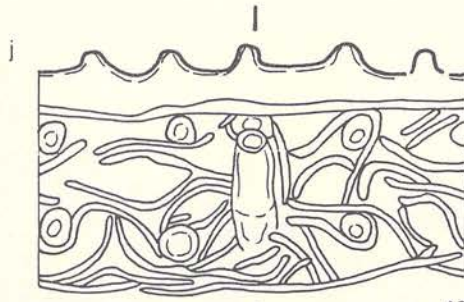


108

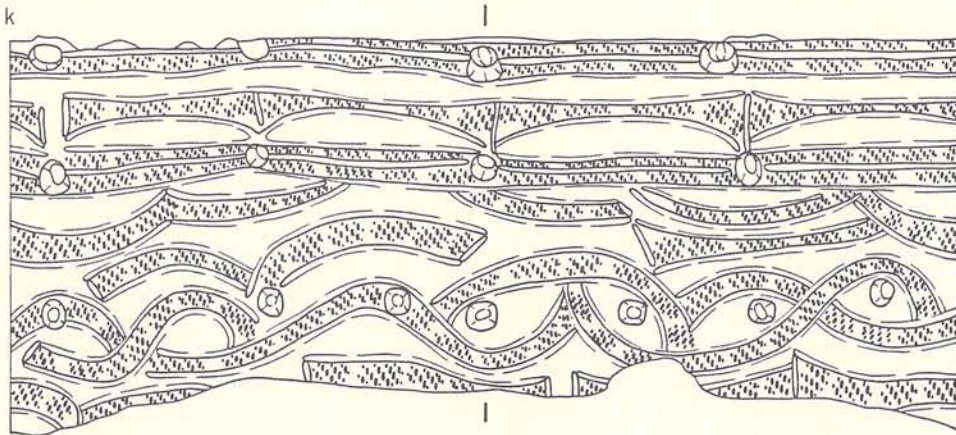
第178図 第IV群土器文様の変遷傾向(2)



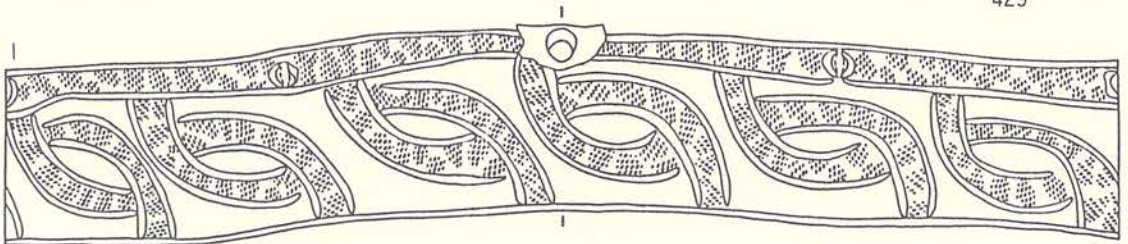
227



427

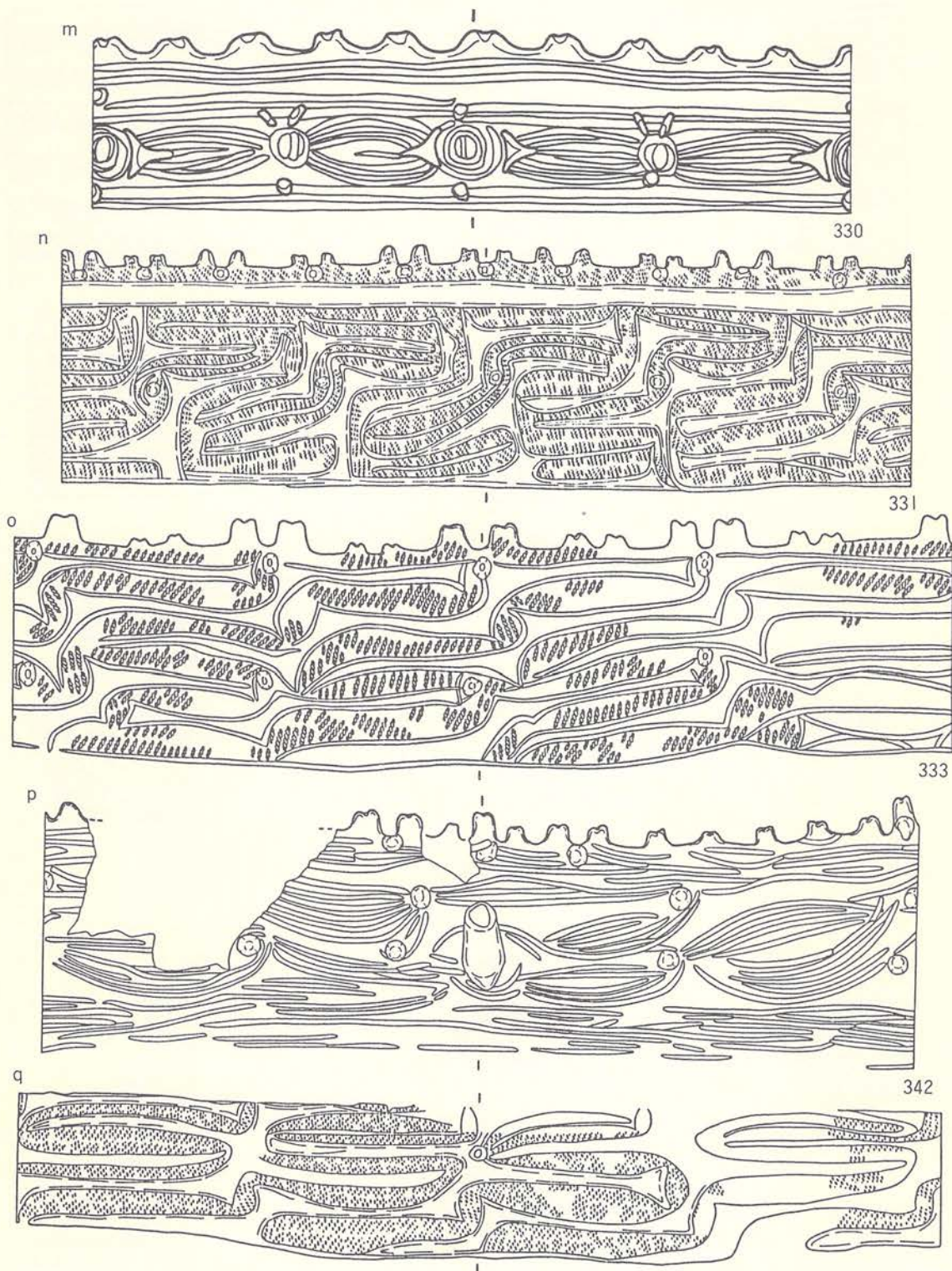


429



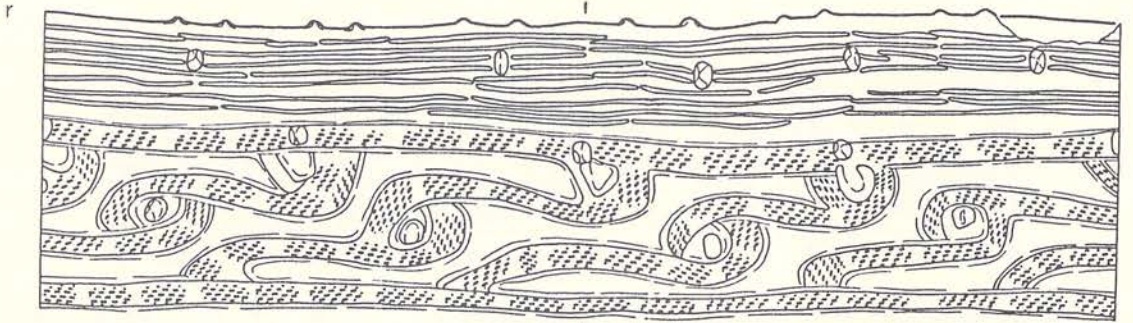
第179図 第IV群土器文様の変遷傾向(3)

329

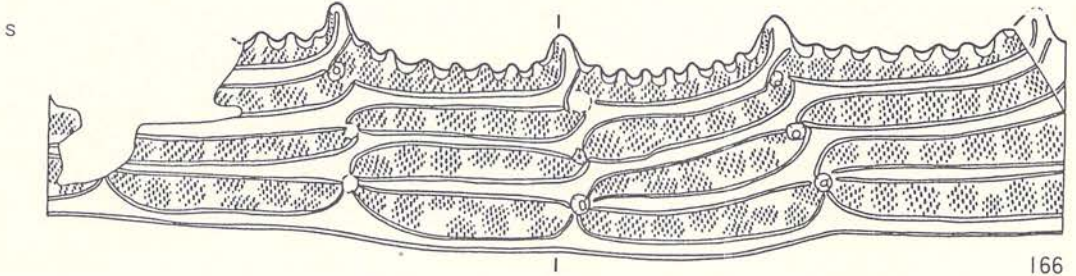


3 類土器の文様 (f~q)
 第180図 第IV群土器文様の変遷傾向(4)

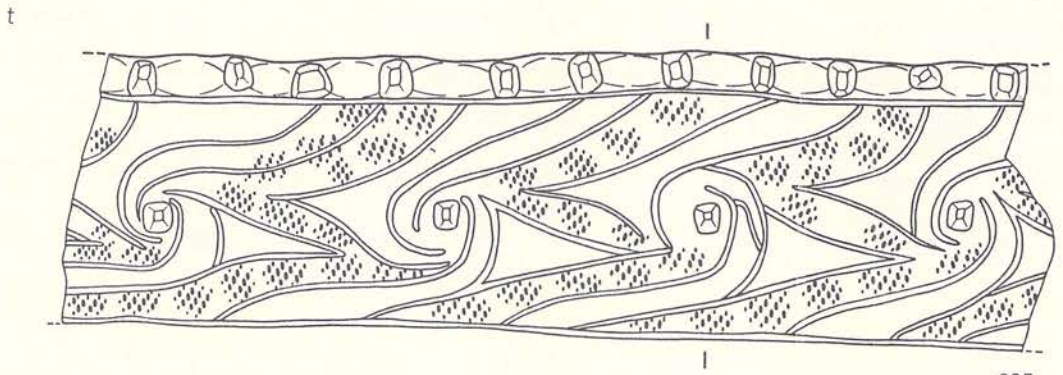
721



162

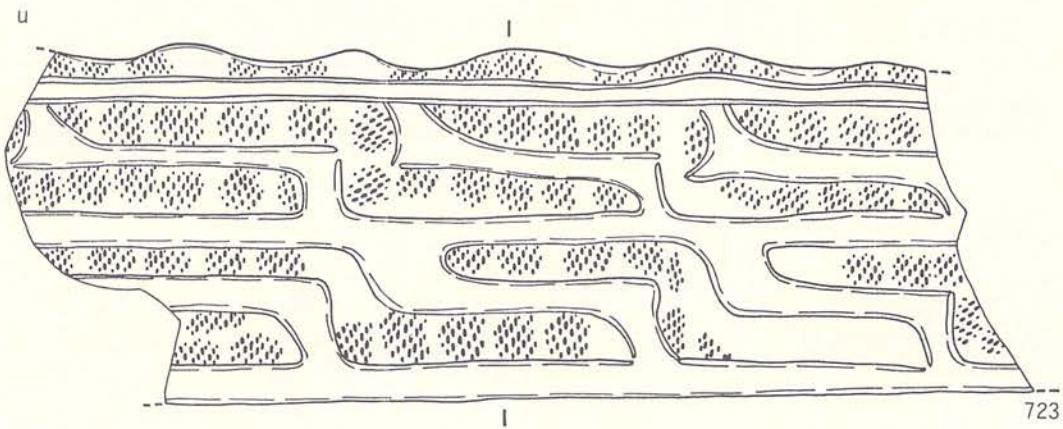


166



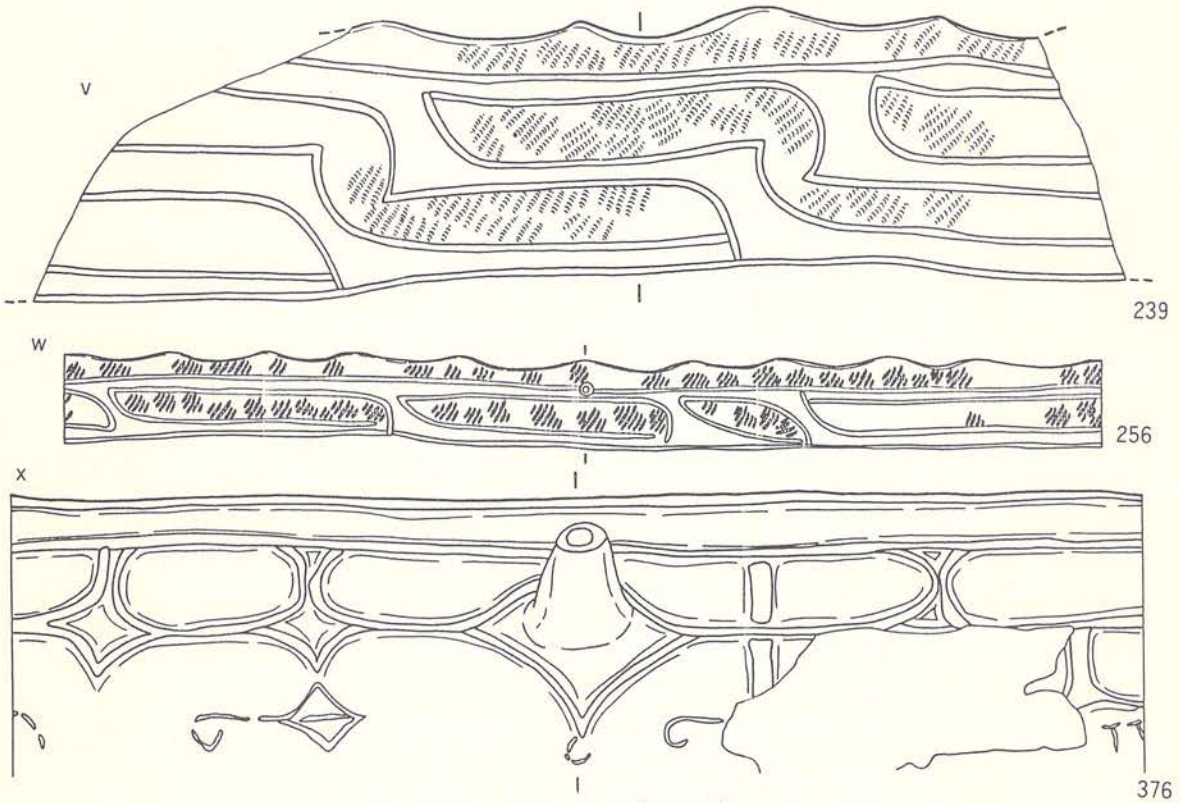
235

4類土器の文様(r~t)



723

第181図 第IV群土器文様の変遷傾向(5)



5類土器の文様(u~x)
第182図 第IV群土器文様の変遷傾向(6)

参考・引用文献

- 芹沢長介 1960 「石器時代の日本」 築地書館
- 馬目順一 1966 「寺脇貝塚」 福島県磐城市教育委員会
- 今井富士雄 1968 「十腰内遺跡」 『岩木山』 岩木山刊行会
- 磯崎正彦 1968 「十腰内遺跡」 『岩木山』 岩木山刊行会
- 安孫子昭二 1969 「東北地方における縄文後期後半の土器様式 ~所謂コブ付土器の編年~」
『石器時代 No.9』 石器時代文化研究会
- 安孫子昭二 1980 「コブ付土器様式から亀ヶ岡土器様式への変遷過程」 『考古風土記』 第5号
- 鈴木克彦 1980 「亀ヶ岡式土器の羊歯状文に関する考察」 『考古風土記』 第5号
- 昆野靖 1980 「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書IV(柳田館遺跡)」 岩手県文化財
石川長喜 調査報告書第53集 岩手県教育委員会
- 高橋与右エ門 1980 「川向Ⅲ遺跡発掘調査報告書」 岩手県埋文センター文化財調査報告書
吉田洋 第26集

- 安孫子昭二 1981 「瘤付土器(新地式)」『縄文文化の研究 4』 雄山閣
- 鈴木克彦 1981 「亀ヶ岡式土器」『縄文文化の研究 4』 雄山閣
- 後藤勝彦 1981 「東北地方 後期土器の研究と地域性」『縄文土器大成 3』 講談社
- 藤沼邦彦 1981 「東北地方 亀ヶ岡式土器の研究史と地域性」『縄文土器大成 3』 講談社
- 相原康二他 1982 「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書(江釣子村鳩岡崎遺跡)」 岩手県文化財調査報告書第70集 岩手県教育委員会
- 種市 進 1983 「道地Ⅱ遺跡・道地Ⅲ遺跡発掘調査報告書」 岩手県埋文センター文化財調査報告書第64集
- 種市 進
光井文行
田鎖寿夫 1983 「上の山Ⅶ遺跡発掘調査報告書」 岩手県埋文センター文化財調査報告書第60集
- 小平忠孝
三浦謙一 1983 「叭屋敷Ⅰa遺跡発掘調査報告書」 岩手県埋文センター文化財調査報告書第61集
- 村上達夫
菊池利和 1983 「叭屋敷Ⅱ遺跡発掘調査報告書」 岩手県埋文センター文化財調査報告書 第47集
- 佐々木嘉直 1983 「叭屋敷Ⅲ遺跡発掘調査報告書」 岩手県埋文センター文化財調査報告書 第48集
- 遠藤勝博
村上達夫
高橋義介 1983 「君成田Ⅳ遺跡発掘調査報告書」 岩手県埋文センター文化財調査報告書 第62集
- 佐藤 勝
佐々木嘉直 1983 「叭屋敷Ⅰb遺跡発掘調査報告書」 岩手県埋文センター文化財調査報告書 第63集
- 三浦謙一 1983 「湯沢遺跡発掘調査報告書(遺物編)」 岩手県埋文センター文化財調査報告書 第66集
- 高橋義介
田鎖寿夫 1984 「江刺家遺跡発掘調査報告書」 岩手県埋文センター文化財調査報告書 第70集
- 平井 進
石川長喜 1984 「嶽Ⅱ遺跡発掘調査報告書」 岩手県埋文センター文化財調査報告書第78集
- 田鎖寿夫 1984 「小屋畑遺跡発掘調査報告書」 岩手県埋文センター文化財調査報告書 第80集
- 鈴木隆英 1985 「曲田Ⅰ遺跡発掘調査報告書」 岩手県埋文センター文化財調査報告書 第87集

表 1 縄文時代住居跡一覧表

No.	住居跡名	形状	規模 (m)	主柱穴	炉の形態	出土遺物()内埋土	時期
1	F I—1住	楕円形	3.3×5.1	不明	土器埋設炉	深鉢2点 石器9点	前期後半
2	F I—2住	円形	3.7×4.0	不明	地床炉	土器4点(土器21点)	晩期中葉
3	H I—1住	隅丸方形	3.7	不明	不明	注口1点(土器15点) 石器1点(石器2点)	IV群5類期
4	H I—2a住	円形	8.0	不明	不明	深鉢1点(土器37点) (土製品1点)(石器3点)	IV群4類期
	H I—2b住	不明	7.0	不明	不明	ナシ	IV群2~4類期
	H I—2c住	不明	5.0	不明	不明	ナシ	IV群2~4類期
	H I—2d住	円形	5.0	不明	不明	土器2点(土器3点)	IV群2類期
5	H I—4住	楕円形	5.3×4.9	4本	地床炉	土器4点(土器30点) (石器6点)	IV群3類期
6	H I—5住	楕円形	2.8×3.2	不明	不明	深鉢1点(土器3点)	IV群2~3類期
7	H I—6住	楕円形	4.4×4.9	不明	石囲い炉	土器4点(土器10点) 石器1点(石器1点)	IV群1類期
8	H I—7住	円形~楕円形	3.6	不明	石囲い炉	ナシ	IV群3類期?
9	H I—8a住	円形	7.1	5本	石囲い炉	土器10点(土器42点) (土製品1点)石器1点(石器10点)	IV群4類期
	H I—8b住	円形	7.1	不明	石囲い炉		IV群3~4類期
	H I—8c住	円形	4.2×4.4	4本	地床炉	(石器1点)	IV群3~4類期
10	H I—9住	円形	5.1×5.2	4本	石囲い炉	土器7点(土器30点) (土製品1点)(石器2点)	IV群3類期
11	H I—10住	不明	不明	6本	地床炉?	ナシ	不明
12	H II—1住	円形	5.1×5.4	4本	地床炉	土器6点(土器16点) (石器2点)	IV群3~4類期
13	I I—1a住	円形	6.6	不明	不明	土器5点(土器24点)	IV群1類期

表2 縄文時代住居跡一覧表

No.	住居跡名	形状	規模 (m)	主柱穴	炉の形態	出土遺物()内埋土	時期
	II-1b住	不明	5.8	不明	不明	(土製品1点)石器2点(石器6点)	IV群1類期?
14	II-2住	楕円形	4.6×4.3	3本	地床炉	注口1点(土器20点) 石器3点(石器14点)	IV群3類期
15	II-3a住	円形	6.7×7.3	不明	石囲い炉	土器3点(土器30点) (石器14点)	IV群4~5類期
	II-3b住	不明	6.6	不明			IV群4~5類期?
	II-3c住	不明	6.0	不明			IV群4~5類期?
16	II-4住	円形	5.0+α	4本	石囲い炉	土器1点(土器16点) (石器13点)	IV群1~3類期
17	II-6住	円形	5.0	不明	地床炉	土器1点(土器2点) (石器2点)	IV群4類期
18	II-7住	円形	4.1	不明	石囲い炉	(土器7点) 石器1点(石器1点)	IV群3~4類期
19	II-8住	楕円形	2.5×3.0	不明	地床炉	土器2点(土器4点)	IV群2類期
20	II-9住	楕円形	4.1	不明	不明	土器2点(土器4点)	晩期前葉
21	II-10住	楕円形	3.2×2.8	不明	地床炉+礎1	土器4点(土器6点) 石器2点(石器2点)	IV群3~4類期
22	II-1住	円形~楕円形	4.6	5~6本	不明	ナシ	中期末~後期後半
23	II-3住	円形	5.6×5.7	4本	石囲い炉	(土器16点)(石器2点)	IV群2類期
24	JI-1住	円形	3.5	不明	石囲い炉	(土器1点)	不明
25	JI-2住	ほぼ方形	2.3	不明	不明	(土器5点)	前期?
26	JI-4住	ほぼ円形	3.1	8本	石囲い炉	土器1点(土器5点) (石器1点)	中期末葉
27	JI-5住	楕円形	3.9×3.5	不明	不明	片口土器1点	中期後葉~末葉
28	JI-6住	楕円形	3.3	不明	石囲い炉	土器2点	中期末葉

表3 縄文時代住居跡一覧表

No.	住居跡名	形状	規模 (m)	主柱穴	炉の形態	出土遺物()内埋土	時期
29	J I-7住	隅丸長方形	2.7×2.0		不明	(土器5点)	前期?
30	J II-2住	隅丸方形	不明	不明	不明	(土器4点)	不明
31	K I-1住	隅丸長方形	6.1×14?	不明	地床炉3基	土器1点(土器19点) (石器3点)	前期前半期
32	K I-2住	不明	不明	不明	不明	石器1点	前期前半期
33	K II-1住	隅丸方形	4.2×4.4	3~4本	複式炉	土器2点(土器2点) (石器1点)	中期末葉

表4 ピット一覧表

No.	遺構名	平面形	断面形	頸部 有無	規 模 (cm)			出 土 遺 物	時 期
					開口部	底 部	深 さ		
1	F I—51	楕円形	浅鉢形	無	100×110	78×93	15	ナ シ	
2	F I—52	円形	フラスコ形	無	170×175	180×180	68	ナ シ	
3	F I—53	楕円形	ビーカー形	無	150×167	135×162	60	深鉢1点	晩期前葉
4	F I—54	円形	ビーカー形	無	109×114	95×104	30	ナ シ	
5	F I—55	円形	フラスコ形	無	118×114	139×136	67	ナ シ	
6	F I—56	開底楕円状円形		無	195×250	66×76	127	深鉢2点	晩期前葉
7	F I—57	円形	フラスコ形	有	160×169	135×145	63	壺形1点、深鉢2点	晩期前葉
8	F I—58	開底楕円状円形		無	150×190	82×84	115	ナ シ	
9	G I—51	開底隅丸長方形ほぼ円形	浅鉢形	無	126×148	75×90	40	土師2点、石器1点	
10	G I—52	開底楕円状円形	フラスコ形	無	105×100	134×119	38	深鉢1点	晩期前葉
11	G I—53	円形	浅鉢形	無	117×127	62×65	37	ナ シ	
12	G I—54	円形	浅鉢形	無	91×94	57×65	28	ナ シ	
13	G I—55	円形	皿形	無	61×63	42	17	ナ シ	
14	G I—56	開底不正形円形	ビーカー形	無	90×132	59×68	66	ナ シ	
15	G I—57	円形	浅いビーカー形	無	141×144	127	14	ナ シ	
16	G I—58	開底楕円状円形		無	110×137	63×65	115	ナ シ	
17	G I—59	開底隅丸長方形		無	150×96	84×66	105	ナ シ	
18	G I—60	楕円形		無	138×120	76×67	110	ナ シ	
19	G II—51	開底楕円状円形	フラスコ形	有	117×104	104×99	37	ナ シ	
20	G II—52	円形	フラスコ形	無	126×124	126×122	29	鉢形1点、壺形1点	後期末葉～ 晩期前葉
21	H I—51	開底楕円状不整形		無	175×215	103×120	65	深鉢2点	
22	H I—52	開底楕円状不整形		無	131×133	37×60	33	ナ シ	
23	H I—53	楕円形	皿形	無	135×173	110×144	14	ナ シ	
24	H II—51	円形	ビーカー形	無	108×113	84×91	41	ナ シ	
25	H II—52	円形	ビーカー形	無	150×155	135×145	55	ナ シ	

表5 ピット一覧表

No	遺構名	平面形	断面形	頸部 有無	規 模 (cm)			出 土 遺 物	時 期
					開口部	底 部	深 さ		
26	H II-53	円 形	浅鉢形	無	148×159	82×83	52	ナ シ	
27	H II-54	円 形	ビーカー形	無	154×165	124×130	46	ナ シ	
28	H II-55	円 形	フラスコ形	有	126×130	103×107	85	ナ シ	
29	H II-56	円 形	ビーカー形	無	165×175	135×144	73	ナ シ	
30	H II-57	楕円形	フラスコ形	無	86	92×80	51	ナ シ	
31	H II-58	円 形	ビーカー形	無	95×89	88×81	22	ナ シ	
32	I I-51	開底楕円形 底円形	フラスコ形	有	218×192	185×173	138	深鉢1点、台付鉢2点、注口1点 土器他2点、土製品1点、石器1点	
33	I I-52	円 形	ビーカー形	無	178×175	158×153	60	壺形1点	
34	I I-53	円 形	フラスコ形	有	215	205	133	埴形1点	後期末葉
35	I I-54	円 形	ビーカー形	無	180前後	150前後	57	ナ シ	
36	I I-55	円 形		無	110前後	125前後	30	深鉢1点	後期末葉
37	I I-56	円 形	フラスコ形	有	93	105×98	41	ナ シ	
38	I I-57	開底楕円形 底円形	フラスコ形	無	140×124	133×123	61	粗製1点	
39	I I-58	円 形	フラスコ形	有	135×127	104	75	ナ シ	
40	I I-59	円 形	ビーカー形	無	145	117×135	70	ナ シ	
41	I I-60	円 形	フラスコ形	無	139×135	175×164	59	深鉢1点	
42	I I-61	ほぼ円形	浅鉢形	無	140×150	72×90	64	深鉢1点、石器1点	
43	I I-62	円 形	フラスコ形	無	82	108	51	深鉢1点	
44	I I-63	円 形	フラスコ形	有	130×126	144×139	75	ナ シ	
45	I I-64	円 形	ビーカー形	無	116×112	107×103	57	ナ シ	
46	I I-65	円 形	フラスコ形	無	123	134	54	壺形1点	
47	I I-66	円 形	ビーカー形	無	134×131	129×122	50	ナ シ	
48	I I-67	円 形	ビーカー形	無	166×170	158×172	65	勾玉1点	
49	I I-68	円 形	フラスコ形	無	95×89	103×95	31	ナ シ	
50	I I-69	円 形	フラスコ形	無	95×93	93×92	30	深鉢1点、壺形1点	

表6 ピット一覧表

No.	遺構名	平面形	断面形	頸部 有無	規 模 (cm)			出 土 遺 物	時 期
					開口部	底 部	深 さ		
51	I II-51	円 形	フラスコ形	無	190×193	213×217	50	ナ シ	
52	I II-52	円 形	浅いピーカー形	無	112×113	98	19	ナ シ	
53	I II-53	円 形	ほぼピーカー形	無	150×153	138×143	45	ナ シ	
54	I II-54	円 形	皿 形	無	161×150	149×136	22	ナ シ	
55	I II-55	円 形	フラスコ形	無	170×177	172×173	50	鉢形1点	後期末葉～ 晩期前葉
56	I II-56	円 形	フラスコ形	無	158	162	29	ナ シ	
57	I II-57	楕円状		無				ナ シ	
58	I II-58	円 形	フラスコ形	有	173×176	185×190	80	鉢形1点、深鉢2点	
59	I II-59	円形か楕円形	フラスコ形	無	165	210	60	ナ シ	
60	I II-60	ほぼ円形	フラスコ形	無	155×180	160×166	74		
61	I II-61	楕円形	皿形-ピーカー形	無	115×93	108×84	25	ナ シ	
62	I II-62	楕円形	フラスコ形	無	127×152	150×166	50	ナ シ	
63	I II-63	円 形	ピーカー形	無	166×170	137×140	67	深鉢1点、土器1点	
64	I II-64	隅丸方形	皿 形	無	162	150	22	ナ シ	
65	I II-65	円 形	フラスコ形	無		264	77	ナ シ	
66	I II-66	楕円形	皿 形	無	82×63	68×56	15	ナ シ	
67	I II-67	楕円形	皿 形	無	62	80×56	25	ナ シ	
68	I II-68	楕円形	皿 形	無	101	81	26	ナ シ	
69	I II-69	楕円形	ピーカー形	無	150	133	64	ナ シ	
70	I II-70	楕円形	フラスコ形	無	140×157	157×176	80	鉢形1点、深鉢1点 土器他1点	
71	J I-51	円 形	フラスコ形	無	181×171	204×197	96	深鉢3点、台付1点	晩期前葉
72	J I-52	円 形	フラスコ形	有	193×187	192×188	96	土器1点、石器1点	
73	J I-53	円 形		無	130×139	122×127	15	ナ シ	
74	J I-54	開底 円形 楕円形	フラスコ形	無	107	123×140	75	ナ シ	
75	J I-55	円 形	皿 形	無	146	110	33	ナ シ	

表7 ピット一覧表

No.	遺構名	平面形	断面形	頸部 有無	規 模 (cm)			出 土 遺 物	時 期
					開口部	底 部	深 さ		
76	J I-56	円 形		無		178×169	5	ナ シ	
77	J I-57	楕円形	浅鉢形	無	173×110	136×67	37	ナ シ	
78	J I-58	楕円形	フラスコ形	無	170	178	44	ナ シ	
79	J I-59	楕円形	フラスコ形	無	93×76	98×73	5	ナ シ	
80	J I-60	円 形	フラスコ形	無		86×81	53	土器3点	
81	J I-61	円 形		無	142	135	4	ナ シ	
82	J II-51	楕円形	皿 形	無	119×104	109×94	16	ナ シ	
83	J II-52	円 形	浅鉢形	無	185×190	170×177	27	ナ シ	
84	J II-53	円 形	フラスコ形	無	135	167×159	95	ナ シ	
85	J II-54	楕円形		無	257×178	132×109	62	壺形1点、土器1点 石器1点	後期中葉

表8 石器計測一覧表

通し 番号	図版 写真番号	遺構名	出土地点	器種	計測値				石質	備考
					長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重さ(g)		
1	3	F I-1 住	床面	スクレーパー	2.15	2.8	0.8	3.87	チャート質粘板岩	北上山地 古生界
2	4	"	"	フレーク	2.3	3.1	0.9	7.38	輝緑凝灰岩	" "
3	5	"	"	"	3.7	2.1	0.5	2.7	"	" "
4	6	"	"	"	3.1	1.8	0.7	2.93	"	" "
5	7	"	"	"	2.45	4.2	1.7	13.0	"	" "
6	8	"	"	"	3.55	2.2	1.0	7.72	"	" "
7	9	"	"	"	2.9	3.2	1.0	7.55	"	" "
8	10	"	"	"	2.65	2.4	1.1	4.77	"	" "
9	11	"	"	"	2.6	2.5	0.4	4.05	"	" "
10	53	H I-1 住	埋土(b層)	石鏃	3.0	1.75	0.6	2.45	珪質細粒凝灰岩	奥羽山地 中新統
11	54	"	埋土上位	スクレーパー	3.5	1.7	1.0	3.80	チャート	北上山地 古生界
12	55	"	床面	磨石	10.2	7.8	2.8	341.0	硬砂岩	" "
13	99	H I-2 a 住	埋土上位	石鏃	2.9	1.6	0.4	1.30	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地 中新統
14	100	"	"	石匙	7.3	1.6	0.6	6.56	"	" "
15	101	"	埋土中位	磨製石斧	8.3	4.35	2.5	178.0	輝石玢岩	北上山地 古生界
16	136	H I-4 住	埋土(e層)	石鏃	1.4	0.9	0.4	0.4	チャート	" "
17	137	"	" "	"	2.4	1.4	0.5	0.93	チャート質粘板岩	" "
18	138	"	埋土(a層)	"	2.6	1.4	0.4	1.0	"	" "
19	139	"	" "	"	2.9	1.4	0.4	1.30	チャート	" "
20	140	"	埋土(e層)	磨石	9.0	7.0	5.2	520.0	角閃黒雲母花崗岩	" 中生界
21	141	"	" "	石皿	37.5	20.3	6.6	7,230.0	硬砂岩	" 古生界
22	160	H I-6 住	炉内部	異形石器	2.7	1.6	0.5	1.13	チャート	" "
23	161	"	床面	石皿	25.8	14.4	4.5	2,336.0	輝石安山岩	奥羽山地 中新統
24	214	H I-8 c 住	ピット埋土	スクレーパー	4.6	3.7	0.8	15.55	チャート	北上山地 古生界
25	215	H I-8 a 住	南壁床面下	加工痕ある剥片	4.4	3.5	1.7	27.16	粘板岩	北上山地 古生界

表9 石器計測一覧表

通し 番号	図版 写真 番号	遺 構 名	出土地点	器 種	計 測 値				石 質	備 考
					長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重さ(ト)		
26	216	H I—8 a 住	南壁床面下	加工痕ある割片	3.9	4.7	2.0	32.97	粘板岩	北上山地 古生界
27	217	"	"	"	3.7	3.1	1.2	13.6	"	" "
28	218	"	"	"	4.2	4.6	1.6	36.8	"	" "
29	219	"	"	"	5.2	3.6	1.4	23.5	"	" "
30	220	"	"	"	5.8	4.2	1.6	41.25	"	" "
31	221	"	"	"	5.3	2.8	1.6	29.66	"	" "
32	222	"	"	"	2.8	4.5	1.2	14.0	"	" "
33	223	"	"	"	3.5	4.3	1.2	20.02	"	" "
34	224	"	"	"	4.1	5.2	1.6	34.8	"	" "
35	225	"	床面	磨石	8.2	7.0	4.4	350.0	硬砂岩	" "
36	226	"	埋土	"	8.1	5.6	4.2	328.0	凝灰質硬砂岩	" "
37	265	H I—9 住	埋土	石鏃	2.6	1.4	0.4	1.80	チャート	" "
38	266	"	"	打製石斧	10.8	5.5	1.1	110.0	粘板岩ホルンフェルス	" "
39	289	H II—1 住	埋土(a-b層)	石鏃	3.3	1.5	0.4	1.8	珪質細粒凝灰岩	奥羽山地 中新統
40	290	"	"	磨製石斧	4.2	5.0	2.5	85.0	輝石玢岩	北上山地 古生界
41	321	I I—1 住	埋土(b層)	石鏃	2.7	1.2	0.4	0.94	チャート質粘板岩	" "
42	322	"	埋土(a-b層)	石錐	3.2	1.6	0.9	3.32	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地 中新統
43	323	"	埋土(b層)	石匙	8.3	2.9	0.9	23.34	"	" "
44	324	"	"	"	6.5	2.2	0.9	14.1	"	" "
45	325	"	"	磨製石斧 転用敲石	9.3	5.5	2.5	145.0	輝石玢岩	北上山地 古生界
46	326	"	床面	石皿	20.0	16.6	4.6	2,490.0	輝石安山岩	奥羽山地 中新統
47	327	"	"	"	26.5	19.6	8.1	4,860.0	"	" "
48	328	"	柱穴埋土	凹石	14.5	5.5	2.3	330.0	凝灰質硬砂岩	北上山地 古生界
49	350	I I—2 住	床面	石鏃	2.0	1.2	0.5	0.9	チャート	" "
50	351	"	埋土	"	2.0	0.9	0.4	0.5	"	" "

表10 石器計測一覧表

通し 番号	図版 写真 番号	遺 構 名	出土地点	器 種	計 測 値				石 質	備 考
					長さ(m)	幅 (cm)	厚さ(m)	重さ(g)		
51	352	I I—2 住	埋土下位	石鏃	1.6	1.1	0.3	0.35	チャート	北上山地 古生界
52	353	"	埋土上位	"	2.1	1.3	0.4	0.82	"	" "
53	354	"	"	"	1.9	1.3	0.5	0.88	"	" "
54	355	"	埋土下位	石錐	2.0	2.0	0.5	3.13	"	" "
55	356	"	"	石匙	8.8	2.0	1.0	13.16	珩質泥岩	奥羽山地 中新統
56	357	"	"	"	3.8	2.8	0.7	8.93	チャート質粘板岩	北上山地 古生界
57	358	"	"	"	2.7	2.9	1.1	7.95	凝灰質珩質泥岩	奥羽山地 中新統
58	359	"	"	"	4.2	8.1	0.7	18.99	"	" "
59	360	"	埋土上位	磨製石斧	4.0	3.0	1.7	27.45	輝石玢岩	北上山地 古生界
60	361	"	床面	"	6.3	5.0	2.4	126.0	"	" "
61	362	"	埋土上位	"	5.8	4.2	2.6	89.0	"	" "
62	363	"	床面	石棒	4.7	4.9	4.9	110.0	粘板岩	" "
63	364	"	埋土下位	石皿	34.2	19.0	6.6	5,648.0	硬砂岩	" "
64	365	"	"	磨石併用敲石	10.3	7.0	4.6	640.0	粘板岩	" "
65	366	"	"	磨石	5.5	5.3	2.9	128.0	凝灰質硬砂岩	" "
66	400	I I—3 住	埋土(a~b層)	石鏃	2.0	1.3	0.3	0.88	珩質泥岩	奥羽山地 中新統
67	401	"	"	"	1.7	0.8	0.25	0.37	チャート	北上山地 古生界
68	402	"	"	"	1.7	1.0	0.2	0.37	"	" "
69	403	"	"	"	1.9	1.3	0.5	1.12	"	" "
70	404	"	"	"	2.4	1.2	0.5	0.98	珩質細粒凝灰岩	奥羽山地 中新統
71	405	"	"	"	2.5	1.4	0.3	1.0	珩質泥岩	" "
72	406	"	"	"	1.8	1.4	0.2	0.6	珩質細粒凝灰岩	" "
73	407	"	"	石匙	6.1	2.4	1.0	16.43	珩質泥岩	" "
74	408	"	"	"	2.3	2.2	0.4	2.02	チャート	北上山地 古生界
75	409	"	"	加工痕ある割片	2.1	1.3	0.4	0.7	"	" "

表11 石器計測一覧表

通し 番号	図版 番号 写真	遺 構 名	出土地点	器 種	計 測 値				石 質	備 考
					長さ(m)	幅 (m)	厚さ(m)	重さ(g)		
76	410	I I—3 住	埋土(a~b層)	加工痕ある割片	2.5	1.0	0.35	0.85	チャート	北上山地 古生界
77	411	"	"	"	1.9	1.4	0.5	1.60	"	" "
78	412	"	"	磨石併用敲石	10.2	9.45	6.6	934.0	角閃黒雲母花崗岩	" 中生界
79	413	"	"	磨製石斧	6.8	5.8	2.9	190.0	輝石玢岩	" 古生界
80	431	I I—4 住	埋土(c~d層)	石鏃	3.2	1.5	0.7	3.22	チャート	" "
81	432	"	"	"	2.5	1.4	0.5	1.50	チャート質粘板岩	" "
82	433	"	"	石錐	3.9	0.8	0.65	2.10	珩質細粒凝灰岩	奥羽山地 中新統
83	434	"	"	"	3.9	0.95	0.6	1.40	粘板岩	北上山地 古生界
84	435	"	"	"	2.8	0.6	0.5	0.86	チャート	" "
85	436	"	"	石匙	3.1	5.7	0.9	12.85	珩質泥岩	奥羽山地 中新統
86	437	"	"	"	2.1	4.2	0.7	4.70	チャート質粘板岩	北上山地 古生界
87	438	"	"	ミニチュア石斧	3.5	1.5	0.6	5.23	粘板岩	" "
88	439	"	埋土上位	石皿併用凹石	14.0	10.5	4.2	789.0	硬砂岩	" "
89	440	"	埋土下位	スクレーパー	5.8	3.8	1.1	22.74	凝灰質珩質泥岩	奥羽山地 中新統
90	441	"	"	"	2.5	3.6	0.5	3.68	珩質泥岩	" "
91	442	"	"	"	2.7	4.7	0.8	13.58	"	" "
92	443	"	埋土(a~b層)	磨石	7.6	5.2	3.0	190.0	閃緑岩	北上山地 中生界
93	447	I I—6 住	埋土	石鏃	1.8	1.5	0.6	1.50	チャート	" 古生界
94	448	"	"	"	2.5	1.5	0.5	1.0	"	" "
95	456	I I—7 住	床面	"	2.0	1.0	0.4	2.64	"	" "
96	457	"	埋土(b層)	磨石	5.1	6.0	5.9	240.0	硬砂岩	" "
97	480	I I—10 住	床面	石鏃	2.9	1.4	0.5	1.26	チャート	" "
98	481	"	"	"	1.2	1.1	0.3	0.28	凝灰質珩質泥岩	奥羽山地 中新統
99	482	"	炉内部	"	1.6	2.05	0.5	1.68	輝緑凝灰岩	北上山地 古生界
100	483	"	埋土	"	1.8	1.45	0.4	0.61	珩質泥岩	奥羽山地 中新統

表12 石器計測一覧表

通し 番号	図 号	遺 構 名	出土地点	器 種	計 測 値				石 質	備 考
					長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
101	500	I II-3 住	埋土(a層)	石匙	3.6	4.8	0.9	13.0	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地 中新統
102	501	"	"	石皿	14.2	13.8	4.7	929.0	輝石安山岩	" "
103	514	J I-4 住	埋土	石鎌	2.5	1.3	0.5	0.95	チャート	北上山地 古生界
104	547	K I-1 住	埋土	石錐	5.3	1.3	0.6	3.65	珪質細粒凝灰岩	奥羽山地 中新統
105	548	"	"	石匙	4.6	2.3	0.5	3.72	凝灰質珪質泥岩	" "
106	549	"	"	"	6.0	5.9	0.8	22.6	"	" "
107	550	K I-2 住	床面	"	5.7	2.0	0.6	6.48	珪質泥岩	" "
108	555	K II-1 住	埋土上位	石鎌	2.2	1.6	0.4	0.77	珪質細粒凝灰岩	" "
109	594	G I-51P	埋土	"	1.7	1.6	0.3	0.66	珪質泥岩	" "
110	607	I I-51P	埋土(a層)	"	2.5	1.7	0.6	1.38	黒曜石	産地時代不詳
111	614	I I-61P	埋土下位	ミニチュア石斧	2.6	1.9	0.3	0.93	粘板岩	北上山地 古生界
112	617	I I-67P	底面	勾玉	2.5	1.5	0.8	5.4	石英	産地時代不詳
113	634	J I-52P	埋土	スクレーパー	4.2	2.5	0.7	7.12	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地 中新統
114	640	J II-54P	"	"	6.5	4.0	0.9	19.45	珪質泥岩	" "
115	859	遺構外	G I 区	石鎌	5.2	2.0	0.8	5.1	チャート質粘板岩	北上山地 古生界
116	860	"	"	"	4.3	1.8	0.5	2.85	"	" "
117	861	"	"	"	1.1	0.8	0.3	0.13	チャート	" "
118	862	"	"	"	1.4	1.4	0.4	0.48	チャート質粘板岩	" "
119	863	"	"	"	2.6	1.7	0.8	2.33	チャート	" "
120	864	"	H I 区	"	3.8	3.0	0.65	7.20	輝緑凝灰岩	" "
121	865	"	K II 区	"	4.7	1.5	0.7	4.68	粘板岩	北上山地 古生界
122	866	"	I I 区	"	1.4	1.0	0.3	0.31	チャート質粘板岩	" "
123	867	"	K II 区	"	2.5	1.7	0.5	1.73	チャート	" "
124	868	"	"	"	2.6	1.4	0.5	1.15	"	" "
125	869	"	G I 区	"	3.0	1.5	0.4	1.66	チャート質粘板岩	" "

表13 石器計測一覧表

通し 番号	図版 写真 番号	遺 構 名	出土地点	器 種	計 測 値				石 質	備 考
					長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
126	870	遺構外	G I区	石鏃	1.50	1.2	0.3	0.95	チャート	北上山地 古生界
127	871	"	K I区	"	2.7	1.9	0.4	1.55	珪質細粒凝灰岩	奥羽山地 中新統
128	872	"	G II区	"	3.6	1.6	0.5	3.24	チャート質粘板岩	北上山地 古生界
129	873	"	I II区	"	3.4	1.25	0.3	1.38	"	" "
130	874	"	I I区	"	3.1	1.5	0.5	2.55	チャート	" "
131	875	"	K I区	"	3.45	1.65	0.50	2.33	粘板岩	" "
132	876	"	H I区	石錐	2.4	3.3	0.7	4.35	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地 中新統
133	877	"	J I区	"	1.9	1.5	0.6	1.2	チャート	北上山地 古生界
134	878	"	K区	"	3.3	1.6	1.2	5.78	珪質細粒凝灰岩	奥羽山地 中新統
135	879	"	G I区	"	2.0	2.2	0.8	2.89	チャート	北上山地 古生界
136	880	"	"	"	2.3	1.1	0.6	1.34	輝緑凝灰岩	" "
137	881	"	"	"	1.9	1.6	0.7	1.30	"	" "
138	882	"	"	"	1.2	1.3	0.4	0.4	"	" "
139	883	"	"	"	1.8	2.0	0.8	3.05	"	" "
140	884	"	"	"	1.6	1.7	0.8	1.95	"	" "
141	885	"	"	"	2.3	0.3	0.35	0.87	"	" "
142	886	"	"	"	1.8	1.1	0.3	1.68	"	" "
143	887	"	"	"	1.8	1.6	0.7	1.15	チャート	" "
144	888	"	"	"	2.5	1.5	1.0	2.99	"	" "
145	889	"	"	"	1.35	1.2	0.3	0.31	"	" "
146	890	"	"	"	1.4	1.0	0.3	0.36	"	" "
147	891	"	"	"	2.0	1.1	0.4	0.9	"	" "
148	892	"	"	"	1.35	1.30	0.35	0.47	"	" "
149	893	"	"	"	1.8	1.6	0.4	0.82	"	" "
150	894	"	"	"	2.9	1.7	1.2	3.93	"	" "

表14 石器計測一覧表

通し 番号	図版 写真 番号	遺 構 名	出土地点	器 種	計 測 値				石 質	備 考
					長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
151	895	遺構外	G I区	石錐	2.2	1.4	0.7	2.42	チャート	北上山地 古生界
152	896	"	"	"	1.7	0.8	0.7	0.63	"	" "
153	897	"	"	"	1.9	1.2	0.7	0.98	"	" "
154	898	"	"	"	1.6	2.2	0.5	1.15	"	" "
155	899	"	"	"	1.4	1.3	0.4	0.61	"	" "
156	900	"	"	"	1.9	1.3	0.3	0.65	"	" "
157	901	"	"	"	1.8	1.7	0.6	1.54	"	" "
158	902	"	"	"	1.7	1.3	0.4	0.64	"	" "
159	903	"	"	"	1.4	1.3	0.4	0.55	"	" "
160	904	"	H区	"	2.5	2.8	0.7	3.21	"	" "
161	905	"	H I区	石匙	6.8	2.6	0.9	12.28	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地 中新統
162	906	"	I I区	"	4.7	2.0	0.6	4.22	チャート質粘板岩	北上山地 古生界
163	907	"	G I区	"	3.1	5.3	0.8	11.26	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地 中新統
164	908	"	J I区	"	3.0	5.7	0.9	11.85	珪質泥岩	" "
165	909	"	G I区	スクレーパー	4.4	7.1	1.4	34.16	チャート質粘板岩	北上山地 古生界
166	910	"	J I区	"	3.1	2.7	0.7	4.84	珪質細粒凝灰岩	奥羽山地 中新統
167	911	"	K I区	"	3.3	3.0	0.4	3.87	凝灰質珪質泥岩	" "
168	912	"	G I区	"	8.4	4.0	1.3	44.75	珪質泥岩	" "
169	913	"	H I区	"	8.0	4.0	1.7	44.15	"	" "
170	914	"	K区	"	3.1	2.6	0.9	6.34	チャート	北上山地 古生界
171	915	"	I I区	"	2.7	4.4	0.6	8.47	珪質細粒凝灰岩	奥羽山地 中新統
172	916	"	K II区	"	5.7	3.1	0.4	8.56	珪質泥岩	" "
173	917	"	H I区	"	4.0	2.0	0.5	4.50	チャート	北上山地 古生界
174	918	"	K区	"	6.4	4.7	1.7	32.65	輝緑凝灰岩	" "
175	919	"	K I区	"	2.6	2.3	0.9	4.40	"	" "

表15 石器計測一覧表

通し 番号	図版 写真 番号	遺 構 名	出土地点	器 種	計 測 値				石 質	備 考
					長さ(m)	幅 (m)	厚さ(m)	重さ(g)		
176	920	遺構外	K区	スクレーパー	2.7	3.0	0.7	4.85	珪質細粒凝灰岩	奥羽山地 中新統
177	921	"	G I区	"	5.3	4.9	0.8	20.95	凝灰質珪質泥岩	" "
178	922	"	I I区	石筥	9.4	3.5	1.9	58.27	"	" "
179	923	"	G I区	磨製石斧	3.5	2.9	2.1	32.44	輝石安山岩	北上山地 中生界
180	924	"	H I区	"	7.1	5.3	2.3	156.0	輝石玢岩	" 古生界
181	925	"	I I区	"	13.8	4.8	3.1	300.0	"	" "
182	926	"	H I区	"	7.1	5.8	3.8	250.0	輝石安山岩	" 中生界
183	927	"	K区	"	6.4	4.8	3.0	154.0	輝石玢岩	" 古生界
184	928	"	I I区	"	6.4	4.0	2.3	97.0	"	" "
185	929	"	G I区	石棒	8.1	4.7	2.0	76.0	粘板岩	" "
186	930	"	"	"	14.9	4.2	1.25	79.0	"	" "
187	931	"	K I区	石刀	10.9	3.3	0.7	46.65	"	" "
188	932	"	I I区	石皿	35.4	15.9	7.4	4,533.0	硬砂岩	" "
189	933	"	J区	"	4.9	4.8	2.9	90.0	"	" "
190	934	"	H I区	"	37.2	28.3	7.8	12,000.0	輝石安山岩	奥羽山地 中新統
191	935	"	G I区	磨石	11.0	7.8	5.9	741.0	角閃黒雲母花崗岩	北上山地 中生界
192	936	"	"	"	5.8	4.6	2.4	100.0	凝灰質硬砂岩	" 古生界
193	937	"	J II区	"	5.3	4.8	2.8	90.0	輝石安山岩	" 中生界
194	938	"	G I区	凹石	6.6	6.4	3.0	280.0	硬砂岩	" 古生界
195	939	"	"	円整状石製品	5.4	5.2	1.3	64.0	輝石安山岩	奥羽山地 中新統
196	940	"	"	"	6.2	5.7	1.45	90.0	淡緑色凝灰質千枚岩	北上山地 古生界
197	941	"	I I区	"	4.0	4.3	2.5	78.0	粘板岩	" "
198	942	"	G I区	"	4.8	4.5	1.7	47.35	輝石安山岩	奥羽山地 中新統
199	943	"	F I区	敲打痕ある石器	27.1	10.1	6.0	2,538.0	硬砂岩	北上山地 古生界

写 真 图 版



写真図版1 空中写真

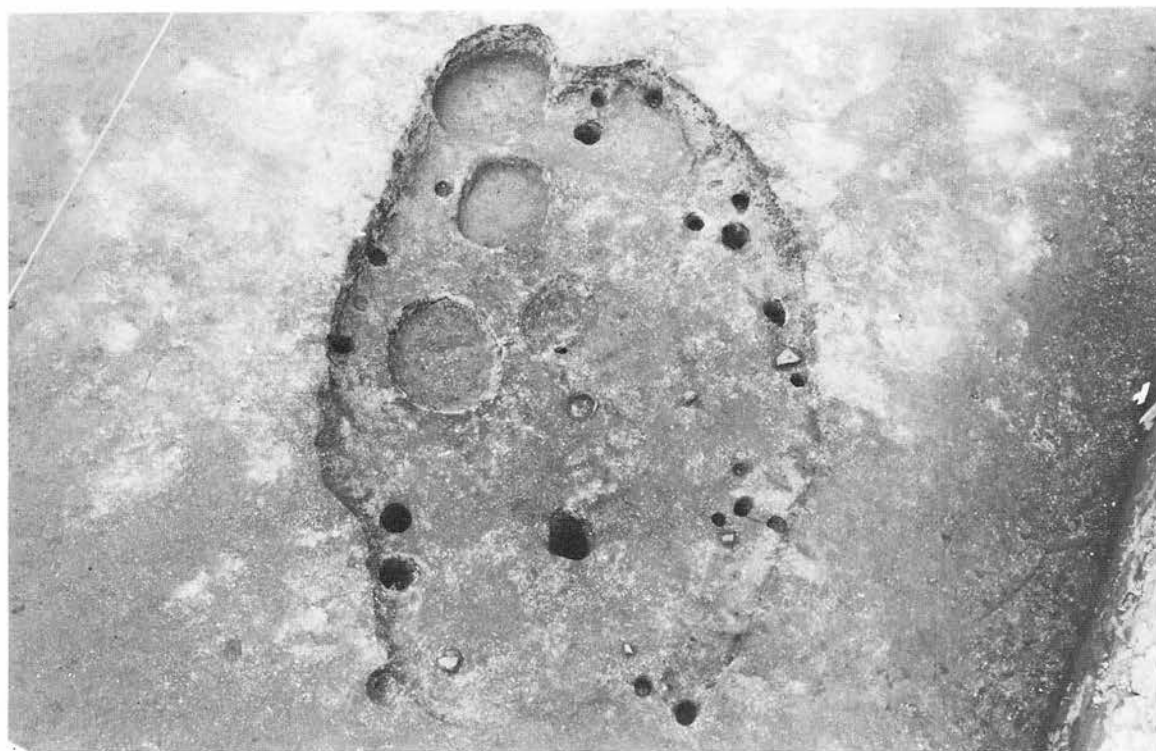


調査前状況(F~J,遺構集中区,南から)

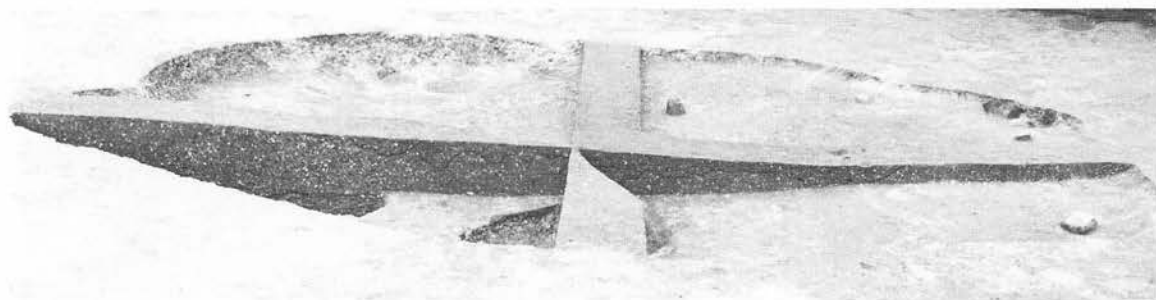


基本層序

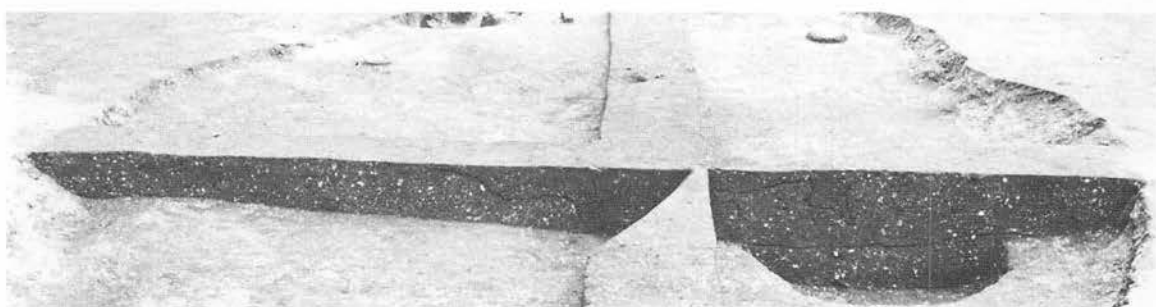
写真図版2 調査前状況,基本層序



平面



断面



断面

写真図版3 F I-1住居跡



F I -1住居跡炉平面



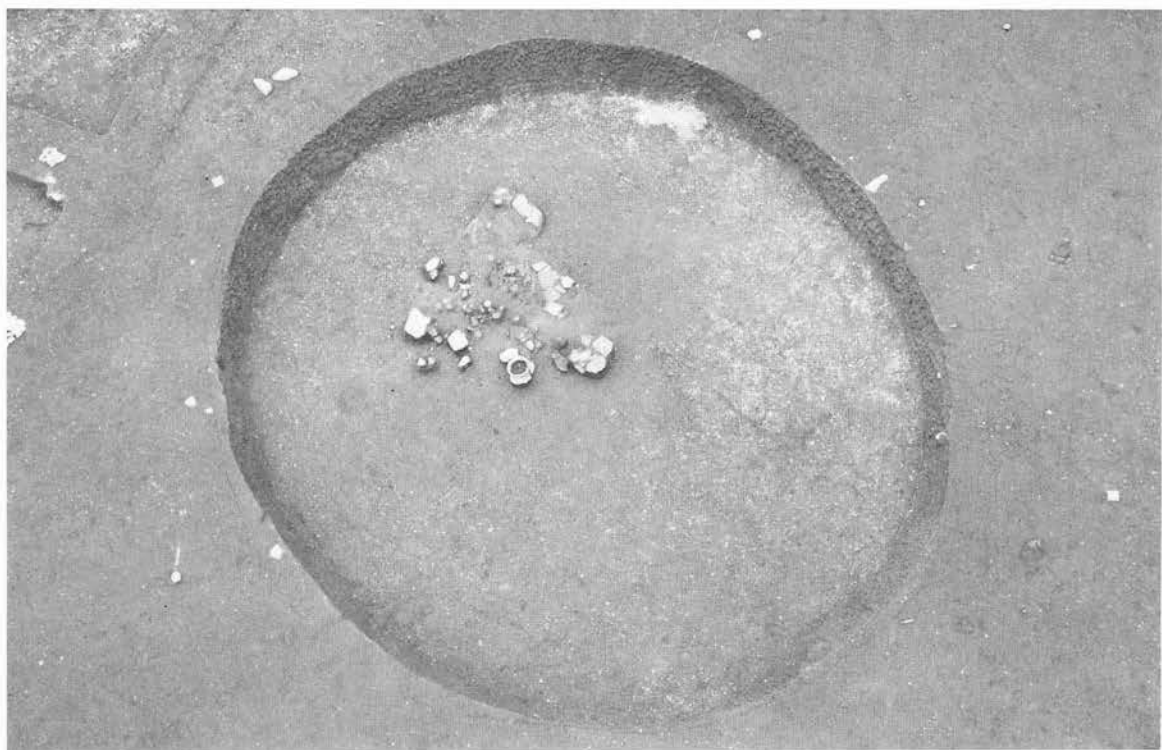
F I -1住居跡炉断面



F I -1住居跡遺物出土状況

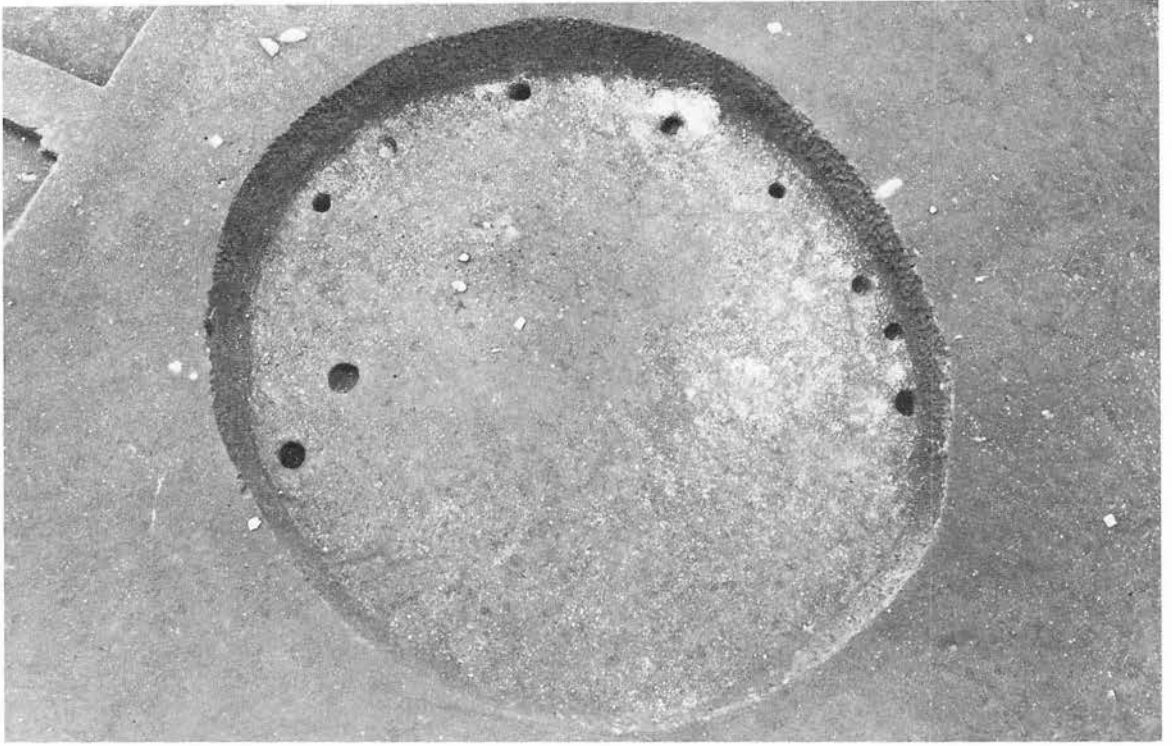


F I -2住居跡遺物出土状況

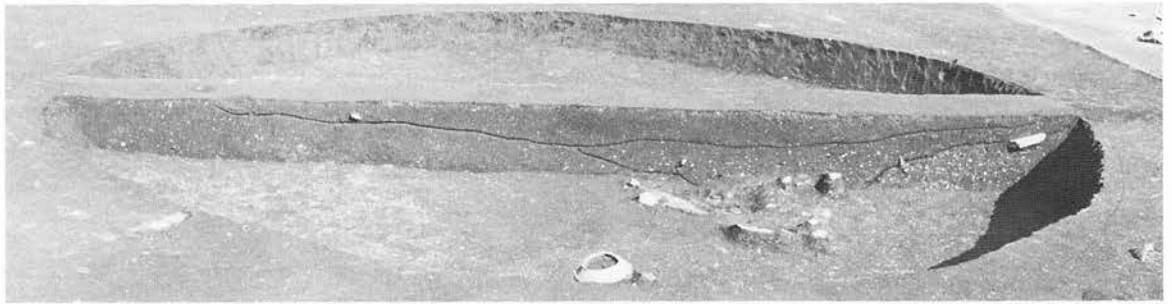


F I -2住居跡遺物出土状況

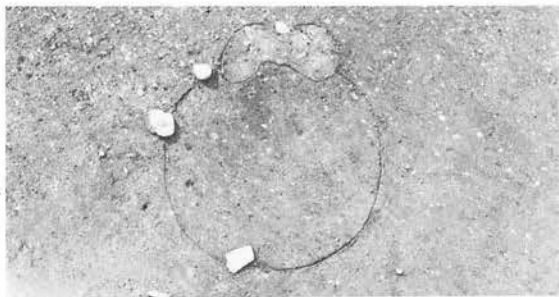
写真図版 4 F I -1住居跡・F I -2住居跡



平面



断面

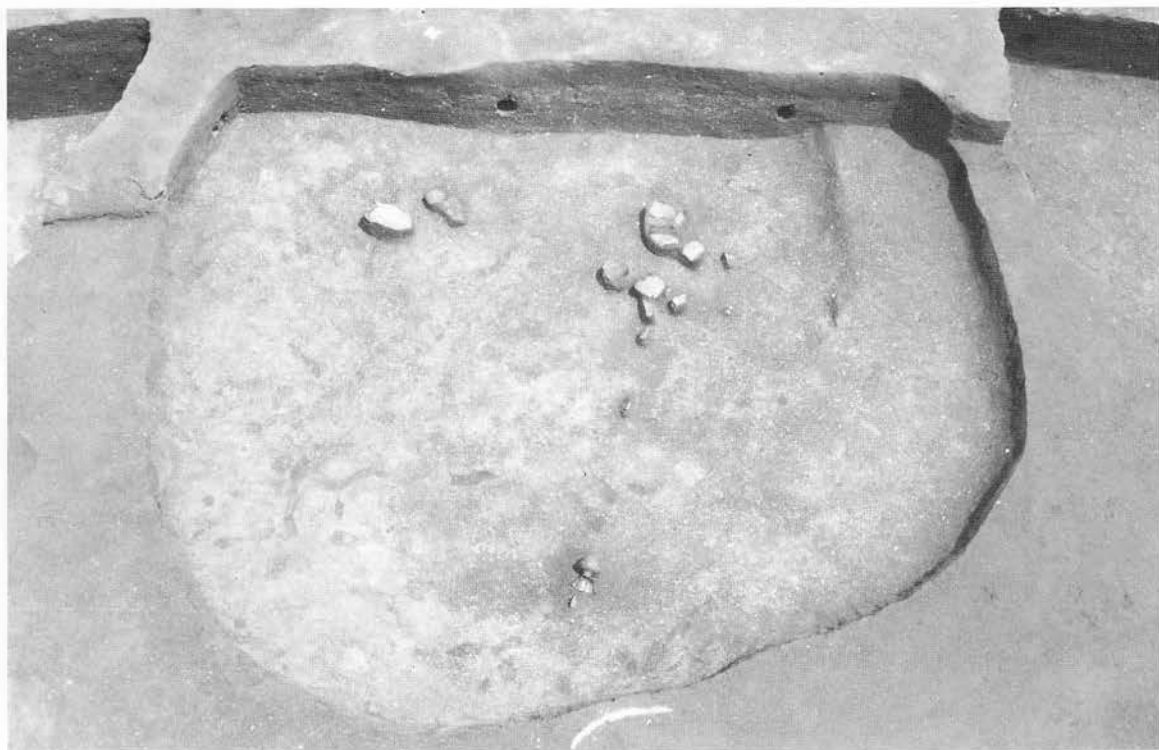


炉平面

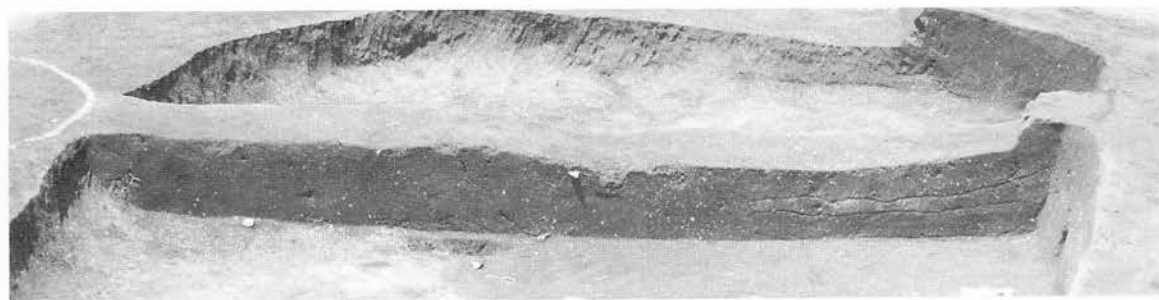


炉断面

写真図版5 F I -2住居跡



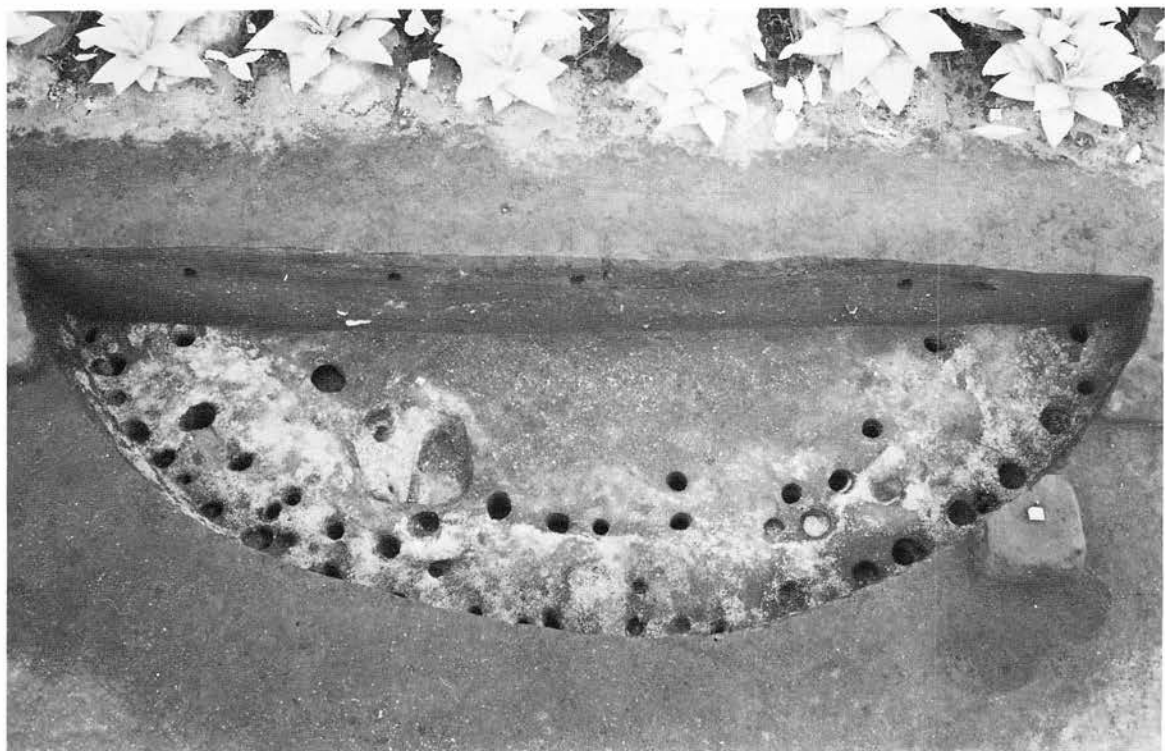
平面



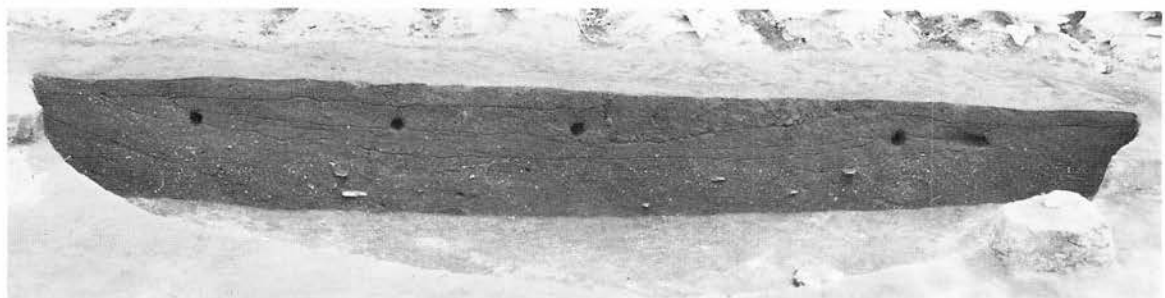
断面



遺物出土状況



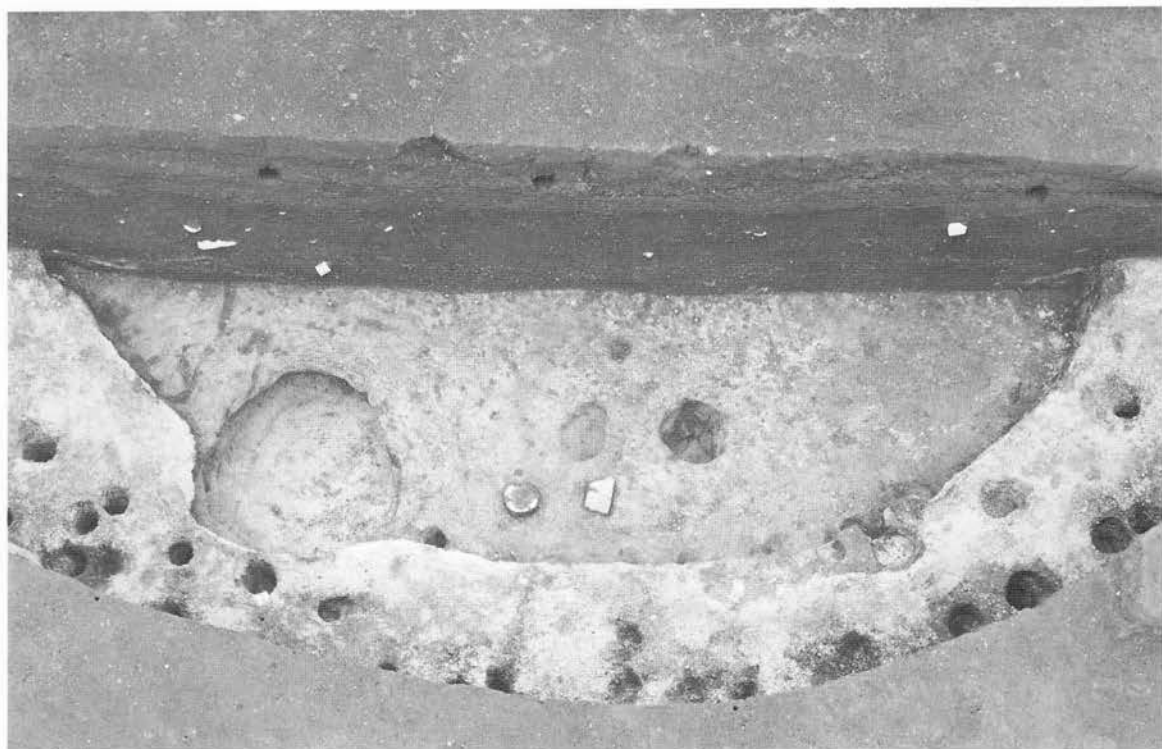
平面



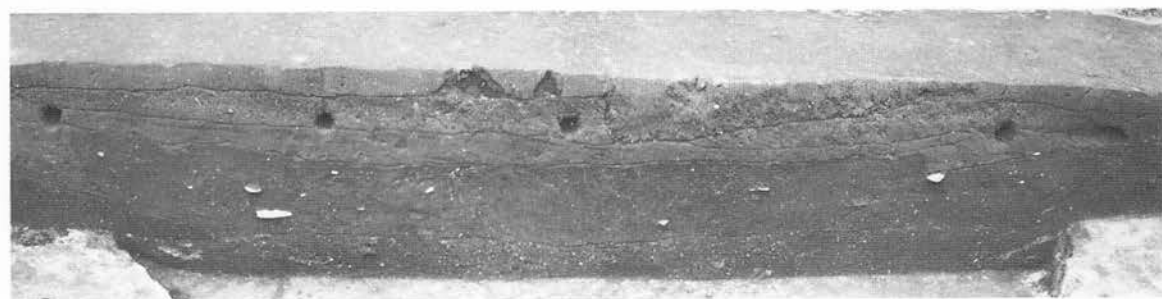
断面



遺物出土状況



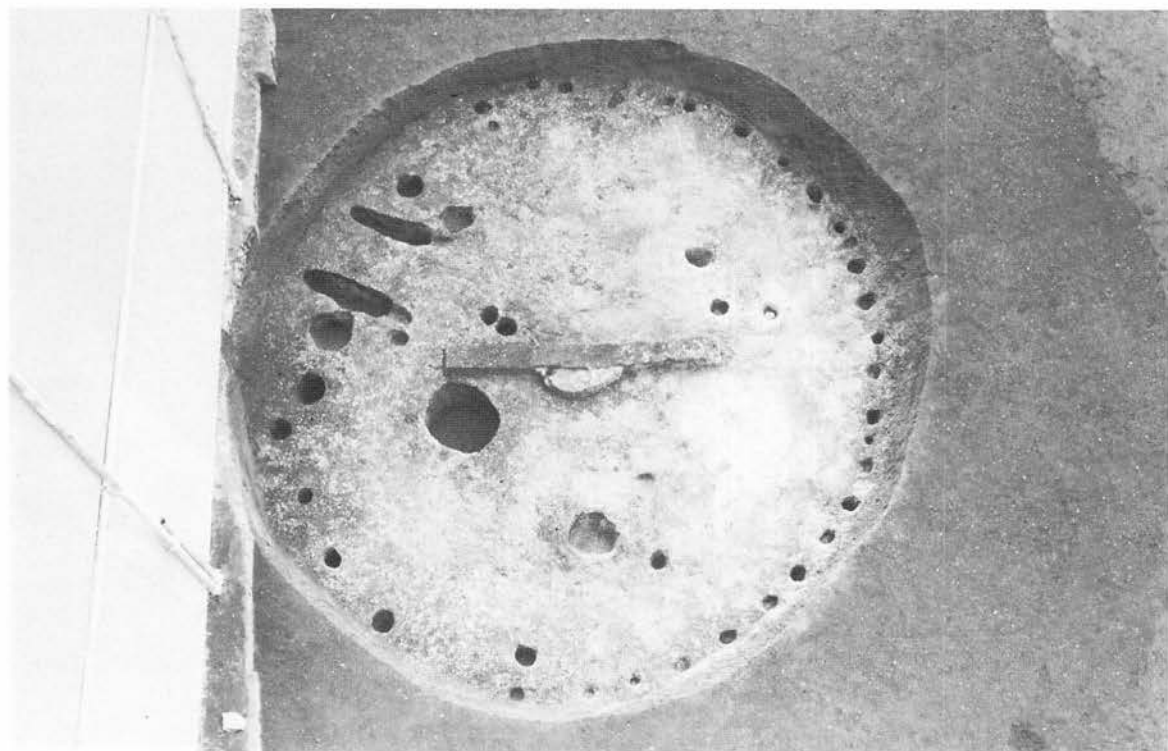
平面



断面



ビット断面



平面



断面

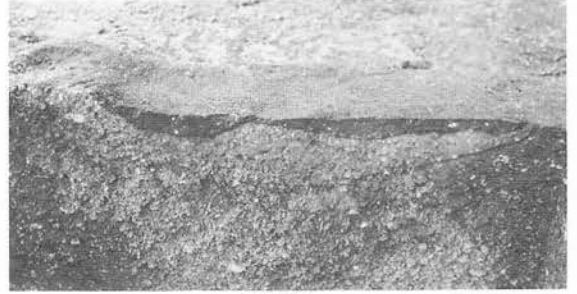


断面

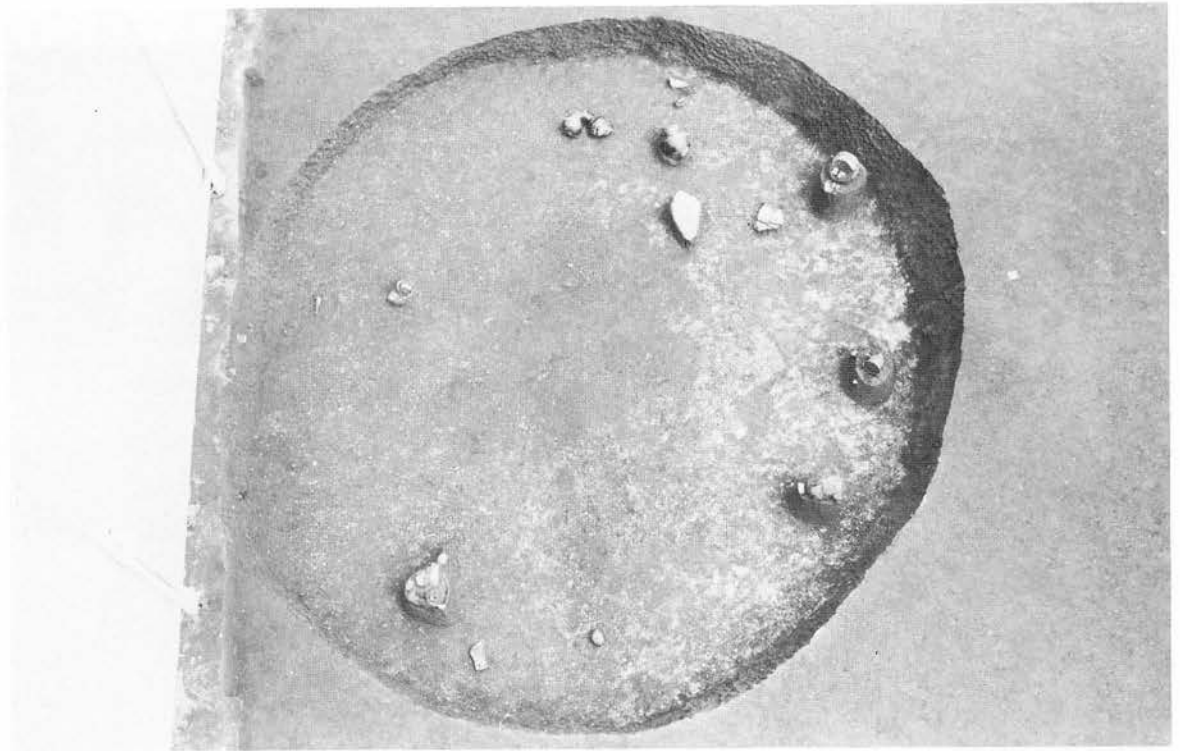
写真図版9 HI-4住居跡



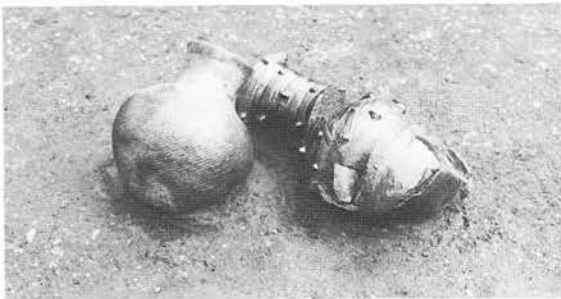
炉平面



炉断面



遺物出土状況



遺物出土状況



遺物出土状況

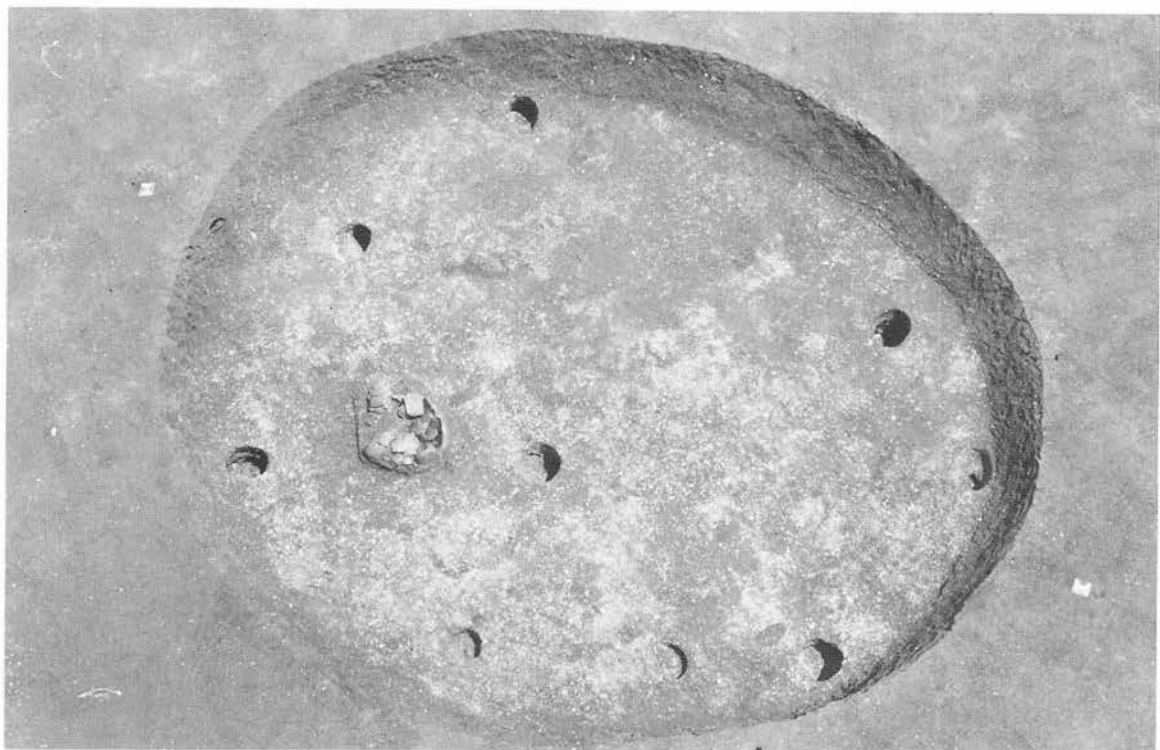
写真図版10 H I -4住居跡



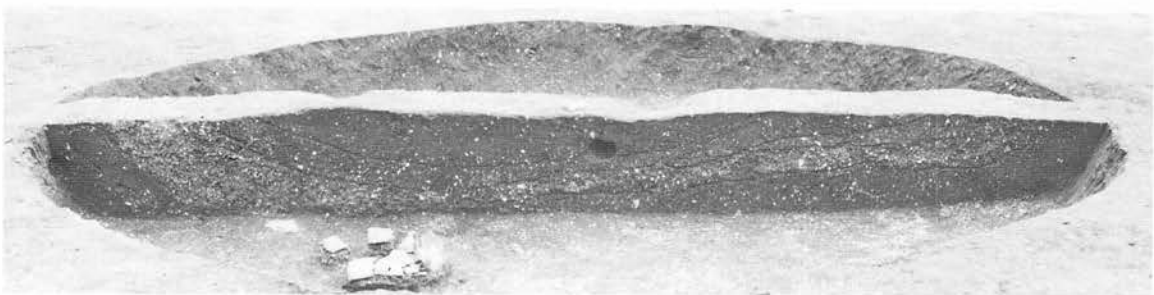
H I -4住居跡 遺物出土状況



H I -4住居跡 遺物出土状況

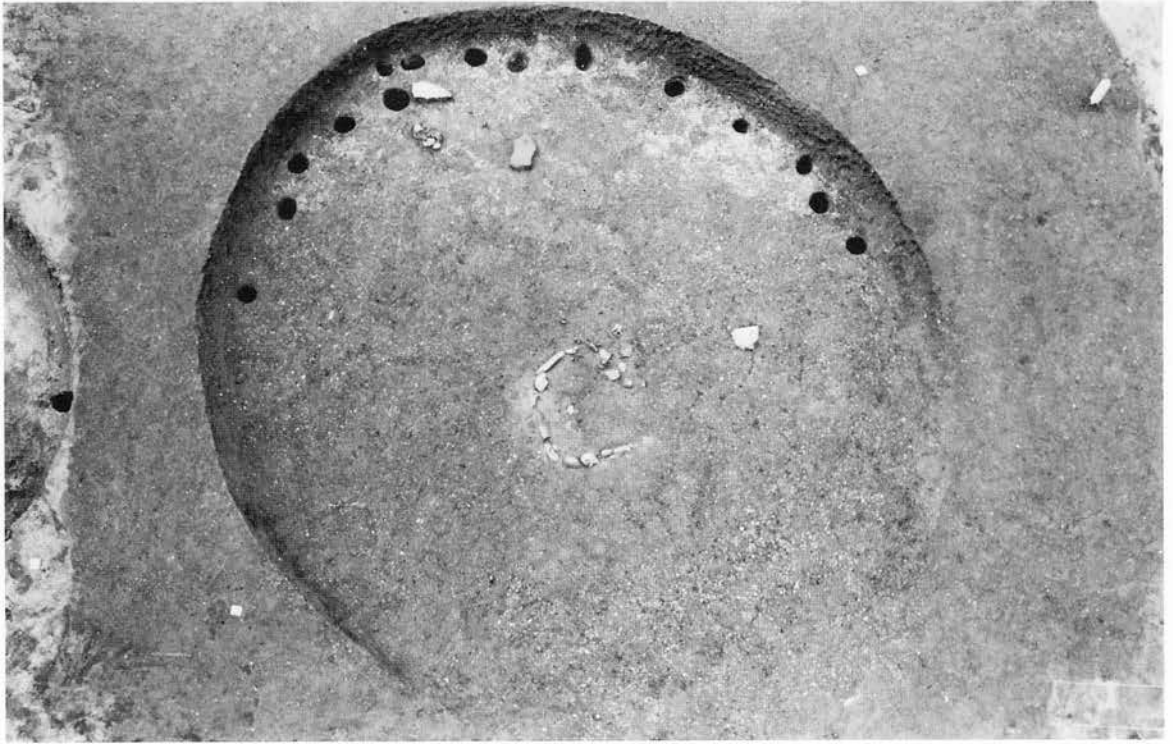


H I -5住居跡 平面



H I -5住居跡 断面

写真図版11 H I -4住居跡・H I -5住居跡



平面



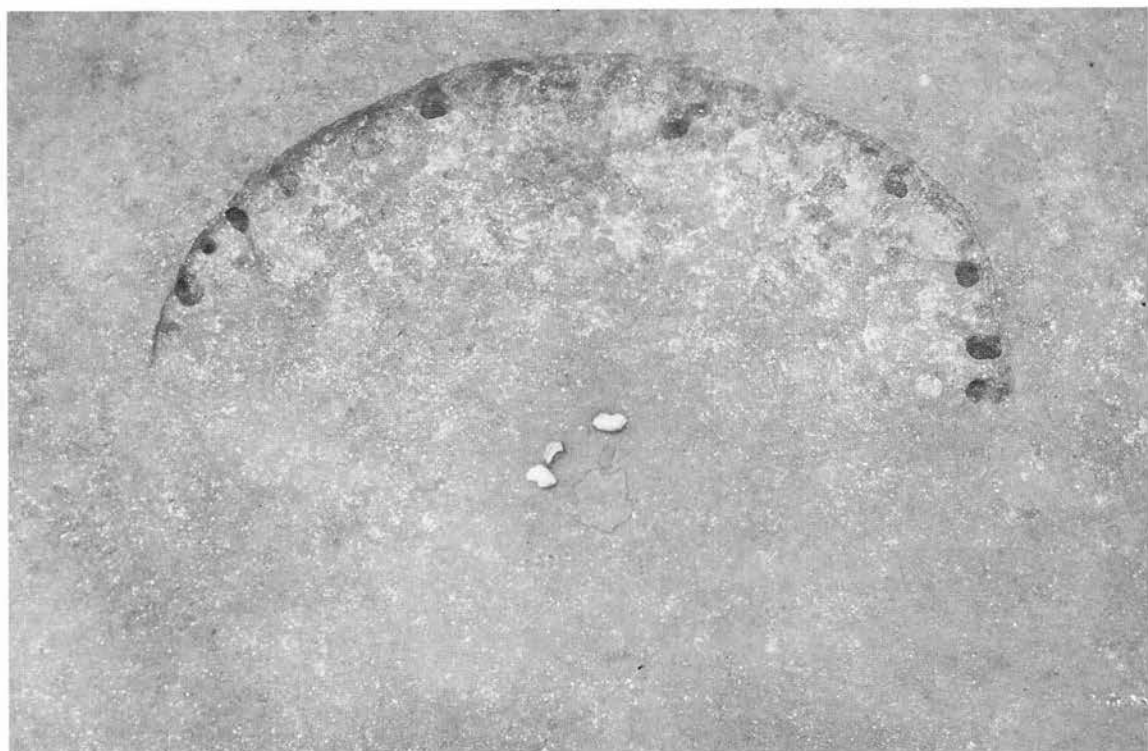
断面



炉断面



遺物出土状況



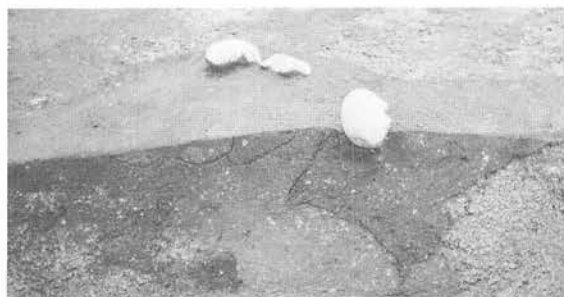
平面



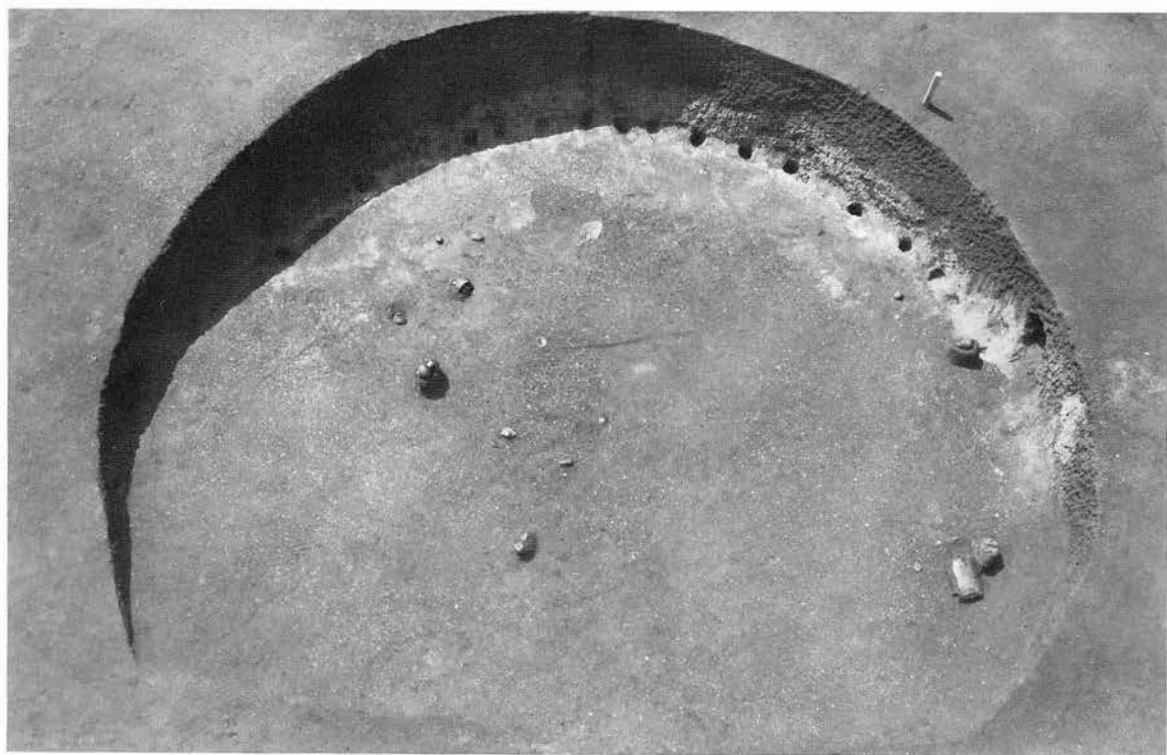
断面



炉平面



炉断面



平面



断面



炉平面



炉断面



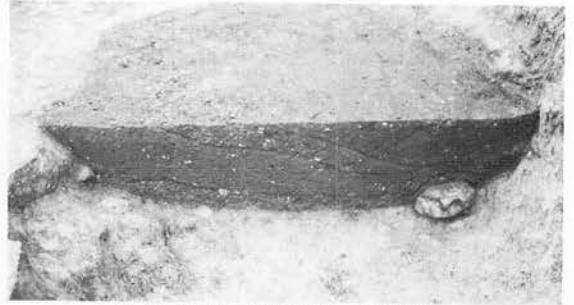
H I -8 a 住居跡遺物出土状況



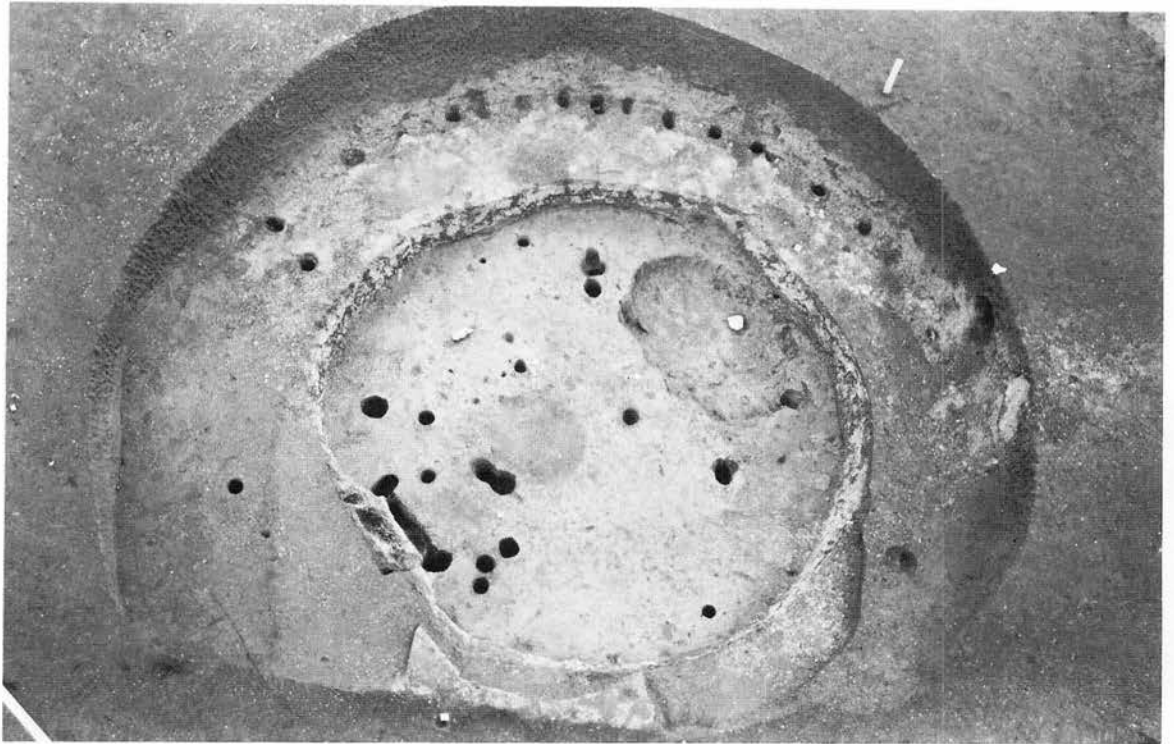
H I -8 a 住居跡遺物出土状況



H I -8 a 住居跡遺物出土状況

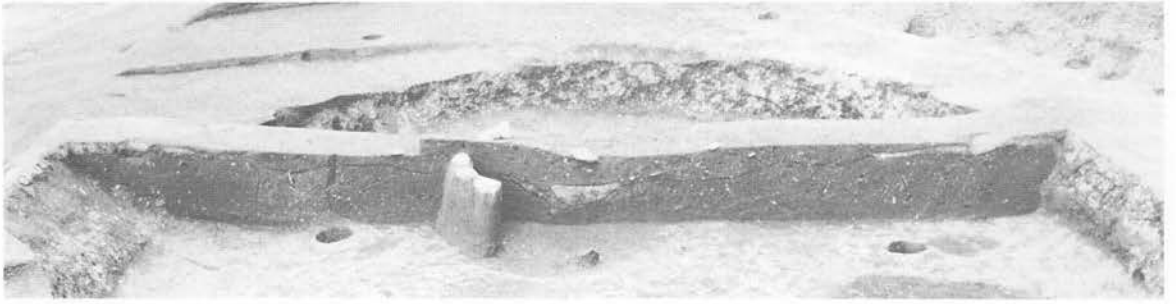


H I -8 c 住居跡内ピット断面

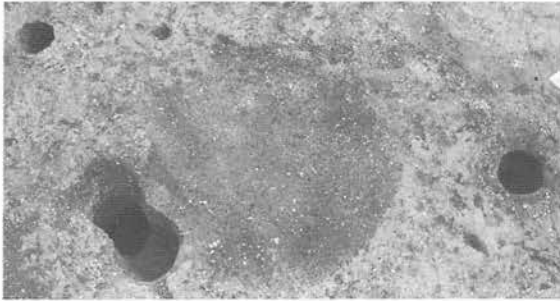


H I -8 c 住居跡平面

写真図版15 H I -8 a・c 住居跡



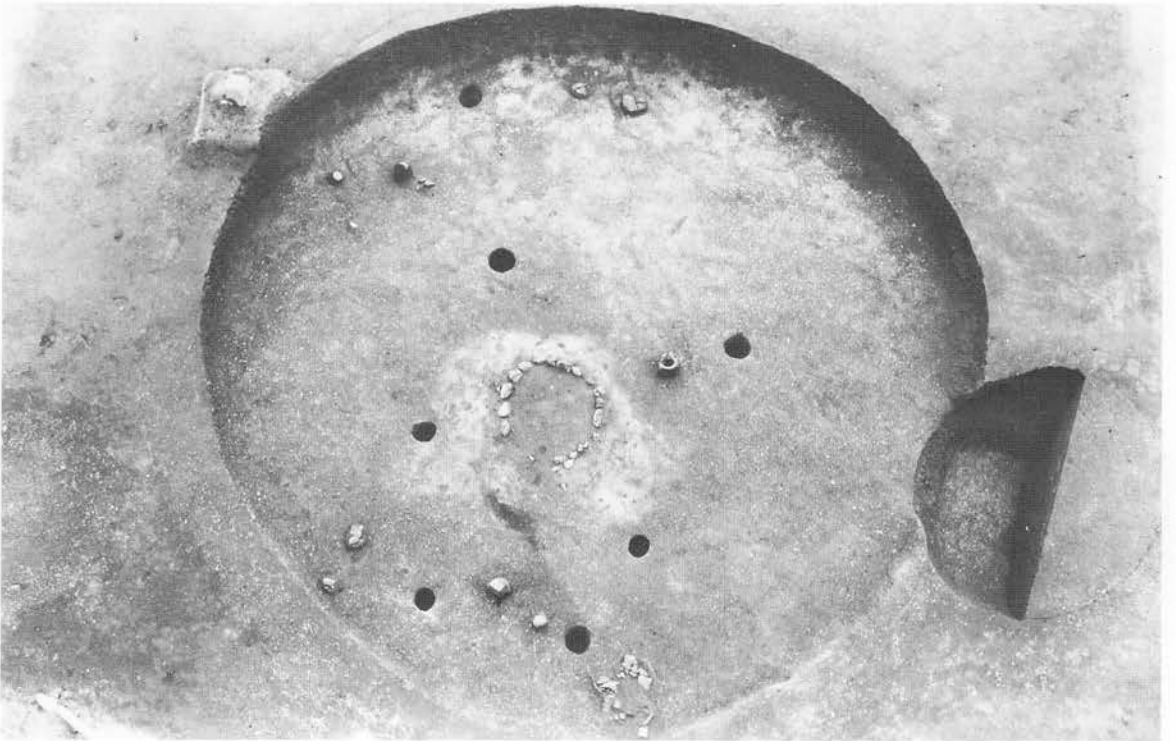
H I -8 b 住居跡炉断面, H I -8 b · c 住居跡断面



H I -8 c 住居跡炉平面

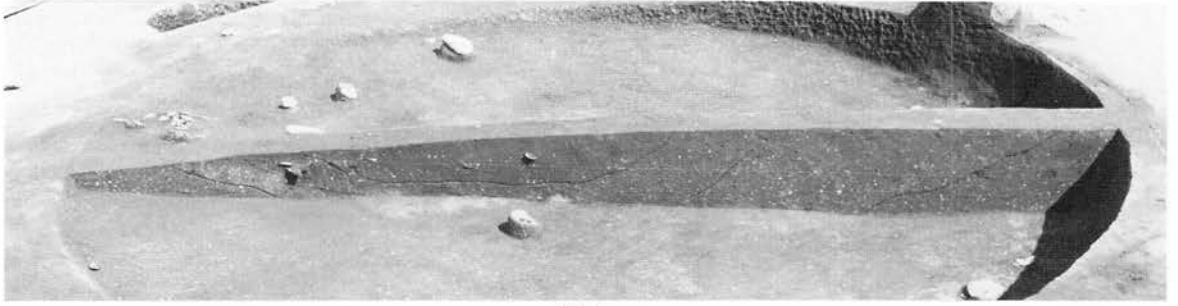


H I -8 c 住居跡炉断面



H I -9 住居跡平面

写真図版 16 H I -8 b · c 住居跡, H I -9 住居跡



断面



炉平面



炉断面



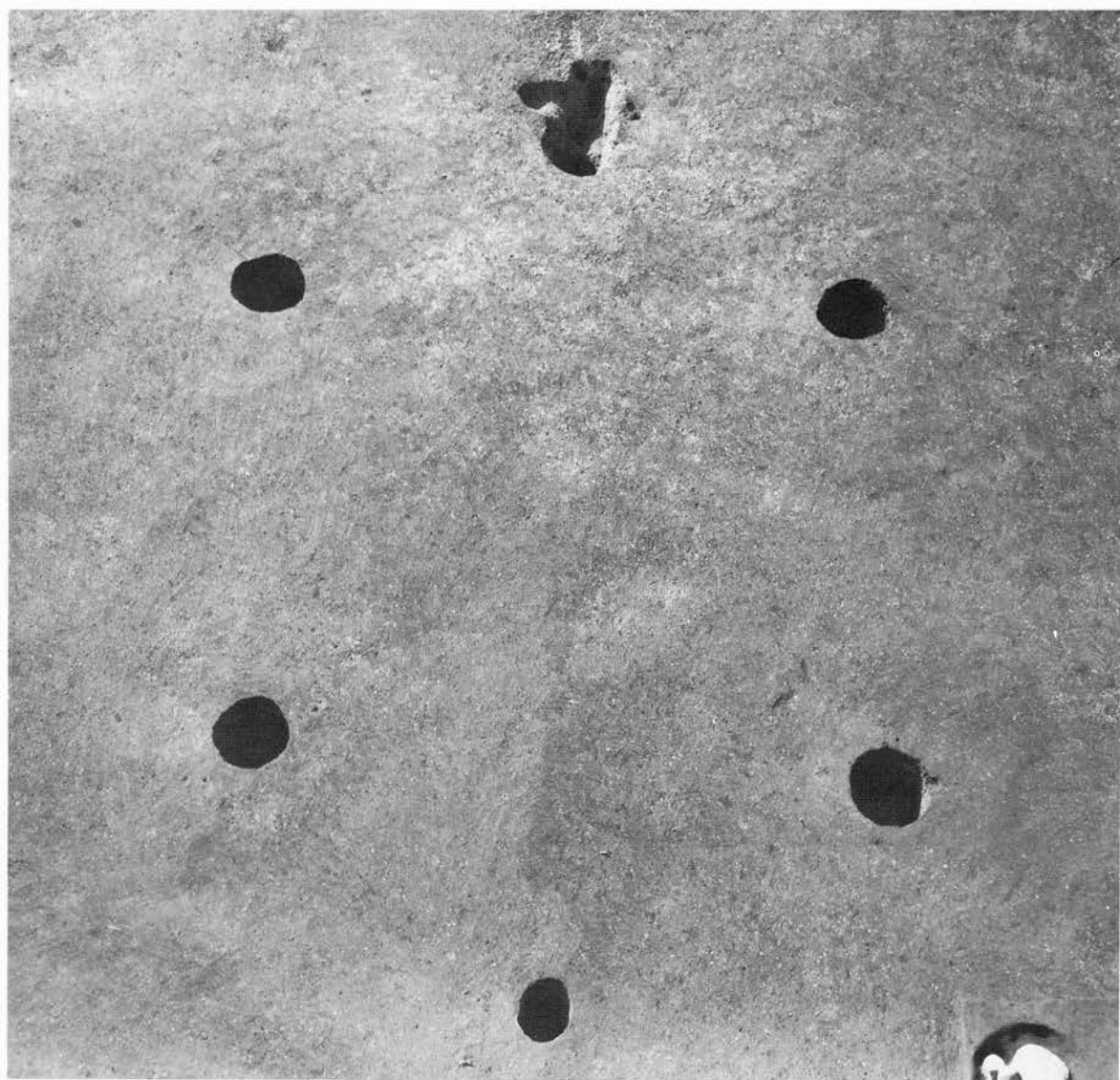
遺物出土状況



遺物出土状況



遺物出土状況



平面

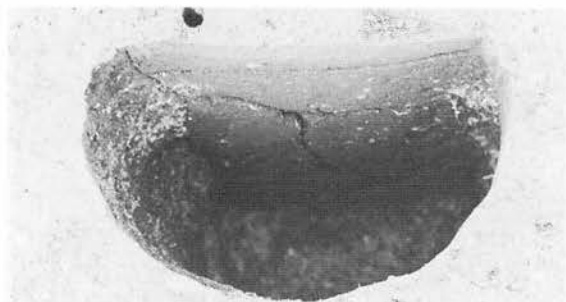


柱穴 2 断面



柱穴 3 断面

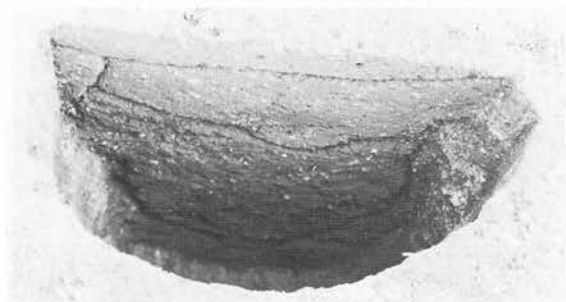
写真図版18 HI-10住居跡



H I-10住居跡柱穴 4 断面



H I-10住居跡柱穴 5 断面

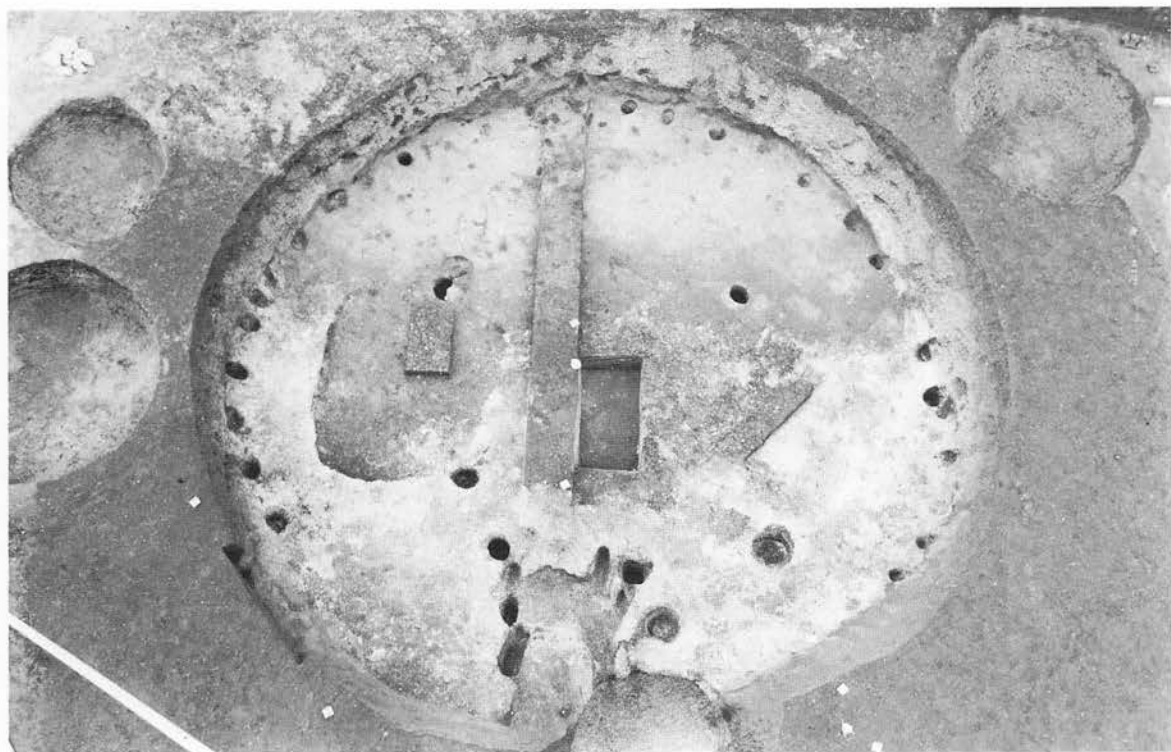


H I-10住居跡柱穴 6 断面



H II-1 住居跡遺物出土状況

写真図版19 H I-10住居跡・H II-1住居跡



平面



断面

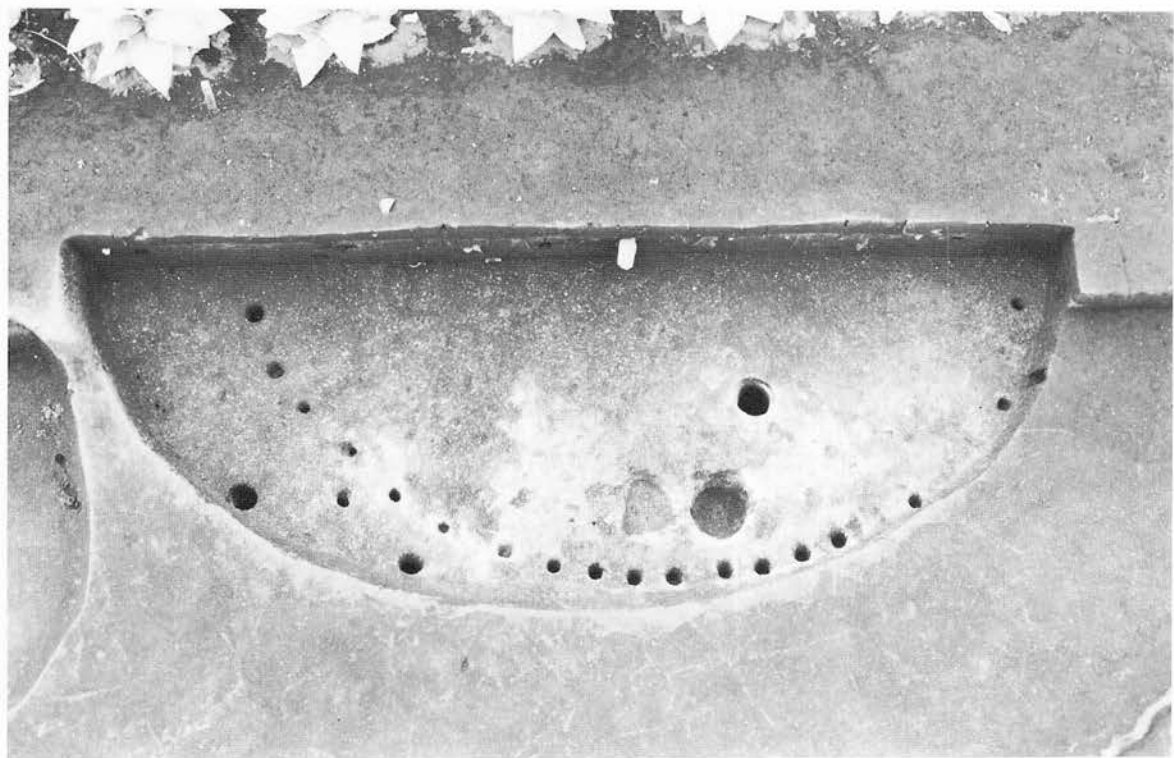


炉平面

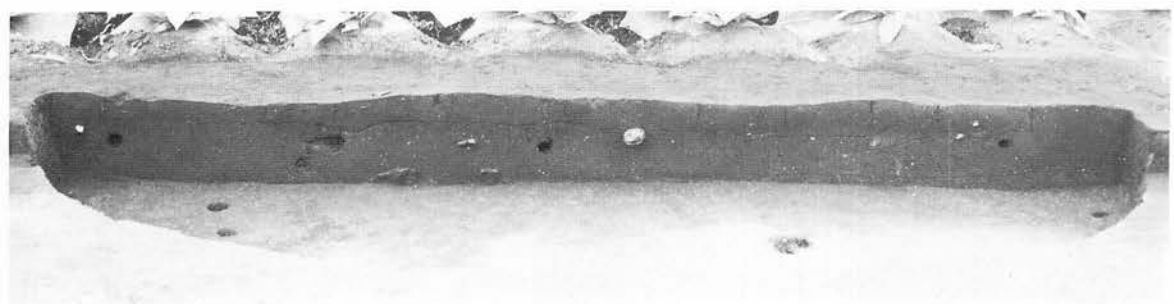


炉断面

写真図版20 H II-1住居跡



平面



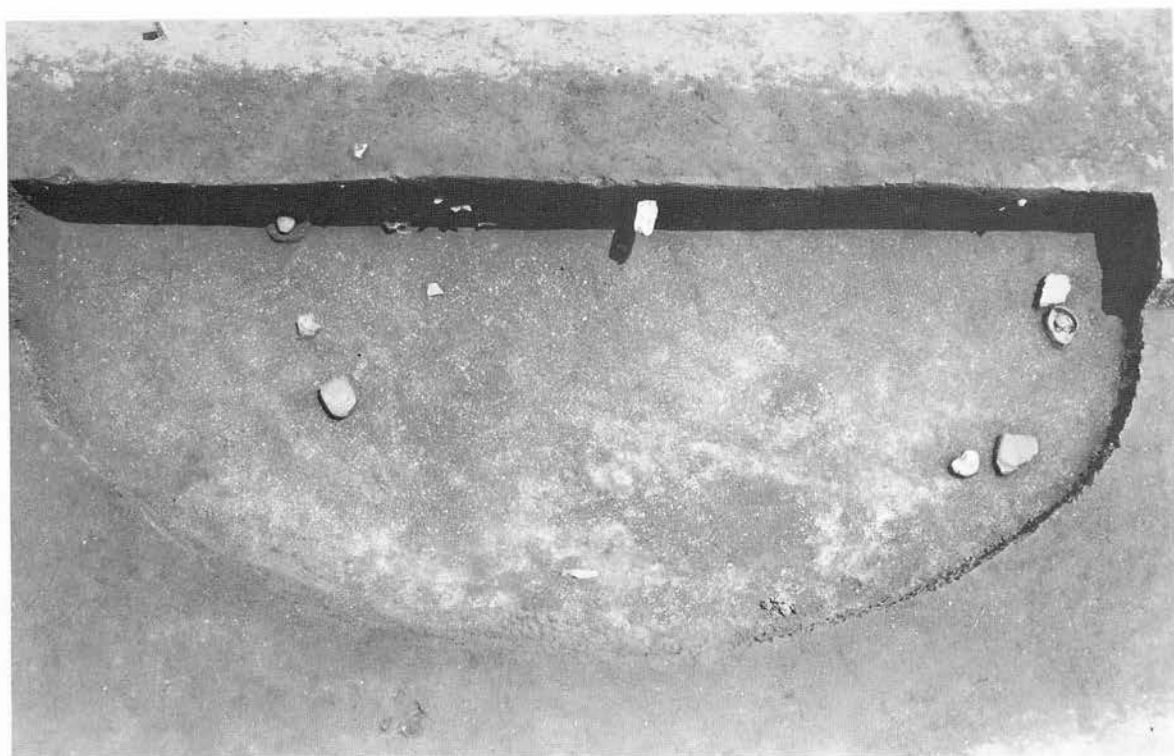
断面



遺物出土状況



遺物出土状況



ⅠⅠ-Ⅰa 住居跡遺物出土状況



ⅠⅠ-Ⅰa 住居跡遺物出土状況



ⅠⅠ-Ⅰa 住居跡遺物出土状況

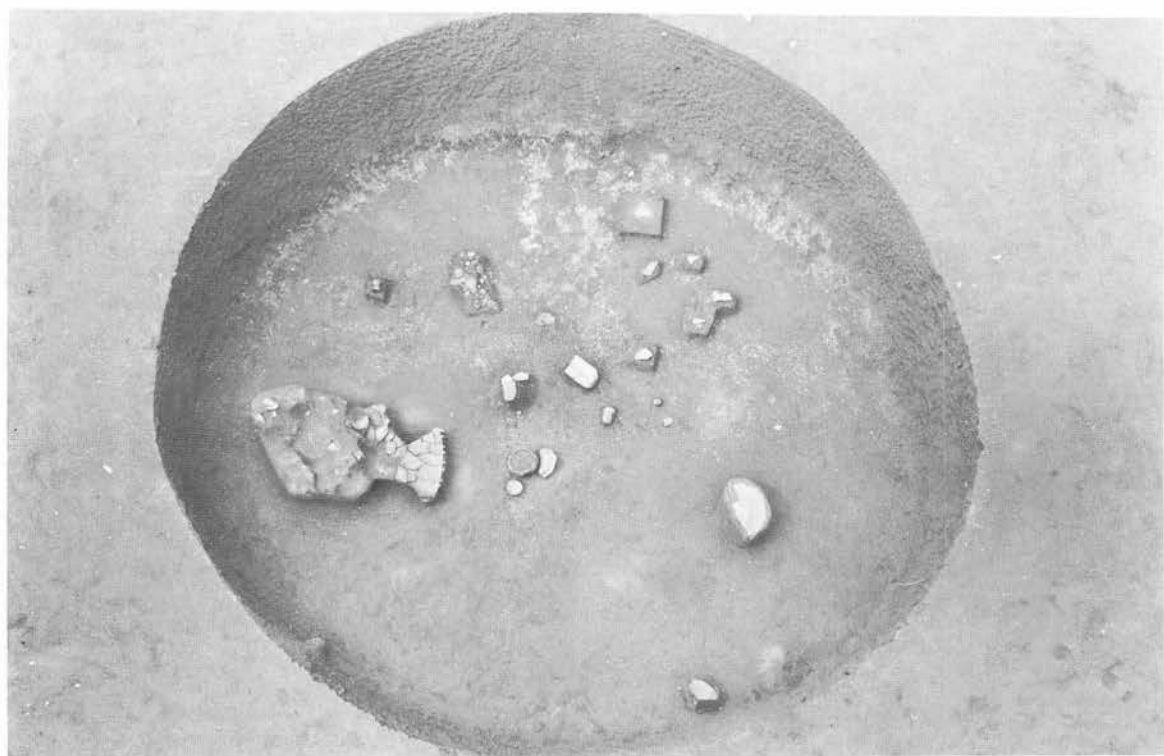


ⅠⅠ-2 住居跡遺物出土状況



ⅠⅠ-2 住居跡遺物出土状況

写真図版22 ⅠⅠ-Ⅰa 住居跡・ⅠⅠ-2住居跡



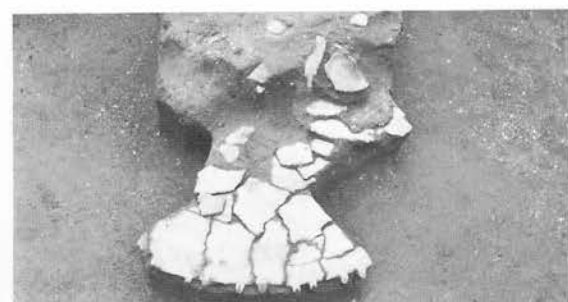
遺物出土状況



遺物出土状況



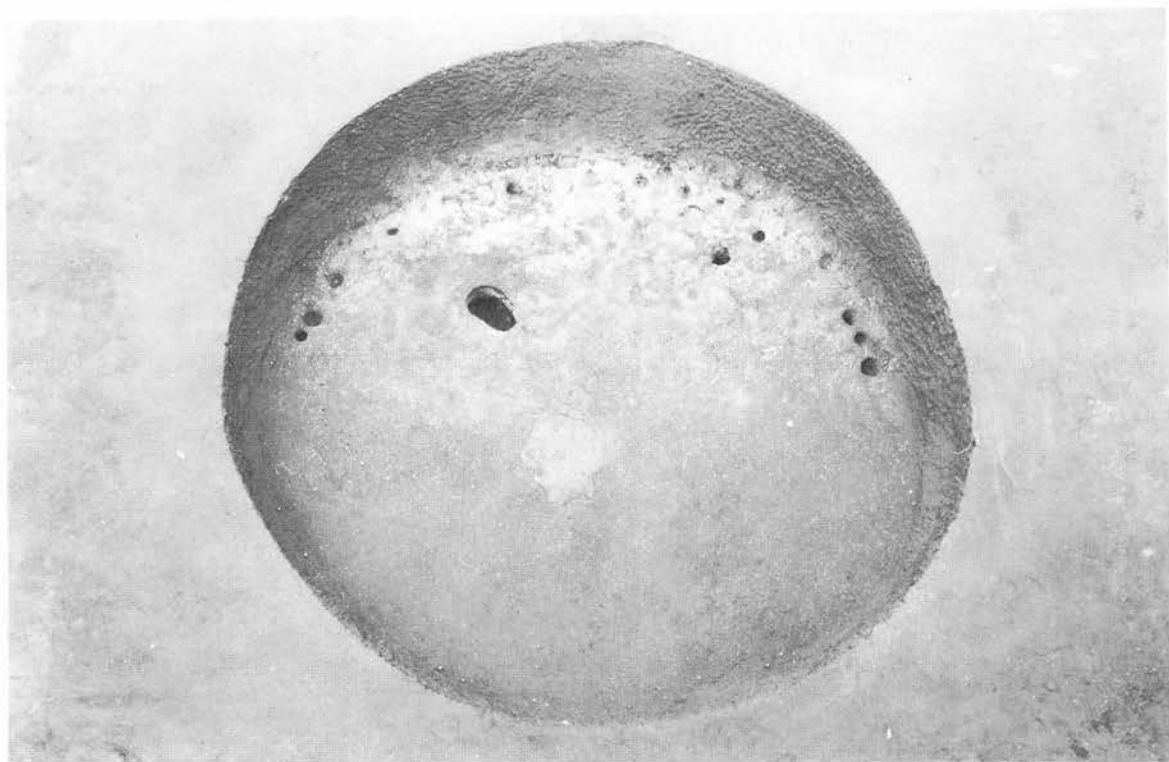
遺物出土状況



遺物出土状況



遺物出土状況



平面



断面

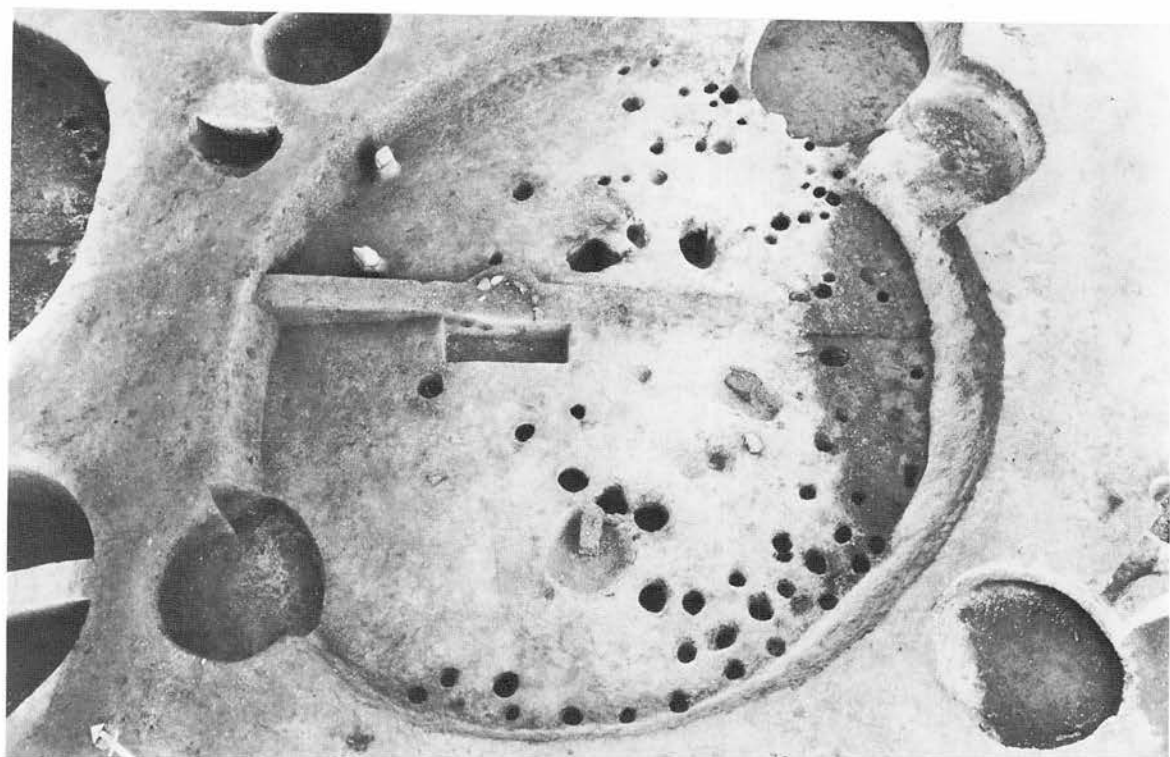


炉平面



炉断面

写真図版24 I I-2住居跡



平面



断面



炉平面



炉断面

写真图版25 I I-3住居跡



遺物出土狀況



遺物出土狀況



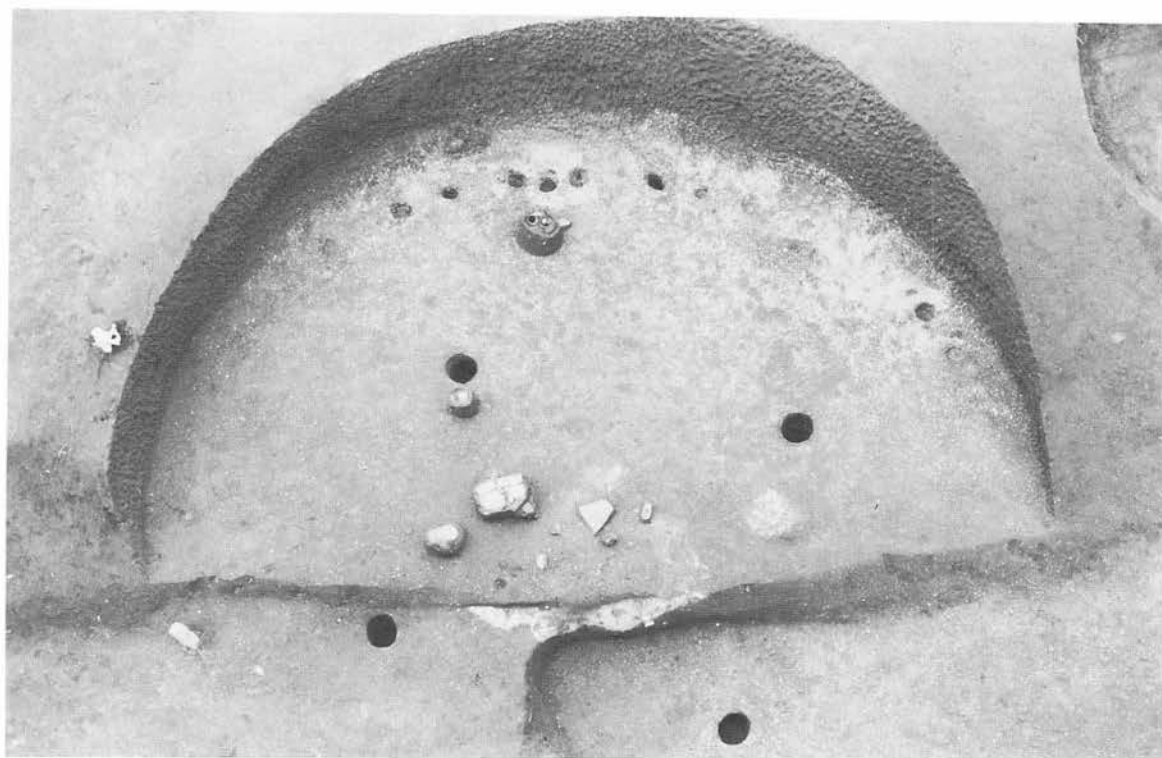
遺物出土狀況



遺物出土狀況



遺物出土狀況



平面



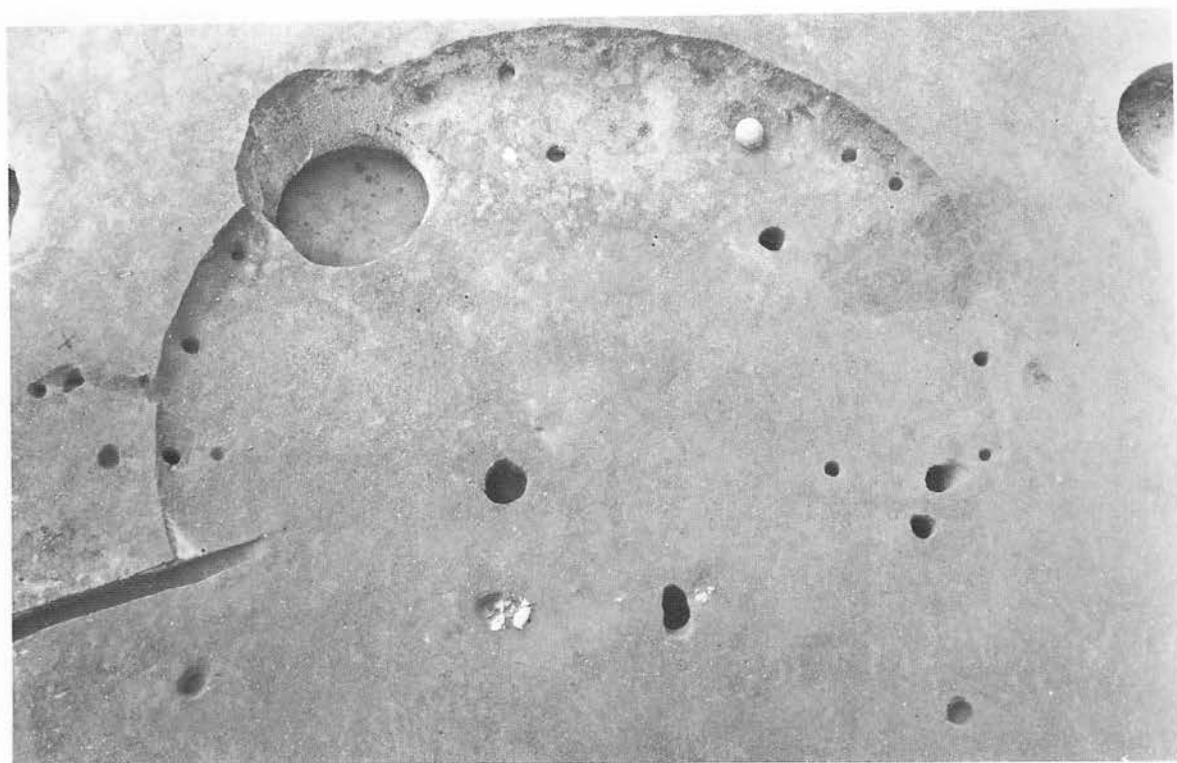
断面



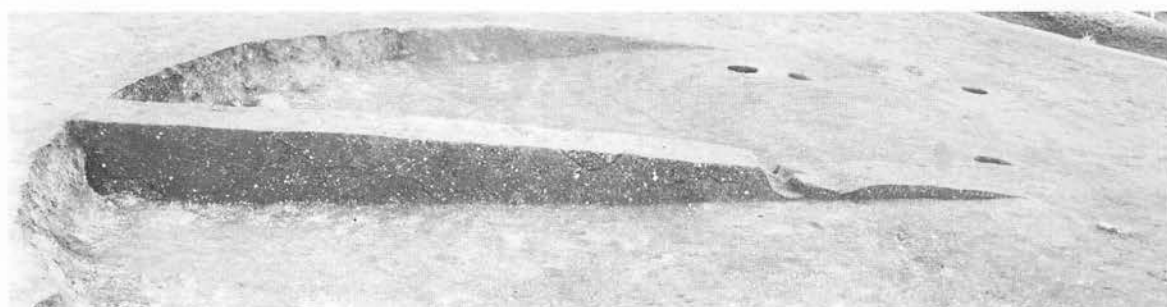
炉断面



遺物出土状況



平面



断面



炉断面



遺物出土状況



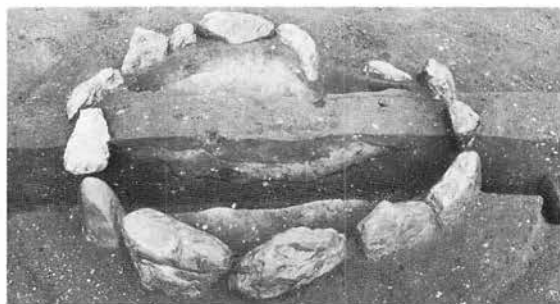
平面



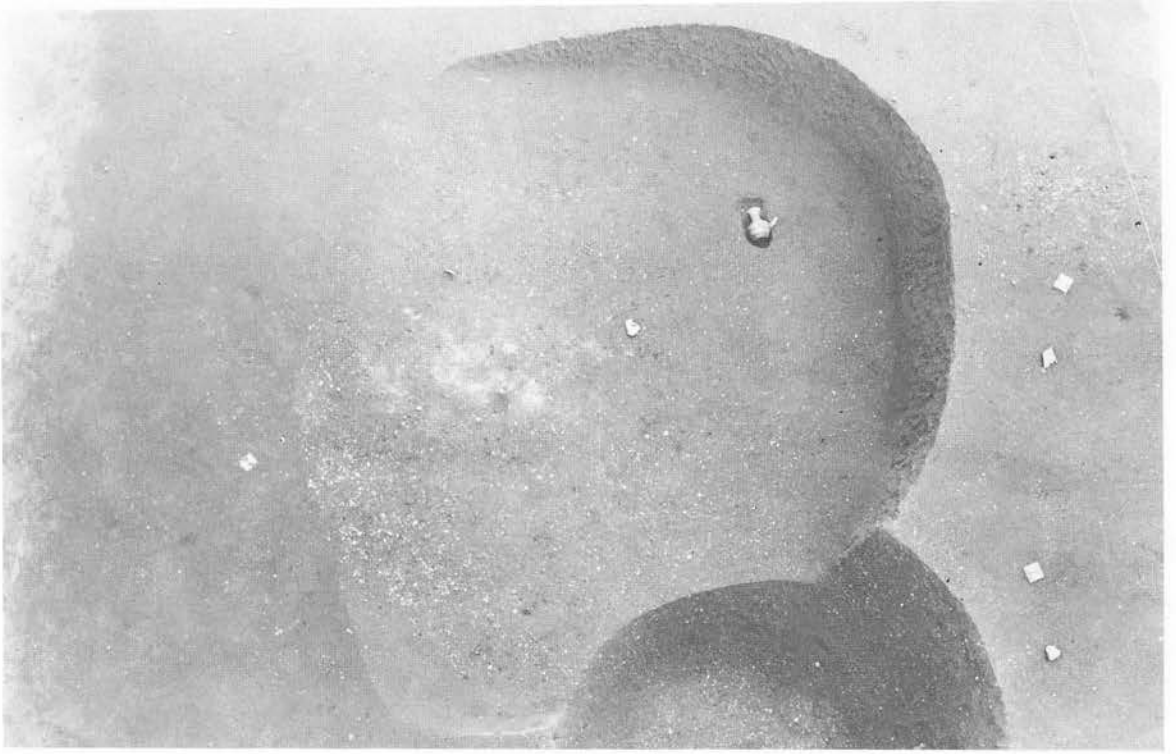
断面



炉平面



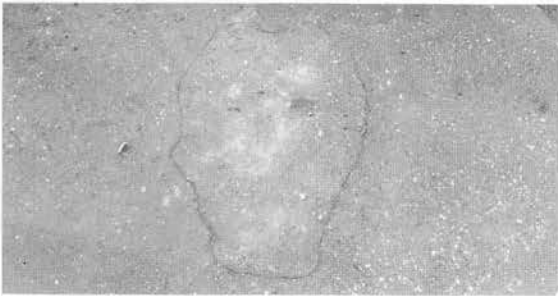
炉断面



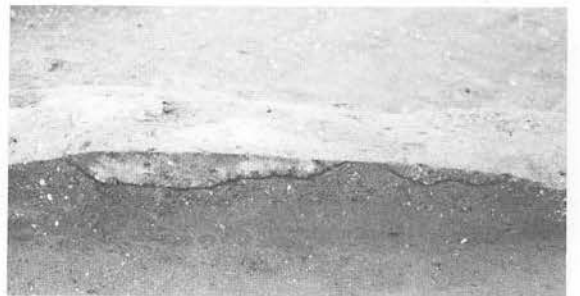
平面



断面



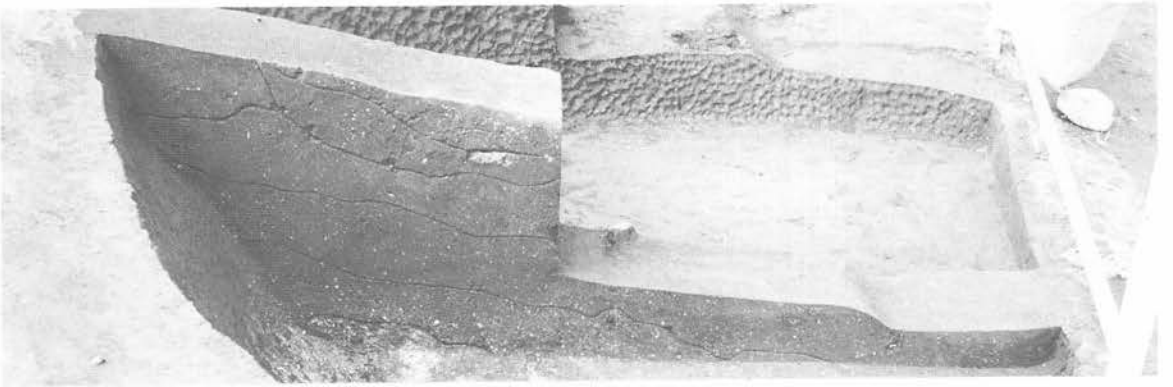
炉平面



炉断面



平面



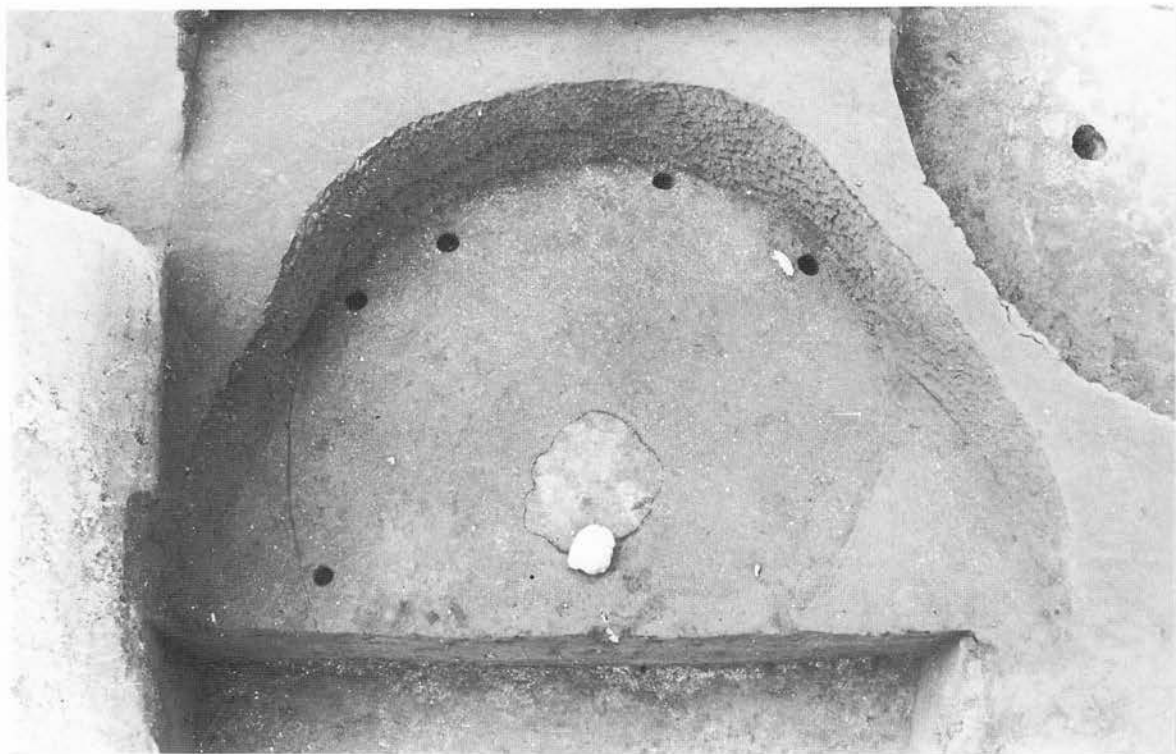
断面



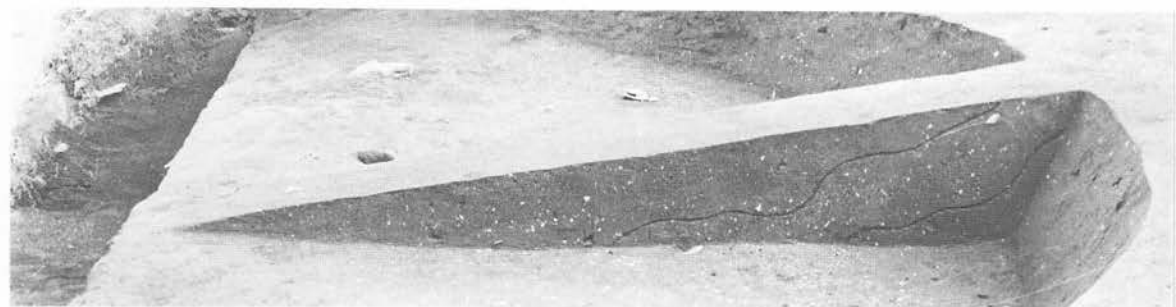
遺物出土状況



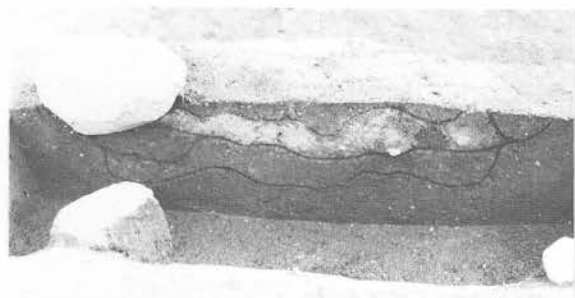
遺物出土状況



平面



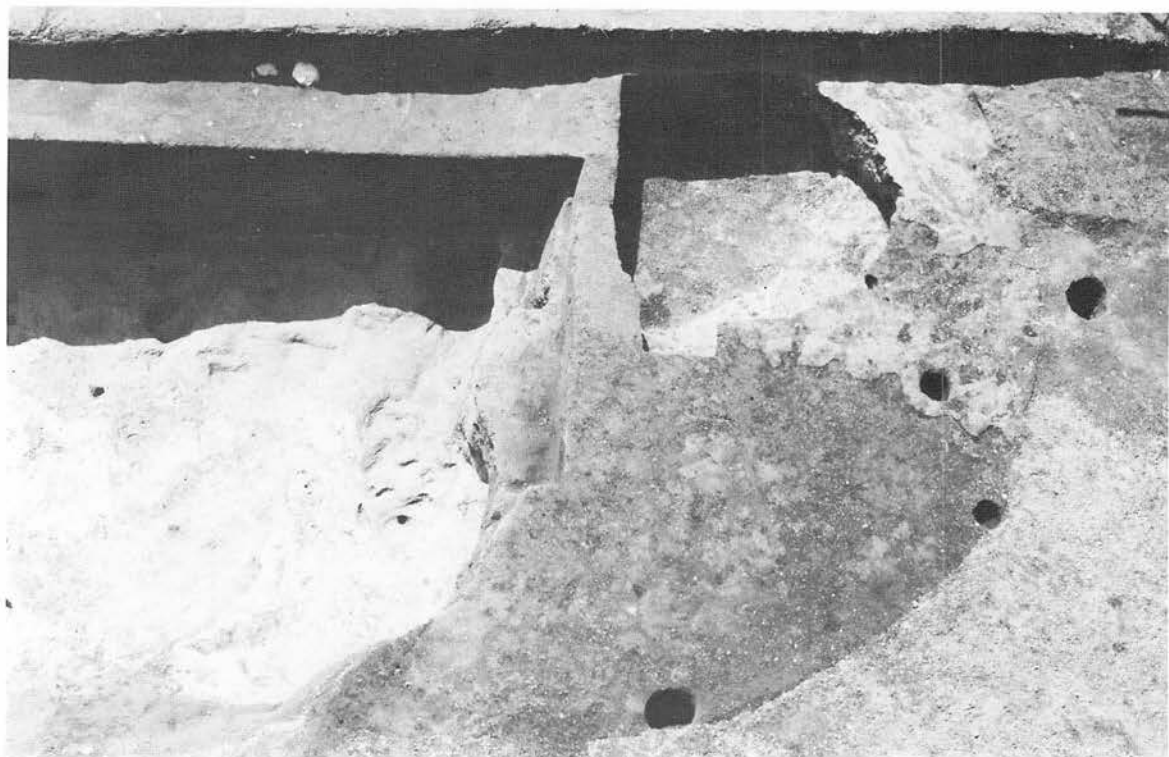
断面



炉断面



遺物出土状況



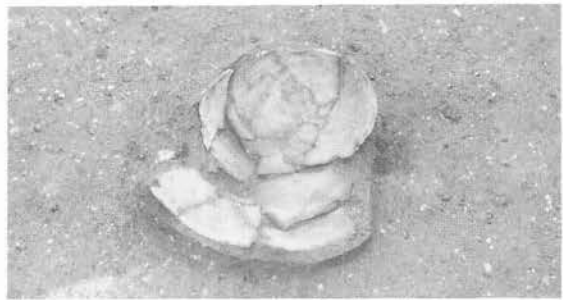
I II-1住居跡平面



I II-1住居跡貼床断面



I II-3住居跡遺物出土状況

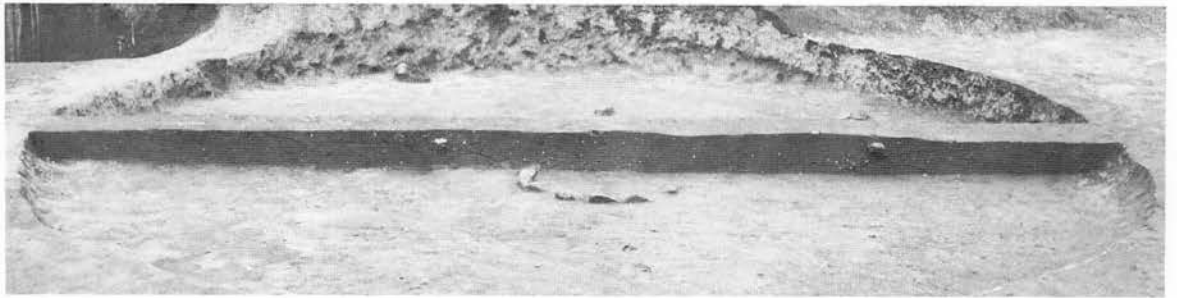


I II-3住居跡遺物出土状況

写真図版33 I II-1住居跡・I II-3住居跡



平面



断面



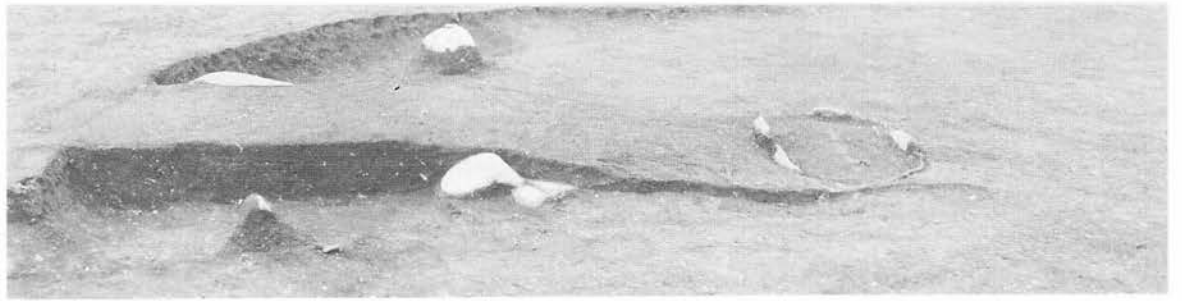
炉平面



炉断面



平面



断面



炉平面



炉断面

写真図版35 J I-1住居跡

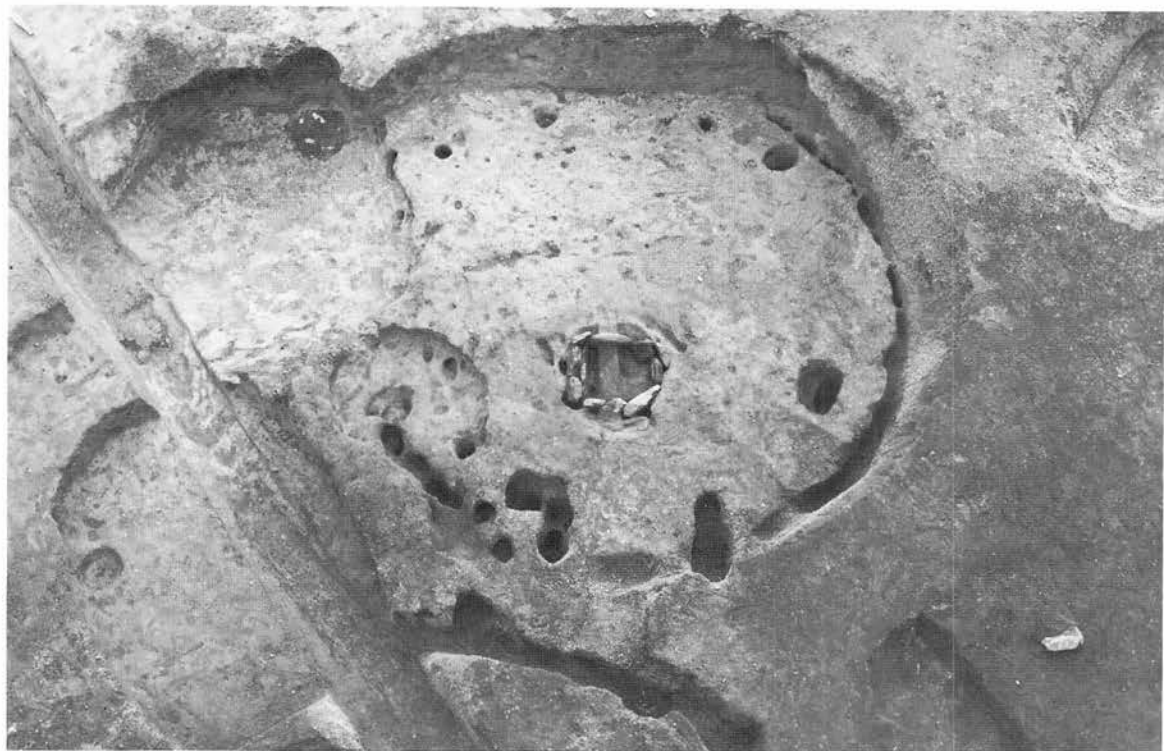


平面



断面

写真图版36 J I -2住居跡



平面



断面



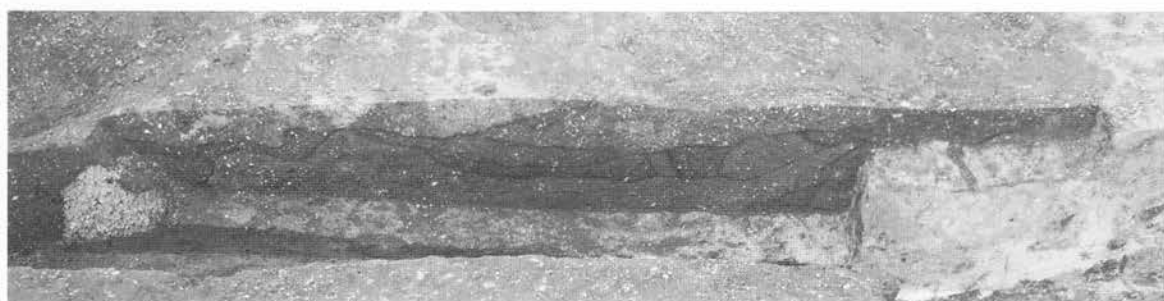
炉平面



炉断面



平面



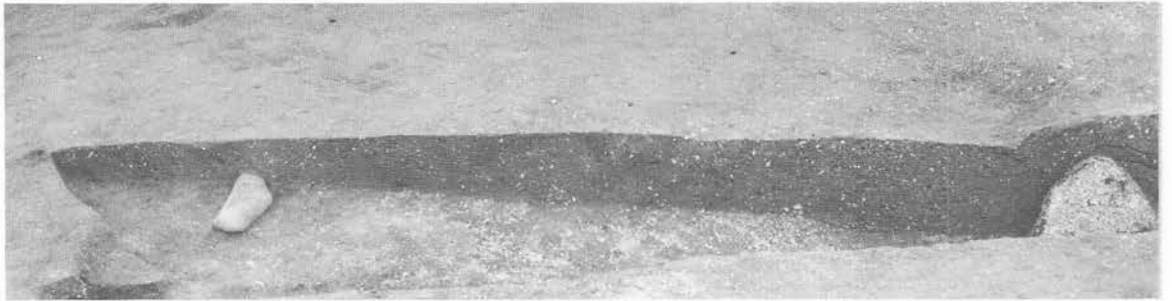
断面



遺物出土状況



平面



断面



炉平面



遺物出土状況



平面



断面

写真図版40 J I -7住居跡

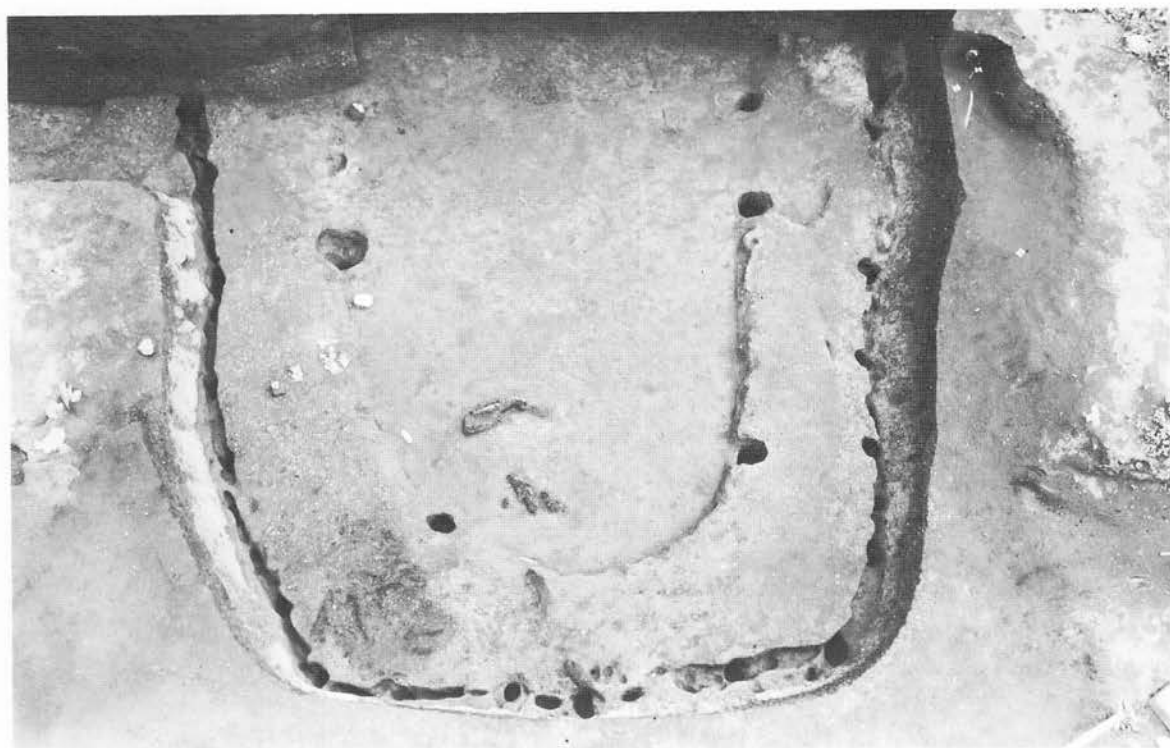


平面

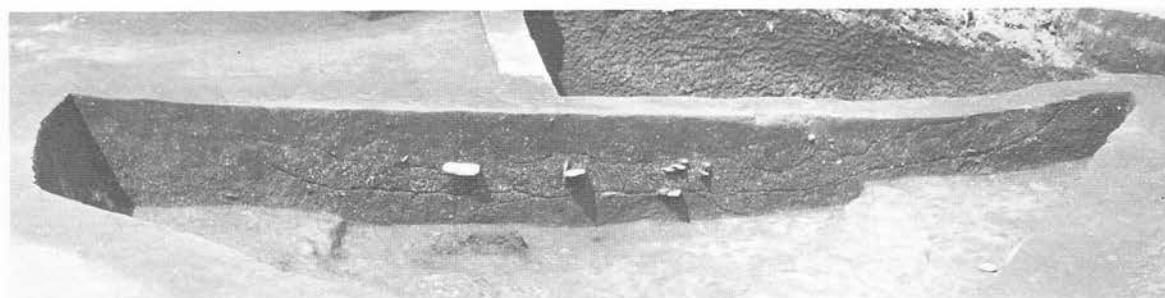


断面

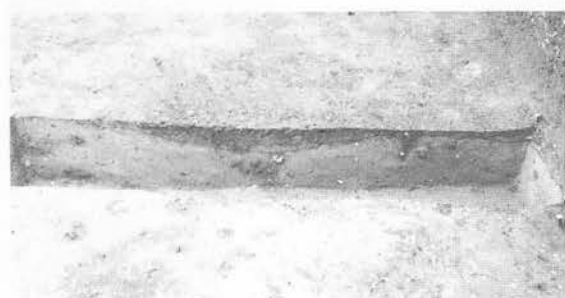
写真図版41 J II-2住居跡



平面



断面



炉断面



遺物出土状況



平面



断面

写真図版43 K I -2住居跡



平面



断面



炉平面

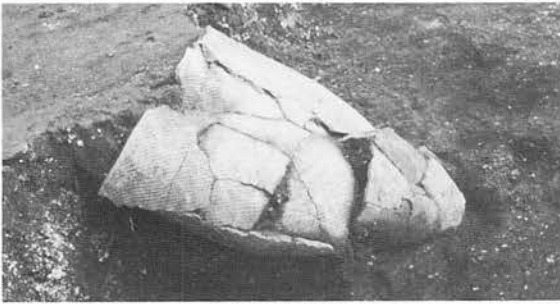


炉断面

写真図版44 K II-1住居跡



遺物出土・炭化材分布状況



遺物出土状況



遺物出土状況

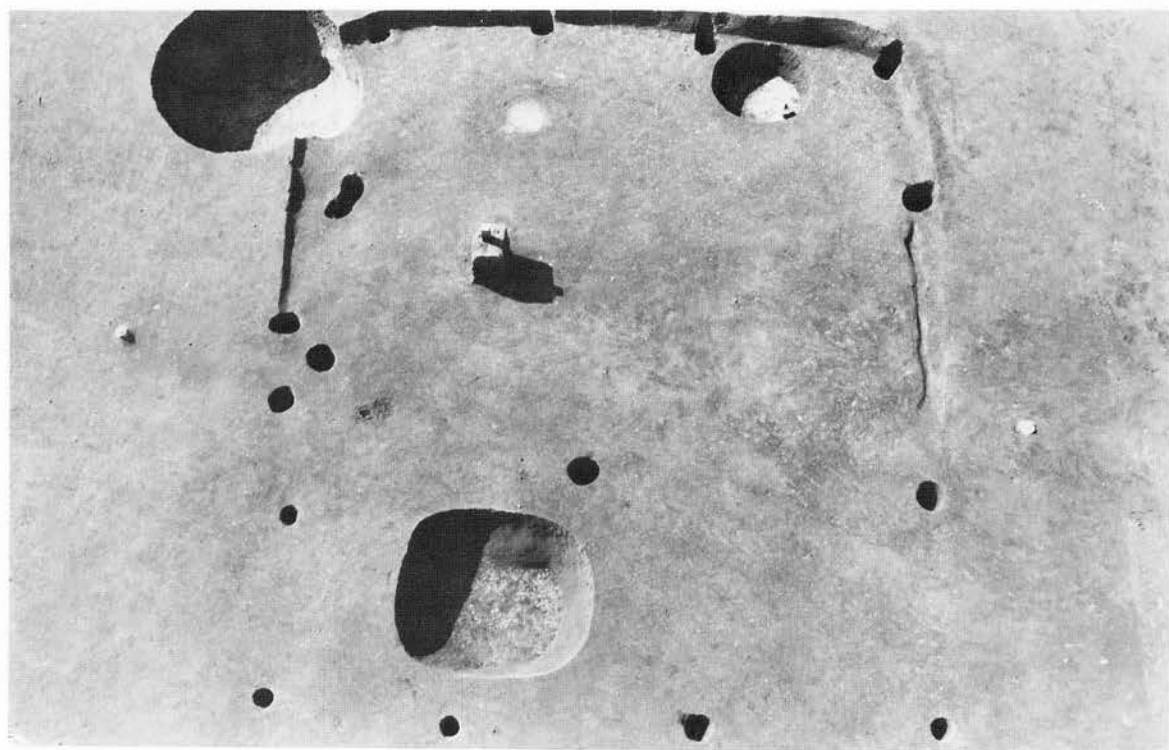


炭化材分布状況

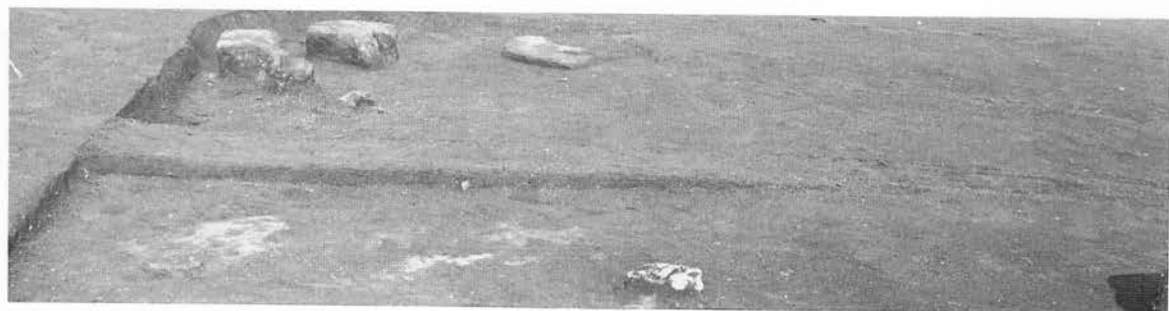


炭化材分布状況

写真図版45 K II-1住居跡



平面



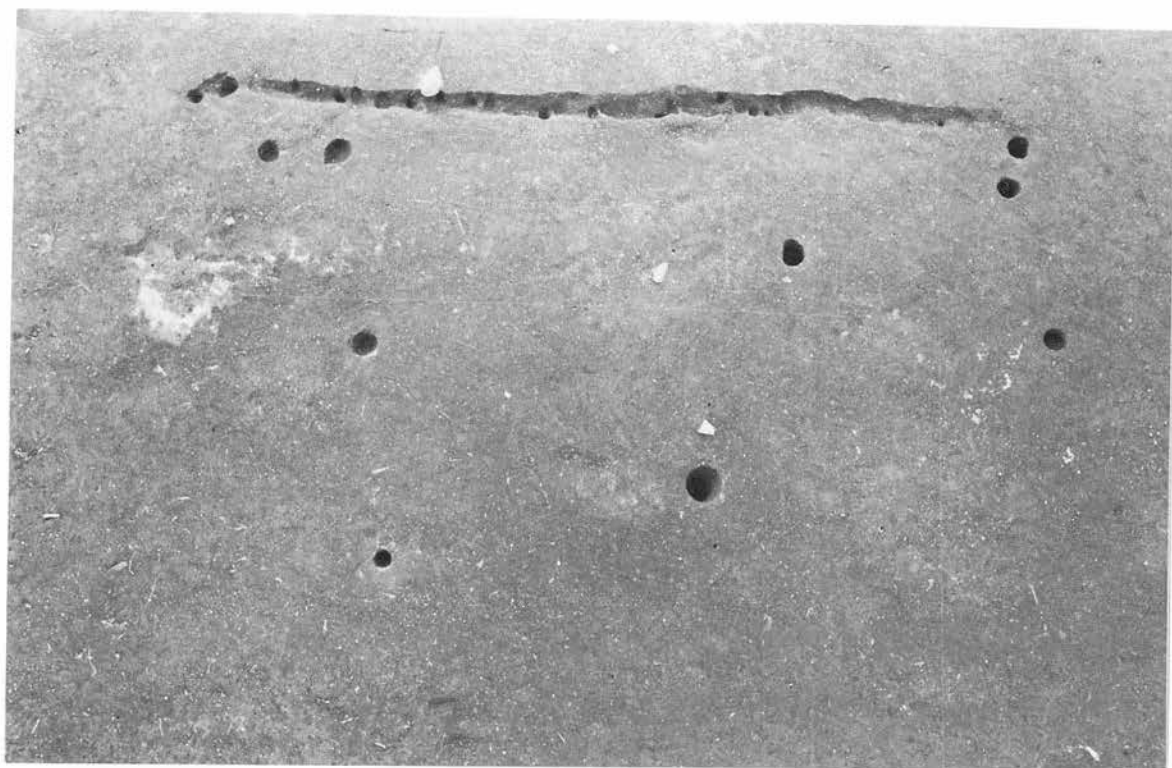
断面



烧土平面



烧土断面



I I -5住居跡平面



焼土断面



I II-2住居跡カマド横断面左

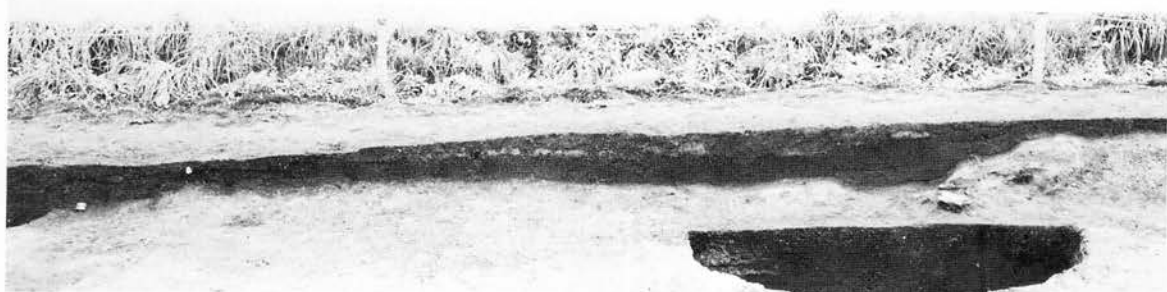


I II-2住居跡カマド横断面右

写真図版47 I I -5住居跡・I II-2住居跡



平面



断面



カマド平面

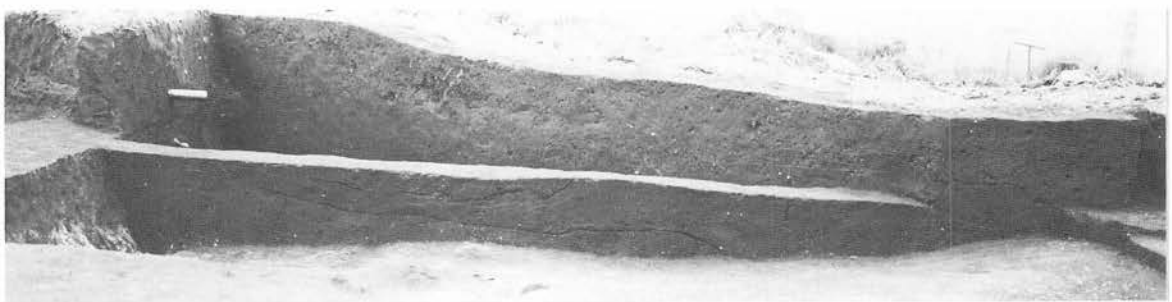


カマド縦断面

写真図版48 I II-2住居跡



平面



断面



カマド平面



カマド縦断面



J I-3住居跡カマド横断面左



J I-3住居跡カマド横断面右



J I-3住居跡遺物出土状況



J I-3住居跡遺物出土状況



J II-1住居跡カマド横断面1左



J II-1住居跡カマド横断面1右



J II-1住居跡カマド横断面2左

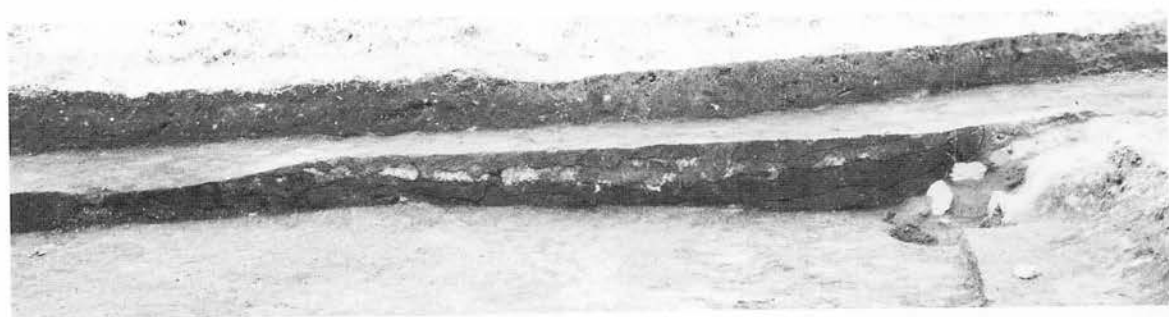


J II-1住居跡カマド横断面2右

写真図版50 J I-3住居跡・J II-1住居跡



平面



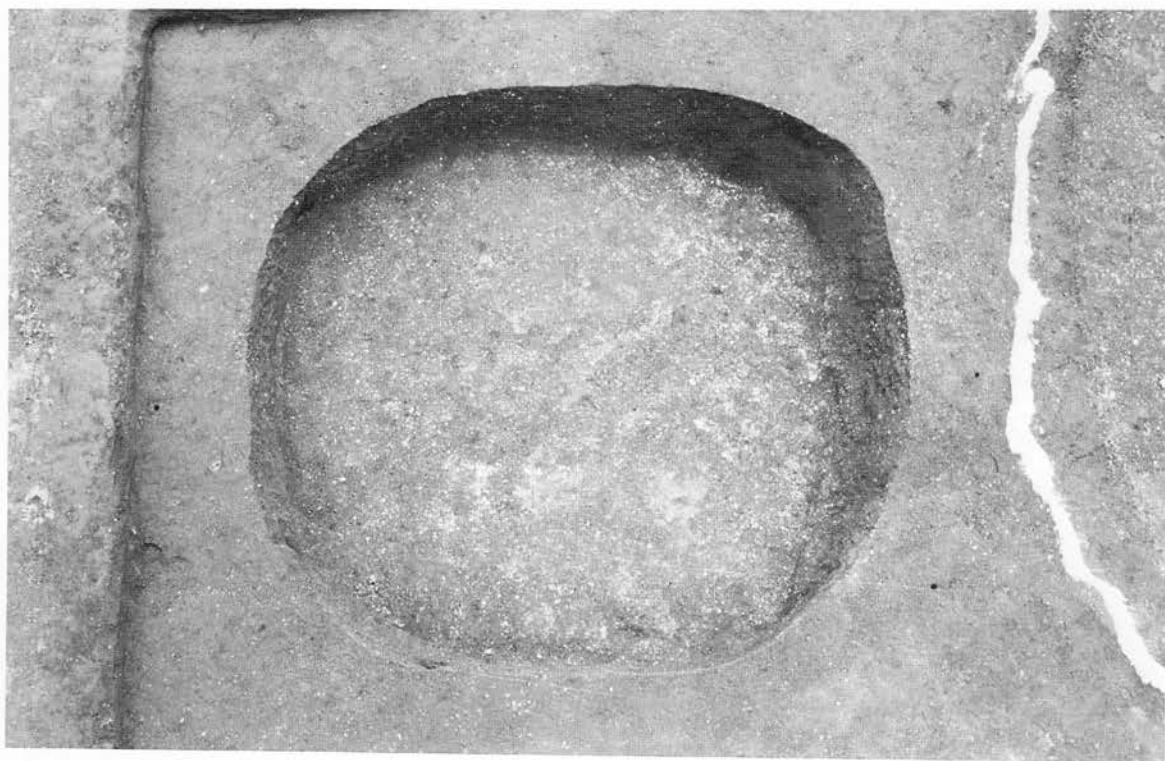
断面



カマド平面



カマド縦断面



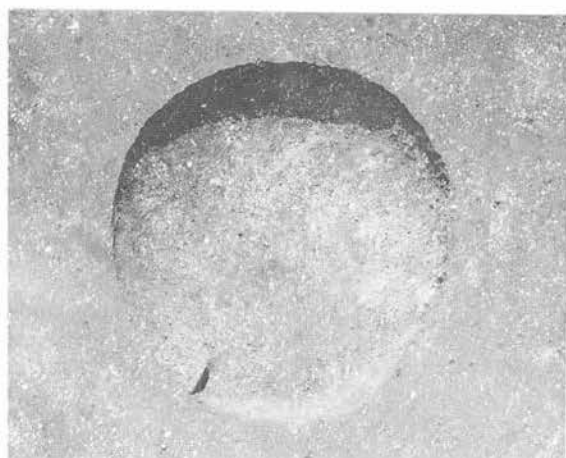
平面



断面



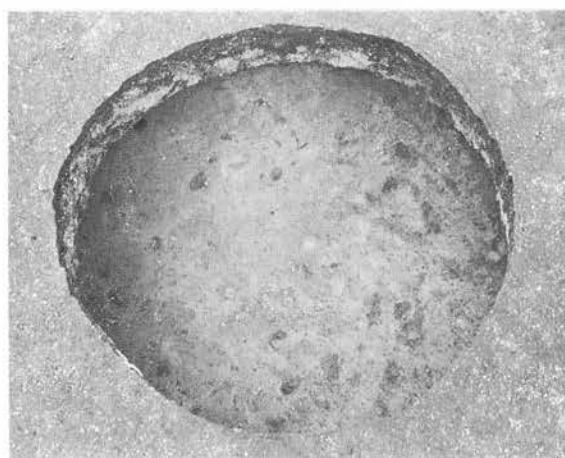
遺物出土状況



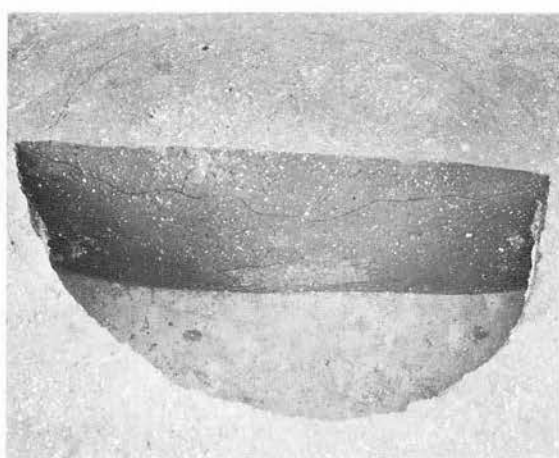
FI-51ピット平面



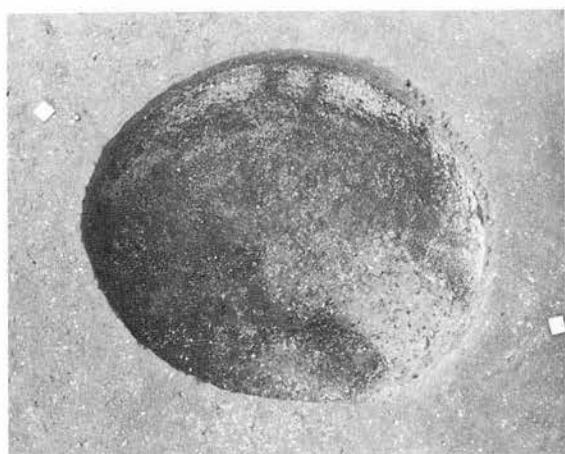
FI-51ピット断面



FI-52ピット平面



FI-52ピット断面

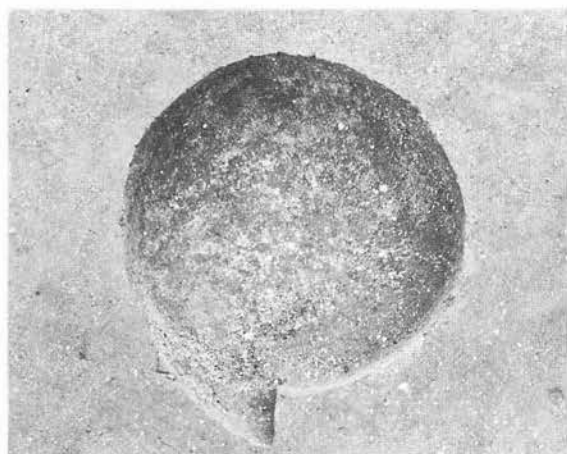


FI-53ピット平面



FI-53ピット断面

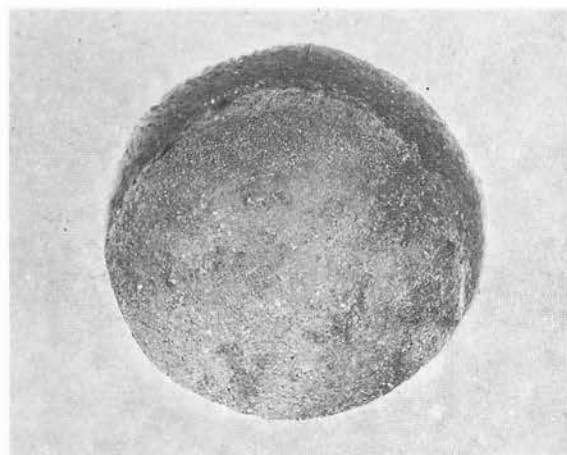
写真図版53 ピット



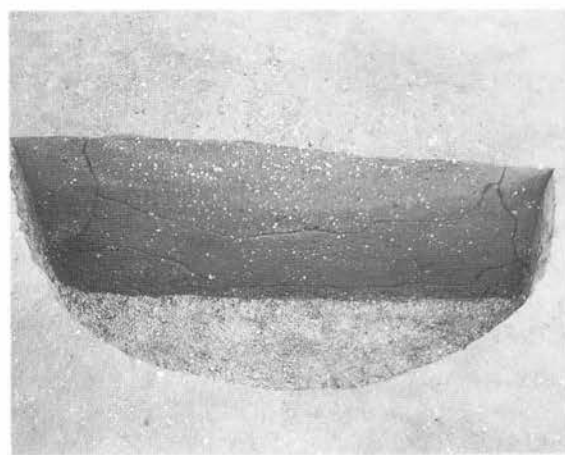
F I-54ピット平面



F I-54ピット断面



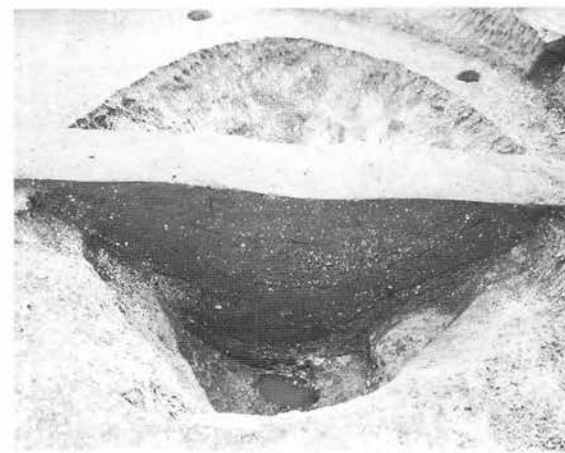
F I-55ピット平面



F I-55ピット断面



F I-56ピット平面



F I-56ピット断面

写真図版54 ピット



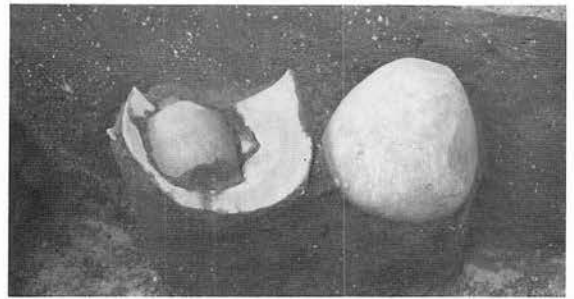
F I -56ピット遺物出土状況



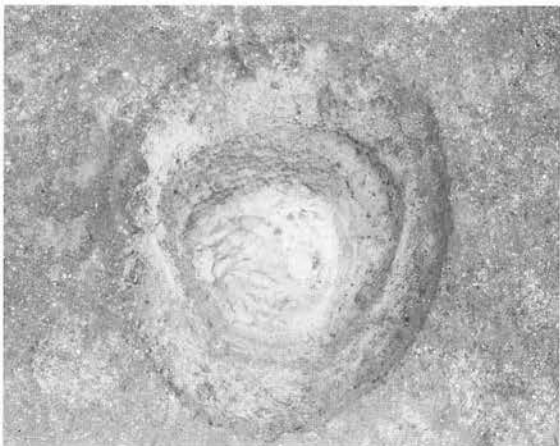
F I -57ピット平面



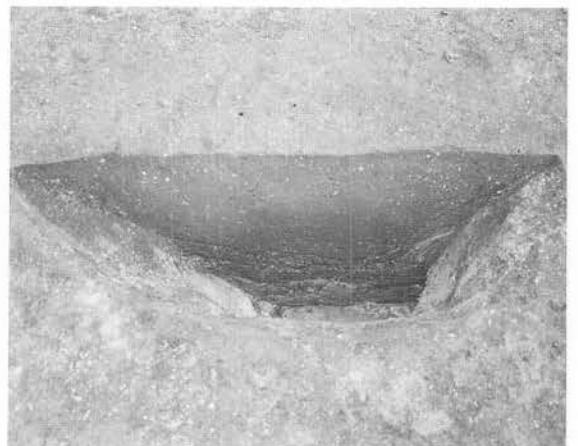
F I -57ピット断面



F I -57ピット遺物出土状況

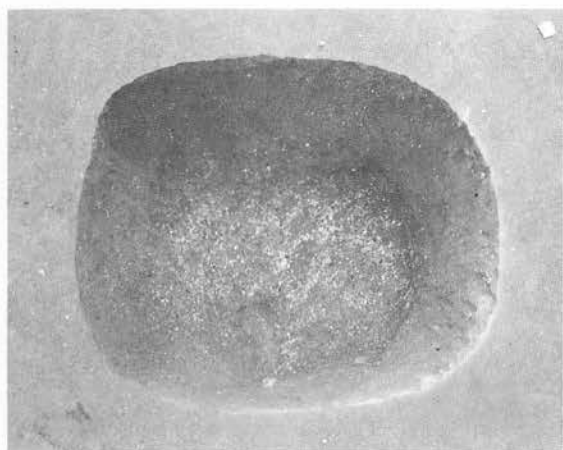


F I -58ピット平面

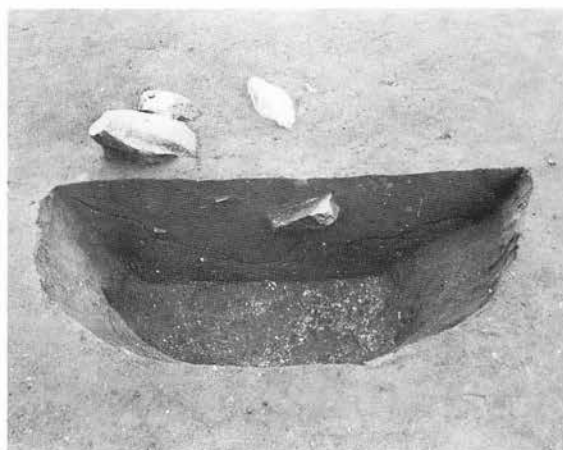


F I -58ピット断面

写真図版55 ピット



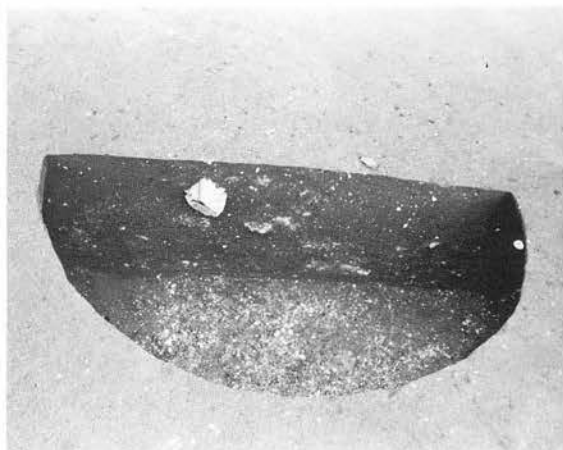
G I-51ピット平面



G I-51ピット断面



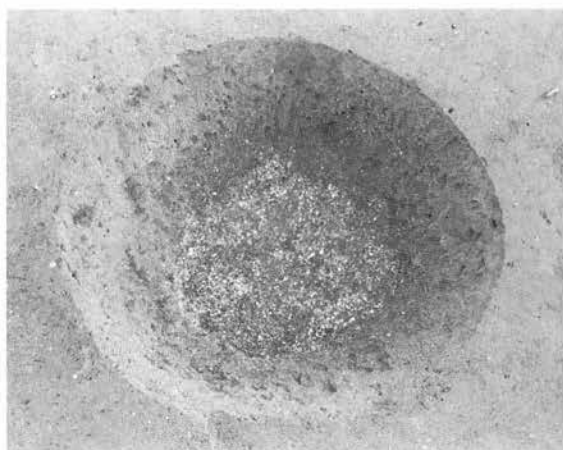
G I-52ピット平面



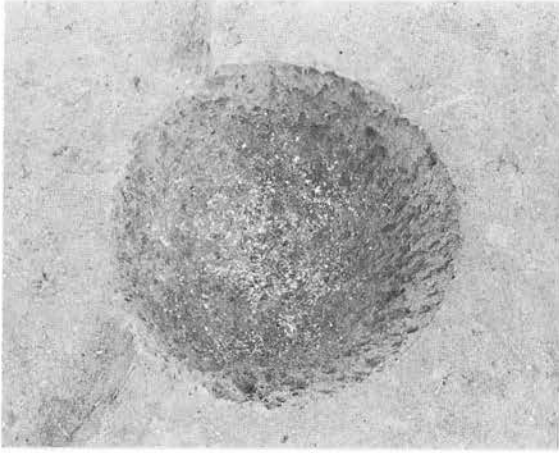
G I-52ピット断面



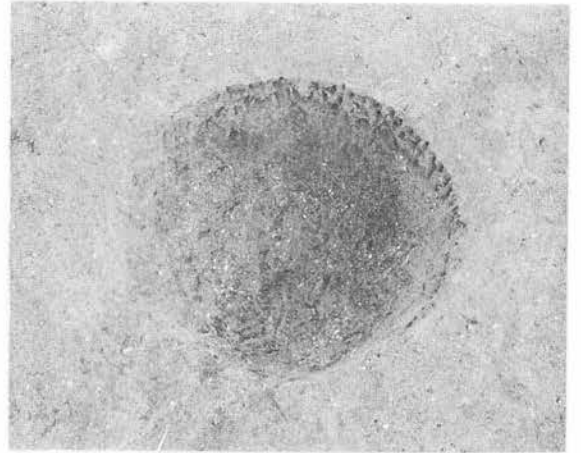
G I-52ピット遺物出土状況



G I-53ピット平面



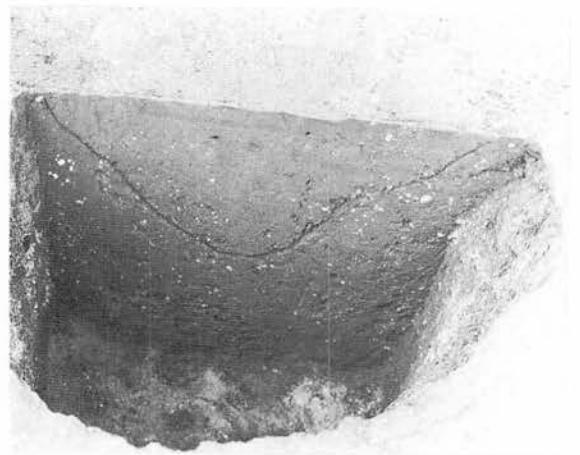
G I-54ピット平面



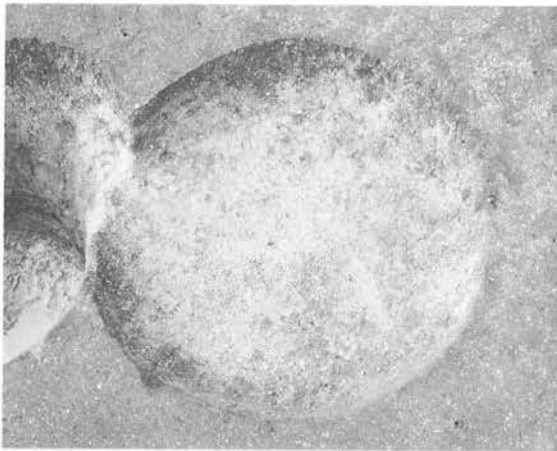
G I-55ピット平面



G I-56ピット平面



G I-56ピット断面



G I-57ピット平面



G I-57ピット断面

写真図版57 ピット



G I-58ピット平面



G I-58ピット断面



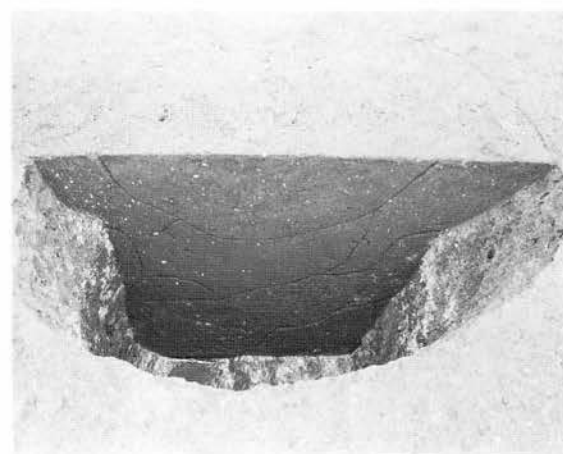
G I-59ピット平面



G I-59ピット断面

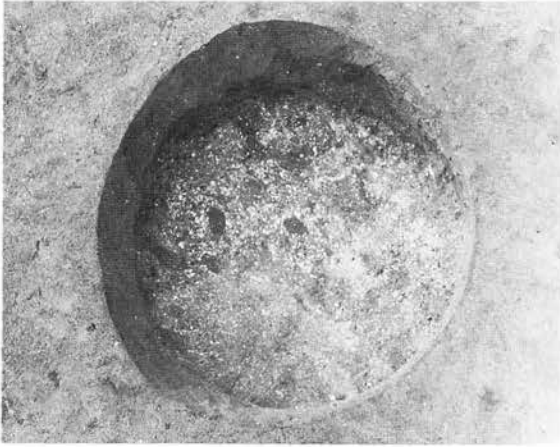


G I-60ピット平面

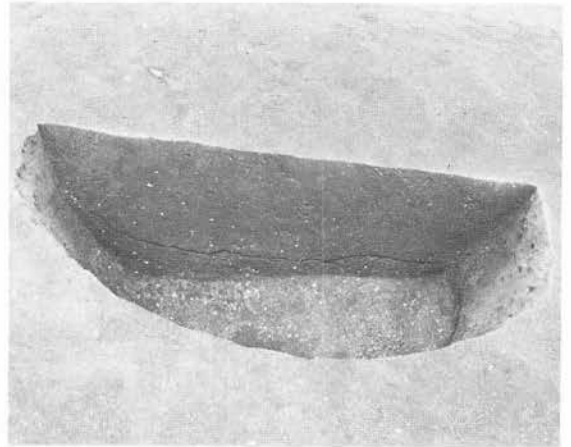


G I-60ピット断面

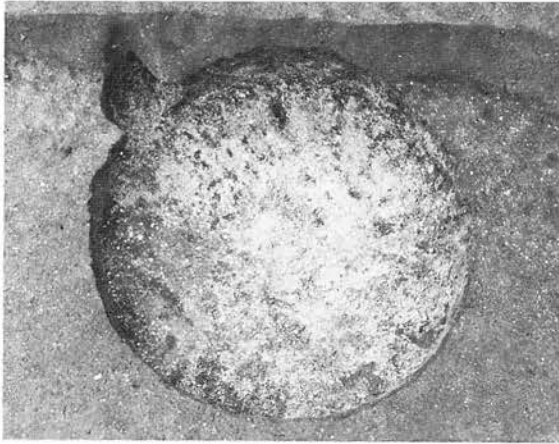
写真図版58 ピット



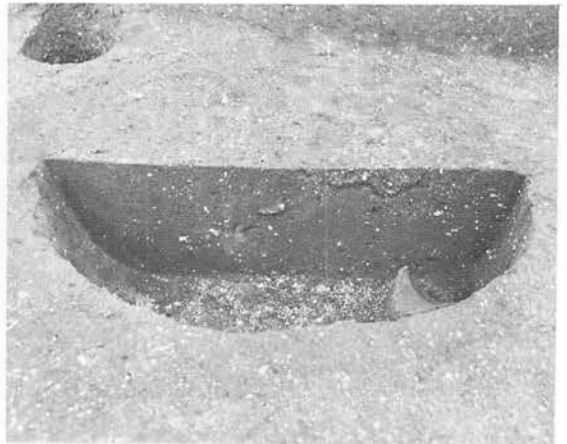
G II-51ピット平面



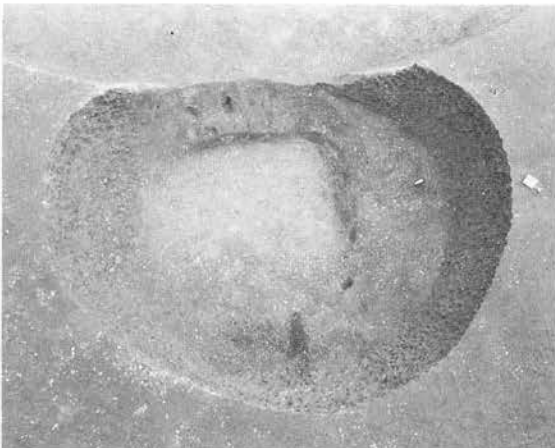
G II-51ピット断面



G II-52ピット平面



G II-52ピット断面



H I-51ピット平面



H I-51ピット断面

写真図版59 ピット



H I -52ピット平面



H I -52ピット断面



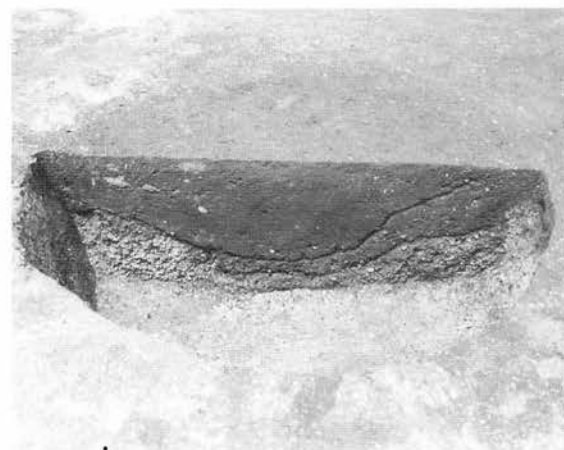
H I -53ピット平面



H I -53ピット断面

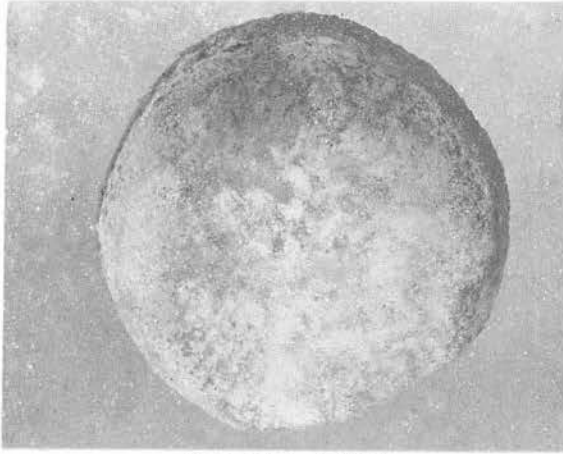


H II -51ピット平面

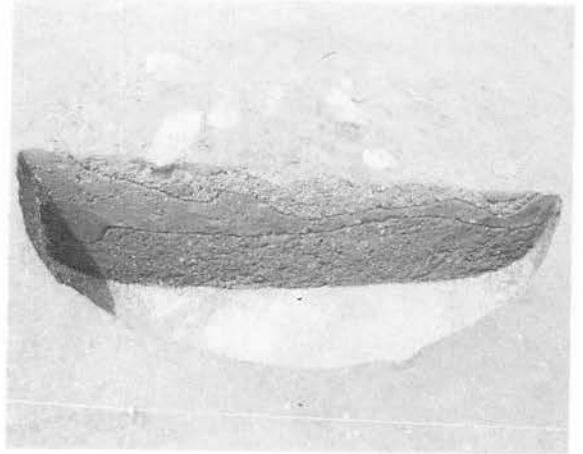


H II -51ピット断面

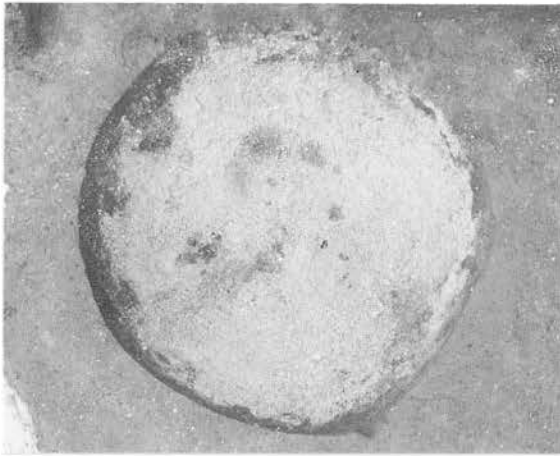
写真図版60 ピット



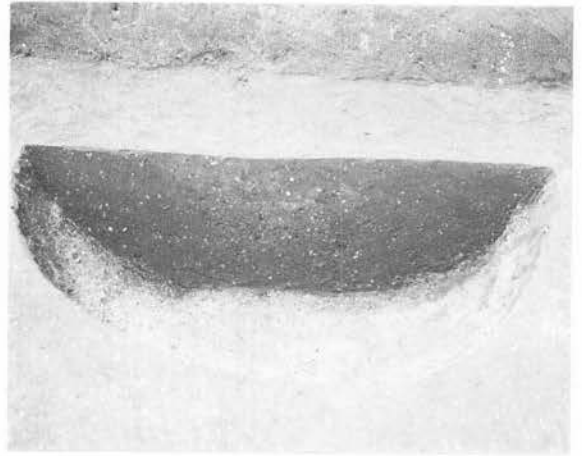
H II-52ピット平面



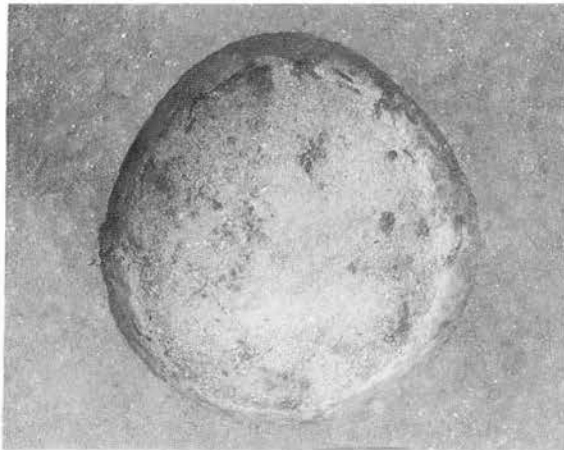
H II-52ピット断面



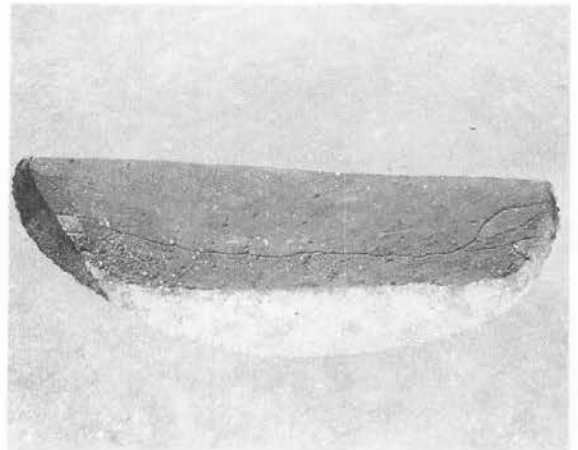
H II-53ピット平面



H II-53ピット断面

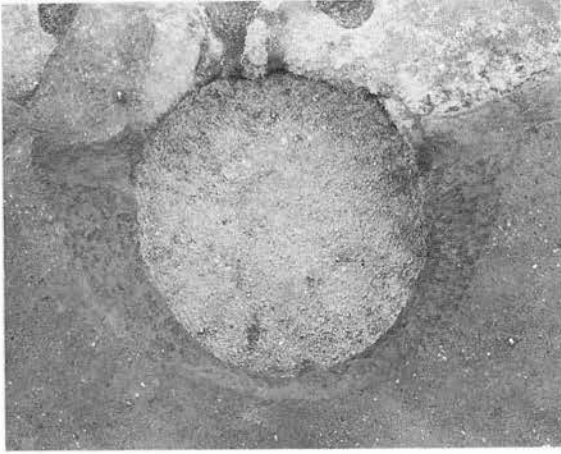


H II-54ピット平面



H II-54ピット断面

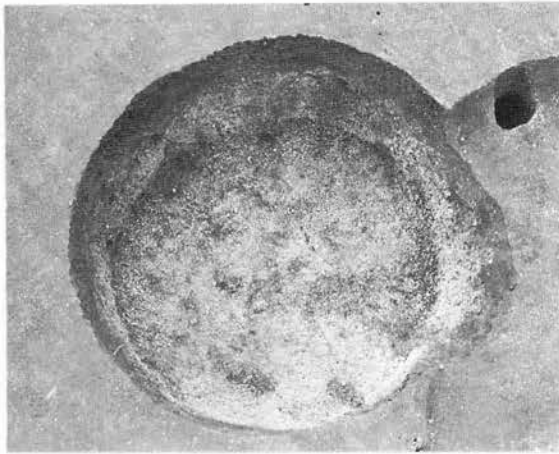
写真図版61 ピット



H II-55ピット平面



H II-55ピット断面



H II-56ピット平面



H II-56ピット断面

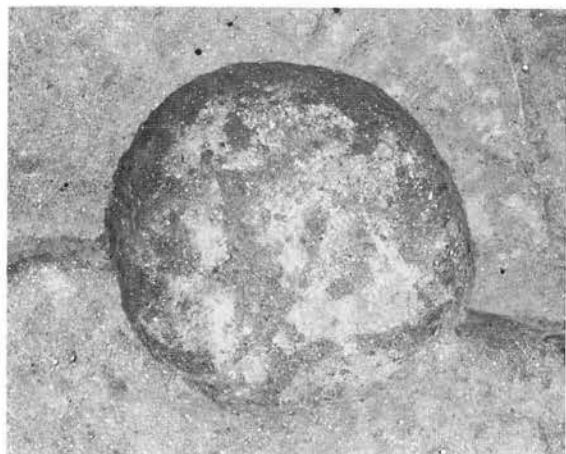


H II-57ピット平面

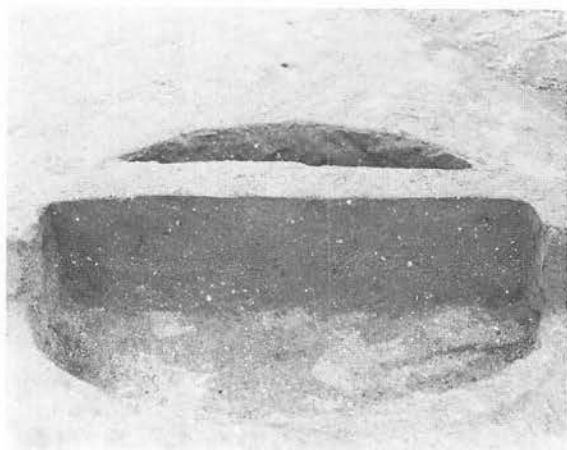


H II-57ピット断面

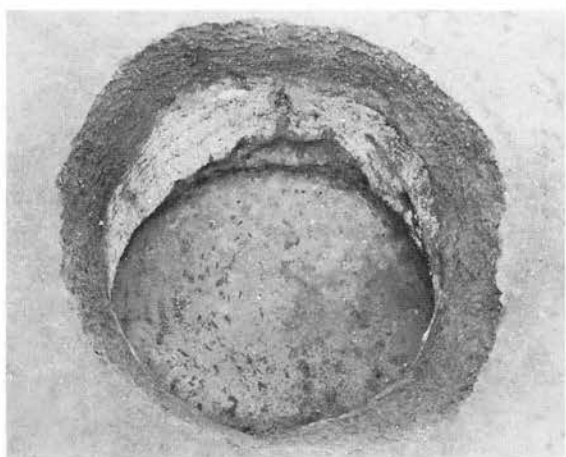
写真図版62 ピット



H II-58ピット平面



H II-58ピット断面



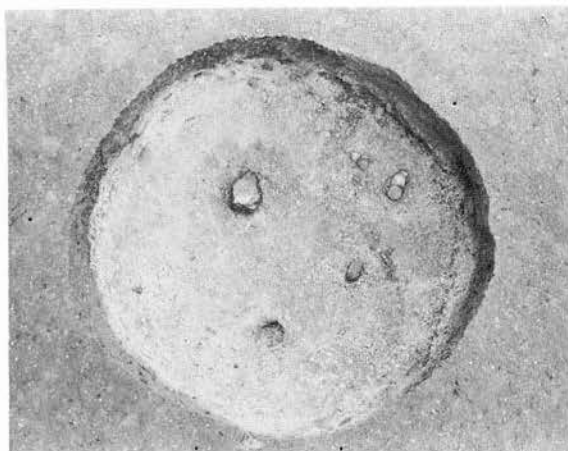
I I-51ピット平面



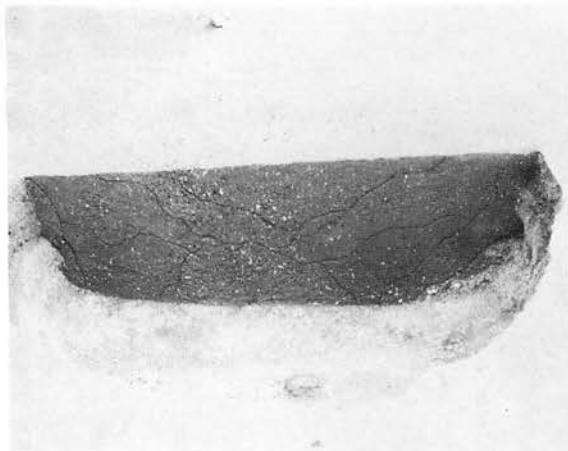
I I-51ピット断面

I I-51ピット遺物出土状況

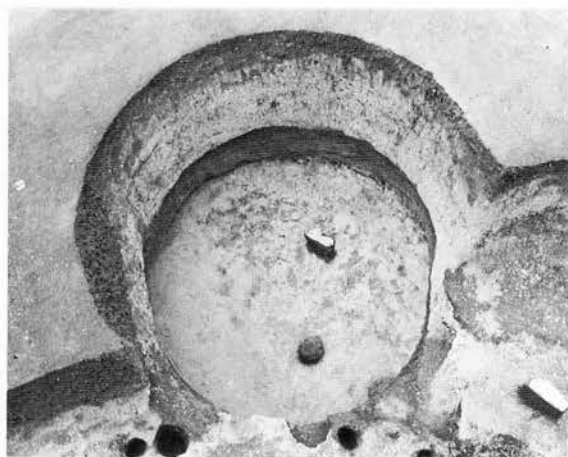
写真図版63 ピット



I I-52ピット平面



I I-52ピット断面



I I-53ピット平面



I I-53ピット断面



I I-54ピット平面



I I-54ピット断面

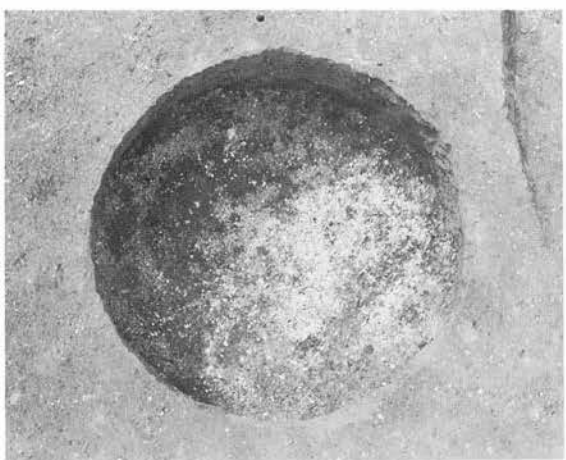
写真図版64 ピット



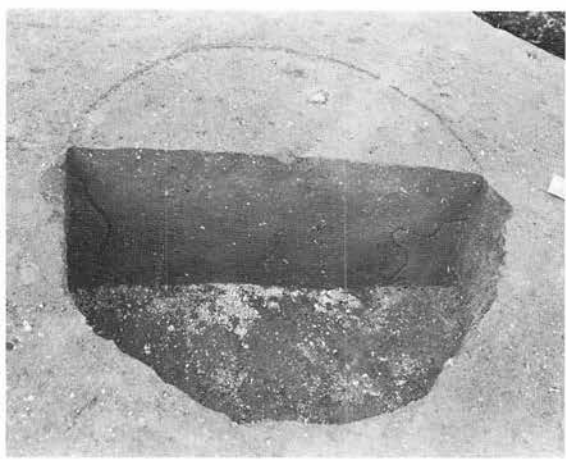
I I-55ピット平面



I I-55ピット断面



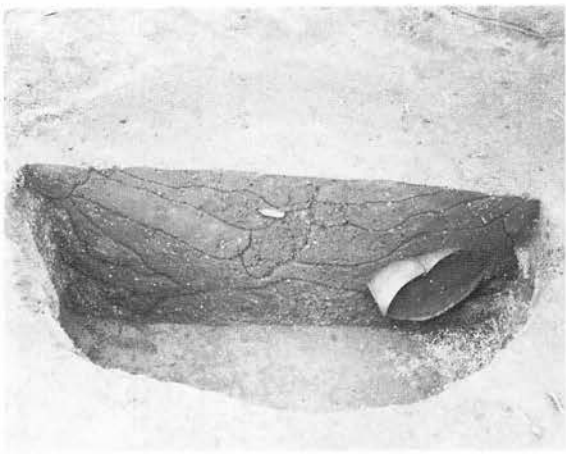
I I-56ピット平面



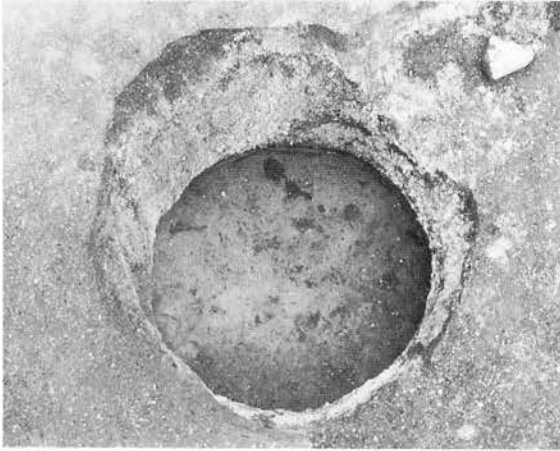
I I-56ピット断面



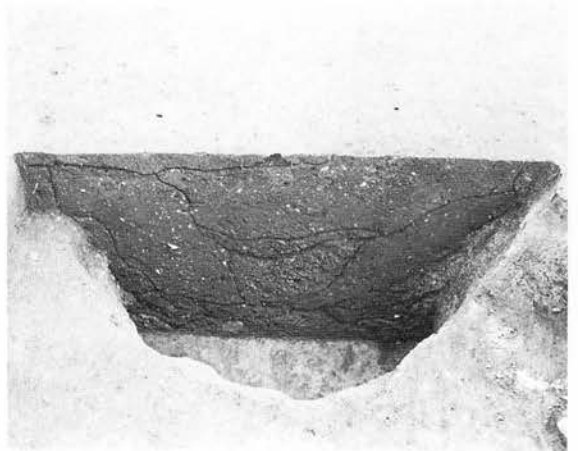
I I-57ピット平面



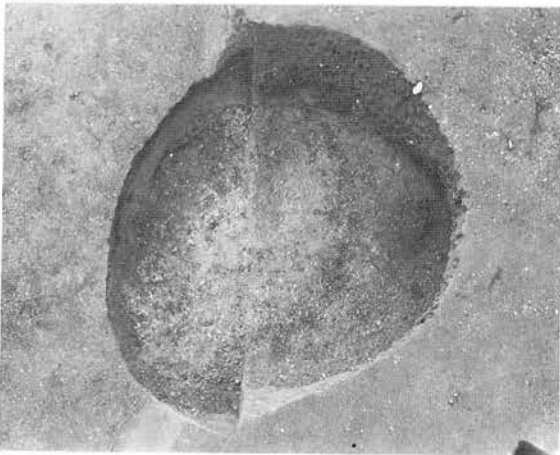
I I-57ピット断面



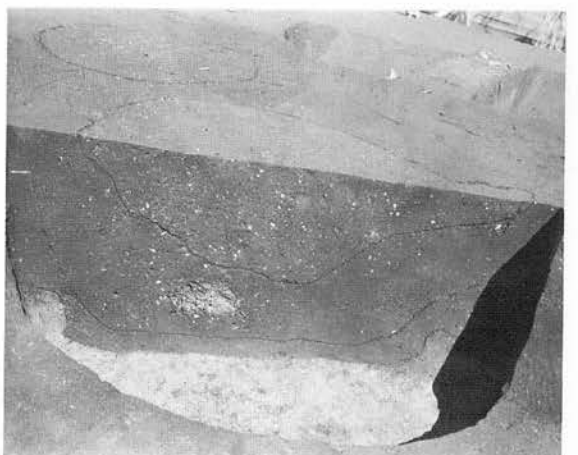
I I-58ピット平面



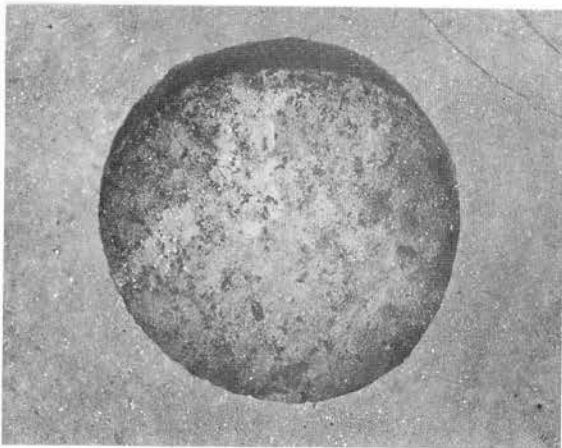
I I-58ピット断面



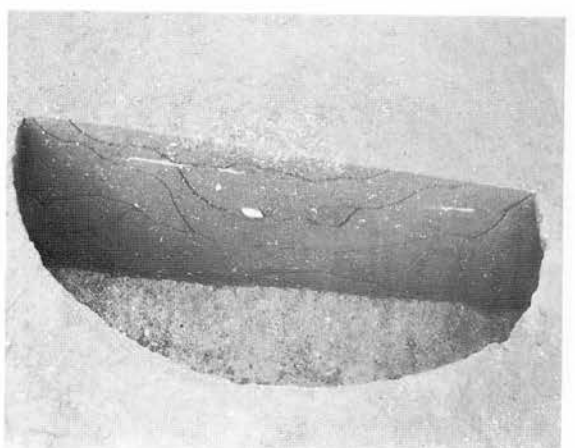
I I-59ピット平面



I I-59ピット断面



I I-60ピット平面

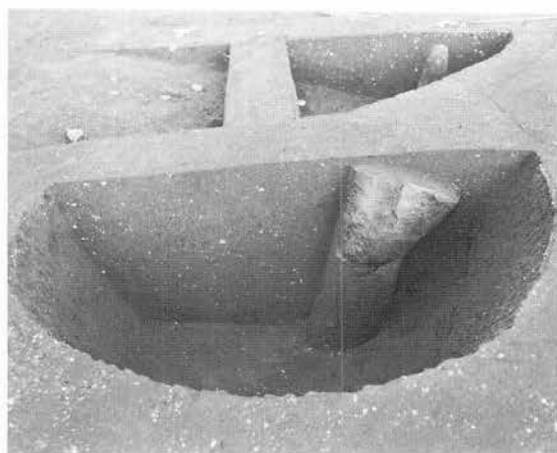


I I-60ピット断面

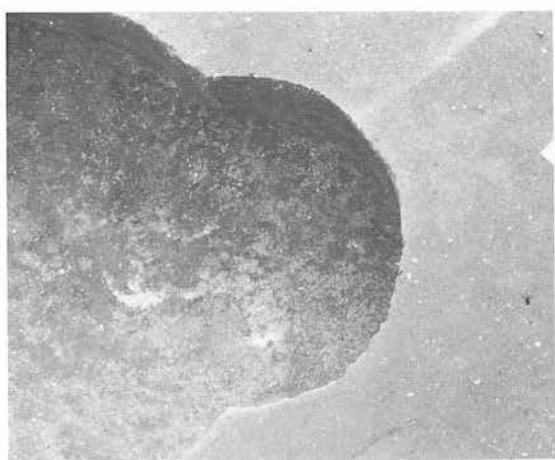
写真図版66 ピット



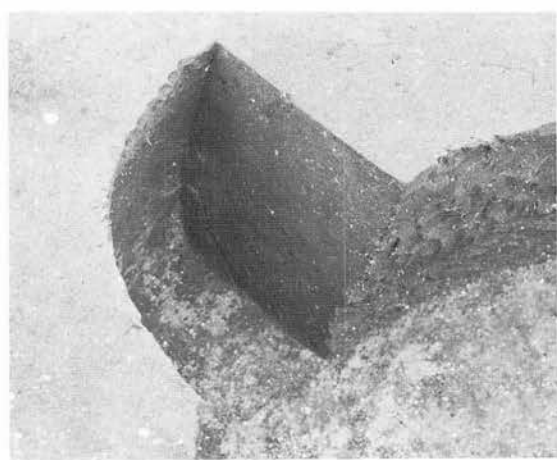
II-61ピット平面



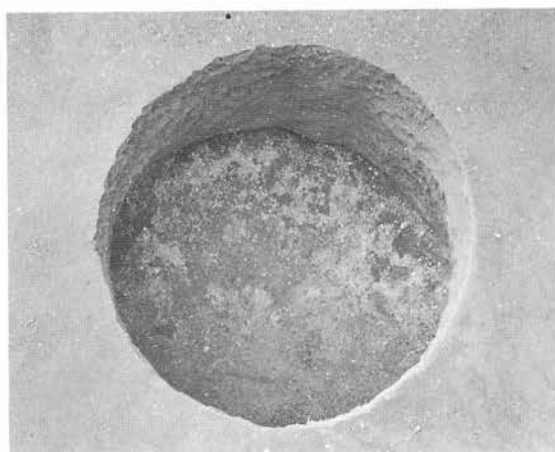
II-61ピット断面



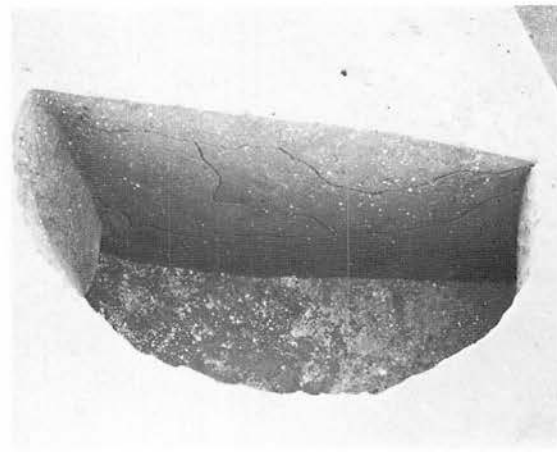
II-62ピット平面



II-62ピット断面



II-63ピット平面



II-63ピット断面

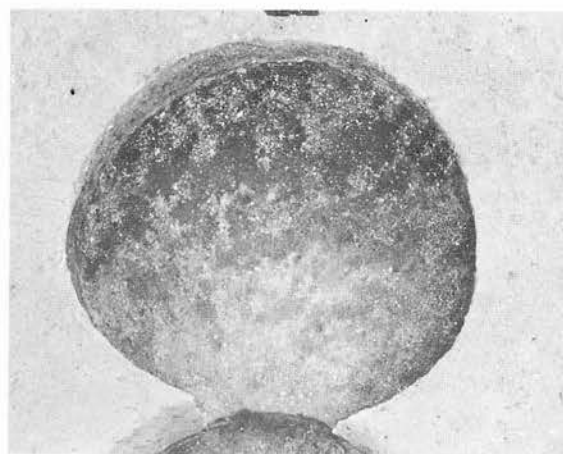
写真図版67 ピット



II-64ピット平面



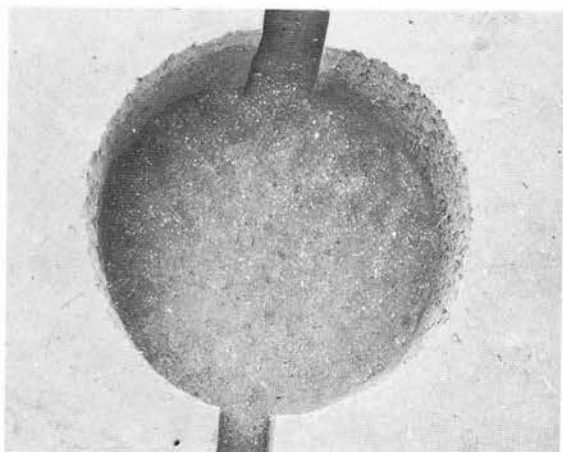
II-64ピット断面



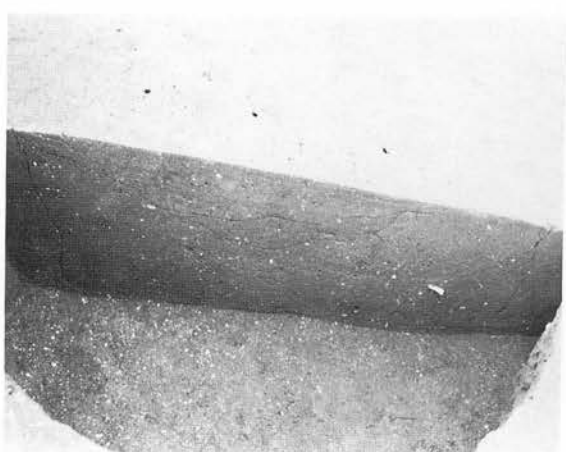
II-65ピット平面



II-65ピット断面

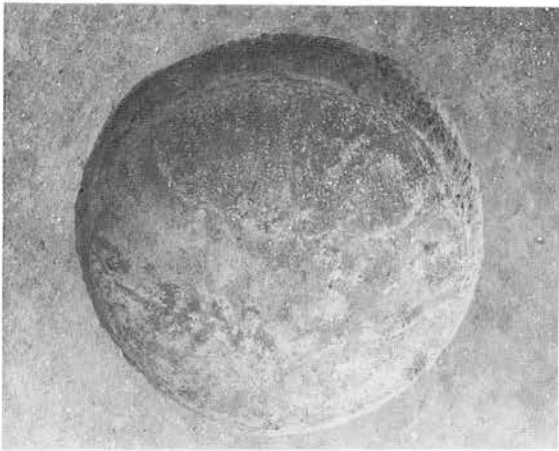


II-66ピット平面

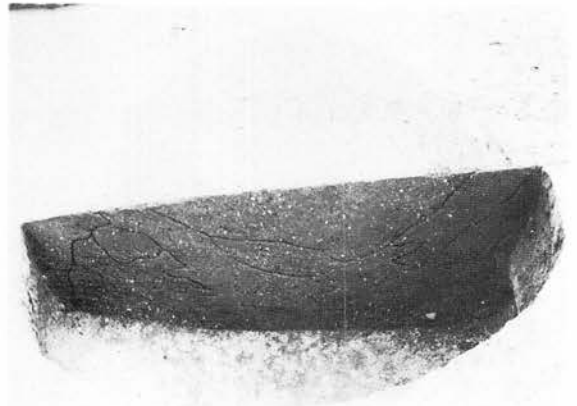


II-66ピット断面

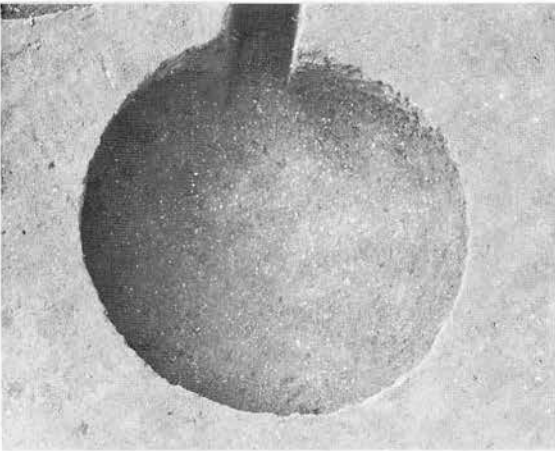
写真図版68 ピット



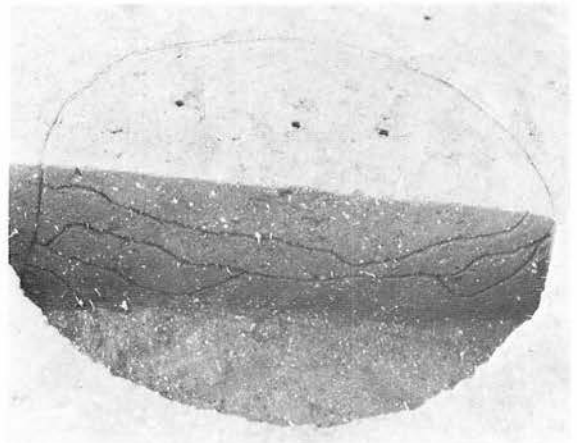
I I-67ピット平面



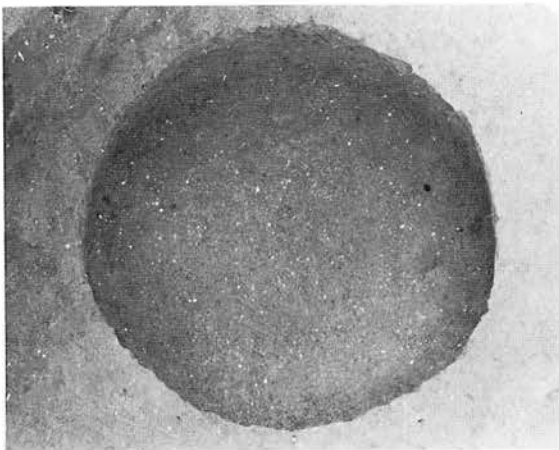
I I-67ピット断面



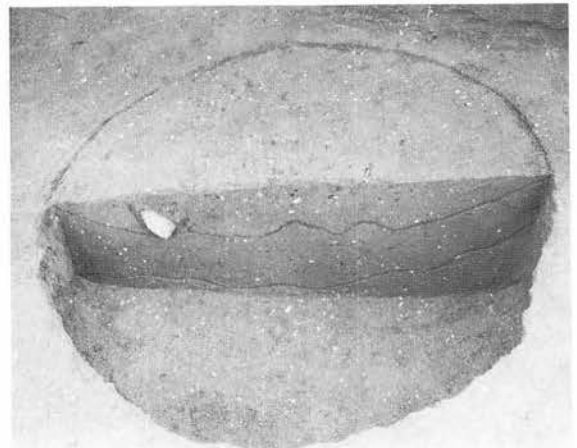
I I-68ピット平面



I I-68ピット断面



I I-69ピット平面



I I-69ピット断面

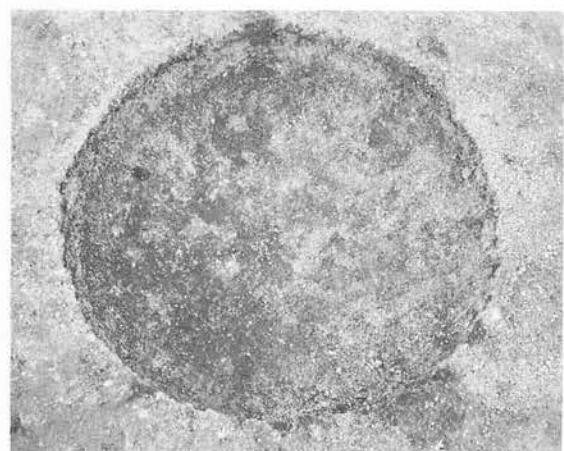
写真図版69 ピット



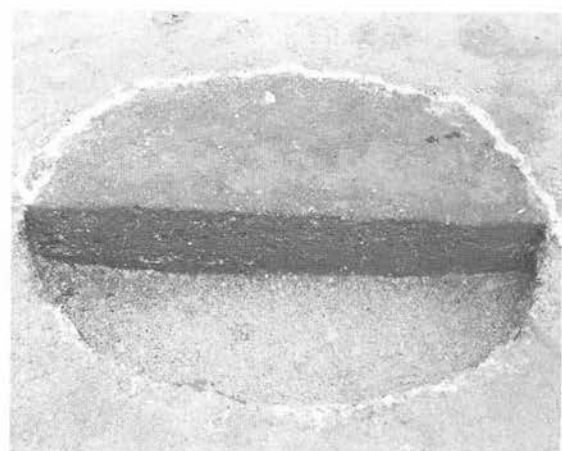
I II-51ピット平面



I II-51ピット断面



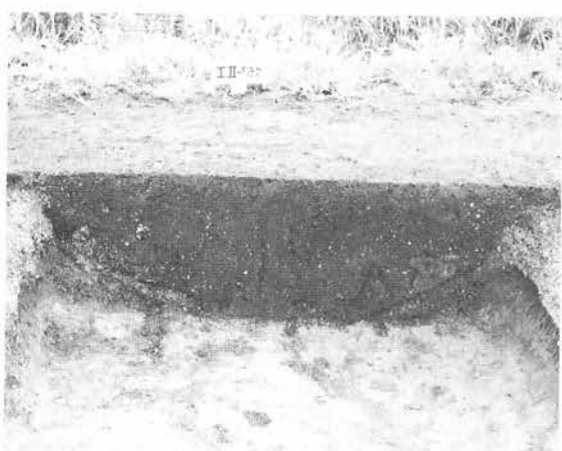
I II-52ピット平面



I II-52ピット断面



I II-53ピット平面



I II-53ピット断面

写真図版70 ピット



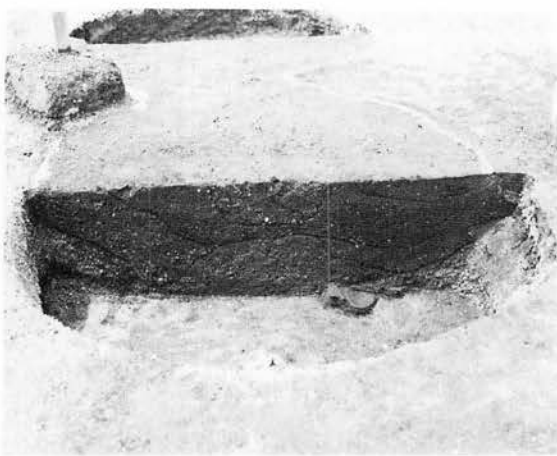
I II-54ピット平面



I II-54ピット断面



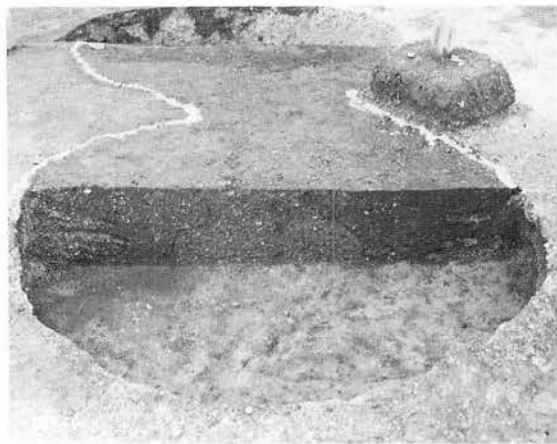
I II-55ピット平面



I II-55ピット断面



I II-56ピット平面



I II-56ピット断面

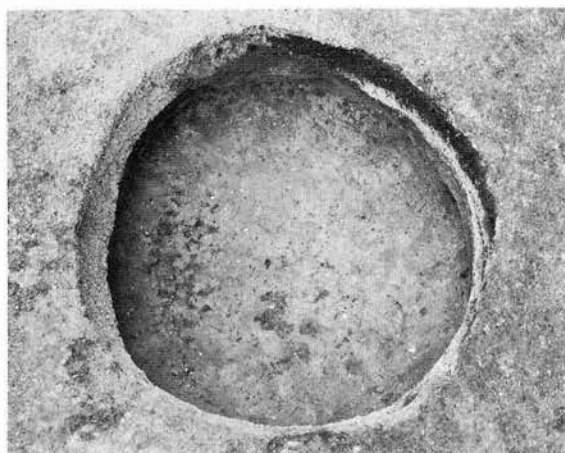
写真図版71 ピット



I II-57ピット平面



I II-57ピット断面



I II-58ピット平面



I II-58ピット断面



I II-59ピット平面

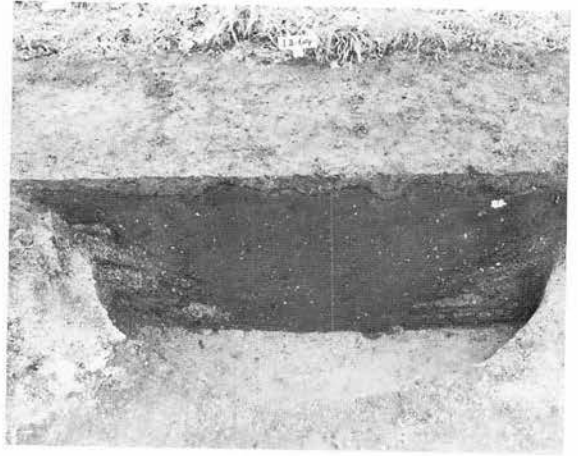


I II-59ピット断面

写真図版72 ピット



I II-60ピット平面



I II-60ピット断面



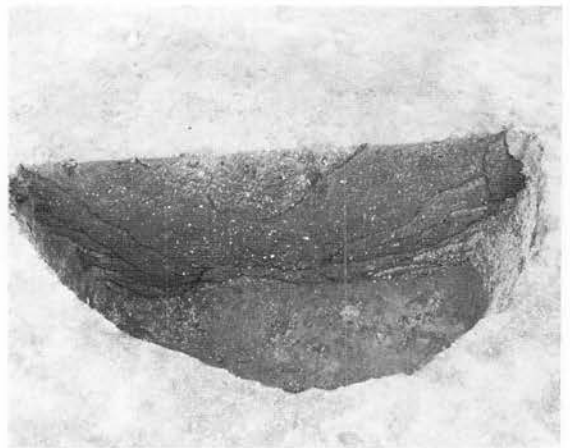
I II-61ピット平面



I II-61ピット断面



I II-63ピット平面

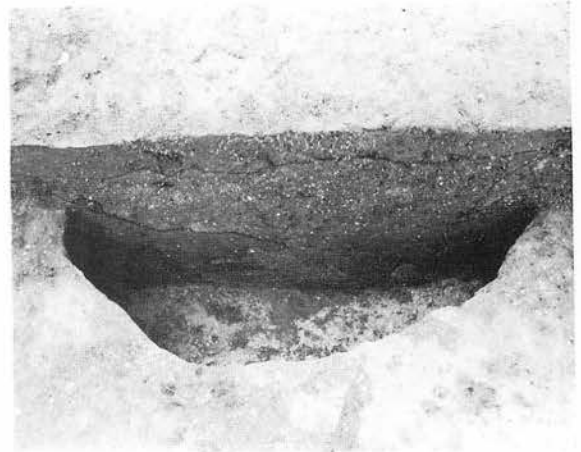


I II-63ピット断面

写真図版73 ピット



I II-62,64,65ピット平面



I II-62ピット断面



I II-64ピット断面



I II-65ピット断面



I II-66ピット平面



I II-66ピット断面

写真図版74 ピット



I II-67ピット平面



I II-67ピット断面



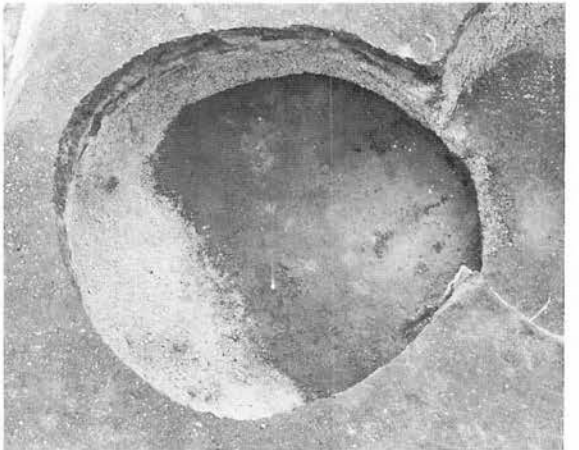
I II-68.69ピット平面



I II-68ピット断面



I II-69ピット断面

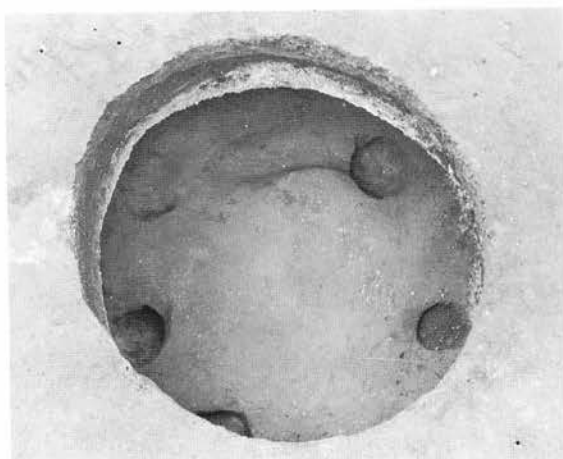


I II-70ピット平面

写真図版75 ピット



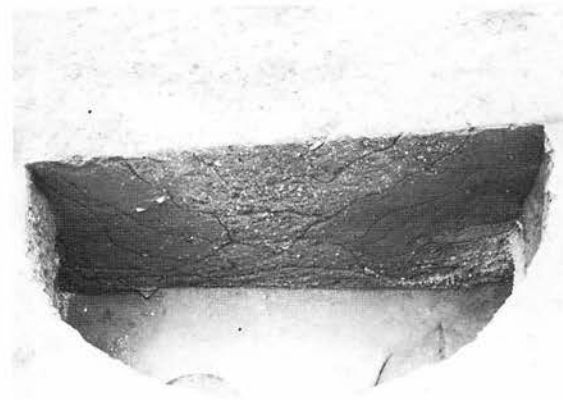
I II-70ピット断面



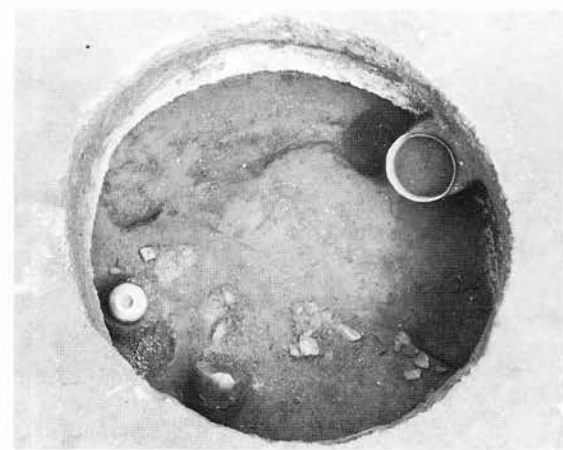
J I-51ピット平面



J I-51ピット遺物出土状況



J I-51ピット断面

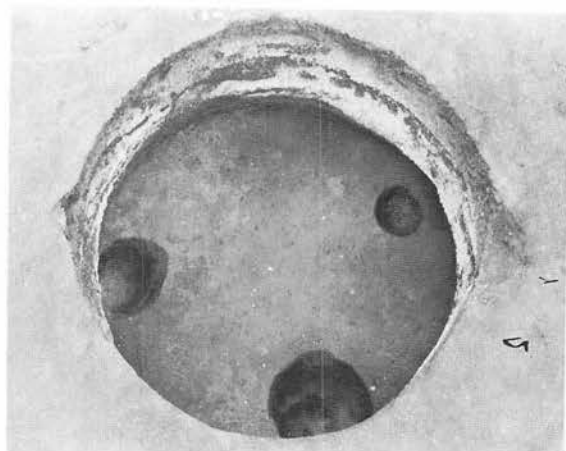


J I-51ピット遺物出土状況

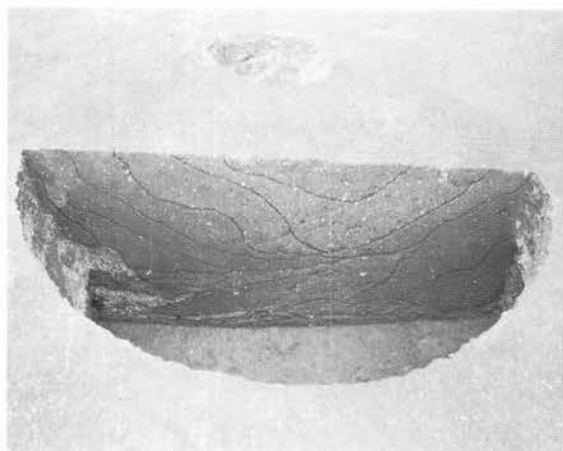
写真図版76 ピット



J I-51ピット柱穴断面



J I-52ピット平面



J I-52ピット断面



J I-52ピット柱穴断面



J I-53ピット平面



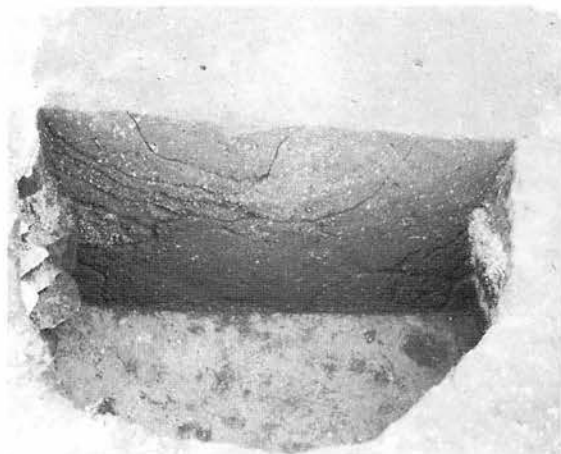
J I-53ピット断面



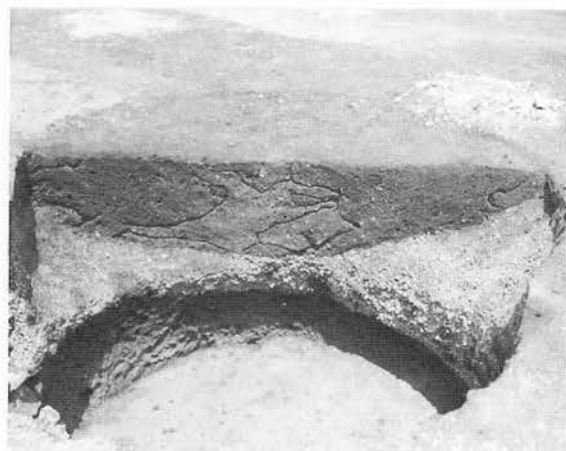
J I-54ピット平面



J I-55ピット平面



J I-54ピット断面



J I-55ピット断面

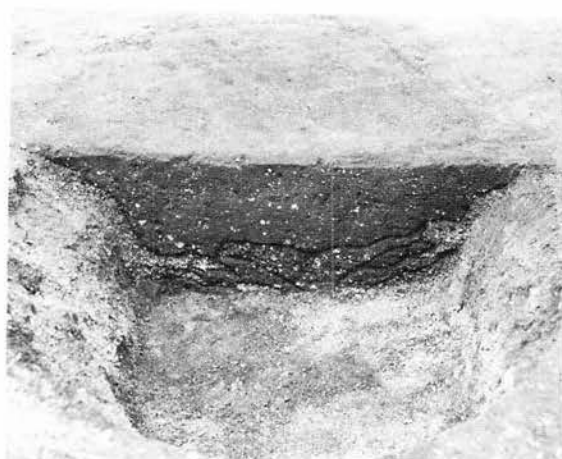


J I-56ピット平面

写真図版78 ピット



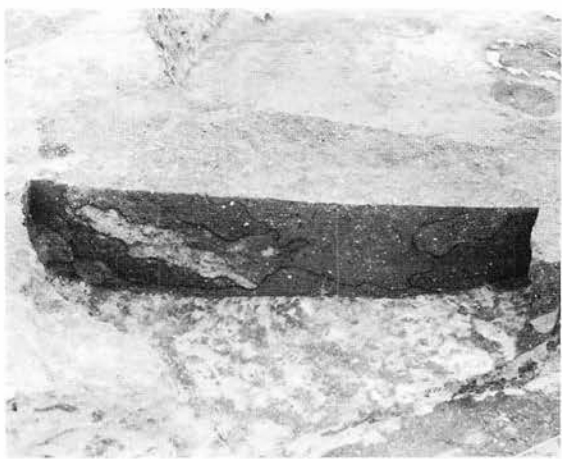
J I-57ピット平面



J I-57ピット断面



J I-58ピット平面



J I-58ピット断面



J I-59ピット平面



J I-59ピット断面

写真図版79 ピット



J I-60ピット平面



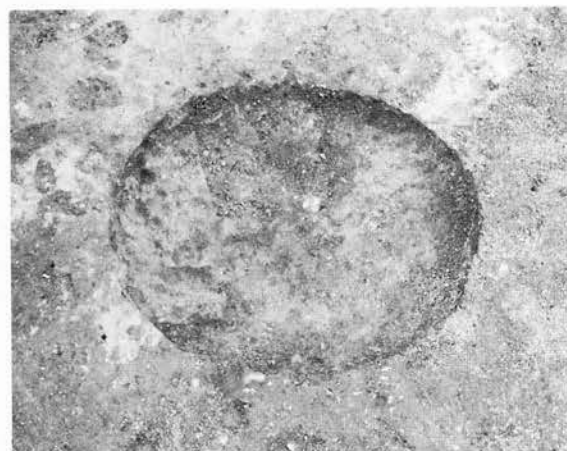
J I-60ピット断面



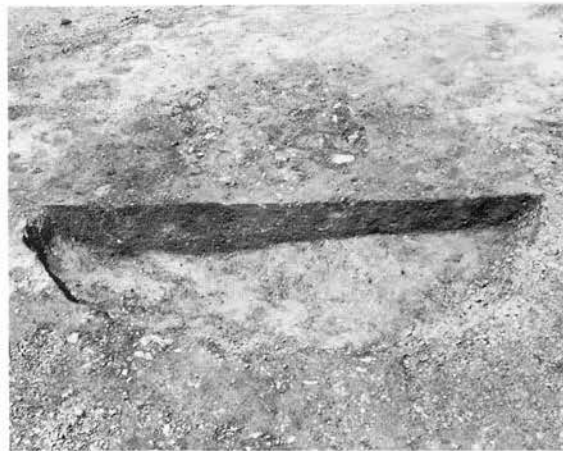
J I-61ピット平面



J I-61ピット断面



J II-51ピット平面



J II-51ピット断面

写真図版80 ピット



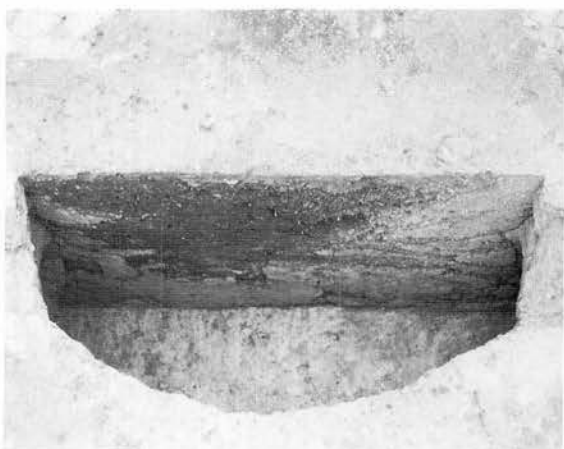
J II-52ピット平面



J II-52ピット断面



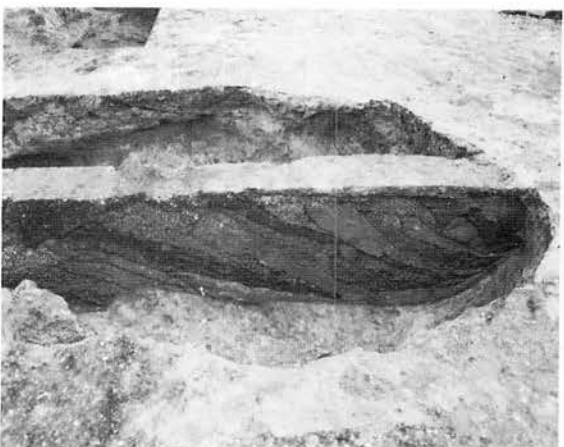
J II-53ピット平面



J II-53ピット断面

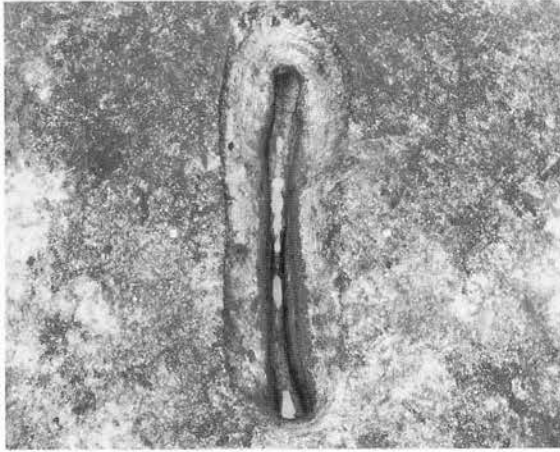


J II-54ピット平面



J II-54ピット断面

写真図版81 ピット



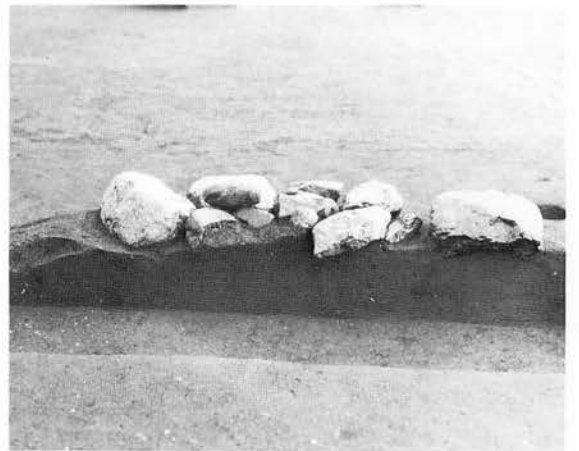
F I-101 陥し穴状遺構平面



F I-101 陥し穴状遺構断面



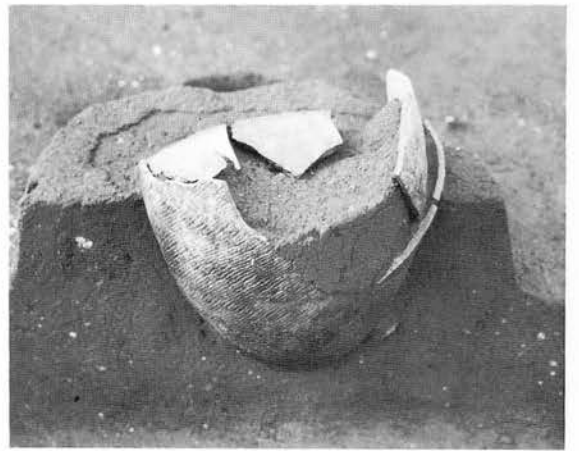
G I 配石遺構平面



G I 配石遺構断面



G I 土器埋設遺構No.1平面



G I 土器埋設遺構No.1断面

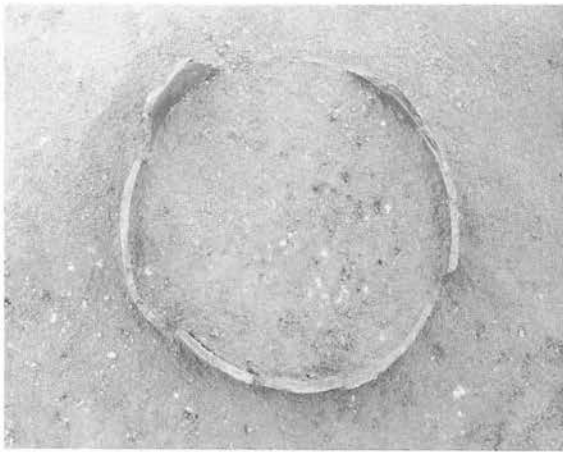
写真図版82 陥し穴状遺構・配石遺構・土器埋設遺構



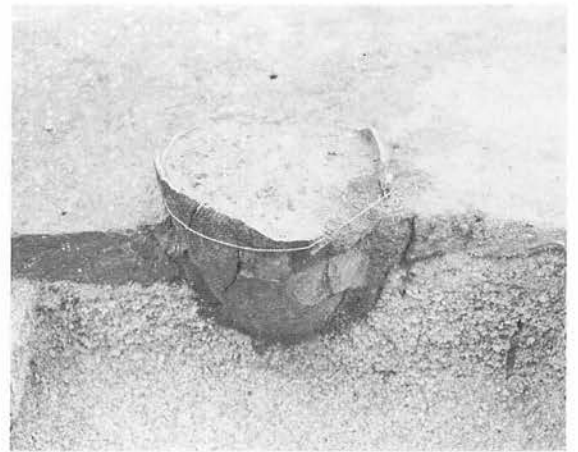
G I 土器埋設遺構No.2平面



G I 土器埋設遺構No.2断面



I II 土器埋設遺構平面



I II 土器埋設遺構断面



J I 土器埋設遺構平面



J I 土器埋設遺構断面



礫分布状況



断面



平面

写真図版84 I II池跡



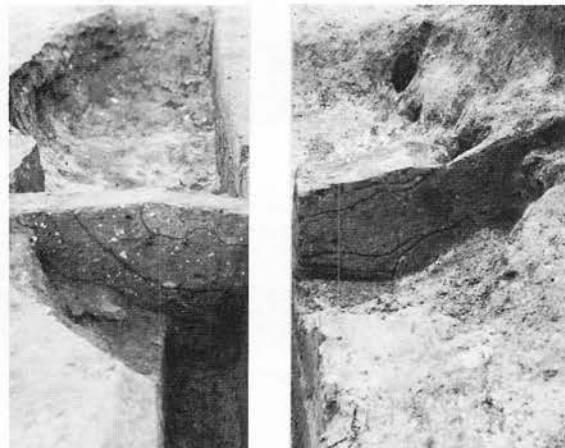
検出状況



平面



縦断面



横断面

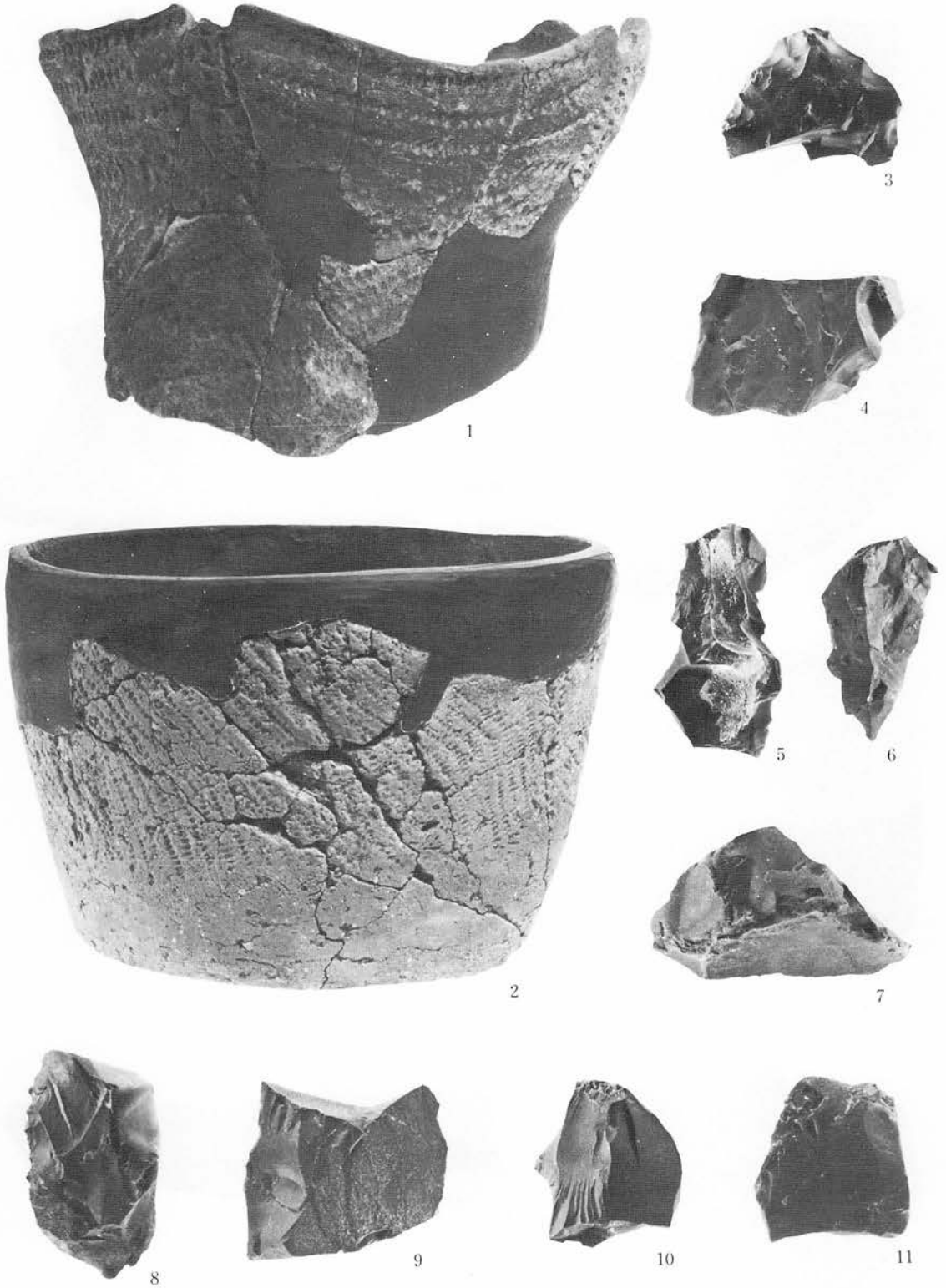


横断面

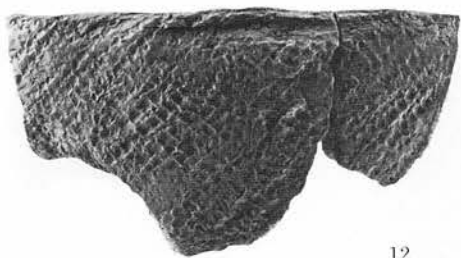


横断面

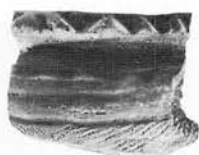
写真図版85 J II カマド跡



写真図版86 F I-1住居跡出土遺物(遺物番号1~11)



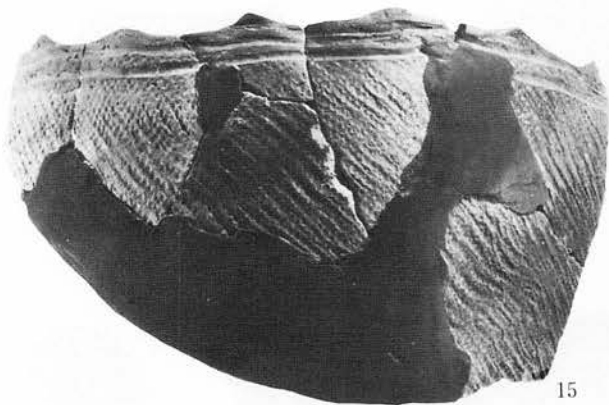
12



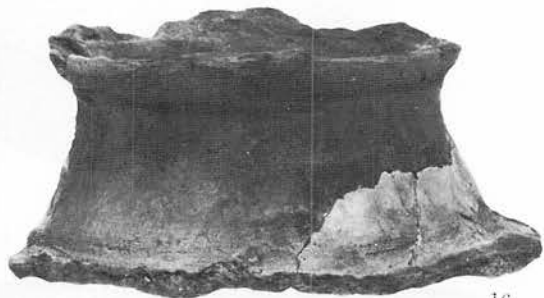
13



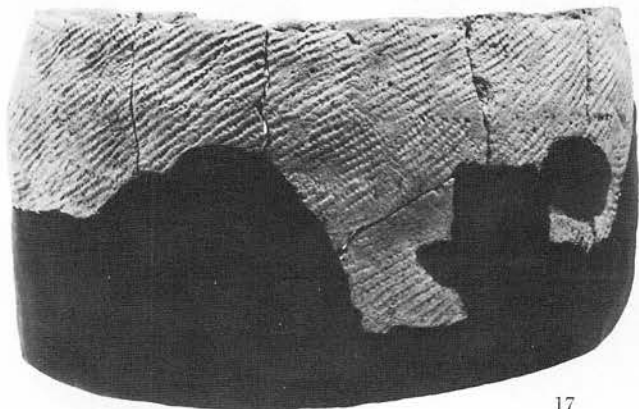
14



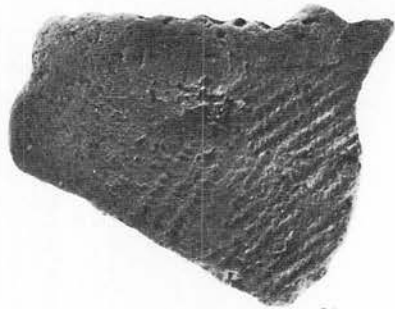
15



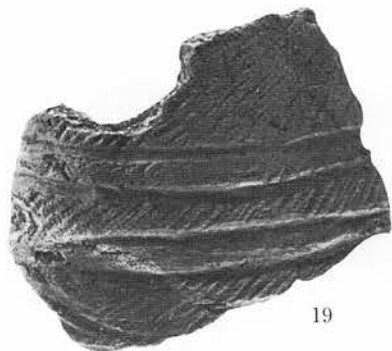
16



17



18



19



20



21

写真図版87 F I-2住居跡出土遺物(遺物番号12~21)



22



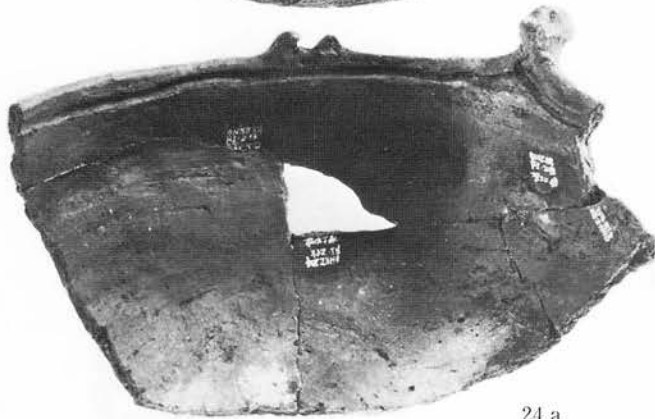
23



24



25

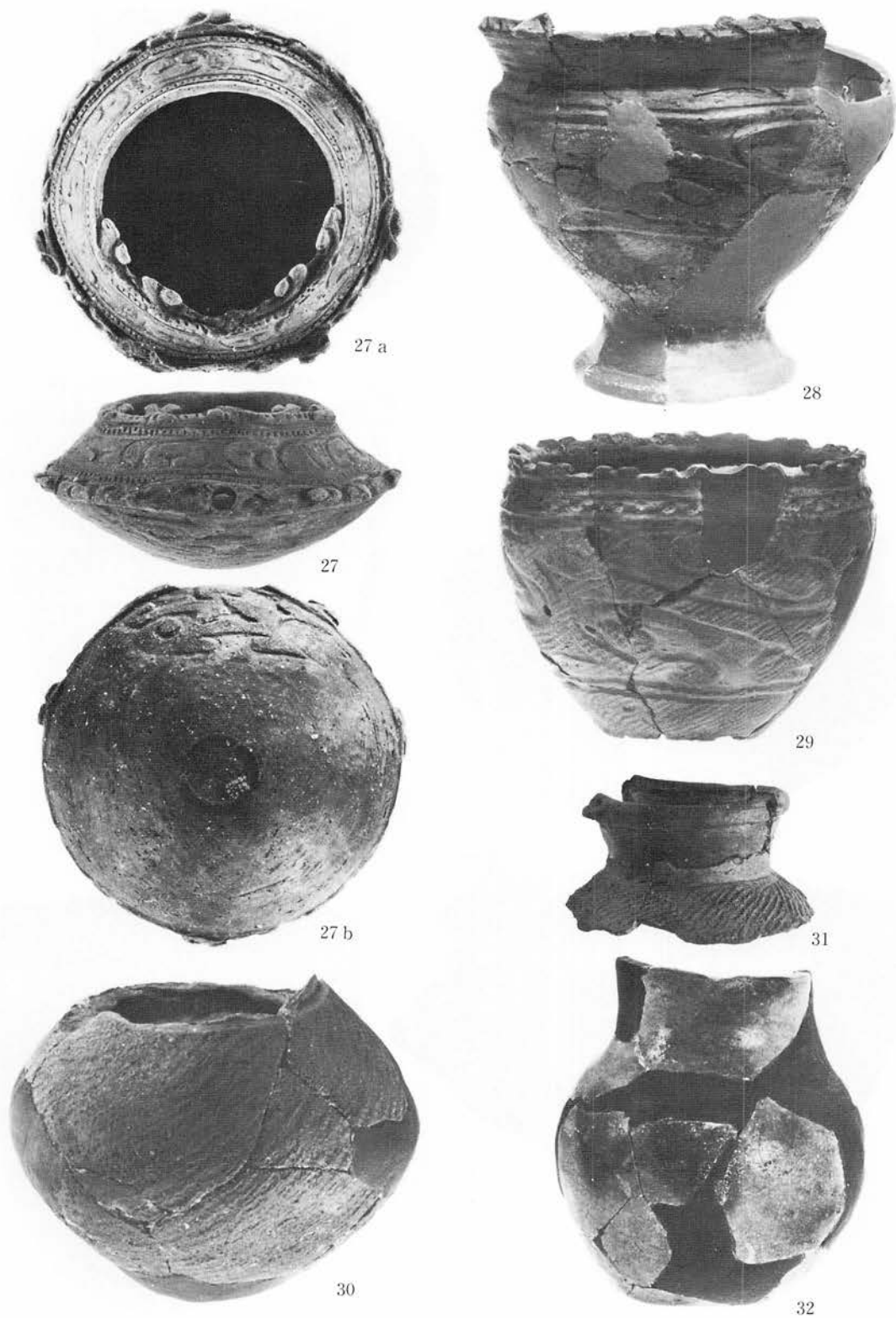


24 a



26

写真図版88 F I-2住居跡出土遺物(遺物番号22~26)



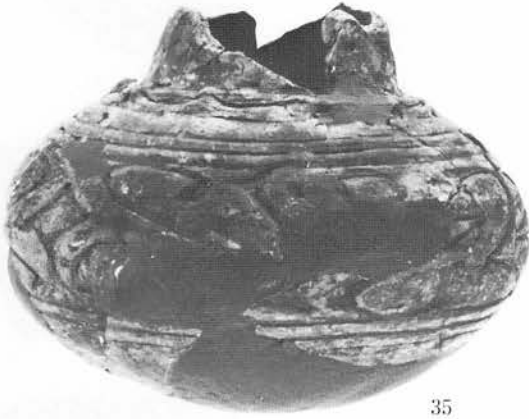
写真図版89 F I - 2住居跡出土遺物(遺物番号27~32)



33



34



35



36

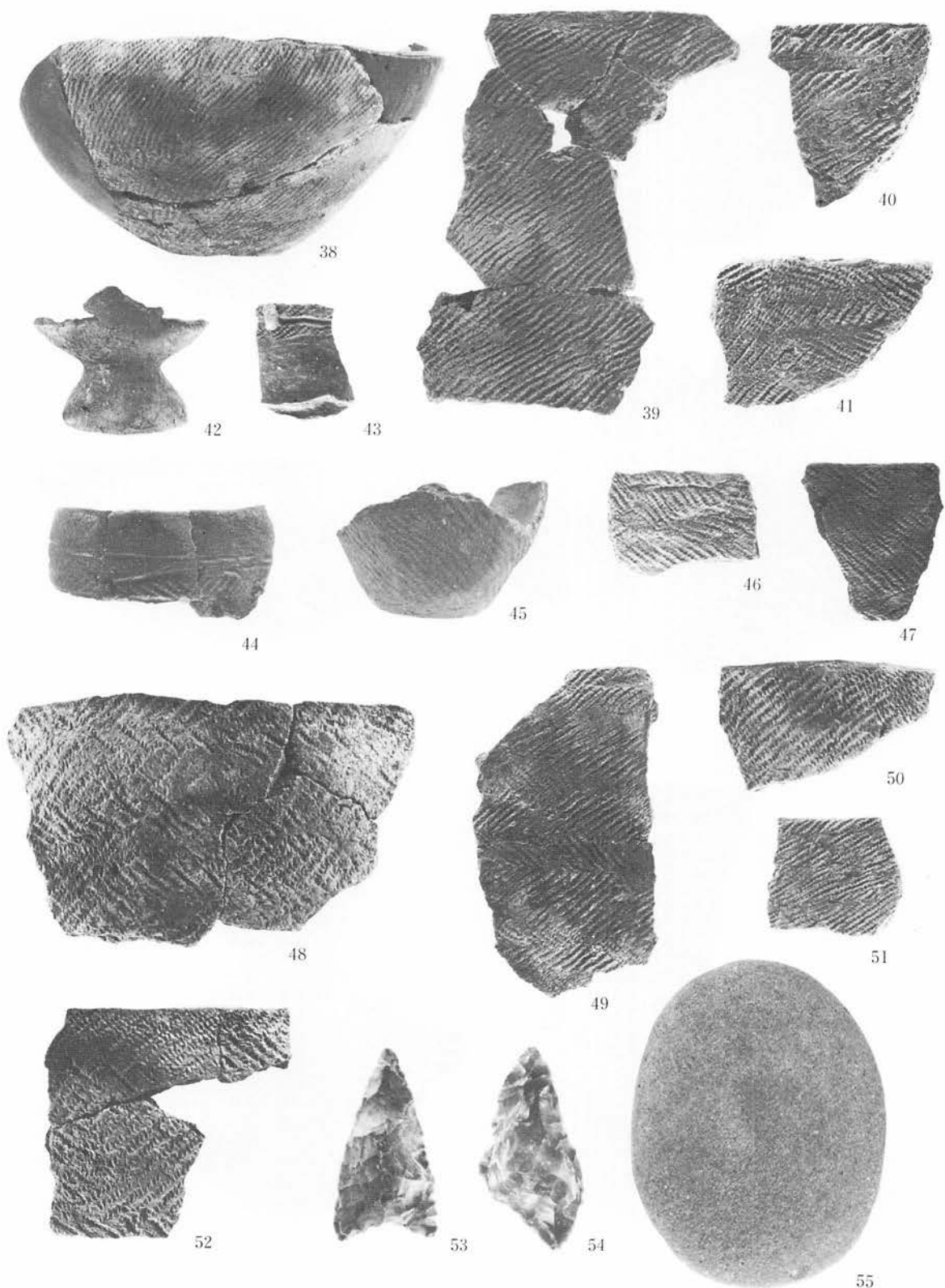


37



37 a

写真図版90 HI-1住居跡出土遺物(遺物番号33~37)



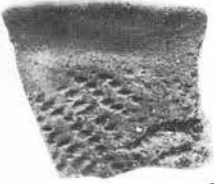
写真図版91 HI-1住居跡出土遺物(遺物番号38~55)



56



57



58



59



60



61



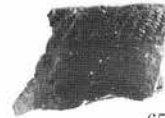
62



63



64

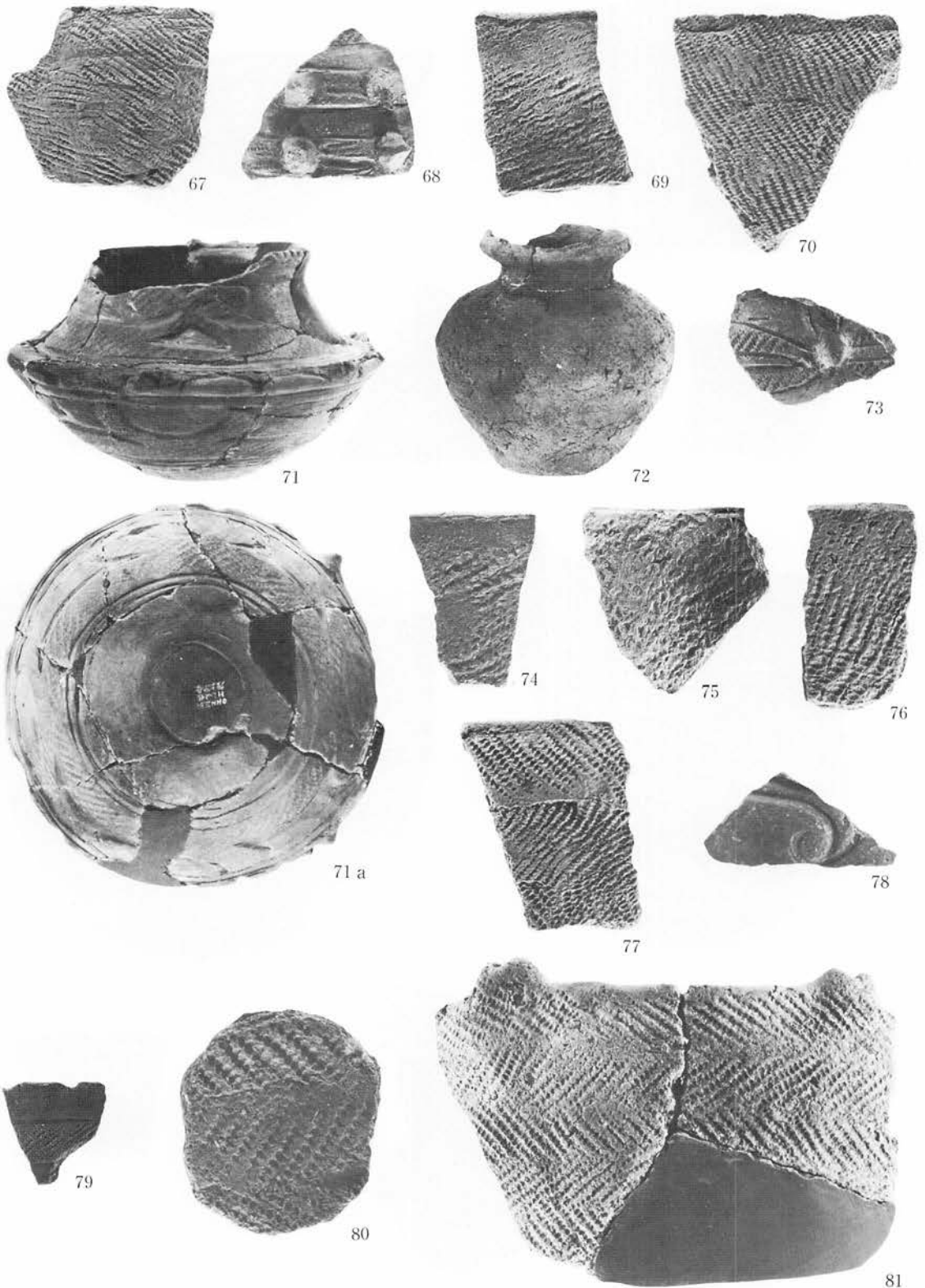


65



66

写真図版92 H I - 2住居跡出土遺物(遺物番号56~66)



写真図版93 H I - 2住居跡出土遺物(遺物番号67~81)



82



83



84



85



83 a



86



87



88



89



90



91



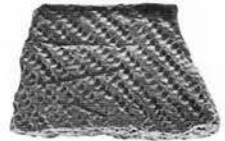
92



93

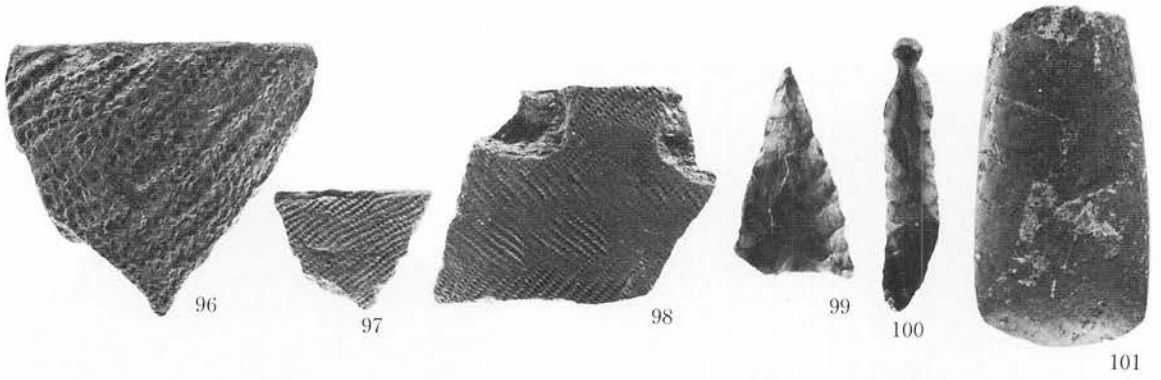


94



95

写真図版94 H I - 2住居跡出土遺物(遺物番号82~95)



写真図版95 H I-2住居跡出土遺物(遺物番号96~101)
H I-4住居跡出土遺物(遺物番号102~104)



105



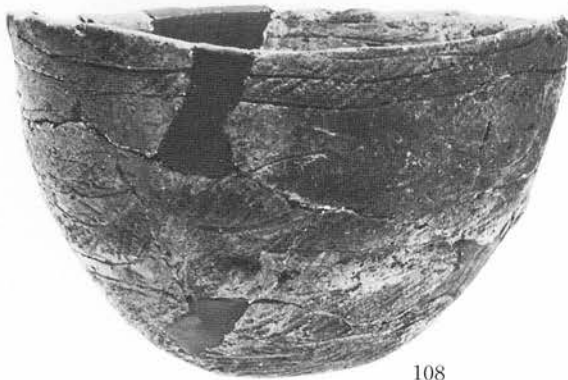
106



107



107 a



108



109

写真図版96 H I-4住居跡出土遺物(遺物番号105~109)



110



111



112



113



114



115

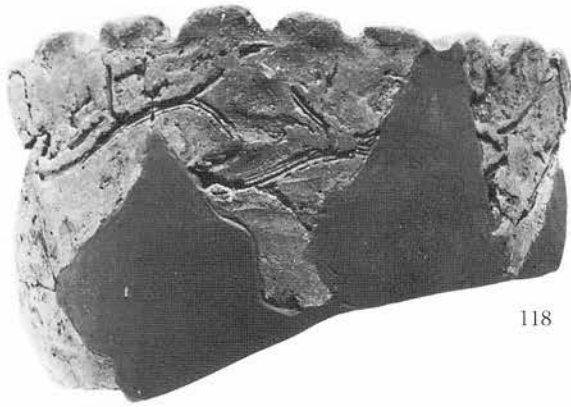


116



117

写真図版97 H I-4住居跡出土遺物(遺物番号110~117)



118



119



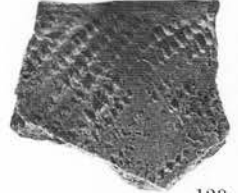
120



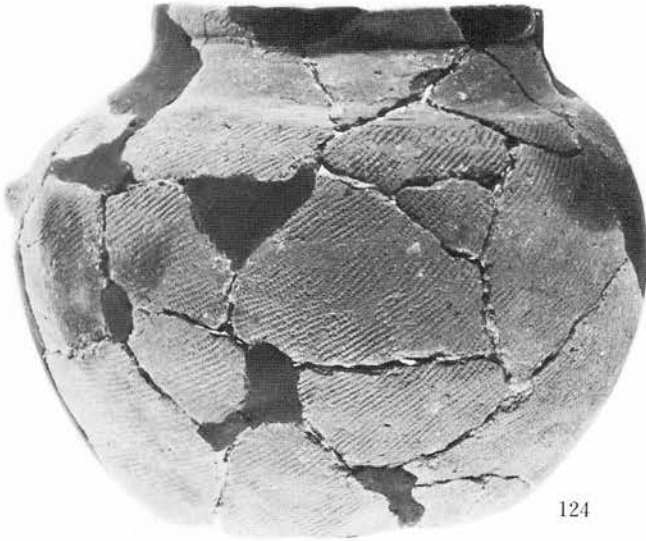
121



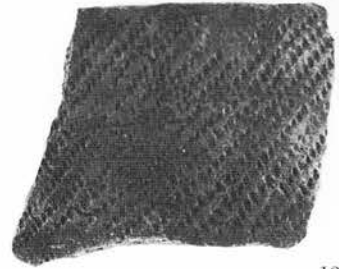
122



123



124



125



126



127

写真図版98 H I - 4住居跡出土遺物(遺物番号118~127)



128



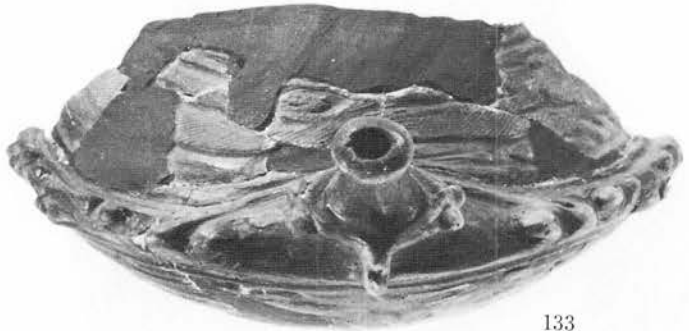
129



130



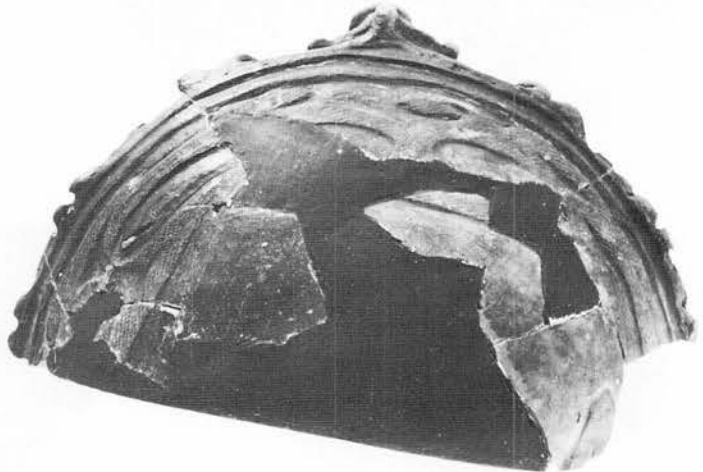
131



133



132



133 a

写真図版99 H I-4住居跡出土遺物(遺物番号128~133)



134



135



136



137



138



139



140



141

写真図版100 HI-4住居跡出土遺物(遺物番号134~141)



142

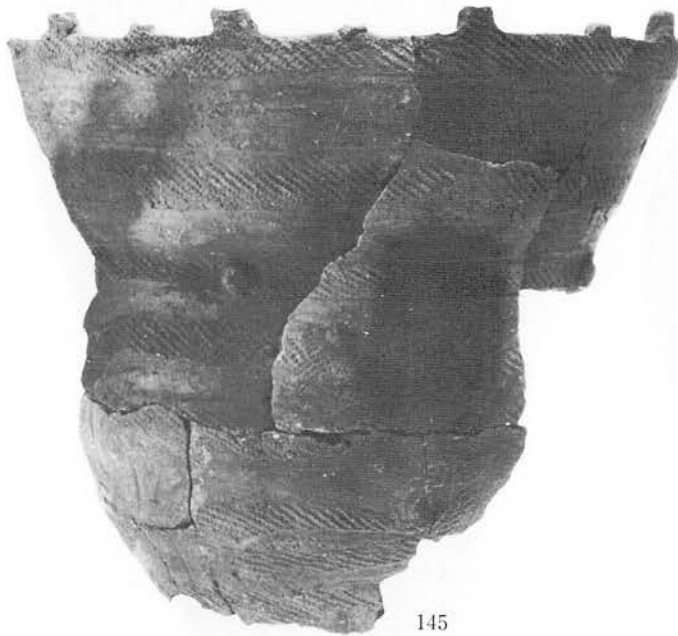


143

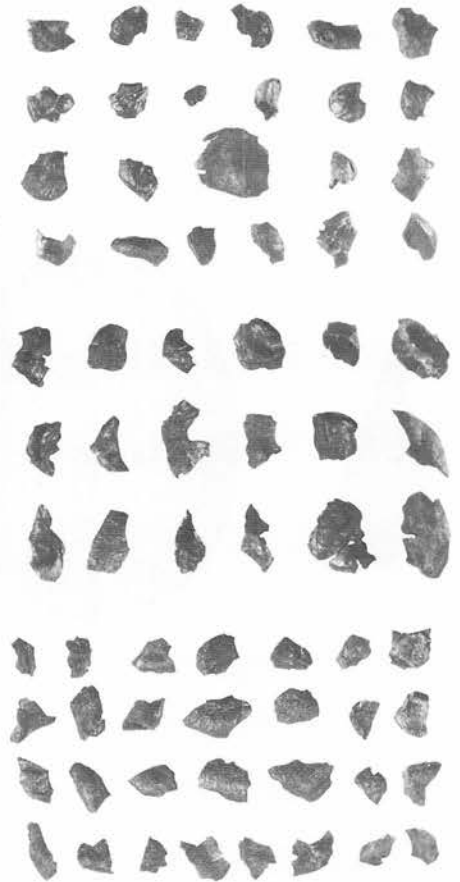


144

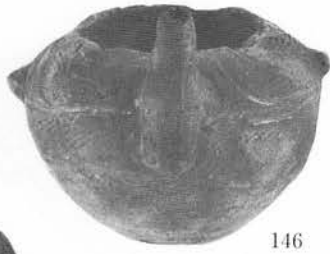
H I-5住居跡埋土中位から出土した炭化クルミ



145



写真図版101 H I-5住居跡出土遺物(遺物番号142~145)



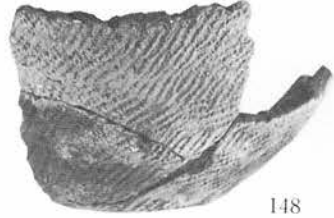
146



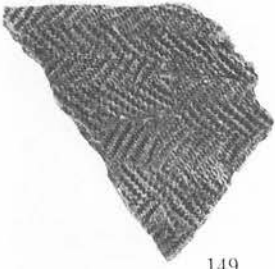
147



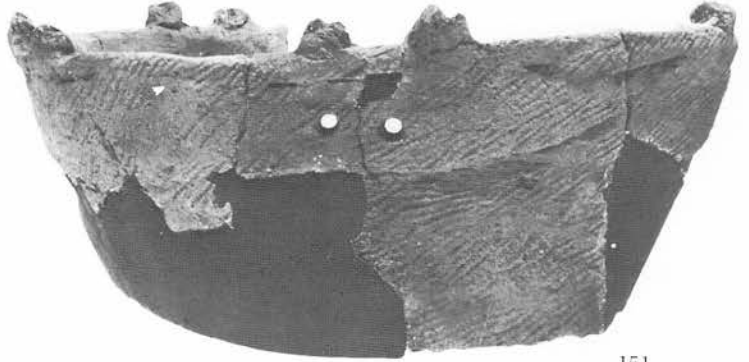
146 a



148



149



151



150



152

写真図版102 HI-6住居跡出土遺物(遺物番号146~152)



153



154



155



156



157



158



159



160



161

写真図版103 HI-6住居跡出土遺物(遺物番号153~161)



162



163



164



165



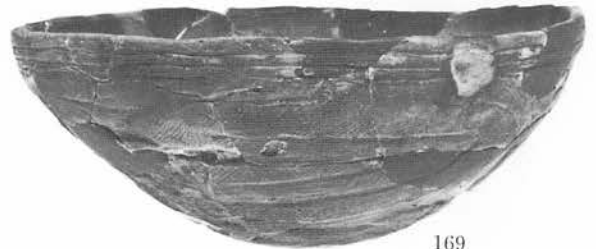
166



167



168



169

写真図版104 HI-8住居跡出土遺物(遺物番号162~169)



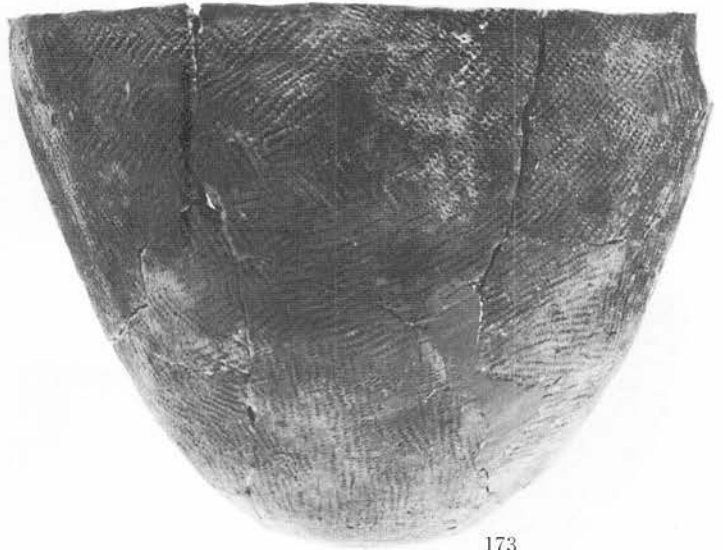
170



171



172



173



174

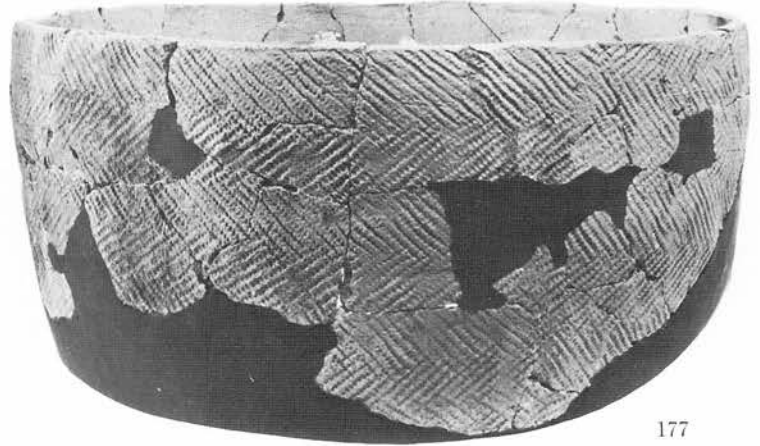


175

写真図版105 H I - 8住居跡出土遺物(遺物番号170~175)



176



177



178



179



180



181



184



182



183



185

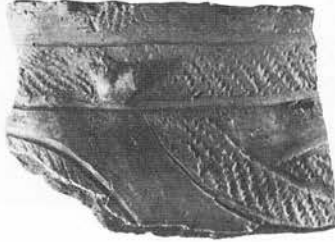
写真図版106 H I - 8住居跡出土遺物(遺物番号176~185)



186



187



188 b



188 a



189



191 a



190

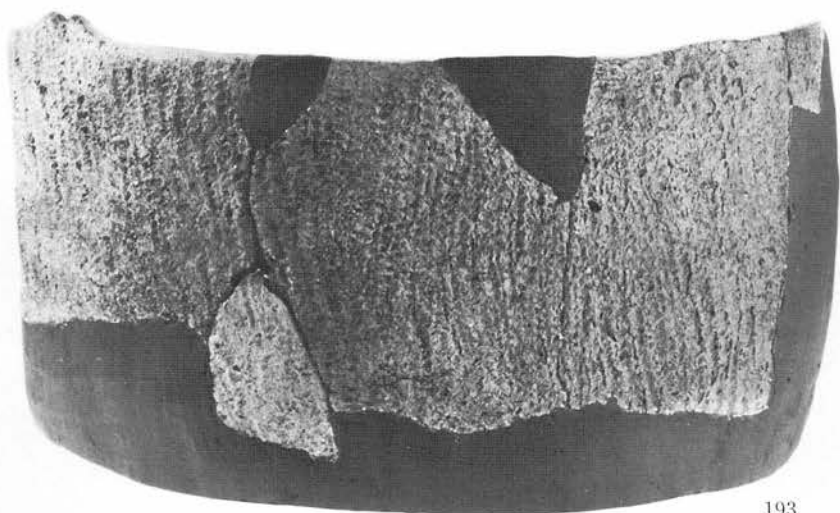


191



192

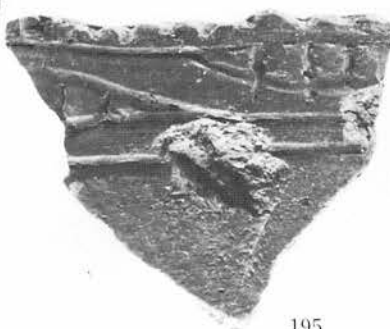
写真図版107 H I-8住居跡出土遺物(遺物番号186~192)



193



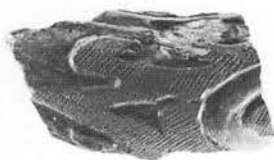
194



195



196



197



198

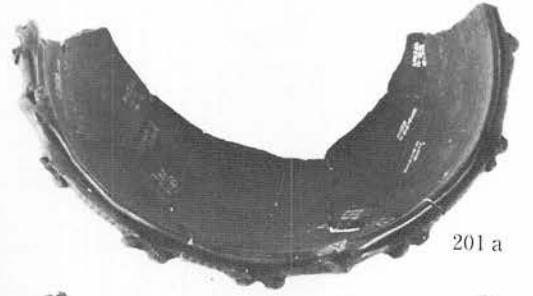


199

写真図版108 H I - 8住居跡出土遺物(遺物番号193~199)



200



201 a



201



202



203

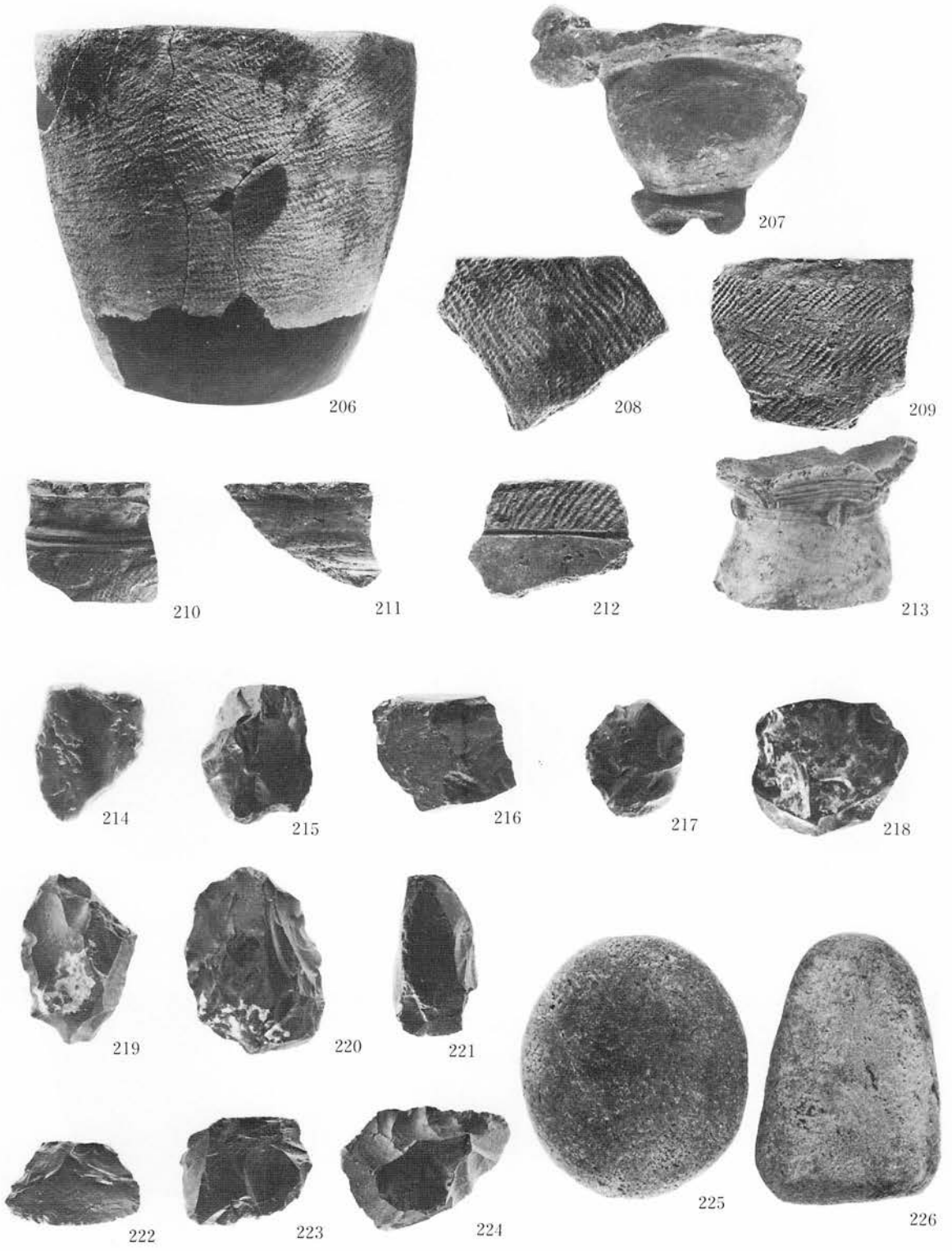


204



205

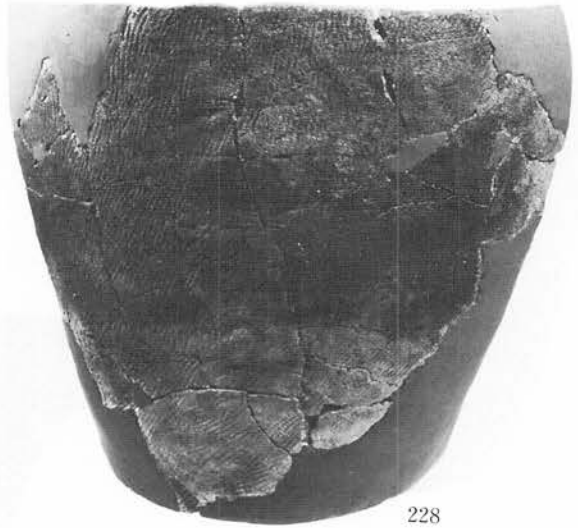
写真図版109 H I - 8住居跡出土遺物(遺物番号200~205)



写真図版110 HI-8住居跡出土遺物(遺物番号206~226)



227



228



231



229



230



232



233



234



235

写真図版111 H I-9住居跡出土遺物(遺物番号227~235)



236



237



238



239



240

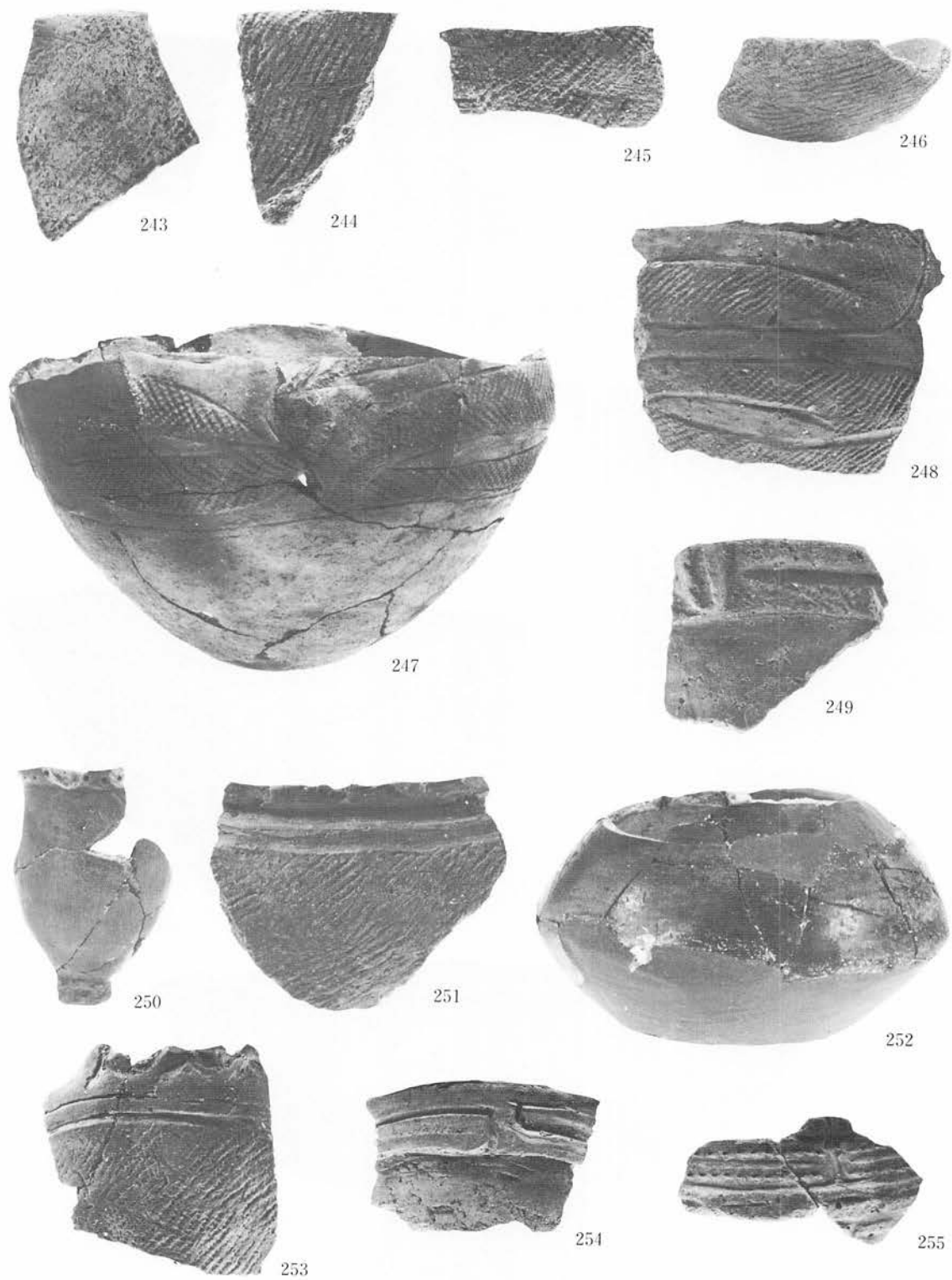


241

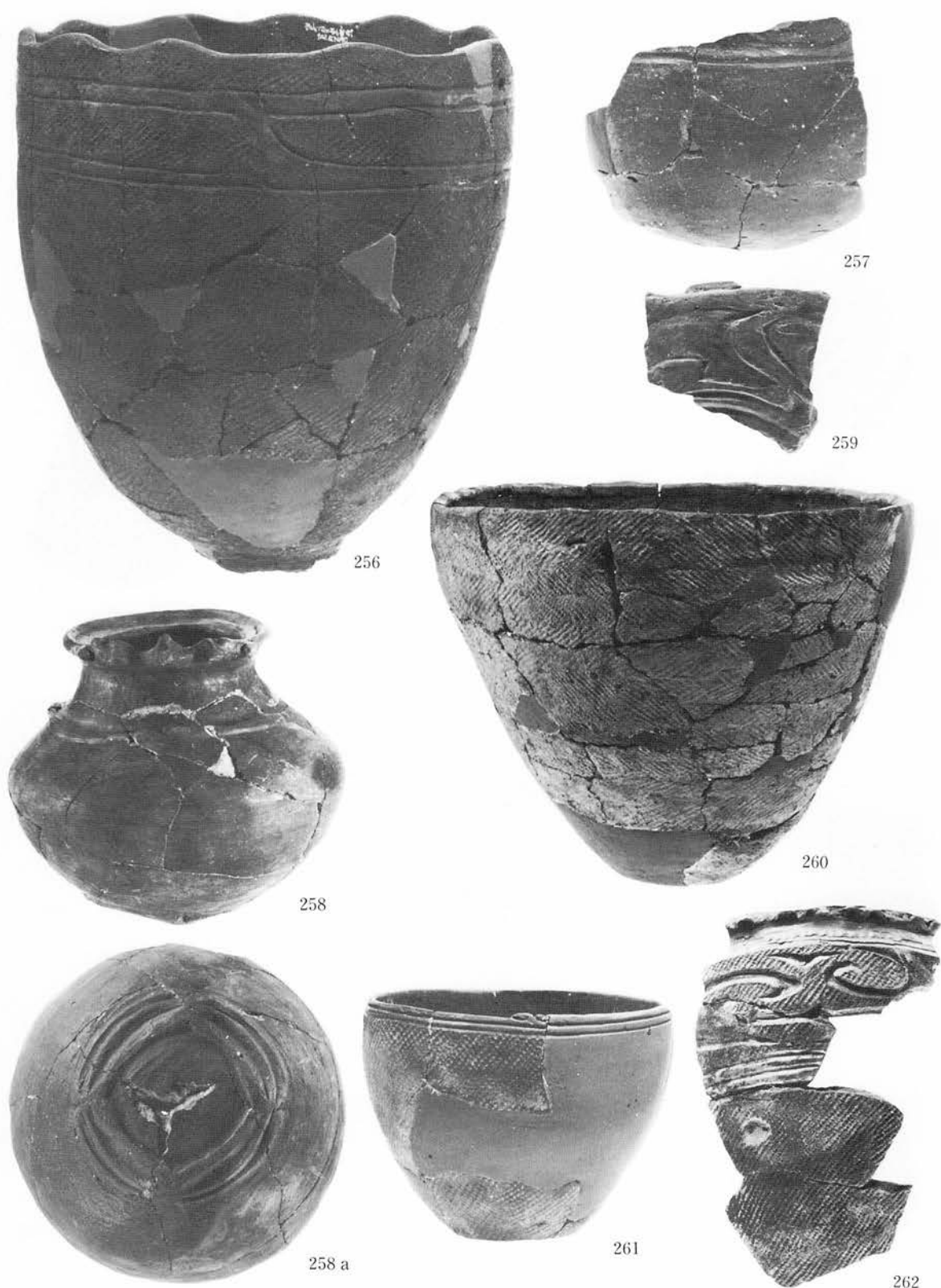


242

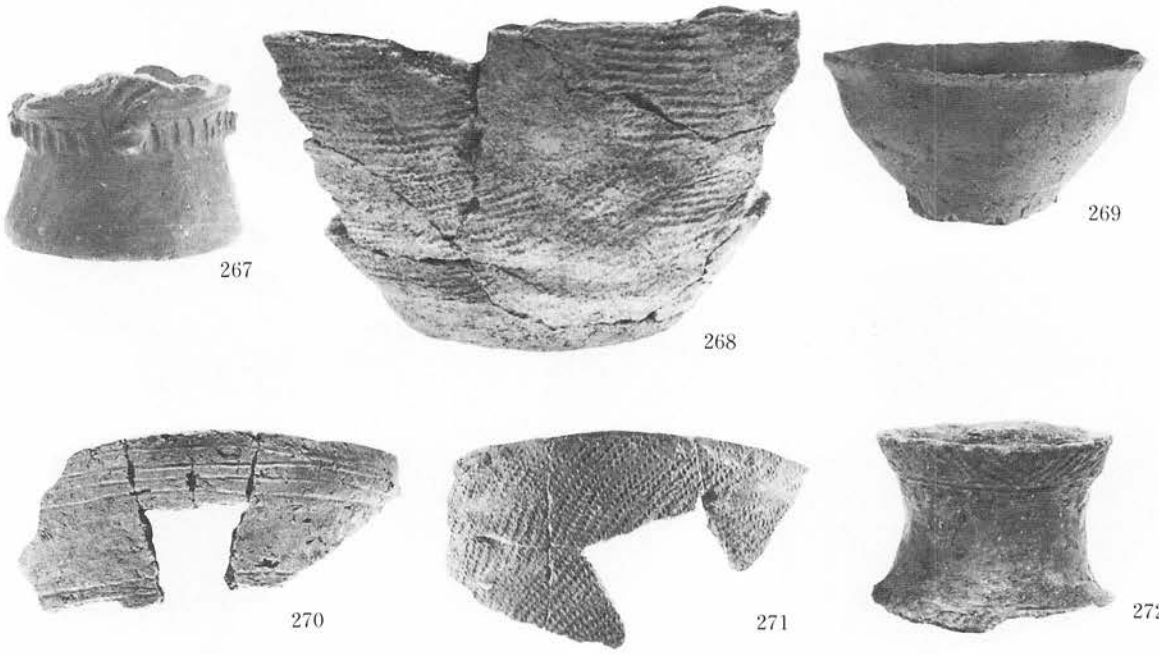
写真図版112 H I - 9住居跡出土遺物(遺物番号236~242)



写真図版113 HI-9住居跡出土遺物(遺物番号243~255)



写真図版114 HI-9住居跡出土遺物(遺物番号256~262)



写真図版115 H I-9住居跡出土遺物(遺物番号263~266)
 H II-1住居跡出土遺物(遺物番号267~272)



273



274



275



276



277



278



279



280



281



282

写真図版116 H II-1住居跡出土遺物(遺物番号273~282)



283



284



285



286



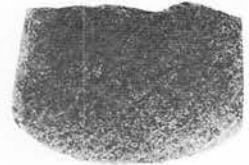
287



288



289



290



291



292



293

写真図版117 H II-1住居跡出土遺物(遺物番号283~290)
I I-1住居跡出土遺物(遺物番号291~293)



294



295



295 a



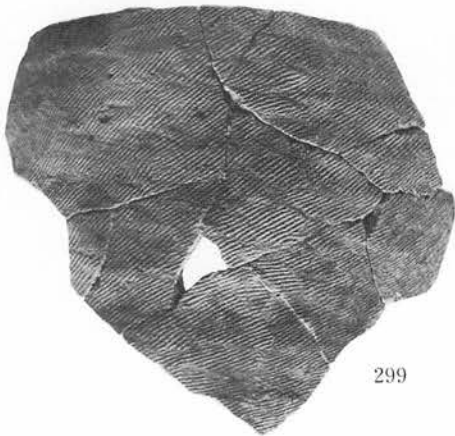
296



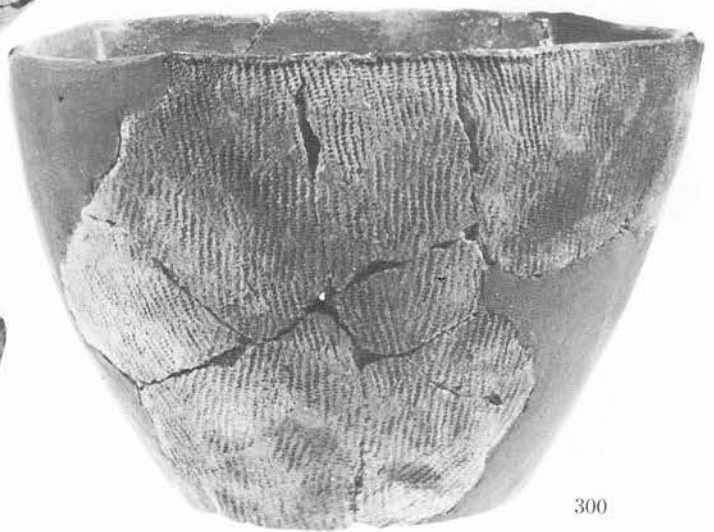
297



298

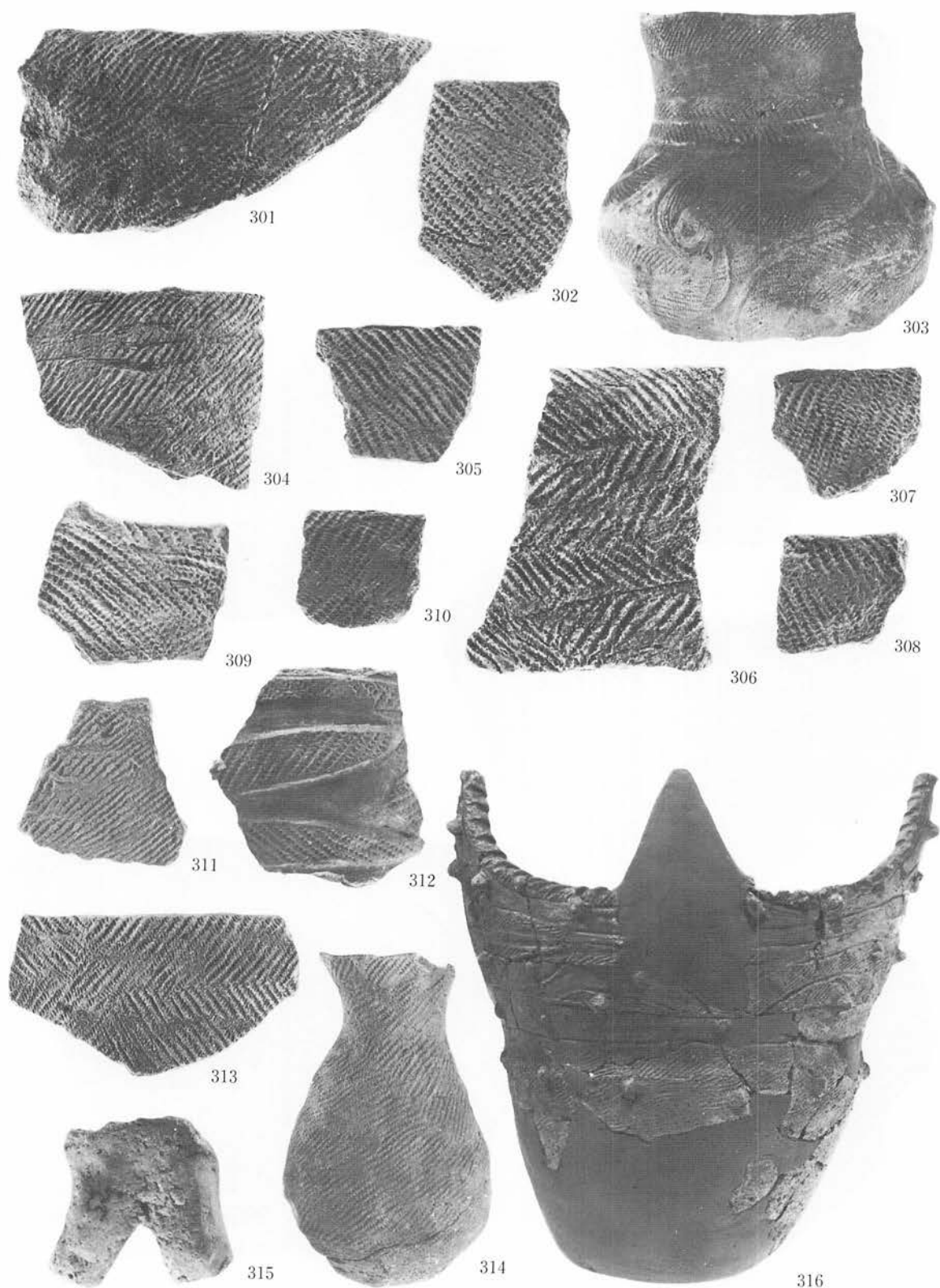


299

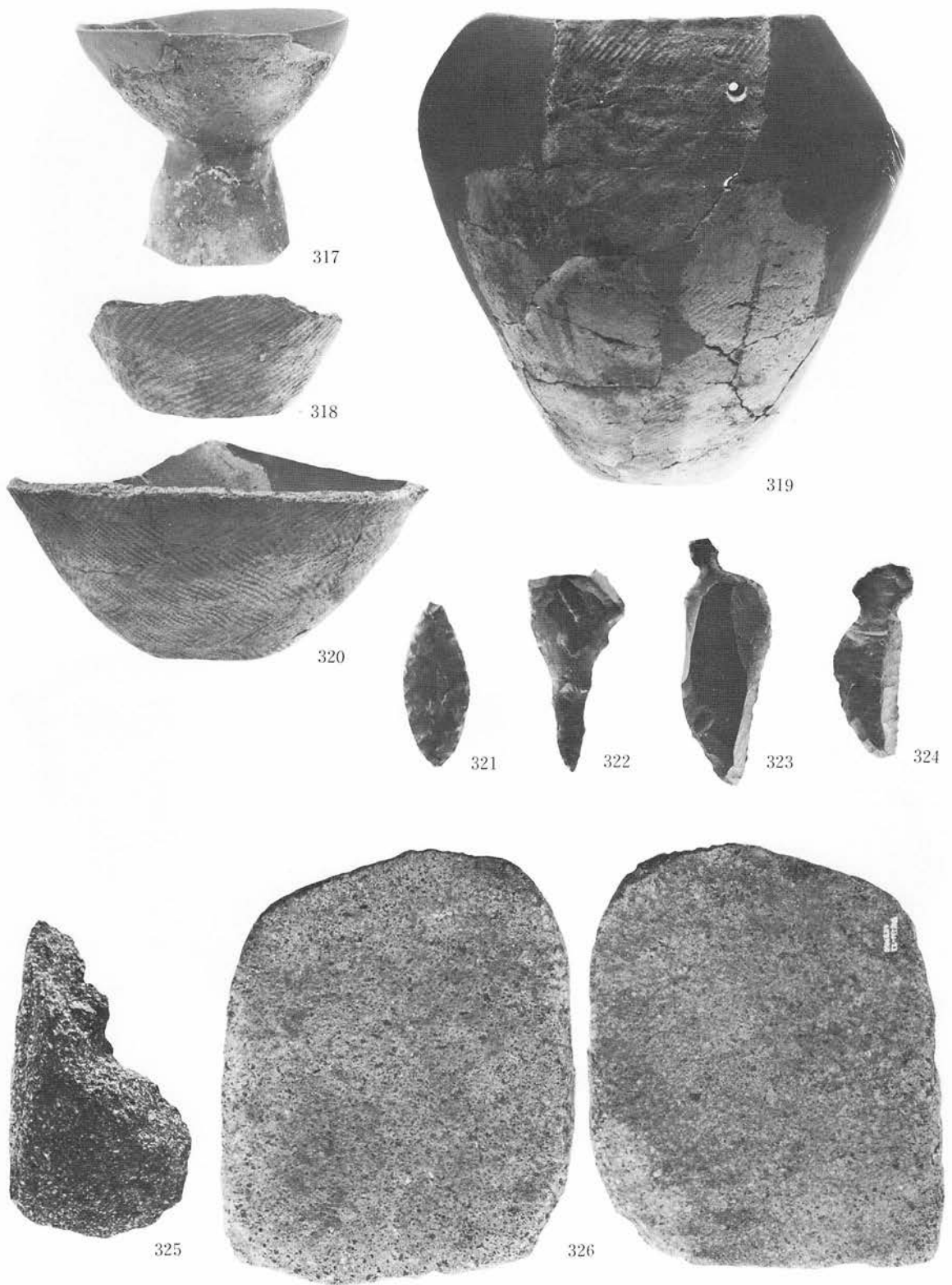


300

写真図版118 I I-1住居跡出土遺物(遺物番号294~300)



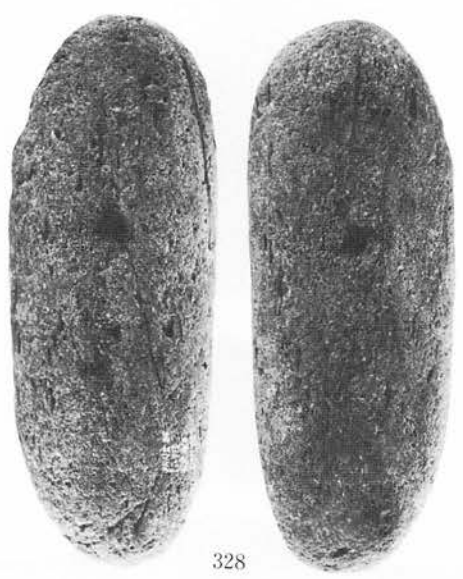
写真図版119 I I-1住居跡出土遺物(遺物番号301~316)



写真図版120 I I-1住居跡出土遺物(遺物番号317~326)



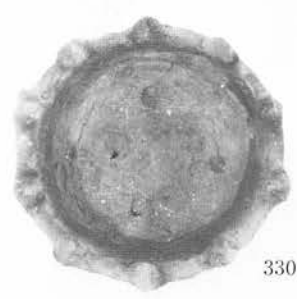
327



328



329



330 b



330



330 a

写真図版121 I I-1住居跡出土遺物(遺物番号327~328)
I I-2住居跡出土遺物(遺物番号329~330)



331



332



334

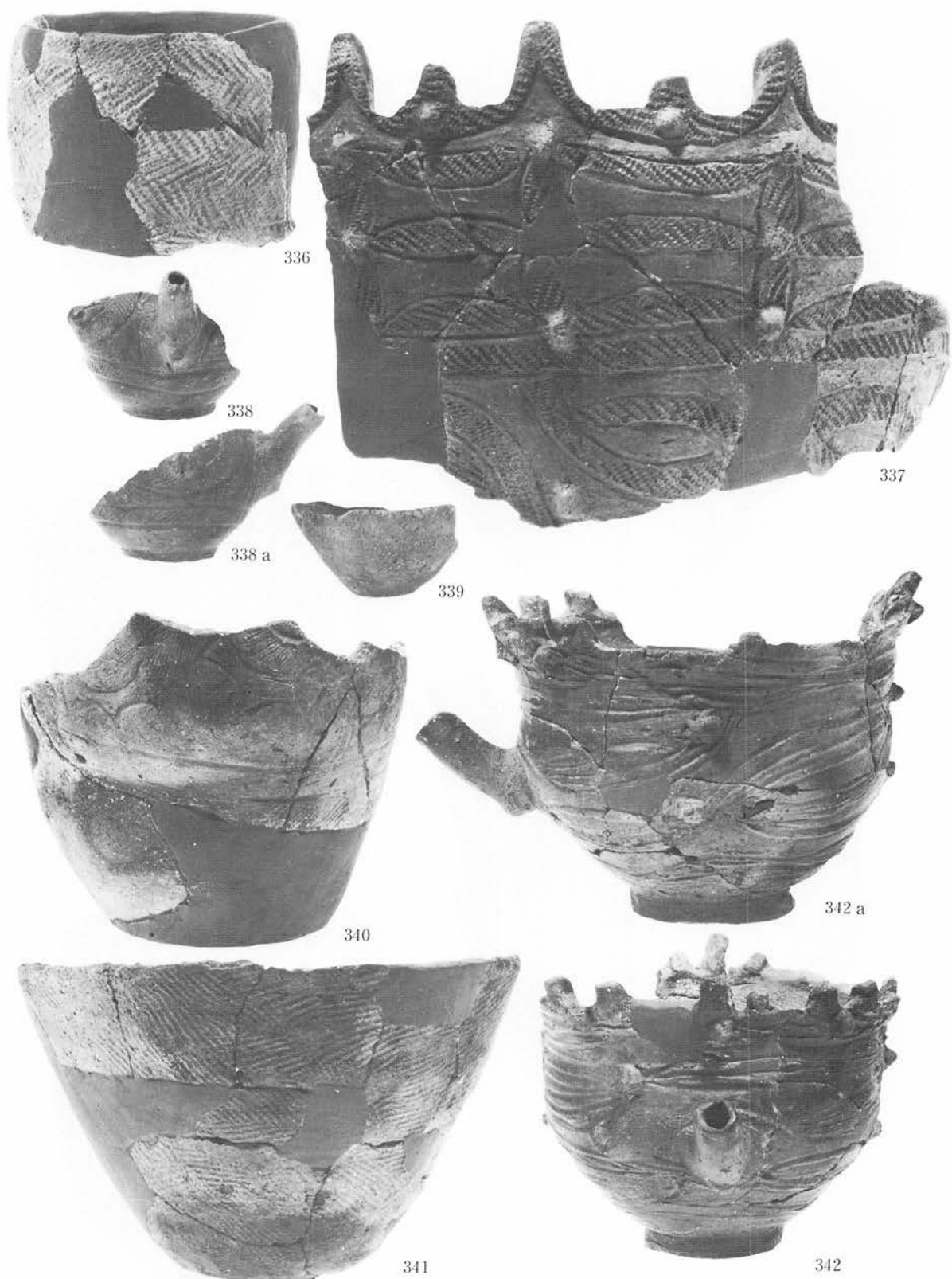


333

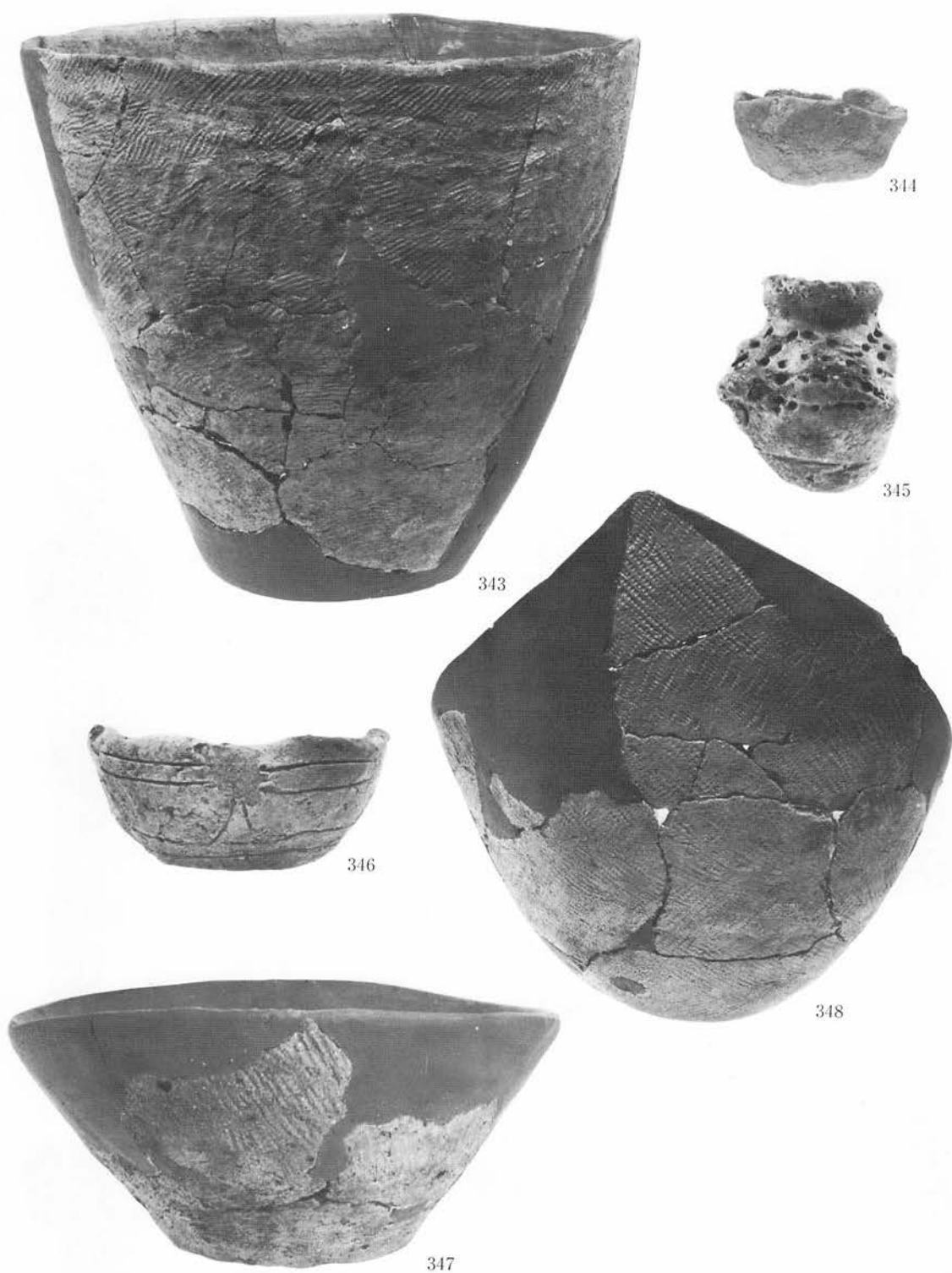


335

写真図版122 | I-2住居跡出土遺物(遺物番号331~335)



写真図版123 I I-2住居跡出土遺物(遺物番号336~342)



写真図版124 I I-2住居跡出土遺物(遺物番号343~348)



349



349 a



350



351



352



353



354



355



357



358



359



356



360



361



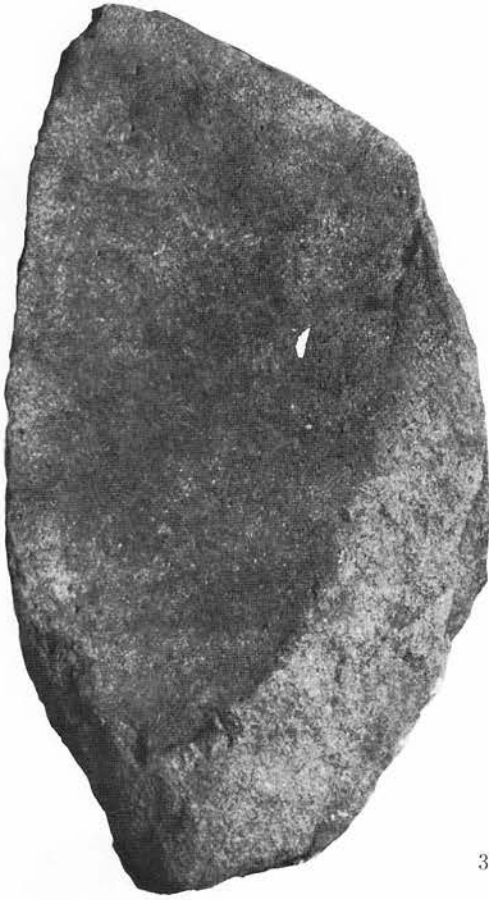
362



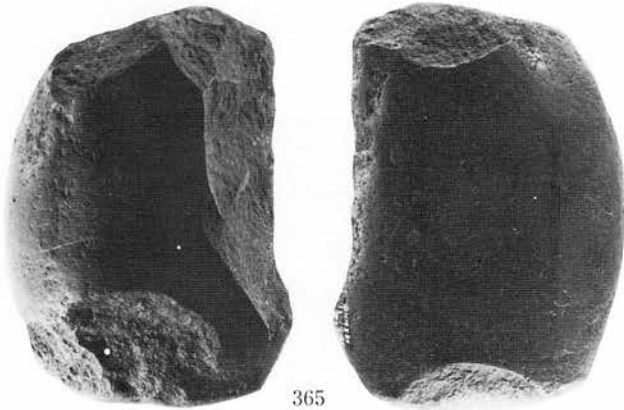
363



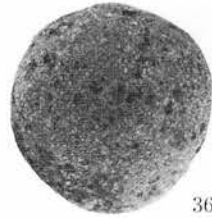
写真図版125 I I-2住居跡出土遺物(遺物番号349~363)



364



365



366

I I-2住居跡埋土下位から出土した炭化クルミ



写真図版126 I I-2住居跡出土遺物(遺物番号364~366)



367



368



369



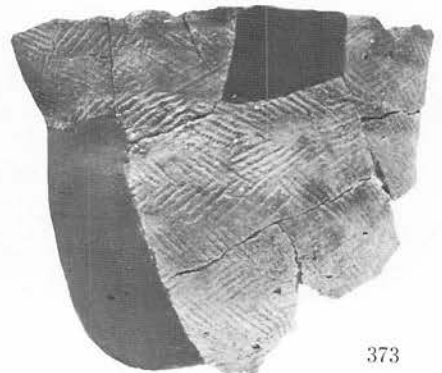
370



371



372



373

写真図版127 I I-3住居跡出土遺物(遺物番号367~373)



374



375



377



376



376 a



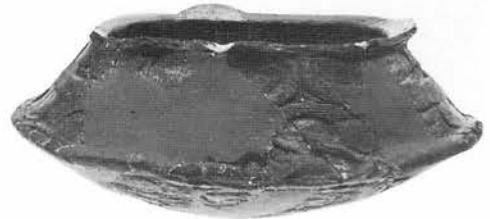
378



380



379



382

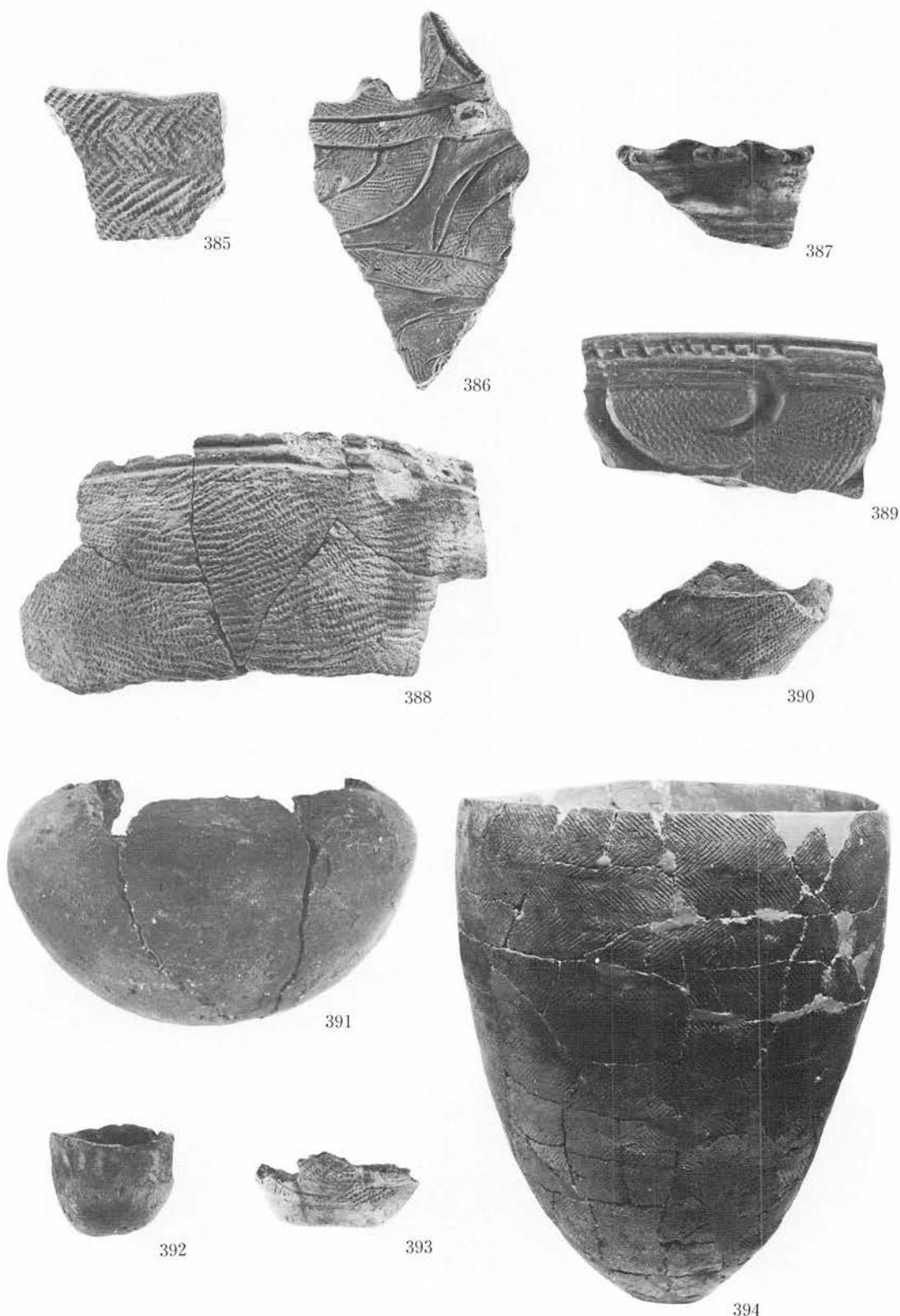


383

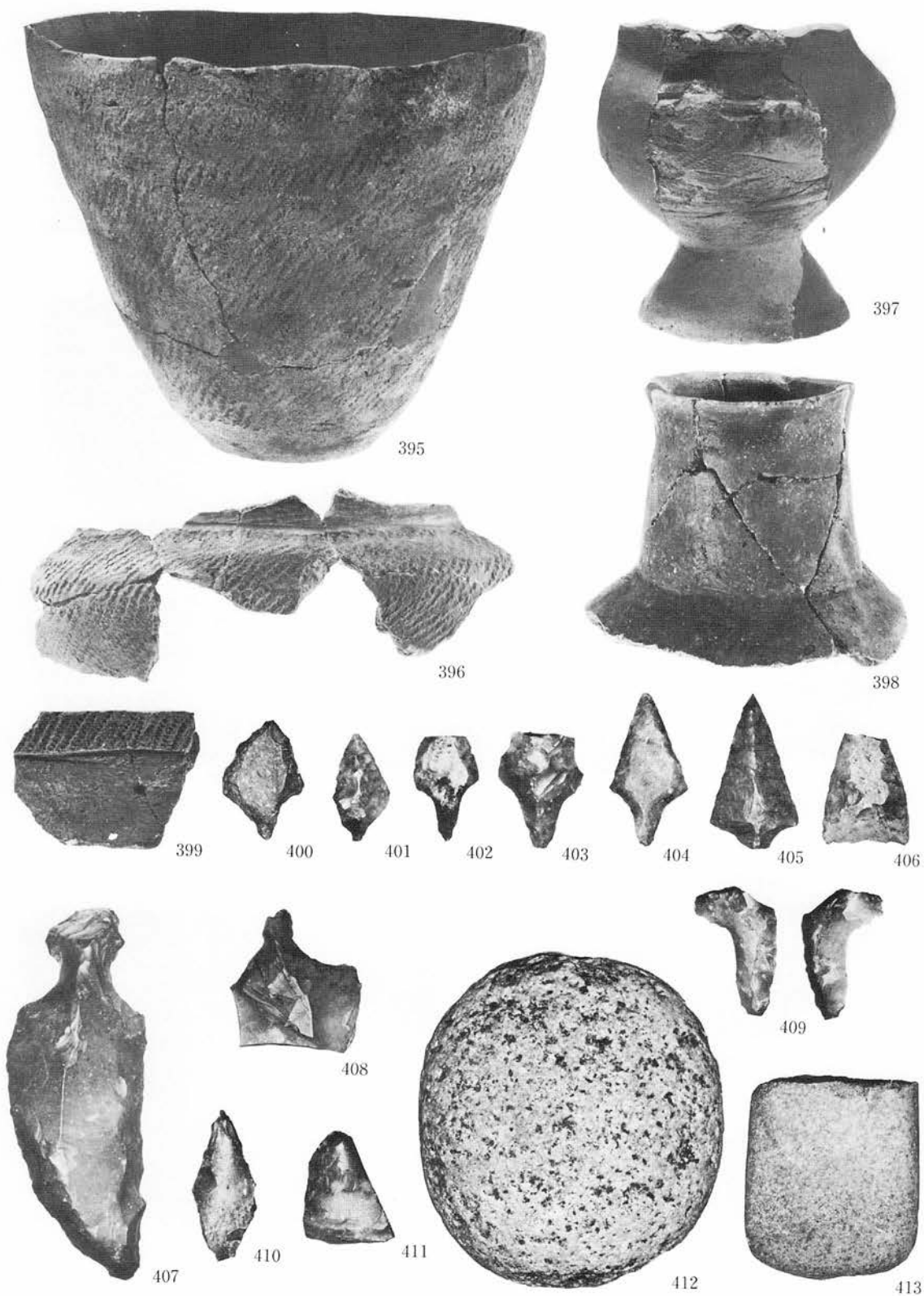


384

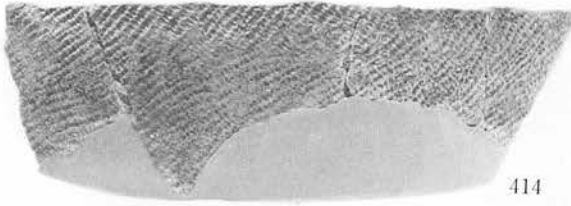
写真図版128 I I-3住居跡出土遺物(遺物番号374~384)



写真図版129 I I-3住居跡出土遺物(遺物番号385~394)



写真図版130 I I-3住居跡出土遺物(遺物番号395~413)



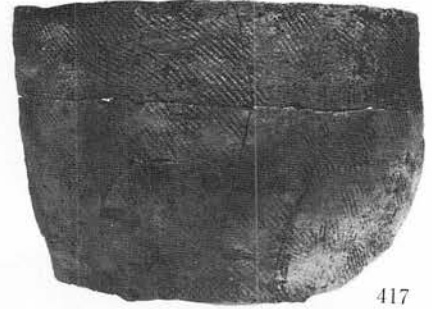
414



415



416



417



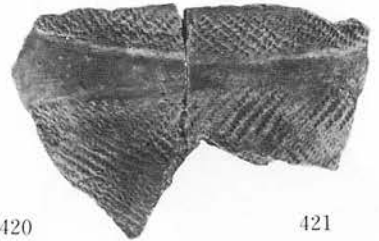
418



419



420



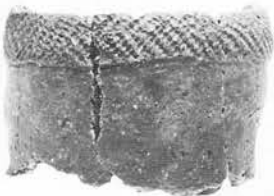
421



422

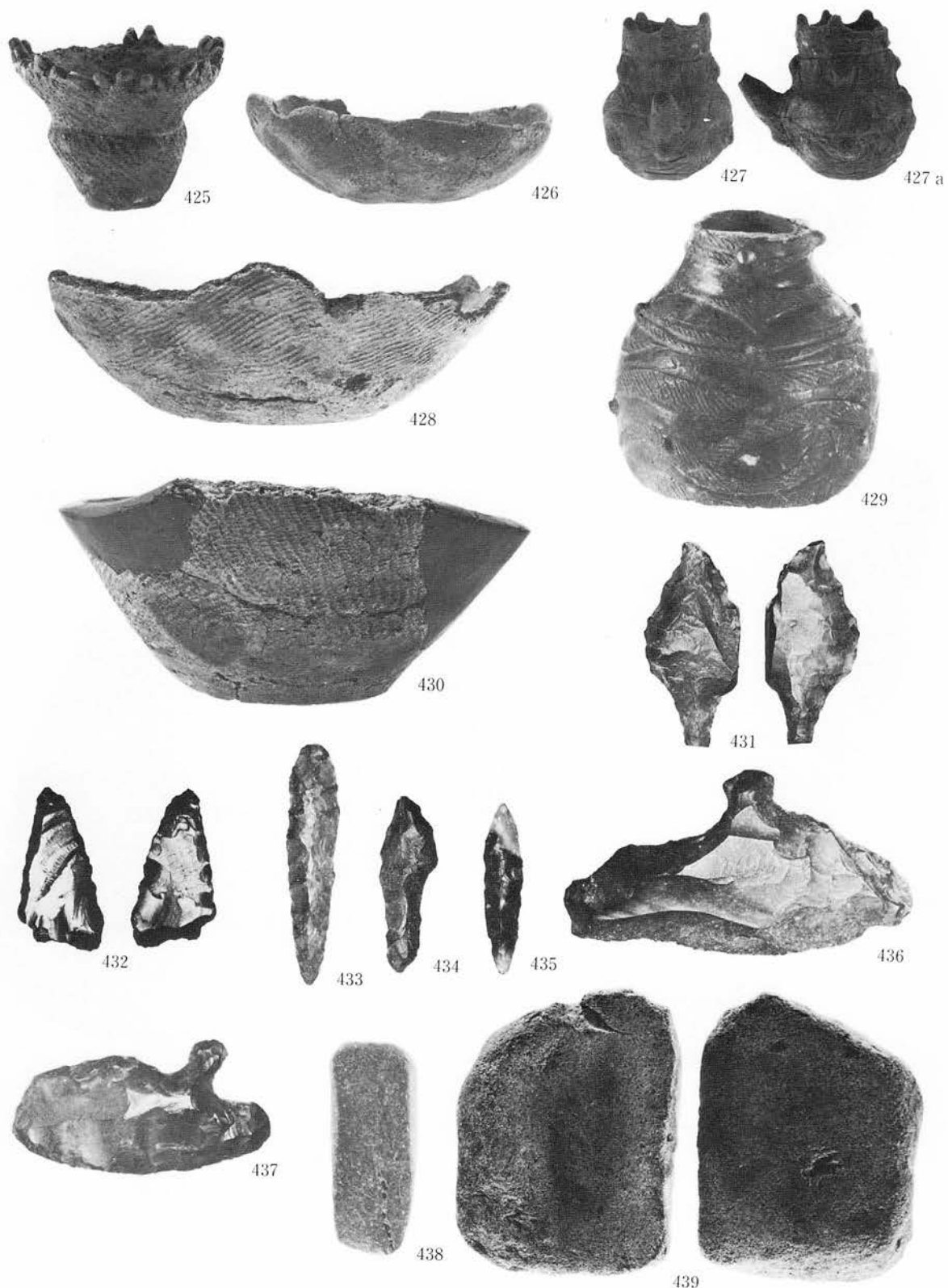


424

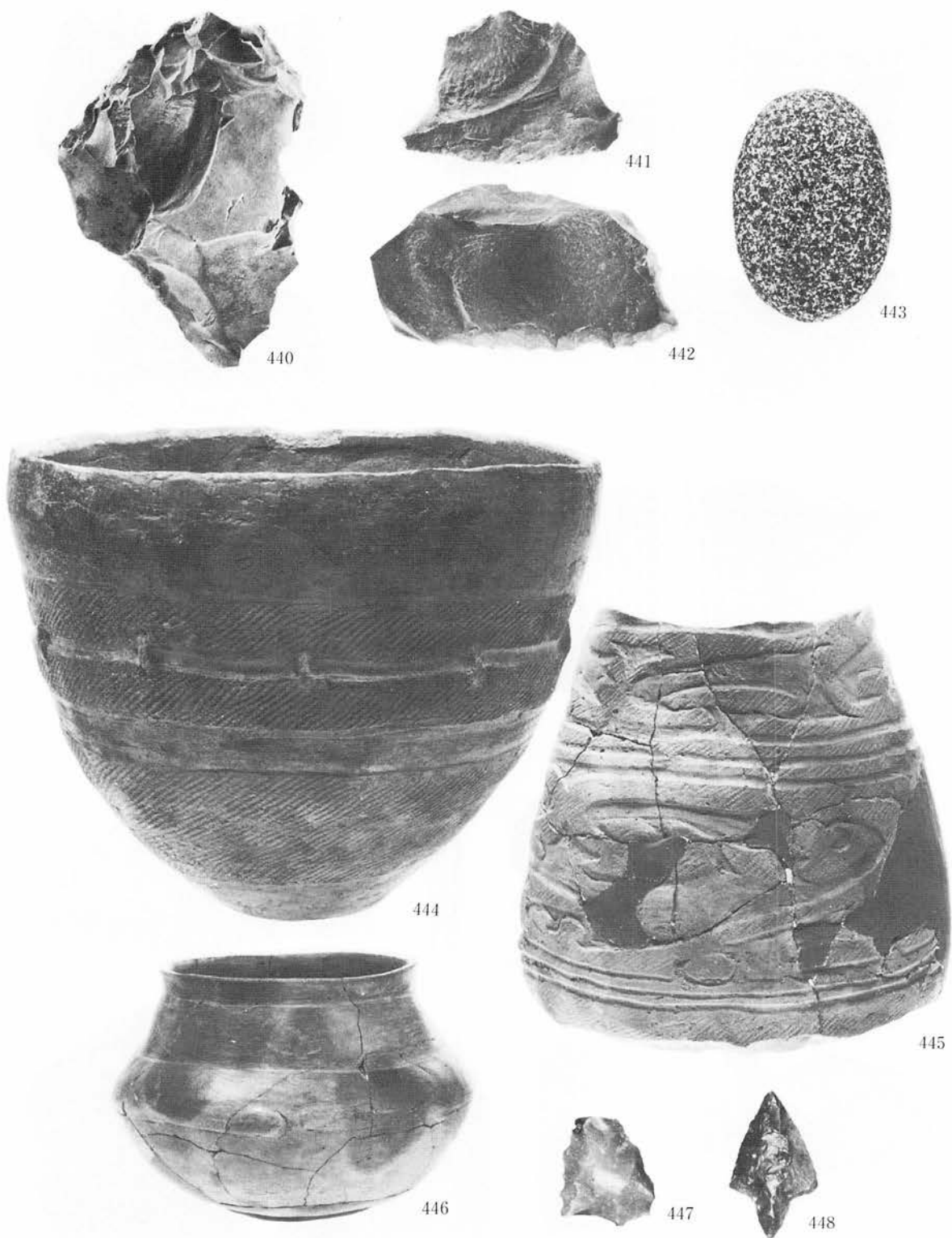


423

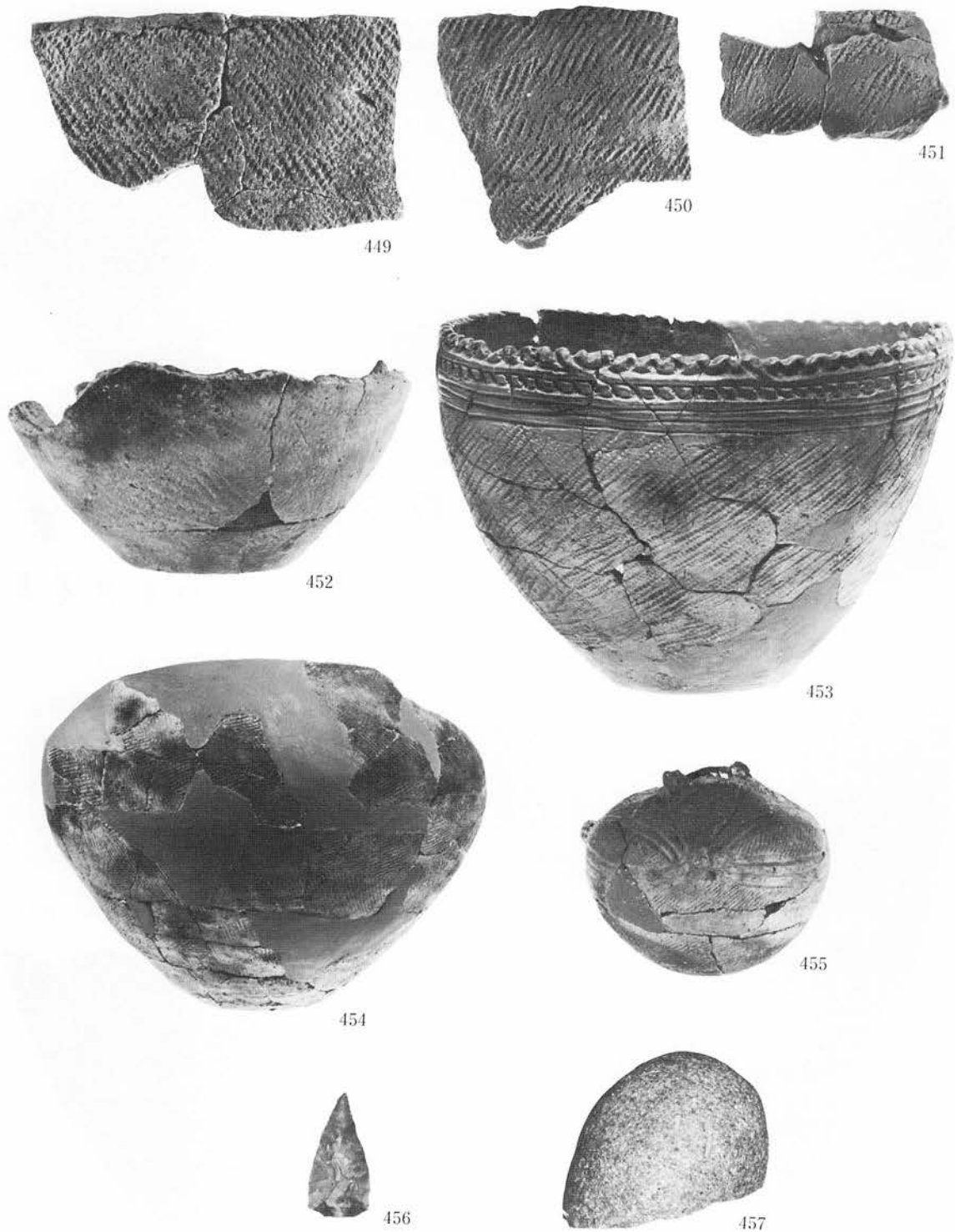
写真図版131 I I-4住居跡出土遺物(遺物番号414~424)



写真図版132 I I-4住居跡出土遺物(遺物番号425~439)



写真図版133 I I-4住居跡出土遺物(遺物番号440~443)
 I I-6住居跡出土遺物(遺物番号444~448)



写真図版134 | I-7住居跡出土遺物(遺物番号449~457)



I I-8住居跡床面から出土した炭化クルミ



460



461



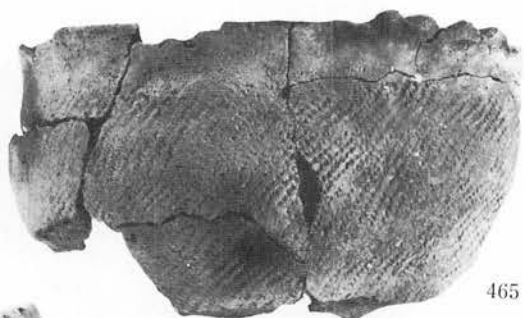
462



463



464



465



466

写真図版135 I I-8住居跡出土遺物(遺物番号458~463)
I I-9住居跡出土遺物(遺物番号464~466)



467



468



469



470



471



472

写真図版136 I I-9住居跡出土遺物(遺物番号467~469)
I I-10住居跡出土遺物(遺物番号470~472)



473



474



475



476



477



478



479



480



481



482



483

I I-10住居跡床面から出土した炭化クルミ



写真図版137 I I-10住居跡出土遺物(遺物番号473~483)



484



485



484 a



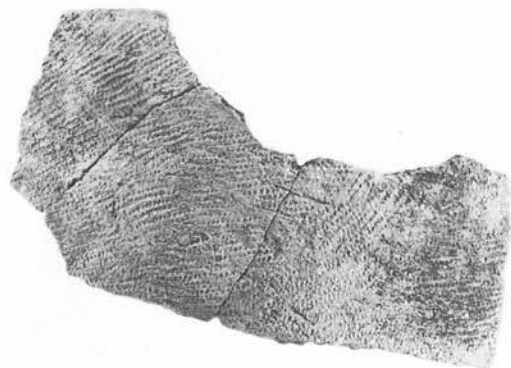
486



488



489

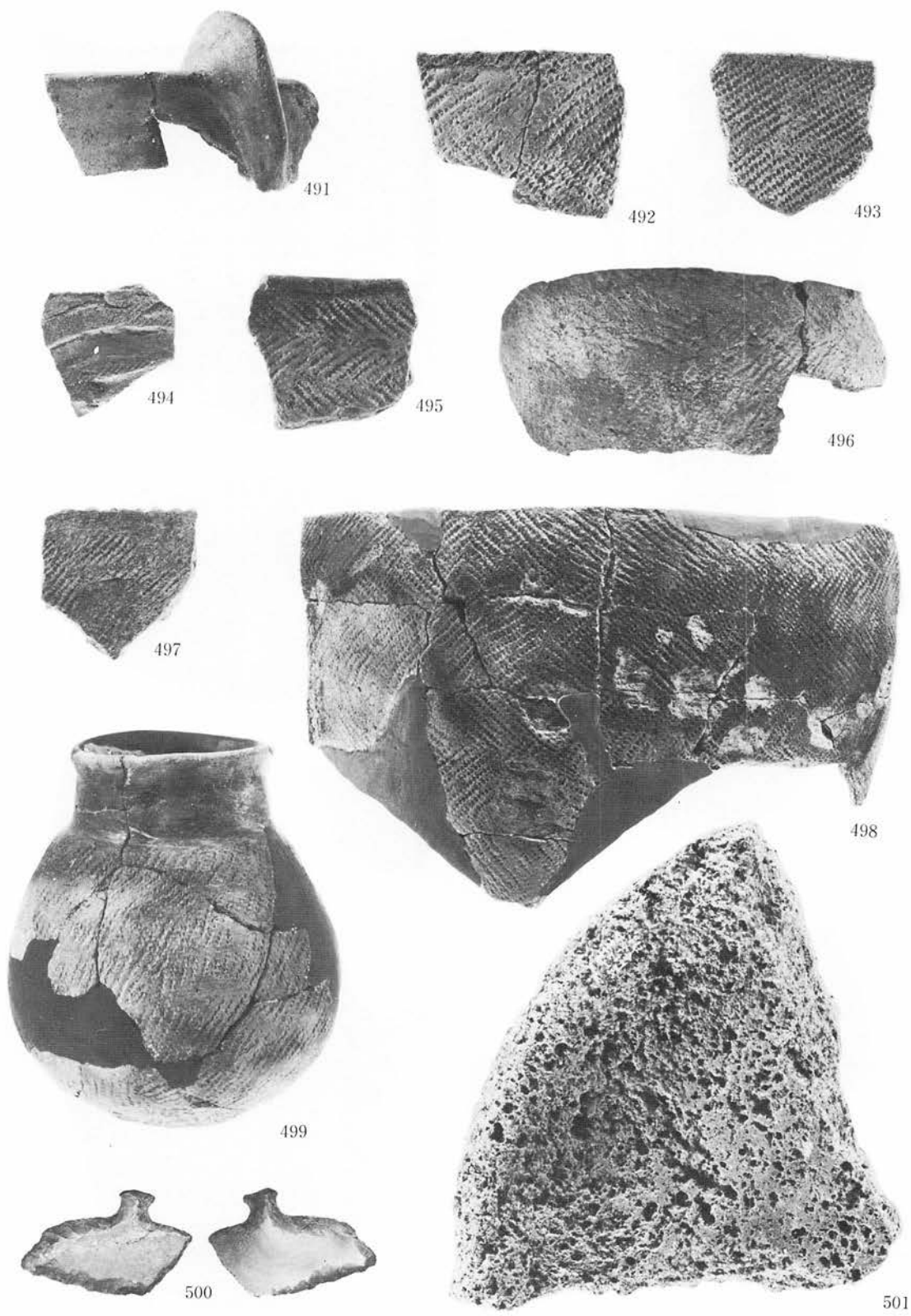


487

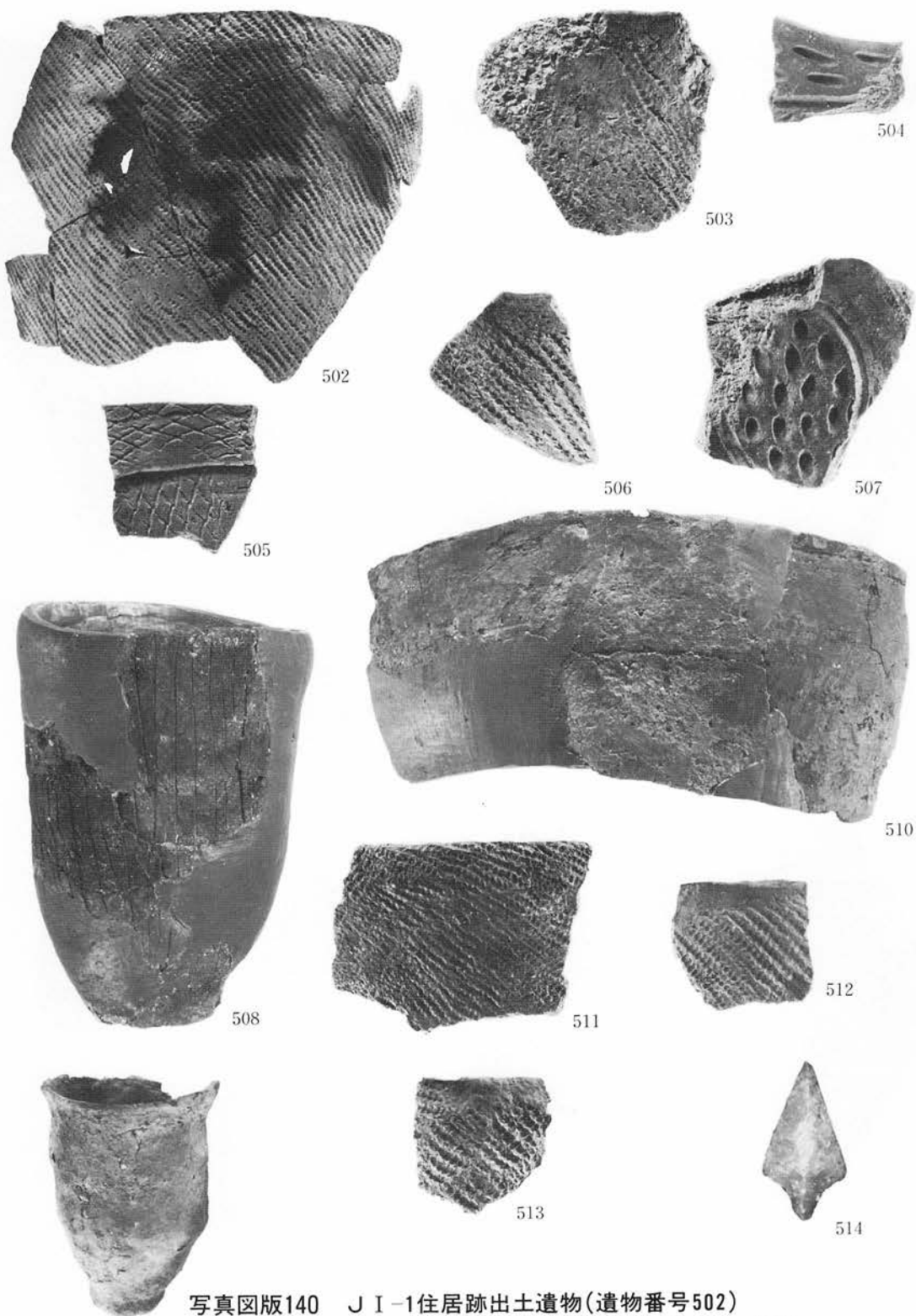


490

写真図版138 I II-3住居跡出土遺物(遺物番号484~490)



写真図版139 I II-3住居跡出土遺物(遺物番号491~501)



写真図版140

J I -1住居跡出土遺物(遺物番号502)

J I -2住居跡出土遺物(遺物番号503~507)

J I -4住居跡出土遺物(遺物番号508~514)



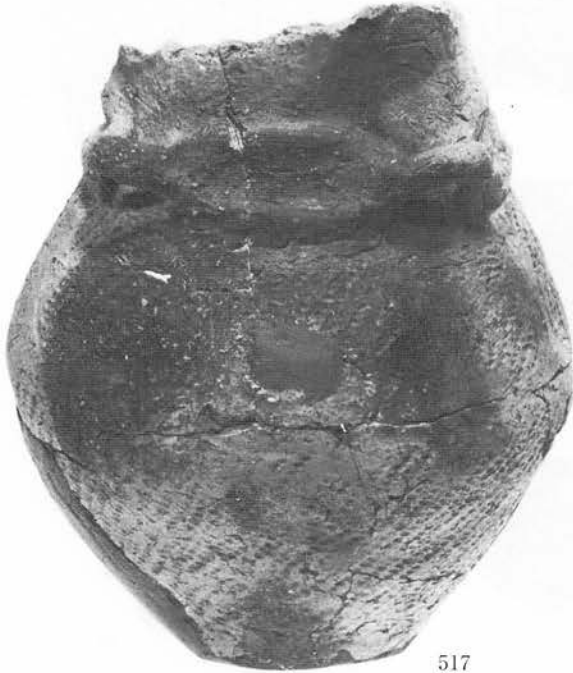
515



515 a



516



517



518



519



520

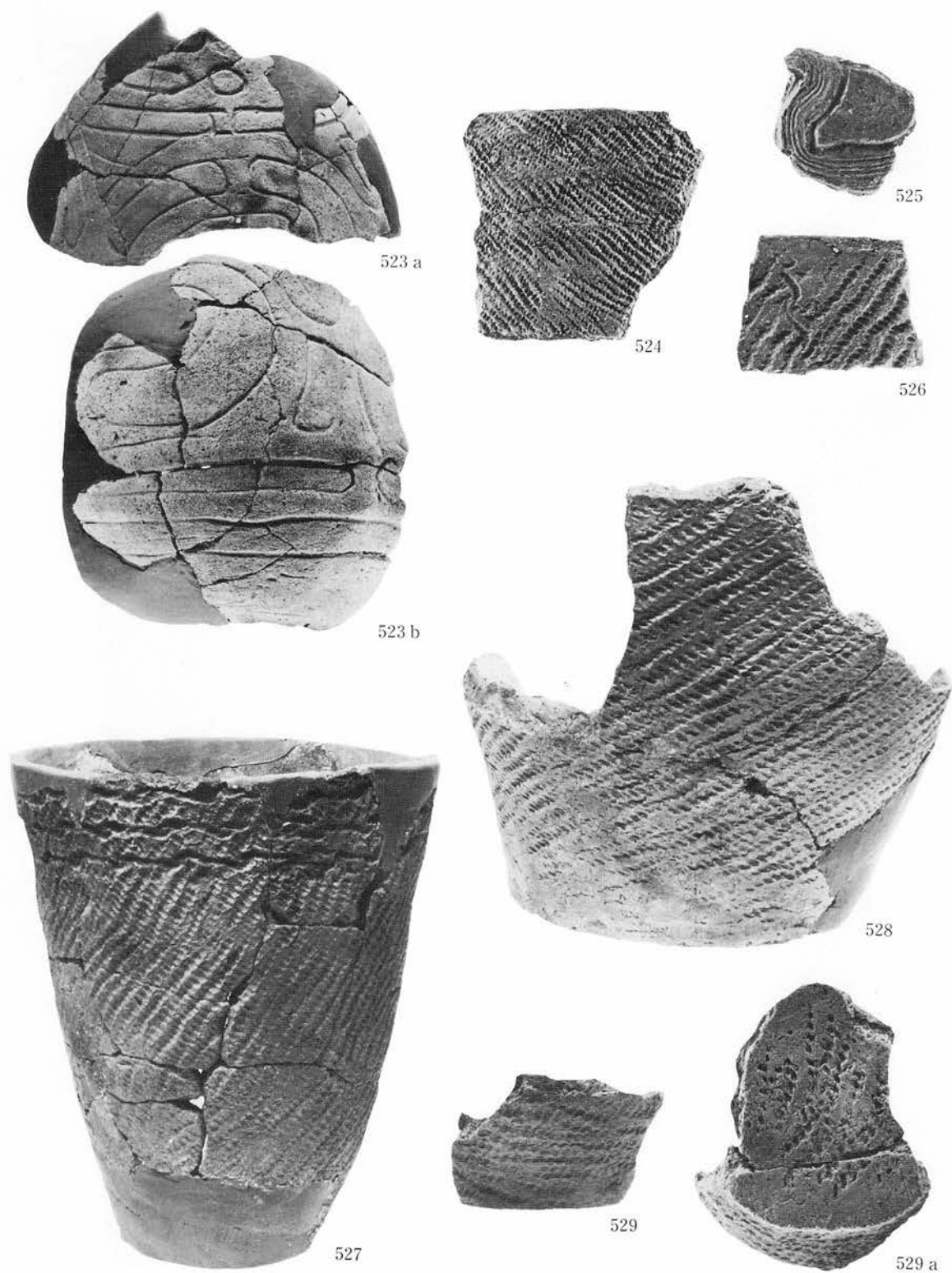


521



522

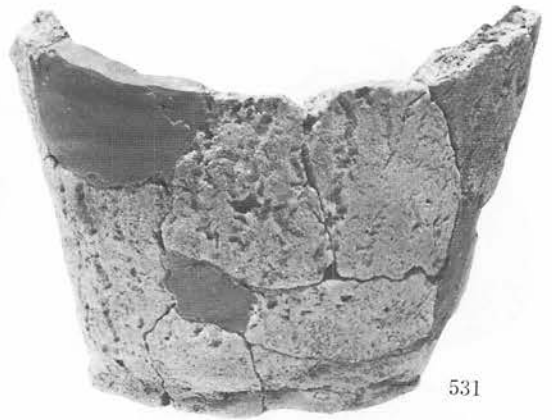
写真図版141 J I-5住居跡出土遺物(遺物番号515)
J I-6住居跡出土遺物(遺物番号516~517)
J I-7住居跡出土遺物(遺物番号518~522)



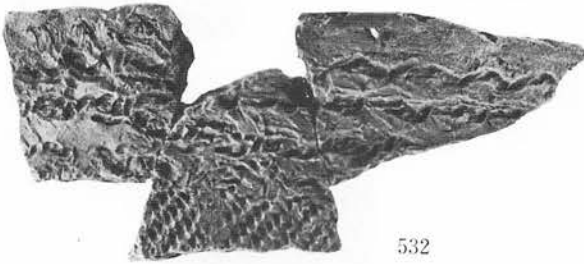
写真図版142 J II-2住居跡出土遺物(遺物番号523~526)
 K I-1住居跡出土遺物(遺物番号527~529)



530



531



532



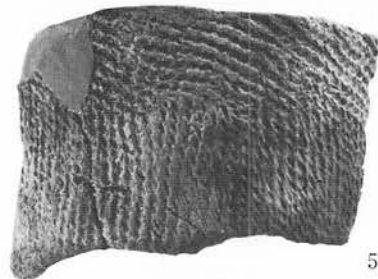
533



534



535



536

写真図版143 K I -1住居跡出土遺物(遺物番号530~536)



537



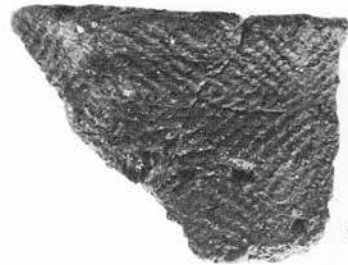
538



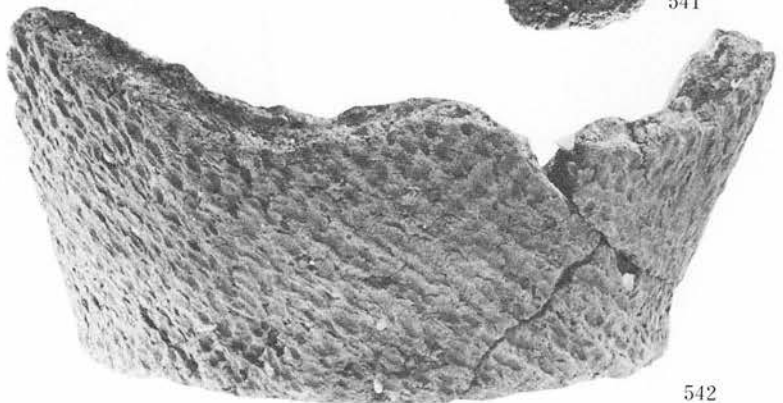
539



540

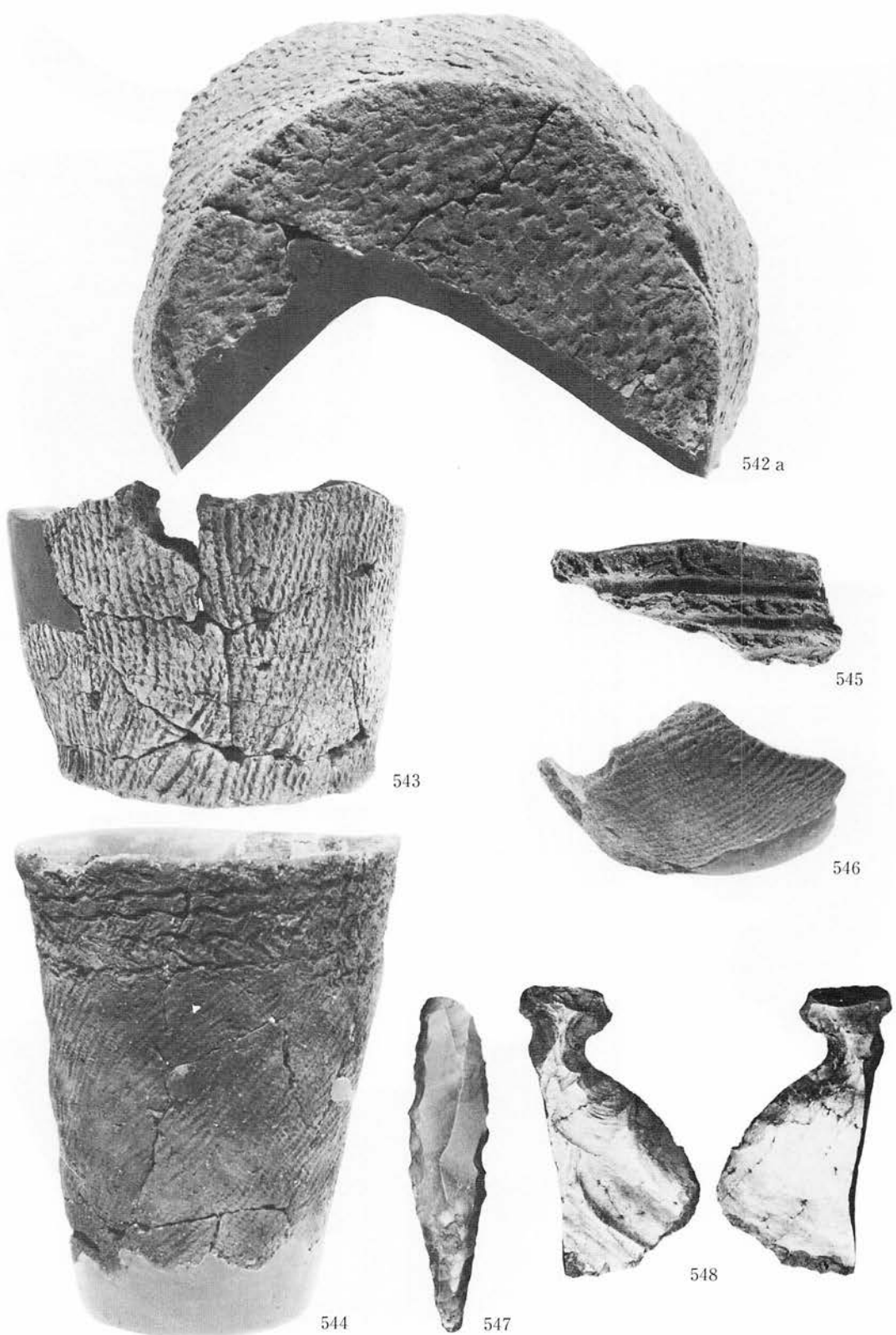


541



542

写真図版144 K I-1住居跡出土遺物(遺物番号537~542)



写真図版145 K I -1住居跡出土遺物(遺物番号542 a ~548)



549



550



551



552



553

写真図版146 K I-1住居跡出土遺物(遺物番号549)
K I-2住居跡出土遺物(遺物番号550)
K II-1住居跡出土遺物(遺物番号551~553)



554



555



556



557



558



559

G II-1住居跡床面から出土したコハク



560



561



写真図版147 K II-1住居跡出土遺物(遺物番号554~555)
G II-1住居跡出土遺物(遺物番号556~561)



562



565



562 a



566



568



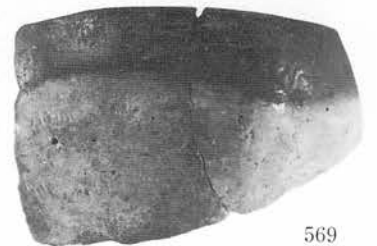
563



567

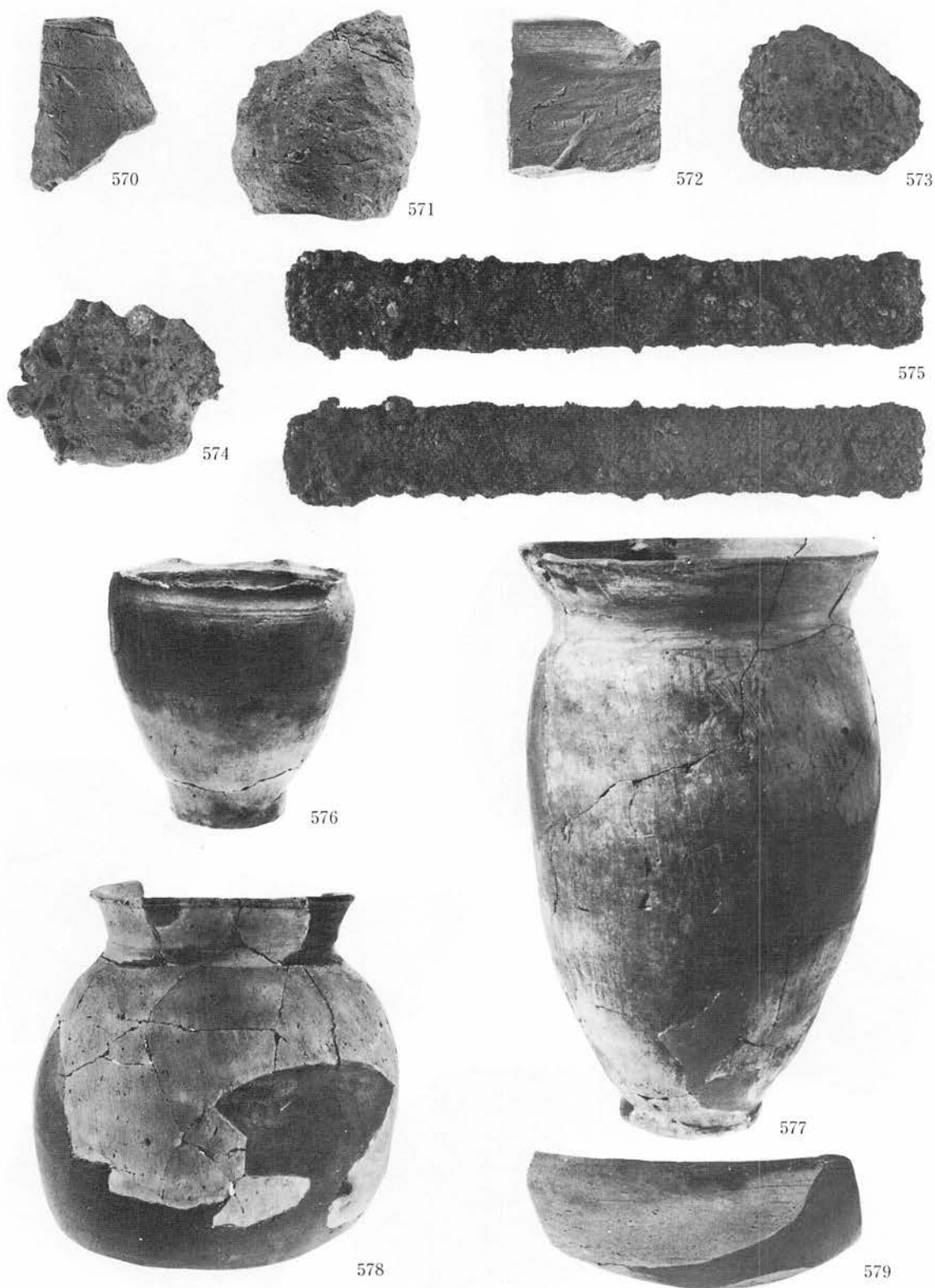


564

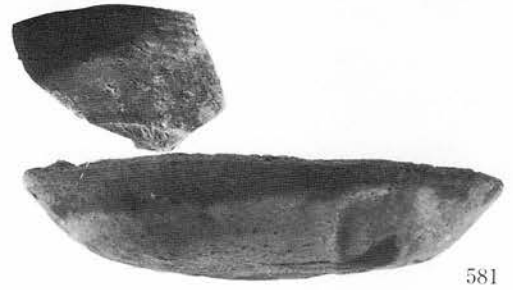


569

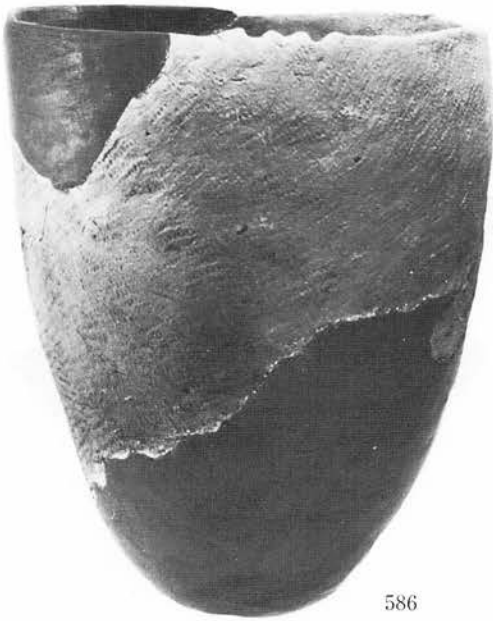
写真図版148 I II-2住居跡出土遺物(遺物番号562~569)



写真図版149 J I-3住居跡出土遺物(遺物番号570~575)
 J II-1住居跡出土遺物(遺物番号576~579)



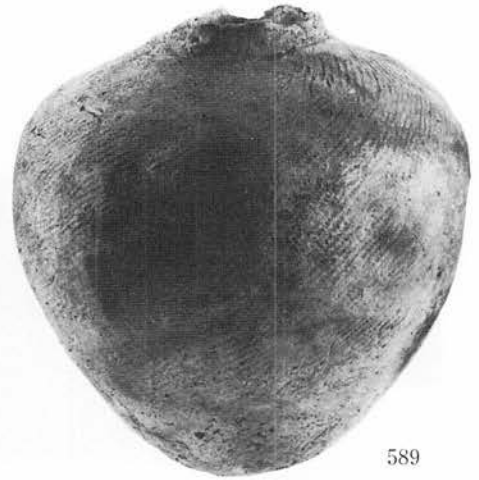
写真図版150 J II-1住居跡出土遺物(遺物番号580~581)
H I-3住居跡状遺構出土遺物(遺物番号582~585)



586



587



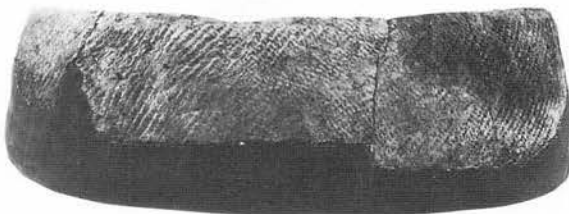
589



588

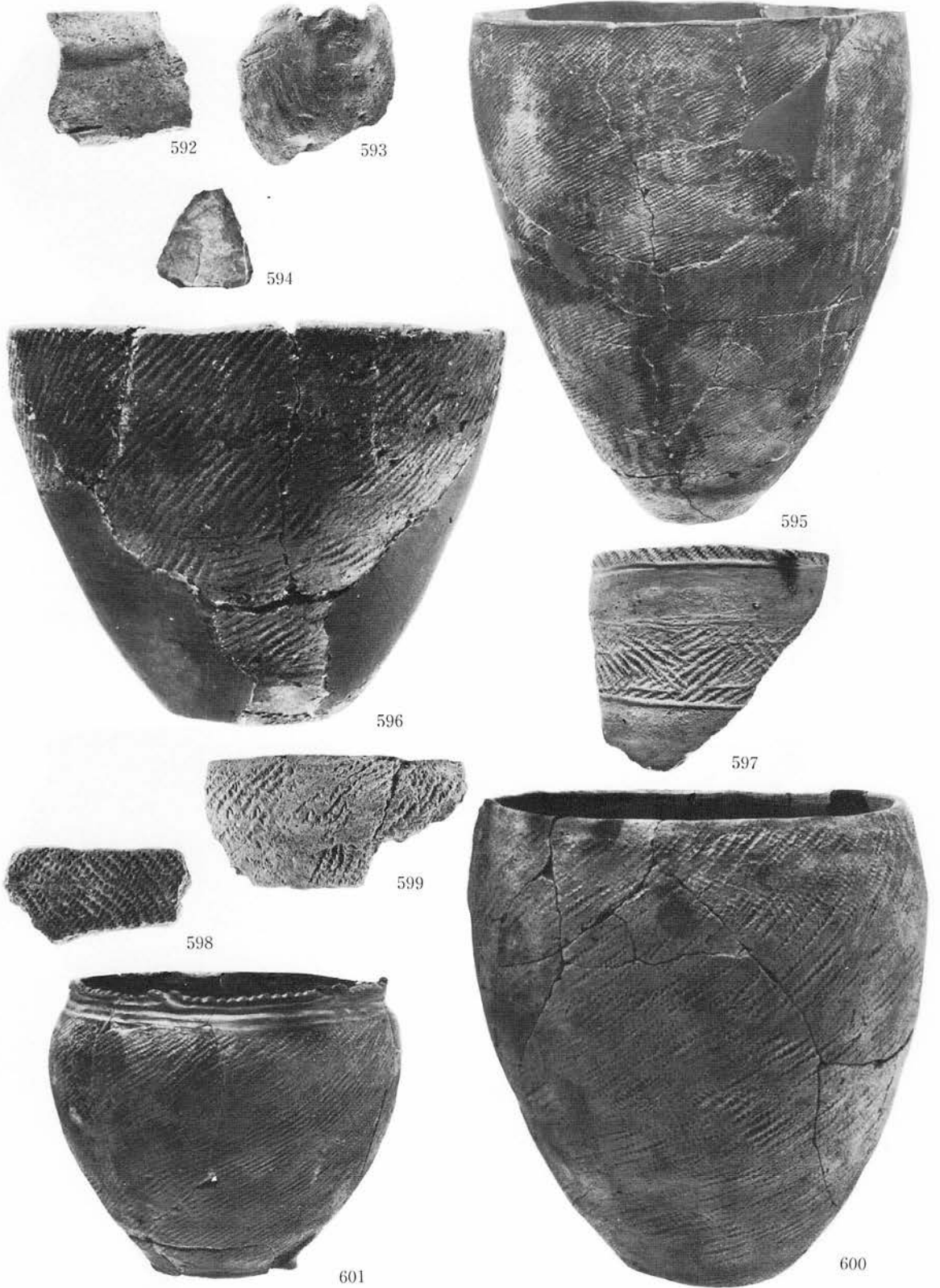


591

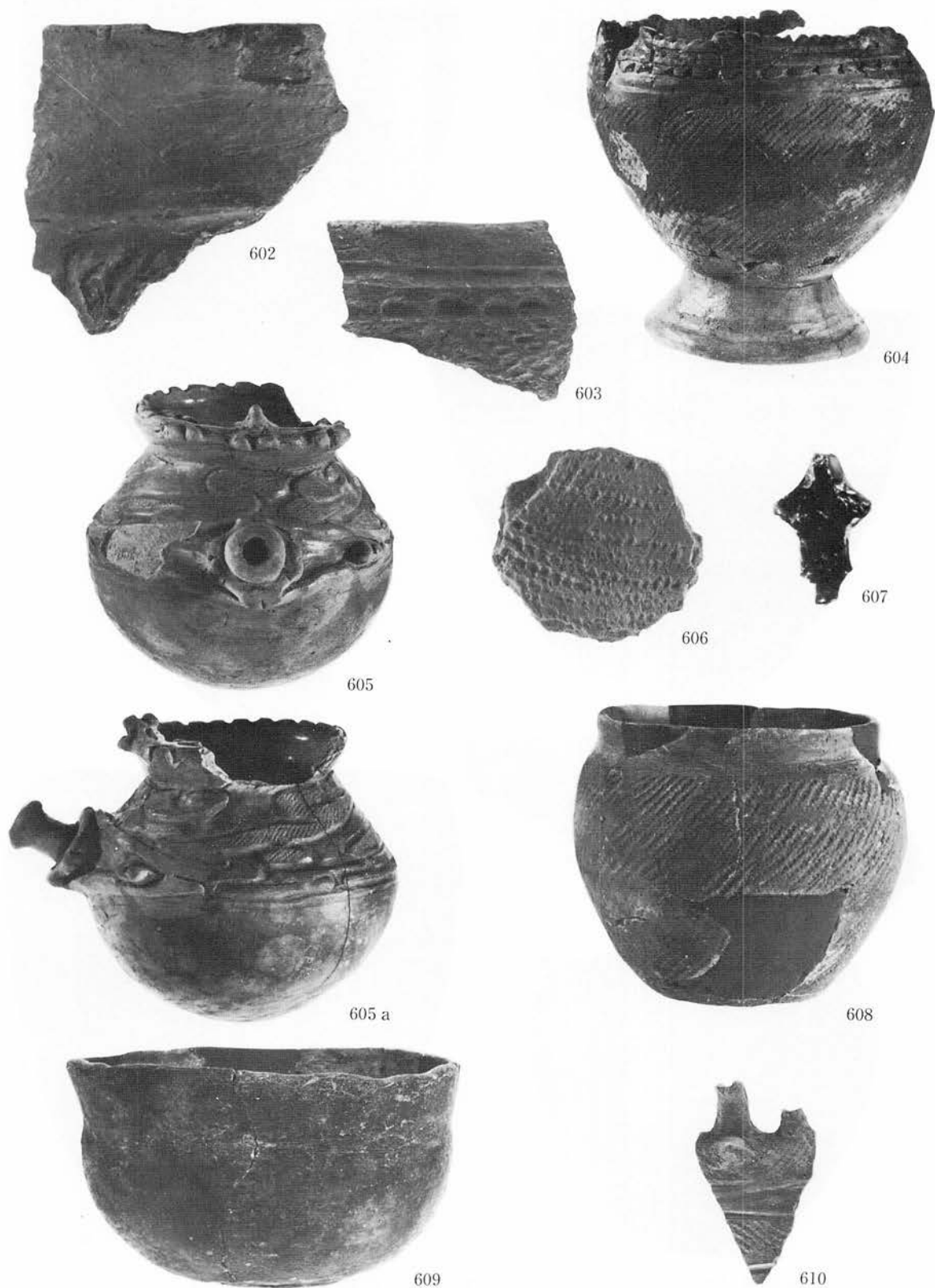


590

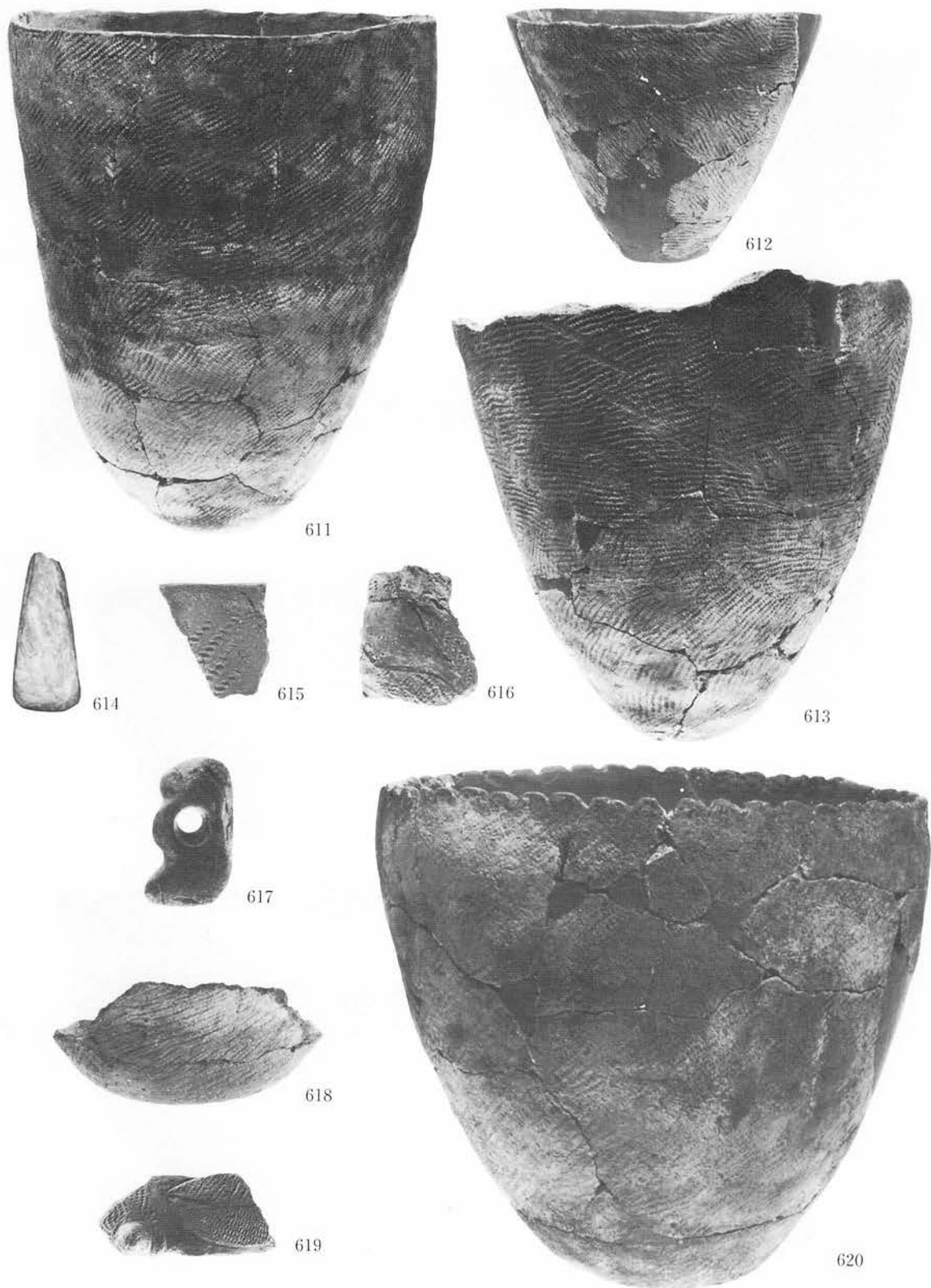
写真図版151 F I-53(586)・56(587~588)・57(589~591)
ピット出土遺物



写真図版152 G I-51(592~594)・52(595)・G II-52(596~597)
 H I-51(598~599)・I I-51(600~601) ピット出土遺物



写真図版153 | I-51(602~607)・52(608)・53(609)・55(610) ピット出土遺物



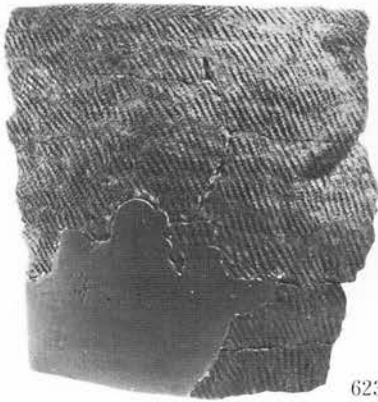
写真図版154 I I-57(611)・60(612)・61(613~614)・62(615)・65(616)・67(617)・69(618~619)
I II-55(620) ピット出土遺物



621



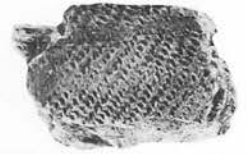
622



623



624



625



626



627



628



629

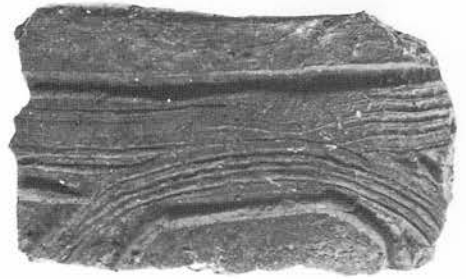
写真図版155 I II-58(621~623)・63(624~625)・70(626~628)
J I-51(629) ピット出土遺物



630



631



633



632

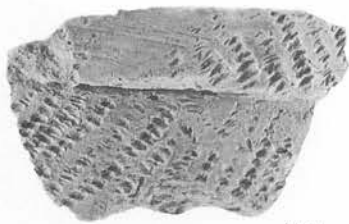


634



635

写真図版156 J I-51(630~632)・52(633~634)・60(635) ピット出土遺物



636



637



638



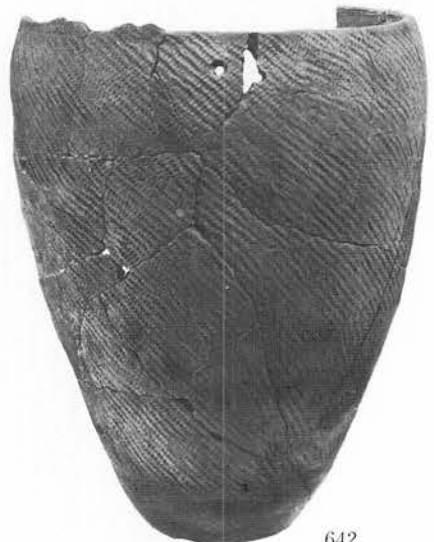
639



640



641



642

写真図版157 J I - 60(636~637)・J II - 54(638~640) ピット出土遺物
G I 埋設土器(641~642)



643

G I 埋設土器



644

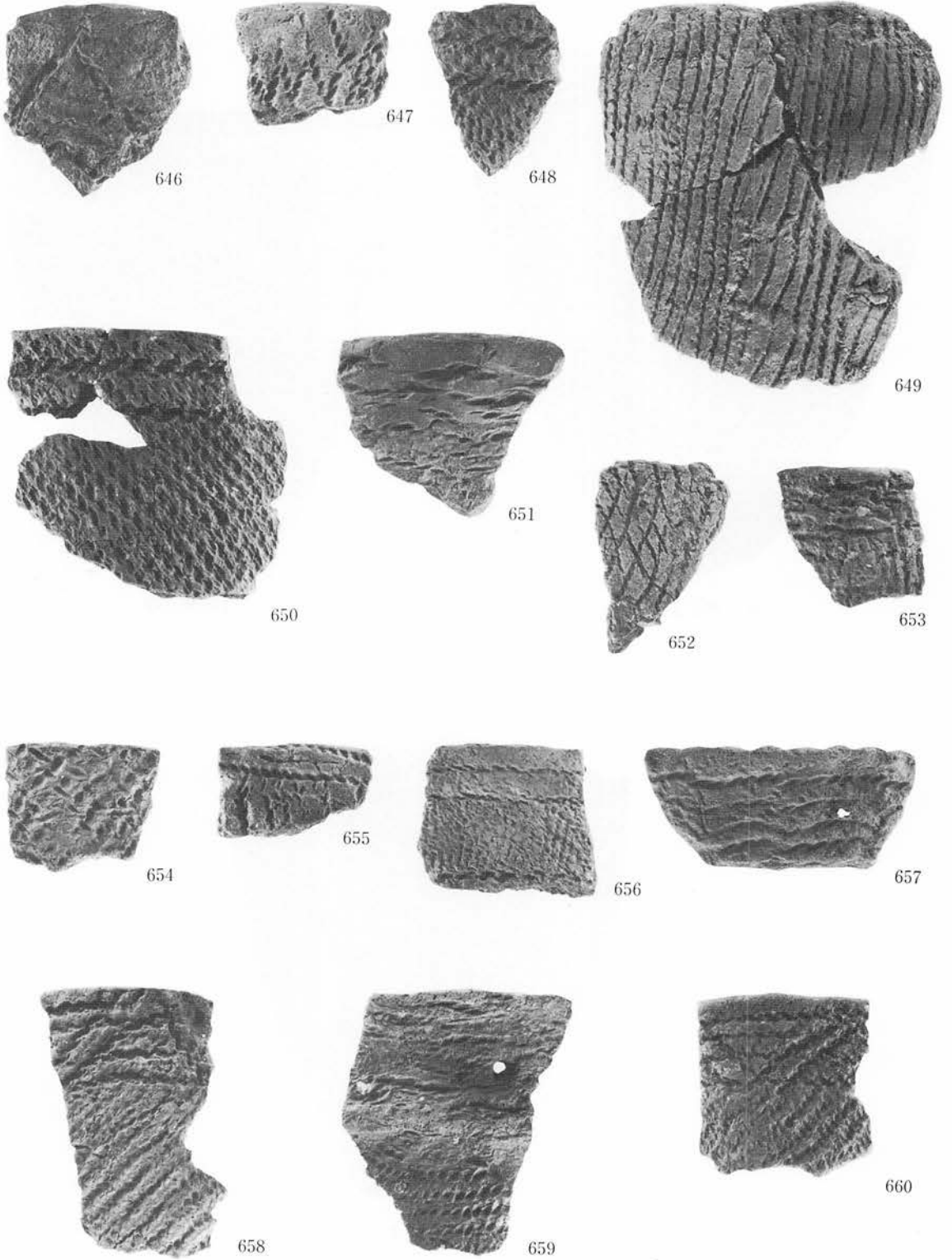
I II 埋設土器



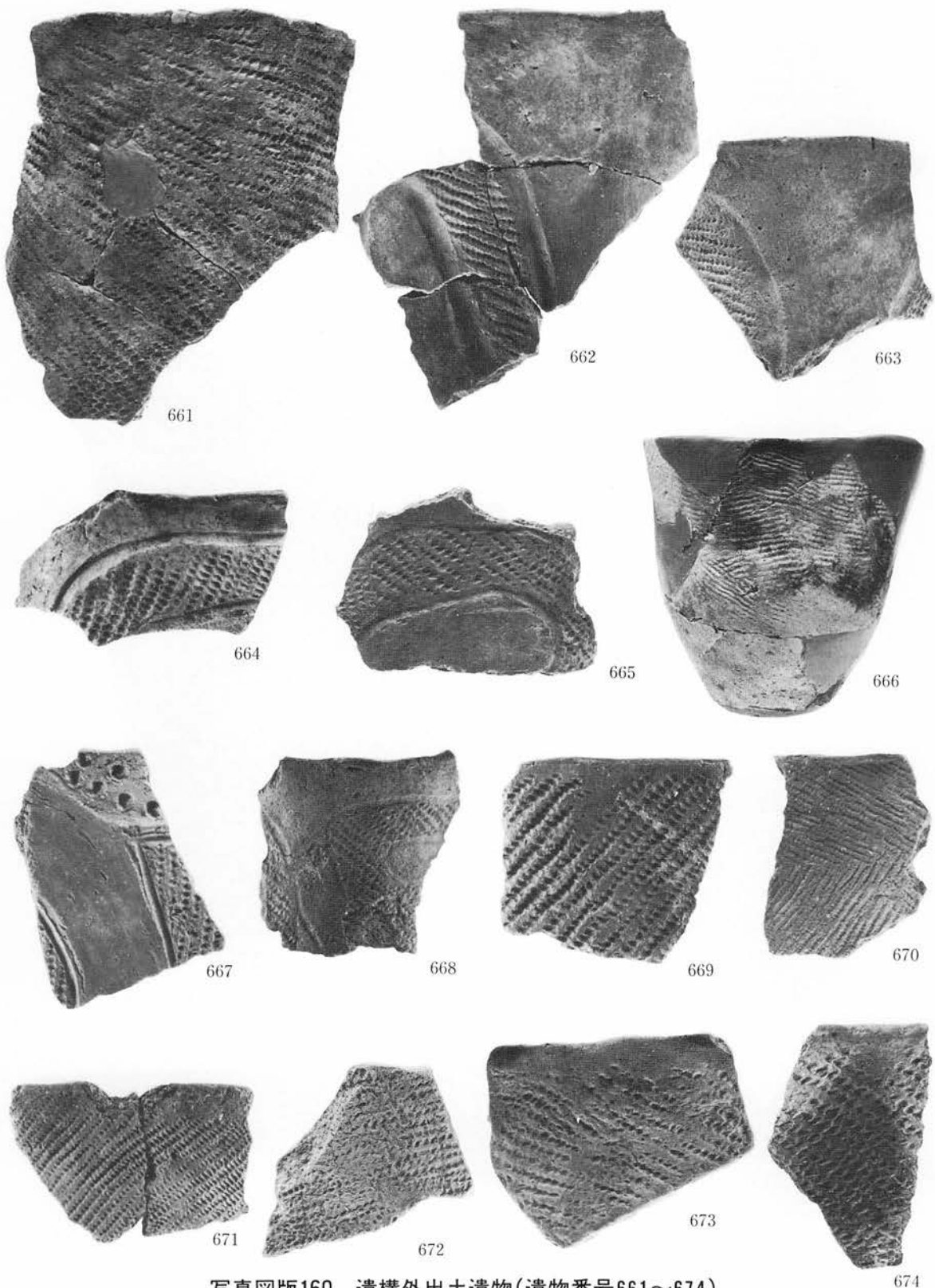
645

J I 埋設土器

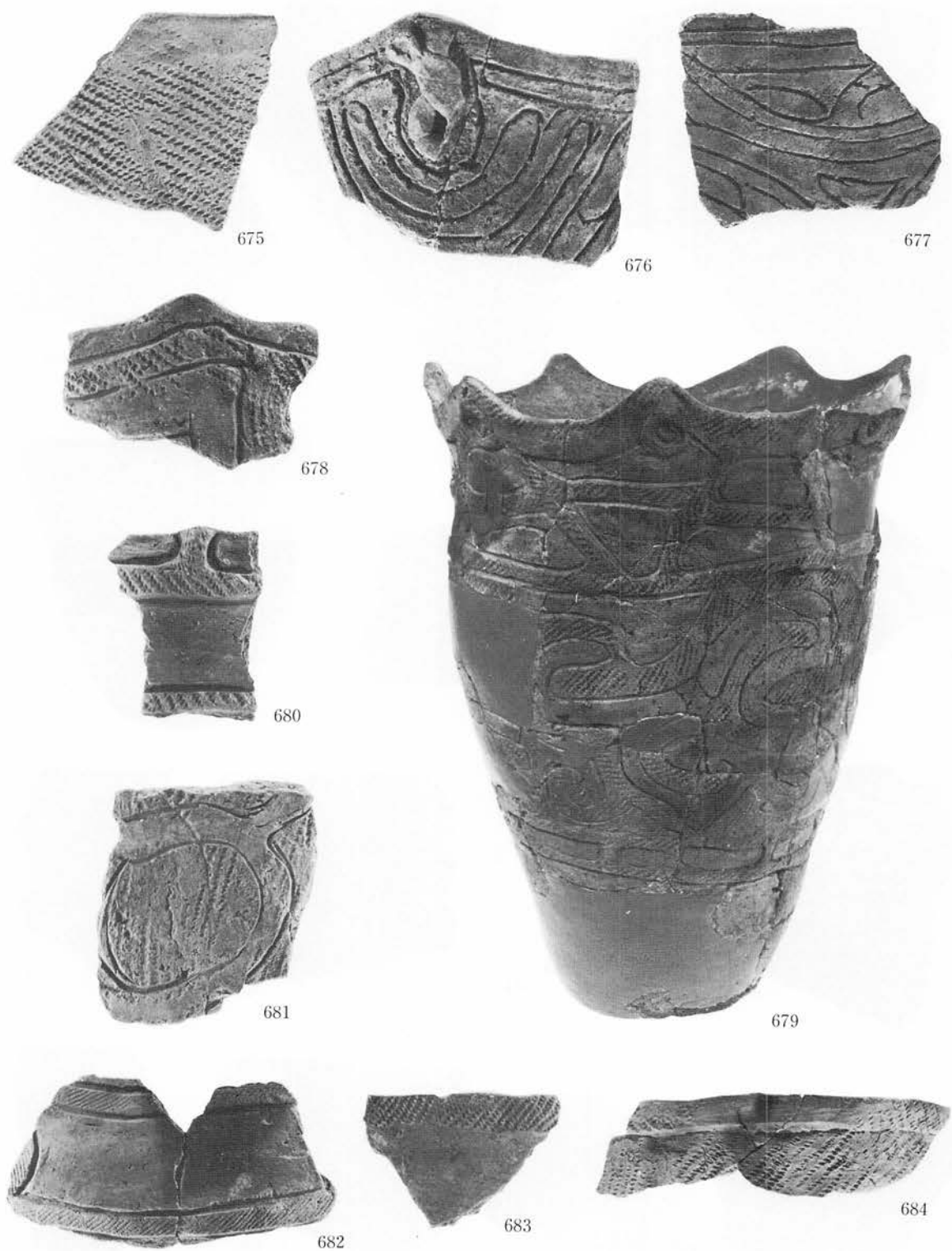
写真図版158 G I (643)・I II (644)・J I (645) 埋設土器



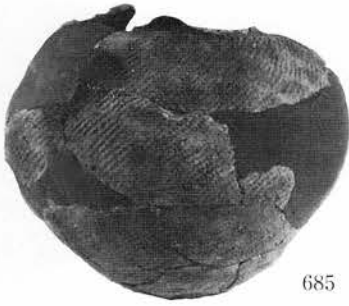
写真図版159 遺構外出土遺物(遺物番号646~660)



写真図版160 遺構外出土遺物(遺物番号661~674)



写真図版161 遺構外出土遺物(遺物番号675~684)



685



686



687



688



689



690



691



692

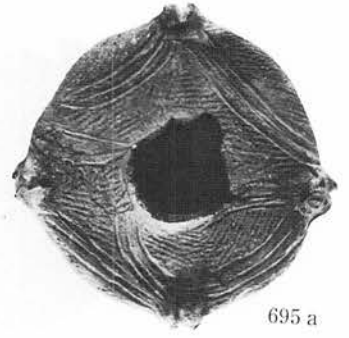
写真図版162 遺構外出土遺物(遺物番号685~692)



693



694



695 a



697



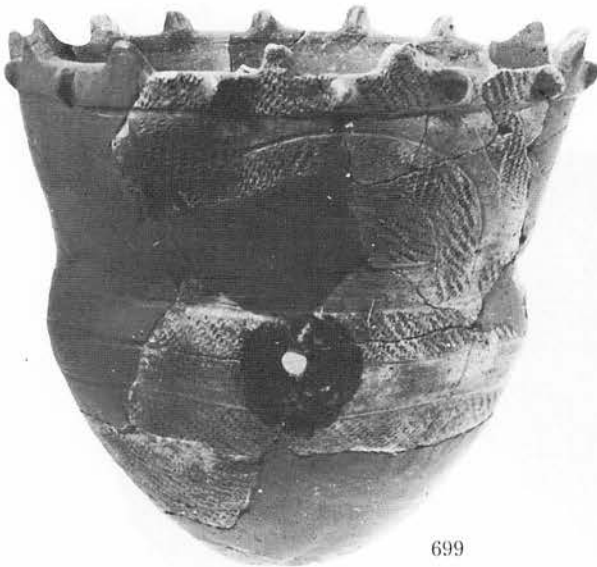
695



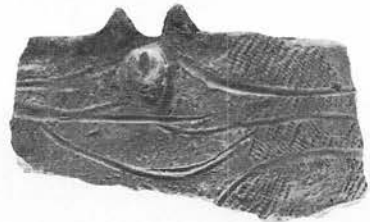
696



698



699

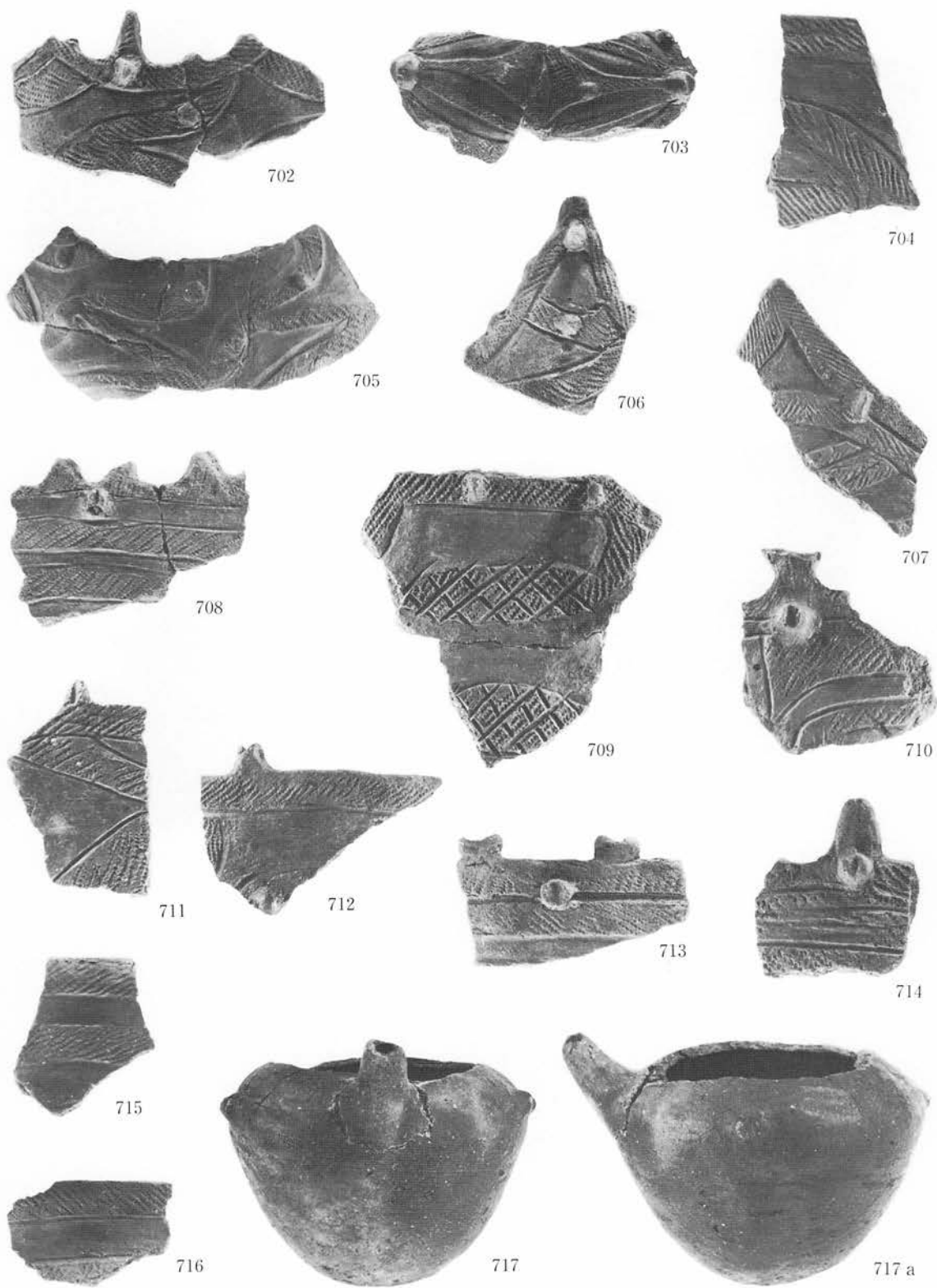


700



701

写真図版163 遺構外出土遺物(遺物番号693~701)



写真図版164 遺構外出土遺物(遺物番号702~717)



718



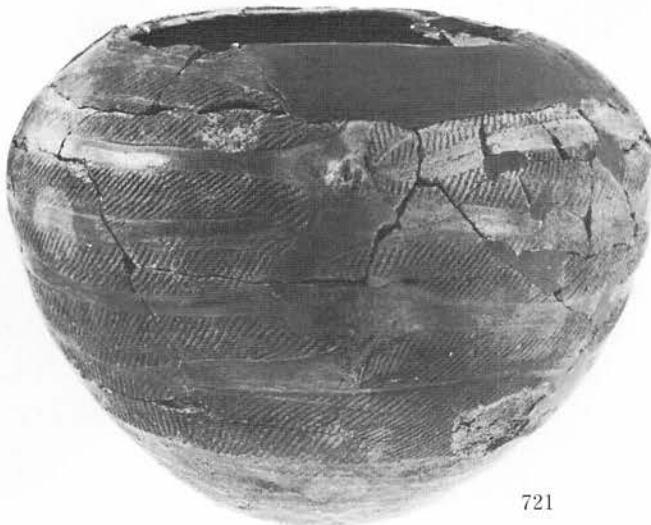
720



719



722



721

写真図版165 遺構外出土遺物(遺物番号718~722)



723



724



725



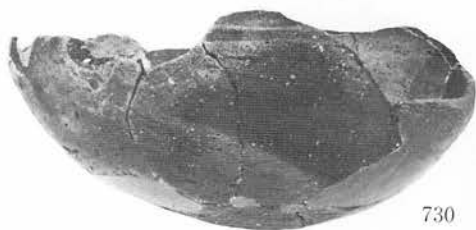
726



728



729



730



727



731

写真図版166 遺構外出土遺物(遺物番号723~731)



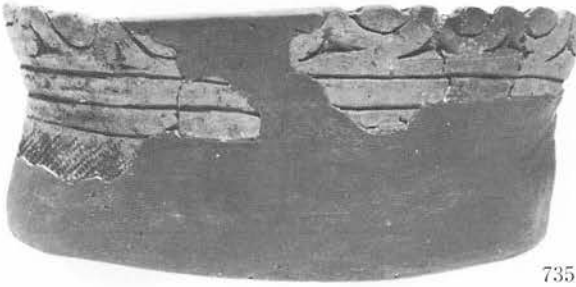
732



733



734



735



736



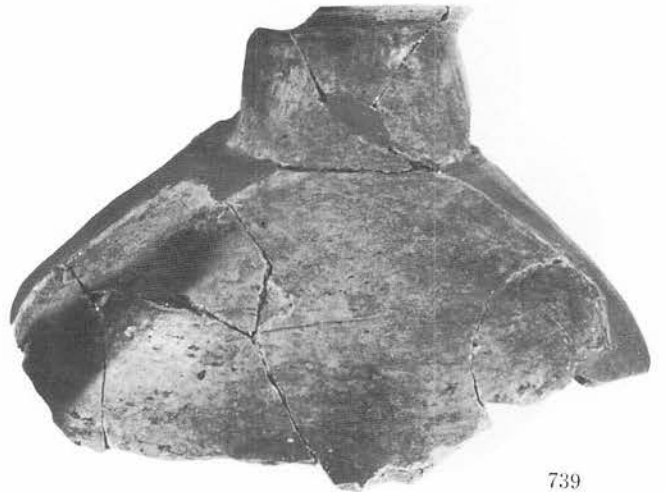
737 a



738



737



739

写真図版167 遺構外出土遺物(遺物番号732~739)



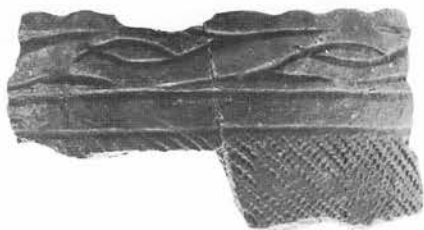
740



741



742



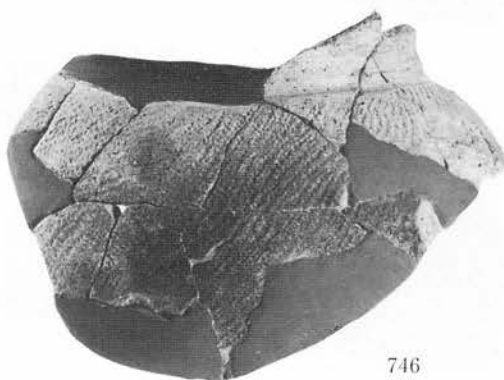
743



744



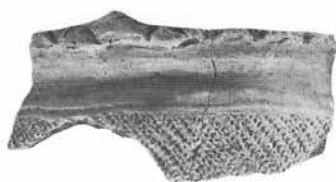
745



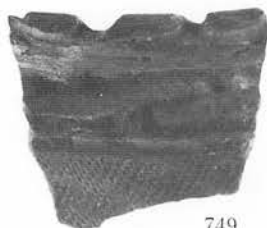
746



747

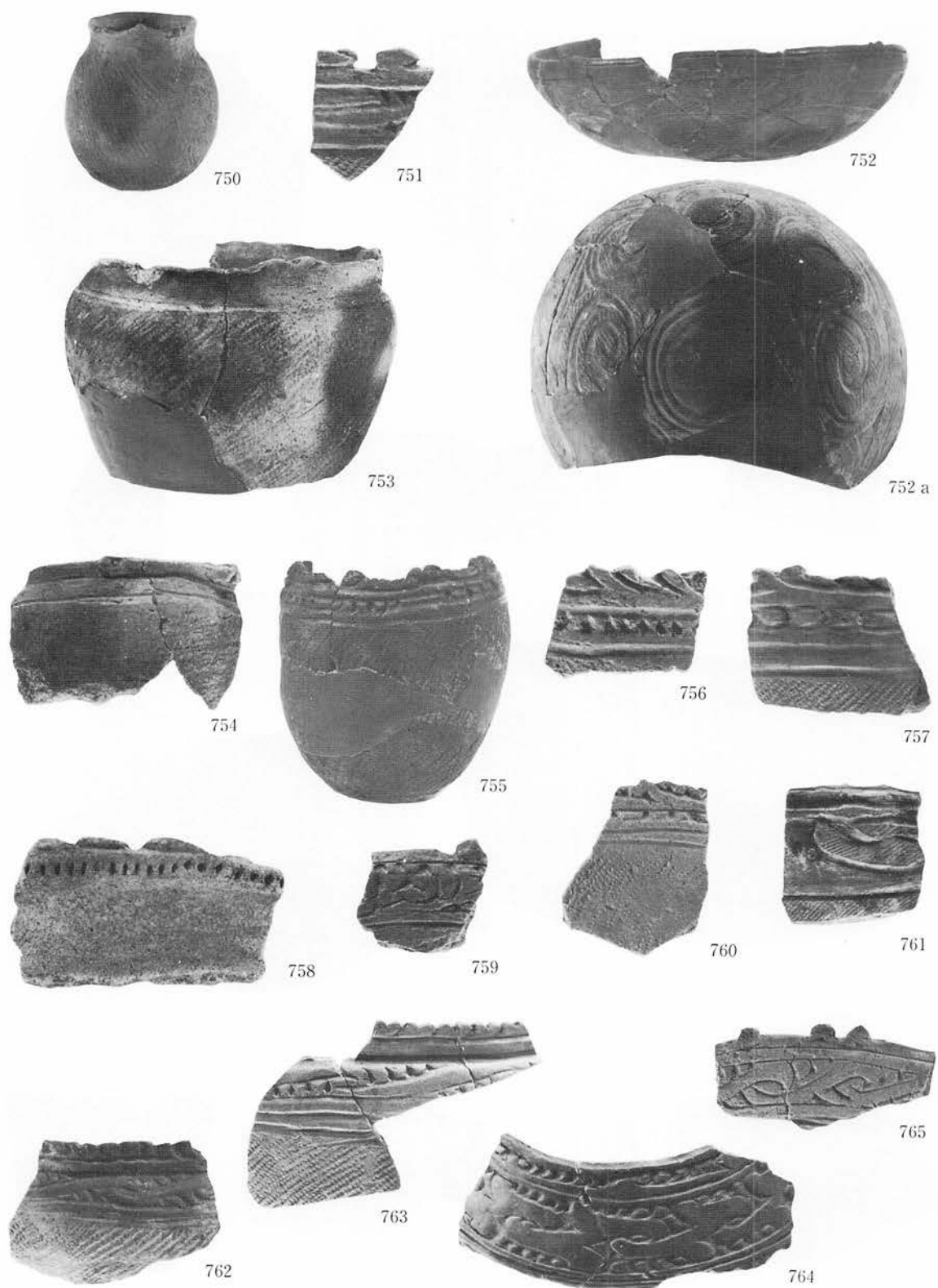


748

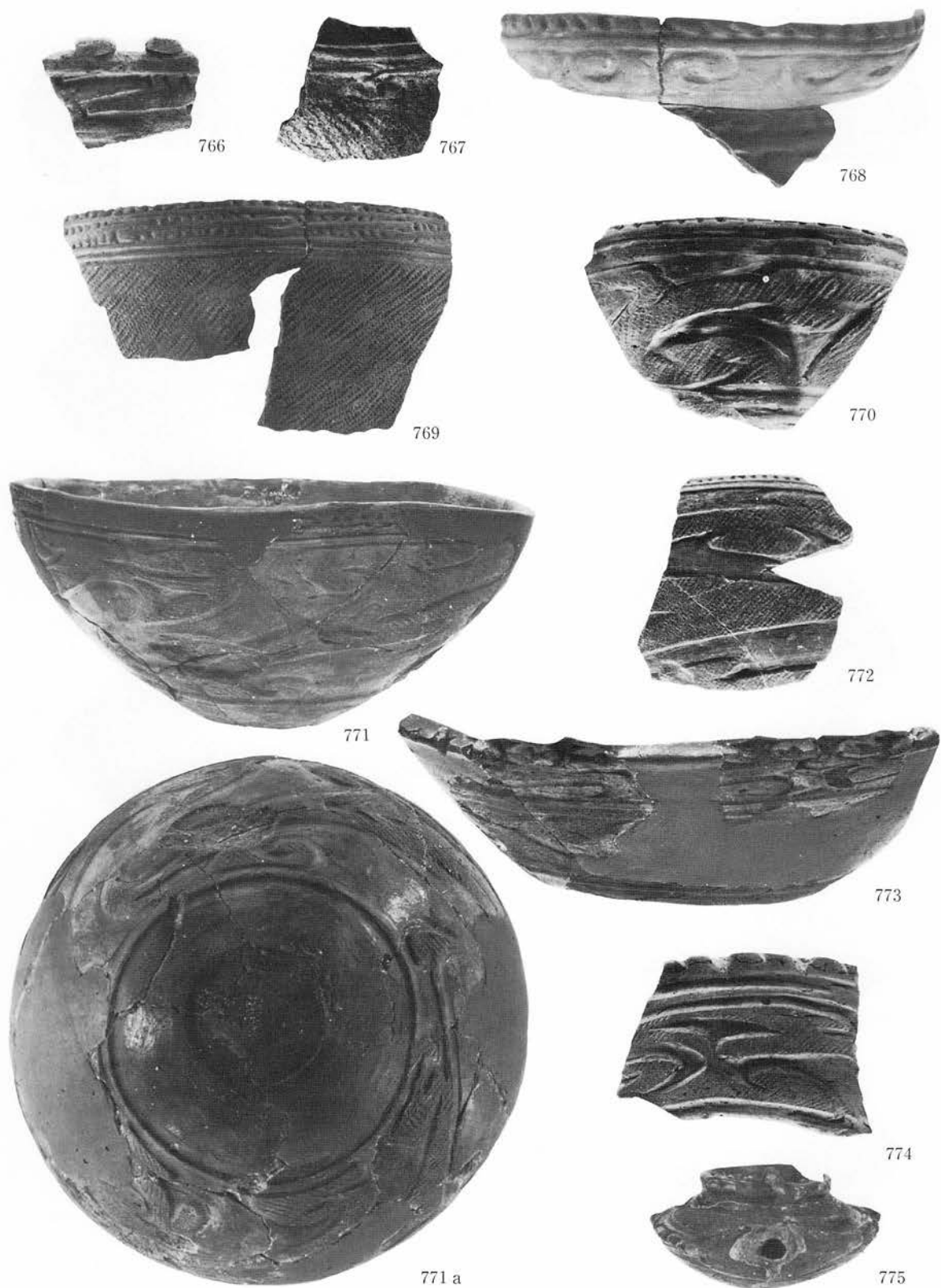


749

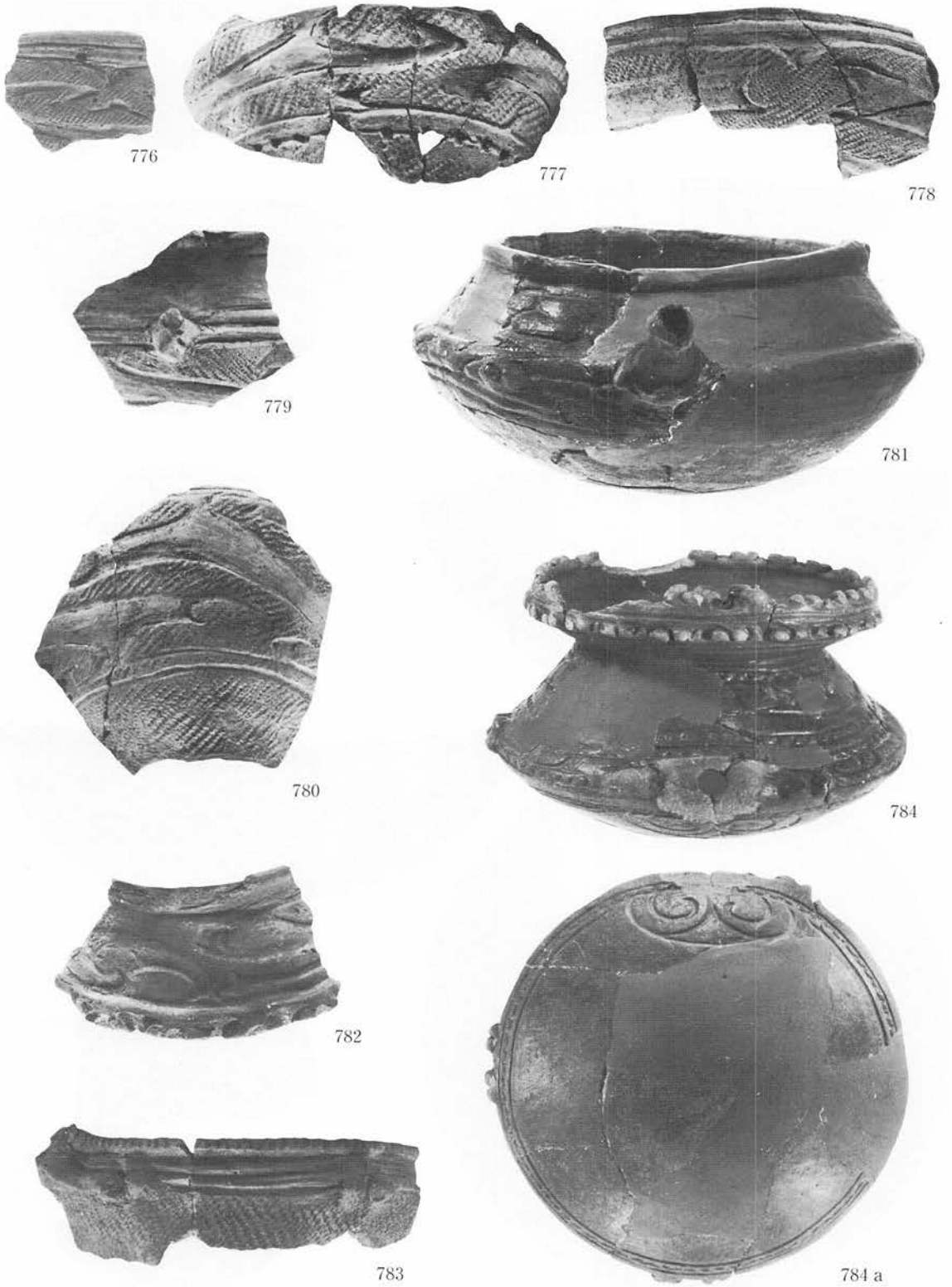
写真図版168 遺構外出土遺物(遺物番号740~749)



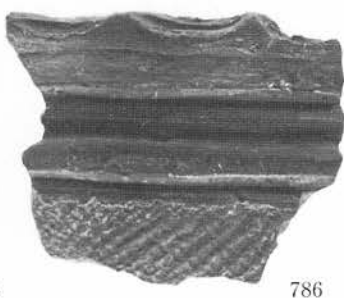
写真図版169 遺構外出土遺物(遺物番号750~765)



写真図版170 遺構外出土遺物(遺物番号766~775)



写真図版171 遺構外出土遺物(遺物番号776~784)



写真図版172 遺構外出土遺物(遺物番号785~794)



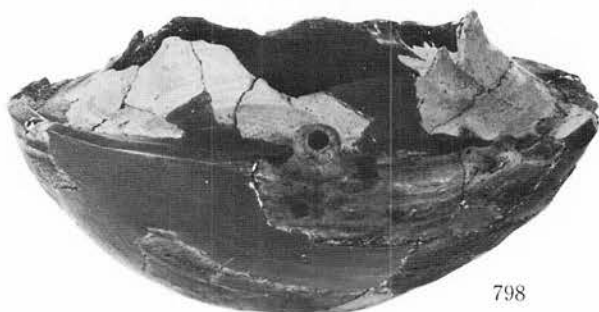
795



796



797



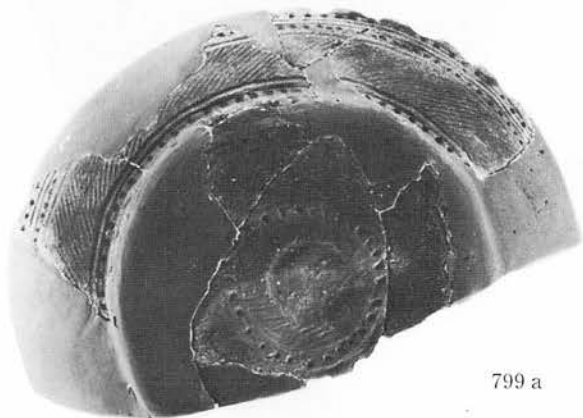
798



799



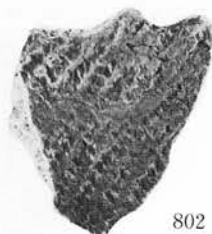
800



799 a

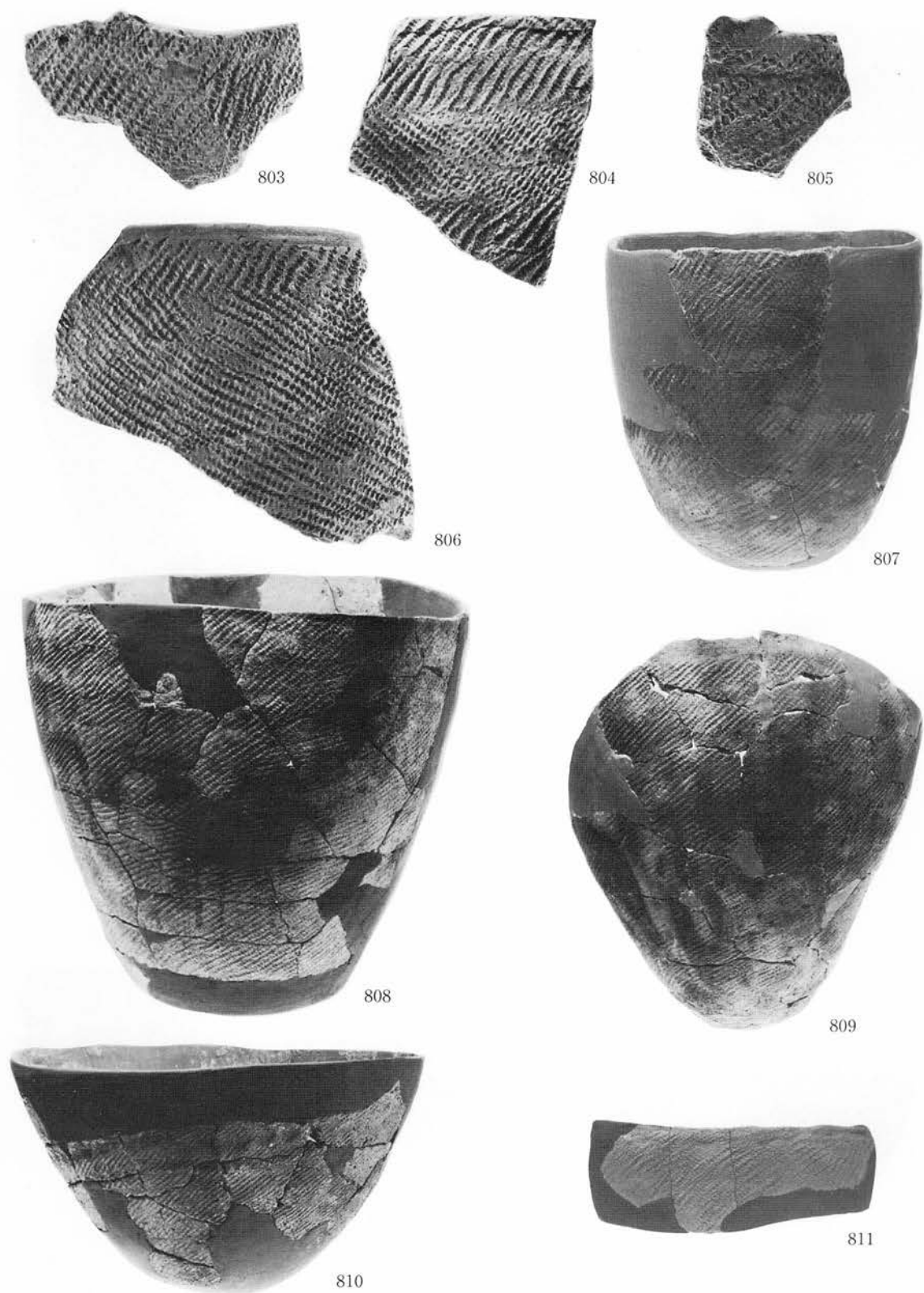


801

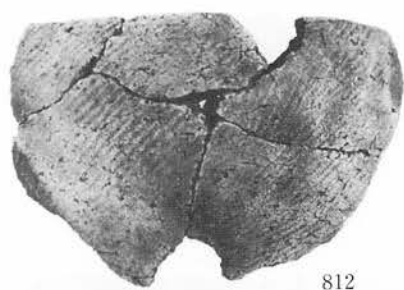


802

写真図版173 遺構外出土遺物(遺物番号795~802)



写真図版174 遺構外出土遺物(遺物番号803~811)



812



813



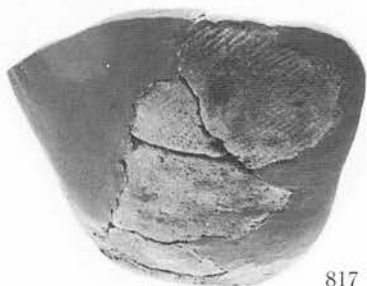
814



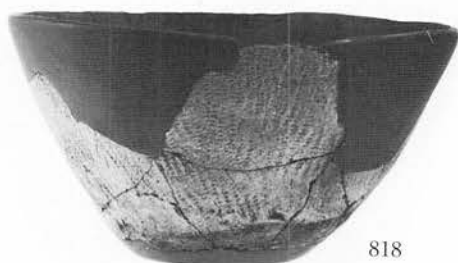
815



816



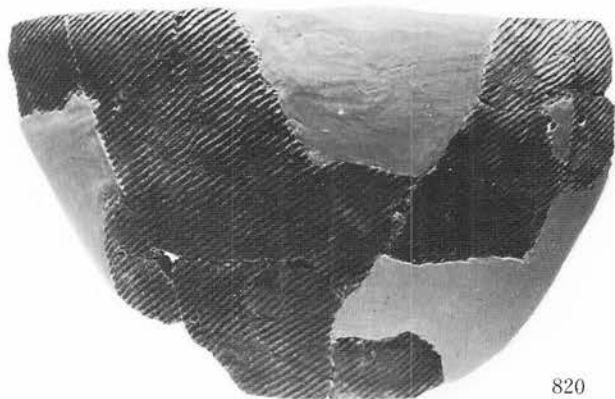
817



818

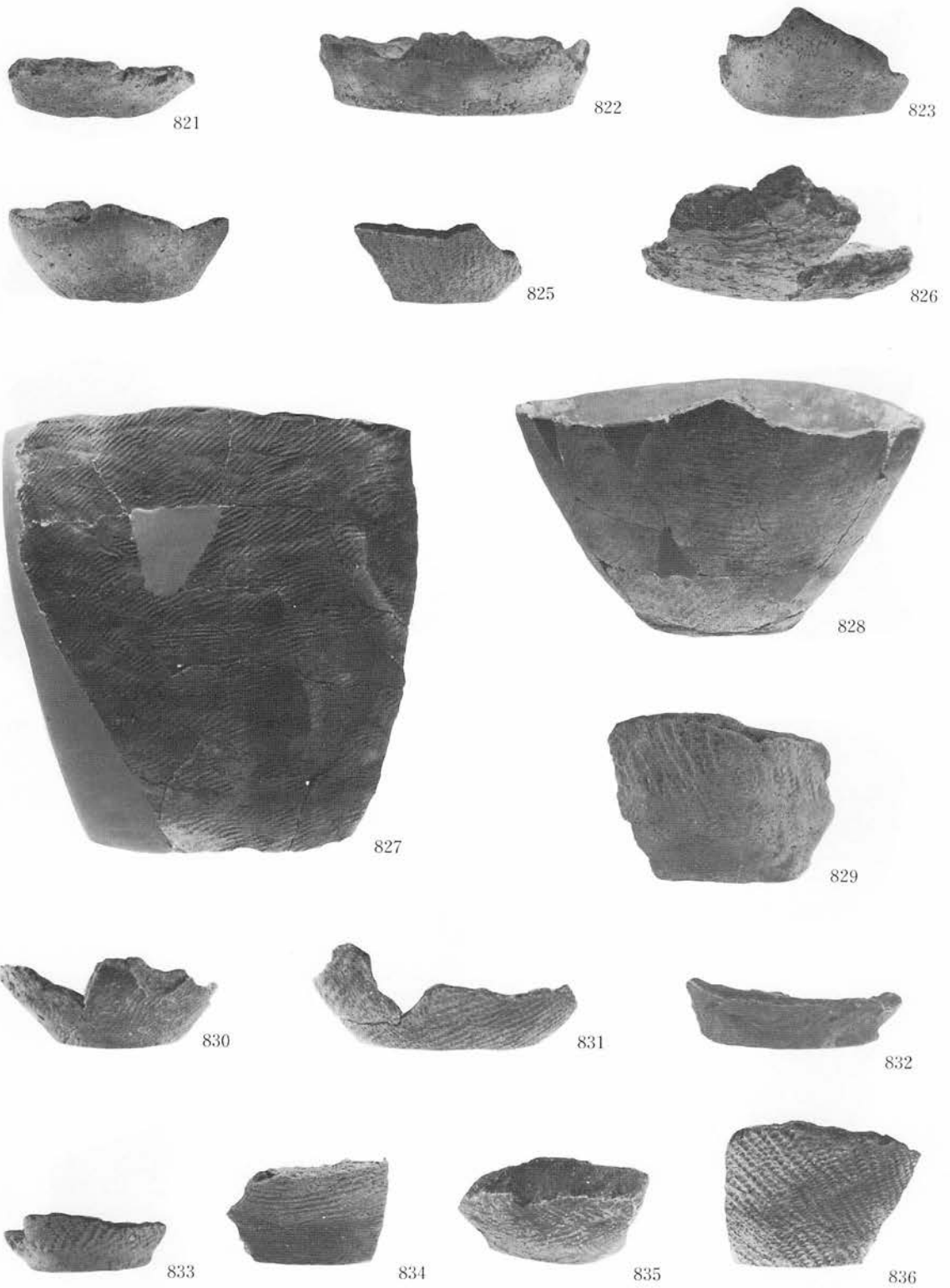


819

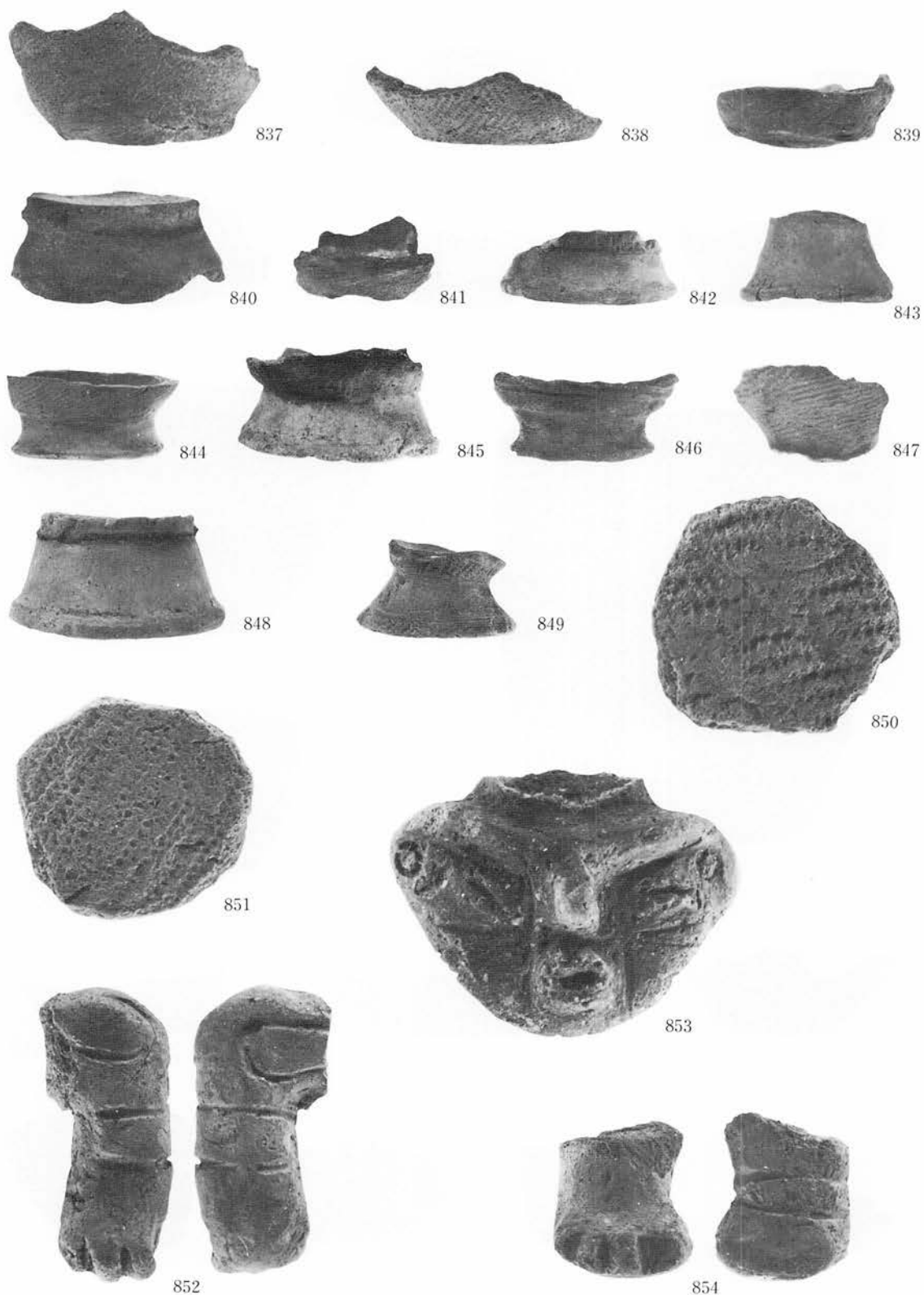


820

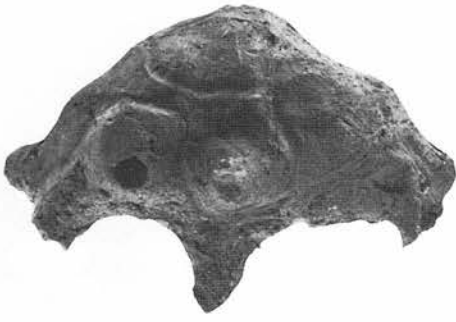
写真図版175 遺構外出土遺物(遺物番号812~820)



写真図版176 遺構外出土遺物(遺物番号821~836)



写真図版177 遺構外出土遺物(遺物番号837~854)



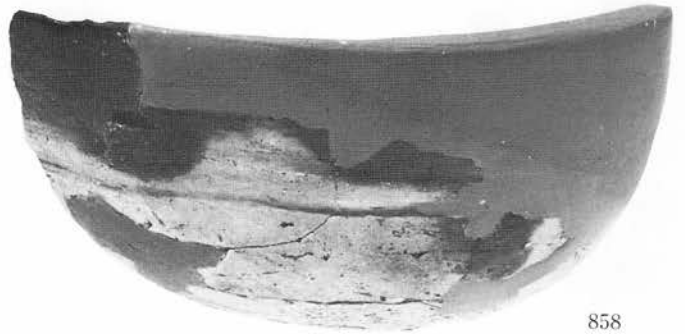
855



856

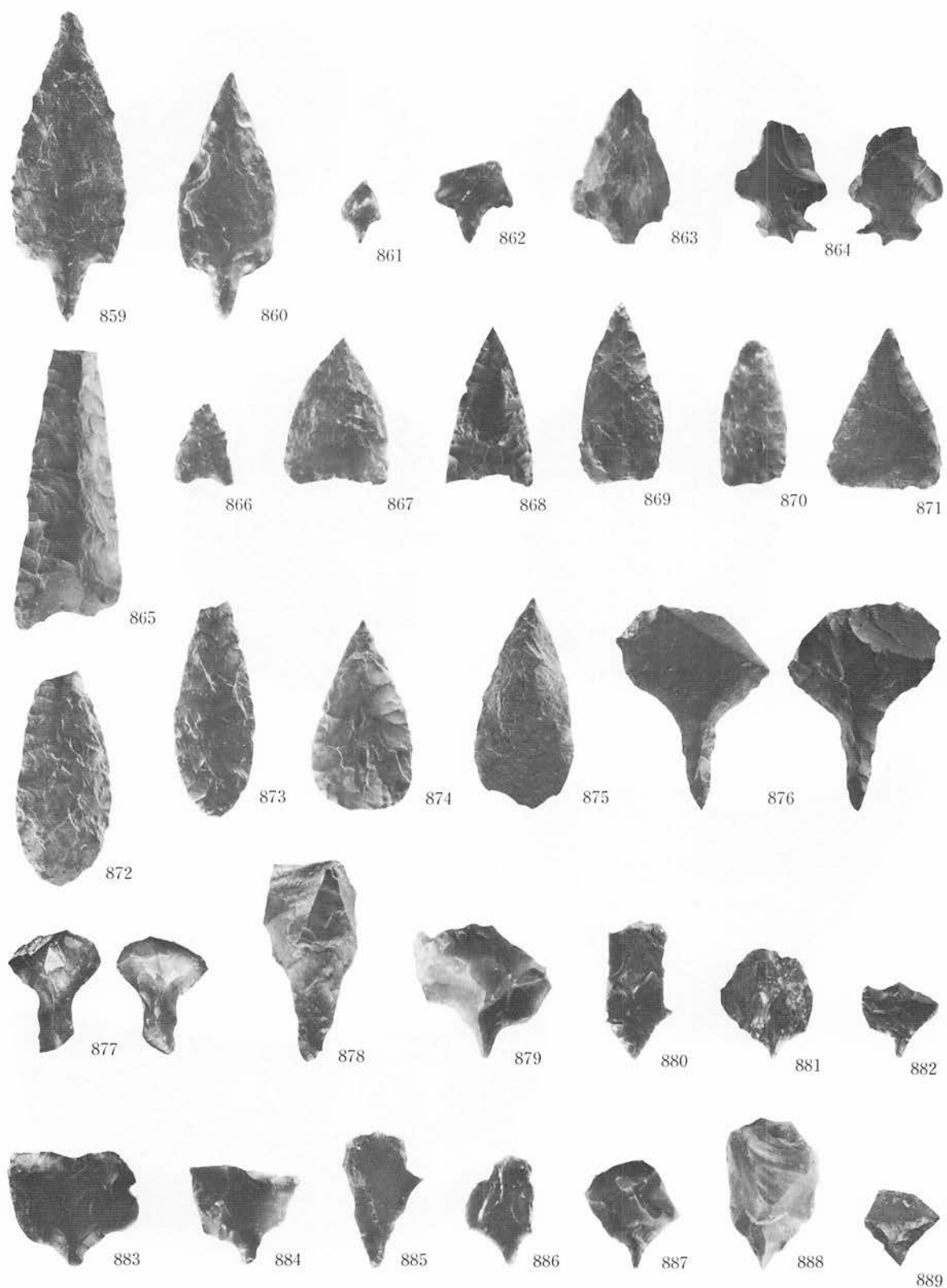


857

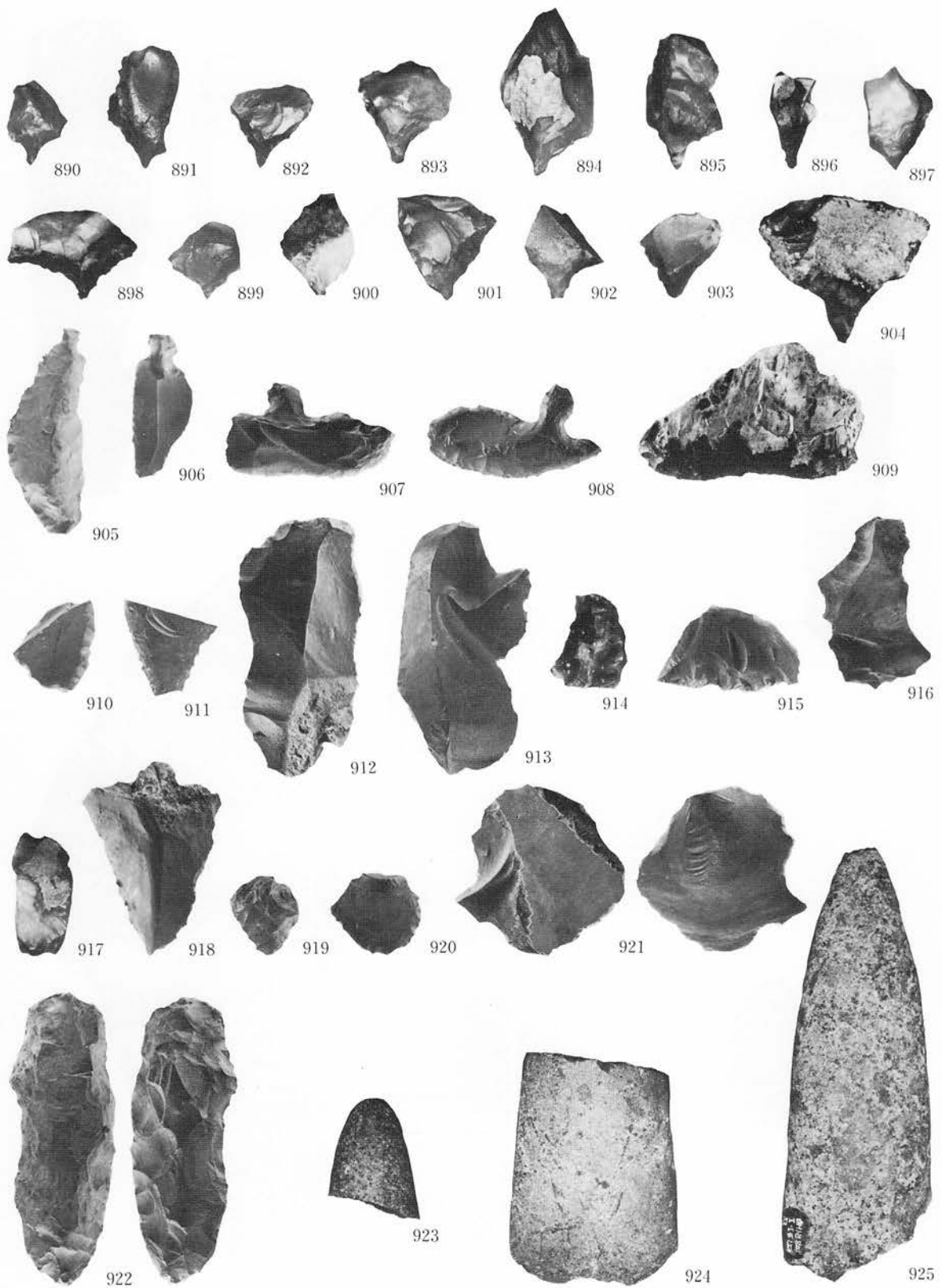


858

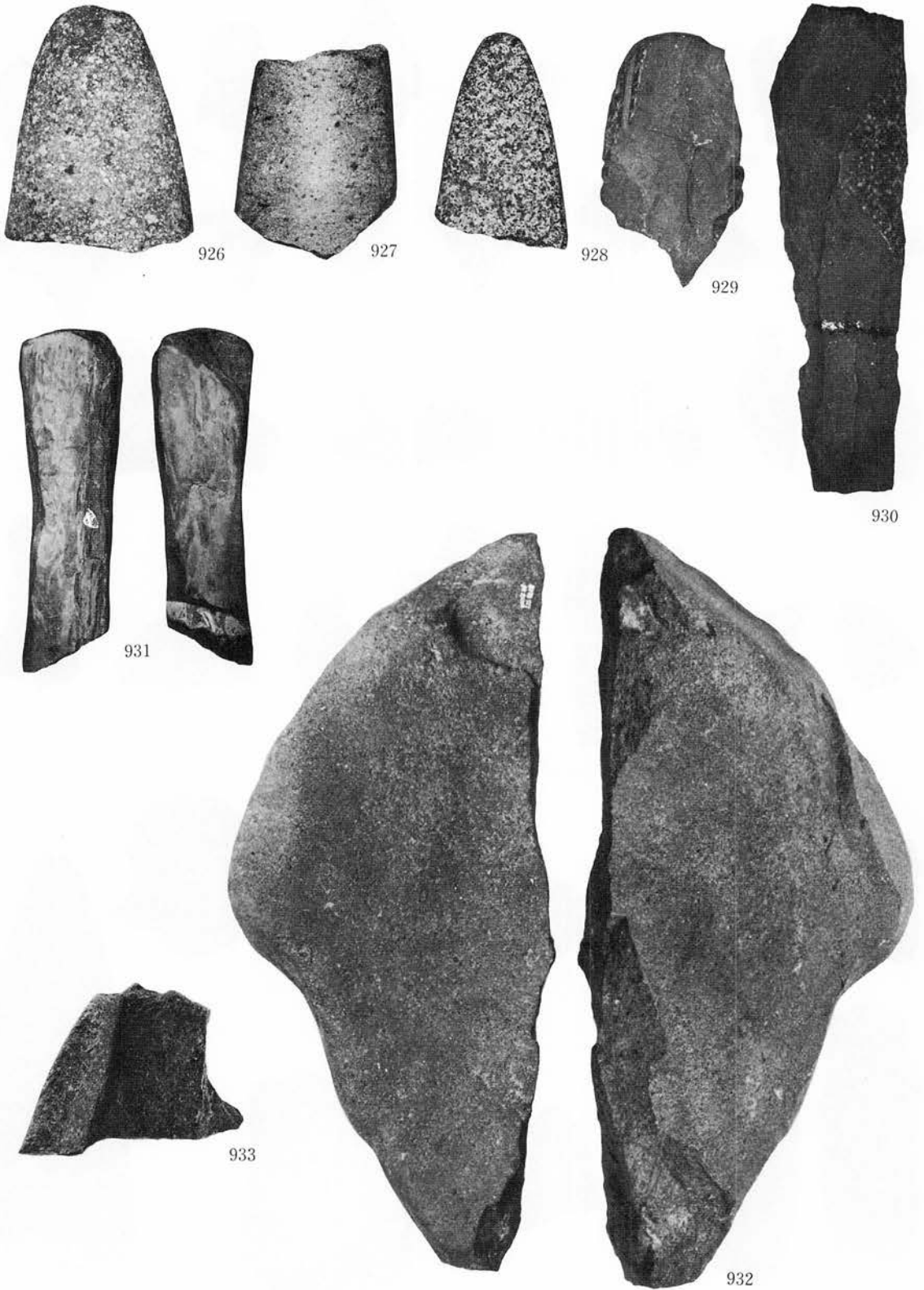
写真図版178 遺構外出土遺物(遺物番号855~858)



写真図版179 遺構外出土遺物(遺物番号859~889)



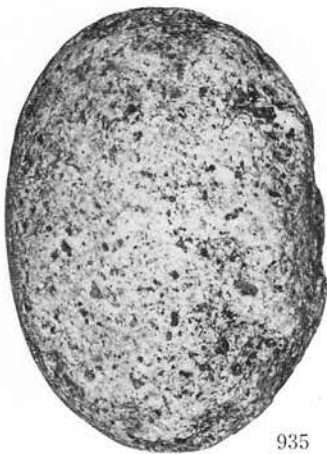
写真図版180 遺構外出土遺物(遺物番号890~925)



写真図版181 遺構外出土遺物(遺物番号926~933)



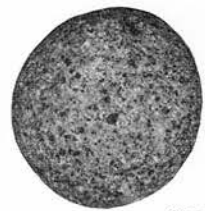
934



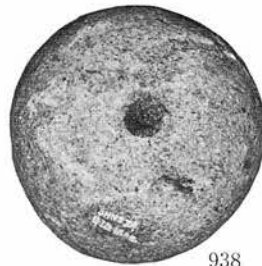
935



936

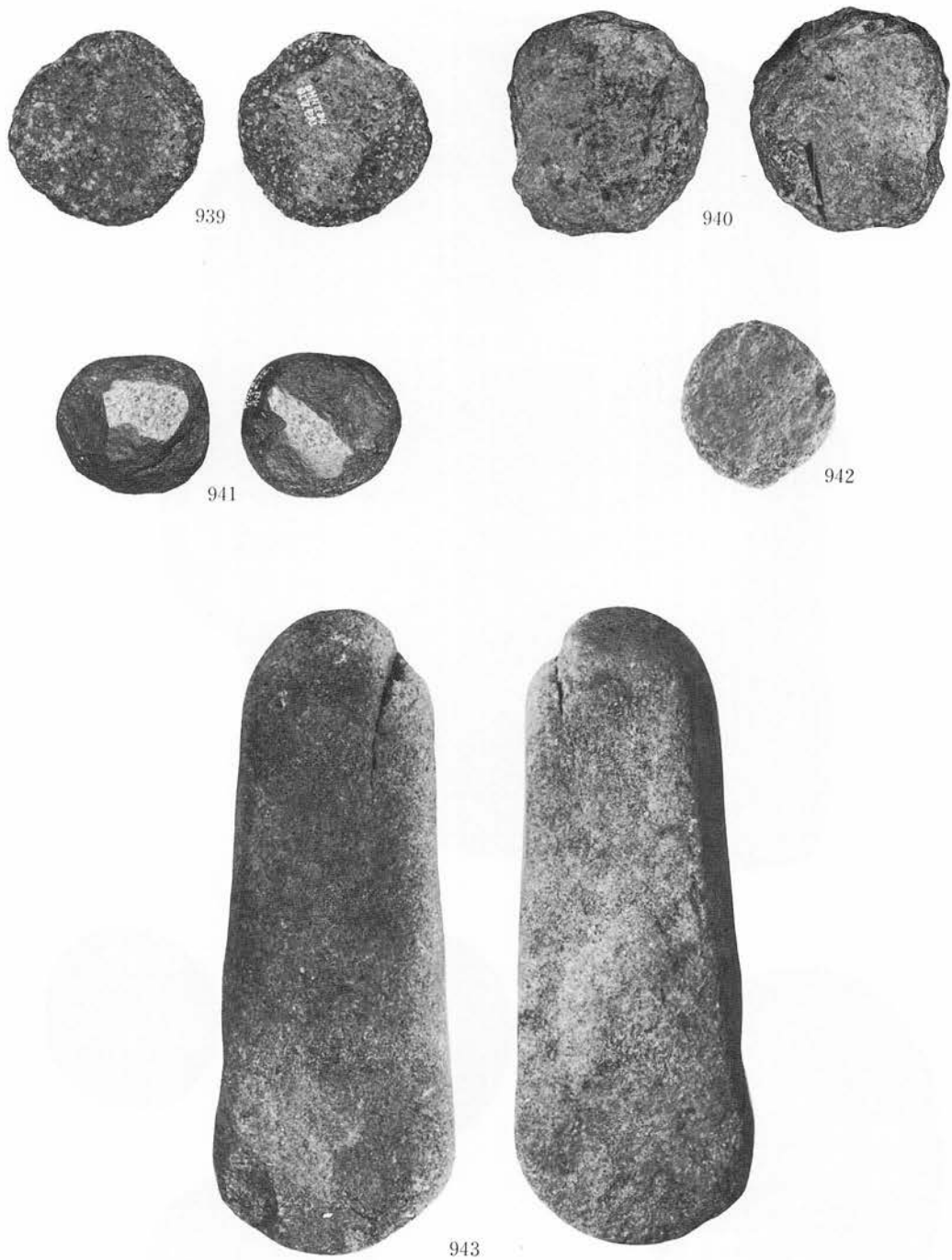


937



938

写真図版182 遺構外出土遺物(遺物番号934~938)



写真図版183 遺構外出土遺物(遺物番号939~943)

財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長 及 川 昌 二

副 所 長 宮 英 一

〔管理課〕

課 長 千 葉 久 夫

課長補佐 阿 部 詔 夫

主 事 立 花 多加志

技 能 員 佐 藤 春 男

〔調査課〕

課 長 近 藤 宗 光

主任文化財専門調査員 昆 野 靖

文化財専門調査員 片 方 宗 明

” 長 沼 彬

” 菊 池 利 和

” 渡 辺 洋 一

” 佐々木 嘉 直

” 平 井 進

” 中 村 良 一

” 田 村 壯 一

” 岩 渕 久

文化財専門調査員 光 井 文 行

” 玉 川 英 喜

” 石 川 長 喜

” 三 浦 謙 一

” 工 藤 利 幸

” 中 川 重 紀

” 高 橋 与右エ門

” 高 橋 義 介

” 酒 井 宗 孝

〔資料課〕

課 長 名須川 溢 男

文化財専門調査員 田 鎖 壽 夫

” 佐々木 清 文

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第100集
大日向II遺跡発掘調査報告書
東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

印刷 昭和61年3月20日

発行 昭和61年3月25日

発行 (財)岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター

〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡第11地割字高屋敷185

T E L (0196) 38-9001

印刷 川 嶋 印 刷 株 式 会 社

〒021 一関市上大槻街4-7
